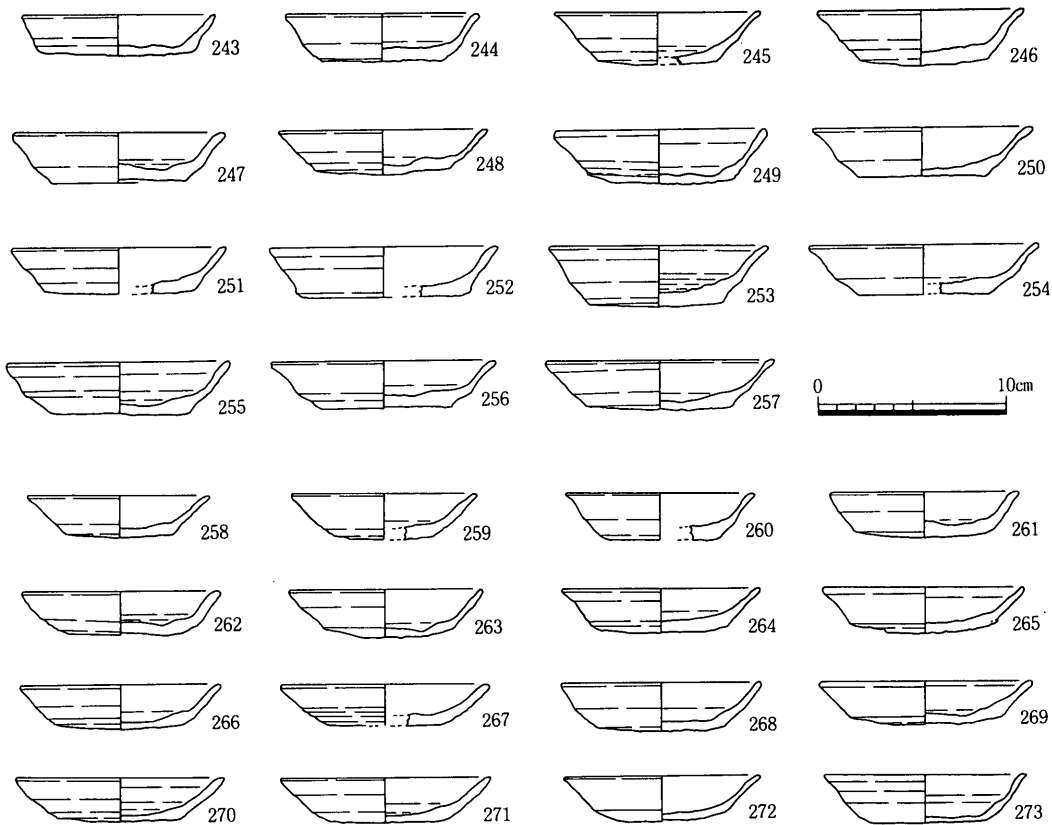


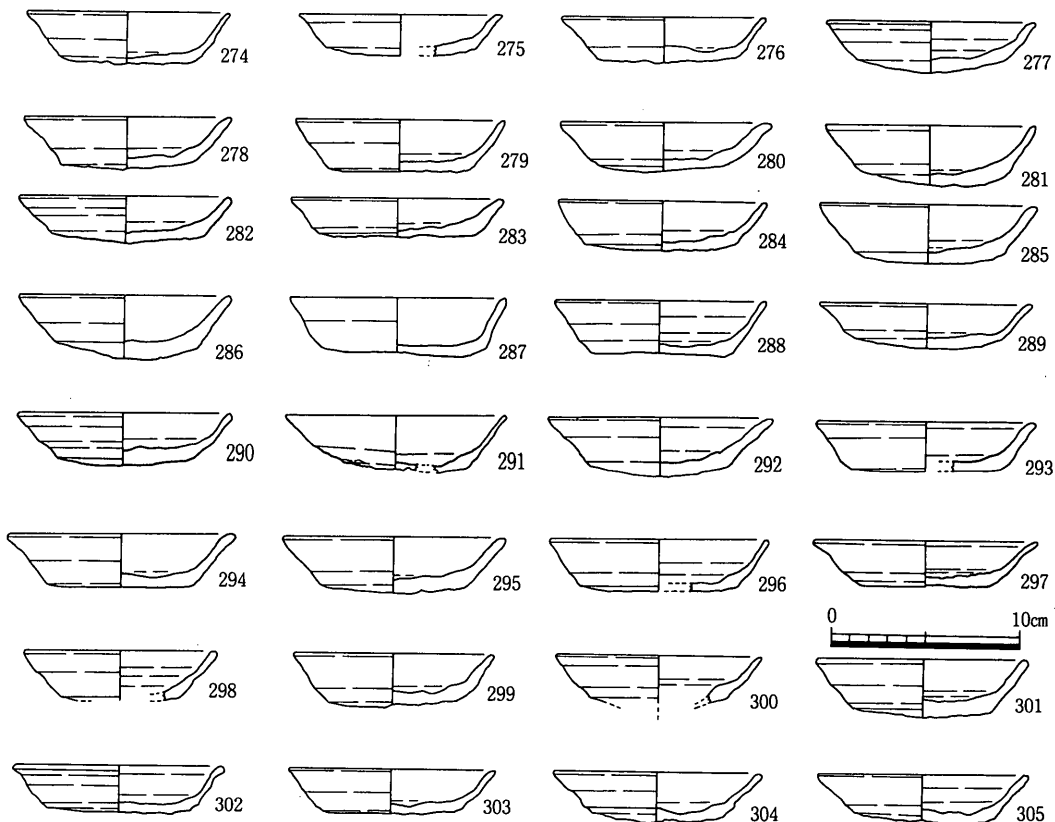
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
215	土・高台皿	10.8	2.7	6.4	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
216	土・高台皿	10.6	2.7	7.1	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
217	土・杯	10.0	2.2	7.5	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
218	土・杯	10.6	2.1	6.6	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
219	土・杯	10.6	2.1	7.3	中・多	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り	
220	土・杯	10.6	2.5	6.9	細・多	良好	浅黄	不明	不明	底へら切り→ナデ	
221	土・杯	10.8	2.4	7.5	細・多	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
222	土・杯	10.9	2.2	6.3	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	金雲母
223	土・杯	10.6	2.4	7.2	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り	
224	土・杯	10.6	2.4	6.7	粗・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
225	土・杯	11.1	2.6	7.5	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
226	土・杯	11.6	2.5	8.3	粗・多	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
227	土・杯	10.8	2.2	8.2	粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	金雲母
228	土・杯	11.2	2.7	7.3	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
229	土・杯	10.8	2.3	7.8	中・多	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
230	土・杯	10.5	2.8	7.2	細・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
231	土・杯	11.4	2.5	7.2	粗・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へら切り	
232	土・杯	11.2	2.5	8.0	中・多	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
233	土・杯	11.0	2.5	7.8	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
234	土・杯	11.3	2.6	7.0	中・多	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	金雲母
235	土・杯	10.6	2.4	8.0	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
236	土・杯	11.6	2.5	7.6	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板ナデ	
237	土・杯	11.0	2.6	7.7	細・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
238	土・杯	11.8	2.7	8.5	中・多	不良	灰白	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
239	土・杯	11.3	2.6	7.6	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
240	土・杯	11.9	2.9	7.1	中・普	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
241	土・杯	11.9	2.8	8.4	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
242	土・杯	11.9	2.7	8.0	中・多	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	

第454図 E区S D19出土遺物(1)(1/4)



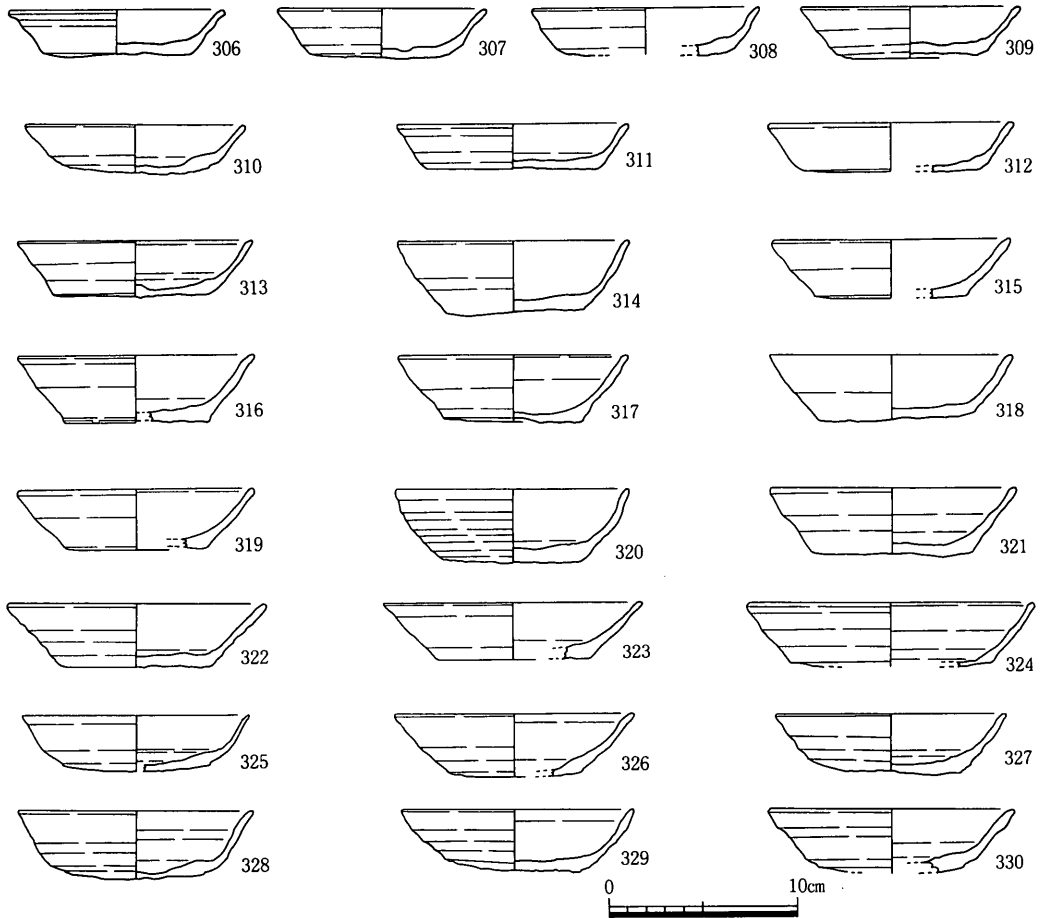
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
243	土・杯	10.2	2.1	7.9	粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板ナデ	
244	土・杯	10.1	2.5	6.8	細・少	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
245	土・杯	10.9	2.7	6.2	微・少	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
246	土・杯	11.0	2.8	6.7	中・多	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
247	土・杯	11.2	2.6	7.1	粗・少	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り	
248	土・杯	11.0	2.4	7.2	中・多	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
249	土・杯	11.0	2.9	7.7	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
250	土・杯	11.6	2.6	6.8	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	口縁部歪む
251	土・杯	11.3	2.4	7.9	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
252	土・杯	12.0	2.6	8.0	細・少	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り	
253	土・杯	11.5	3.2	7.0	中・多	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
254	土・杯	12.0	2.6	6.8	中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	底系切り?	
255	土・杯	11.6	2.7	7.4	粗・多	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へら切り	
256	土・杯	11.7	2.4	7.0	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板ナデ	
257	土・杯	11.8	2.7	7.7	中・多	良好	にぶい橙褐	ナデ	ナデ	底へら切り→板ナデ	
258	土・杯	9.4	2.2	5.6	細・少	良好	浅黄	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	金雲母
259	土・杯	9.6	2.4	5.0	粗・多	良好	明赤褐	ナデ	ナデ	底へら切り	
260	土・杯	10.0	2.5	5.6	細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り	
261	土・杯	10.0	2.4	7.0	中・普	良好	明黄褐	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
262	土・杯	10.4	2.3	6.5	粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り	
263	土・杯	10.4	2.6	6.9	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
264	土・杯	10.3	2.3	5.4	微・多	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
265	土・杯	10.4	2.5	7.5	粗・多	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
266	土・杯	10.5	2.4	7.8	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
267	土・杯	11.0	2.3	6.8	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
268	土・杯	10.6	2.7	5.6	粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
269	土・杯	10.3	2.4	8.0	中・多	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
270	土・杯	11.0	2.3	6.6	精緻	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
271	土・杯	11.0	2.4	6.0	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
272	土・杯	10.3	2.4	7.0	精緻	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
273	土・杯	10.7	2.6	6.2	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	

第455図 E区SD19出土遺物(2)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
274	土・杯	10.6	2.7	7.2	精緻	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へラ切り	
275	土・杯	10.8	2.1	8.0	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へラ切り	
276	土・杯	10.8	2.4	7.5	細・少	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
277	土・杯	10.8	2.6	7.6	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
278	土・杯	11.0	2.7	7.2	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	底へラ切り	
279	土・杯	11.0	2.6	7.0	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
280	土・杯	11.1	2.6	6.8	精緻	良好	淡橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
281	土・杯	11.0	3.1	5.7	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
282	土・杯	11.0	2.5	8.3	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
283	土・杯	11.0	2.0	8.2	細・多	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
284	土・杯	11.0	2.5	7.9	中・多	良好	明赤褐	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
285	土・杯	11.4	3.0	7.9	細・少	良好	浅黄橙・橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→板ナデ	
286	土・杯	11.0	3.3	7.6	中・少	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
287	土・杯	11.4	3.0	7.8	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
288	土・杯	11.1	2.7	7.5	中・普	不良	黄灰	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	金罌母
289	土・杯	11.1	2.3	5.4	粗・少	良好	灰黄	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
290	土・杯	11.0	2.5	7.2	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
291	土・杯	10.4	2.8	6.3	細・普	良好	にぶい橙	不明	不明	底へラ切り→板状圧痕	
292	土・杯	11.8	2.9	7.8	粗・普	良好	橙色一部黄	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
293	土・杯	11.6	2.4	7.8	中・多	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り	
294	土・杯	12.0	2.8	7.8	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
295	土・杯	11.8	2.9	7.8	中・少	良好	浅黄橙～橙	ナデ	不明	底へラ切り	
296	土・杯	11.5	2.7	8.2	中・多	良好	黄灰・灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
297	土・杯	11.8	2.2	7.0	中・多	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
298	土・杯	10.2	2.6	6.2	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
299	土・杯	10.8	2.8	6.8	精緻	良好	淡橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
300	土・杯	10.8			中・普	不良	橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
301	土・杯	10.9	3.0	7.2	粗・多	不良	黄灰	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
302	土・杯	10.8	2.5	7.4	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→板ナデ	
303	土・杯	11.0	2.4	7.0	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り	
304	土・杯	11.0	2.7	6.9	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へラ切り	
305	土・杯	11.0	2.5	7.4	粗・多	良好	橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	

第456図 E区S D 19出土遺物(3)(1/4)

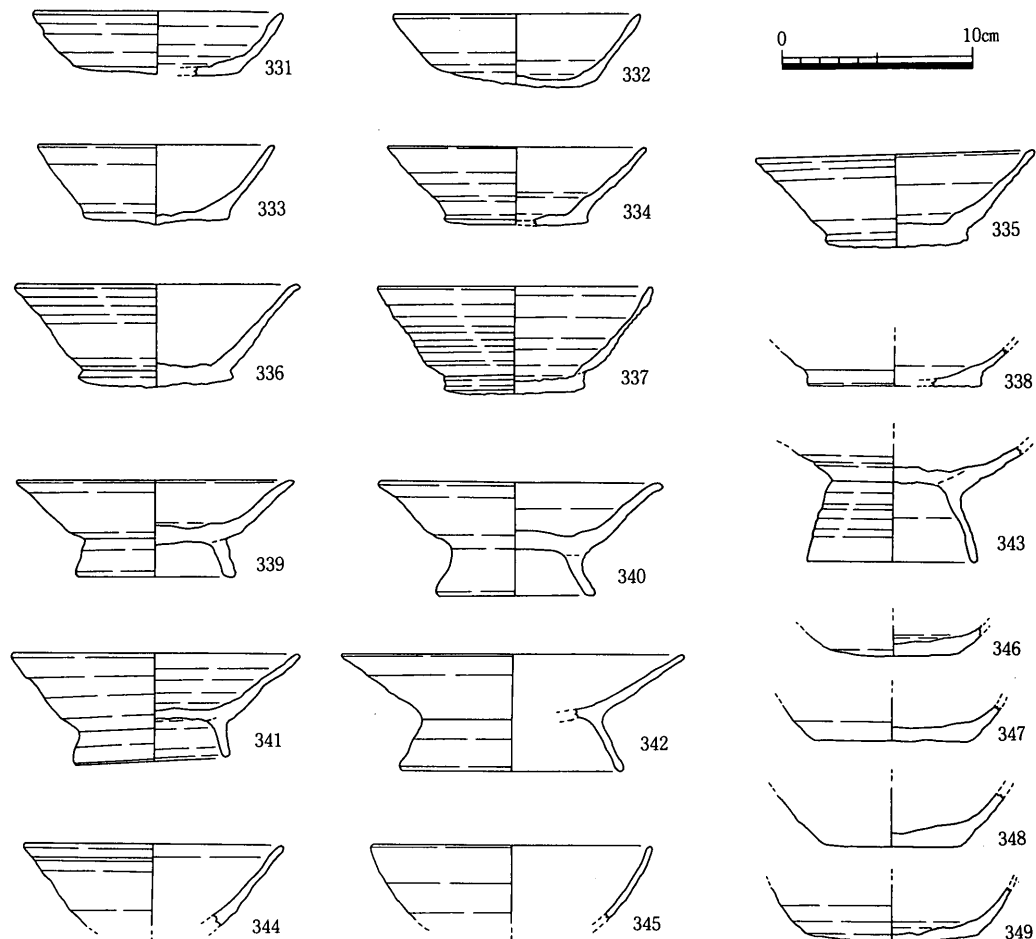


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
306	土・杯	11.4	2.4	7.7	粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
307	土・杯	11.0	2.5	7.4	細・多	良好	黄灰・橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
308	土・杯	12.0	2.4	9.4	細・多	良好	橙	ナデ	ナデ		
309	土・杯	11.5	2.6	6.9	中・多	良好	黄灰	ナデ	ナデ		
310	土・杯	11.4	2.6	7.6	細・少	良好	褐灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	金器母
311	土・杯	12.3	2.3	9.0	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
312	土・杯	13.2	2.5	9.2	中・多	不良	灰・黄灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
313	土・杯	12.4	2.9	8.3	精緻	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
314	土・杯	12.2	3.9	7.4	中・少	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
315	土・杯	12.6	3.1	8.0	中・普	良好	浅黄・暗灰黄	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
316	土・杯	12.3	3.5	7.7	少・普	良好	にぶい橙～橙	ナデ	不明		
317	土・杯	11.8	3.6	7.3	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
318	土・杯	12.8	3.6	8.2	細・少	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
319	土・杯	12.1	3.1	7.6	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
320	土・杯	12.3	3.9	7.0	粗・多	良好	浅黄	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
321	土・杯	13.0	3.5	8.5	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
322	土・杯	13.4	3.5	7.8	粗・普	良好	黒褐・橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
323	土・杯	13.6	3.1	8.2	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
324	土・杯	15.0	3.5	10.6	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
325	土・杯	12.0	3.5	7.8	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
326	土・杯	12.5	3.3	7.1	精緻	良好	黄橙・灰黄褐	ナデ	ナデ		
327	土・杯	12.2	3.2	6.1	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
328	土・杯	12.3	3.6	8.9	精緻	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
329	土・杯	12.1	3.3	7.6	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
330	土・杯	12.4	3.4	7.6	粗・多	良好	橙	不明	不明	底ヘラ切り→ナデ	

第457図 E区SD19出土遺物(4)(1/4)

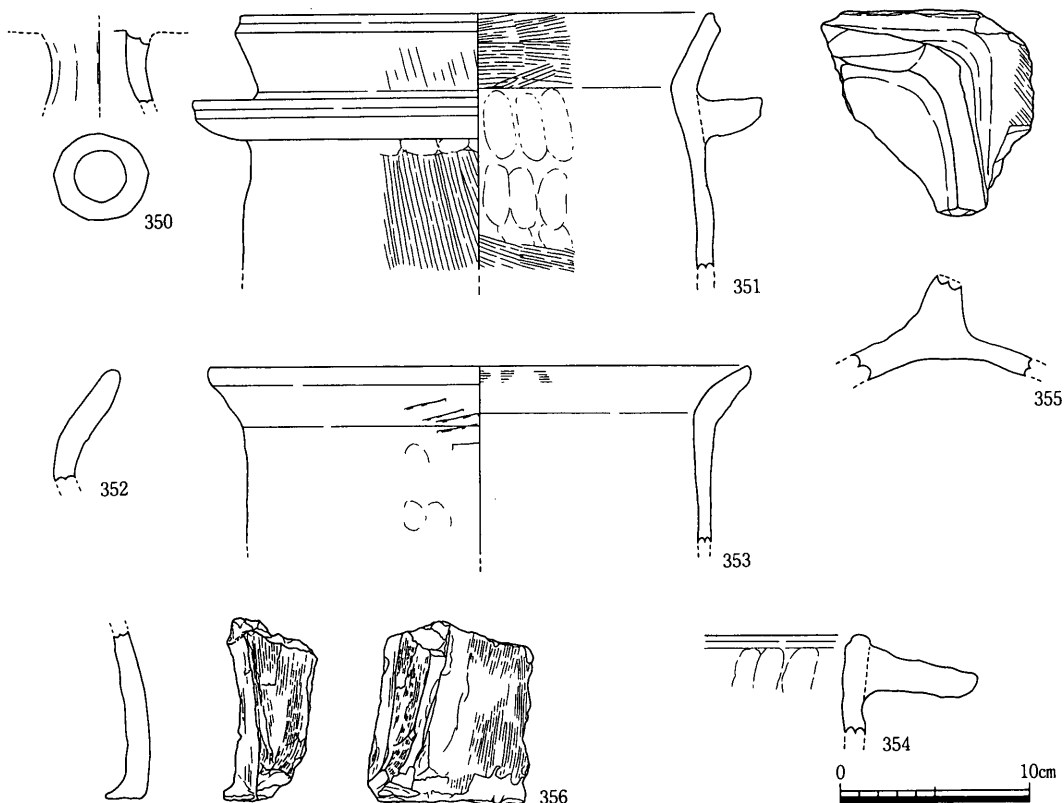
転台成形となっており、脚部との接合部が肥厚している。343は脚部のみであるが、脚部は非常に高いものになっており回転台成形になっている。

344・345は体部のみ、346～349は底部のみの破片である。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
331	土・杯	12.9	3.2	8.7	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
332	土・杯	13.0	3.7	7.0	中・少	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り・歪み	
333	土・杯	12.4	4.1	7.6	中・多	良好	赤褐	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
334	土・杯	13.6	3.9	7.6	精緻	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
335	土・杯	14.5	4.7	7.6	中・多	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
336	土・杯	15.2	5.2	8.1	粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
337	土・杯	14.3	5.4	7.4	精緻	良好	淡橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
338	土・杯			9.1	細・少	良好	淡橙一部橙	ナデ	ナデ		
339	土・高台杯	14.6	5.0	8.4	粗・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
340	土・高台杯	15.0	5.9	8.4	粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
341	土・高台杯	14.9	6.9	8.2	粗・多	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	金罍母
342	土・高台杯	16.0	6.1	11.8	中・多	良好	橙	ナデ	ナデ		
343	土・高台杯			9.0	中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
344	土・杯	13.5			中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	口縁部外面に沈線2条	
345	土・杯	14.6			精緻	良好	橙	不明	不明		
346	土・杯			7.0	精緻	良好	淡橙	不明	ナデ		
347	土・杯			8.0	中・普	良好	浅黄・橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
348	土・杯			7.3	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	角閃石
349	土・杯			9.0	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	

第458図 E区S D 19出土遺物(5)(1/4)



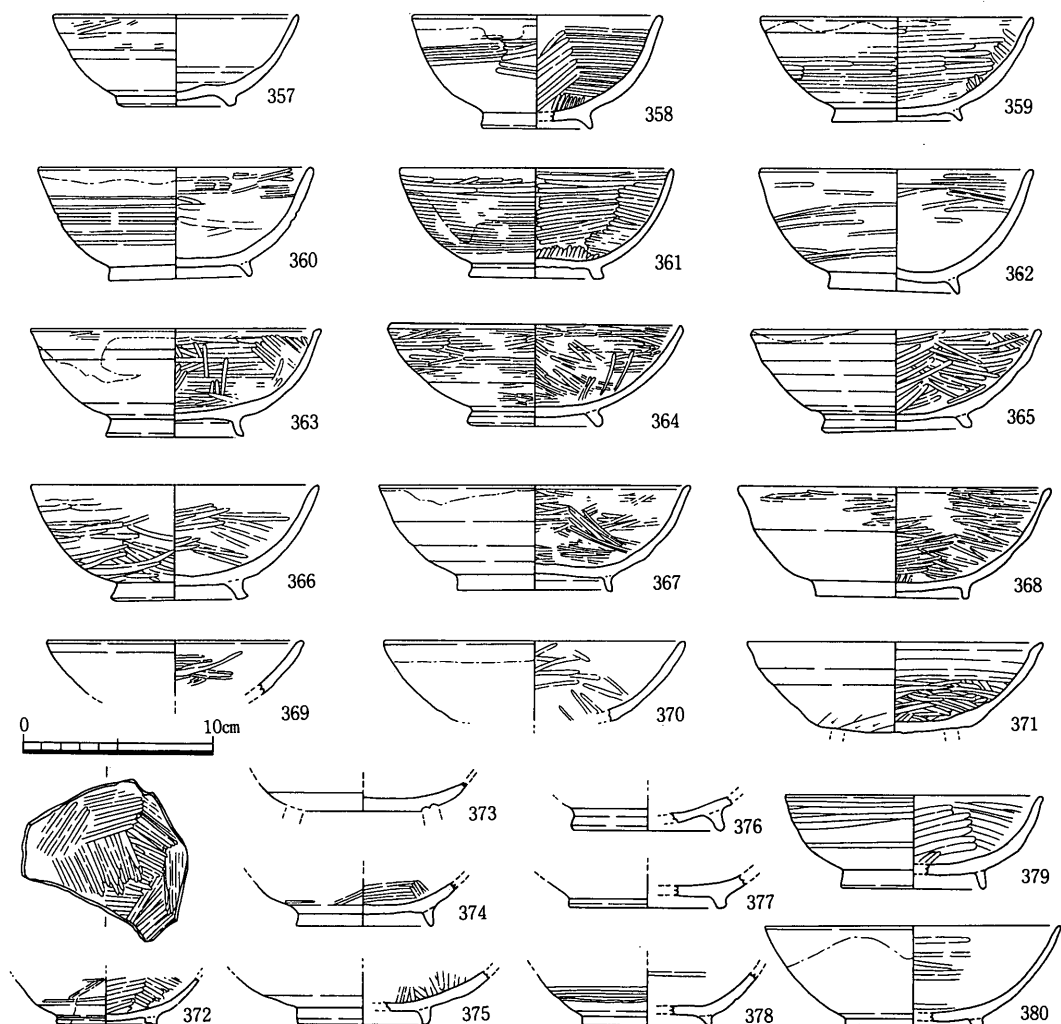
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
350	土・高杯				中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	脚部丁寧な面取り	外面に赤色顔料
351	土・土釜	25.0			中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		
352	土・土鍋				中・多	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
353	土・土鍋	28.4			粗・多	良好	橙・黒	ナデ	ハケ目・ナデ		
354	土・土釜				粗・普	良好	褐灰	ナデ	ナデ		
355	土・甕				中・普	良好	にぶい褐	ハケ目・ナデ	ナデ		
356	土・甕				粗・多	良好	明赤褐	ハケ目	ナデ	内面に粘土接合痕	

第459図 E区SD19出土遺物(6)(1/4)

350は土師器高杯の脚部で、外面は丁寧に面取り加工を施し赤色顔料を塗っている。351は土師質の土釜である。口縁部直下に上側が水平な面をもつ鰐状突帯を巡らせている。突帯の下部は体部に貼り付ける時の指押さえ痕が見られる。口縁部端部は上方に若干つまみあげている。口縁部内面はハケ目を施している。353は土師質の土鍋である。口縁部は肥厚し斜め上方に立ち上がる。体部は上半のみであるが直線的になっている。355・356は甕の破片である。

357は体部外面にカーボンが付着していない部分が多いが、底部外面にもカーボンが付着していることなどから黒色土器B類の碗と考えられる。底部の中央部が窪んでいる。

358～380は黒色土器A類の碗である。体部はいずれも内湾している。体部は基本的には内・外面ともにヘラミガキを施している。358・361は体部内面に格子状に、底部見込み部

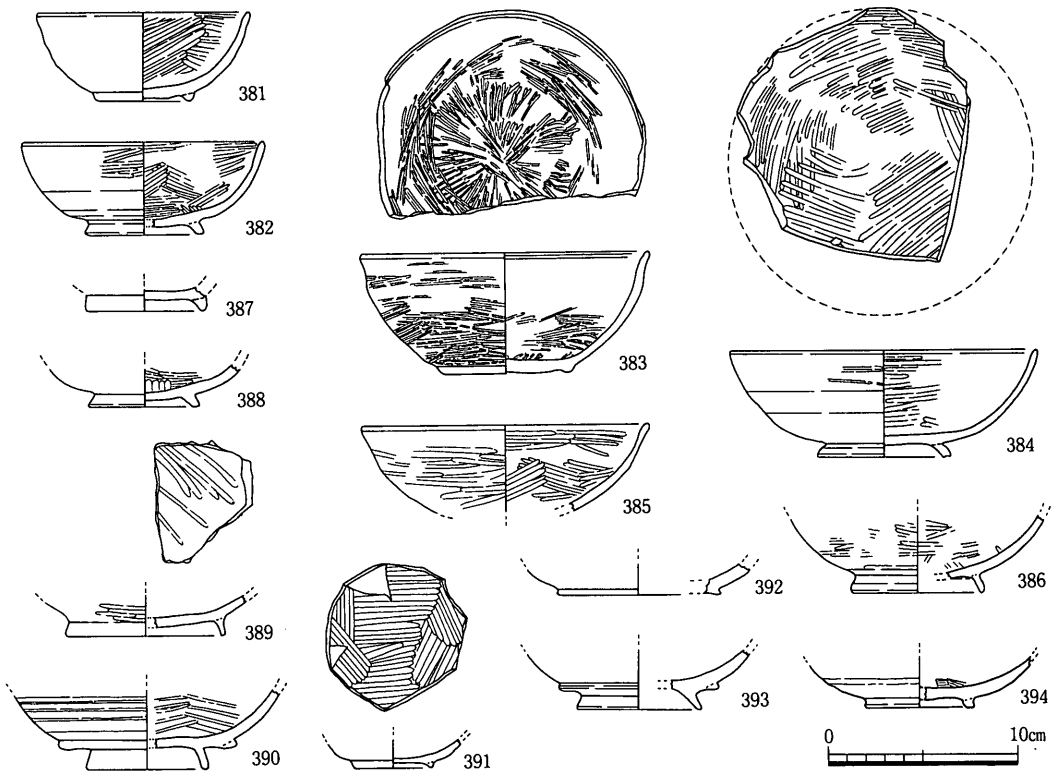


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
357	黒B・碗	12.8	4.6	6.2	細・普	良好	黒一部灰白	不明	不明	底ヘラ切り→ナデ	
358	黒A・碗	13.2	5.7	5.8	中・普	良好	黒・橙	ミガキ	ミガキ	内面格子状ミガキ	
359	黒A・碗	14.3	5.3	6.4	中・普	良好	黒・淡赤橙	ミガキ	ミガキ	内面格子状ミガキ	
360	黒A・碗	14.6	5.7	7.3	細・普	良好	黒・浅黄橙	ミガキ	ミガキ	底ヘラ切り→ナデ	
361	黒A・碗	14.4	5.6	6.9	中・普	良好	黒・浅黄橙	ミガキ	ミガキ	内面格子状ミガキ	
362	黒A・碗	14.4	6.3	6.9	中・普	良好	黒・黄橙	ミガキ	ミガキ		
363	黒A・碗	15.3	5.6	7.1	微・普	良好	黒・浅黄橙	不明	ミガキ		
364	黒A・碗	15.3	5.2	7.1	中・普	良好	黒・灰白	ミガキ	ミガキ		金髪母
365	黒A・碗	15.1	5.2	7.7	粗・多	良好	黒・橙	不明	ミガキ	ミガキの疎・密あり	
366	黒A・碗	15.0	6.0	6.3	粗・多	良好	黒褐・橙	ミガキ	ミガキ	外面下半に波状のミガキ	
367	黒A・碗	16.4	5.4	8.2	中・多	良好	黒・灰白	ナデ	ミガキ	底ヘラ切り→ナデ	
368	黒A・碗	16.2	5.7	7.9	中・多	良好	黒褐・白灰	ミガキ	ミガキ		
369	黒A・碗	13.1			精緻	良好	黒褐・灰白	ナデ	ミガキ		
370	黒A・碗	15.9			細・普	良好	黒・橙	ナデ	ミガキ		
371	黒A・碗	15.4	4.7	8.0	中・多	良好	黒・浅黄橙	ナデ・ケズリ	ミガキ	外面立ち上り部にケズリ	
372	黒A・碗			5.2	中・少	良好	黒・黄橙	ミガキ	ミガキ	高台内側に段をもつ	
373	黒A・碗				中・多	良好	黒・浅黄橙	ケズリ・ナデ	不明	底ヘラ切り	
374	黒A・碗			7.1	中・普	良好	黒・橙	ミガキ・ナデ	ミガキ	底ヘラ切り→ナデ	
375	黒A・碗			6.8	精緻	良好	黒・灰黄	ナデ	ミガキ		
376	黒A・碗			7.8	細・多	良好	黒・灰白	不明	不明		
377	黒A・碗			8.3	細・多	良好	黒・灰白	ナデ	不明	底ヘラ切り→ナデ	
378	黒A・碗			6.7	精緻	良好	黒・浅黄橙	ミガキ	ミガキ		
379	黒A・碗	13.4	4.9	7.4	粗・普	良好	黒・橙～灰	ミガキ	ミガキ		金髪母
380	黒A・碗	15.5	5.3	7.3	細・普	良好	黒褐・黄橙	不明	ミガキ		

第460図 E区SD19出土遺物(7)(1/4)

には直線のヘラミガキを施し、361は外面にもヘラミガキを丁寧に施している。360は体部外面に間隔のあいた回転ヘラミガキを施している。368が直立する高台をもつ他は外開きの高台となっている。371は高台は剥離しており、体部外面下半にはヘラケズリを施している。379は口縁部外面と体部内面に単位の太いヘラミガキを施している。

381~393は黒色土器B類の碗である。381・382は体部内面に格子状のヘラミガキを施している。383は体部は緩く内湾して立ち上り、器高も高く全体の法量は大きい。口縁部端部を強くナデており、内面には沈線が1条巡っている。底部外面を含めて全体にヘラミガキを丁寧に施している。底部内面の見込み部には放射状のヘラミガキを施している。高台



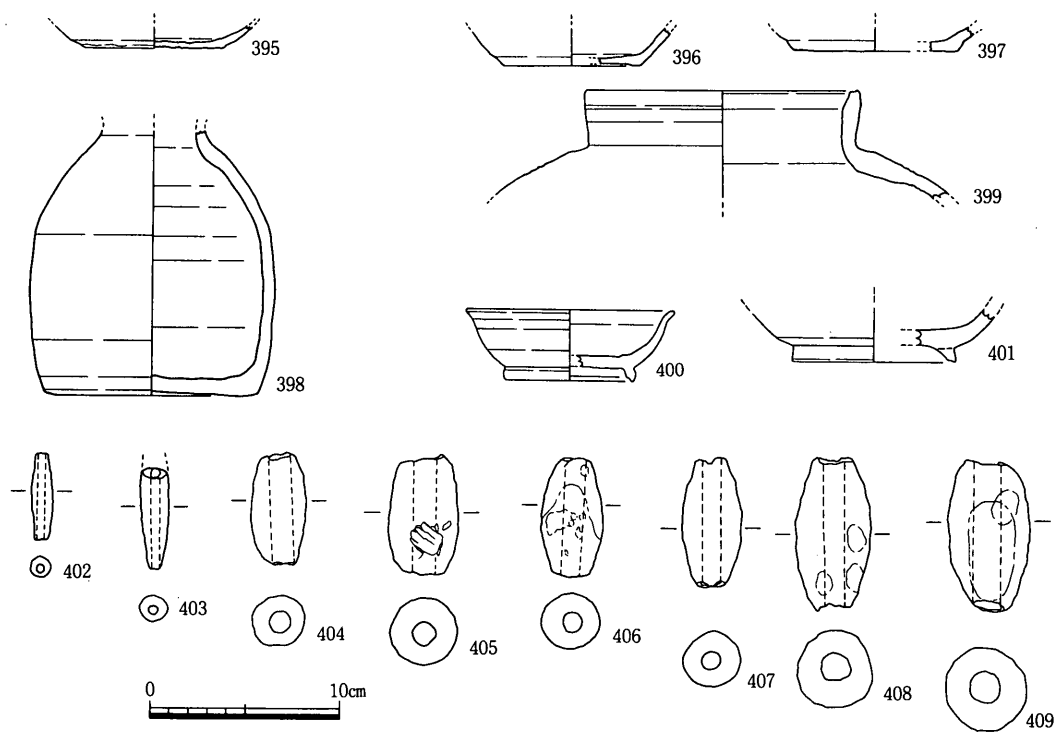
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
381	黒B・碗	11.1	4.6	4.8	精緻	良好	黒	不明	ミガキ	底ヘラ切り→ナデ	
382	黒B・碗	12.6	4.9	6.3	中・少	良好	黒	ミガキ・ナデ	ミガキ		
383	黒B・碗	15.2	6.3	6.9	精緻	良好	黒	ミガキ	ミガキ	底外面ミガキ	楠葉型
384	黒B・碗	16.2	5.6	7.0	粗・少	良好	黒	ミガキ・ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
385	黒B・碗	15.0			中・普	良好	黒	ミガキ	ミガキ	内面格子状のミガキ	
386	黒B・碗			7.1	中・普	良好	黒	ミガキ	ミガキ		
387	黒B・碗			6.1	精緻	良好	黒	ナデ	ミガキ	底ヘラ切り→ナデ	
388	黒B・碗			5.8	微・普	良好	黒	ナデ	ミガキ	底ヘラ切り?	
389	黒B・碗			8.4	細・普	良好	褐灰	ミガキ	ミガキ		
390	黒B・碗			6.4	中・普	良好	黒	ミガキ	ミガキ	底ヘラ切り→ナデ	
391	黒B・碗			4.1	微・普	良好	黒・灰~黒	ナデ	ミガキ		
392	黒B・碗			8.6	精緻	良好	黒	不明	不明		
393	黒B・碗			6.6	精緻	良好	黒	不明	不明	立上り部に鈎状突起	
394	瓦質・碗			5.6	微・普	良好	灰白	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ		

第461図 E区SD19出土遺物(8)(1/4)

は低く潰れたようになっている。畿内産で楠葉型と考えられる。384の高台は内湾し接地面は窪んでいる。386の高台の接地面端部は丸く収めている。390は高台は高く外開きになっており、体部外面には間隔のあいた回転ヘラミガキを施し、立ち上り部に錨状突帯を巡らせている。393は体部立ち上り部に断面三角形の錨状突帯を貼り巡らせている。

394は十瓶山産の瓦質の碗である。高台は中央部がやや膨らんでいる。

395～399は須恵器である。397は底部が高台状に若干突出する。398は体部は上半はなだらかにカーブし、下半は直線的になり肩は張っていない。底部は安定した平底になっている。400・401は緑釉陶器碗である。400は体部は緩く内湾した後に口縁部端部を外反させ



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
395	須・杯			7.3	細・少	良好	白灰	ナデ	ナデ		
396	須・杯			7.0	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ		
397	須・杯			8.4	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
398	須・壺			11.2	粗・少	不良	暗灰	ナデ	ナデ		
399	須・壺	14.2			精緻	良好	灰	叩き・ナデ	ナデ		
400	緑・碗	10.9	3.6	6.8	微・普	良好	緑	ナデ	ナデ	底系切り	近江型
401	緑・碗			8.6	精緻	良好	緑	ナデ	ナデ	高台内側に段	近江型
402	土罐	短軸1.1	長軸4.6		細・少	良好	にぶい黄	ナデ	不明		
403	土罐	短軸1.5	長軸5.2		細・少	良好	橙	ナデ	不明		
404	土罐	短軸2.8	長軸5.8		中・普	良好	にぶい橙	ナデ	不明		
405	土罐	短軸3.6	長軸6.2		中・多	良好	橙	ナデ	不明	器面に工具による抉れ	
406	土罐	短軸3.1	長軸6.2		中・普	良好	黒～黄橙	ナデ	不明		
407	土罐	短軸3.0	長軸6.7		粗・普	良好	橙	ナデ	不明		
408	土罐	短軸4.1	長軸8.0		中・多	良好	灰～にぶい橙	ナデ	不明	外面に黒斑あり	
409	土罐	短軸4.3	長軸7.8		中・普	良好	灰白	ナデ	不明	上下に黒斑が見られる	

第462図 E区SD19出土遺物(9)(1/4)

る。底部内面見込み部には沈線が1条巡り、三叉トチンの痕跡がある。高台は内側に大きな段があり、底部は糸切りとなっている。近江産と考えられる。401も高台内側に段がある。

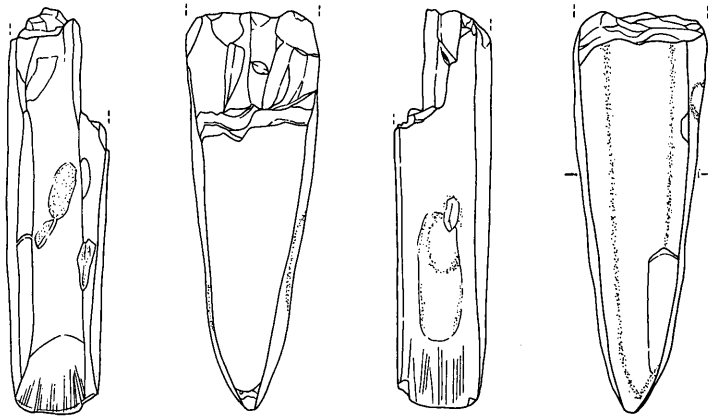
402～409は土錘である。402・403は細い管状のもので、404～409は平面形が長楕円形に近くなっている。

410は磨製の柱状片刃石斧で刃部に使用痕と考えられる擦痕がある。411は砥石ですべての面を使用している。

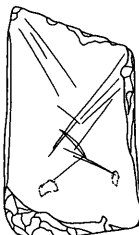
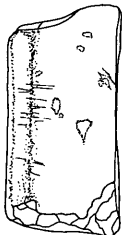
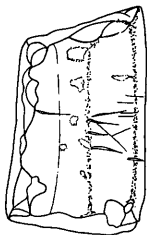
413～432は平瓦である。419は凹・凸面に糸切り痕が見られる。417・419・420は凸面に縄目叩きを施している。427～429・431・432は凸面に正格子叩きを施し、430の凸面には斜格子叩きを施している。431の凹面には糸切り痕と模骨痕が残っている。432の凹面には糸切り痕が残っている。434は鴟尾と考えられる。背の部分で表面が鱗状に段になっている。焼成は悪く土師質に近いものである。

435～457はS D 19の北部の井戸との切り合い部分で出土した遺物である。純粋にS D 19のものとは言い難く、ある程度混入が考えられるものである。435～440は土師器小皿である。435は器高が低く口縁部も短い。440は体部を2段にナデている。441～446は土師器杯で、442は体部にナデの際の稜が明瞭に残っている。444は底部は小さく体部は大きく直線的に開く。451は黒色土器B類の皿である。立ち上り部は丸味を帯びており、体部は中程で屈曲する。内面は格子状のヘラミガキを施し、底部外面はヘラ切りの後にナデている。452は黒色土器B類の椀である。直線的な外開きの高台は高く、体部外面には回転ヘラミガキを施している。453～456は黒色土器A類の椀である。いずれも内面にヘラミガキを施している。457は緑釉陶器で釉薬の色調は明黄褐色である。高台は削り出しており、京都産のものである。

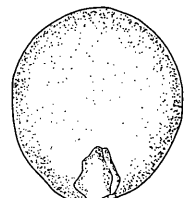
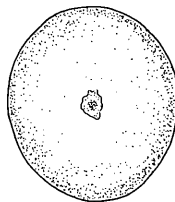
以上のように215～434は石器を除いて一括遺物と考えられる。土器では須恵器は図化出来たものを含めて10点以下とその全体に占める割合は非常に低い。圧倒的多数を占める土師器の杯は口径により2つに大別出来るが、それらは法量がほぼ同じで画一性の強いものとなっている。さらに底部が高台状に突出するもの(333～338)や足高の脚が付くもの(339～343)などの特徴的な杯も見られる。383の畿内産の黒色土器や400・401などの近江産の緑釉陶器などの搬入品も見られた。また瓦では平瓦で凸面に格子目叩きの施されている一群がある。この叩きも全体には施されず間隔をあげながら施されているものである。畿内産の黒色土器や近江産の緑釉陶器の年代観からS D 19の土器群は10世紀後半のもの



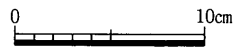
410



411

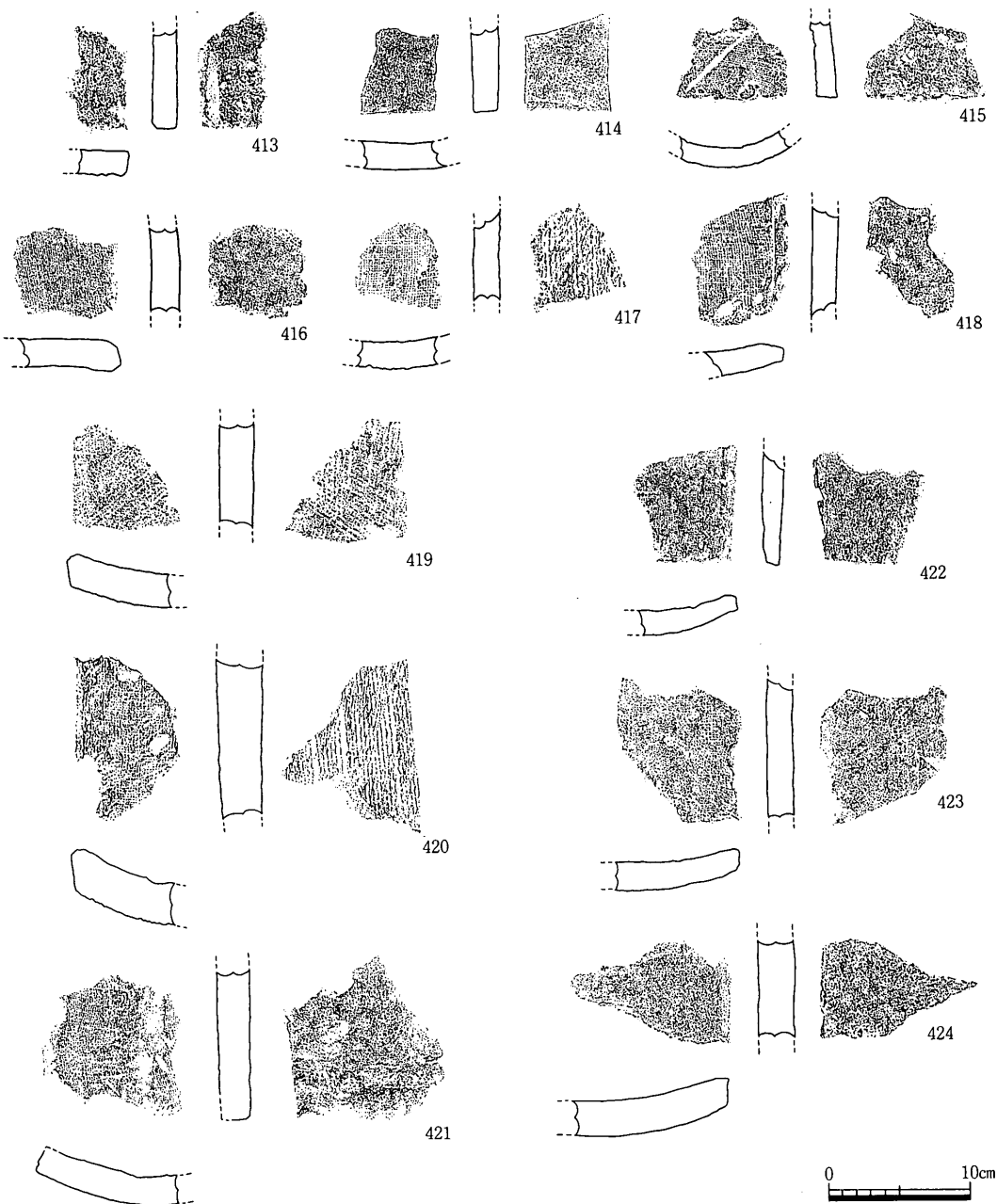


412



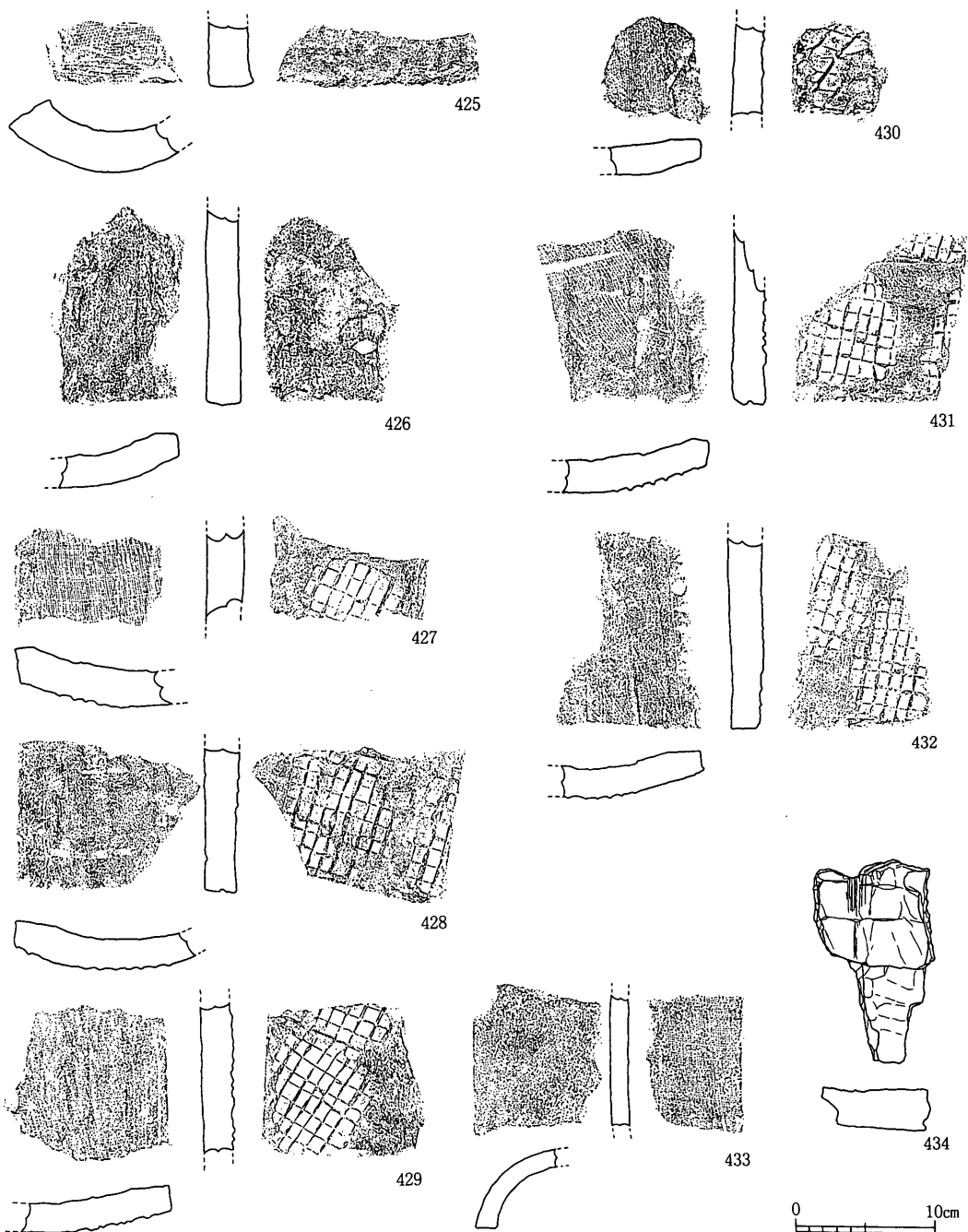
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法的特徴	備考
410	柱状片刃石斧	10.2	3.5	2.4	151.1	結晶片岩	刃部に使用痕有り	磨製
411	砥石	6.0	3.6	3.0	104.1	流紋岩	すべての面を使用している	
412	凹石	10.2	8.8	5.6	879.8	流紋岩系斑岩		

第463図 E区SD19出土遺物(10)(1/2, 1/4)



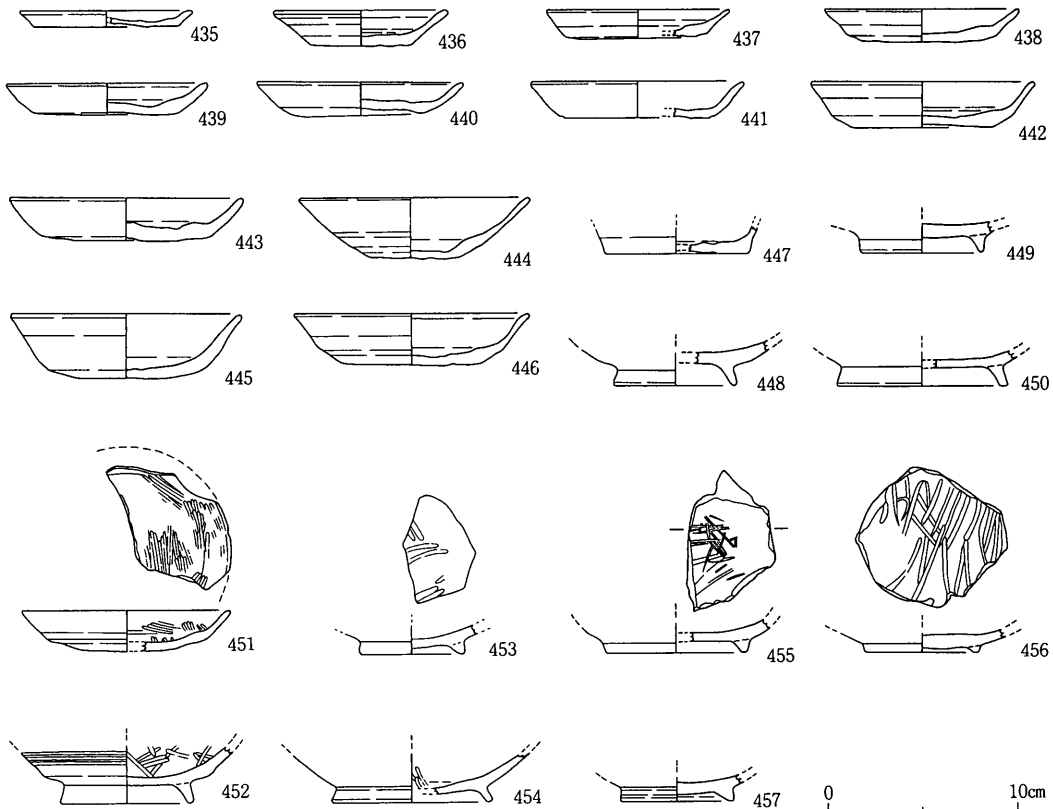
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
413	平瓦	1.7	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	1 6	粗・普	灰白	良好		6.8
414	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕		1 6	中・普	灰	良好		5.8
415	平瓦	1.4	ナデ	布目圧痕		1 6	中・普	灰	良好		5.2
416	平瓦	1.9	縄目叩き	布目圧痕	4		中・普	にぶい黄橙	不良		5.8
417	平瓦	1.9	縄目叩き	布目圧痕			中・普	灰白	良好		6.3
418	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	3		中・普	灰白	良好		7.8
419	平瓦	2.4	縄目叩き	布目圧痕	7		中・普	浅黄橙	不良	凹凸面に糸切り痕	7.4
420	平瓦	2.9	縄目叩き	布目圧痕→ナデ	7		中・普	灰白	良好		11.3
421	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	1	1 6	粗・普	灰白	良好		10.6
422	平瓦	1.5	ナデ	布目圧痕→ナデ	3	1 9	中・普	灰白	良好	一枚作り	7.7
423	平瓦	1.8	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	1		粗・普	灰黄	不良		9.8
424	平瓦	2.5	ナデ	布目圧痕→ナデ	8		中・普	にぶい黄橙	不良		7.0

第464図 E区S D19出土遺物(11)(1/5)



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
425	平瓦	2.9	板ナデ	布目瓦痕	1	1 6	中・普	灰黄	不良		4.5
426	平瓦	2.3	ナデ	布目瓦痕→ナデ	3	1 6	中・普	灰白	良好		13.3
427	平瓦	2.8	格子目叩き	布目瓦痕	3		中・普	灰白	良好	正格子	6.2
428	平瓦	2.2	格子目叩き	布目瓦痕→ナデ	1	1 6	粗・普	灰黄	良好	正格子	10.1
429	平瓦	2.1	格子目叩き	布目瓦痕	1		中・普	淡黄	良好	正格子	10.6
430	平瓦	2.1	格子目叩き	布目瓦痕	3		中・普	灰白	良好	斜格子	6.5
431	平瓦	2.5	格子目叩き	布目瓦痕	3	1 6	中・普	灰白	良好	凹面に糸切り痕, 根骨痕, 正格子	12.2
432	平瓦	2.1	格子目叩き	布目瓦痕	3	1 6	中・普	灰白	良好	凹面に糸切り痕, 正格子	13.4
433	丸瓦	1.3	ナデ	布目瓦痕	1	1	中・普	灰白・にぶい橙	良好		9.4
434	甕尾	2.9	表: ナデ	裏: ナデ			粗・普	明赤褐	良好	表面に鱗状の文様	14.3

第465図 E区SD19出土遺物(12)(1/5)



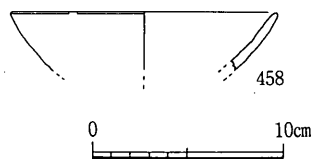
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
435	土・小皿	9.0	0.9	7.7	細・少	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
436	土・小皿	9.0	1.8	5.2	精緻	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り	
437	土・小皿	9.5	1.4	6.8	細・少	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り	
438	土・小皿	10.2	1.7	7.8	中・少	不良	灰褐	ナデ	ナデ	底へラ切り	
439	土・小皿	10.6	1.6	7.6	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り	
440	土・小皿	10.7	1.8	6.7	中・多	良好	灰白～淡橙	ナデ	ナデ	底へラ切り	
441	土・杯	11.2	1.9	8.0	精緻	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ		金翠母
442	土・杯	11.8	2.3	7.5	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へラ切り	金翠母
443	土・杯	12.2	2.2	8.7	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	金翠母
444	土・杯	12.0	3.2	4.6	細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	金翠母
445	土・杯	12.0	3.4	5.2	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
446	土・杯	12.4	2.7	7.4	中・多	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→板ナデ	
447	土・盃			7.6	精緻	不良	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
448	土・碗			6.6	精緻	良好	灰白・浅黄橙	ナデ	ナデ		
449	土・碗			6.6	中・少	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
450	土・碗			8.8	細・少	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
451	黒B・皿	11.0	2.2	8.4	細・普	良好	黒一部灰黄	ナデ	ミガキ		金翠母
452	黒B・碗			7.0	細・普	良好	黒	ミガキ	ミガキ		
453	黒A・碗			5.6	精緻	良好	黒・灰黄	不明	ミガキ		
454	黒A・碗			8.2	精緻	良好	黒・淡赤橙	不明	ミガキ		
455	黒A・碗			7.4	中・普	良好	黒・黄橙	ナデ	ミガキ		
456	黒A・碗			6.0	細・少	良好	黄灰・黄橙	ナデ	ミガキ		
457	緑・碗			5.8	精緻	良好	明黄褐	ナデ	ナデ	高台内側に段を持つ	

第466図 E区SD19, SE03・04交点部分出土遺物(1/4)

考えたい。また435～457の一群は先に述べたように井戸との切り合い部分で出土しているため、年代の新しい遺物も混入している。特に435～440の土師器小皿の一群はより後出的なものである。

S D 20 (第467図)

E 6区で検出した。N-19° - Eの方向を向いており溝の深さから北から南に流れる。幅30cmで深さは10cmたらずである。埋土は灰色粘土と中砂の互層であった。須恵器や土師器の細片が出土し、1点のみ図示しえた。

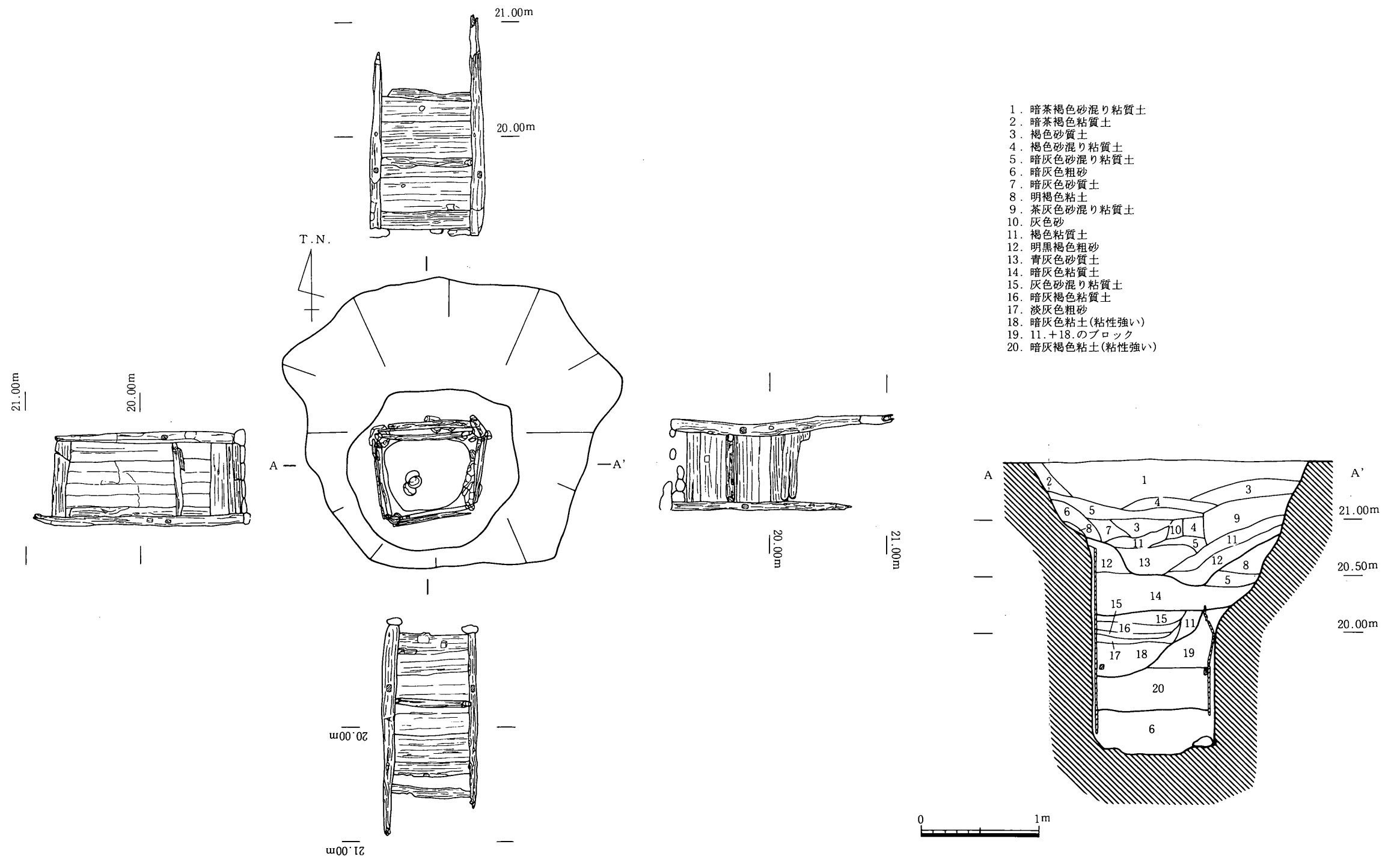


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
458	須・碗	14.0			中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		

第467図 E区S D 20出土遺物 (1 / 4)

S E 01 (第468～478図, 図版65・66)

E 3区の南壁際やや西寄りで検出した井戸である。掘形の平面形は不整形ながら正方形に近く、1辺2.5mほどである。西側は0.7m、東側は1.4mほどすり鉢形に掘り込んだ後に垂直に掘り込み底に到る。検出面から底までは2.6mである。井戸枠は木枠で平面形は正方形で掘形の南側に寄っている。4つのコーナーにそれぞれ縦の長い木を設け、その間に板材を配しているものである。特に北東コーナーの縦隅木は長く1.9mほどあり、井戸の検出面から50cmのところまで上部が検出される。側板は西側の上半のみが縦方向である他は横方向である。西側板は下から2枚横方向に板材を配し、その上に縦方向の板材を3枚配している。このうち北側と中央の板材は側面にほぞ穴をあけて、長方形の楔で連結している。側面のほぞ穴は4箇所認められ、最下段のものは楔も残存していた。その他の側面は下から横方向に板材を積み上げており、板材の幅は概ね85cm前後で厚さは30～40cmと厚手のものを使用している。板材の中にはほぞ穴があいているなど建築部材を転用したのが見られる。側板の内側には下から南北側は60cmほど、東西側は50cmほどのところに横方向の棧を設けている。棧は丸太材を使用しており、その先端を削出し縦隅木に穴をあけてはめ込んでいる。北東部以外の縦隅木の下には人頭大の石を敷いて、木枠が沈み込まないように補強している。側板のすぐ裏側には黄褐色粘土の地山があり、掘形いっぱい井戸枠を配することによって、地山を裏込めとしている。埋土は5層に大別出来て、最下層は砂層で土師器甕が2個体出土した。井戸枠内の埋土は粘土が主体となるが、下層ほど粘性が強くなっている。井戸枠より上の層で赤色顔料を塗った土師器がまとまって出土したが、

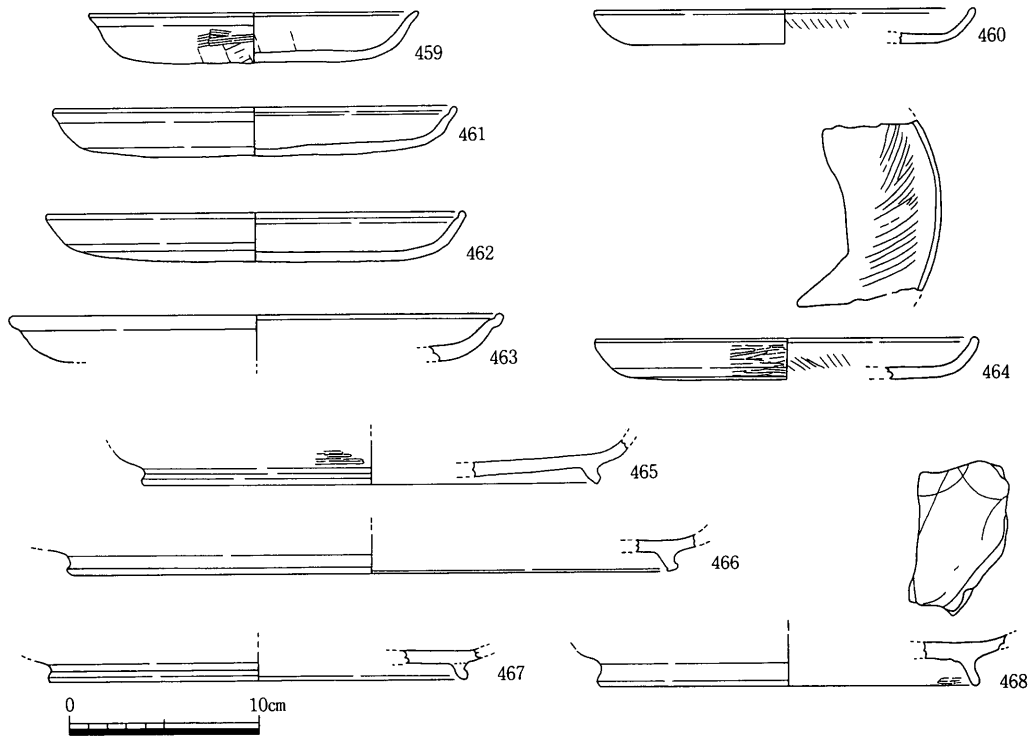


1. 暗茶褐色砂混り粘質土
2. 暗茶褐色粘質土
3. 褐色砂質土
4. 褐色砂混り粘質土
5. 暗灰色砂混り粘質土
6. 暗灰色粗砂
7. 暗灰色砂質土
8. 明褐色粘土
9. 茶灰色砂混り粘質土
10. 灰色砂
11. 褐色粘質土
12. 明黒褐色粗砂
13. 青灰色砂質土
14. 暗灰色粘質土
15. 灰色砂混り粘質土
16. 暗灰褐色粘質土
17. 淡灰色粗砂
18. 暗灰色粘土(粘性強い)
19. 11.+18.のブロック
20. 暗灰褐色粘土(粘性強い)

第468図 E区SE01平・断面図, 井戸枠立面図(1/40)

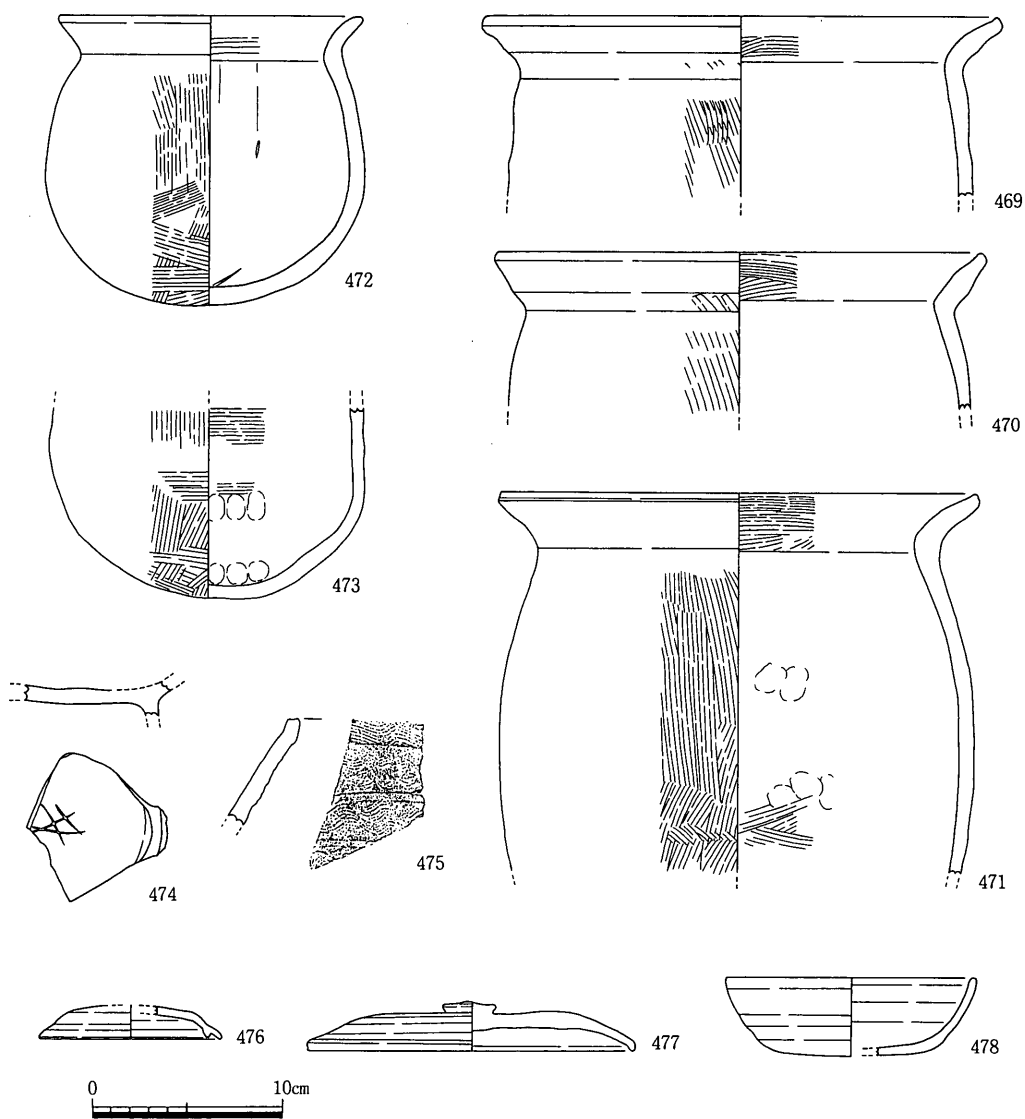
これは井戸を木枠まで埋め戻した段階で一括投棄したものと考えられる。

459～467・469～471・474～476は井戸枠より上層で出土した土器である。459～464は皿で、460・464は内面に暗文を施している。459の体部外面にはヘラミガキを施し、底部外面は板ナデとなっている。461～463は口縁部端部をナデることにより上方につまみ上げ、内面に沈線状の段が生じている。461・462の底部外面はヘラケズリとなっている。465～467は体部は欠損しているが高台付きの皿である。高台は立ち上り部よりやや内側に付いている。460・464・466以外の土器は全体に赤色顔料を塗っている。469～471は土師器甕である。いずれも長胴のもので体部外面は全体にハケ目を施し、口縁部は短く直線的に開き端部は外側に面をもつ。口縁部内面にはハケ目を施している。474は須恵器杯の破片で



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
459	土・皿	17.4	2.7	12.4	精緻	良好	明赤褐	ミガキ・板ナデ	ナデ	全体に赤色顔料、暗文	
460	土・皿	20.0	1.8	17.0	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	暗文	
461	土・皿	21.0	2.6	18.0	中・少	良好	明赤褐	ナデ・ケズリ	ナデ	全体に赤色顔料	
462	土・皿	22.1	2.6		精緻	良好	明赤褐	ナデ・ケズリ	ナデ	全体に赤色顔料	
463	土・皿	25.6			細・普	良好	橙	不明	ナデ	全体に赤色顔料	
464	土・皿	20.0	2.1	16.6	精緻	良好	橙	ミガキ	ナデ	暗文	
465	土・皿			24.2	精緻	良好	明赤褐	ナデ・ケズリ	ナデ	全体に赤色顔料	
466	土・皿			31.2	細・少	良好	明赤褐	ナデ	ナデ		
467	土・皿			21.8	細・少	良好	赤褐	ナデ	ナデ	全体に赤色顔料	
468	土・皿			19.6	細・普	良好	橙	ケズリ	ナデ	全体に赤色顔料、暗文	

第469図 E区SE01出土遺物(1)(1/4)



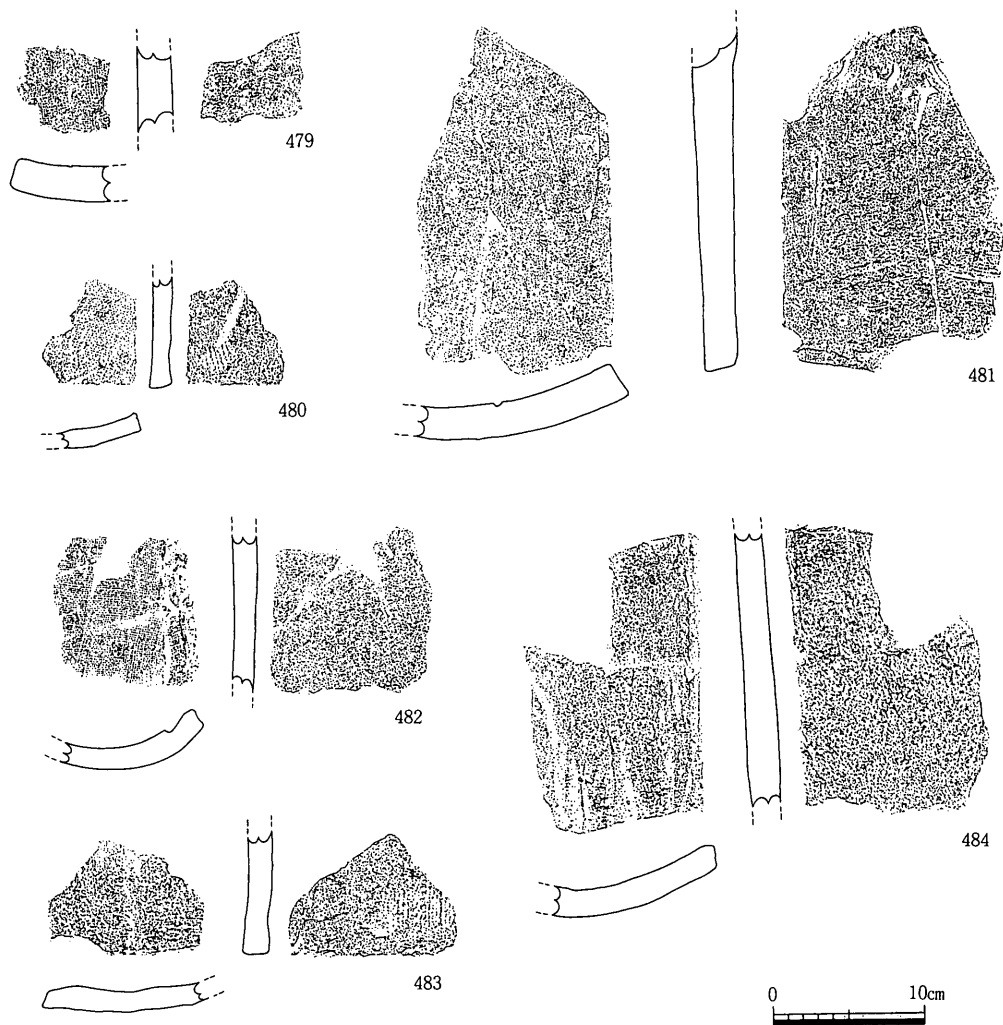
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
469	土・甕	27.0			粗・多	良好	にぶい黄橙	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		
470	土・甕	25.6			粗・多	良好	にぶい橙	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		
471	土・甕	25.1			中・多	良好	にぶい橙	ハケ目	ハケ目・ナデ		
472	土・甕	15.8	14.7		中・多	良好	にぶい黄褐	ハケ目	ナデ・ハケ目		
473	土・甕				中・多	良好	黒褐	ハケ目	ハケ目・ナデ		
474	須・杯				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ		底にヘラ記号
475	須・甕				細・少	良好	灰	ナデ	ナデ		
476	須・杯蓋	9.6			粗・少	良好	灰	ナデ	ナデ		
477	須・杯蓋	17.1	2.5		中・普	良好	灰白	ケズリ・ナデ	ナデ		
478	須・杯	13.2	4.1	6.0	精緻	良好	灰白・灰	ケズリ・ナデ	ナデ		

第470図 E区SE01出土遺物(2)(1/4)

あるが、底部外面にヘラ記号が認められる。476は須恵器杯蓋で、口縁部内面にかえりをもつ。井戸に直接伴うものではなく前段階のものが混入したと考えられる。

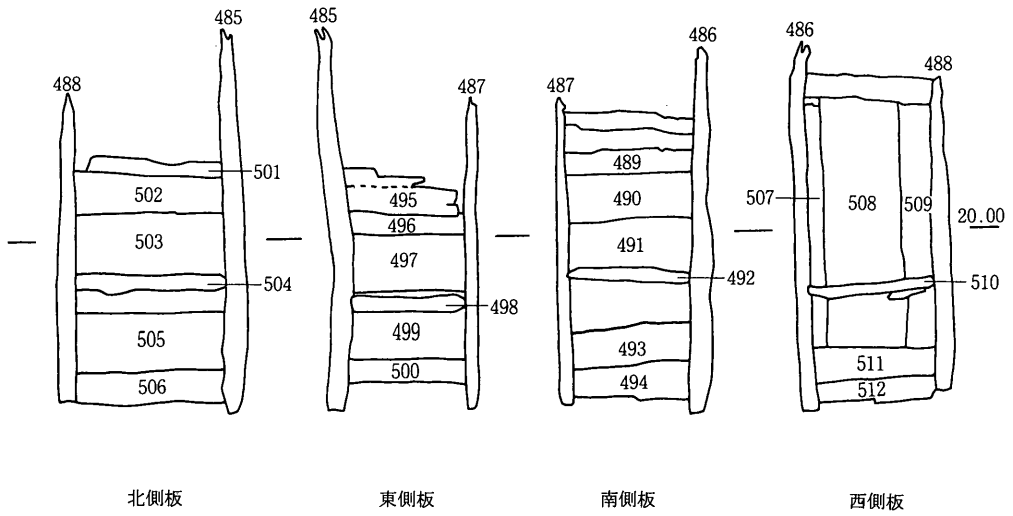
468・478は井戸枠内の上部で出土した土器である。468は土師器の高台付き皿あるいは杯と考えられる。高めの外開きの高台は直線的で、内面には螺旋状暗文が施されている。478は須恵器杯で体部は内湾している。

477は井戸枠の裏側から出土した須恵器杯蓋である。天井部は平坦で口縁部端部は下方



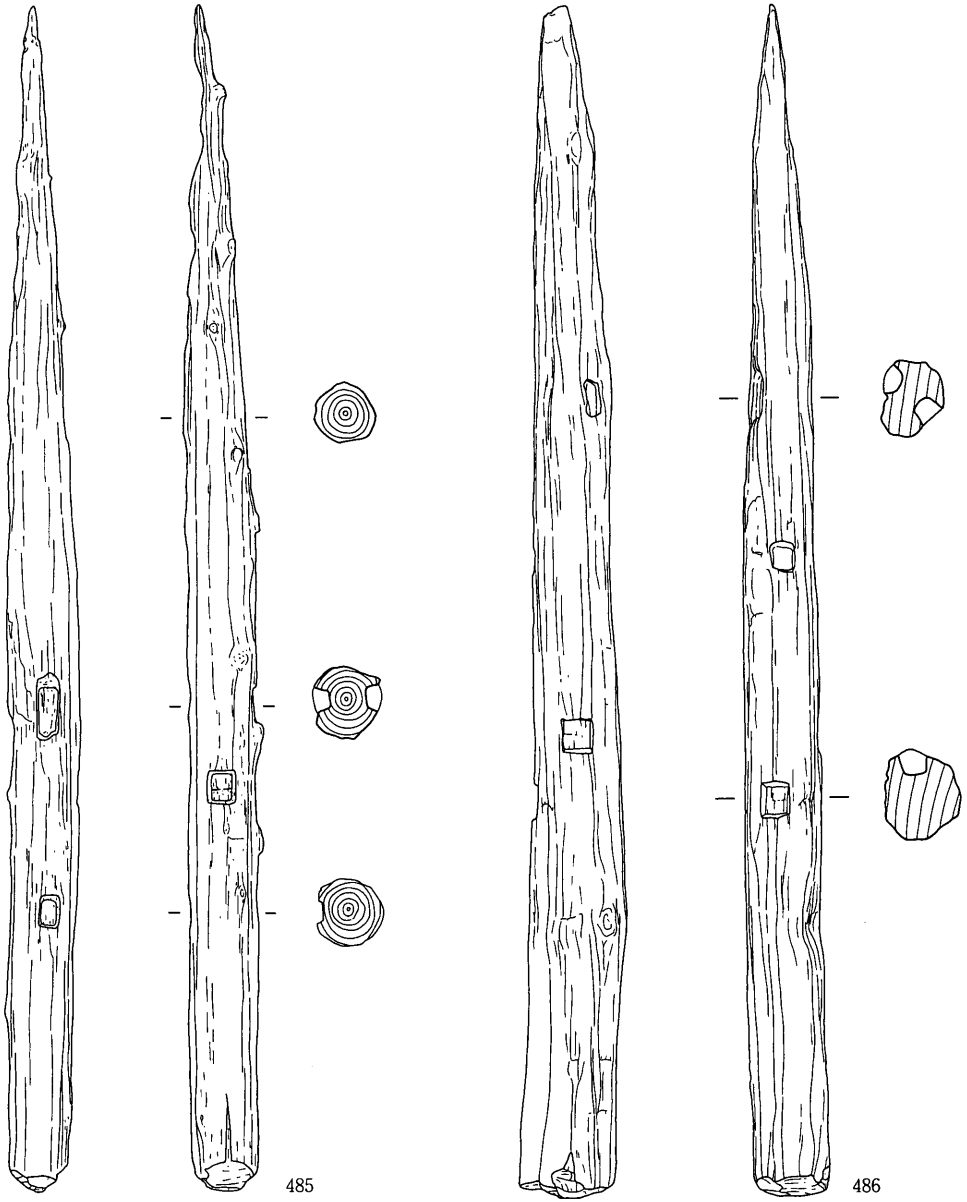
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
479	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	1		中・普	灰白	良好		5.6
480	平瓦	1.2	細目叩き→ナデ	布目圧痕	1	1 6	中・普	灰	良好		7.0
481	平瓦	2.3	板ナデ	板ナデ	1	1 6	中・普	青灰	良好		22.1
482	平瓦	1.7	ナデ	布目圧痕	1		粗・普	灰	良好	凹面に布のと同じ合わせ痕有り	10.3
483	平瓦	1.4	細目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	3	1 6	中・普	緑灰	良好		8.0
484	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕→ナデ	1		中・普	暗灰	良好		18.1

第471図 E区SE01出土遺物(3)(1/5)

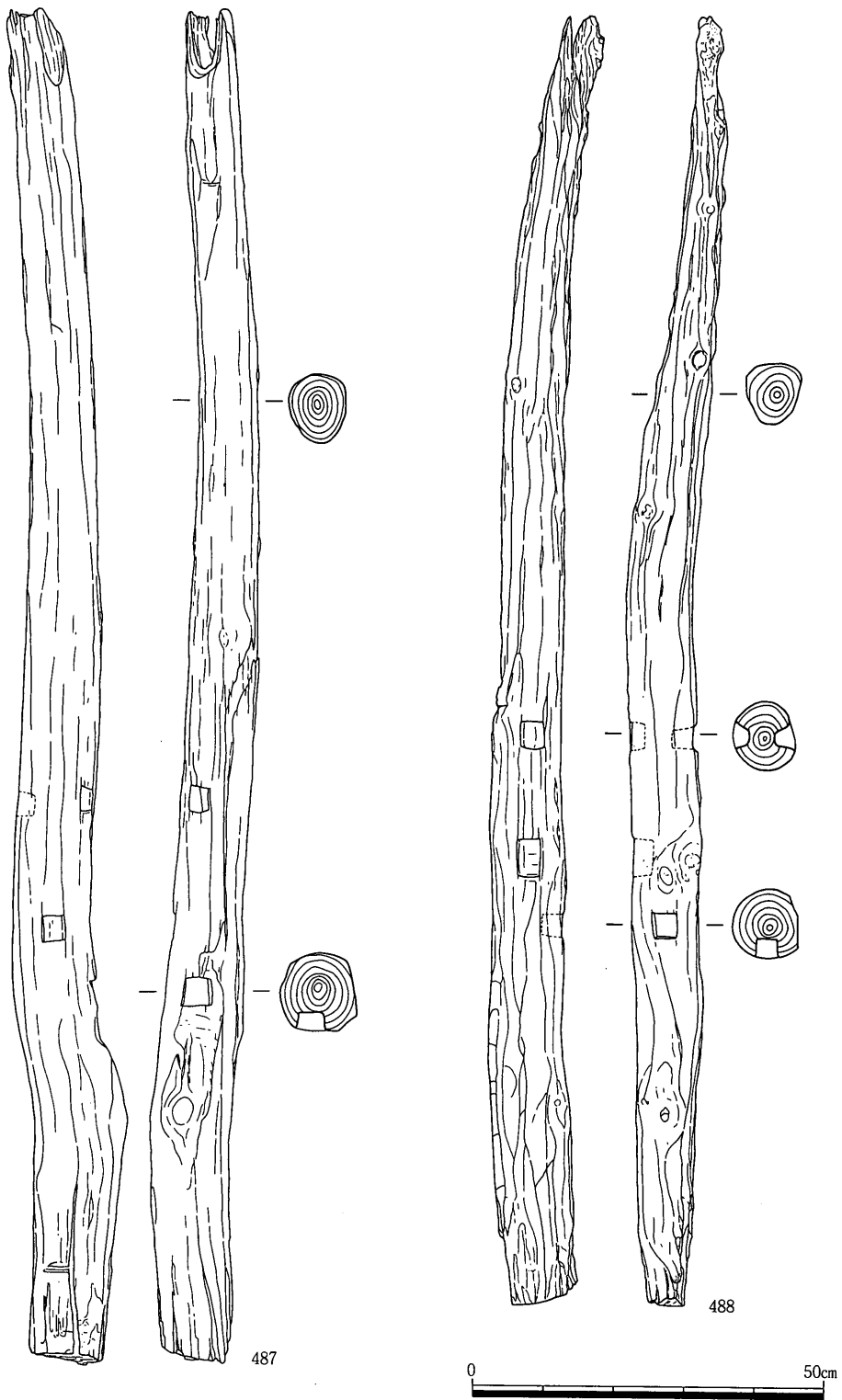


第472図 E区SE01井戸枠模式図

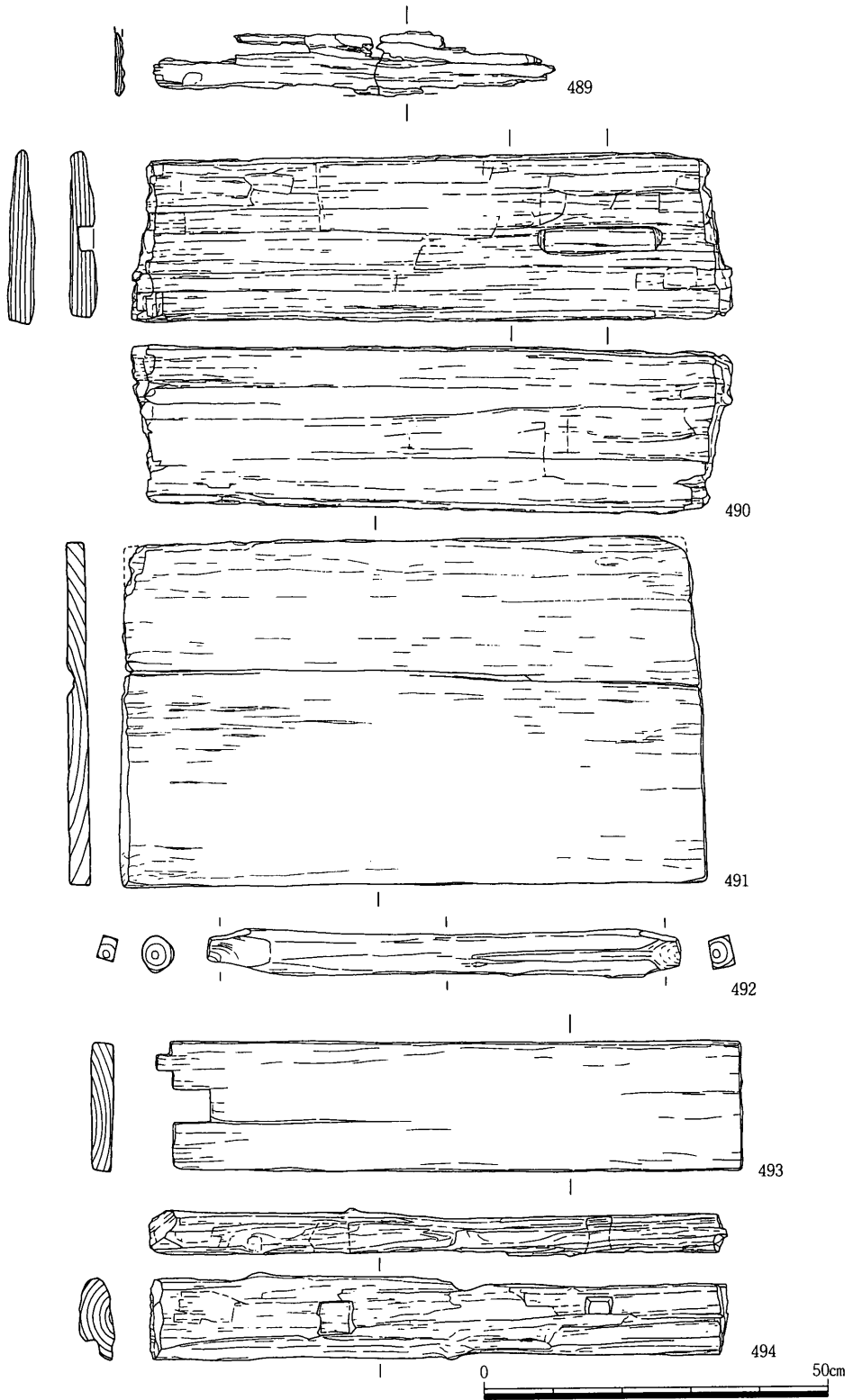
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
485	井戸枠	154.0	9.8	9.1	芯持		縦隅木
486	井戸枠	154.8	10.3	12.8	柵目		縦隅木
487	井戸枠	190.4	13.2	11.0	芯持		縦隅木
488	井戸枠	182.0	9.4	10.0	芯持		縦隅木
489	井戸枠	58.4	8.9	1.3	板目		
490	井戸枠	87.0	23.7	4.0	板目		
491	井戸枠	85.5	50.8	3.0	板目		
492	井戸枠	69.2	6.9	5.9	芯持		
493	井戸枠	85.3	18.8	3.5	板目		
494	井戸枠	84.0	12.5	4.9	芯持		
495	井戸枠	71.0	12.6	2.2	板目		
496	井戸枠	82.4	12.3	2.9	板目		
497	井戸枠	92.0	28.0	3.5	板目		
498	井戸枠	72.0	8.5	5.0	芯持		
499	井戸枠	85.5	33.6	5.9	板目		
500	井戸枠	78.9	11.5	3.2	板目		
501	井戸枠	42.3	4.4	3.4	芯持		
502	井戸枠	88.3	12.7	3.1	板目		
503	井戸枠	86.0	49.8	3.6	板目		
504	井戸枠	70.9	10.5	6.5	芯持		
505	井戸枠	84.5	32.5	6.0	板目		
506	井戸枠	74.5	11.6	3.0	柵目		
507	井戸枠	93.4	12.3	5.9	柵目		
508	井戸枠	96.2	37.1	4.4	柵目		
509	井戸枠	111.4	29.8	4.1	柵目		
510	井戸枠	69.7	8.0	5.7	芯持		
511	井戸枠	84.3	18.8	3.5	板目		
512	井戸枠	50.4	11.2	3.4	柵目		



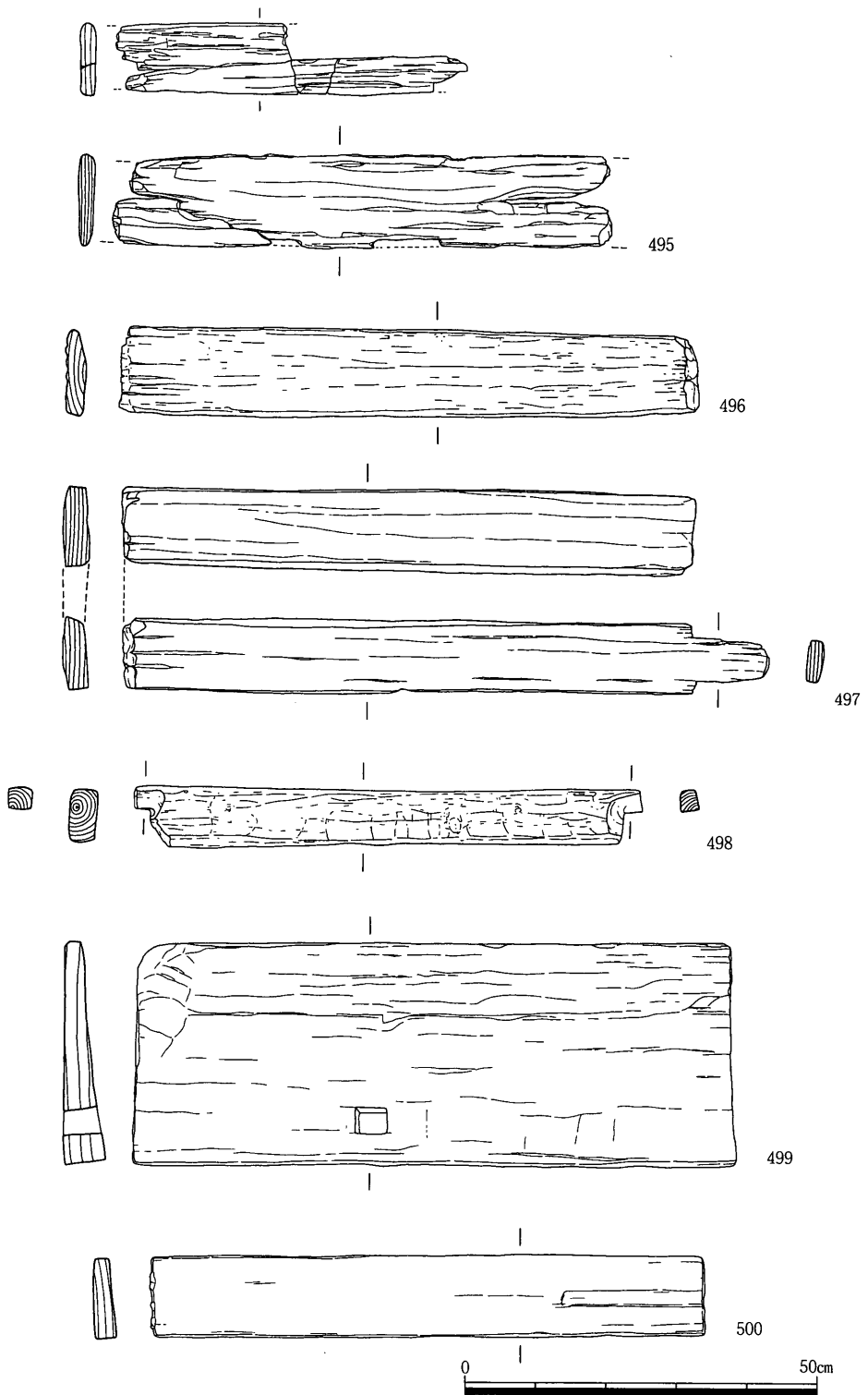
第473图 E区SE01井戸杵(1)(1/10)



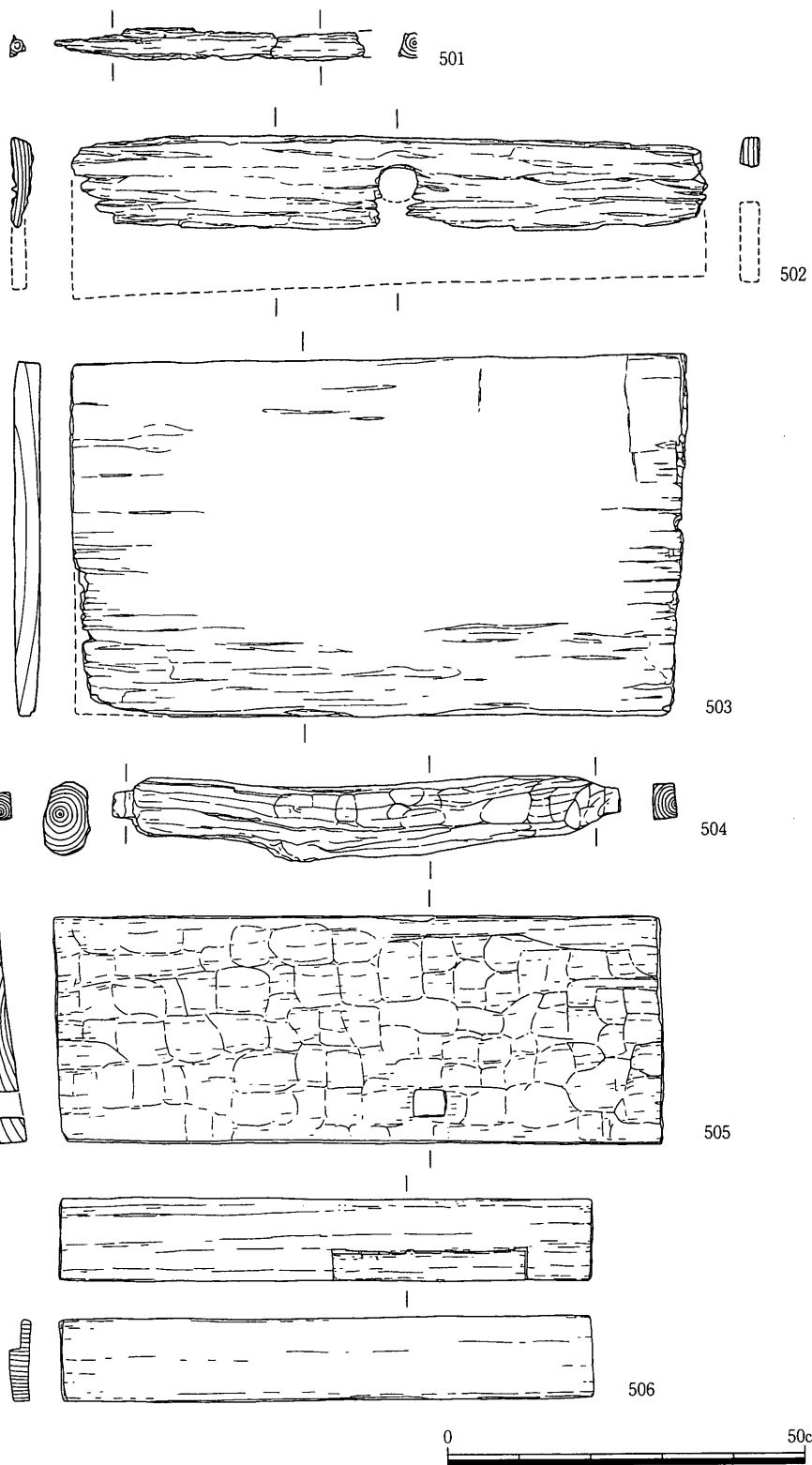
第474图 E区SE01井戸枠(2)(1/10)



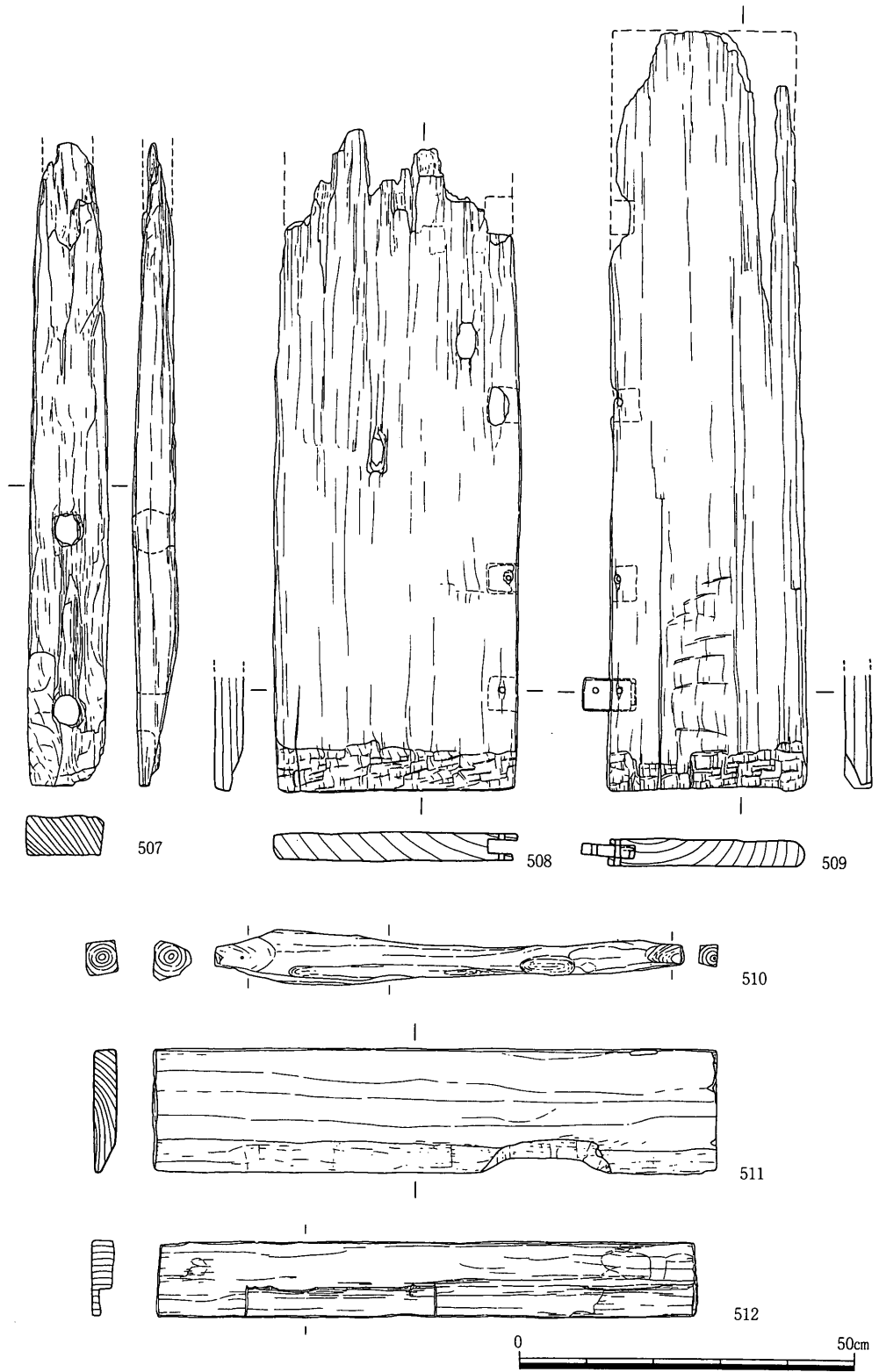
第475图 E区SE01井戸梓(3)(1/10)



第476图 E区SE01井戸枘(4)(1/10)



第477図 E区SE01井戸杵(5)(1/10)



第478図 E区SE01井戸枿(6)(1/10)

に向く。扁平な宝珠つまみが付く。井戸の掘削・製作時に混入したものと考えられる。

472・473は井戸枠内の最下層の砂層から出土した土師器甕である。体部に張りはなく外面全体にハケ目を施す。

479～484は平瓦でいずれも井戸枠より上層から出土している。481は先端が欠損しているが欠損部付近が若干肥厚しており、軒平瓦の可能性もあるが詳細は不明である。482の凹面には布の綴じ合わせ痕が認められる。483は全体に扁平で、凸面には一部縄目叩きが残っている。

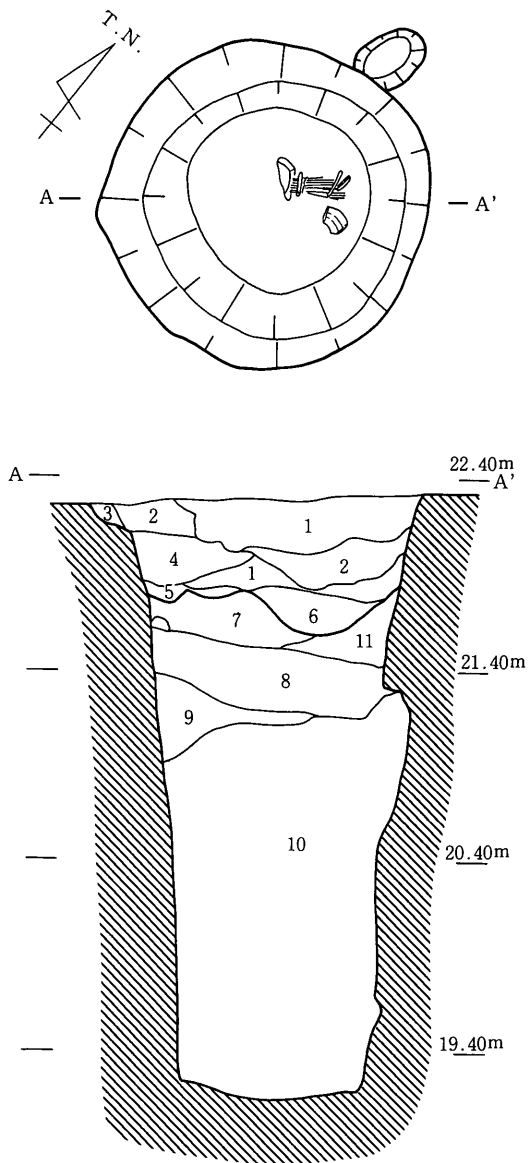
485～512は井戸枠の部材である。485は北東の、486は南西の、487は南東の、488は北西のそれぞれ縦隅木である。下半には横棧を入れるための方形のほぞ穴がある。488は先端を鋭利に削っている。492・498・504・510は横棧で丸太材を使用し先端を削り出す。508と509は側面に長方形のほぞ穴をあけて、その中に穴の2つあいた長方形の楔をはめ込んで2枚の板を連結している。493・494・499・502・505～507は建築部材を転用したものである。505は全面に鑿による加工痕が認められる。

477は井戸の掘削時の混入と考えられ、この井戸の上限のものである。472・473は最下層出土のものであるが、477と同時期のもので8世紀初頭と考えられる。一方井戸枠より上層の遺物は井戸埋没後に一括投棄されたものと考えられ、土師器皿に暗文を施すものがまだ見られることから下っても8世紀中頃のものと思われる。以上のことからこの井戸は8世紀前半代に機能していたものと考えられる。

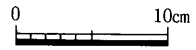
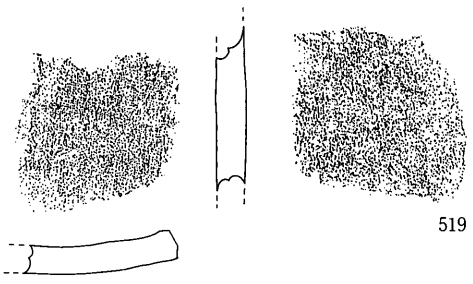
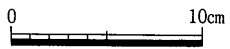
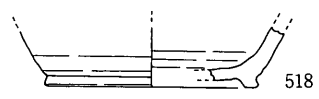
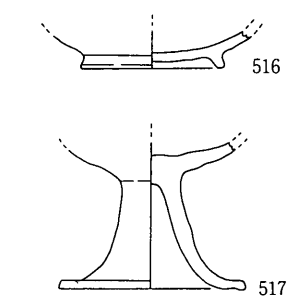
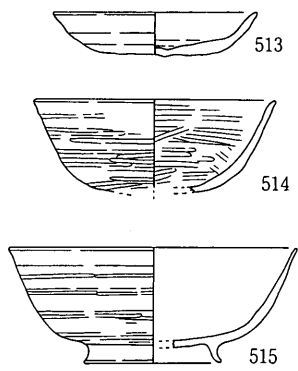
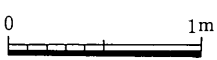
SE02（第479・480図，図版66・67）

E8区の西側中央部で検出した井戸である。平面形は直径1.75mの円形で、ほぼ垂直に掘込まれ深さは3.15mとなっている。検出面から50cm下で灰黄色砂層に到るが、井戸がここまで埋没した状態のままある期間井戸が機能していたものと考えられる。また底から2mほどは明黄色粘質土の単一層となっており、井戸を一気に埋めたものと思われる。井戸枠等の施設はなく素掘りのものとなっている。また井戸の最下層より薬束、桃の種、稲の粃が一塊にまとまって出土した。これとともに斎串が出土したのが注目される。

513～515は最下層から出土した土器である。514・515は黒色土器A類の椀である。515の内面は摩滅しているが両者とも体部にヘラミガキを施している。515の高台は端部付近で若干外反する。516～518は上層部から出土した土器である。519は下層出土の平瓦である。凸面はナデ、凹面には布目圧痕が認められる。520～522は最下層から出土した木製品



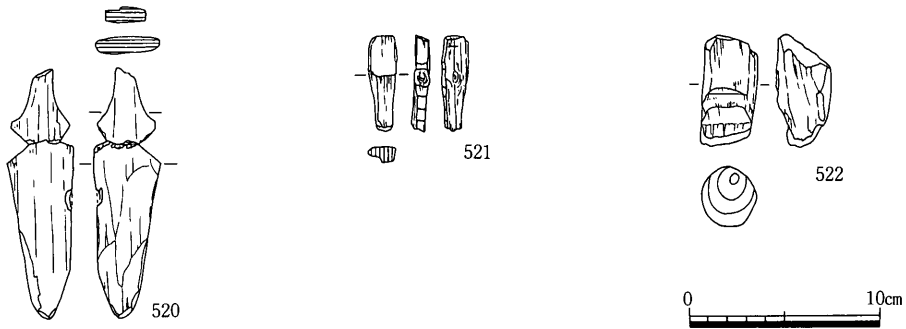
- 1. 暗灰褐色砂質土
- 2. 暗灰褐色砂混り粘質土
- 3. 暗黄灰色砂混り粘質土
- 4. 灰褐色砂質土
- 5. 明黄色粘土
- 6. 灰黄色砂
- 7. 灰黄色砂質土
- 8. 灰黄色粘土
- 9. 暗灰色砂混り粘質土
- 10. 明黄色粘質土
- 11. 1.+6.



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
513	土・杯	10.6	2.2	6.4	中・普	良好	淡赤橙	ナデ	ナデ		
514	黒A・碗	12.6			細・普	良好	黒・灰白	ミガキ	ナデ	暗文	
515	黒A・碗	15.0	5.8	7.0	細・普	不良	灰・淡橙	ミガキ	不明		
516	土・碗			7.5	中・普	良好	黒・浅黄橙	ナデ	不明		
517	須・高杯			9.8	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
518	須・壺			11.0	細・普	良好	暗灰	ケズリ・ナデ	ナデ		

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
519	平瓦	1.5	ナデ	布目瓦痕		6	中・多	灰白	良好		8.4

第479図 E区SE02平・断面図(1/40), 出土遺物(1)(1/4, 1/5)



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
520	斎串	12.8	3.1	0.8	板目		
521	用途不明品	4.9	1.5	0.8	柁目		
522	用途不明品	5.7	2.9	3.0	芯持		

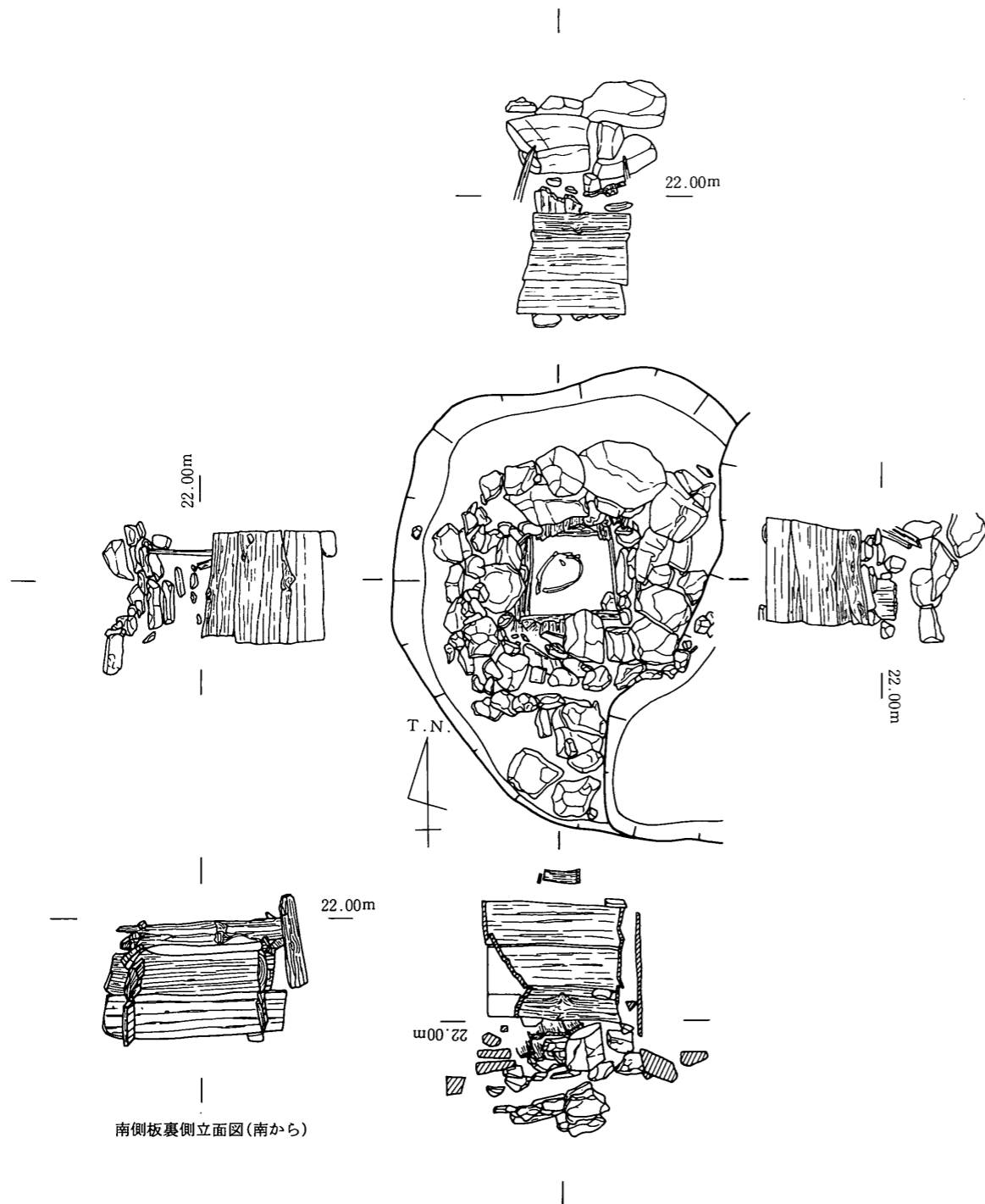
第480図 E区SE02出土遺物(2)(1/4)

である。520は先端部を剣先状に尖らせ、その上に両側面から抉りを入れている。抉りの上部は細く作り出している。両側面に抉りを施した大型の斎串の可能性が高いが、斎串であれば両側面は平行になるものが多いが、520は抉りの上部が細くなるので斎串とは断定出来ない。剣先状の部分を上部にして考えると鏃形とも考えられるが、鏃形であれば抉り部から先細りになる部分は茎と考えることができるが、鏃形に抉りを入れるものは認められない。以上のことから一応大型の斎串と考えたい。521は側面に加工を施しているが用途は不明である。522は丸太材を短く切り、両端部を段状と斜めに加工している。用途は不明である。

この井戸の底から藁束、桃の種、稲の粃とともに斎串が出土したが、これは井戸の掘削時の祭祀に係るものと思われ、井戸の底に人為的に置いたものである。井戸の時期は最下層出土の遺物より10世紀前後と考えられる。

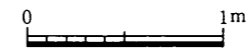
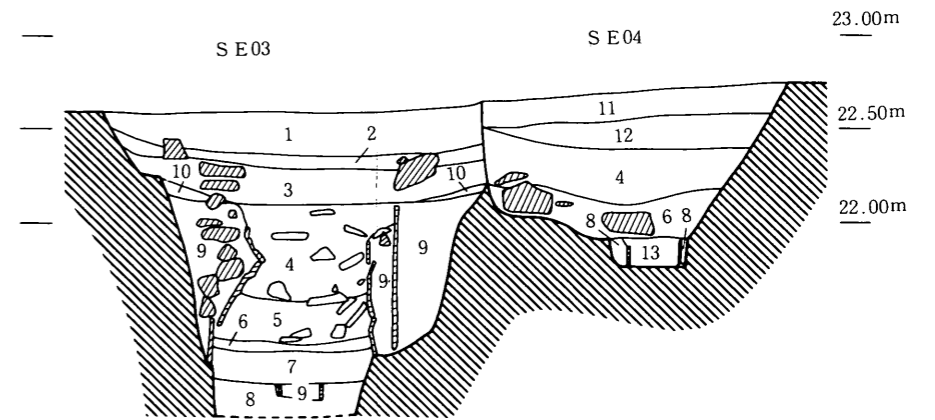
SE03 (第481~494図, 図版67~70)

E5区の北側の中央やや西寄りで見出した井戸である。SD19が埋没した後にその埋土を掘り込んで作られている。井戸の掘形は東側が後出する井戸の掘形によって壊されているため不明であるが、全体として円形に近いものになるものと思われる。掘形は南北方向で3m弱で東西方向は残存部分で2m弱となっている。井戸は上部を石組みによって構築し、下部に木によって井戸枠を作り底に円形曲物を据えるという作りになっている。石組みは北側の部分で掘形検出面で確認された。石組みは外幅で一辺1.5mの正方形に組み



南側板裏側立面図(南から)

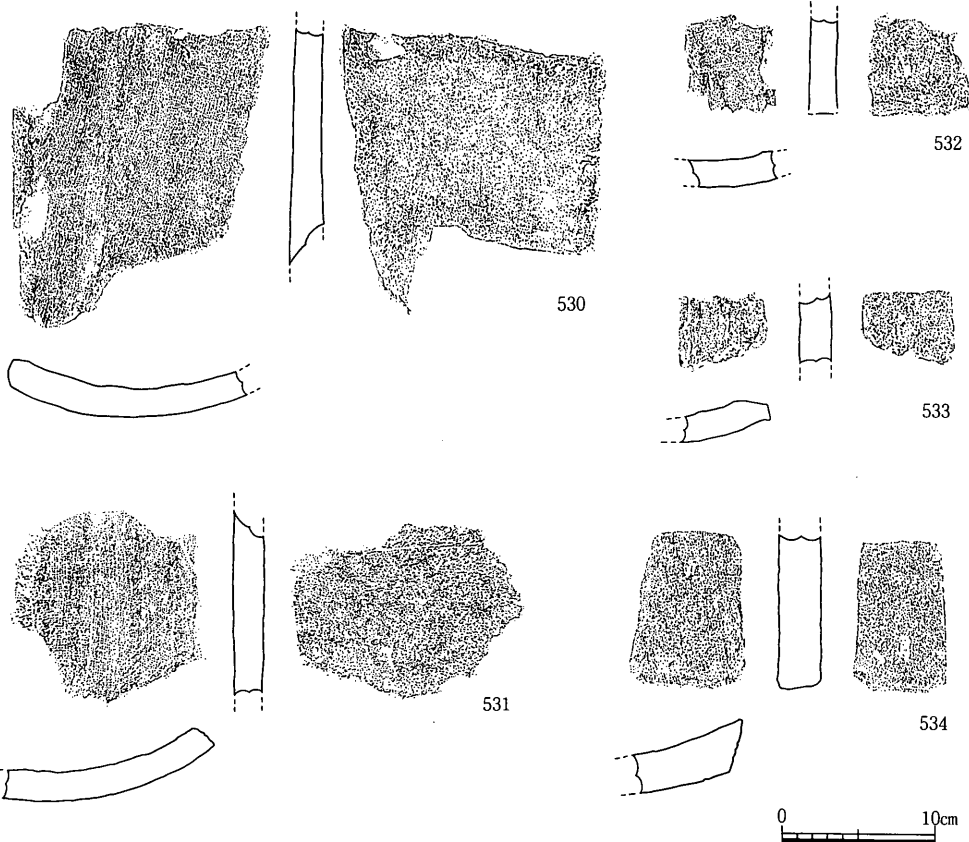
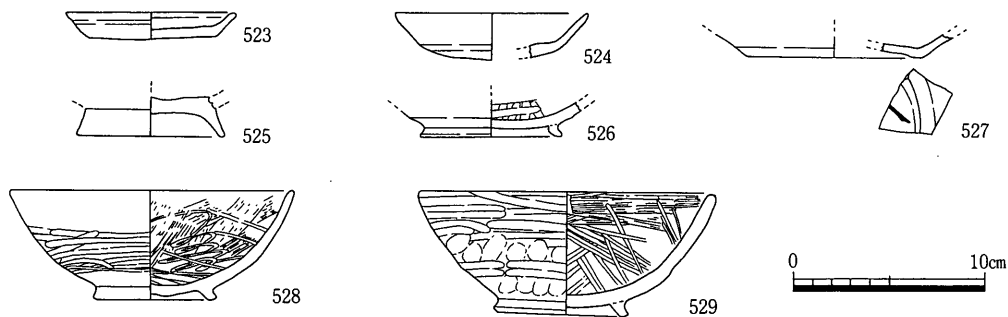
- | | |
|--------------------|-------------|
| 1. 黒褐色粘土 | 8. 灰色砂 |
| 2. 暗黄褐色粘土(固くしまる) | 9. 黒灰色粘土 |
| 3. 褐色粘土 | 10. 暗茶褐色粘土 |
| 4. 黒褐色粘土(粘性強い) | 11. 暗茶褐色粘質土 |
| 5. 暗灰色粘土 | 12. 暗灰色粘質土 |
| 6. 暗灰色砂質土 | 13. 暗灰褐色粘土 |
| 7. 暗灰色砂混り粘質土(植物含む) | |



第481図 E区SE03平・断面図, 井戸枠・石組立面図, 南側板裏側立面図(1/40)

ており、石組みの幅は50cmとなっている。北側と東側には40cmを超える大きな角礫を使用している。西側と南側は下部ほど板石が多くなっている。石は60cmほど積まれているが積み方は乱雑である。石組みの直下が木の井戸枠の上部にあたる。井戸枠は内側で50cm四方の正方形に組まれている。井戸枠は横幅1.0～1.1mの板の両側に抉りを入れてそれぞれを組合せて正方形の枠を作り、それを基本的に3段ほど積み上げている。高さは60～70cmになっている。北側板の裏側の北東と北西のコーナー部には縦方向に杭が認められたが、これは井戸枠が後ろに倒れないようにする支えと思われる。また東側板の裏側には板を縦方向に2枚据えていたが、これも井戸枠の支えと考えられる。これに対し西側板の裏側には礫を詰め込んで裏込めとしているが、この部分は礫が井戸枠を圧迫して井戸枠が一部崩壊している。井戸枠の側板の下部より10cmほど下で、井戸枠の中央よりやや北西に偏った場所で円形の曲物が1つ据えられていた。掘形の断面形は石組みの途中で東側が段になった後に直線的に掘削されているが、西側は緩くカーブしている。井戸枠の下端部で井戸枠の内部のみを掘削して湧水層である砂層に到っている。井戸枠の内部は大きく3層に分かれるが、上層と中層が粘性が強いのにに対し、曲物の上の下層部分は粘性は弱く葦の茎などの植物が混ざっていた。井戸枠内には転落した石が多数みられた。さらに最上部の石組みの下部には黄褐色の硬くしまった窯壁のような粘土が石組みの内側一面に堆積していた。これは井戸を埋めた時に井戸（あるいは井戸神）を封じ込める祭祀的な行為によるものかもしれない。井戸の埋土中から出土した遺物はあまり多くないが、井戸枠の裏側から出土した遺物は多かった。これはこの井戸が遺物が多量に出土したS D19を含む前段階の遺構の埋没後にそれらの遺構を切って構築されたために、井戸の掘削時に遺物が混入したためと考えられる。

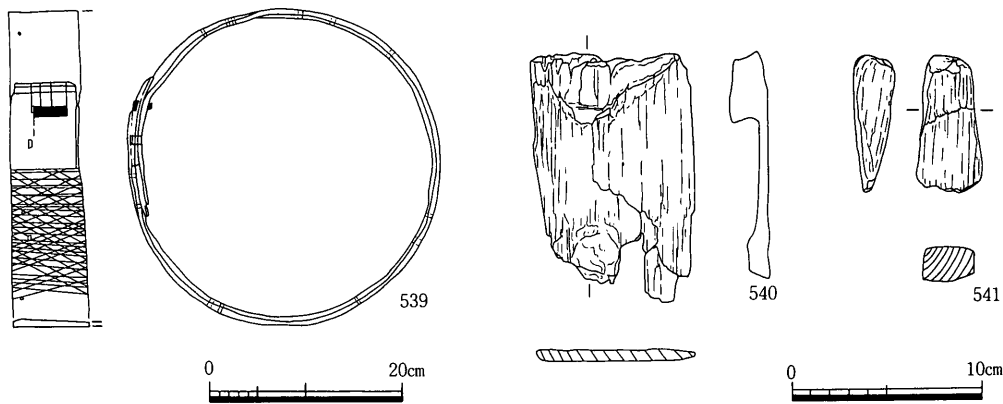
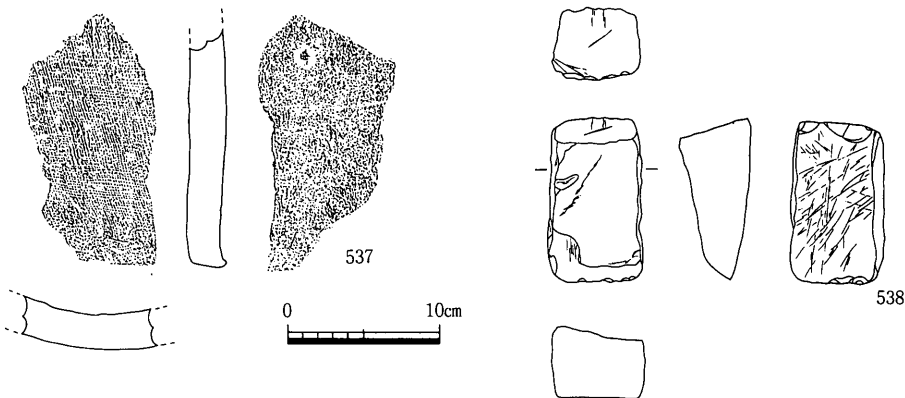
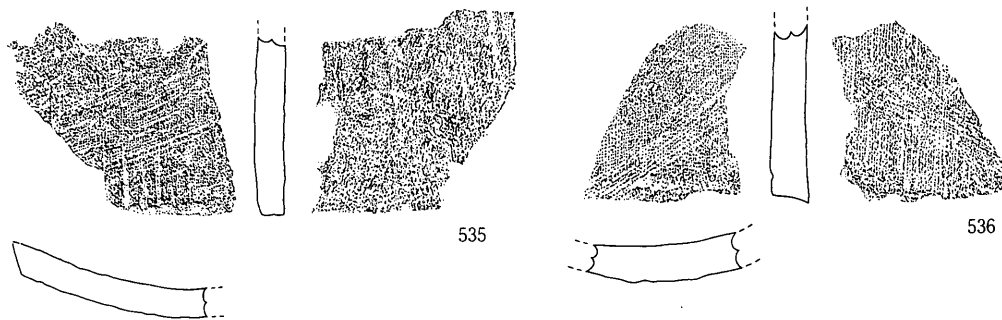
523～541は井戸枠内から出土した井戸に伴う遺物である。524・528は上層から出土したものである。528は黒色土器A類の椀である。体部は内湾して立ち上り、底部に外開きの断面方形の高台が付く。体部外面には幅広のヘラミガキを施し、内面はハケ目の後に暗文を施すが暗文は一部螺旋状になっている。525・529は中層から出土したものである。529は黒色土器A類の椀である。体部はほぼ直線的で中程に段がある。底部には外開きの断面方形の高台が付く。体部外面には幅広のヘラミガキを施し、内面には口縁部付近は横方向の、中位以下には格子状のヘラミガキを施している。523・527は曲物内から出土したものである。527は須恵器杯である。底部は上げ底になっており、外面に墨書が施されているが字は不明である。530・531・533・534・537は上層から出土した平瓦である。531・534



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
523	土・小皿	9.0	1.4	6.8	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り	
524	土・小皿	10.0	2.4	6.7	細・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		金雲母
525	土・杯	7.8			粗・普	良好	黄灰	ナデ	ナデ		
526	土・碗			7.4	中・普	良好	灰・暗灰	ナデ	ナデ	底へラ切り、暗文	
527	須・杯			9.1	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		黒母
528	黒A・碗	14.8	5.5	5.8	微・普	良好	黒・灰白	ナデ→ミガキ	ハケ目→ミガキ	内面ラセン状暗文	
529	黒A・碗	15.6	6.2	7.1	精緻	良好	灰黄～黒	ミガキ	ハケ目→ミガキ	内面格子状ミガキ	

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
530	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕	4		中・普	灰白	良好		15.0
531	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	1		粗・普	灰白	良好	凹面に系切り痕	12.1
532	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	6	中・普	灰白	良好		6.2
533	平瓦	1.9	細目叩き→板ナデ	布目圧痕→ナデ	3		中・普	灰白	良好		4.8
534	平瓦	2.8	ナデ	ナデ	5	6	精緻	灰	良好	一枚作り、凹面に系切り痕	10.1

第482図 E区SE03井戸枠内出土遺物(1)(1/4, 1/5)



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
535	平瓦	1.9	縄目叩き→板ナデ	布目圧痕	5	18	中・普	灰白	良好	一枚作り、凹面糸切り痕、模骨痕	11.3
536	平瓦	2.3	縄目叩き	布目圧痕	1	6	中・普	灰	良好	凹凸面に糸切り痕	11.3
537	平瓦	2.3	縄目叩き→ナデ	布目圧痕		1	中・普	灰白	不良		15.4

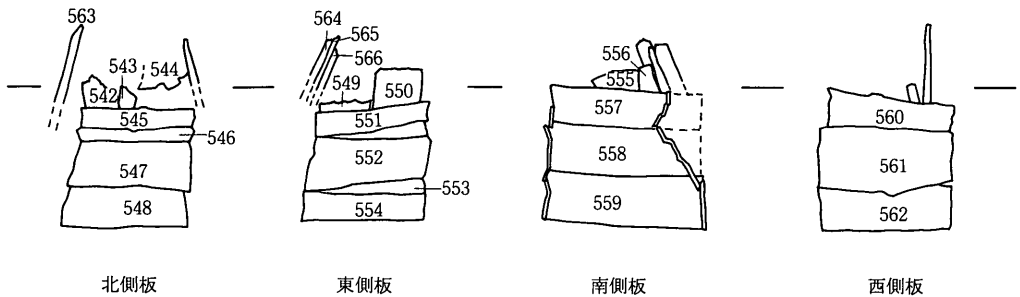
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
538	砥石	8.6	4.9	3.7	203.1	安山岩	擦痕が顕著に残る	

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
539	井戸内曲物	33.0	8.0	0.8	柵目		
540	加工痕ある木製品	13.0	8.4	2.1	柵目		
541	楔	7.1	3.4	1.8	柵目		

第483図 E区SE03井戸枠内出土遺物(2)(1/4, 1/5, 1/8)

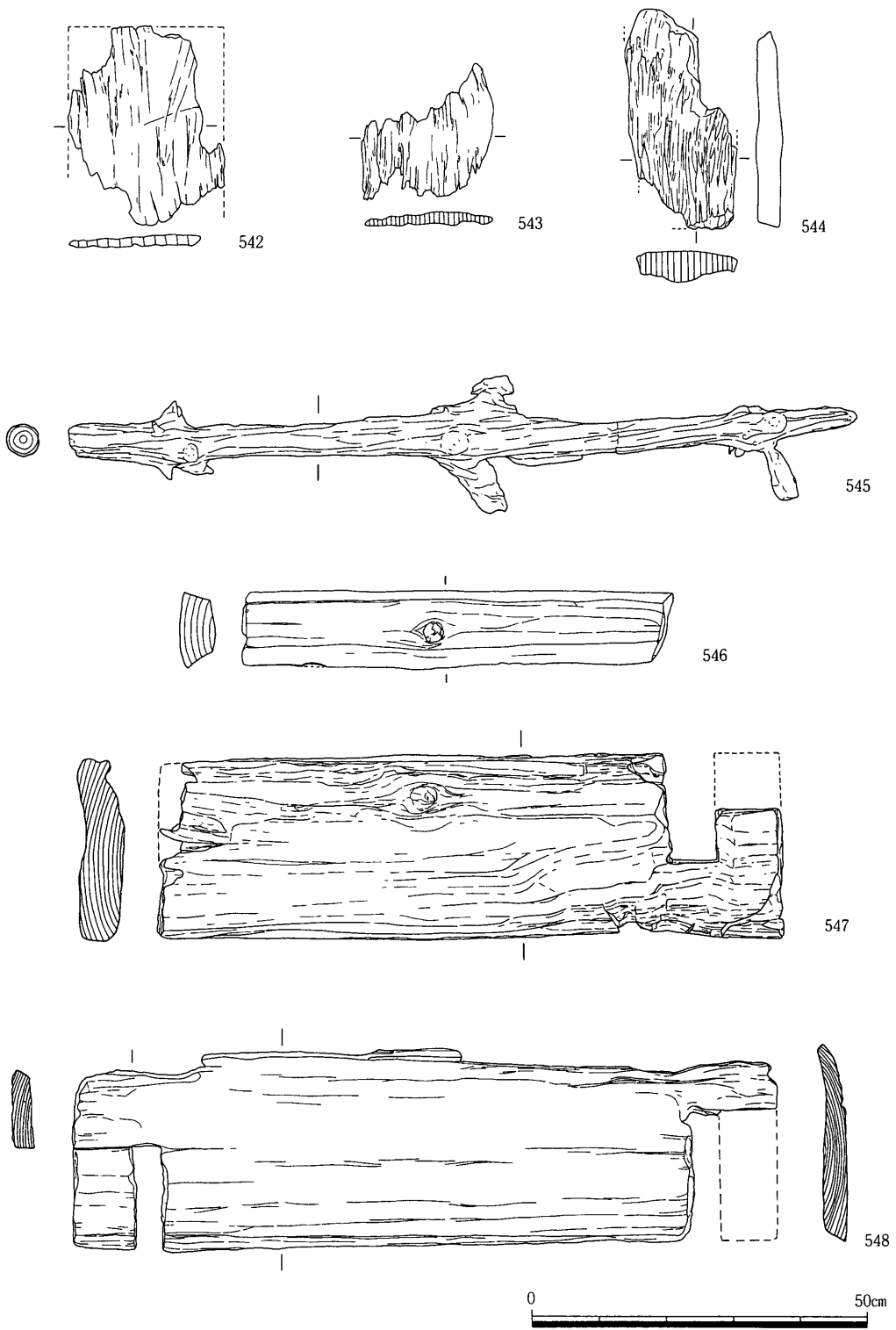
の凹面には糸切り痕が認められる。534は一枚作りによるものである。532・535・536は中層より出土したものである。535は一枚作りによるもので、凹面に糸切り痕と模骨痕が見られる。536は凹・凸面に糸切り痕が見られる。538は上層より出土した砥石である。上下2面を使用しており、上面は使用により面が斜めになっている。539は円形の曲物である。上部は欠損しており下部のみのものである。現存では1段に綴じられている。540は一面に抉りを入れているものである。541は井戸枠の北東コーナーの内側の下から2段目に施されていた楔である。平面形は撥形で先端を斜めに加工している。

542～566は井戸枠の部材である。552・554・558・559・560・561・562は横幅1.0～1.1m程で縦は20～30cmである。厚さは30～60cmと丈夫なものを使用している。いずれも両側に「コ」字形の抉りを作り、抉り同士を組み合わせる井戸枠を組み立てている。563・564は北側板の裏側の支えに使用していた杭で、両者とも片方の先端を鉛筆状に削り出している。

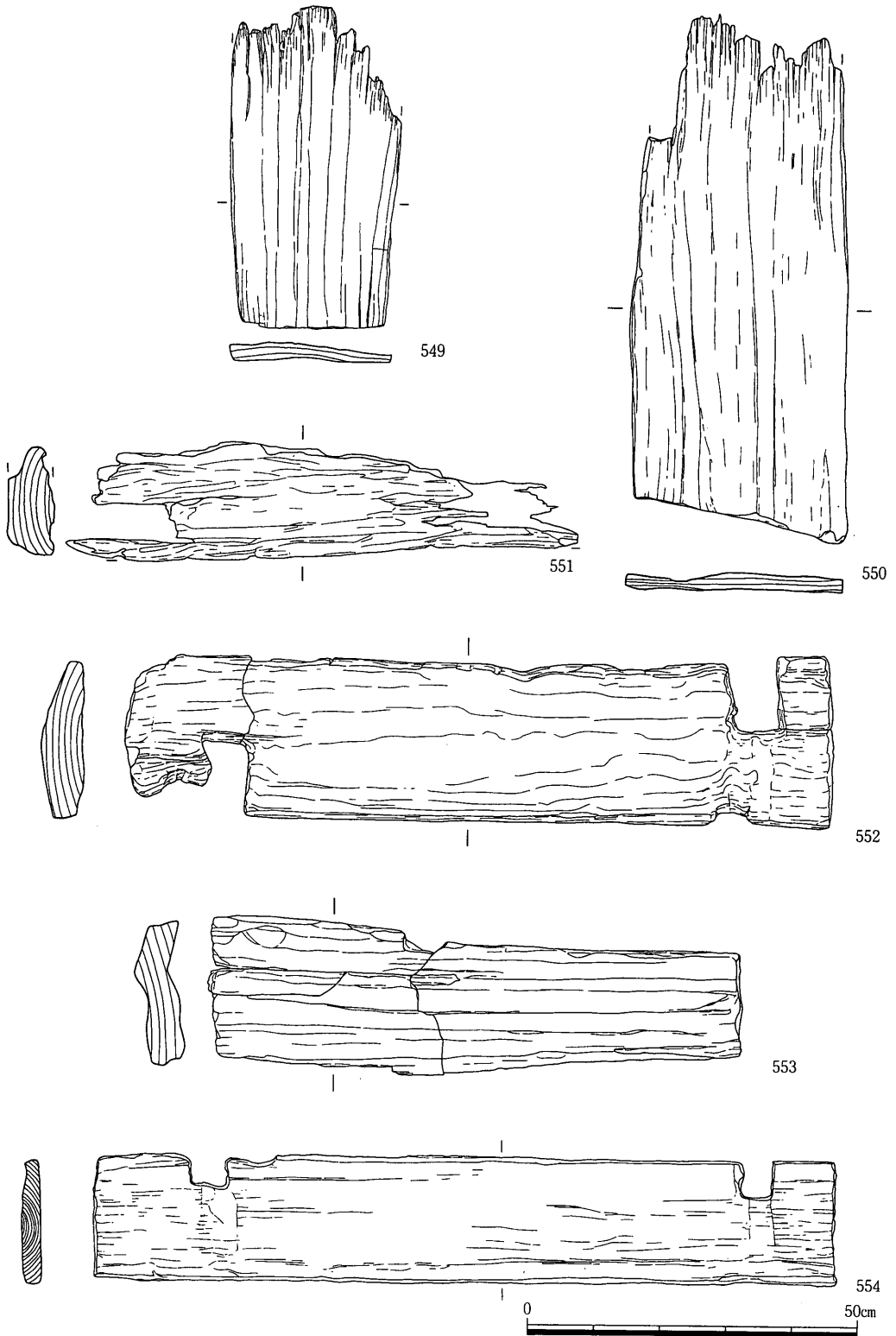


第484図 E区S E 03井戸枠模式図

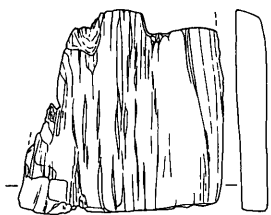
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
542	井戸枠	29.3	21.1	1.6	柱目		
543	井戸枠	16.0	19.3	1.9	柱目		
544	井戸枠	28.5	15.4	4.5	柱目		
545	井戸枠	117.5	20.0	5.6	芯持		
546	井戸枠	64.5	11.4	5.3	板目		
547	井戸枠	93.7	27.8	6.4	板目		
548	井戸枠	105.6	29.3	3.6	板目		
549	井戸枠	47.3	25.8	2.6	板目		
550	井戸枠	72.8	33.0	2.3	板目		
551	井戸枠	78.1	17.6	7.1	板目		
552	井戸枠	108.0	24.1	6.5	板目		
553	井戸枠	81.2	21.9	5.5	板目		
554	井戸枠	112.9	19.5	3.3	板目		
555	井戸枠	25.5	26.0	5.5	板目		
556	井戸枠	11.2	12.5	4.8	芯持		
557	井戸枠	91.8	16.6	6.9	芯持		
558	井戸枠	96.5	28.8	4.8	板目		
559	井戸枠	104.3	27.0	3.7	柱目		
560	井戸枠	113.0	24.2	8.3	板目		
561	井戸枠	112.1	20.5	5.8	板目		
562	井戸枠	117.6	18.5	3.5	板目		
563	井戸枠	94.9	7.3	6.2	板目		
564	井戸枠	90.2	7.9	6.4	板目		
565	井戸枠	56.0	15.6	9.4	芯持		
566	井戸枠	46.3	10.5	2.8	柱目		



第485图 E区SE03井戸枿(1)(1/10)



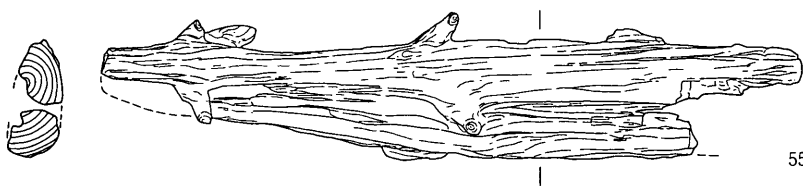
第486图 E区SE03井戸杵(2)(1/10)



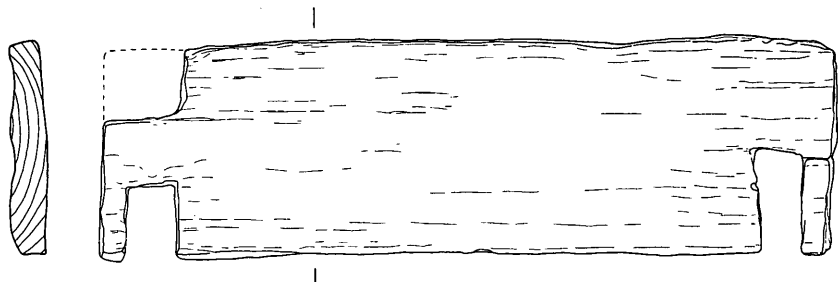
555



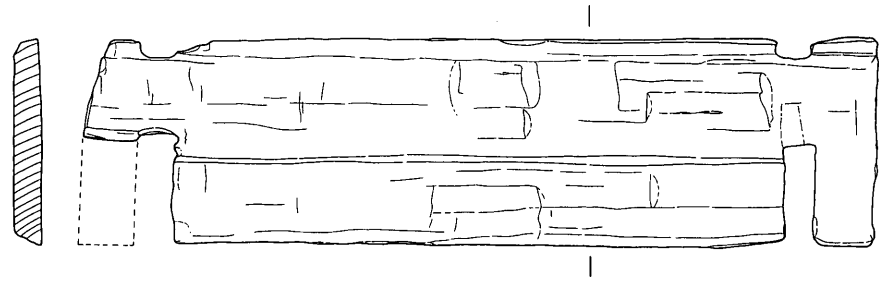
556



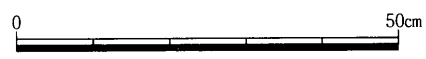
557



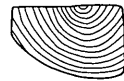
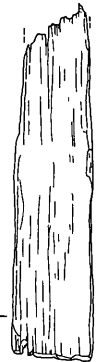
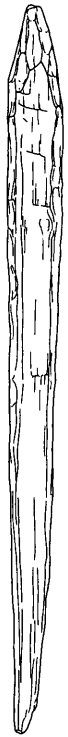
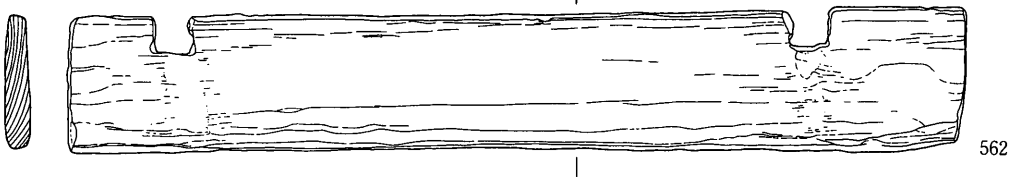
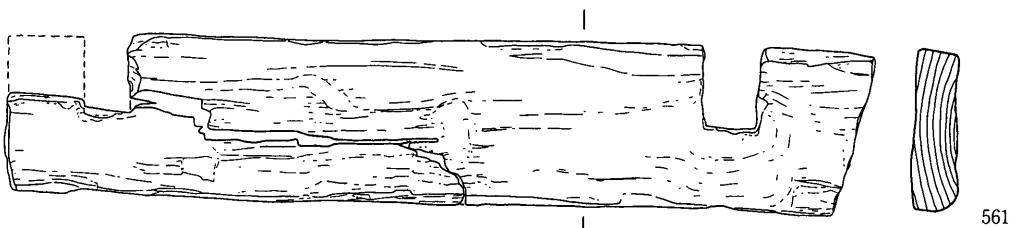
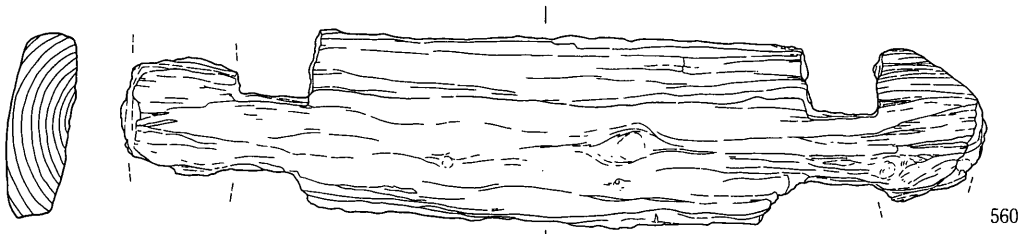
558



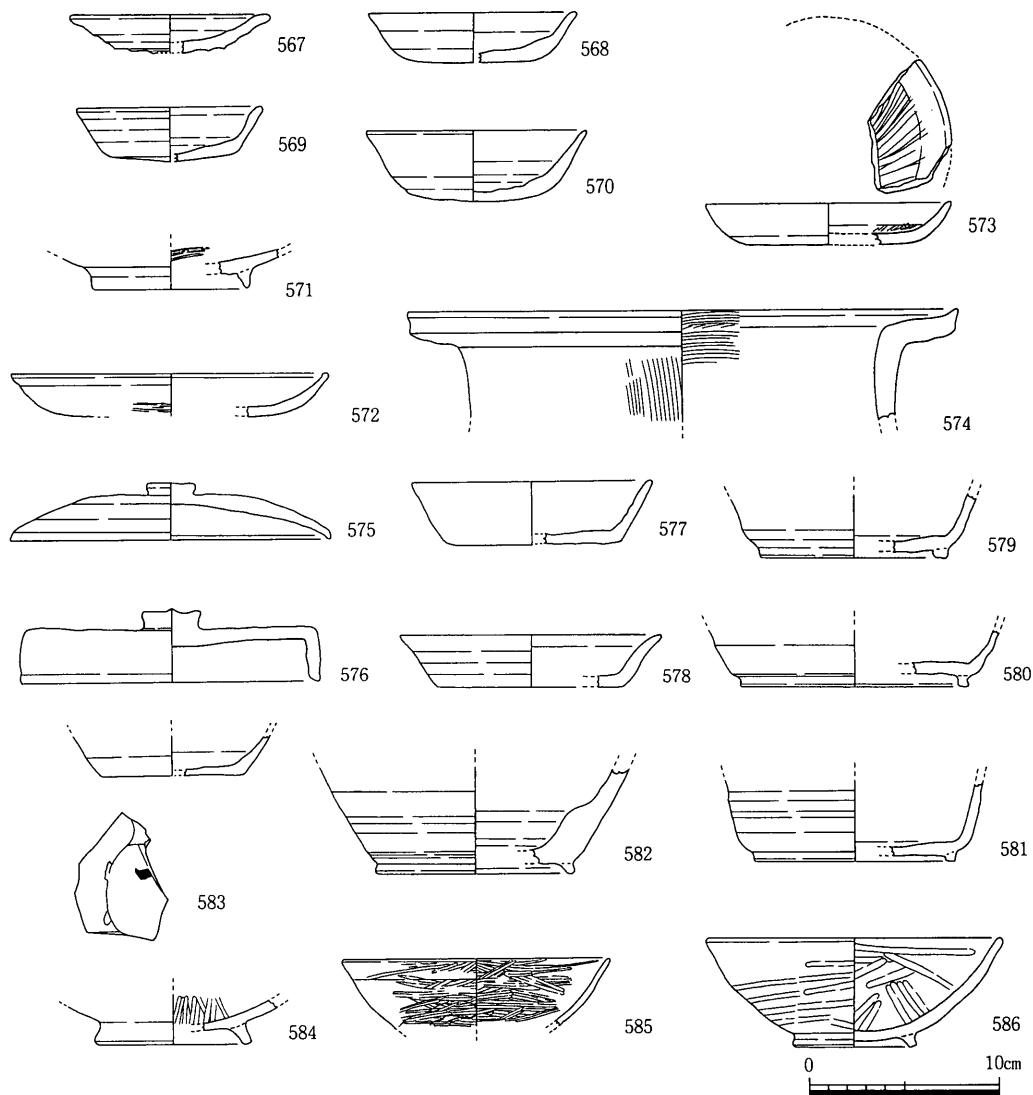
559



第487图 E区SE03井戸枠(3)(1/10)

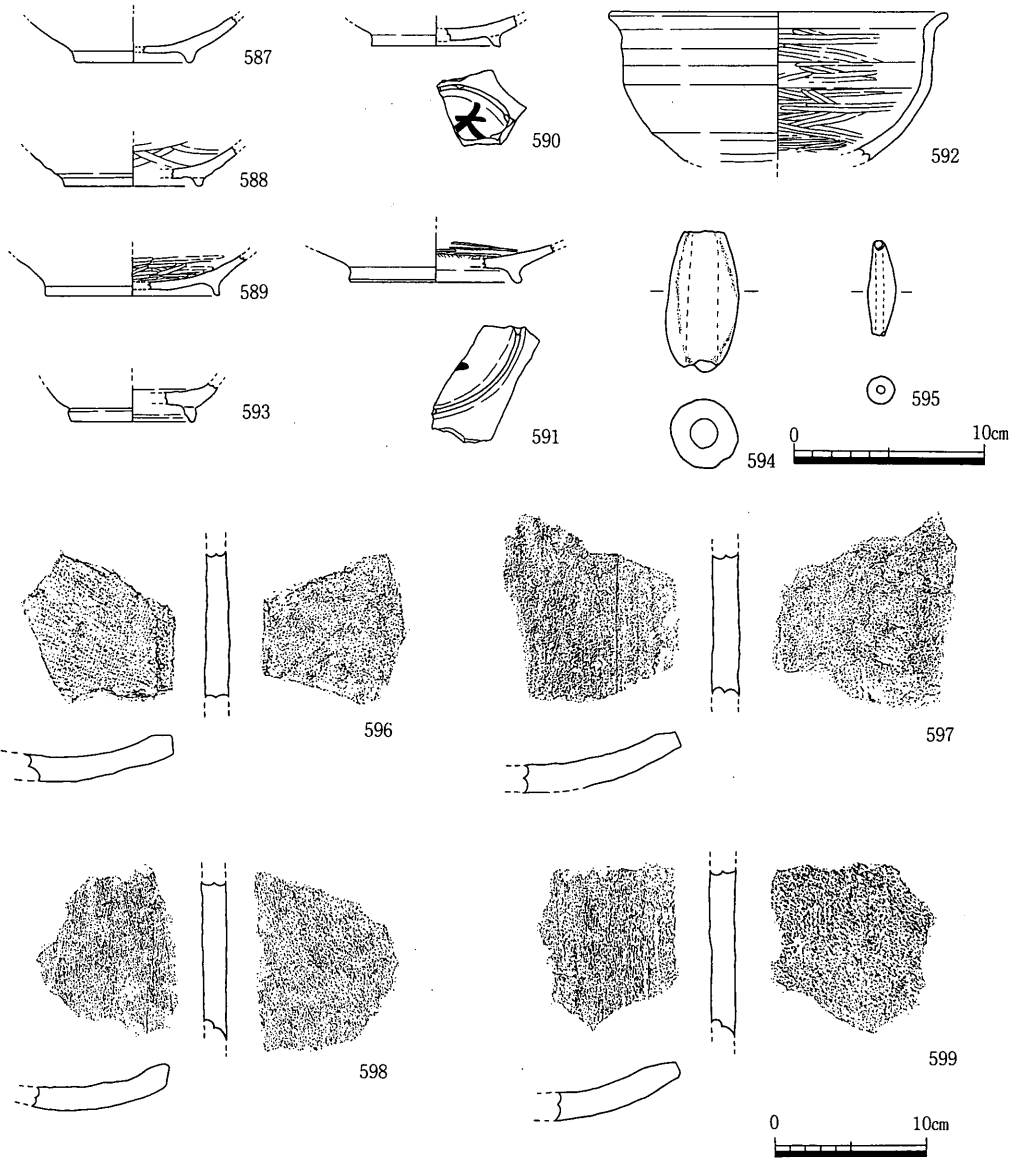


第488图 E区SE03井戸枿(4)(1/10)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
567	土・小皿	10.6	2.0	5.8	細・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り、口縁部煤	金曇母
568	土・杯	11.0	2.5	8.2	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	口縁一部に煤付着	
569	土・杯	9.6	2.8	6.3	中・普	良好	褐灰・明褐灰	ナデ	ナデ		
570	土・杯	11.4	3.6	7.4	精緻	良好	赤橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	金曇母
571	土・碗			8.1	粗・普	良好	灰	ナデ	ミガキ		金曇母
572	土・皿	16.8	2.3	12.2	精緻	良好	橙	ミガキ・ケズリ	ナデ	両面に赤色顔料	
573	土・皿	12.8	2.0	8.5	細・普	良好	橙	ナデ	ナデ・ミガキ	暗文	
574	土・鉢	29.0			粗・普	良好	黄灰	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		
575	須・杯蓋	16.8	2.9		粗・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
576	須・蓋	15.6	3.9		精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
577	須・杯	12.6	3.3	9.4	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底へラ切り	
578	須・杯	13.8	2.8	9.8	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ		
579	須・杯			9.7	細・普	良好	暗灰	ナデ	ナデ		
580	須・杯			10.9	粗・普	不良	暗灰黄・褐灰	ナデ	ナデ		
581	須・杯			10.5	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
582	須・盃			10.5	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	器壁に火膨れ有り	
583	須・杯			7.4	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	曇母
584	黒A・碗			8.2	中・普	良好	黒・灰白	ナデ	ミガキ		
585	黒A・碗	14.0			精緻	良好	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ		
586	黒A・碗	15.6	5.7	6.4	微・普	良好	黒・灰白	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	幅広のミガキ	

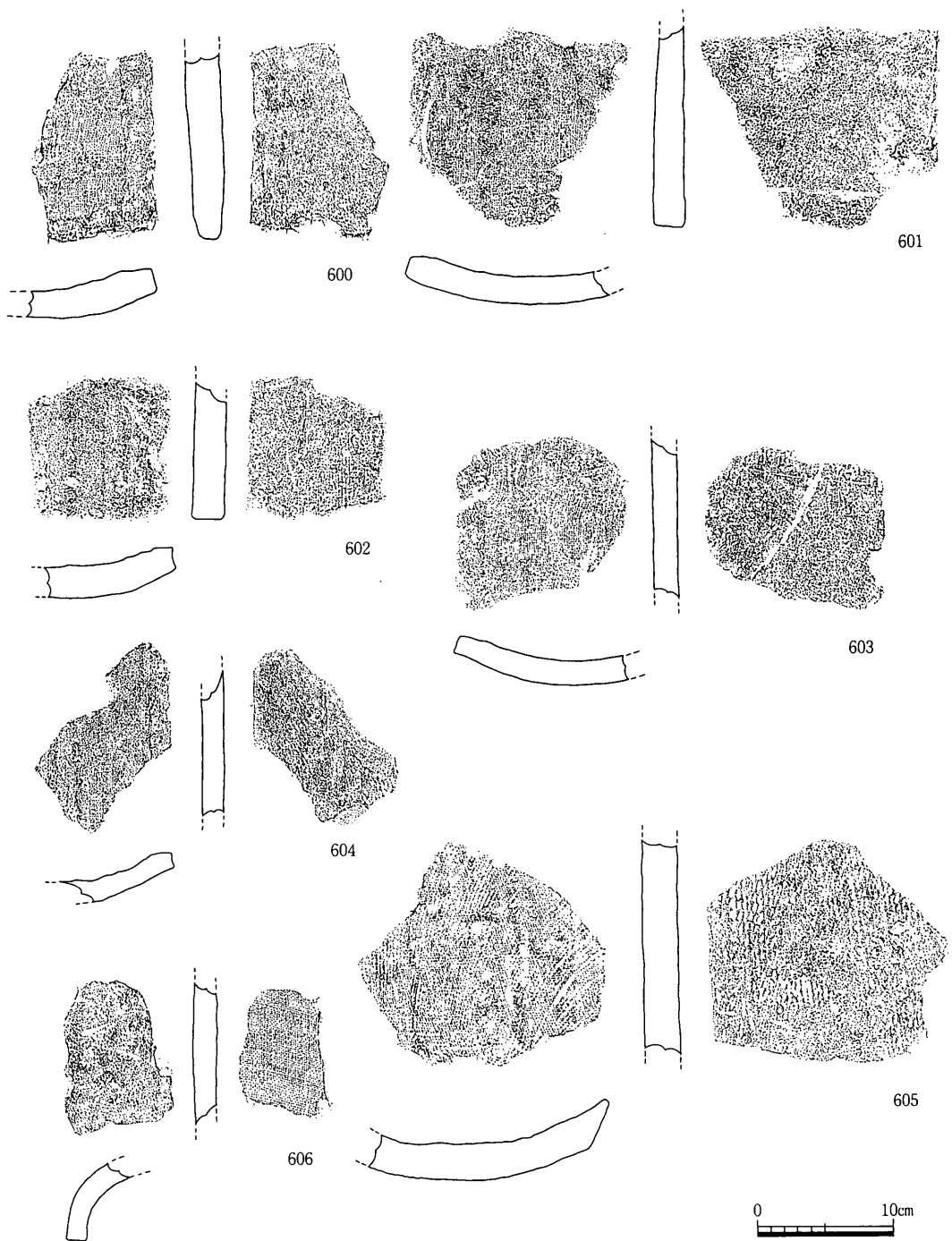
第489図 E区SE03出土遺物(1)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
587	黒A・碗			6.0	細・普	良好	黒・浅黄橙	ナデ	ナデ		
588	黒A・碗			7.4	中・普	良好	黒褐・灰黄	ナデ	ナデ・ミガキ	暗文	
589	黒A・碗			9.2	微・普	良好	黒褐・灰黄	ナデ	ミガキ	底へラ切り	金雲母
590	黒A・碗			6.8	精緻	良好	黒・黄灰	ナデ	ミガキ		墨母
591	黒A・碗			8.9	精緻	良好	黒・灰白	ナデ	ミガキ		墨母
592	黒A・鉢	17.4			粗・普	良好	黒・灰白	ナデ	ナデ・ミガキ		
593	緑・碗			6.4	微・少	良好	緑	ナデ	ナデ	高台内側に段	
594	土鏝	短軸3.6	長軸7.1		粗・多	良好	にぶい黄・橙	ナデ	不明		
595	土鏝	短軸1.5	長軸4.8		細・普	良好	灰	ナデ	不明		

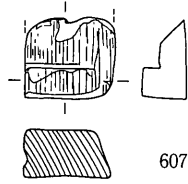
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
596	平瓦	1.5	ナデ	布目圧痕	3		中・普	灰白・灰	良好	凹面に糸切り痕	9.2
597	平瓦	1.8	縄目叩き→板ナデ	布目圧痕→板ナデ	3		粗・普	灰	良好		9.2
598	平瓦	1.5	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	8		粗・普	灰	良好		10.5
599	平瓦	1.9	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	1		粗・普	黒	不良		10.5

第490図 E区S E 03出土遺物(2)(1/4, 1/5)

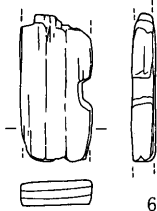


遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
600	平瓦	2.4	ナデ	布目圧痕	3	1 8	粗・普通	灰白	良好	一枚作り	13.5
601	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕→ナデ	3	1 6	粗・普通	灰白	良好		14.7
602	平瓦	2.4	格子目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	3	1 6	粗・普通	灰白	良好	正格子	10.0
603	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	3		粗・普通	灰白	良好		11.0
604	平瓦	1.6	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	1		中・普通	灰白	良好		10.3
605	平瓦	1.6	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	7		中・普通	灰白	良好	一枚作り・凹面に糸切り痕	15.3
606	丸瓦	1.7	ナデ	布目圧痕	1	1	中・普通	灰白	良好		10.5

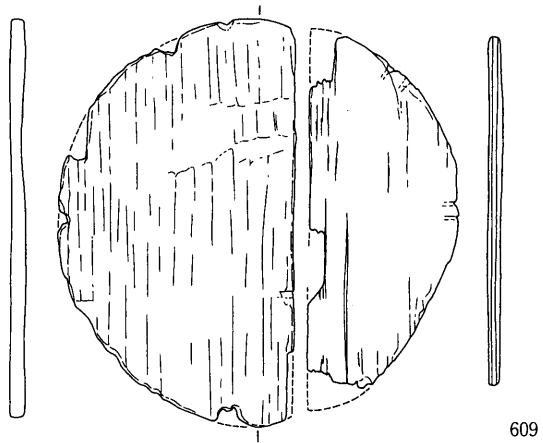
第491図 E区S E 03出土遺物(3)(1/5)



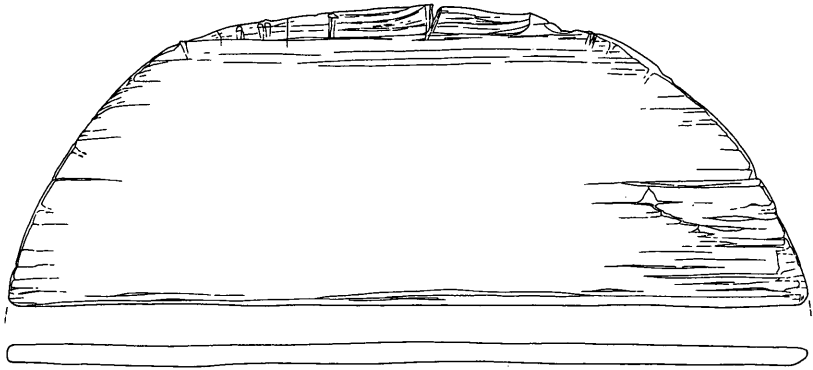
607



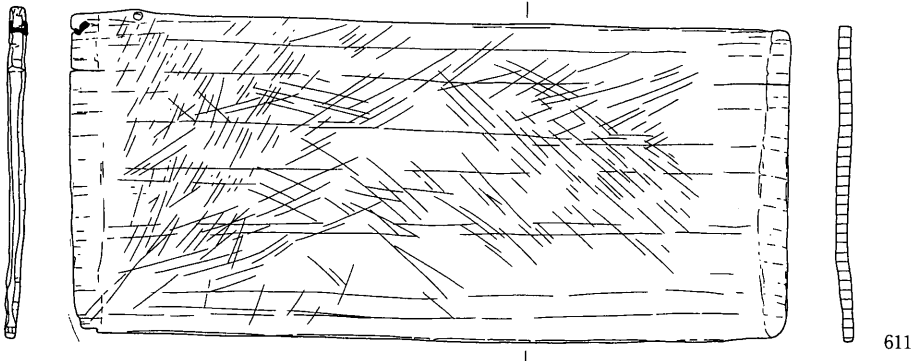
608



609



610



611

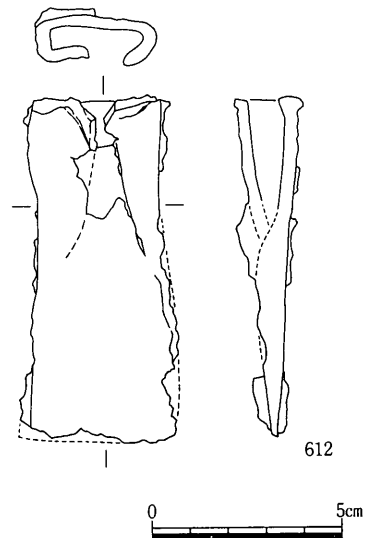


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法的特徴	備考
607	部材	4.7	4.8	2.5	柁目		
608	部材 (火鑽板?)	7.6	3.8	1.3	板目		
609	曲物底板	21.0	21.0	0.8	板目		
610	曲物底板	41.9	15.6	1.1	柁目?		
611	容器底板	37.3	16.9	1.0	柁目		

第492図 E区S E 03出土遺物(4)(1/4)

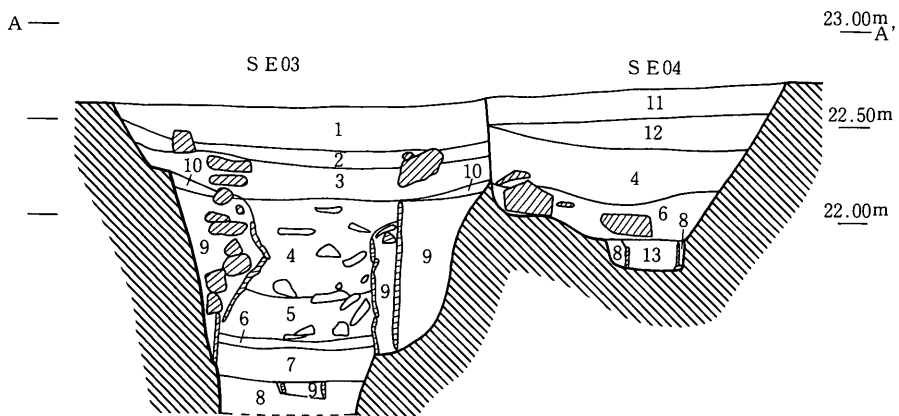
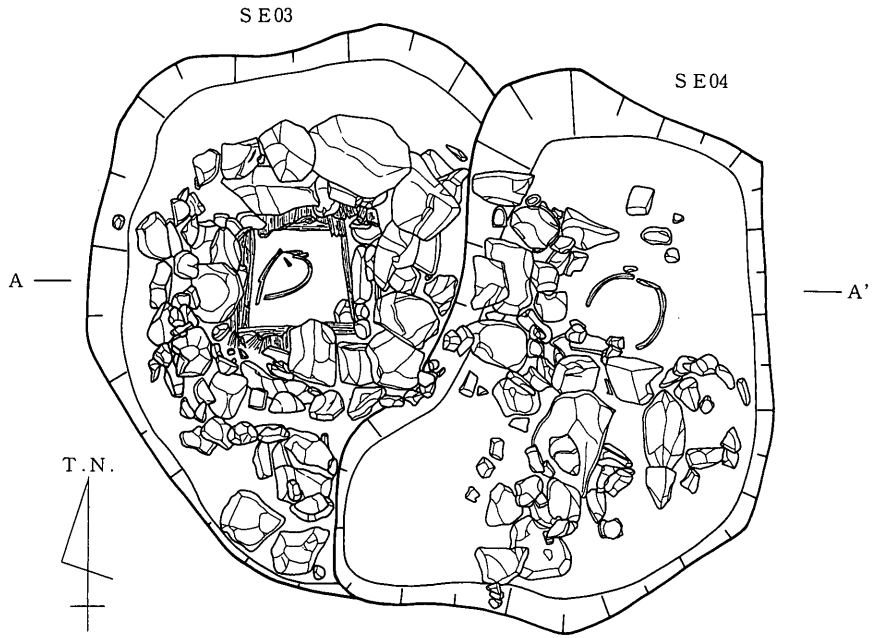
567～612は井戸掘削時に混入したと考えられる遺物で、井戸枠の裏側の裏込め部分から出土したものである。567は体部にナデの際の稜線が明瞭に残る。569は口縁部端部をナデて内面に平坦に近い面をもつ。573は内面に1段の放射状暗文を施している。576は須恵器の蓋で天井部は平坦で直角に屈曲して端部に到る。口縁部端部は内側に斜めの面をもつ。582は須恵器壺で体部下半は大きく肥厚しており、高台は小さめである。583は須恵器杯で底部に墨書が施されているが字は不明である。585は黒色土器A類の椀で、体部内・外面にヘラミガキを丁寧に施している。590は黒色土器A類の椀で、底部外面に「大」と書かれた墨書が施されている。591も黒色土器A類の椀で、底部外面に墨書が施されているが字は不明である。592は黒色土器A類の鉢である。口縁部は斜め上方に短く立ち上り、体部内面には丁寧にヘラミガキを施している。596～605は平瓦である。596は凹面に糸切り痕が残る。597～599は凸面に縄目叩きを施したのちにナデている。602は凸面に正格子叩きを施した後にナデている。605は凸面に縄目叩きを施し、凹面には糸切り痕が残る。一枚作りによるものである。606は丸瓦である。607～611は木器である。607は一端を段に削り残し、反対側を斜めに削っている。楔のような部材と思われる。608は片方の側辺に「コ」字の挟りが入るものである。609・610は円形の曲物容器の底である。611は長方形の容器の底である。両側縁に側板と綴じ合わせた痕跡が見られる。全体に使用時の傷と見られる擦痕がある。612は井戸枠の南東コーナー部の裏側から出土した鉄斧である。全長は9.1cmで、刃部幅は半分ほど欠損しているものの4.8cmである。袋部は長方形に近く、折り返し部は斜めになっており開いている。袋部の幅は3.4cm、高さは内側で8mmとなっている。刃部は片面を研ぎ出している。井戸枠の製作に使用したものかも知れない。

以上のことからこの井戸の年代は井戸枠内出土遺物の年代観から11世紀前半に掘削され、11世紀後半～末頃に廃棄されたものと考えられる。



遺物番号	材質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	形態・手法の特徴	備考
612	鉄	鉄斧	9.1	3.9	2.0	79.3		

第493図 E区SE03出土遺物(5)(1/2)



- | | |
|--------------------|-------------|
| 1. 黒褐色粘土 | 8. 灰色砂 |
| 2. 暗黄褐色粘土(固くしまる) | 9. 黒灰色粘土 |
| 3. 褐色粘土 | 10. 暗茶褐色粘質土 |
| 4. 黒褐色粘土(粘性強い) | 11. 暗茶褐色粘質土 |
| 5. 暗灰色粘土 | 12. 暗灰色粘質土 |
| 6. 暗灰色砂質土 | 13. 暗灰褐色粘土 |
| 7. 暗灰色砂混り粘質土(植物含む) | |



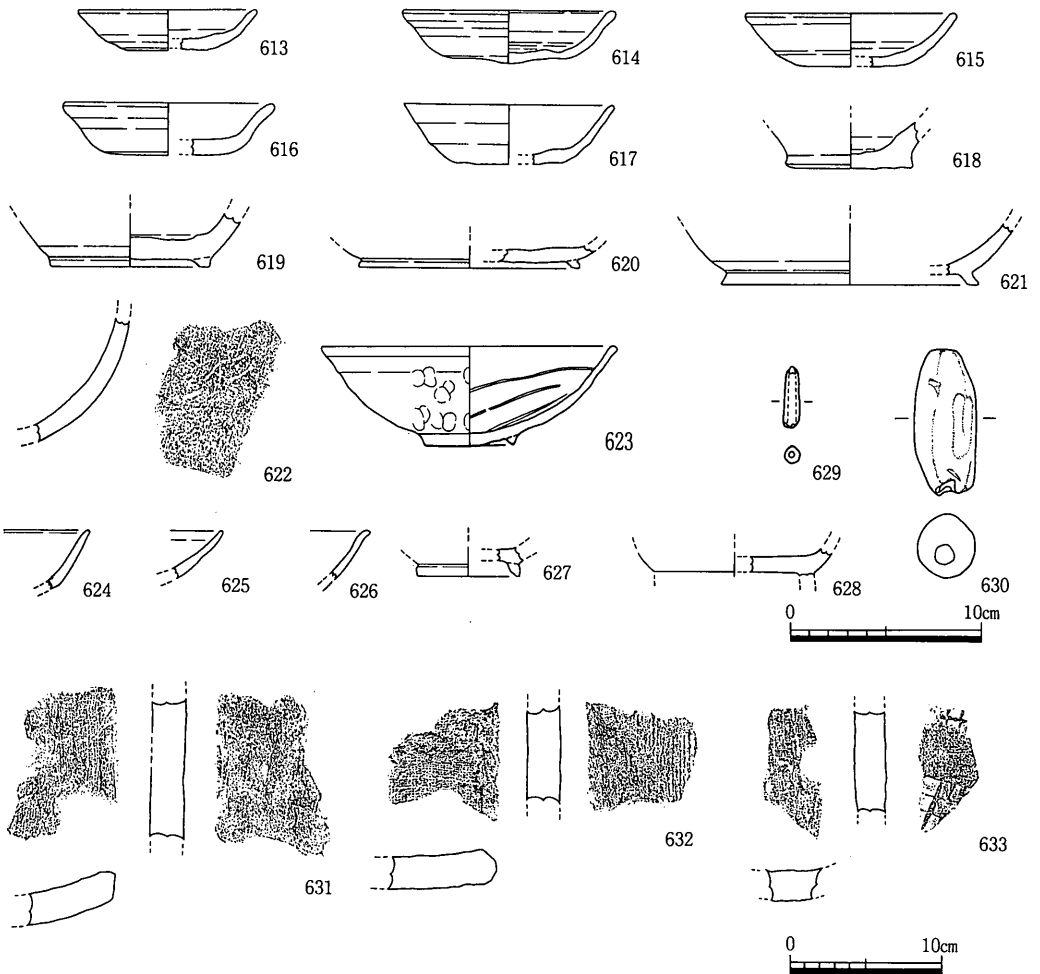
第494図 E区SE03・04平・断面図(1/40)

SE04 (第494～497図, 図版67・69)

E5区の北側の中央やや西寄りで検出した井戸で、SE03の東に隣接し掘形はSE03の東側の掘形を壊している。掘形の平面形は不整形で長楕円形の南西側が突出している形である。掘形は南北2.9m, 東西1.6～2.2mとなっている。石組みの井戸であるがその大半はすでに壊されており、北側と東側の石はほとんど残っていない。南側には倒壊して散乱した石が広がっている。石組みが残っている西側と南側から考えると、石組みは本来1辺1.2mの正方形であったと考えられる。内側に1辺60cmの正方形の空間を残して石を組み、その中に円形の曲物を据えている。石組みは現存で高さ30cmほどで15～30cmの塊石を1～2段積み上げているのみである。検出面から80cm下で曲物に到る。井戸の底のレベルはSE03に比べ高くなっている。井戸枠内には曲物の他に施設はなく、石が多数転落していた。埋土は石組みの残存部の上部が粘性の強い黒褐色粘土となっており、曲物の内部も暗灰褐色粘土となっていた。

613～618は土師器杯である。613は体部にナデによる稜線が顕著である。614は底部にヘラ切りの後に板状圧痕を施す。616の体部は外反, 617の体部は直線的になる。618は底部が高台状に突出し、底部外面は糸切りとなっている。622は須恵器壺の体部片であるが、外面にヘラ記号が見られる。623は瓦器碗である。体部は浅めに開き、口縁部端部は若干肥厚している。体部外面には指頭圧痕が多数みられ、内面は摩滅しているものの暗文が少々見られる。底部には断面三角形の小さな高台が付いているが底部は接地している。624～628は緑釉陶器碗である。624・626は口縁部のみ破片であるが、端部はやや外反している。627は高台の内側に段が付く。628は削出し高台となっており、底部外面は糸切りとなっている。631～638は平瓦である。633・634は凸面に正格子叩きを施しているが、叩きと叩きの間には間隔がある。635は凹・凸面に糸切り痕が認められる。凸面には縄目叩きを2方向から重ねている。639～641は丸瓦で641は玉縁式のものである。642は井戸の底で出土した木製の曲物である。欠損しているものの直径は37cmに復元出来る。綴じ合わせは樺皮紐で2列, 2段に綴じている。

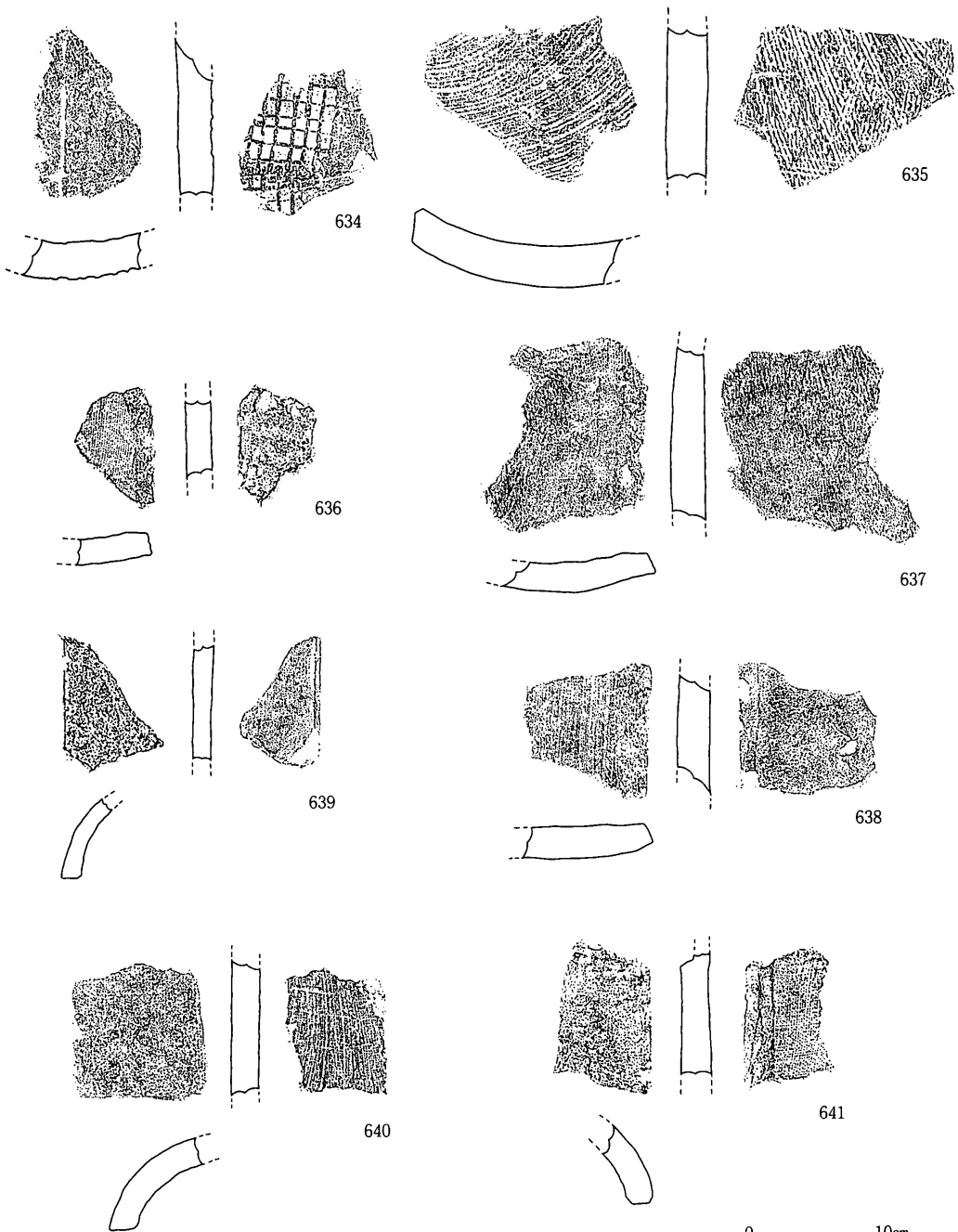
SE04は時期的に先行する遺構を壊しているため、古い時期の遺物を含んでいる。SE03を切っているため、上限はSE03の下限の11世紀末と考えられる。SE04の下限を示す遺物は623の遺物である。しかしこの遺物は井戸枠内の出土ではなく、石組みが南側に倒壊している部分から出土している。このことは井戸廃棄後のある時期に掘り返したために石組みが散乱したとも考えられるため、623が直接この井戸に伴うかは確証出来ないが、



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
613	土・杯	6.4	2.0	5.0	中・普	良好	明褐	ナデ	ナデ	底へラ切り	
614	土・杯	11.0	2.7	7.0	中・普	良好	淡橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
615	土・杯	11.0	2.7	3.9	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
616	土・杯	11.2	2.6	6.8	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へラ切り	
617	土・杯	11.2	3.1	6.6	中・普	良好	淡橙・浅黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り	
618	土・杯			6.1	中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	底系切り	金罌母
619	須・壺			8.4	微・普	良好	灰	ケズリ	ナデ		
620	須・杯			11.4	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
621	須・壺			13.5	粗・普	良好	灰	ナデ	ナデ	外面に釉	
622	須・壺				中・普	良好	青灰	ナデ	ナデ		へラ記号
623	瓦・碗	15.6	4.9	4.8	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	暗文	和泉型
624	緑・碗				精緻	良好	灰黄	ナデ	ナデ	見込み部に沈線1条	
625	緑・碗				精緻	良好	浅黄	ナデ	ナデ	釉：浅黄→灰オリブ	
626	緑・碗				細・少	良好	浅黄	ナデ	ナデ	釉：黄緑	
627	緑・碗			5.4	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	高台内側に段 釉：緑	近江型
628	緑・碗			8.4	精緻	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ	底系切り、削出し高台	釉：黄緑、京都産
629	土・鏝	短軸0.8	長軸3.1		中・普	良好	灰黄	ナデ	不明		
630	土・鏝	短軸3.3	長軸7.2		粗・普	良好	灰黄	ナデ	不明	指押さえとナデの成形	

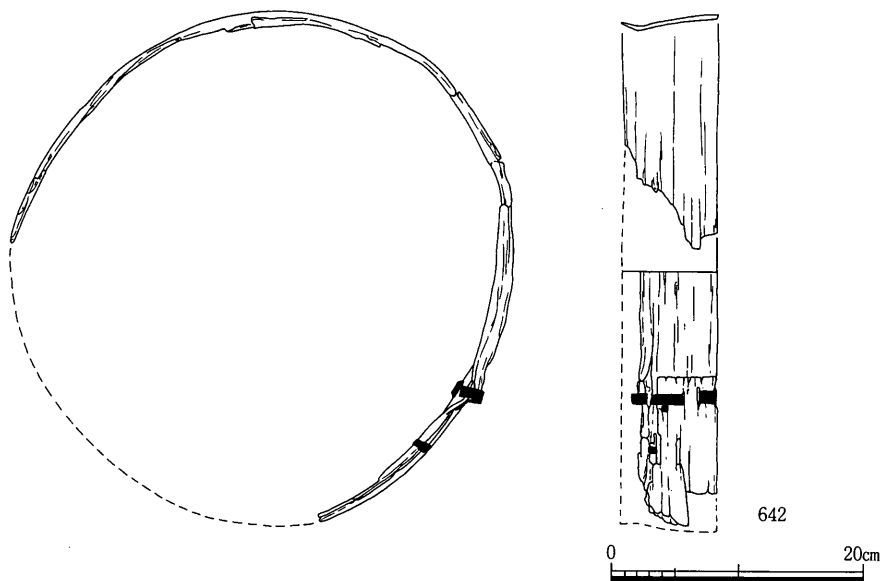
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
631	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕→ナデ		8	中・普	灰白	良好		9.3
632	平瓦	2.2	縄目叩き→ナデ	布目圧痕		6	中・普	灰黄	不良		6.5
633	平瓦	2.0	格子目叩き	布目圧痕			中・普	灰白	良好	正格子	6.7

第495図 E区SE04出土遺物(1)(1/4, 1/5)



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
634	平瓦	2.5	格子目叩き	布目圧痕→ナデ			中・普通	灰白	良好	正格子	11.0
635	平瓦	2.9	縄目叩き	布目圧痕	2		中・普通	灰白	良好	一枚作り、凹凸面に糸切り痕	10.6
636	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	8		中・普通	灰白・灰	良好		5.5
637	平瓦	2.2	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	8		粗・普通	灰白	良好		11.5
638	平瓦	2.3	ナデ	布目圧痕→ナデ	1		中・普通	灰白・灰	良好		7.4
639	丸瓦	1.2	ナデ	布目圧痕	1	2	粗・普通	灰	良好		8.1
640	丸瓦	2.0	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	1	1	粗・普通	灰白	良好		9.5
641	丸瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	1	5	中・普通	灰白	良好	玉縁式	9.8

第496図 E区SE04出土遺物(2)(1/5)



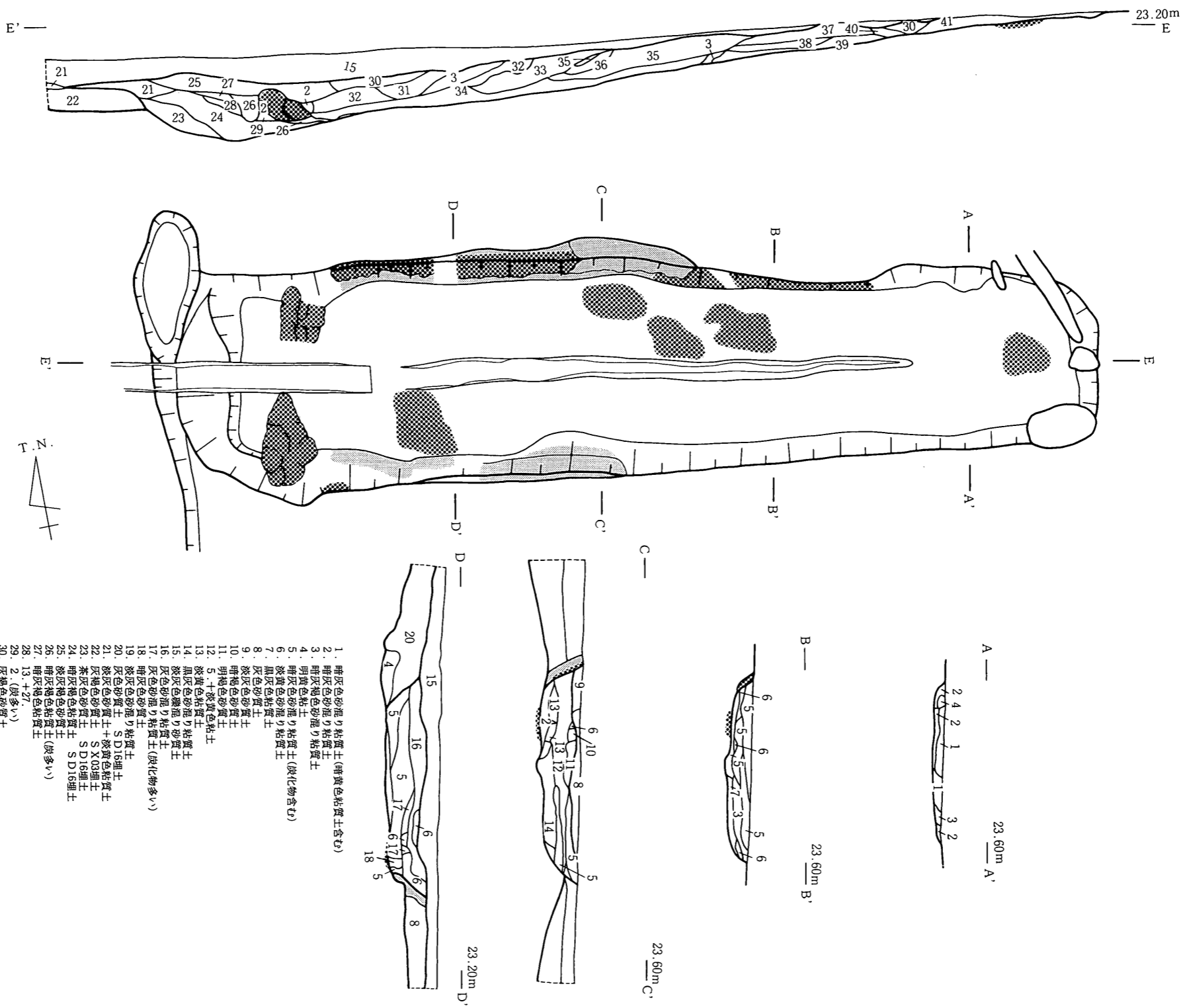
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
642	曲物	39.0	7.6	0.3	不明		

第497図 E区S E 04出土遺物(3)(1/6)

一応ここではこの井戸の下限を623の年代の13世紀代と考える。

S F 01 (第498図, 図版71)

E 8 区の北西部で検出した窯跡である。東から西へ向う緩斜面に形成されており、窯体の主軸はN-84°-Wでほぼ東西となっており焚口部は西側になっている。窯体の平面形は長方形で全長7.3m、幅は1.4~1.9mで先端部から西へ2mほどの所がやや狭くなっており、窯体の傾斜角は9°である。窯体内には天井部の崩壊した痕跡はなく、この窯には本来天井部はなかったものと思われる。窯体は下部のみが残存しており、窯体下部の断面形は緩いU字形に近くなっている。燃焼部と焼成部との区別は不明瞭であり、西端部のやや窪んでいる部分が燃焼部と考えられる。西端から1mほどの所に赤変した粘土ブロックが見られたが、床面からは浮いており窯壁の崩れたものと考えられる。窯壁の西半分には粘土が貼り付けられており、このうち北側部分では表面が赤変しているが裏側は赤変しておらず、黒色となっていた。また南側部分では黒変した粘土が見られた。このことは粘土壁全体が赤変するほど高温ではなかったと考えられる。また北側の窯体の西半分は地山が赤変していたため、この部分は粘土を貼り付けていなかったものと考えられる。窯体に粘土を貼っている部分はS D 16を切っている部分で、S D 16の埋土に窯体を作り出している部



第498図 E区S F 01平・断面図(1/40)

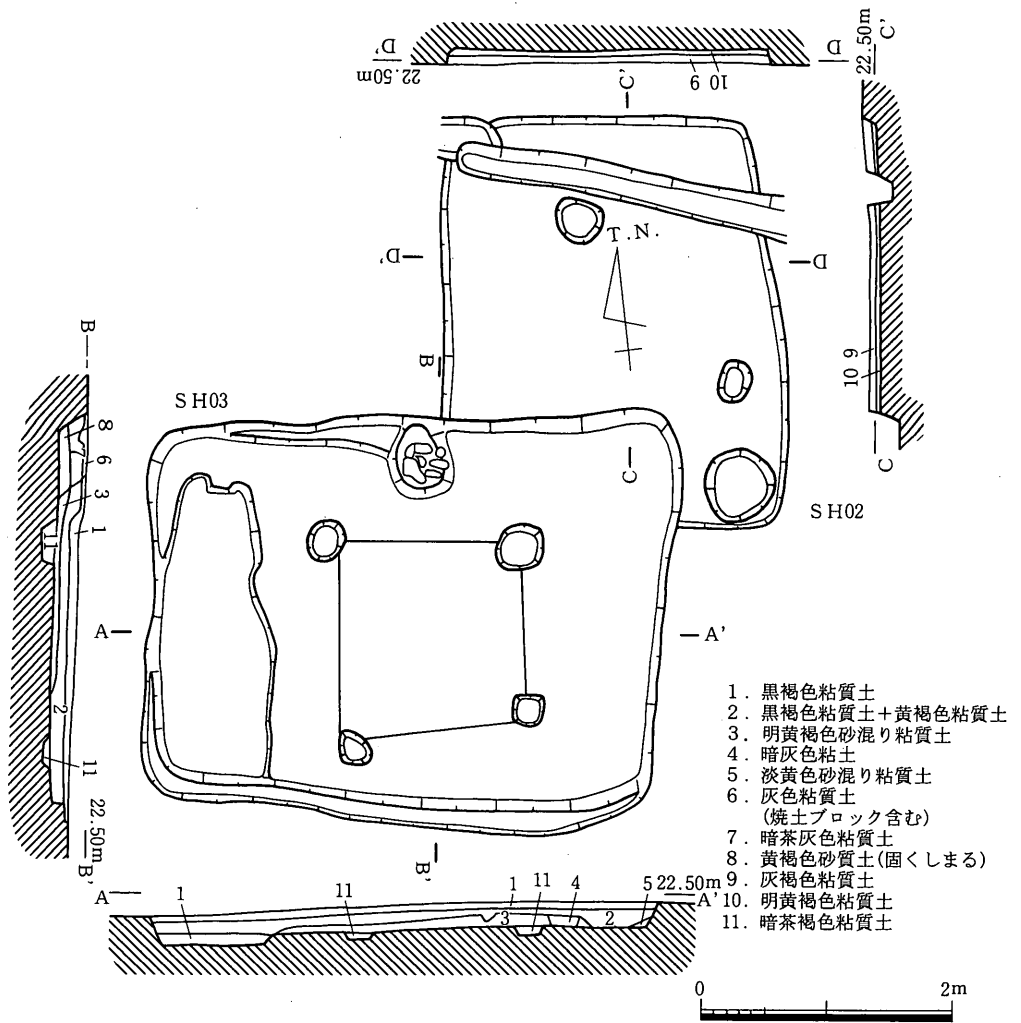
分である。このため窯体を補強する意味で粘土を貼ったものと考えられる。粘土を貼っていない部分は地山に窯体を構築しているため丈夫であったと考えられる。床面には粘土を貼ってはいなかった。床面の直上には炭化物が堆積しており、特に西半分では厚く堆積していた。また中央部北側と西側の一部は床面の地山が赤変していた。また床面には東端から1.4mの所から始まる全長4.0mの排水溝がある。幅は15cm、深さは8cm前後で床面中央部に作られている。排水溝の西側の途切れた部分が焼成部と燃焼部の境界の可能性がある。また東側先端部付近の床面も赤変しているが、煙出しは確認出来なかった。

窯体内からは土器の細片が少量出土したにとどまり土器からの時期決定は困難である。S F 01の最上部には淡灰色砂質土が堆積しているが、これはS F 01の埋没後に堆積したもので、この堆積層はS D 16の上部にも共通して堆積している層である。S F 01はS D 16を切って構築されているため、S D 16の下限と考えられる10世紀中頃前後以降に構築されている。最上部の堆積層中の遺物でS F 01の下限を推定出来るが、残念ながら時期決定の出来る遺物は含まれていなかった。しかし最上部の堆積層がS F 01とS D 16の上に同じ状態で堆積していることから、S D 16が埋没してまだ間もない頃にS F 01も廃棄されたものと考えたい。以上のことからS F 01は10世紀後半代に操業していたものと考えたい。

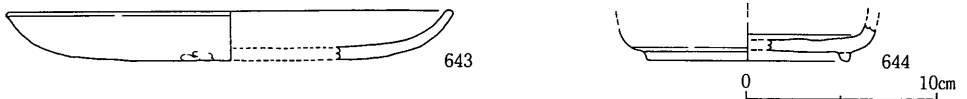
S F 01は天井部がなく窯体の傾斜も緩く、平窯と考えられる。窯体や窯壁の被熱状況からあまり高温で操業されていなかったものと思われ、少なくとも須恵器を焼いたものではないことは分かる。灰原想定部分にトレンチを設定したが遺物は出土しなかったことから土器を焼いたものではないのかも知れない。窯体内には炭化物が厚く堆積していたことからあるいは炭焼き窯の可能性を考えておきたい。

S H 02 (第499・500図, 図版72)

E 5 区の西部で検出した竪穴住居である。平面形は2.6m×3.1mの長方形で南北方向がやや長くなっている。深さは10cmほどで残りは悪い。支柱穴は南東部の1つしか検出されなかった。壁溝など他の施設は認められなかった。南西部は他の竪穴住居に切られており、北側も溝に切られている。住居の埋土中から土器が少量出土した。643は土師器皿である。体部は緩く内湾して立ち上る。内面は摩滅しているがナデのようである。外面はナデている。644は須恵器杯である。体部上半は欠損しているが、立ち上り部の形状から体部の立ち上りは急のようである。立ち上り部は丸みを帯び、立ち上り部の内側に断面方形の高台を貼り付けている。



第499図 E区SH02・03平・断面図(1/60)

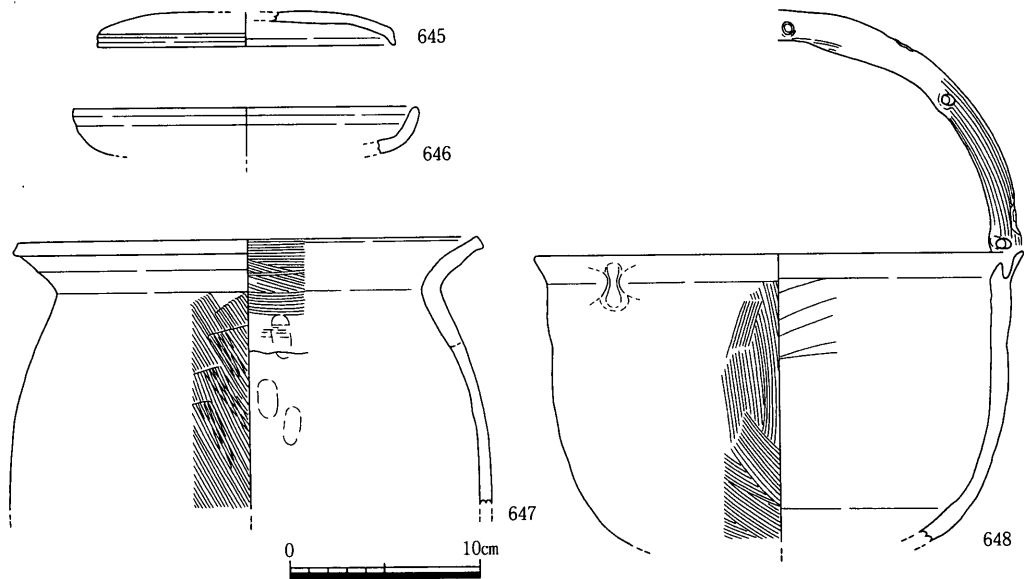


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
643	土・皿	23.2	2.6	14.6	中・多	良好	黄橙	ナデ	不明	底指押え	
644	須・杯			10.6	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		

第500図 E区SH02出土遺物(1/4)

S H03 (第499・501図, 図版72)

E 5 区の西部で S H02 に重なって検出された竪穴住居である。平面形は 3.1m × 4.0m の長方形で東西に長くなっており、深さは 20cm ほどである。支柱穴は 4 本で南側が若干歪んでいる。柱穴の平面形は隅丸の方形に近く、1 辺 30cm 前後となっている。柱穴は 5 ～ 10cm ほどしか残存しておらず柱痕は確認出来なかった。柱穴の埋土は暗茶褐色粘質土の単一層であった。住居の北側中央部には黄褐色砂質土を強く叩きしめ竈状に盛り上げている。この部分には竈のように馬蹄形にしたり掘り窪めてはいないが、上部に甕が置かれており焼土が確認され火を使用した痕跡が認められた。また住居の西側部分は床面が 10cm ほど長方形に掘り窪められている。さらに南側の壁の掘り込みは段になっている。646 は土師器皿で口縁部外面には一部ヘラミガキが残っている。647・648 は住居北側の竈状の部分から出土した土師器である。647 は甕で長胴になるものと思われる。648 は鍋で体部上半は直線的で、外面は全体にハケ目を施している。体部内面の上部は板ナデとなっている。また口縁部内面には貫通しない穿孔が現存で 3 箇所認められる。またこの穿孔部分の外面は器壁が外側に膨れあがっている。口縁部内面にはハケ目を施している。8 世紀前半代の作業小屋的性格の竪穴住居と思われる。

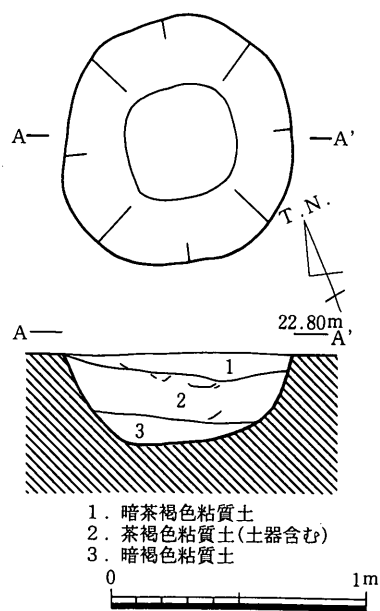


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
645	須・杯蓋	15.4	1.9	8.4	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
646	土・皿	18.2			中・普	良好	淡橙	ナデ・ミガキ	ナデ		
647	土・甕	24.3			中・普	良好	浅黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		
648	土・鍋	25.7			中・普	良好	橙～黄灰	ハケ目	ナデ・ハケ目	口縁内面に未貫通穿孔	

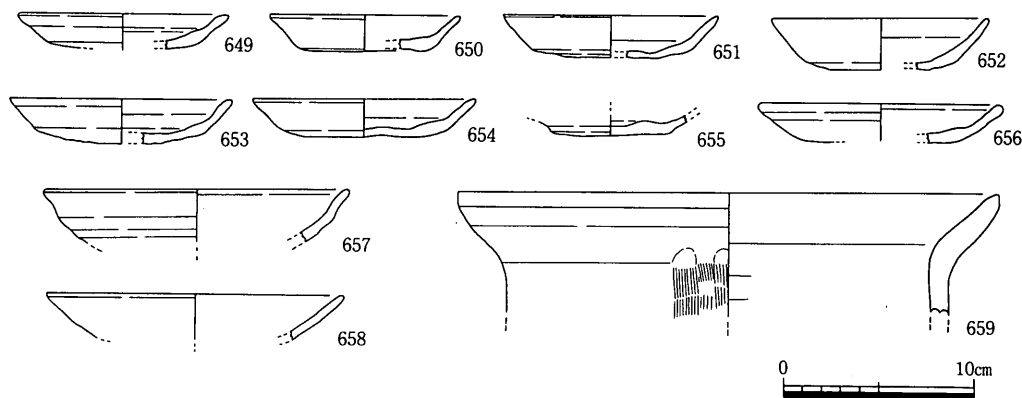
第501図 E 区 S H03 出土遺物 (1 / 4)

SK02 (第502・503図)

E 5 区の中央部やや東寄りで検出した土坑である。平面形は円形で直径は91cmである。断面形は緩やかなU字形で、深さは35cmとなっている。埋土は全体に3層に分かれ、中間の層に土器が含まれていた。649~656は土師器杯で、650は口径は小さいが全体の形から杯とした。650・654は口縁部はナデにより若干外反している。656は内面にへら状工具の先によるカキ傷がある。657・658は口径が16cm前後の杯である。657は体部を2段に強くナデており口縁部は外反する。659は土鍋である。口縁部は直線的に斜め上方に立ち上り、口縁部端部は先細りになる。出土土器より11世紀初頭頃の土坑と考えられるが、この土坑はSB08の張り出し部の中に位置しており時期的にも一致することからSB08の貯蔵施設とも考えられる。



第502図 E区SK02平・断面図(1/30)

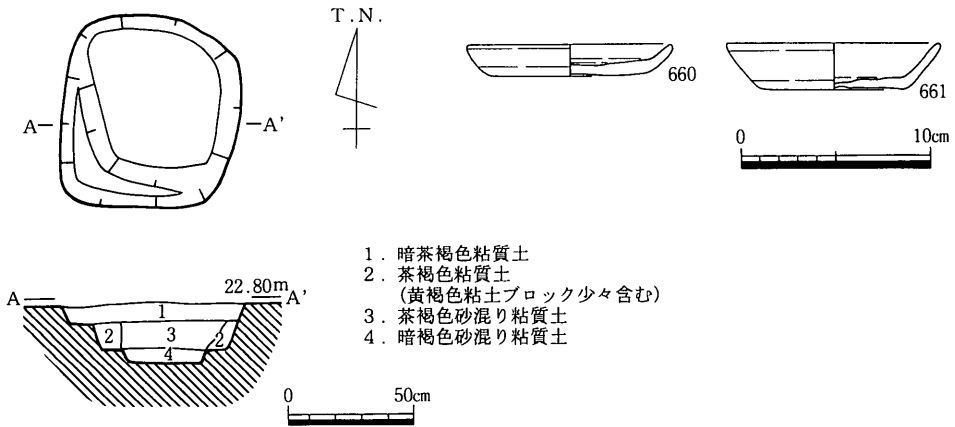


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
649	土・杯	11.0	1.9	6.0	中・普	良好	浅黄橙・橙	ナデ	ナデ		
650	土・杯	10.0	1.9	6.0	中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
651	土・杯	11.4	2.2	8.4	粗・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へら切り	
652	土・杯	11.4	2.7	7.8	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り	
653	土・杯	11.8	2.4	9.0	精緻	良好	淡黄	ナデ	ナデ	底へら切り	
654	土・杯	11.7	2.0	6.3	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
655	土・杯			10.3	微・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り→板状圧痕	
656	土・杯	12.4	2.0	7.0	粗・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	内面にカキ傷有り	
657	土・杯	16.2			細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	口縁部に強い二段ナデ	
658	土・杯	15.6			中・普	良好	橙・灰白	ナデ	ナデ		
659	土・土鍋	28.4			粗・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ		

第503図 E区SK02出土遺物(1/4)

S K 03 (第504図)

E 5 区の南東部の S K 02 の南東 5.5 m のところで検出した土坑である。平面形は隅丸の正方形で 1 辺 70 cm である。土坑の南西部は段掘りになっており、深さは 23 cm である。埋土の最上層から土器が出土した。660 は土師器杯であるが器高は 1.6 cm と低く皿のような形状となっている。661 は体部は直線的で口縁部端部は先細りになる。底部は中央部が極端に薄くなっている。両者とも底部はへら切りのままである。この土坑も S K 02 と同様に S B 08 の中に位置し、時期的にも一致することから S B 08 に伴うものの可能性がある。



1. 暗茶褐色粘質土
2. 茶褐色粘質土
(黄褐色粘土ブロック少々含む)
3. 茶褐色砂混り粘質土
4. 暗褐色砂混り粘質土

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
660	土・杯	10.8	1.6	8.2	中・多	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へら切り	
661	土・杯	11.2	2.4	7.4	中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	底へら切り	

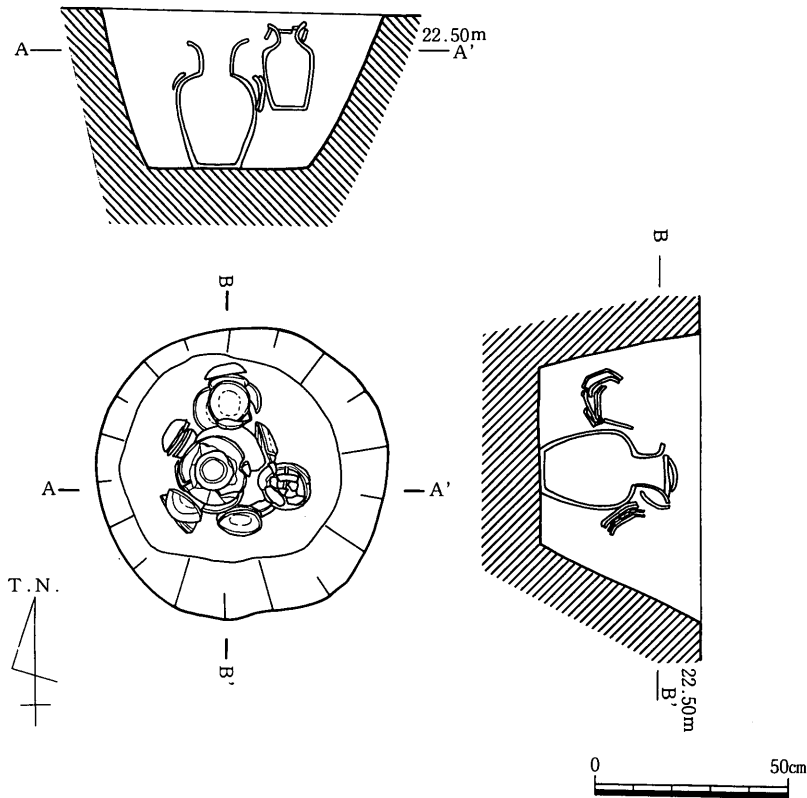
第504図 E 区 S K 03 平・断面図 (1/30), 出土遺物 (1/4)

S K 04 (第505~507図, 図版73)

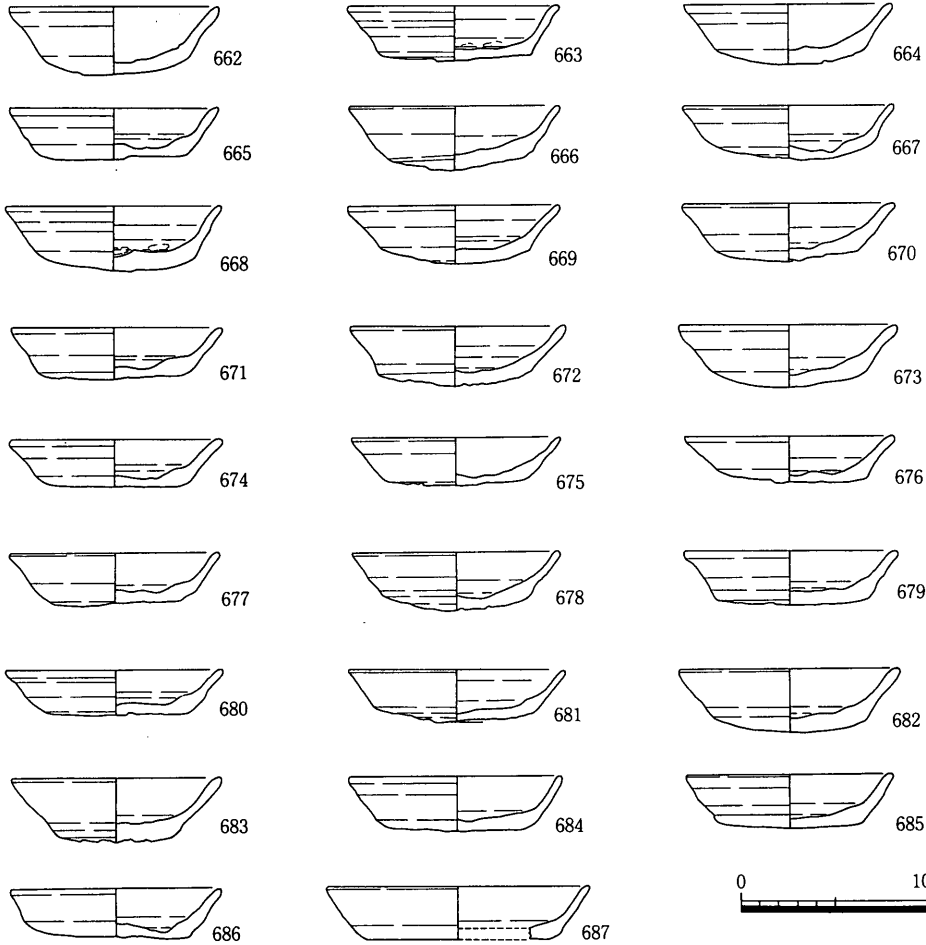
E 5 区の西端部の中央やや南寄りで検出した土坑である。平面形は円形で直径は 76 cm である。断面形が逆台形で底部は平らで、深さは 42 cm となっている。土坑の埋土内より須恵器壺, 土師器杯, 黒色土器碗がまとめて出土した。須恵器壺は大小の 2 個体が出土したが、まず土坑の底部に 690 の須恵器壺を据えて、底から 10 cm ほどを埋めている。この段階で 690 の須恵器壺の体部の周囲に土師器杯 (662~683) を 2 枚を 1 セットに重ね合わせて据えている。また 684・686 は 1 枚のみで据えている。これらの土師器杯は壺の体部の中程から肩部の位置にきている。次に 690 の須恵器壺の東側に小型の須恵器壺 689 を据えている。678 と 679 が 2 枚重ねて両方の壺の体部の間に密着して置かれていた。最後に両壺に蓋をしているが、690 は 10 cm 四方ほどの平らな板石で蓋をして、その上に 688 の黒色土器を底部の高台の上の鐙状突帯の部分で割って、下半部の割り口を研いて加工し蓋に転用したものを

乗せている。さらに壺の頸部には688の残りの上半分の破片を貼り付けている。一方689の方は687の土師器杯で蓋をしている。この杯のみが他の杯に比べて口径が大きくなっており、最初から蓋として用いる意図があったと考えられる。杯の底部を蓋に使用し、壺の口縁部の周囲に杯の体部を貼り付けている。そして最後に一気に全体を埋めており、埋土は茶褐色粘質土の単一層となっている。壺の内部からは何も出土しなかった。

662~686は口径が11.1cm前後の極めて画一的な土師器杯である。器高の平均は2.9cmであるが、3cmを超えるものと超えないものの2つのグループがある。662・663, 665・666, 664・667, 668・669, 670・671, 672・673, 674・675, 676・677, 678・679, 680・681, 682・683がそれぞれ2枚1組に重なり合っていた。底部が丸みをもっているものと平らなものを組み合わせる傾向がある。底部はすべてヘラ切りとなっているが、その後にナデるもの、板状圧痕を施すもの、ヘラ切りのままのものがある。687は口径13.8cmと大きくなっている。688は黒色土器B類の椀である。体部は内湾しながら立ち上り、体部の内・外面



第505図 E区SK04平・断面図, 遺物出土状況 (1/20)

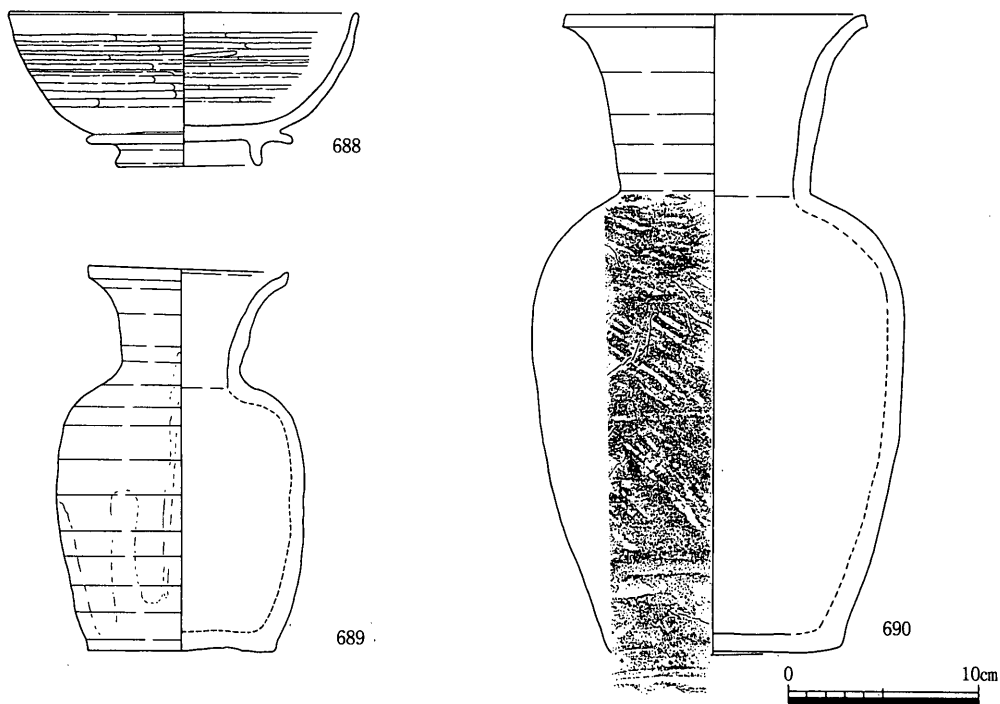


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
662	土・杯	11.1	3.5	7.9	細・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
663	土・杯	11.0	2.8	7.6	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
664	土・杯	11.0	3.1	8.0	中・普	良好	橙・にぶい橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
665	土・杯	11.0	2.6	7.8	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
666	土・杯	11.0	3.3	7.0	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
667	土・杯	11.0	2.6	8.0	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
668	土・杯	11.4	3.3	8.4	中・普	良好	黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
669	土・杯	11.1	2.9	8.0	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
670	土・杯	11.2	3.0	7.5	中・普	良好	黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
671	土・杯	11.1	2.7	8.0	粗・多	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
672	土・杯	11.2	3.1	8.1	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
673	土・杯	11.5	3.2	8.0	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
674	土・杯	11.1	2.5	7.1	粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
675	土・杯	11.0	2.5	7.0	細・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
676	土・杯	11.1	2.5	7.8	細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板ナデ	
677	土・杯	11.1	2.7	8.0	中・多	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
678	土・杯	10.9	3.0	7.7	細・少	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
679	土・杯	11.1	2.8	7.8	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
680	土・杯	11.4	2.4	7.6	粗・多	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
681	土・杯	11.3	2.8	8.6	粗・多	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
682	土・杯	11.6	3.3	8.2	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	金雲母
683	土・杯	10.9	3.3	6.0	中・普	良好	浅黄橙・橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
684	土・杯	11.1	2.9	7.0	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
685	土・杯	10.9	2.8	7.9	中・普	良好	黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
686	土・杯	11.0	2.6	7.3	中・多	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
687	土・杯	13.8	2.8	9.4	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		

第506図 E区SK04出土遺物(1)(1/4)

に横方向にヘラミガキを施した後に、口縁部をナデている。底部には外反気味の高台を貼り付け、立ち上り部にはやや下向きの鏝状突帯を1条貼り巡らせている。689・690は須恵器壺である。689は体部は張りがなく外面には自然釉が付着している。頸部は外開きで口縁部端部は若干上方につまみ上げ、外側に面を作る。口径と底径がほぼ等しくなっている。690は体部上半に最大径があり、緩やかに傾斜し底部に到る。体部外面には右下がりの格子目叩きを施した後にナデている。頸部は下半は直線的であるが上部は外反し、口縁部は外側に平坦な面を作る。

この土坑は明らかな意図をもって土器を配置し埋納したものである。土坑の西側は調査区外であるため掘立柱建物の有無は不明であるが、現状では掘立柱建物の柱穴に該当するものではない。この土坑は遺物から10世紀後半～11世紀初頭のもと考えられる。この時期の掘立柱建物にはE5区ではSB08・12・13がある。この土坑はSB12の西側3.5mの所に位置し、SB12の北側の桁行の延長上にある。推定の域を出ないがSB12に伴う地鎮的な意味をもった土坑と考えたい。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
688	黒土・碗	18.5	8.0	7.6	細・普	良好	黒褐	ナデ・ミガキ	ミガキ	高台上方に鏝状突帯	金銀母
689	須・壺	10.5	20.0	9.8	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	外面に自然釉	
690	須・壺	15.6	33.5	12.2	中・普	良好	灰	叩き→ナデ	ナデ	体部格子目叩き→ナデ	

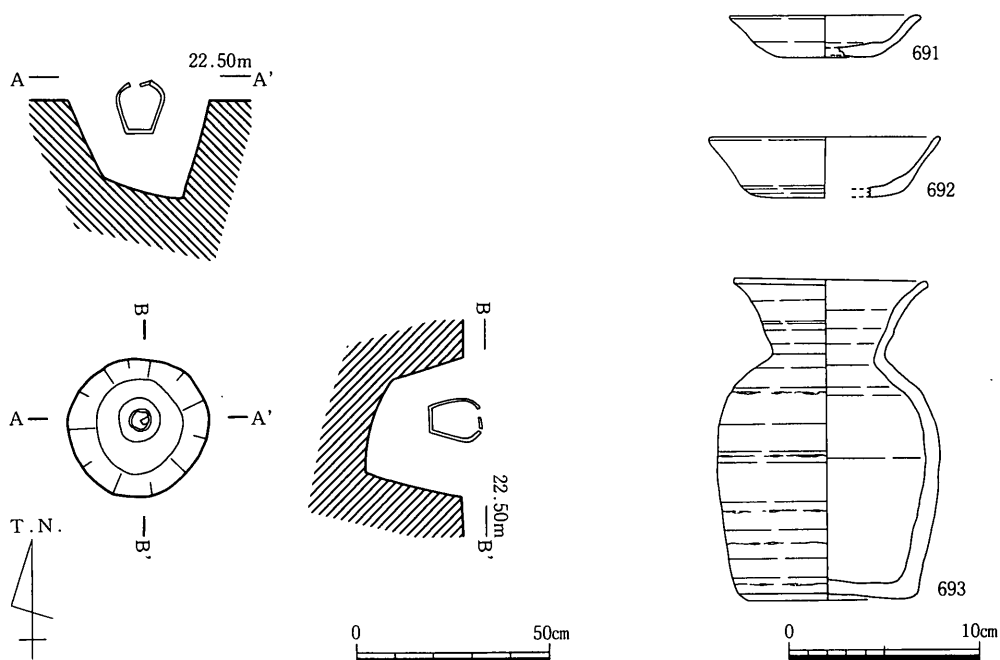
第507図 E区SK04出土遺物(2)(1/4)

S K 05 (第508図)

E 5 区の西端部の中央やや南寄り、S K 04の南1.5mの所で検出した土坑である。平面形は円形で直径は37cmである。底部は傾斜しており最深部で26cmとなっている。底から15cm上の所の土坑の中央に須恵器の壺が据えられていた。土坑の掘形は上部が削平されていて検出時には須恵器壺の上部が露出していた。他に土師器杯と小皿が須恵器壺の周囲から出土した。土坑は一度に埋められており、埋土は茶褐色粘質土の単一層となっている。

691は土師器小皿で内面立ち上り部を強くナデている。692は土師器杯で立ち上り部は肥厚している。693は須恵器壺で、体部の張りは弱く最大径は口径を上回っている。頸部は緩く外反し、口縁部端部は外側に平坦な面を作る。底部は若干の上げ底となっている。

S K 05もS K 04と同様に掘立柱建物の柱穴には相当しない。土坑中央から出土した須恵器壺も廃棄されたものではなく、人為的に意図をもって据えられたものである。遺物の時期は10世紀後半代と考えられS K 04より若干先行するようである。E 5 区でこの時期に該当する掘立柱建物はS B 09・10・11が考えられ、S K 05はS B 10の西側3.7mほどの所に位置し、S B 10の南側の桁行の延長上にある。S K 04と同様にS B 10に伴う地鎮的な意味をもった土坑と考えられる。



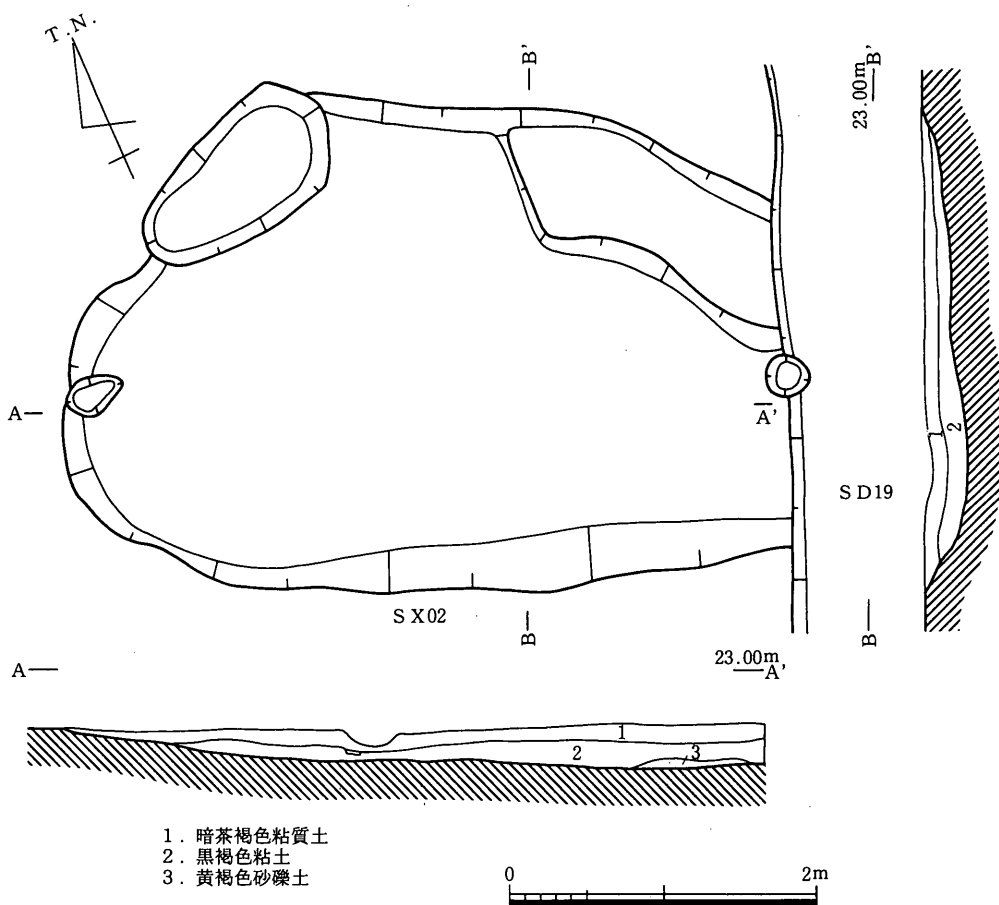
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
691	土・小皿	10.0	2.1	5.0	微・昔	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り	
692	土・杯	12.2	3.2	8.0	精緻	良好	橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
693	須・壺	10.0	16.9	9.4	中・昔	良好	明灰	ナデ	ナデ		

第508図 E 区S K 05平・断面図、遺物出土状況 (1/20)、出土遺物 (1/4)

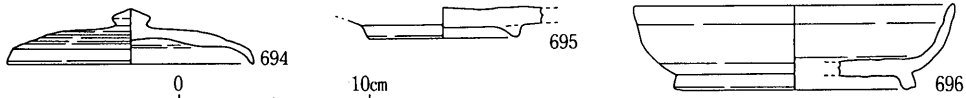
S X 02 (第509・510図)

E 5 区の中央やや南寄りで検出した土坑状の落ち込みである。遺構の東側が S D 19 に切られているため全体の形は不明である。しかし S D 19 の東側に遺構が続かないため、本来この遺構の東側は S D 19 部分で収束していたと考えられる。遺構の平面形は東西に長い長楕円形で、東西 5.0~5.8m、南北 3.1m ほどである。深さは 20~30cm で浅い皿状になっている。遺構の北東部には幅 60cm 前後のテラス状の高まりがある。埋土は上下 2 層に大別でき、下層には黒褐色粘土が堆積していた。埋土中から土器が少量出土した。

694 は須恵器杯蓋である。天井部はなだらかで口縁部は斜め下方に向き、端部は先細りになる。天井部は中央から半分ほどに回転ヘラズリを施し、中央に宝珠つまみを貼り付けている。695 は須恵器壺の底部と考えられるが、立ち上り部のかなり内側に断面台形の高台を貼り付けている。696 は須恵器杯で、立ち上り部は丸みを帯びており、立ち上り部



第509図 E区S X 02平・断面図 (1/50)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
694	須・杯蓋	13.0	2.8		微・普	良好	灰白	ナデ・ケズリ	ナデ		
695	須・皿			8.0	粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へら切り	
696	須・杯	16.8	4.3	11.4	粗・多	良好	灰	ナデ	ナデ	底ケズリ→ナデ	

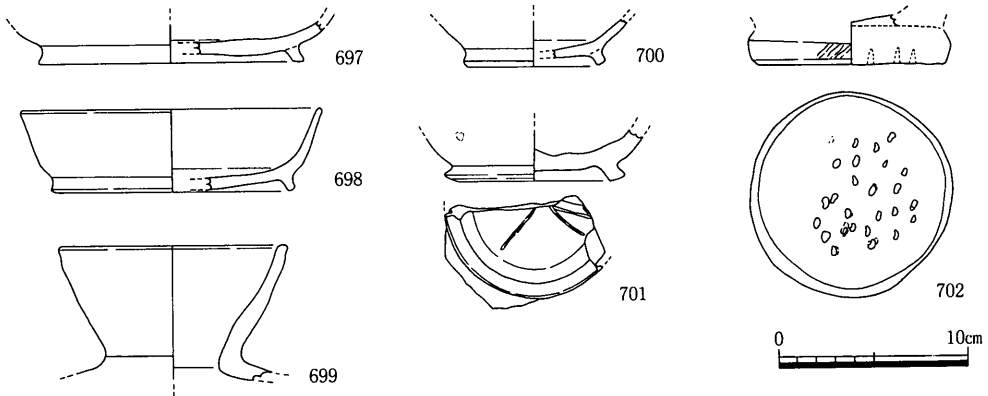
第510図 E区SX02出土遺物(1/4)

に断面方形の外開きの高台を貼り付けている。口縁部端部は先細りで、体部に比べて底部は肥厚している。

SX03 (第511図)

E8区の北西部で検出した落ち込み状の遺構である。西側をSD17に、東側をSD16にそれぞれ切られているので全体の形状は不明である。遺構残存部の北半分はテラス状に張り出している。埋土は暗灰色砂質土が主体となっているが、明黄色粘土ブロックが上層部に堆積している部分がある。全体に緩く西側に傾斜している。この遺構が埋没した後に上部に淡灰色砂質土が堆積しているが、これはSD16とSF01の上部に共通して堆積している層である。遺構の性格は不明である。

698は須恵器杯で立ち上り部はやや角張っており体部は直線的である。701は須恵器壺の底部で底部外面にはへら記号が施されている。702は須恵器鉢の底部で底部外面に刺突が乱雑に施されている。外面には叩きが残っている。



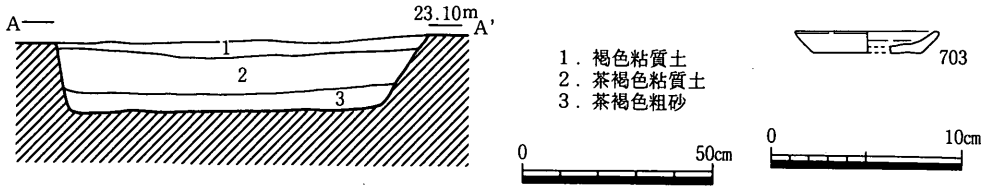
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
697	須・杯			14.0	中・普	不良	灰白・灰	ナデ	ナデ		
698	須・杯	15.8	4.3	12.8	細・少	良好	橙	不明	不明		
699	須・皿	12.0			微・多	良好	灰	ナデ	ナデ		
700	須・皿			6.8	細・少	良好	灰白	ナデ	ナデ		
701	須・皿			9.5	微・少	良好	灰	ナデ	ナデ		へら記号
702	須・鉢			9.8	中・普	良好	灰	叩き→ナデ	ナデ		

第511図 E区SX03出土遺物(1/4)

(4)中世の遺構・遺物

SD21 (第512図)

E 2 区の東端で検出した南北方向の溝である。E 2 区の南東コーナー部から始まり北へ7 mほど延びて調査区外に到る。幅は1.0m, 深さ15~20cmである。溝の最下層には粗砂が堆積していた。埋土中から中世の土器が少量出土した。703は土師器小皿で体部は短く直線的である。底部は糸切りになっている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法的特徴	備考
703	土・小皿	7.5	1.2	5.8	細・少	良好	灰	ナデ	ナデ	底糸切り	

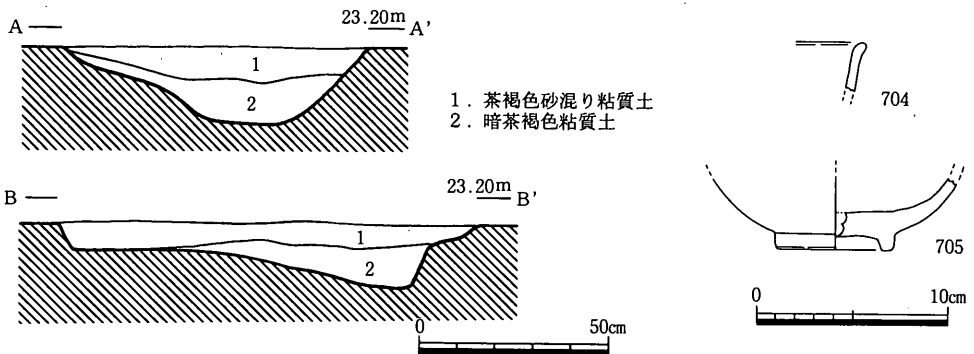
第512図 E区SD21断面図(1/20), 出土遺物(1/4)

SD22

E 5 区の北側の西寄りで検出した溝である。E 5 区の北西コーナーから東へ14.5mほどで北へ直角に方向を変えて延びている。溝の途中でSE03・04を切っている。幅は40~70cmほどであるが直角に変換した北側は幅広になっている。深さは20cm前後で埋土は灰褐色粘質土の単一層となっている。三足の土釜の破片など土器片が少量出土したのみである。

SD23 (第513図)

E 5 区の北東部で検出した「コ」字に巡る溝である。E 5 区の東端から3 mの所を北か



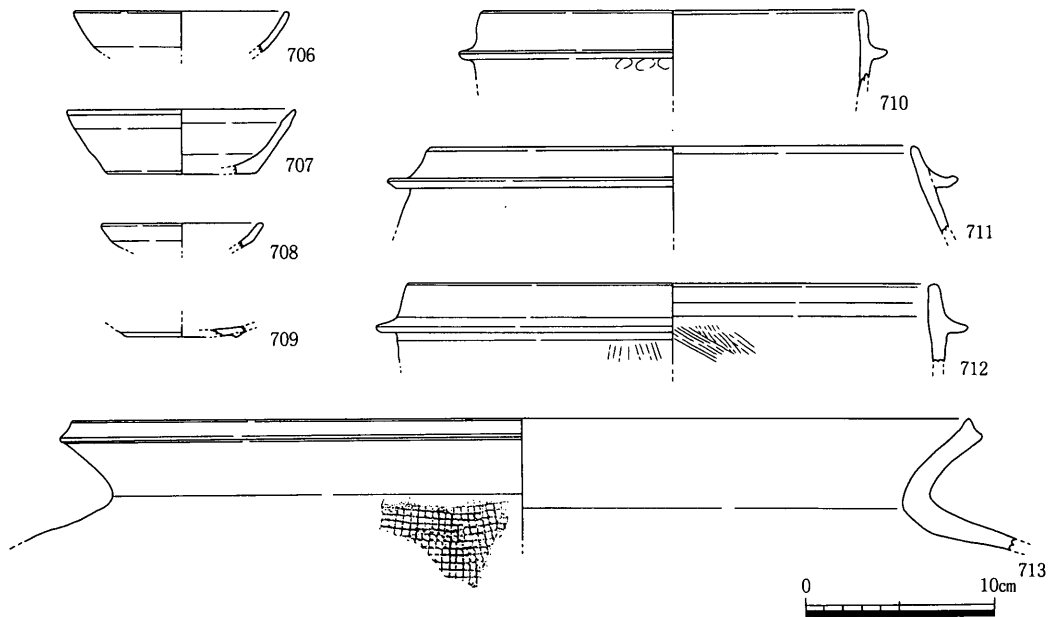
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法的特徴	備考
704	甗・碗				精緻	良好	白灰	ナデ	ナデ	釉: 明緑灰	
705	甗・碗			6.0	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	見込み部に沈線1条	釉: オリーブ灰

第513図 E区SD23断面図(1/20), 出土遺物(1/4)

ら南へ9mの所で直角に西へ変換し、西へ9mの所で再び北へ直角に変換して延びている。東側の南北溝は幅が0.8~1.1mであるが、これに比べて東西溝と西側の南北溝は幅が20~30cmと狭くなっている。溝の深さは20cm前後で埋土は東側南北溝は上下2層に分かれ、東西溝と西側南北溝は黒褐色粘土の単一層となっている。「コ」字に区画された内部には特に建物等の施設は検出されなかった。704・705は青磁碗である。705は底部に断面方形のしっかりとした高台が付き、オリーブ灰色の釉がかかる。龍泉窯系のものである。

S D 24 (第514図)

E 8 区の中央部やや東寄りで見出した溝である。調査区の南壁から北へ9mのところで北東側と西側へと枝分かれする。北東部は分岐点から8mほどで収束する。西側は2mほどで他の溝に切られている。幅は0.5~1.1mで深さは10~20cmで、埋土は基本的に暗灰色粘質土であるが、分岐点から西側は上に淡灰色砂質土が薄く堆積している。断面形は浅い皿状であるが中央部がやや窪んでいる。分岐点で明確な切り合いは認められず同一の溝と考えられる。707は土師器杯で体部は直線的である。708は瓦器小皿である。口縁部のみの



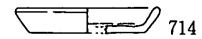
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
706	土・碗	11.3			微・少	良好	橙	ナデ	ナデ		
707	土・杯	12.0	3.4	8.0	中・普	良好	灰黄・黄橙	不明	不明		
708	瓦・小皿	9.5			微・普	良好	黒灰	ナデ	ナデ		
709	瓦・碗			5.7	精練	良好	灰	ナデ	ミガキ		
710	土・土釜	20.0			細・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
711	土・土釜	25.3		4.8	粗・多	良好	黄橙	不明	ナデ		
712	土・土釜	28.0			中・普	良好	暗褐・ゴイ褐	ハケ目 → ナデ	ナデ・ハケ目		
713	須・甕	48.4			中・普	良好	灰	ナデ・叩き	ナデ		

第514図 E区S D 24出土遺物(1/4)

破片であるが、口縁部やや下で屈曲する。709は瓦器碗の底部で断面三角形の小さな高台が貼り付いている。710～712は土師質の土釜である。いずれも口縁部の2cmほど下に鐔状の突帯を貼り巡らせている。711は口縁部は内傾し、鐔状突帯は端部を上方につまみ上げている。713は須恵器甕で大型品である。体部外面に格子目叩きを施している。

S D 25 (第515図)

E 8 区の南壁際やや東寄りで、S D 24の東に隣接して検出した溝である。南壁から北へ4.7mの所から始まり、南側の調査区外へと延びる。幅は調査区壁際で3.0mで深さは10cm程度で残りは悪く、埋土は淡灰色礫混じり砂質土の単一層である。断面は浅い皿状になっている。714・715は土師器小皿である。いずれも立ち上り部外面に鋭い稜をもち、底部はヘラ切りになっている。



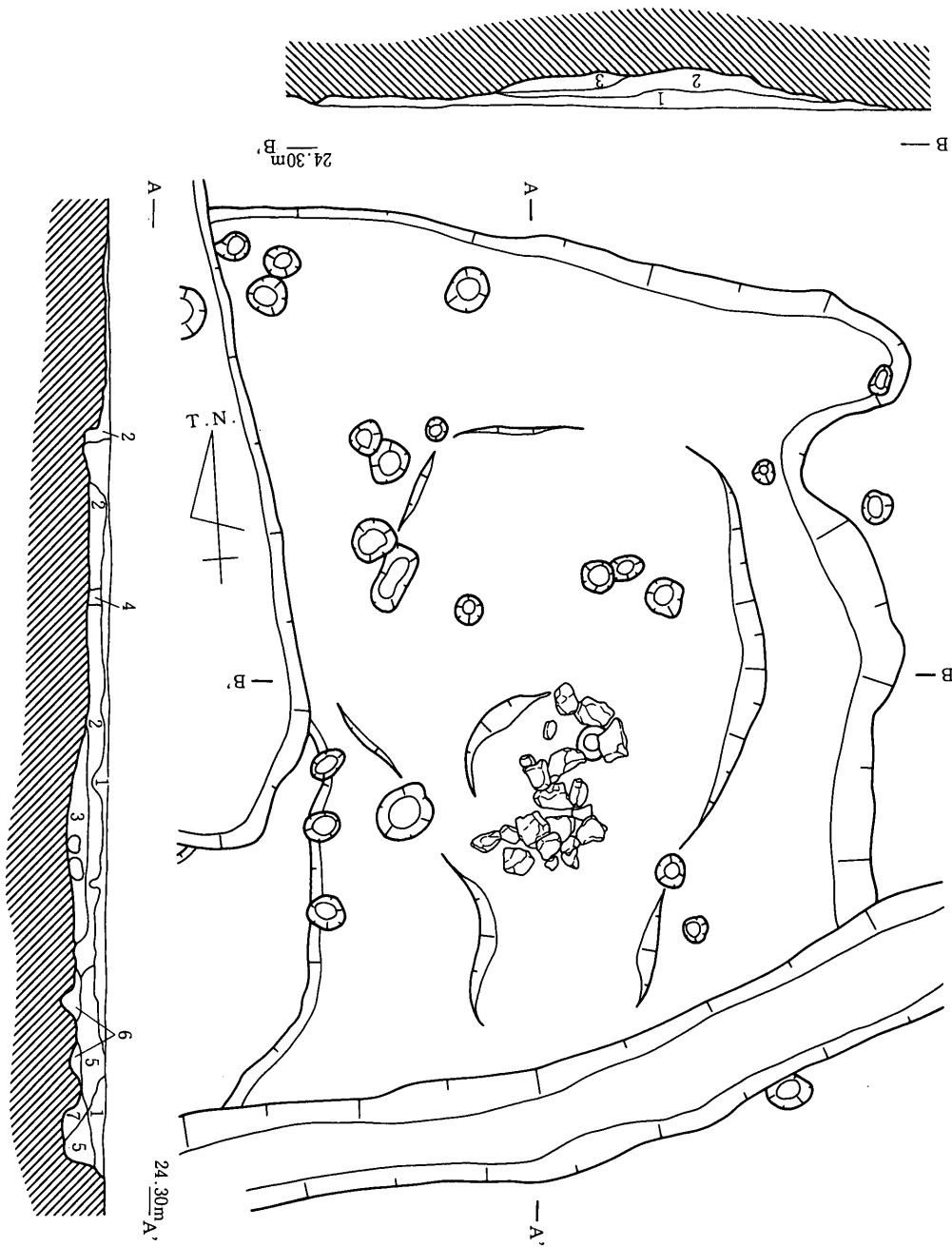
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法的特徴	備考
714	土・小皿	7.6	1.3	6.1	細・普	良好	明黄褐	ナデ	ナデ	底へラ切り	金環母
715	土・小皿	9.1	1.4	7.6	中・多	良好	明赤褐	ナデ	ナデ	底へラ切り	

第515図 E 区 S D 25出土遺物 (1 / 4)

S X 04 (第516・517図)

E 8 区の中央東寄りの所で検出した落ち込み状の遺構である。平面形は長方形に近いが北東部は不整形に曲がる。そして西側を他の溝に、南側をS D 24に切られているがこれらの切っている遺構からはみ出てはいないので、本来の遺構の掘り込み面はこれらの遺構の中で納まるものである。現状で東西4.1m、南北5.7mとなっている。遺構の中央部は一段低くなっており、その中央部には20cm大の角礫が集中していた。遺構の埋土は基本的に上下2層に分かれ上層は淡灰色礫混じり砂質土で、下層は暗灰色粘質土となっている。遺構の北側の部分は下層の暗灰色粘質土が2cmほど薄く残っているにすぎない。中央の集石部分はさらに15cmほど窪んでおり暗灰色砂質土が堆積している。いくつかピットが検出されたがこの遺構に伴うかどうかは不明である。出土遺物から13世紀後半～14世紀前半頃のものと思われるが、遺構の性格は不明である。

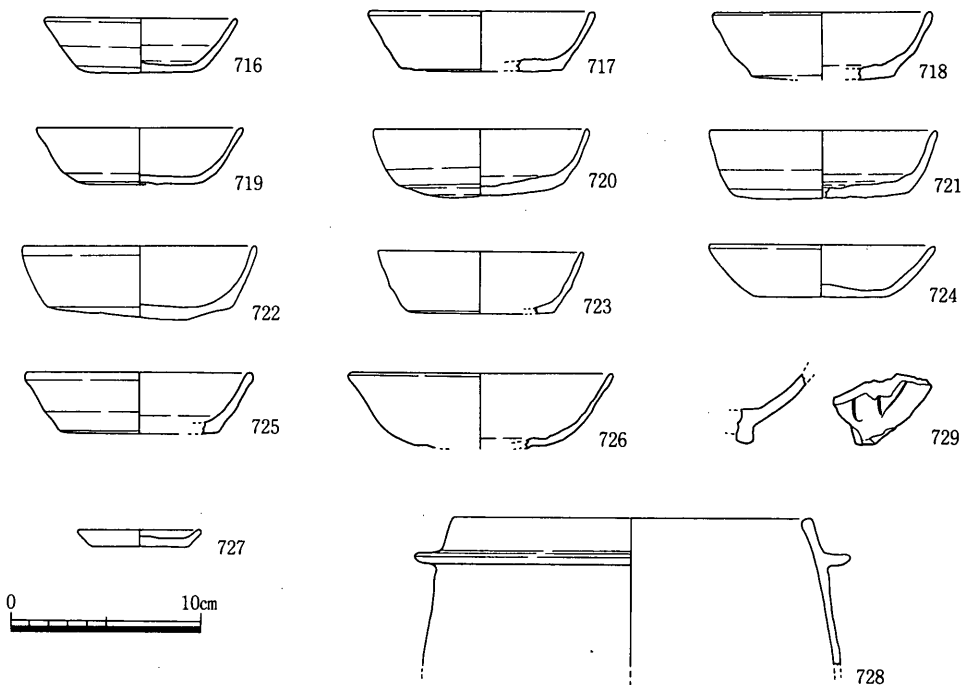
716～725は土師器杯である。底部はいずれもヘラ切りとなっている。718は体部下半の強いナデのため底部が突出気味になっている。720は体部全体が丸みを帯びている。722は底部が歪んでおり部分的に突出している。726は瓦質土器碗で口径14.0cmである。立ち上り部は丸みを帯びている。十瓶山産のものである。727は土師器小皿で器高は0.9cmと極端



1. 淡灰色砂質土(細礫含む)
2. 暗灰色粘質土(細礫含む)
3. 暗灰色砂質土
4. 淡灰色砂混り粘質土
5. 暗褐色粘質土(細礫含む)
6. 暗灰色粘質土
7. 暗褐色砂質土



第516図 E区SX04平・断面図(1/50)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法的特徴	備考
716	土・杯	10.2	2.7	6.7	中・少	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
717	土・杯	12.0	3.1	8.6	細・普	良好	暗灰黄	ナデ	ナデ	底へラ切り	
718	土・杯	11.3	3.4	7.6	細・普	良好	コブイ橙～明褐	ナデ	ナデ	底へラ切り	
719	土・杯	11.0	2.9	6.8	中・多	良好	灰黄	ナデ	ナデ	底へラ切り	
720	土・杯	11.4	3.4	8.7	細・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ	底へラ切り	
721	土・杯	12.0	3.5	9.5	中・普	良好	橙～暗灰黄	ナデ	ナデ	底へラ切り	
722	土・杯	12.4	3.7	9.7	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り	
723	土・杯	10.9	7.8	3.1	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り	
724	土・杯	11.9	2.2	6.8	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	不明	底へラ切り?	
725	土・杯	12.1	3.1	8.5	中・普	良好	浅黄～黄灰	ナデ	ナデ	底へラ切り	
726	瓦質・碗	14.0			中・普	良好	灰白～灰	ナデ	ナデ	重ね焼	
727	土・小皿	6.4	0.9	5.0	微・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底へラ切り	
728	土・土釜	18.8			中・普	良好	赤褐	ナデ	不明		
729	青・碗				精緻	良好	赤灰	ナデ	ナデ	(軸) オリーブ灰	

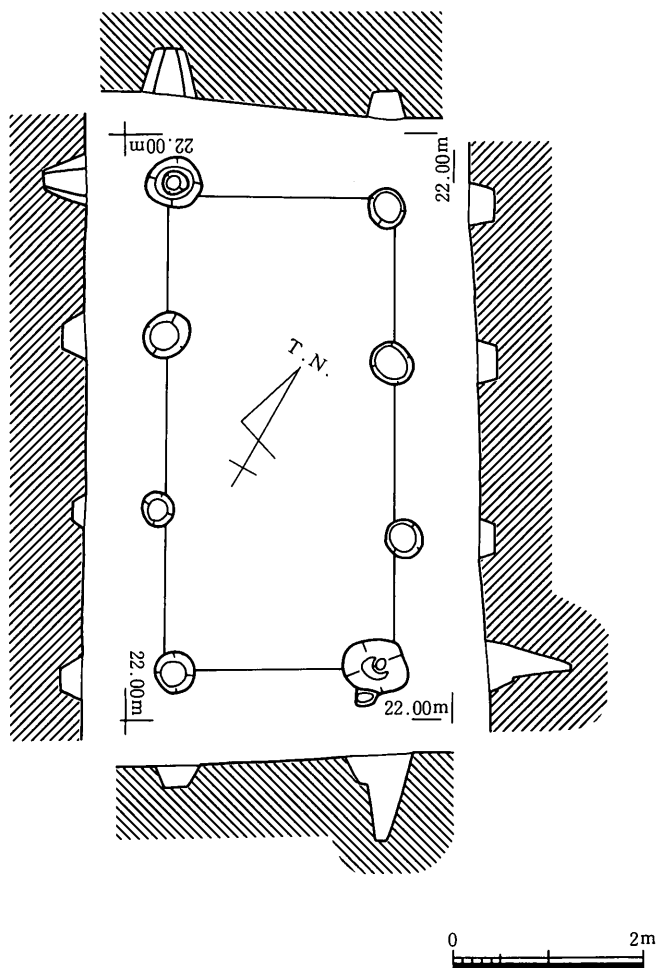
第517図 E区SX04出土遺物(1/4)

に低くなっている。底部は厚く器高の半分以上を占める。底部はへラ切りである。728は土師質の土釜で口縁部は内傾し、端部から2cmほど下に水平な錨状突帯を張り巡らせている。729は青磁碗の破片である。体部外面には鎬蓮弁の文様が施されている。龍泉窯系のものと思われる。その他にスラグと思われるものが1つ出土している。

(5)時期不明の遺構

S B 15 (第518図, 図版62)

E 3 区の西側で検出した梁行 1 間×桁行 3 間の掘立柱建物である。梁行は 1 間で 2.4m, 桁行は 3 間で 4.9m, 建物の面積は $11.8\text{m}^2 \approx 3.6$ 坪となっている。柱穴の平面形は円形で直径は 40~50cm で、深さは 20~30cm のものが多いが東コーナーの柱穴は 90cm ほど残っていた。埋土は茶褐色粘質土の単一層で、西コーナーの柱穴では柱痕が確認された。建物の主軸方位は $N-30^\circ - W$ である。柱穴から遺物が出土しなかったため建物の時期は不明である。しかし建物の東コーナーの柱穴が 7 世紀前後と考えられるピットを切っているため 7 世紀以降の掘立柱建物と言えるが、建物の主軸方位は付近



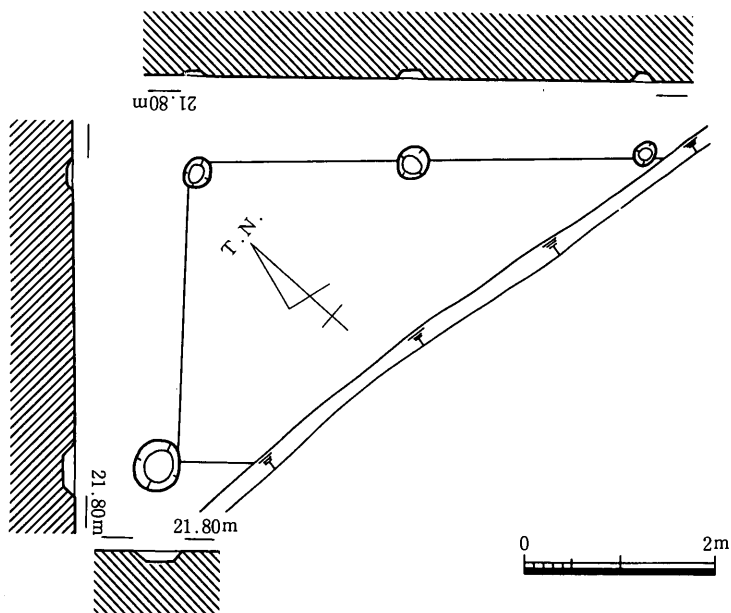
第518図 E 区 S B 15 平・断面図 (1/80)

他の掘立柱建物と異なるため時期は不明と言わざるをえない。

S B 16 (第519図)

E 3 区の中央部南寄りで検出した梁行 1 間×桁行 2 間以上の掘立柱建物である。建物の南側は削平されているため建物全体の規模は不明である。梁行は 1 間で 3.1m, 桁行は検出分の 2 間で 4.6m, 桁行の柱間は 2.3m となっている。柱穴の平面形は円形で直径 20~40

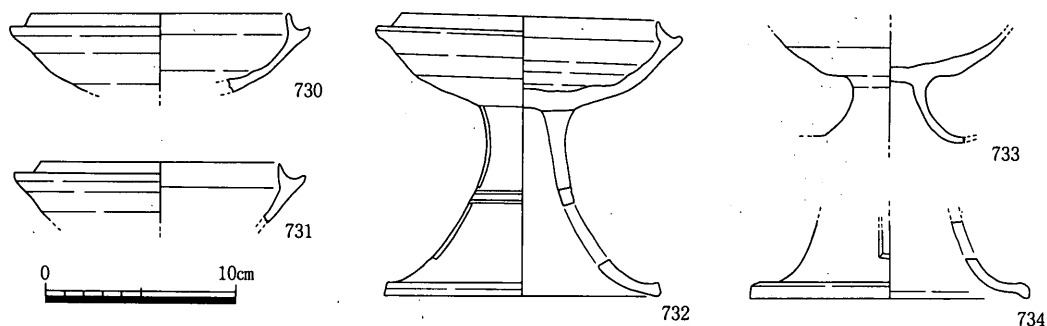
cmで、深さは10cm程度で残りは悪い。柱穴の埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。建物の主軸方位はN-41°-Wである。柱穴より遺物が出土しなかったため建物の時期は不明である。近接の掘立柱建物でSB16と主軸方位を同じくするのはないが、方位的にはSB15の方位が最も近いものになっている。



第519図 E区SB16平・断面図(1/80)

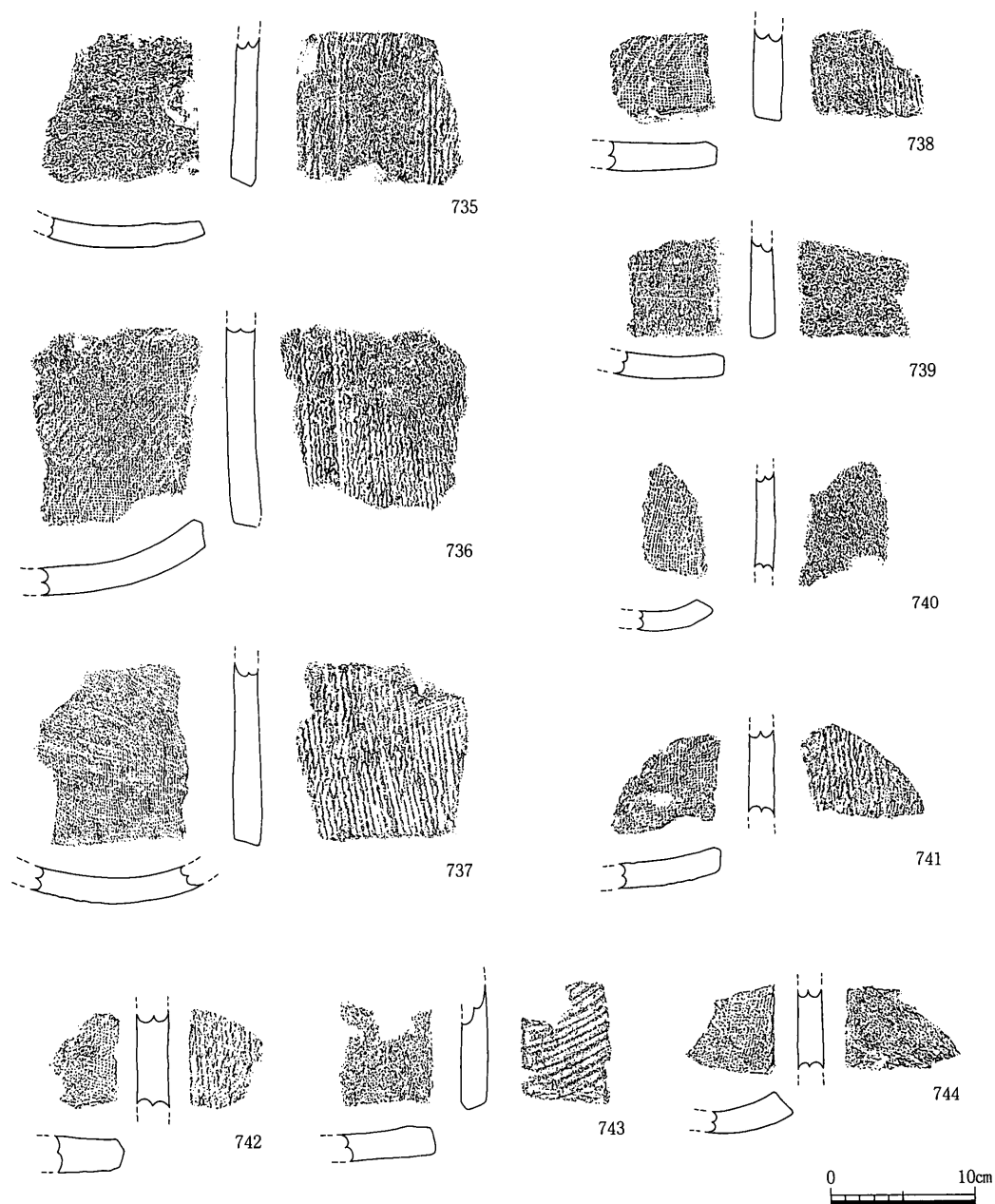
(6)包含層出土遺物(第520~542図, 図版74・75図)

730~734はE2区包含層出土土器である。730・731は須恵器杯身で731の立ち上りの先端部は先細りになる。732は須恵器高杯で杯部の立ち上りは内傾し、受け部は短くなっている。脚部は大きくラップ状に開き、端部は外側に面をもつ。脚部には長方形の2方透し



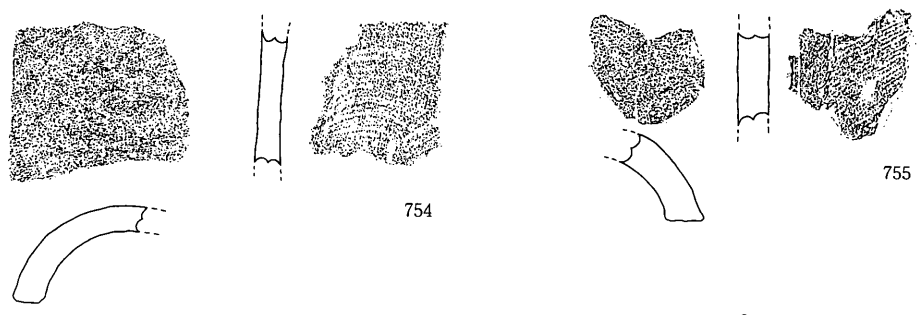
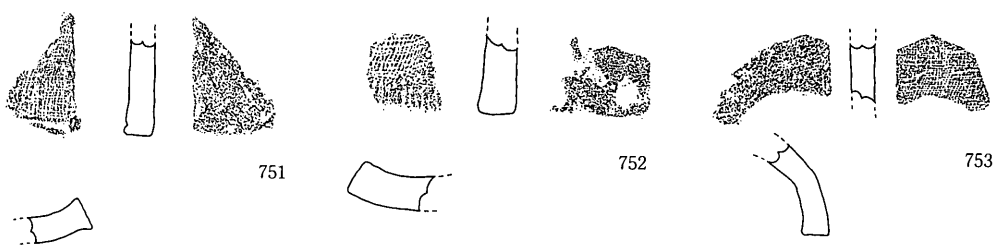
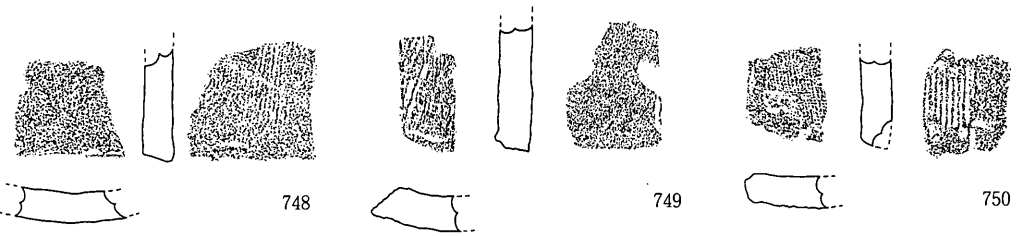
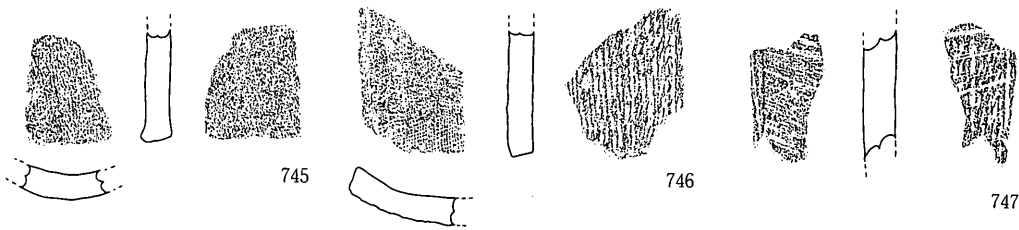
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
730	須・杯身	13.6			中・少	良好	灰	ナデ	ナデ		
731	須・杯身	12.6			精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
732	須・高杯	13.5	14.7	14.6	中・少	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ	長方形の2方透し	
733	須・高杯				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ		
734	須・高杯			14.6	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	長方形の2方透し	

第520図 E2区包含層出土遺物(1)(1/4)



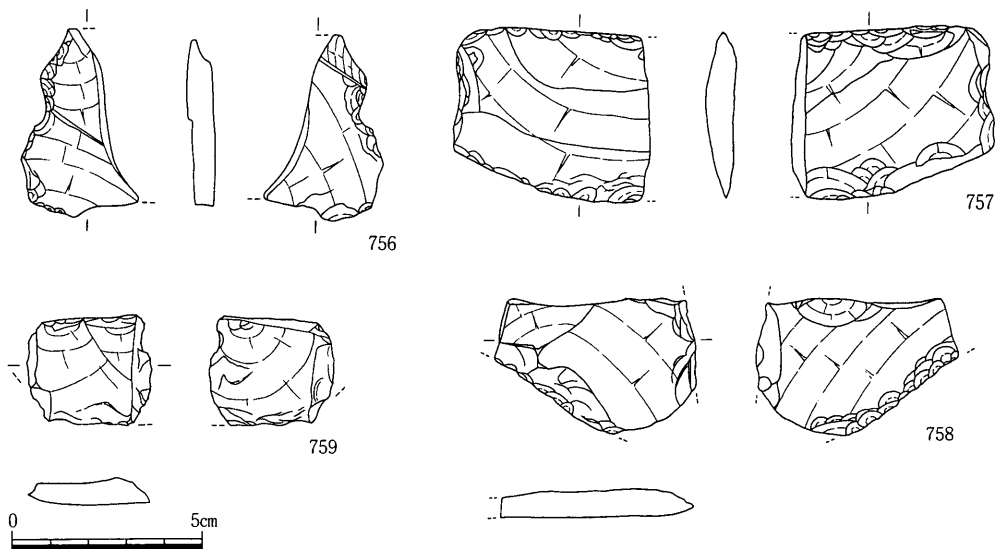
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
735	平瓦	1.5	綿目叩き	布目圧痕	1	1 6	細・普	灰	良好		10.1
736	平瓦	2.0	綿目叩き→ナデ	布目圧痕	2	1 6	粗・普	にぶい橙	不良	凹面に糸切り痕	13.4
737	平瓦	1.8	綿目叩き→板ナデ	布目圧痕		1 6	中・普	明黄褐	不良	凹面に糸切り痕	13.0
738	平瓦	1.9	綿目叩き	布目圧痕	2	1 6	粗・普	にぶい黄橙	不良	凹面に糸切り痕	6.1
739	平瓦	1.7	不明	布目圧痕	2	1 6	中・普	浅黄橙	不良		6.9
740	平瓦	1.3	ナデ	布目圧痕	1			灰	良好		7.0
741	平瓦	1.7	綿目叩き	布目圧痕	2		微・普	明黄褐	不良		6.1
742	平瓦	2.2	綿目叩き	布目圧痕	2		粗・普	にぶい黄橙	不良		6.8
743	平瓦	1.8	平行叩き	ナデ	3	1 8	中・普	浅黄	不良		8.3
744	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	1		中・普	浅黄	良好		5.6

第521図 E 2 区包含層出土遺物 (2) (1/5)



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
745	平瓦	1.6	不明	布目圧痕		1 6	中・普通	黒	不良		7.0
746	平瓦	1.6	縄目叩き	布目圧痕		1 1 6	粗・普通	にぶい黄橙	不良		8.1
747	平瓦	2.2	縄目叩き	布目圧痕→ナデ		2	中・普通	灰・橙・黒褐	良好	凹凸面に系切り痕	7.3
748	平瓦	1.9	縄目叩き	布目圧痕→ナデ		1 6	中・普通	灰	良好		7.2
749	平瓦	2.2	不明	ケズリ		9 1 6	細・普通	浅黄	不良	一枚作り	7.9
750	平瓦	2.0	縄目叩き	布目圧痕		2 1 6	粗・普通	橙	不良		6.3
751	平瓦	2.3	ナデ	布目圧痕		1 1 6	中・普通	浅黄	不良	一枚作り, 布端痕有り	6.2
752	平瓦	2.5	ナデ	布目圧痕		1 1 6	中・普通	浅黄	良好		5.0
753	丸瓦	1.8	不明	布目圧痕		1 1	中・普通	にぶい黄橙	不良		4.0
754	丸瓦	1.7	ナデ	布目圧痕		1 1	中・普通	にぶい黄橙	良好	凹面に系切り痕	10.6
755	丸瓦	2.1	ナデ	ナデ		1 1	中・普通	にぶい黄橙	不良	凹面に系切り痕	6.1

第522図 E 2 区包含層出土遺物 (3) (1 / 5)



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
756	打製石庖丁	2.9	4.8	0.8	10.5	サヌカイト		
757	打製石庖丁	5.3	4.2	0.7	25.4	サヌカイト		
758	エンド・スクレイパー			0.7	18.6	サヌカイト		
759	二次加工のある剥片	2.8	3.2	0.7	8.9	サヌカイト		

第523図 E 2区包含層出土遺物(4)(1/2)

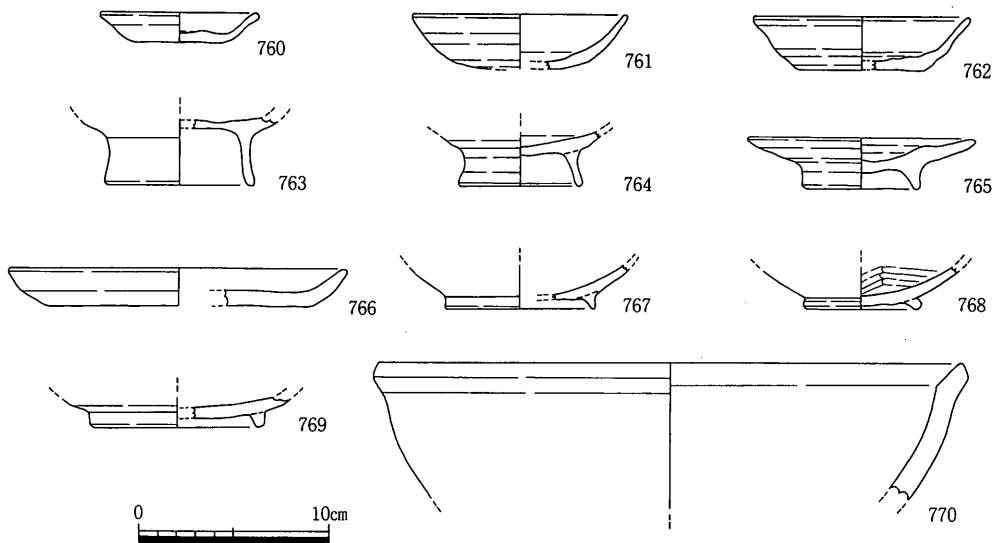
が2段施されており、上段の透しは杯部の底部に着いている。733は須恵器高杯で口縁部端部と脚部の端部が欠損している。杯部の立ち上り部は肥厚し、脚部は下半で大きく開いている。734は須恵器高杯の脚部で端部は下方に拡張し外側に面をもつ。脚部には長方形の2方透しが施されている。

735~755はE 2区包含層出土の瓦である。735~752は平瓦で735~738・741・742・746~748・750の凸面には縄目叩きが施されており、736・737の縄目叩きは2重に施されている。743の凸面には幅広の平行叩きが施されている。736・738の凹面と737・747の凹・凸面には糸切り痕が認められる。751の凹面には布端痕が認められる。753~755は丸瓦で754・755の凹面には糸切り痕が認められる。

756~759はE 2区包含層出土石器である。756・757は打製石庖丁である。756の側縁には抉りが施されている。757は欠損しているが長方形に近いものと思われる。側縁の抉りは弱く、刃部は緩く外湾している。758はエンド・スクレイパーで端部に両面から刃部を作り出している。

E 3区は遺構面が削平されている部分が多く、包含層からは古代を中心とした土器の細片が少量出土したのみで図化は出来なかった。

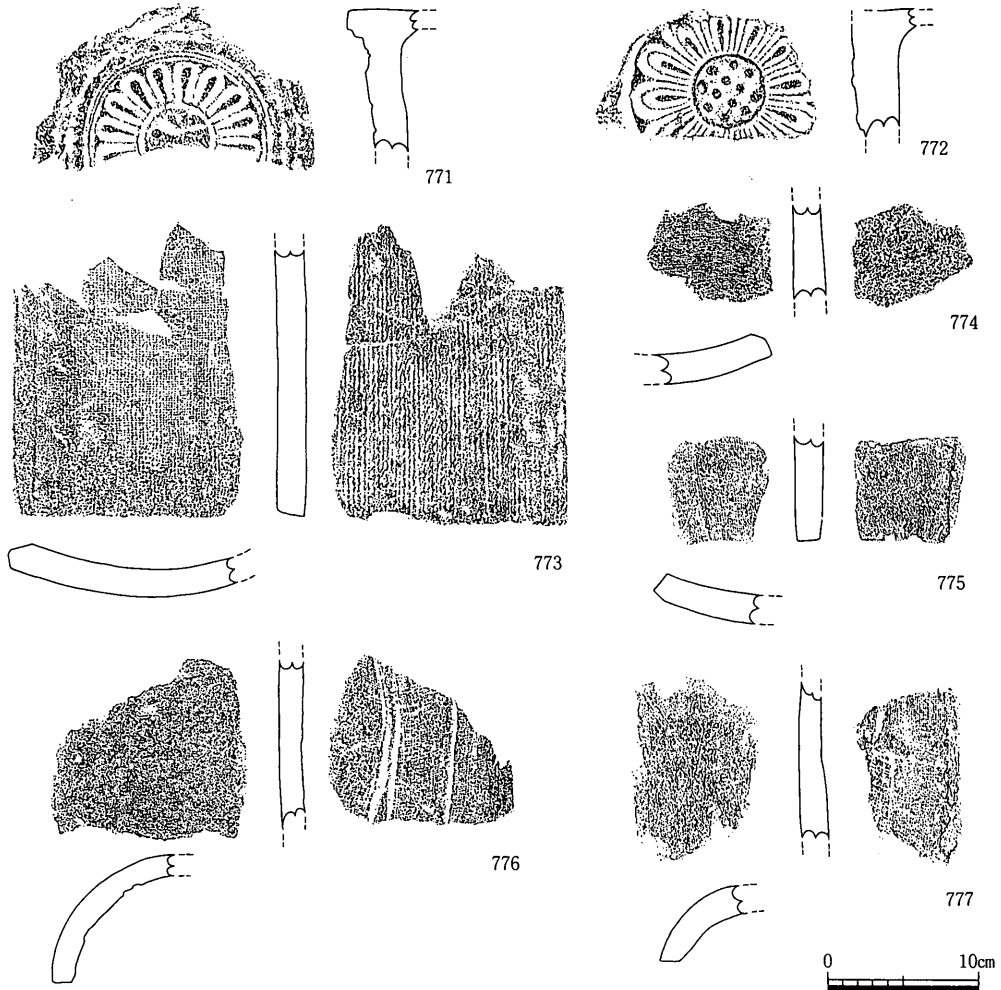
760~770はE 5区包含層出土土器である。760は土師器小皿で口縁部は緩く外反し、立ち上り部内面を強くナデている。底部外面は糸切りになっている。761・762は土師器杯で761は立ち上り部が丸みを帯び、762は体部を強くナデており両者とも底部はヘラ切りである。763・764は足高の高台が付く土師器杯の底部で、763の高台は3.0cmと非常に高くなっている。765は土師器高台付き皿で、皿部の器高と高台の器高が等しくなっている。皿部の内面は途中で段になり底部に向って窪んでおり、口縁部は浅く直線的に開く。高台は断面方形で直線的に外開きになる。768は黒色土器A類碗で、体部内面は幅広のヘラミガキを格子状に施している。体部外面下半には回転ヘラケズリが施されており、砂粒は左回りになっている。底部には丸みを帯びた高台が外側に強く踏張るように貼り付けられている。770は須恵器鉢で、口縁部は内面に鋭い稜を形成して短く直線的に立ち上り、口縁部端部は外側に面を作る。内面はナデているが、体部外面は摩滅している。在地産のものと思われる。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
760	土・小皿	8.4	1.5	4.6	細・少	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底糸切り	
761	土・杯	11.0		7.5	精緻	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
762	土・杯	11.4	2.8	6.7	中・少	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
763	土・高台杯			7.8	中・多	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
764	土・高台杯			6.4	精緻	良好	浅黄橙・灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
765	土・高台皿	11.8	2.7	6.2	精緻	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
766	土・皿	17.6	2.0	13.6	粗・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ		
767	黒A・碗			7.7	精緻	良好	黒・にぶい橙	不明	不明		金罌母
768	黒A・碗			5.9	細・少	良好	黒・灰白	ケズリ・ナデ	ミガキ		
769	須・杯			9.2	細・少	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
770	須・鉢	30.8			精緻	良好	灰・灰白~灰	ナデ	ナデ		

第524図 E 5区包含層出土遺物 (1) (1/4)

771~777はE5区包含層出土の瓦である。771・772は軒丸瓦でいずれも瓦当部のみのものである。771は細弁17葉軒丸瓦である。瓦当部の直径は16.7cmで、厚さは4.0cmである。外区は外縁と内縁に分かれる。外区外縁は幅1.3cmで外区内縁との比高は1.1cmである。外区外縁の文様は破損、摩滅のため観察が困難であるが、おそらく素縁と思われる。外区内縁には珠文が配されている。蓮弁は単弁で最大幅が1.0cmで、中房の回りには凹線が1条



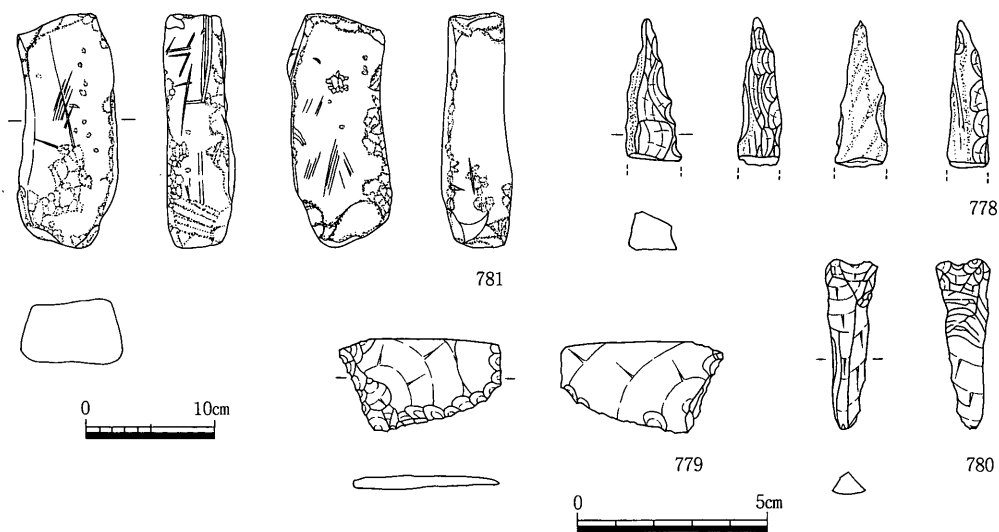
遺物番号	直径	中房径	蓮子数	内区径	弁幅	弁数	外区幅	外区内縁幅	外区外縁幅	外区外縁高	形態・手法の特徴	備考
771	16.7	4.4	1+6	14.1	1.0	17	2.6		1.3	1.3	4.0	
772		4.8	4+8	12.6	1.4	12						外区と内区を別に製作

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
773	平瓦	1.9	縄目叩き	布目圧痕	6	1 6	中・普通	灰白	良好	凹面に糸切り痕	17.5
774	平瓦	2.0	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	6		粗・普通	灰白	良好		6.1
775	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕→ナデ	6	1 6	粗・普通	灰白・灰	良好		6.9
776	丸瓦	1.4	ナデ	布目圧痕	1	1	中・普通	灰	良好	凹面に布とじ合わせ痕	11.3
777	丸瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	1	1	粗・普通	灰	良好		10.2

第525図 E5区包含層出土遺物(2)(1/5)

巡り、中房の直径は4.4cmで蓮子は現存で中央に1個、その回りに3個ある。外区と内区の境には圏線が1条巡っている。丸瓦部と瓦当部を接合した後に接合用粘土を上から重ねている。772は単弁12葉軒丸瓦である。瓦当中央部のみの破片で、外区は僅かに残るのみである。瓦当幅は不明で瓦当厚は中房部で3.1cmとなっている。外区は分かれていない。内区は幅12.6cmで、蓮弁は単弁の中に子葉を配するもので最大幅は1.4cmである。間弁は外区側が肥厚し反転する。中房は直径4.8cmで蓮子は中央に4個、外側に8個を配している。この瓦は内区と外区の境で剥離しているが、この剥離部分に布目圧痕が認められるため、瓦当部の内区部分を先に製作したことが分かる。またこの布目圧痕のある面に向って瓦当面裏側から丸瓦部との接合用粘土が認められることから、この軒丸瓦は内区部分に粘土筒をはめ込んで粘土筒の厚みを外区として使用し、丸瓦部は粘土筒を半截して製作したものと考えられる。773~775は平瓦である。773は凹面に僅かに糸切り痕が残り、凸面には縄目叩きを施している。776・777は丸瓦で776は凹面に布の綴じ合わせ痕が認められる。

778~781はE5区包含層出土石器である。778は舟底形石器で、両側縁に剥離調整を加えている。断面は方形で厚手になっている。779はスクレーパーで3側縁に片面から調整を加えている。780はサヌカイト製の縦長剥片と思われる。背面には前段階の剥離の痕跡

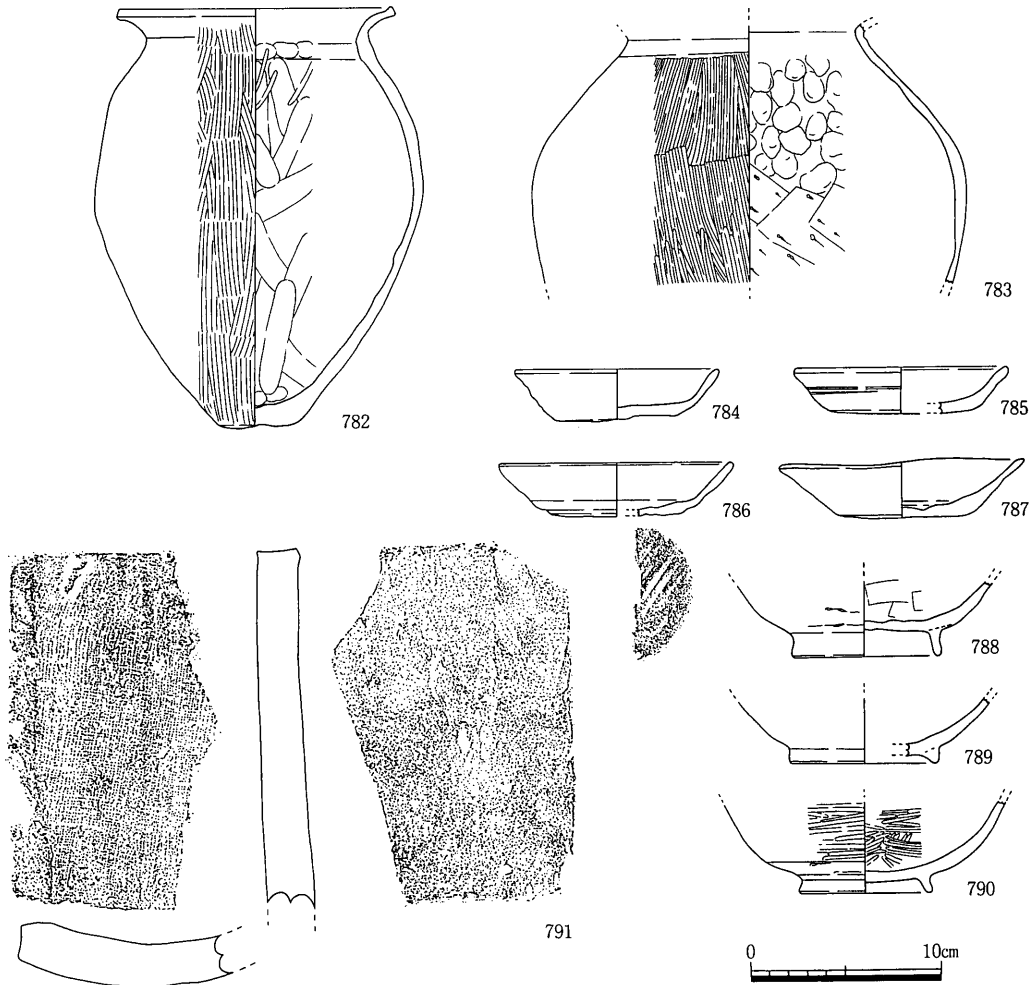


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
778	舟底形石器	3.7	1.4	1.0	4.7	サヌカイト		旧石器
779	スクレイパー	2.4	4.3	0.4	4.7	サヌカイト		
780	縦長剥片	4.5	1.3	0.6	2.9	サヌカイト		
781	砥石	18.2	7.1	4.9	1255.4	砂岩	砥ぎ痕有り	

第526図 E5区包含層出土遺物(3)(1/2, 1/6)

が認められる。腹面の上部には細かい調整があるため、あるいは何かの未製品かもしれない。781は砂岩製の砥石で4面とも使用している。

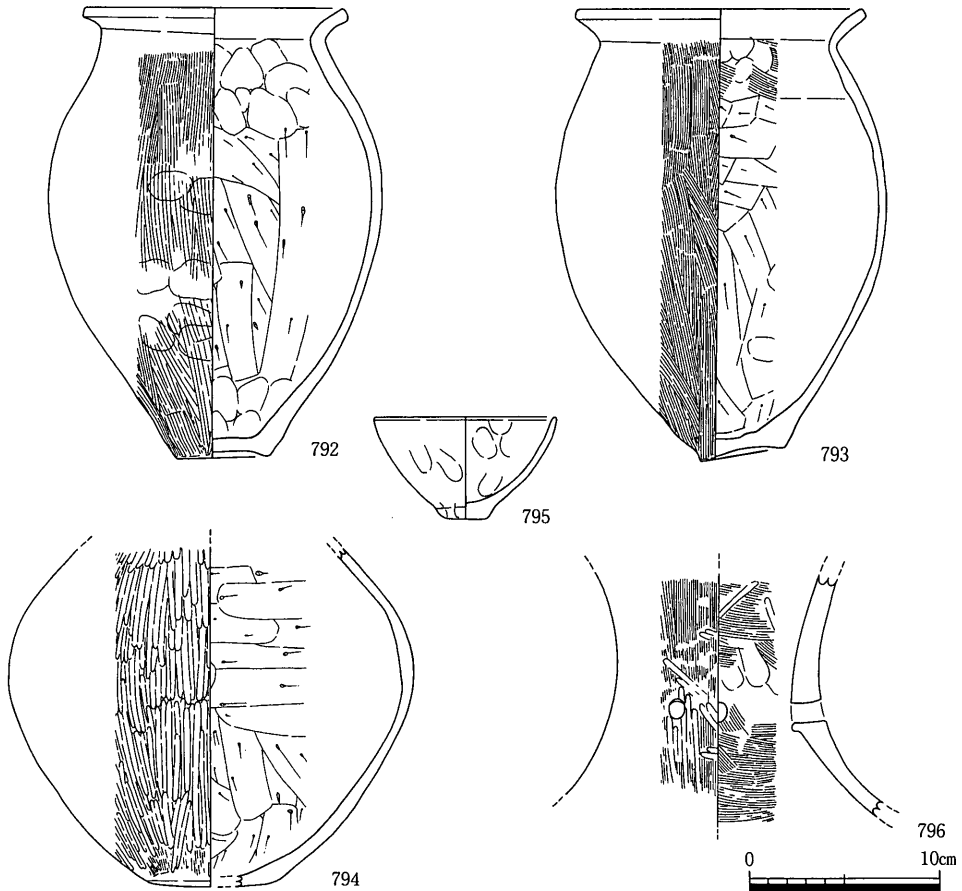
782～791はE 6区包含層出土遺物で、782は内面すべて指ナデで仕上げ、また頸部直下にはヘラ痕が残る。底は未調整で粗穀らしき痕がつく。783は外面体部下半をヘラミガキする。785は沈線が体部中位を巡る。786は底にヘラ切りの痕がつく。788は内面板ナデで



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
782	弥・甕	14.6	22.0	4.1	中・普	良好	浅黄	ハケ目	ナデ	底モミ痕	
783	弥・甕				中・多	良好	明褐	ハケ目→ミガキ	ナデ・ケズリ		
784	土・杯	10.8	2.3	6.3	中・普	良好	明赤褐	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
785	土・杯	11.1	2.4	7.7	細・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
786	土・杯	12.0	2.8	7.1	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラおこし	
787	土・杯	12.9	3.1	7.0	粗・多	良好	明赤褐～橙	ナデ	ナデ		
788	土・碗			7.9	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
789	黒A・碗	7.7			微・普	良好	黒灰・橙	ナデ	ミガキ		
790	黒B・碗			7.0	中・普	良好	黒	ミガキ	ミガキ		

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
791	平瓦	2.5	ナデ	布目圧痕	8	1 6	粗・多	暗灰	良好		19.5

第527図 E 6区包含層出土遺物 (1/4)

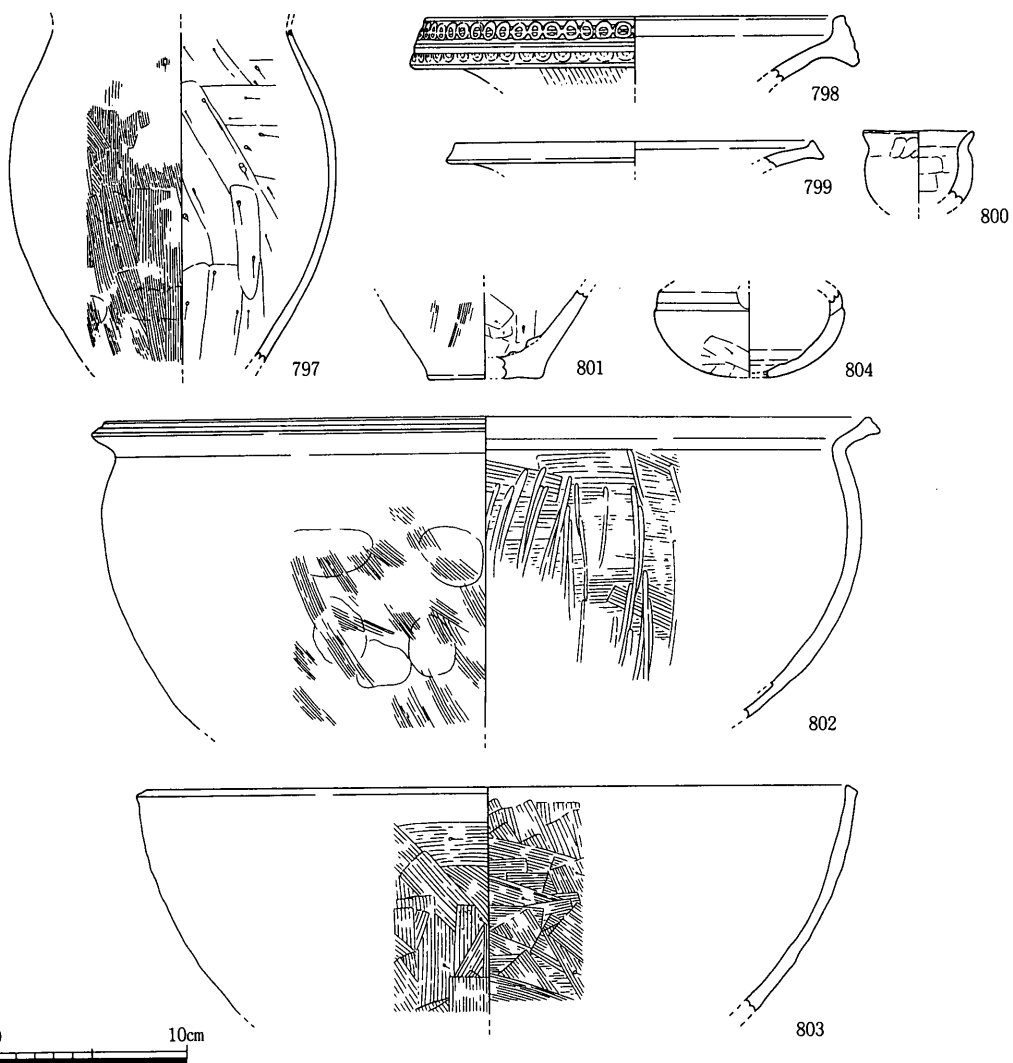


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法的特徴	備考
792	弥・甕	13.5	22.8	4.9	中・普	良好	橙・赤橙～灰	ハケ目	ケズリ		
793	弥・甕	15.2	22.6	4.6	中・普	良好	浅黄橙～赤褐	ハケ目	ハケ目→ケズリ		
794	弥・壺			6.9	粗・普	良好	浅黄・浅黄橙	ハケ目→ミガキ	ケズリ		
795	弥・鉢	9.6	5.1	2.2	中・多	良好	橙・浅黄～灰	ナデ	ナデ		
796	弥・器台				粗・多	良好	浅黄橙～黄橙	ハケ目→ミガキ	ハケ目→ミガキ	穿孔4ヶ所	

第528図 E 7 区包含層出土遺物 (1) (1/4)

ある。790は内・外面ともヘラミガキであるが外面下部をヘラケズリしている。

792～804はE 7 区包含層出土土器である。792～796は一括して出土した。792の内面のヘラケズリは口縁部にまで及ばない。793も同様である。794は外面ハケ目の後にきれいにヘラミガキを施す。795は小形の鉢である。底は高台状に突出し平底である。796は4箇所に穿孔がある。内・外面とも少しヘラミガキした形跡がある。798は下段の竹管文を刺突したあと沈線を巡らしさらにその上から竹管文を再び刺突している。801は平底となっている。802は内面に簡単なヘラミガキを施している。口縁部は屈曲し端部は上下に若干拡張し外側に面を作り、端面には沈線が巡る。803は口縁部端部は外側に面をもつ。胴部内・外面には丁寧にハケ目を施している。804は外面底部を静止ヘラケズリしている。

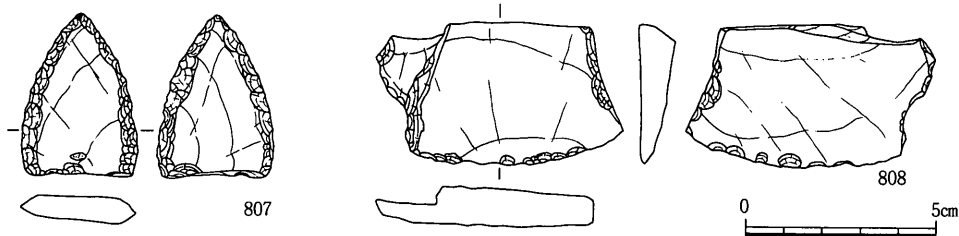
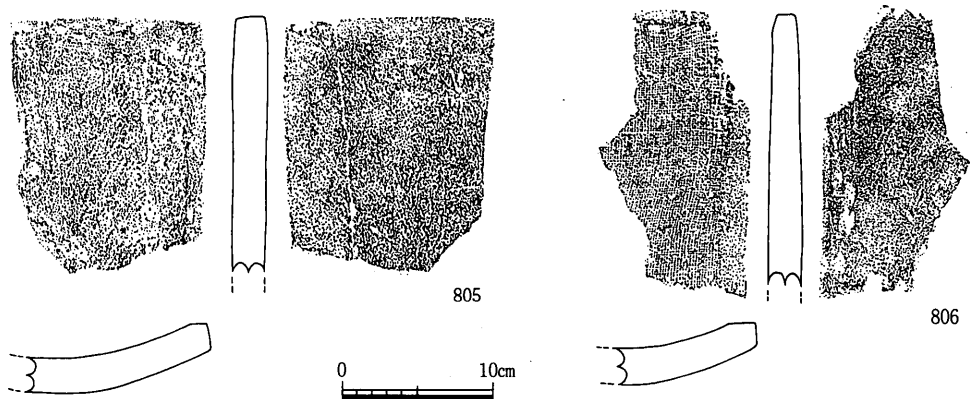


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
797	弥・甕				中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ケズリ		
798	弥・壺	22.0			中・普	良好	灰・橙	ハケ目	ナデ	口縁に竹管文	
799	弥・壺	19.9			中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
800	ミニ・壺	5.8			中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ		
801	弥・甕			6.2	中・普	良好	浅黄～黄橙	ハケ目→ナデ	ケズリ		
802	弥・鉢	40.1			中・普	良好	橙	ハケ目→ナデ	ハケ目→ミガキ		
803	弥・鉢	38.0			粗・普	良好	浅黄橙→赤褐	ケズリ→ハケ目	ケズリ→ハケ目		
804	須・ハ				細・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		

第529図 E 7区包含層出土遺物(2)(1/4)

805・806はE 7区包含層出土瓦で、両者とも平瓦である。凹面には布目圧痕、凸面はナデている。806は凹面端部にも面取りを行なっている。

807・808はE 7区包含層出土石器である。807は平基の打製石鏃で剥片を利用しており調整は側縁に施しており、基部には施していない。両面とも側縁以外は主要剥離面をその



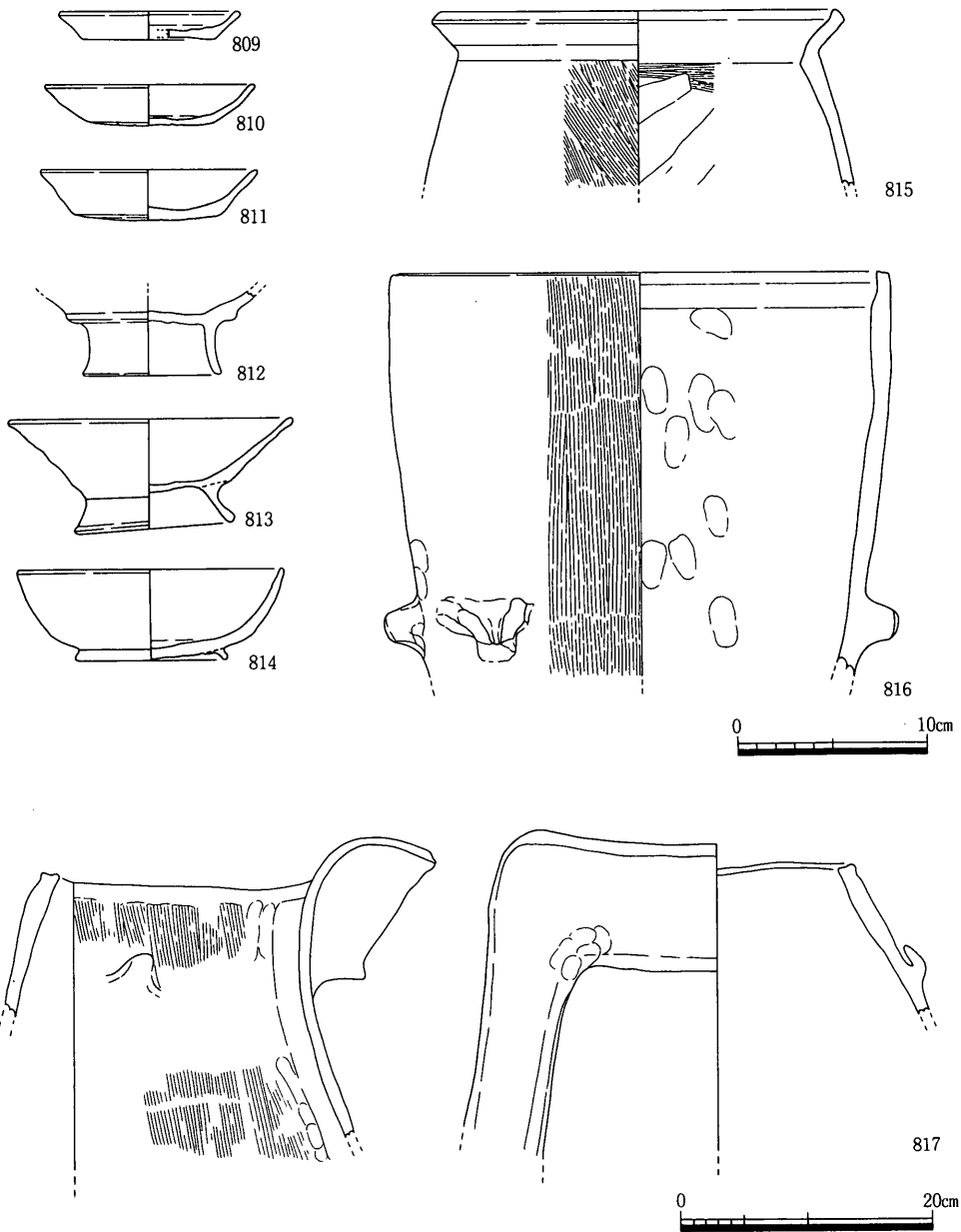
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
805	平瓦	2.1	ナデ	布目圧痕	8	1.8	粗・昔	灰白	良好		16.2
806	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	8	1.8	粗・昔	灰白	良好		17.0

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
807	石鏃	4.1	3.1	0.7	10.2	サヌカイト		
808	打製石庖丁	5.8	3.6	1.0	27.2	サヌカイト		

第530図 E7区包含層出土遺物(3)(1/2, 1/5)

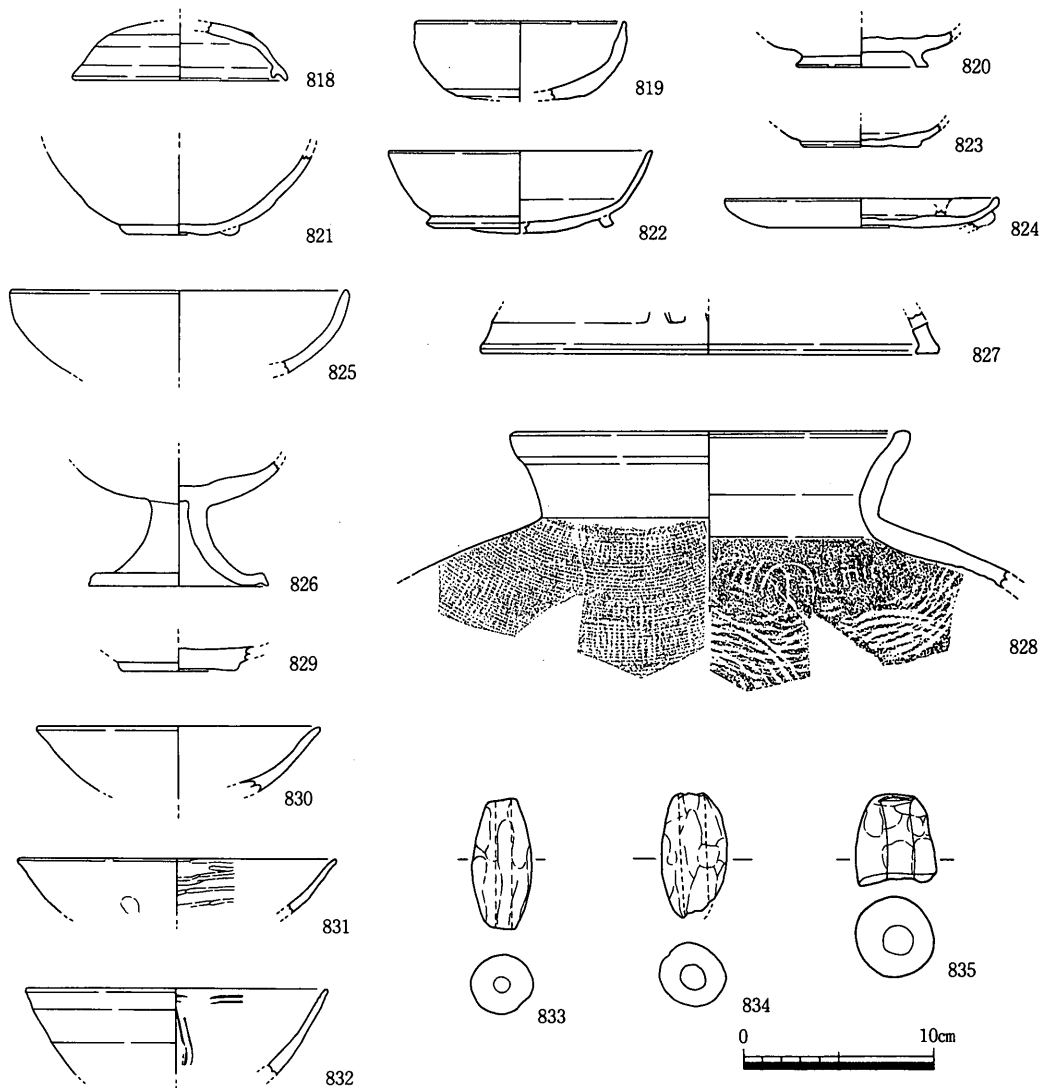
まま利用している。808は打製石庖丁である。平面形はほぼ長方形で刃部は緩く外湾している。側縁の片方には明確に抉りを施しているが、片方は明確ではないが両面から調整を加えている。刃部は片面から作り出している。

809～832はE8区包含層出土土器である。810は土師器杯で体部を2段にナデている。底部はヘラ切りである。812・813は土師器の高台付杯で、足高の高台になっている。812は体部立ち上り部外面が突帯状に肥厚し、高台は外反している。813は体部は直線的で、高台は直線的に外開きになる。814は土師器碗で、体部は内湾して立ち上がる。高台は外開きになるが、内側を強くナデている。815は土師器甕で口縁部端部を上方に拡張している。体部と口縁部の境を強くナデており、体部内面の上部にはハケ目が見られる。816は土師質の甌である。体部は直線的に緩く外開きで、口縁部端部は上側に面をもつ。口縁部



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
809	土・小皿	9.6	1.4	7.0	中・少	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	角閃石
810	土・杯	11.1	2.1	6.5	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
811	土・杯	11.5	2.6	7.5	粗・普	良好	灰白	不明	不明	底ヘラ切り	
812	土・高台杯			7.1	粗・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
813	土・高台杯	15.1	5.7	8.5	微・少	良好	橙	ナデ	ナデ		
814	土・碗	14.1	4.9	8.1	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
815	土・甕	20.6			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目・ナデ	ハケ目→ナデ		
816	土・飯			26.2	粗・普	良好	明赤褐	ハケ目・ナデ	ナデ		
817	土・甕				粗・普	良好	ニブイ褐～黒褐	ハケ目	ナデ		

第531図 E 8 区包含層出土遺物 (1) (1/4, 1/6)



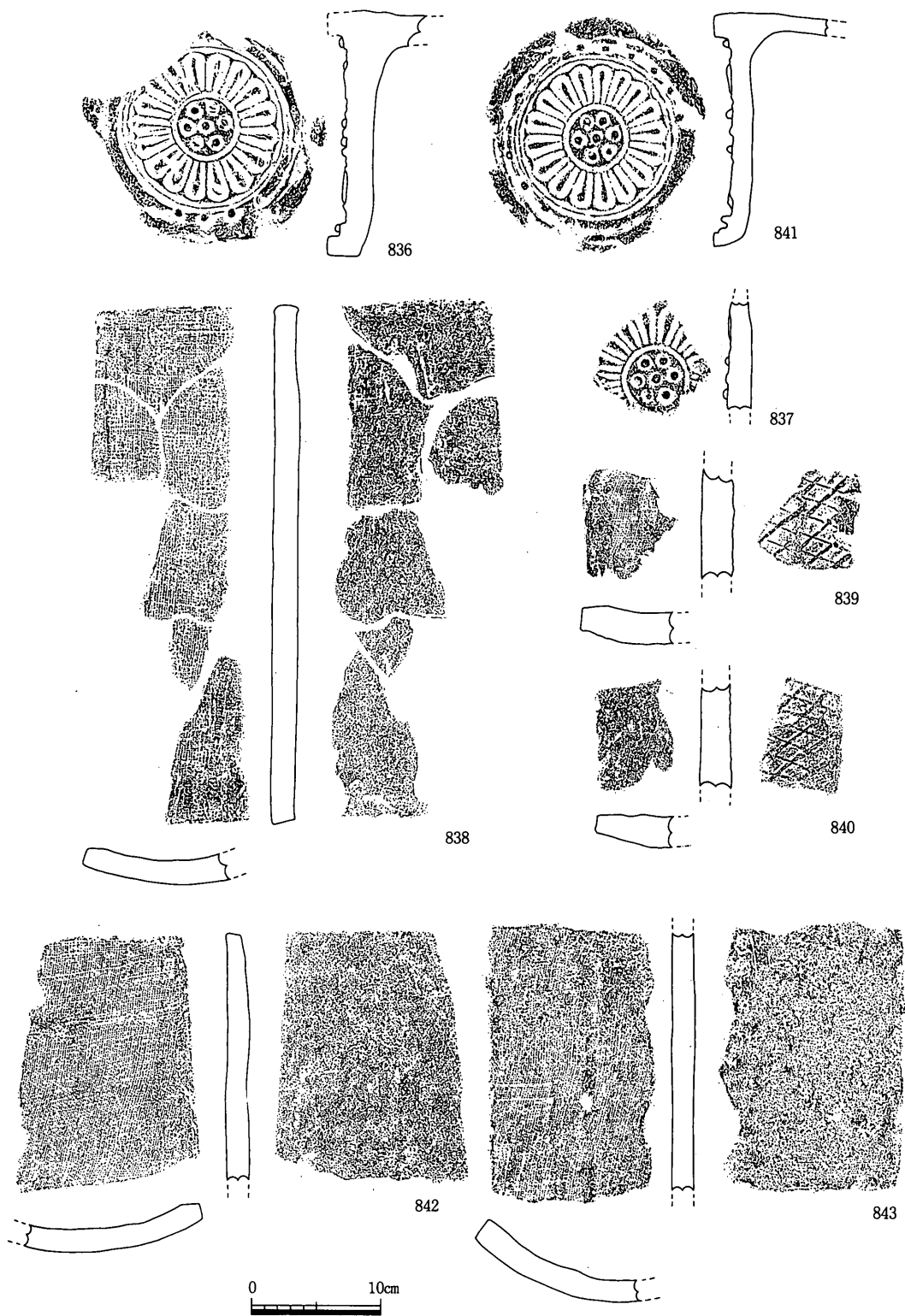
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
818	須・杯蓋	11.4		7.4	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	自然粘付着	
819	須・杯	11.2	4.1	6.8	粗・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
820	須・杯			7.0	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
821	瓦質・碗			6.2	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
822	須・杯	14.0	4.3	9.8	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
823	須・杯			6.4	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
824	須・皿			11.0	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	3個体の重ね焼き	
825	須・鉢	18.0			細・少	良好	灰白・灰	ナデ	ナデ		
826	須・高杯			9.5	細・多	不良	灰白	ナデ	ナデ		
827	須・硯			38.8	粗・普	良好	灰黄	ハケ目	ナデ	円面硯	
828	須・壺	21.1			細・普	良好	灰	叩き→カキ目	ナデ		
829	緑・碗			6.3	細・普	良好	灰白	ナデ	不明	削り出し高台	
830	緑・碗	15.0			精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ		
831	瓦・碗	16.9			精緻	良好	黒～灰白	ナデ	ミガキ		
832	青・碗	16.0			精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	(軸)オリーブ灰	
833	土鏝	短軸3.3	長軸6.8		細・普	良好	浅黄橙・橙	ナデ	不明		
834	土鏝	短軸3.5	長軸6.6		中・普	良好	明赤褐	ナデ	不明		
835	土鏝	短軸4.2	長軸4.8		中・普	良好	橙	ナデ	不明		

第532図 E 8区包含層出土遺物(2)(1/4)

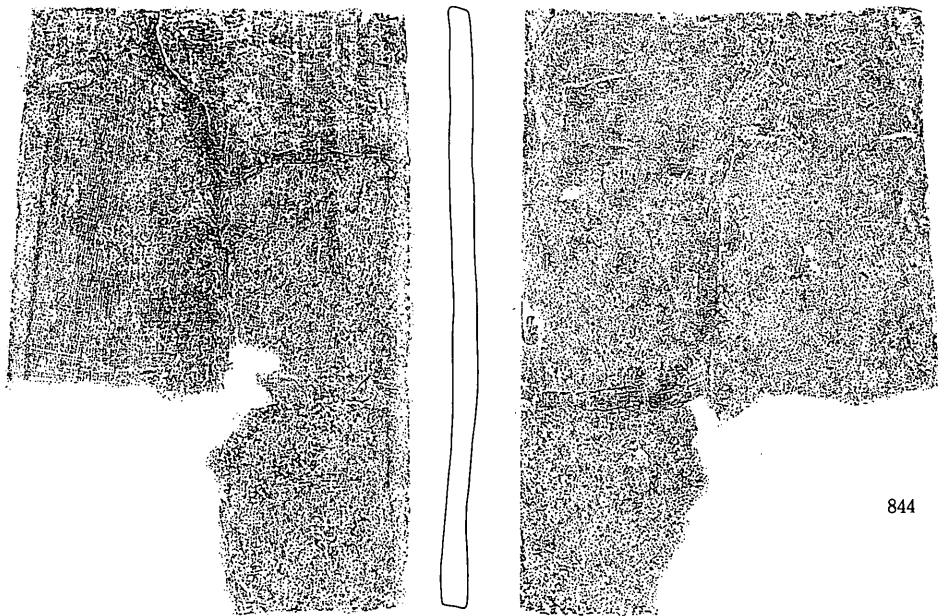
は内側を強くナデている。体部中程に断面方形の把手を貼り付けている。外面は全体にハケ目を施し、内面はナデで指押さえ痕が見られる。下半は欠損しており蒸し穴の個数は不明である。817は土師質の竈である。正面上部と側部に大きな鏝を貼り付けており、上から6cmほどの所に把手を貼り付けているが、把手はかなり折り曲げられ器壁に付きそうである。外面には全体にハケ目を施している。820は須恵器杯で立ち上り部の内側に高台を貼り付けている。821は瓦質土器碗で体部は丸味を帯び、底部には形骸化した断面半円形の高台を貼り付け、底部は接地している。822は須恵器杯で高台は断面方形で外開きになるが、底部は高台より突出している。823は須恵器杯で底部が高台状に突出している。824は須恵器皿で体部は上半で上方に屈曲する。外側に他の皿の口縁部が付着しており、皿を重ねて焼いており、それが全体に釉がかかってしまい剥がれなくなったものである。皿の内側には高台が残っており、上に高台の付いた杯を置いて焼いたがこれも釉がかかり剥がれなくなったもので、合計3枚重ねて焼いている。827は円面硯の底部である。828は須恵器甕で口縁部は端部付近で内湾する。体部外面は叩きの後にカキ目を施している。内面は同心円の当て具痕があるが、上部はその上からナデている。829・830は緑釉陶器碗で829は突出した削出し高台である。生地は軟質である。830は内・外面に薄く釉薬が残り、生地は硬質のものである。832は青磁碗で、龍泉窯系と思われる。

833～835はE 8区包含層出土土錘で、平面形は長楕円形で中央部が膨らんでいる。体部中央部に穿孔されている。

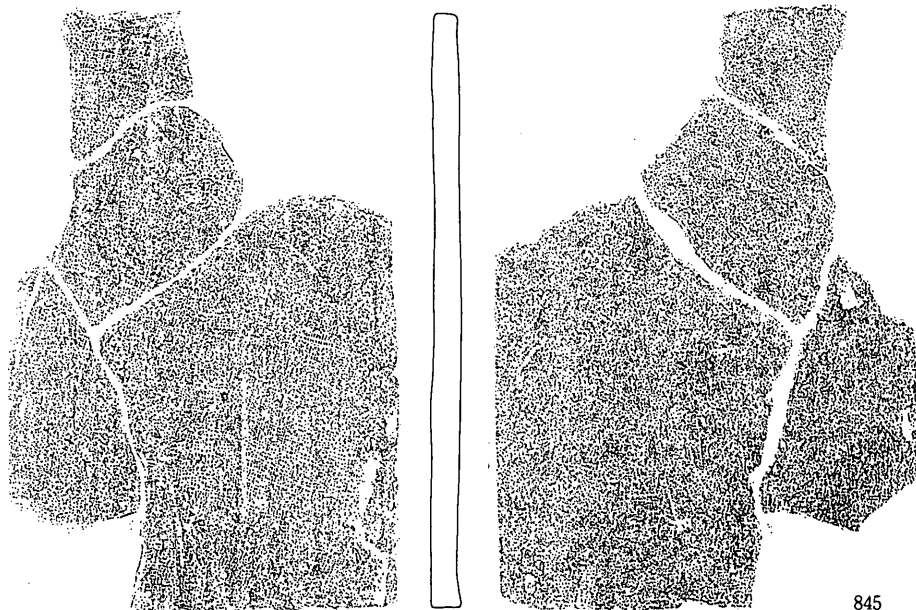
836～868はE 8区包含層出土瓦である。836～840はE 8区の西部の包含層から出土したものである。これに対し841～868はE 8区の西部でS B 07の北側2.5mの所の現用水路付近で検出した瓦溜りのものである。瓦溜りは位置的にS D 16に重なっているが、断面観察によると瓦溜りはS D 16によって切られる包含層中に形成されているものである。836は細弁17葉軒丸瓦である。瓦当部の直径は18.4cmで、厚さは2.9cmである。外区は外縁と内縁に分かれ、外区外縁は幅1.3cmは素縁である。外区外縁と内縁との比高差は1.0cmで外区内縁には珠文を配している。外区幅は2.6cmである。外区と内区の間には圏線を1条巡らせている。蓮弁は単弁で最大幅1.0cmと細いもので間弁は上部が隣のものとなつがっている。中房の周囲には凹線が1条巡り、中房の直径は4.4cmで中に蓮子を中央に1個、周りに6個配しており、蓮子は大きく突出している。丸瓦部は瓦当裏面の接合部の粘土を抉って接合し、その上から接合用粘土を貼り付けナデている。全体に灰白色で堅い焼成となっている。



第533图 E 8区包含层出土遗物(3)(1/5)



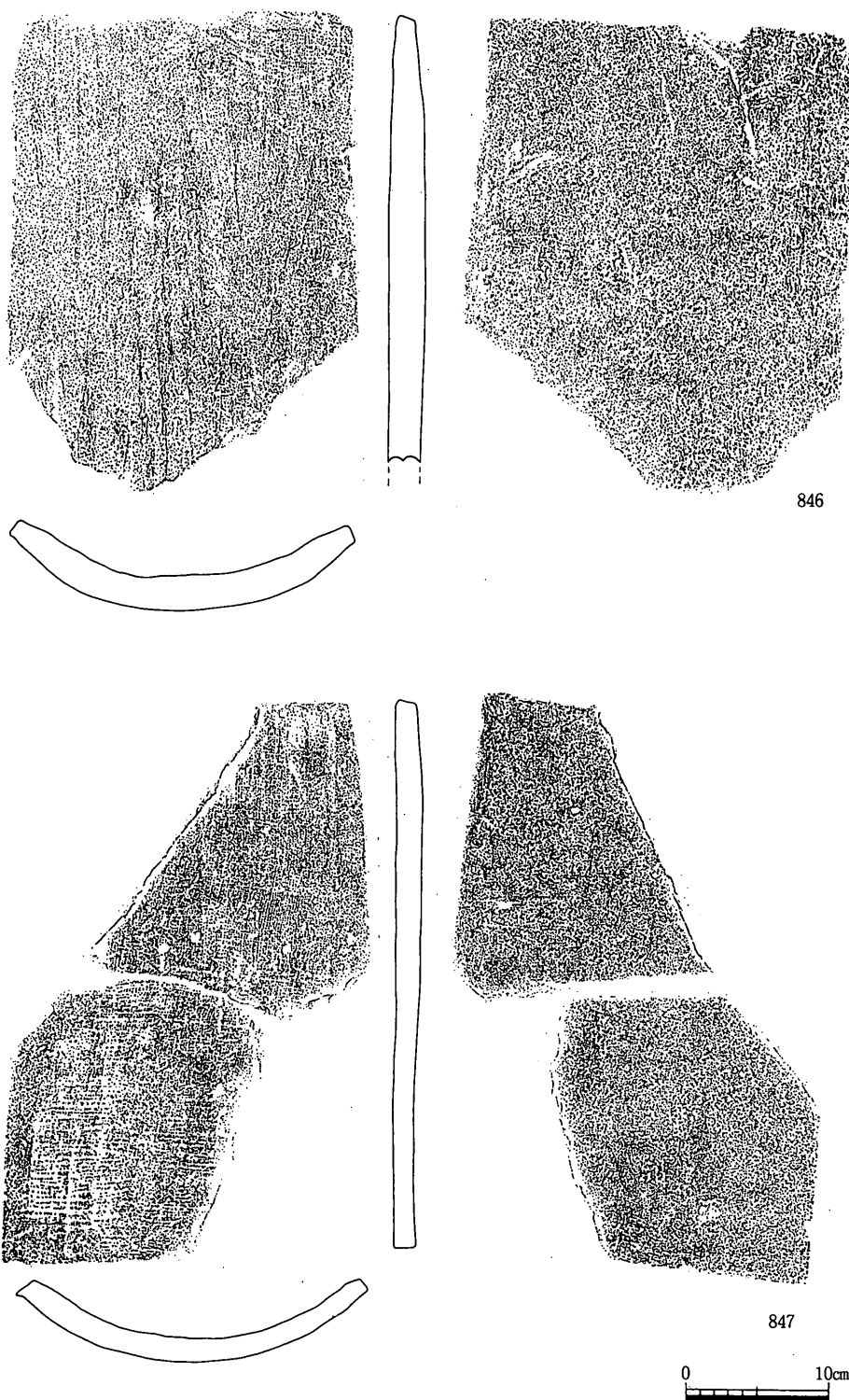
844



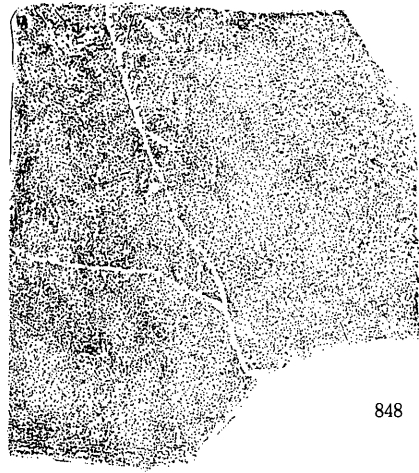
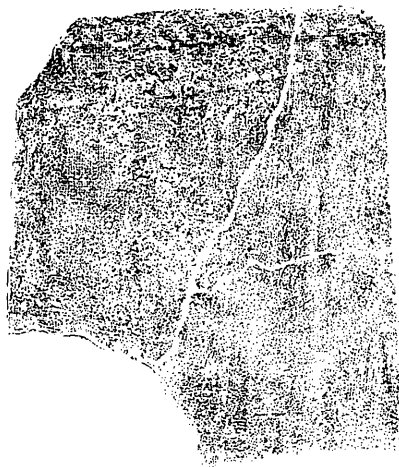
845



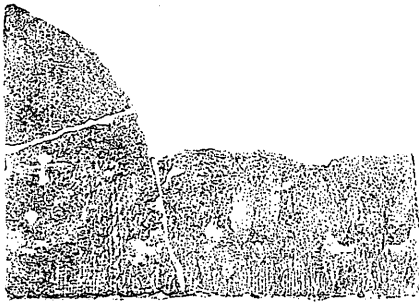
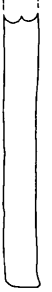
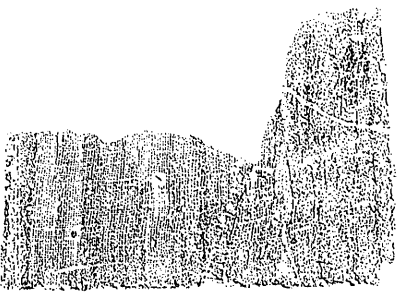
第534图 E 8区包含層出土遺物(4)(1/5)



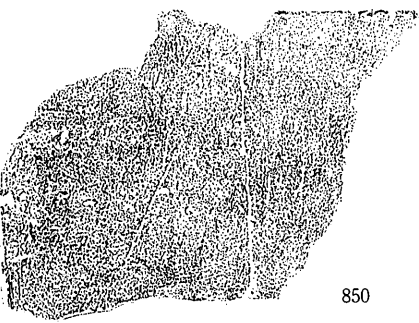
第535图 E 8区包含层出土遗物(5)(1/5)



848



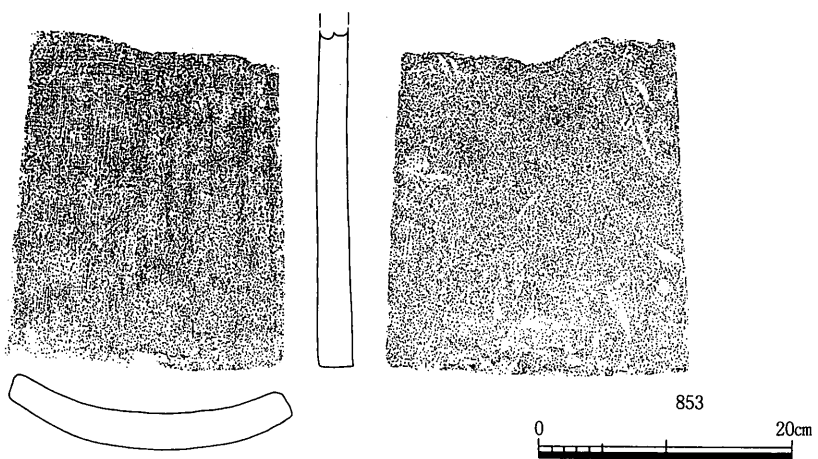
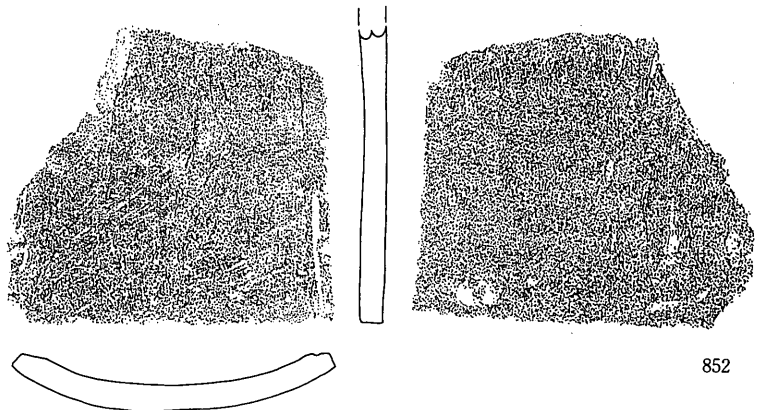
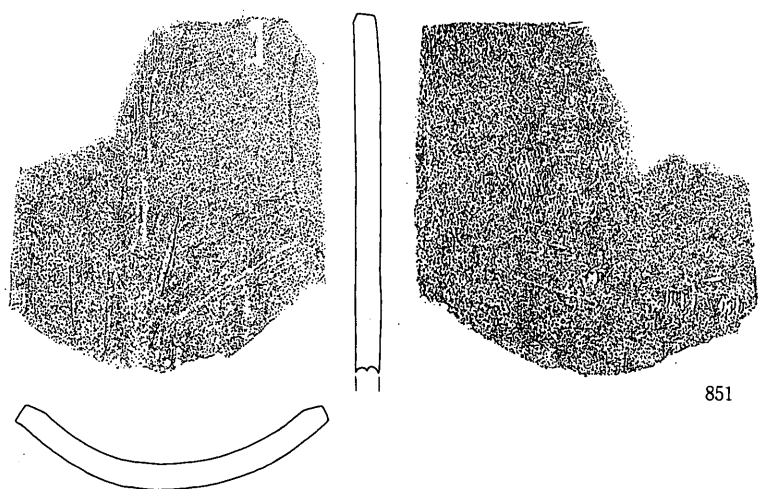
849



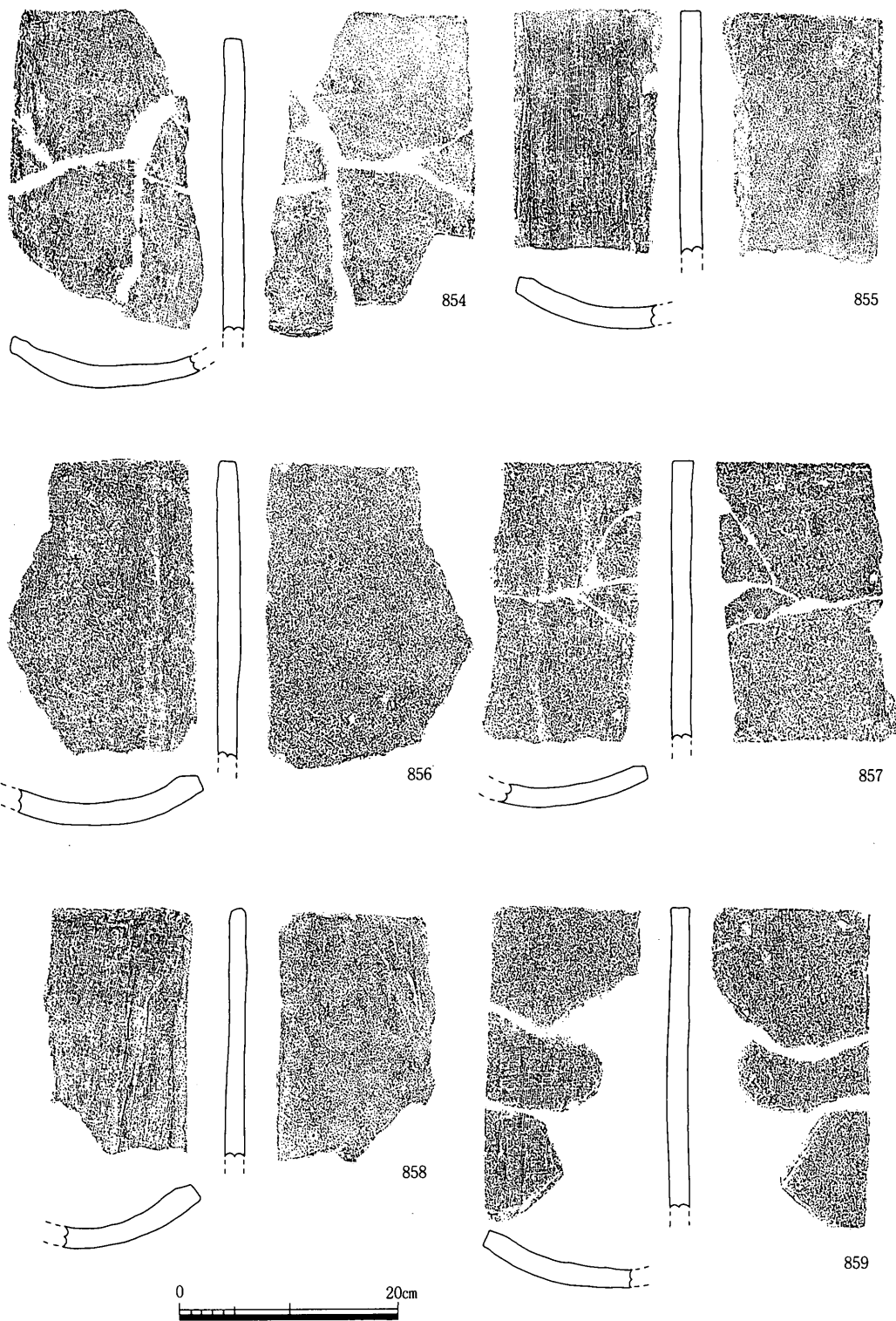
850



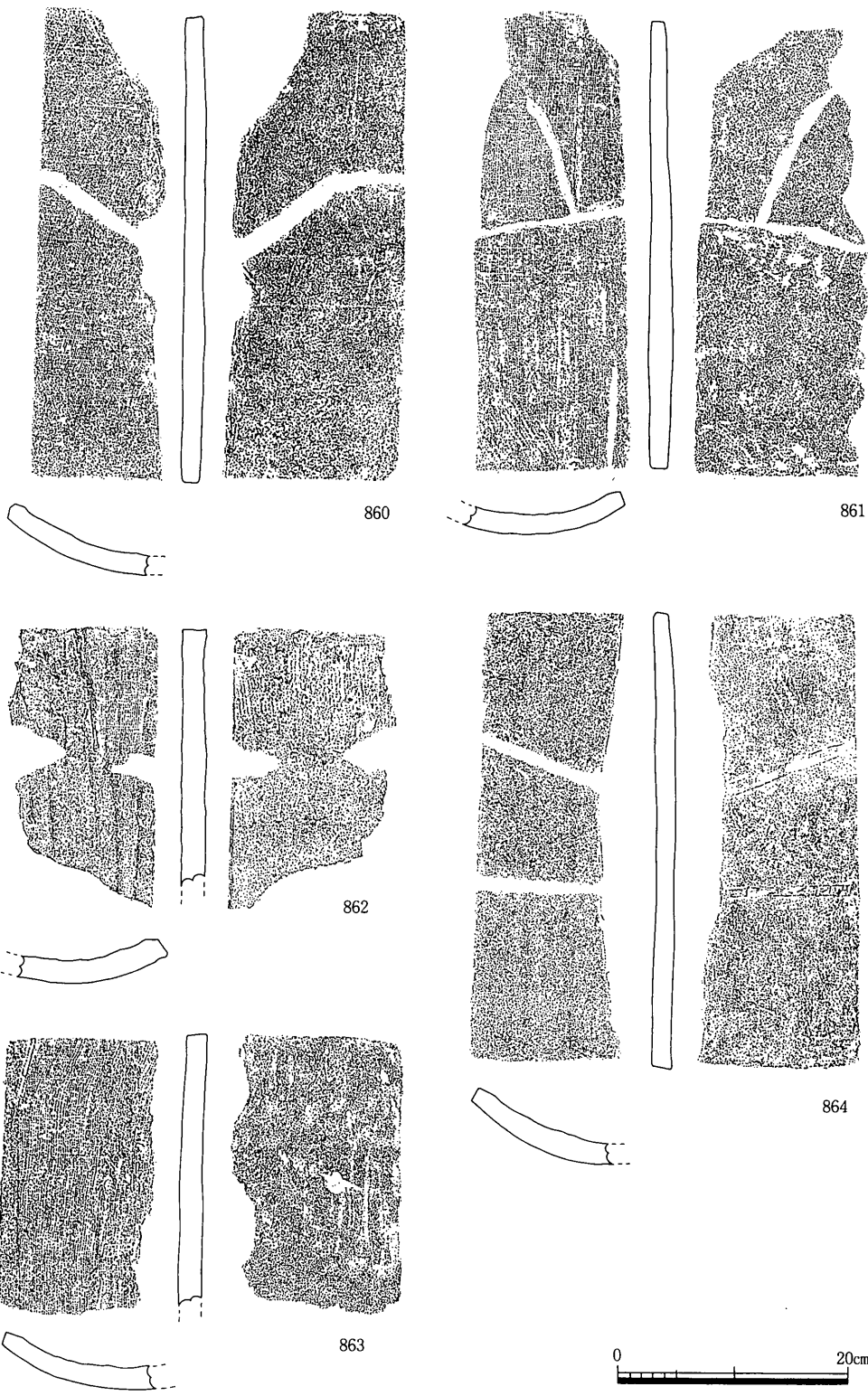
第536图 E 8区包含层出土遗物(6)(1/5)



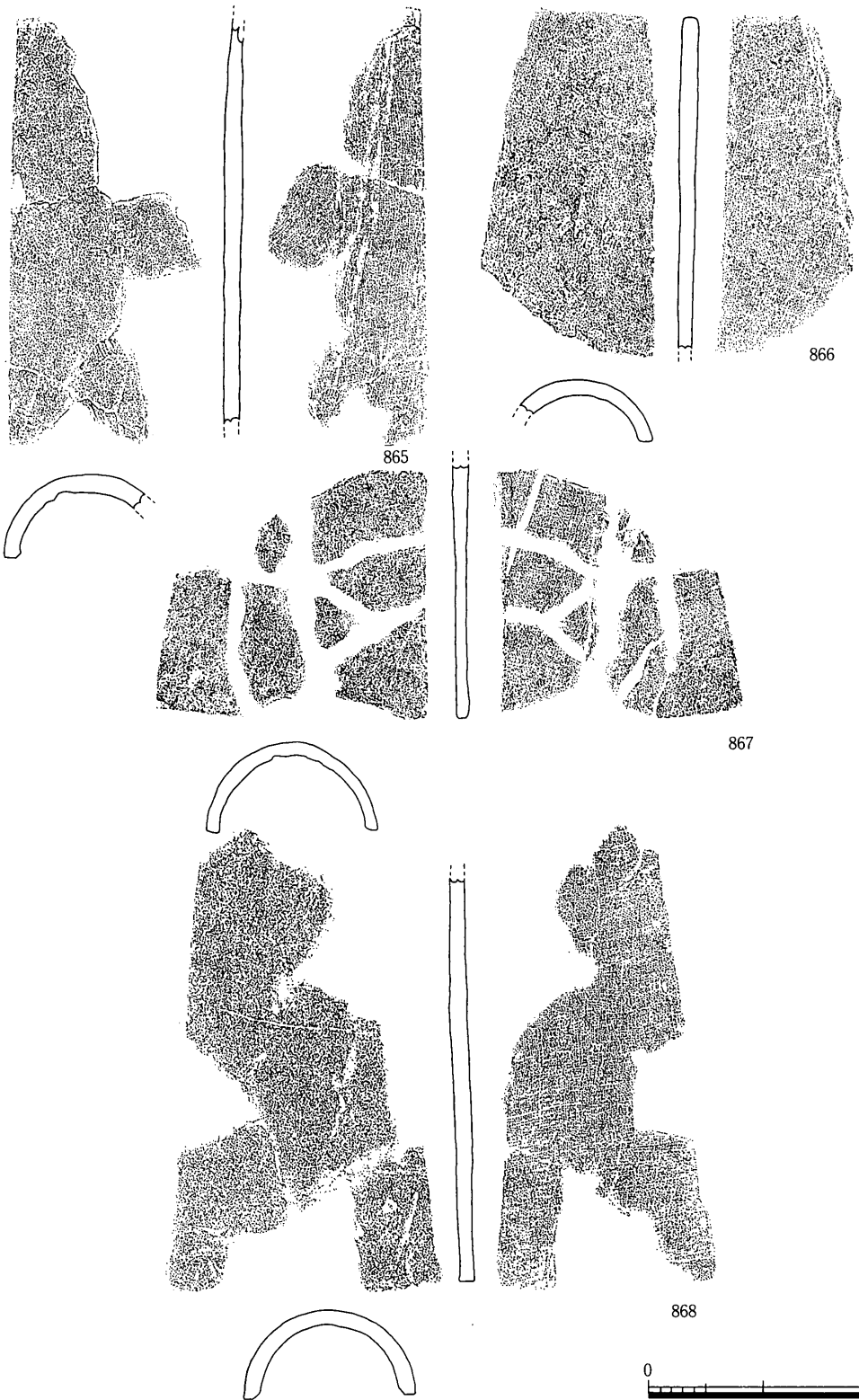
第537图 E 8 区包含層出土遺物 (7) (1 / 6)



第538图 E 8区包含層出土遺物(8)(1/6)



第539图 E 8区包含層出土遺物(9)(1/6)

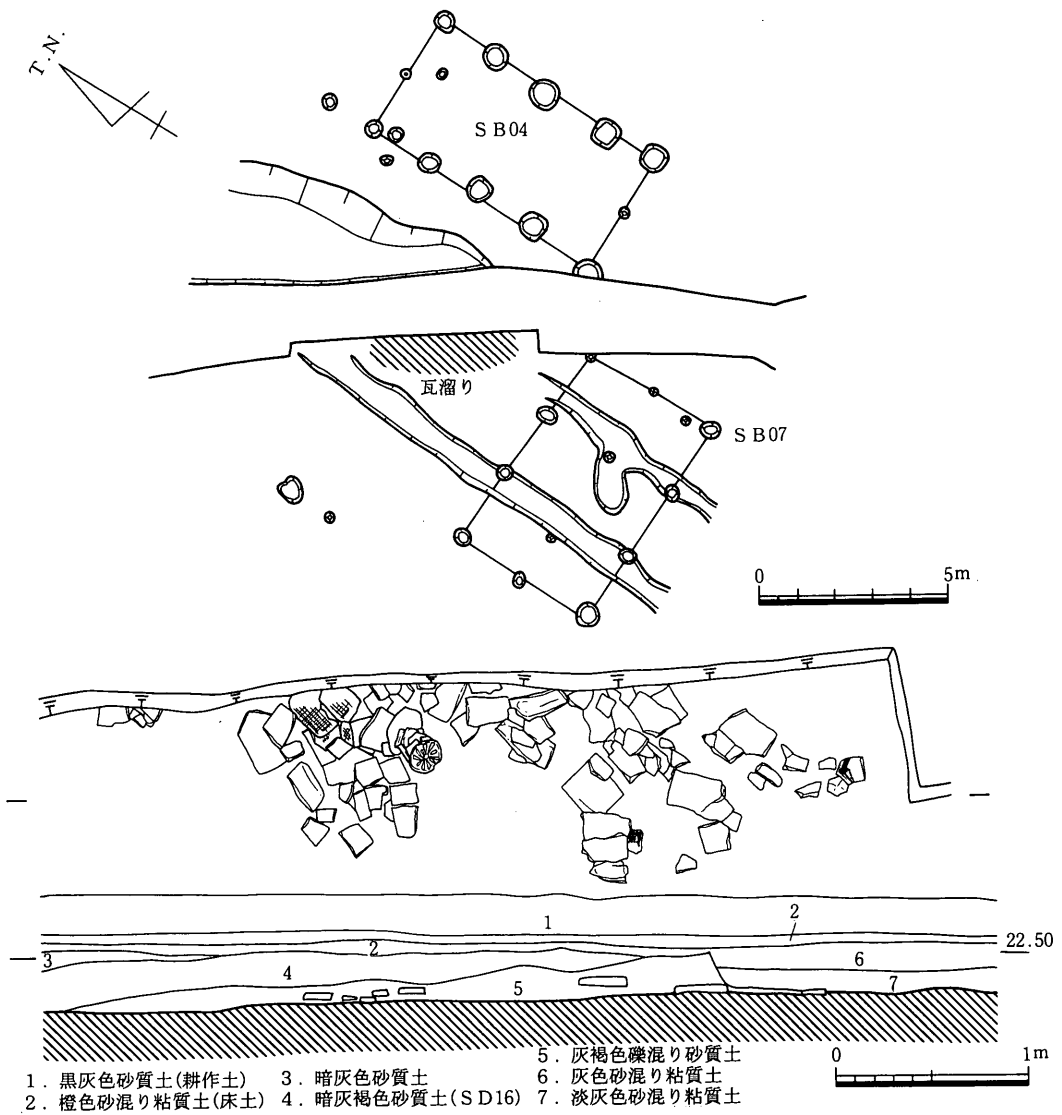


第540图 E 8区包含盾出土遺物(10)(1/6)

遺物番号	直径	中房径	蓮子数	内区径	弁幅	弁数	外区幅	外区内縁幅	外区外縁幅	外区外縁高	形態・手法の特徴	備考
836	18.4	4.4	1+6	15.8	1.0	17	2.6	1.3	1.3	2.9		
837	4.4	4.4	1+6		1.0	17						
841	17.5	4.4	1+6	14.1	1.0	17	2.6	0.9	1.7	2.4		

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
838	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	6	1 8	中・普	灰黄	良好		39.3
839	平瓦	2.4	格子目叩き	布目圧痕	8		粗・普	淡黄	良好	斜格子	8.3
840	平瓦	2.4	格子目叩き	布目圧痕・ナデ	8		粗・多	灰黄	良好	斜格子	8.0
842	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	6	1 6	中・多	黒	良好		19.0
843	平瓦	1.7	板ナデ	布目圧痕	1		中・普	黒	良好		21.0
844	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕	8	1 6	粗・普	黒	良好	模骨痕	38.6
845	平瓦	2.1	ナデ	布目圧痕	8	1 6	粗・普	黒	良好		39.1
846	平瓦	2.6	ナデ	布目圧痕→板ナデ	8	1 1	粗・普	黒	良好		32.0
847	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕	3	1 8	粗・普	黒	良好	模骨痕	38.5
848	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕→ナデ	3	1 8	粗・多	灰白	良好		29.7
849	平瓦	2.4	縄目叩き→ナデ	布目圧痕・板ナデ	3	1 6	粗・普	灰白～灰	良好		18.3
850	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕・ナデ	3	1 6	中・普	灰白～灰	良好	凹面に分割突帯痕	19.4
851	平瓦	2.0	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→板ナデ	8	1 6	粗・多	灰白	良好	凹面に糸切り痕	27.2
852	平瓦	2.0	縄目叩き→板ナデ	布目圧痕→板ナデ	3	1 6	中・普	灰	良好	凹面に糸切り痕	23.2
853	平瓦	2.8	ナデ	布目圧痕→ナデ	2	1 6	中・多	灰白	良好		26.3
854	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕→ナデ	2	1 6	粗・多	黒・暗灰～黒	良好		29.3
855	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	6	1 6	粗・普	黒	良好		22.2
856	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	3	1 8	粗・多	黒	良好		26.5
857	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕→ナデ	8	1 6	粗・多	浅黄～灰	良好		25.3
858	平瓦	2.1	ナデ	布目圧痕	8	1 9	粗・普	灰白	良好		22.3
859	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕	8	1 6	中・普	黒	良好		28.5
860	平瓦	1.8	板ナデ	布目圧痕	6	1 6	中・普	灰白	良好	側面布目圧痕残る、一枚作り	44.5
861	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕→板ナデ	2	1 6	粗・多	黒	良好	凹面に糸切り痕、模骨痕	38.8
862	平瓦	2.2	縄目叩き→ナデ	布目圧痕・板ナデ	2	1 6	粗・多	灰白～灰	良好	模骨痕	24.8
863	平瓦	2.0	板ナデ	布目圧痕	8	1 6	中・普	灰	良好		23.7
864	平瓦	1.8	板ナデ	布目圧痕	8	1 6	中・普	灰白	良好		39.8
865	丸瓦	1.6	ナデ・板ナデ	布目圧痕	1	2	中・多	浅黄	良好	凹面布縁じ合わせ痕	34.8
866	丸瓦	1.5	ナデ	布目圧痕	1	1 1 6	粗・多	灰白	良好	凹面布縁じ合わせ痕	28.5
867	丸瓦	1.4	縄目叩き→ナデ	布目圧痕	1	1 1 6	中・多	灰白	良好		22.2
868	丸瓦	1.2	板ナデ	布目圧痕	1	5 1 6	中・普	灰	良好		40.8

837は軒丸瓦の瓦当部の中央部分の破片である。瓦当全体の規模は不明であるが、中房の直径は4.4cmで、蓮子を中央に1個、周りに6個配している。蓮弁の形状は全体の判明しているものがないが最大幅1.0cmの細弁のものである。中房径や蓮子配置、蓮弁の形状から考えて836と同文で蓮弁も17葉と思われる。838～840は平瓦で839・840の凸面には斜格子叩きを施している。841は瓦溜り出土の細弁17葉軒丸瓦である。瓦当部の直径は17.5cm、厚さは外区部分を含んで2.4cmである。外区は外縁と内縁に分かれ、外区外縁は幅1.7cmで素縁である。外区内縁には珠文を配しており外区幅は2.6cmで、外区外縁と内縁との比高差は1.0cmである。外区と内区の間には圈線が1条巡っている。内区の蓮弁の形状や中房径、蓮子配置などすべて836の軒丸瓦と同じで同文である。836と比べて瓦当中央部の厚さが薄くなっている。丸瓦部との接合は接合用粘土により接合している。842～864は瓦溜り出土の平瓦である。844・847は凹面に模骨痕が残る。849は凸面に縄目叩きを施した後ナデしている。850は凹面の側縁部のやや内側に分割突帯の痕がある。851・852は凹面に糸切り痕があり、凸面は縄目叩きの後にナデしている。854は側縁部が薄くなっている。

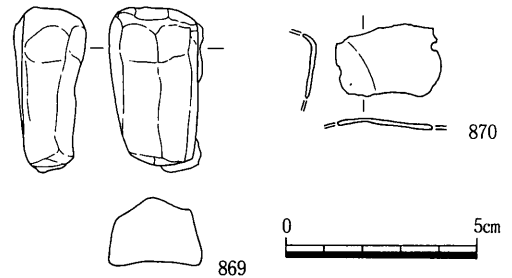


第541図 E 8 区包含層瓦溜り位置図 (1/200), 遺物出土状況・断面図 (1/40)

これに対し856・858は側縁部が肥厚している。860は側縁部凹面側はヘラケズリにより面取りを行なっているが、布目圧痕が残っている。861は凹面端部に糸切り痕が残り、横骨痕が残っている。862は凹面に横骨痕がのこり、凸面は縄目叩きの後にナデている。865～868は瓦溜り出土の丸瓦でいずれも端部が無段の行基式のものである。865・866は凹面に布の綴合せ痕が斜めに認められる。867は凸面に縄目叩きを施した後にナデている。

869・870はE 8 区包含層出土金属器である。869は直方体に近いが、上部は面取りを行

なっており山形になっている。鉄製品で用途は不明である。870は薄い板状の製品で片方の側縁部を折り曲げている。また1箇所穿孔が認められる。青銅か銅製品と思われる、用途は不明である。



遺物番号	材質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	形態・手法の特徴	備考
869	鉄	用途不明品	4.0	2.4	1.7	51.3	表面に赤色顔料塗る	
870	銅?	用途不明品	1.9	2.8	0.1	1.5	穿孔有り	

第542図 E 8区包含層出土遺物 (11) (1/2)

3. 小結

E調査区では弥生時代～中世の遺構・遺物を検出した。

弥生時代ではE 2・3・5区を中心に遺構・遺物が検出されたが、E 2区では弥生時代V期の竪穴住居1棟と掘立柱建物2棟が検出された。前田東・中村遺跡ではF・G区から出土した膨大な当該期の遺物の割に生活遺構が極端に少ないが、E 2区で検出されたということは周辺に住居が広がる可能性を示唆している。E 3・5区で検出した遺構はすべて溝であるが、基本的には西側に隣接するD 1区の弥生時代の遺構群の続きと考えられる。

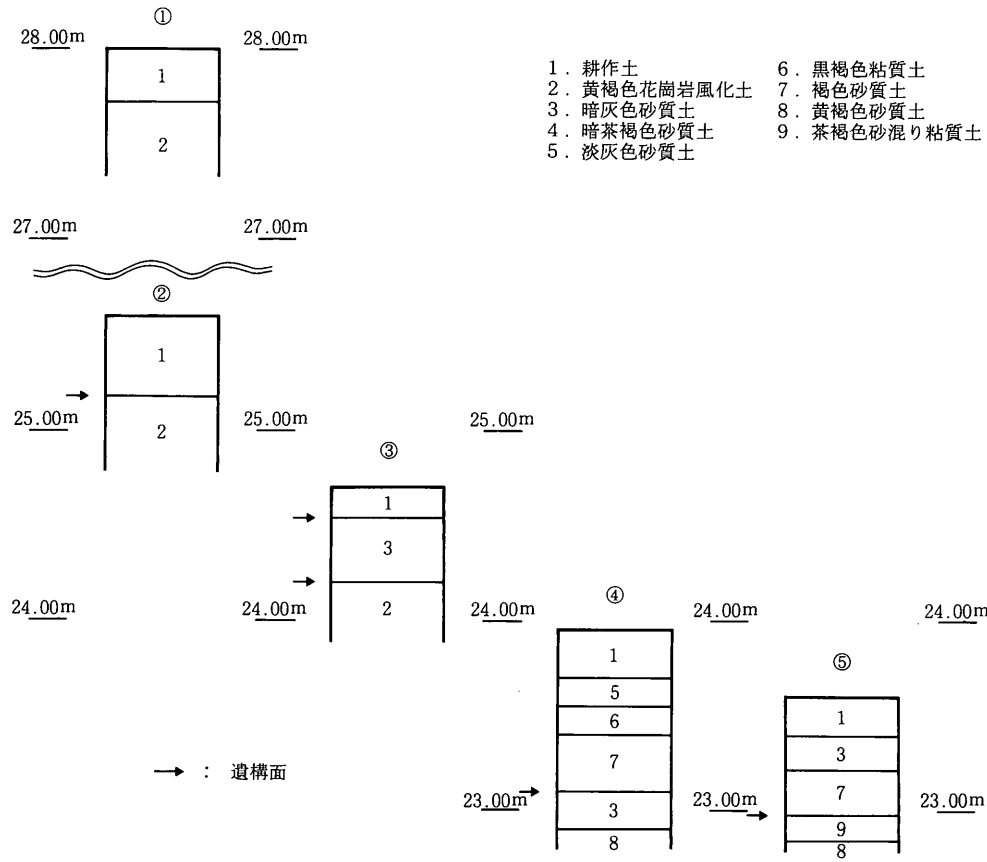
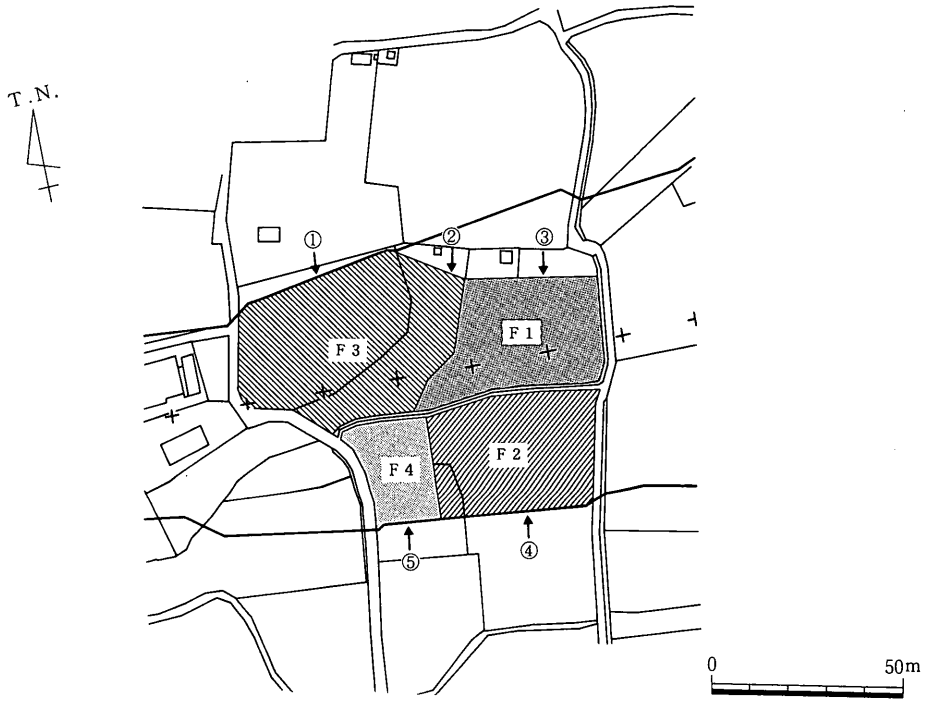
古墳時代ではE 2区の溝SD07のみであるが、この遺構はE 2区からE 5・8区へ到る丘陵部の南東斜面に位置し、形状はL字形である。遺構内と遺構下方部の包含層から7世紀初頭の須恵器が出土しており、古墳の周溝の可能性もある。削平されているがあるいは本来この丘陵の斜面に古墳が営まれていた可能性を指摘しておきたい。

古代では7～8世紀を中心とする掘立柱建物、竪穴住居、井戸などがE 3・5・8区で検出された。E 5区で検出された8世紀の竪穴住居2棟は、周囲に同時期の掘立柱建物があることから作業小屋的なものと考えられる。また10世紀後半～11世紀初頭にかけての平安時代中期の建物群がE 5区を中心として検出され、当時の建物配置や建物構造を考える上で良好な資料を提供した。SD19を中心にして東に1棟、西に2棟が検出され、土器の型式内で前後する2時期の建物群を検出した。建物の主軸は概ねN-10° - E前後で旧山田郡の条里地割りの方向にほぼ一致している。またこれらの建物に伴う地鎮と思われる土坑がそれぞれ2時期分の2つが検出された。これらの遺構に伴い、特にSD19を中心として多量の土器が出土したが、10世紀後半～11世紀初頭にかけての土器の研究に良好な資料を提供している。さらに特筆する遺構としてE 8区で検出した窯跡がある。この窯は窯体

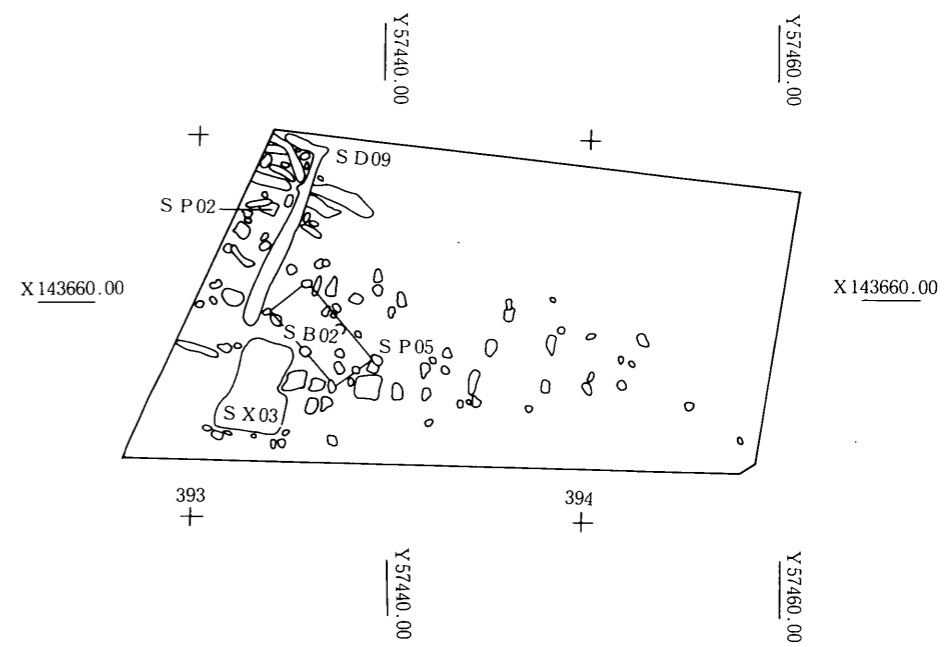
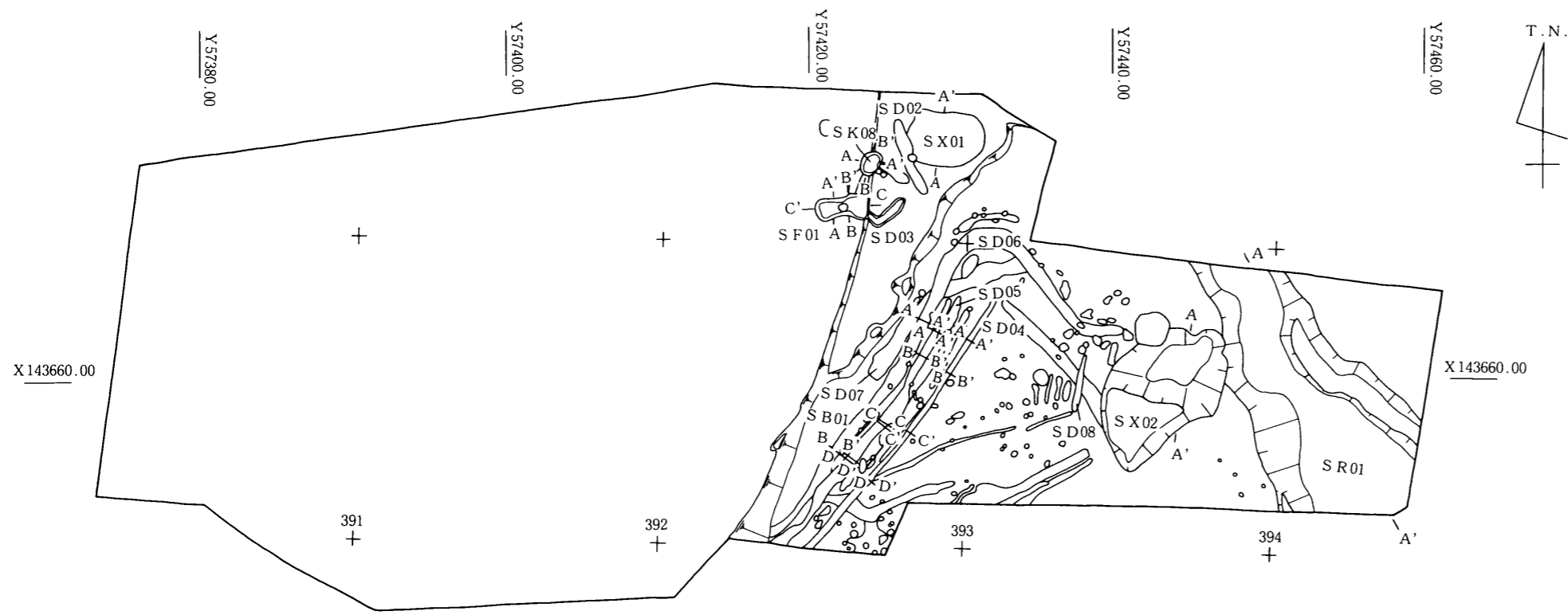
の傾斜はほとんどなくいわゆる平窯であるが、先に炭焼き窯の可能性を指摘した。炭焼き窯であるならば集落内で燃料を自給していたことになり、当時の生活様式を考える上で参考になるものである。

中世ではE 5・8区で溝を中心とした遺構が検出された程度で、中世では人々の生活の中心とはなっていなかったようである。

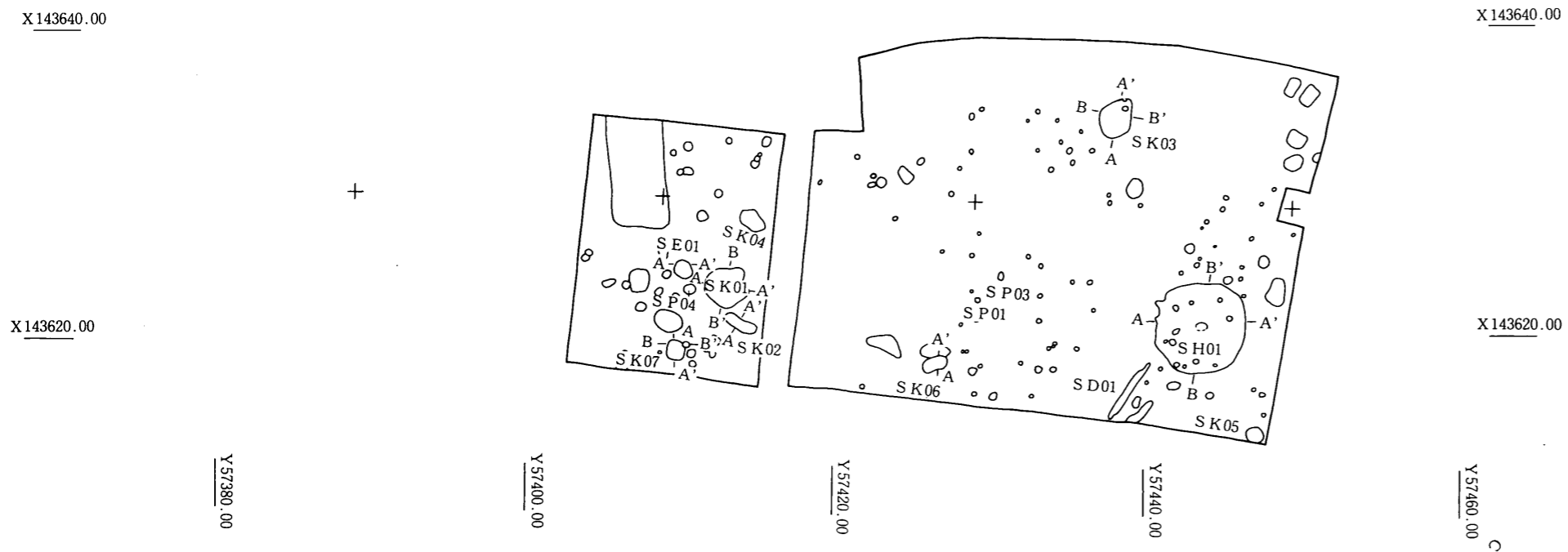
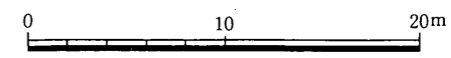
以上のようにE区では特に古代の遺構・遺物が中心となり、集落の内容が窺うことが出来るものになっている。また遺物も讃岐の古代の土器研究に良好な資料を提供したものと
言えよう。



第543図 F区小調査区割図(1/2000)、基本土層柱状図(1/40)



F区第1遺構面



第544図 F区遺構平面図 (1/400)

第6節 F調査区

1. 調査区の概要（第543・544図）

南北幅70～80m，東西95mの範囲を占めるF調査区は4小調査区に分けて調査を行なった。調査区の西側はカーブする現有道路で区分けしたため，変則的になっている。調査区の北西部のF3区は丘陵となっており，F1区・F4区へ向って傾斜し，F1・2・4区は谷部となっている。F3区の丘陵部の頂上部は現状では平坦になっており，上部が削平されており標高は28.0m前後である。東側のF1区は遺構面で24.2m前後，F4区で23.0m前後で4～5mの比高差がある。

F調査区では，丘陵部では耕作土直下に遺構面があるが，谷部の丘陵部からの変換部では斜面堆積が見られ包含層が形成されている。谷部では地山面が深く埋没し，堆積土の上に遺構が形成されている。F1区では遺構面が2面検出され，上面では中世の遺構面を，下面では古代と弥生時代の遺構面をそれぞれ検出した。耕作土下20cmで上面の遺構面に，さらに30cm下で下層の遺構面に到達する。F2・3・4区は遺構面は1面で縄文時代から中世の遺構を検出した。F3区の丘陵部の頂上平坦面は削平を受けており，遺構・遺物は皆無である。遺構面は黒色に近い粘性のある砂質土から黄色粘土まで多様な土で形成されている。

2. 調査の成果

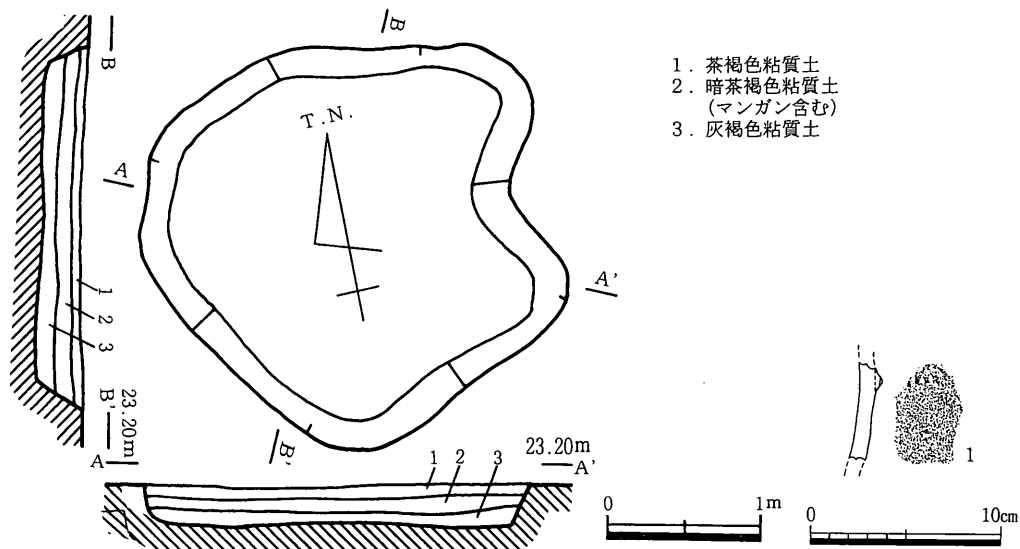
(1) 縄文時代の遺構・遺物

SK01（第545図）

F4区の中央やや東寄りで検出した土坑である。平面形は一部分の凹んだ正方形に近い形で，一辺2.6m前後となっている。深さは25～30cmで褐色系の粘質土が埋土となっている。1は縄文時代晩期の深鉢である。口縁部端部は欠損しているが刻目突帯が1条施されている。

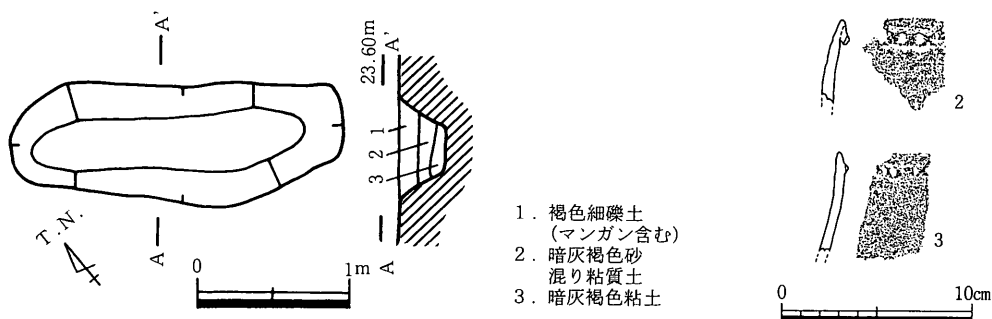
SK02（第546図）

F4区のSK01の南側に隣接して検出した土坑である。平面形は長楕円形で長径2.2m，短径0.7m，深さ30cmである。埋土の最上層はマンガンを含んだ細礫となっている。2・3とも縄文時代晩期の深鉢である。2は口縁部端部から斜め下方にむかって刻目突帯を貼りつけている。3の突帯は口縁部端部のやや下に付く。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1	縄・深鉢				中・普	良好	黒褐・明赤褐	ナデ	ナデ		

第545図 F区SK01平・断面図(1/50), 出土遺物(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
2	縄・深鉢				中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	貝殻条痕	
3	縄・深鉢				中・普	良好	黒褐	ナデ	ナデ		

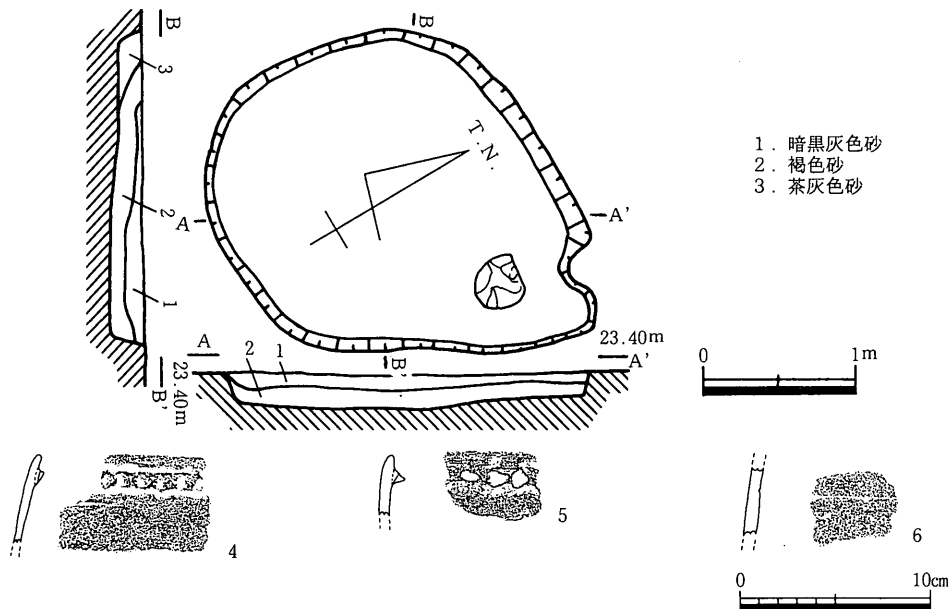
第546図 F区SK02平・断面図(1/50), 出土遺物(1/4)

SK03 (第547図)

F2区の中央北寄りで検出した土坑である。平面形は不整形な西洋梨形で長径2.8m, 短径2.1m, 深さ20~25cmである。埋土は砂が中心となっており, 底面は平坦になっている。4~6は縄文時代晩期の深鉢である。4・5は口縁部端部のやや下に刻み目突帯を貼りつけている。4は内面にヘラケズリを施している。6の外面には沈線が1条巡っている。

SK04

F4区の東側で検出した土坑である。平面形は不整形で方形と楕円形の間形態であ



第547図 F区SK03平・断面図(1/50), 出土遺物(1/4)

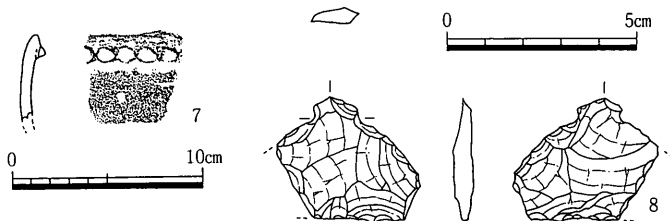
る。長径1.7m, 短径1.1m, 深さ15cm前後の規模である。埋土は茶褐色粘土の単一層である。縄文時代晩期の土器が少量出土した。

SK05

F2区の南東コーナーで検出した土坑である。平面形は隅丸方形で一辺1.0m, 深さ20cm前後である。埋土は暗灰色粘質土の単一層で、縄文時代晩期の土器が少量出土した。

SP01・02出土遺物(第548図)

7はSP01出土の縄文時代晩期の深鉢である。口縁部直下に断面三角形の刻み目突帯を貼りつけている。刻み



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
7	縄・深鉢				中・昔	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	D字形刻み目突帯	金襴母
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考			
8	石匙	3.2	3.4	0.5	7.8	サヌカイト					

第548図 F区SP01・02出土遺物(1/2, 1/4)

目はD字である。8はSP02出土のサヌカイト製の石匙である。両端は欠損しているが下部に細かい剥離調整を施して刃部を作り出している。つまみ部は幅広で短い。

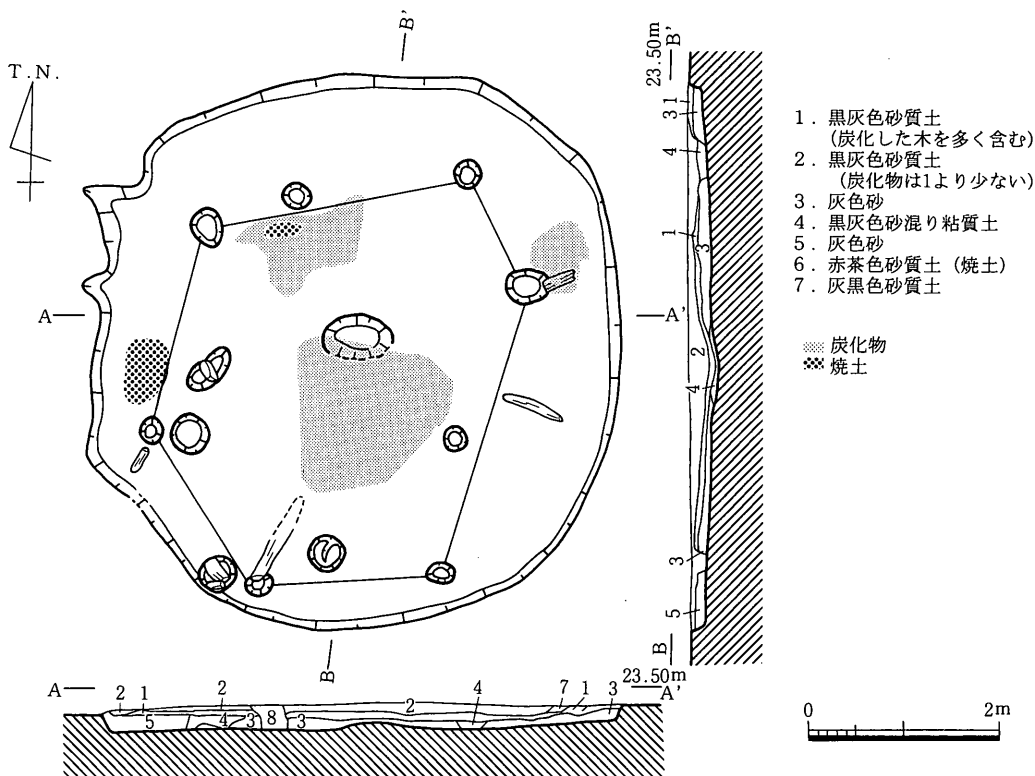
(2) 弥生時代の遺構・遺物

SD01

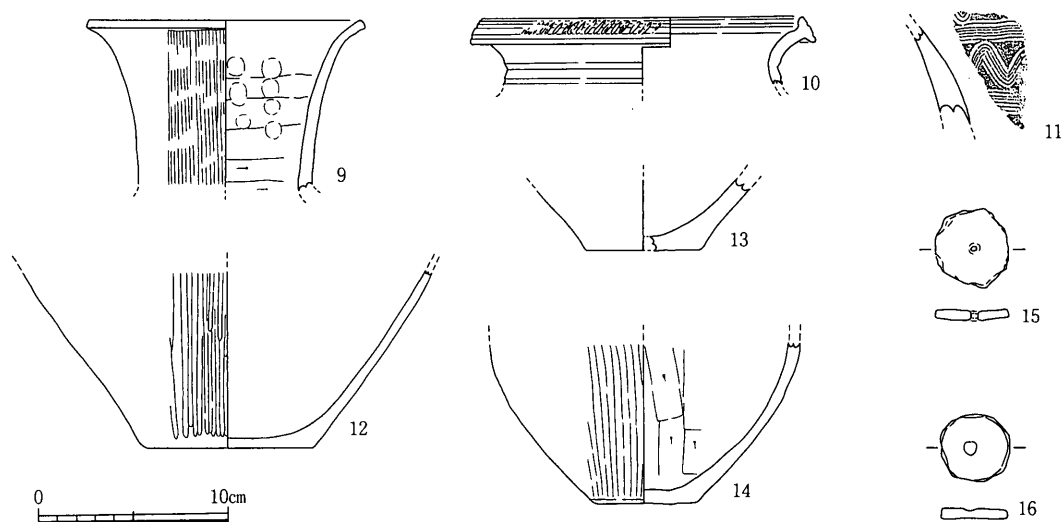
F2区の南壁際の東寄りで見出した溝である。長さ4.4m、幅40cm前後、深さ10cm程の小規模な溝である。埋土は褐色砂の単一層である。弥生時代IV期の土器が少量出土した。

SH01 (第549・550図, 図版85)

F2区の南東部で見出した竪穴住居跡である。平面形はほぼ円形であるが、西側の一部が不整形となっている。直径5.4~5.6mで、深さは25cm前後と残りは悪い。支柱穴は6本で南側の柱の間隔は狭くなっている。住居中央部には長径70cm、短径45cm、深さ24cm程度の楕円形の土坑がある。埋土は黒灰色砂混じり粘質土となっている。住居の埋土は大きく3層に分かれ、中層には炭化木・炭が堆積しており、中には柱穴からそのまま倒れた形で検出したものもあり、この住居は火災にあったものと考えられる。また住居の床面の西側



第549図 F区SH01平・断面図 (1/80)



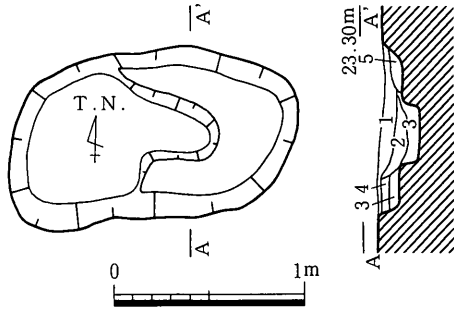
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
9	弥・甕	14.4			中・普	良好	橙	ハケ目	ケズリ		
10	弥・甕	16.8			中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
11	弥・甕				中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	櫛描直線文→波状文	
12	弥・甕			9.0	中・普	良好	黄橙・黒褐	ミガキ	ナデ		
13	弥・甕			6.0	中・普	良好	黒・アザイ黄橙	ナデ	ナデ		
14	弥・甕			5.5	中・普	良好	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ		毀母
15	土製紡錘車	3.8			細・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ		
16	土製紡錘車	3.6			中・普	良好	橙・明赤褐	ナデ	ナデ	土器片転用、穿孔途中	未製品

第550図 F区SH01出土遺物(1/4)

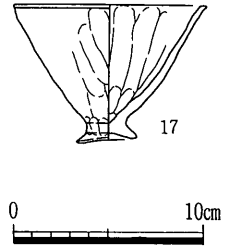
部分と北側部分で焼土を検出した。床面中央部でも炭化物が広がっていた。壁溝や排水溝などの施設は検出されなかった。遺物は床面のやや上で出土した。9～11は壺，12～14は壺あるいは甕の底部である。11は壺の胴部の破片であるが、櫛描き直線文と櫛描き波状文が施されている。底部はいずれもしっかりした平底である。15・16は土器片を転用した紡錘車である。16は中央部の穿孔は貫通しておらず、未製品と考えられる。土器の年代観から弥生時代IV期の住居と考えられる。

S K 06 (第551図)

F 2 区の南壁際やや西寄りで検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形である。長辺1.5m，短辺0.9m，深さ15cm前後となっている。土坑の底部は西側半分が不整形に1段低くなっており，高低差は10cm程である。一段高い部分の北側の埋土内で焼土を，中央の一段低い部分のやや上の層で炭化物を検出したことから，焼土坑と考えられる。一段低い部分のやや上の部分から土器が少量出土した。17は土坑の底部付近で出土した鉢で短い脚が付く，脚外面に指押さえの痕跡が見られる。内・外面ともに指でナデたときの微妙な凹凸が見られる。



1. 灰褐色砂
2. 灰褐色砂(炭化物含む)
3. 褐色細砂
4. 茶灰色砂
5. 焼土

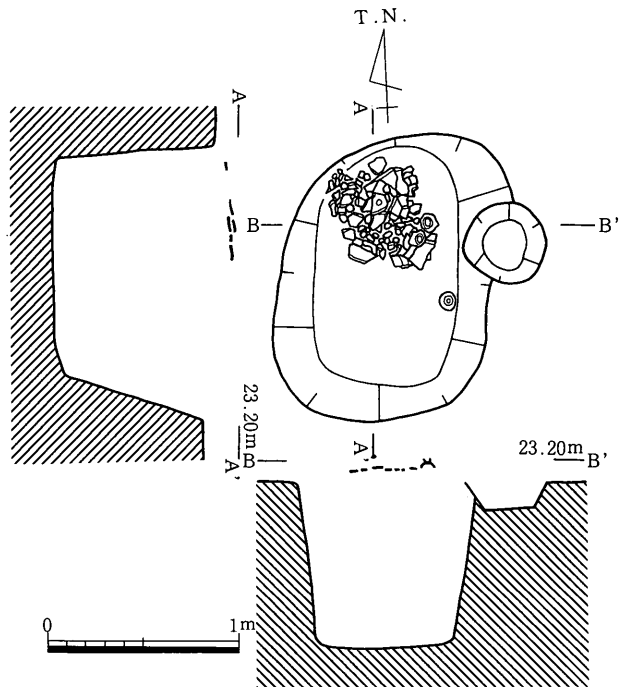


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
17	弥・鉢	10.2	7.0	3.3	細・普	良好	黄褐	ナデ	ナデ		金器母

第551図 F区SK06平・断面図(1/40), 出土遺物(1/4)

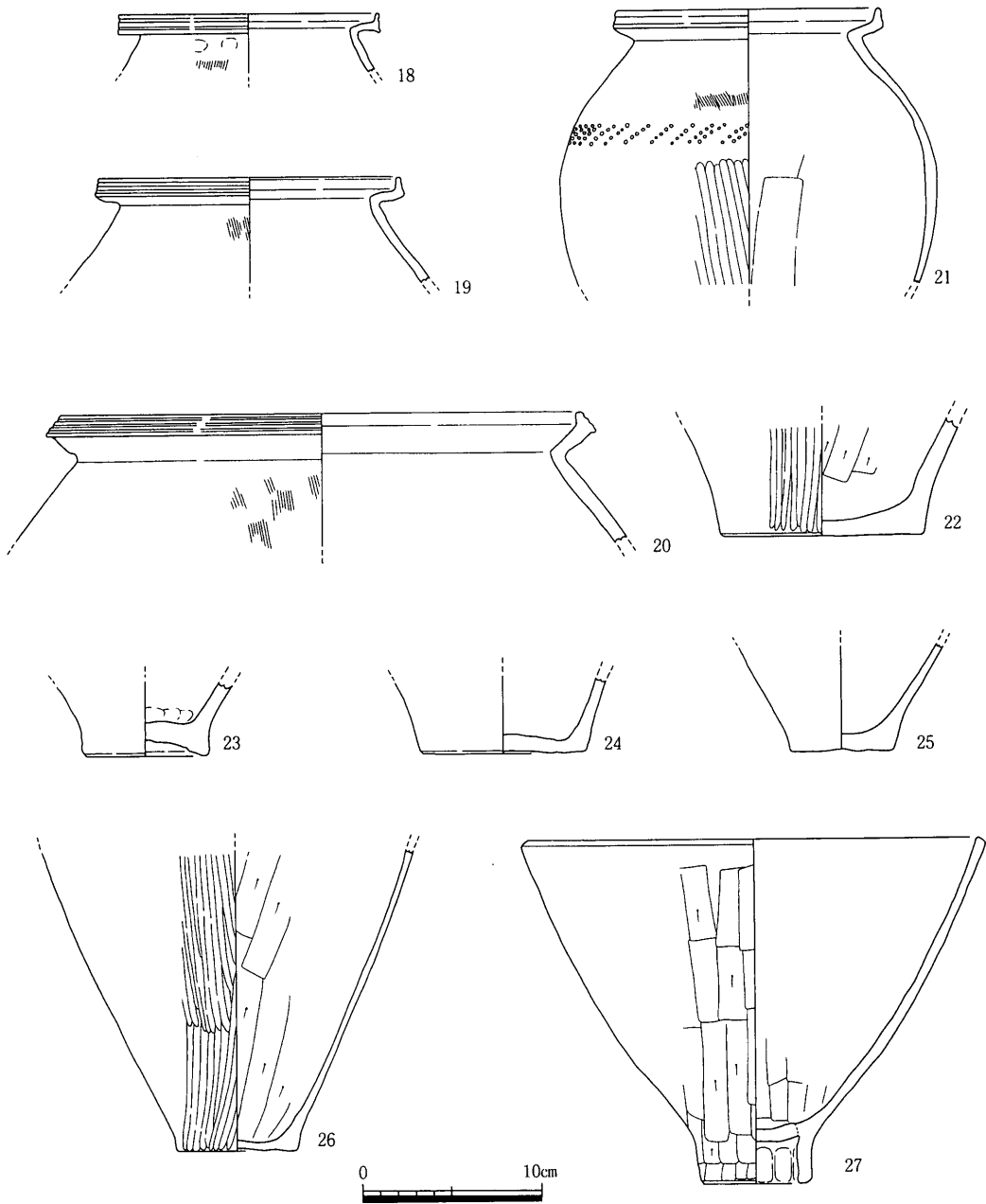
SK07(第552~554図, 図版85)

F4区の南側で検出した土坑である。平面形は隅丸の長方形で、長辺1.45m、短辺1.1m、深さ85cm程度である。埋土は茶褐色粘土の単一層である。土坑の最上部に土器が堆積していた。土坑を一気に埋めた後に一括して土器を廃棄したものと考えられる。18~21は甕である。いずれも口縁部端部を上方に拡張して外側に面を形成する。22~26は甕の底部と思われる。22・26は外面にヘラミガキを施す。27~38は製塩土器である。胴部はいずれも直線的に大きくラップ状に



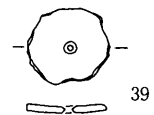
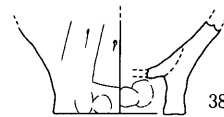
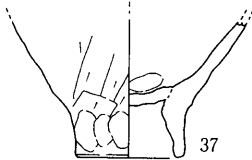
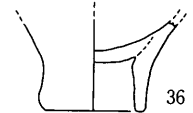
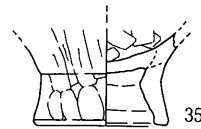
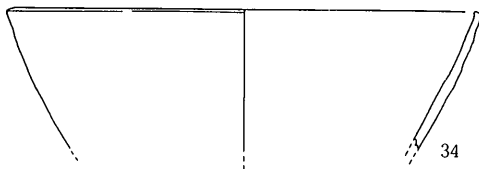
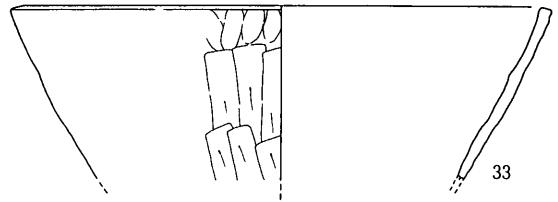
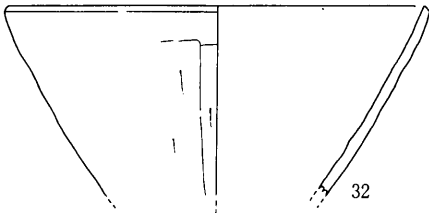
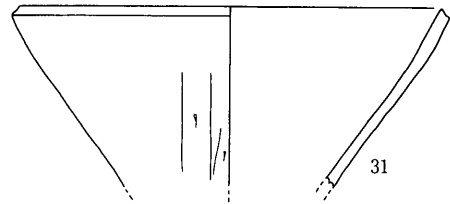
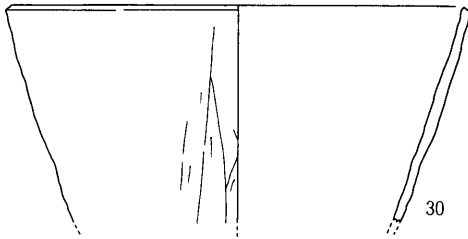
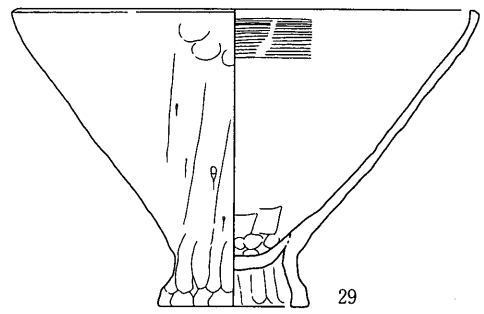
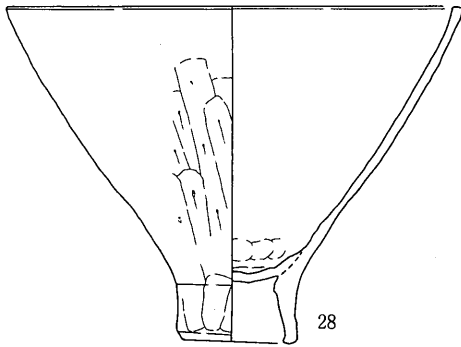
第552図 F区SK07平・断面図, 遺物出土状況(1/40)

広がり、外面にヘラケズリを施している。脚部は高めで外開きになるものと直線的になるものがある。底部はいずれも円盤充填を行なっている。口縁部は29が若干内傾する他は直線的で、端部は平坦に仕上げている。39は土器片を転用した紡錘車で、中央部に両面から穿孔している。以上の遺物はいずれも弥生時代IV期のものと考えられる。土坑の埋土には火を焚いた痕跡は認められず、しかも埋土は一気に埋まっており、土器も最上部にあったことからこの土坑で直接煮沸を行なったとは考えられないが、内陸部で製塩土器がまとまって出土したことは、塩の流通を考える上で貴重な資料と言える。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
18	弥・甕	14.4			中・普	良好	明赤褐	ナデ・ハケ目	ナデ		
19	弥・甕	16.0			細・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ナデ		
20	弥・甕	29.0			中・普	良好	明褐	ハケ目	ナデ		
21	弥・甕	14.4			中・普	良好	橙	ハケ目・ミガキ	ナデ・ケズリ		
22	弥・甕			11.4	粗・多	良好	灰黄褐・橙	ミガキ	ナデ・ケズリ		
23	弥・甕			6.9	中・多	良好	暗褐	ナデ	ナデ	底上げ底	
24	弥・甕			9.2	粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
25	弥・甕			5.8	中・普	良好	浅黄橙・橙	ナデ	ナデ		
26	弥・甕			6.8	細・普	良好	浅黄橙	ミガキ	ケズリ		
27	弥・製埴	12.4	19.1	4.7	中・多	良好	明褐～黒褐	ケズリ	ナデ	円盤充填	

第553図 F区SK07出土遺物(1)(1/4)



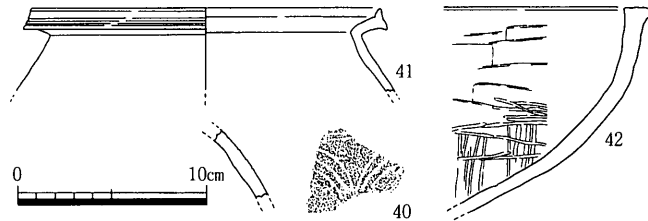
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
28	弥・製塩	24.0	17.0	6.0	粗・普	良好	赤褐	ケズリ	ナデ	円盤充填	
29	弥・製塩	24.5	15.0	8.0	中・普	良好	灰白・浅黄橙	ケズリ	ハケ目・ナデ	円盤充填	
30	弥・製塩	23.8			中・普	良好	橙	ケズリ	ナデ		
31	弥・製塩	23.0			中・普	良好	明褐	ケズリ	ナデ		
32	弥・製塩	22.4			中・普	良好	黒・橙	ケズリ	ナデ		雲母
33	弥・製塩	28.4			粗・普	良好	明褐	ケズリ	不明		

第554図 F区SK07出土遺物(2)(1/4)

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
34	弥・製塩	25.0			中・普	良好	橙	不明	不明		
35	弥・製塩			7.2	粗・多	良好	赤褐	ケズリ	板ナデ	内面に工具痕多い	
36	弥・製塩			5.7	粗・普	良好	明黄褐・橙	不明	不明	円盤充填	
37	弥・製塩			5.8	中・普	良好	にぶい橙	ケズリ	ナデ	円盤充填	
38	弥・製塩			7.0	中・普	良好	ゴイ褐・黄灰	ケズリ	ナデ	円盤充填	
39	土製紡錘車	4.2	0.4		細・少	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ		

S P03・04 (第555図)

S P03はF 2区で、S P04はF 4区でそれぞれ検出したが、いずれも建物とは関係なく単独のものである。しかしS P03に関しては不整形ながら円形に並ぶ柱穴群を住居と想定することも可能である。40はS P03から出土した壺の胴部の破片である。外面に連弧文が施されており、弥生時代I期古段階のものと考えられる。41・42はS P04から出土したもので42は大型の鉢で口縁部端部を若干横へつまみ出し、端部は平坦である。両者とも弥生時代IV期のものである。

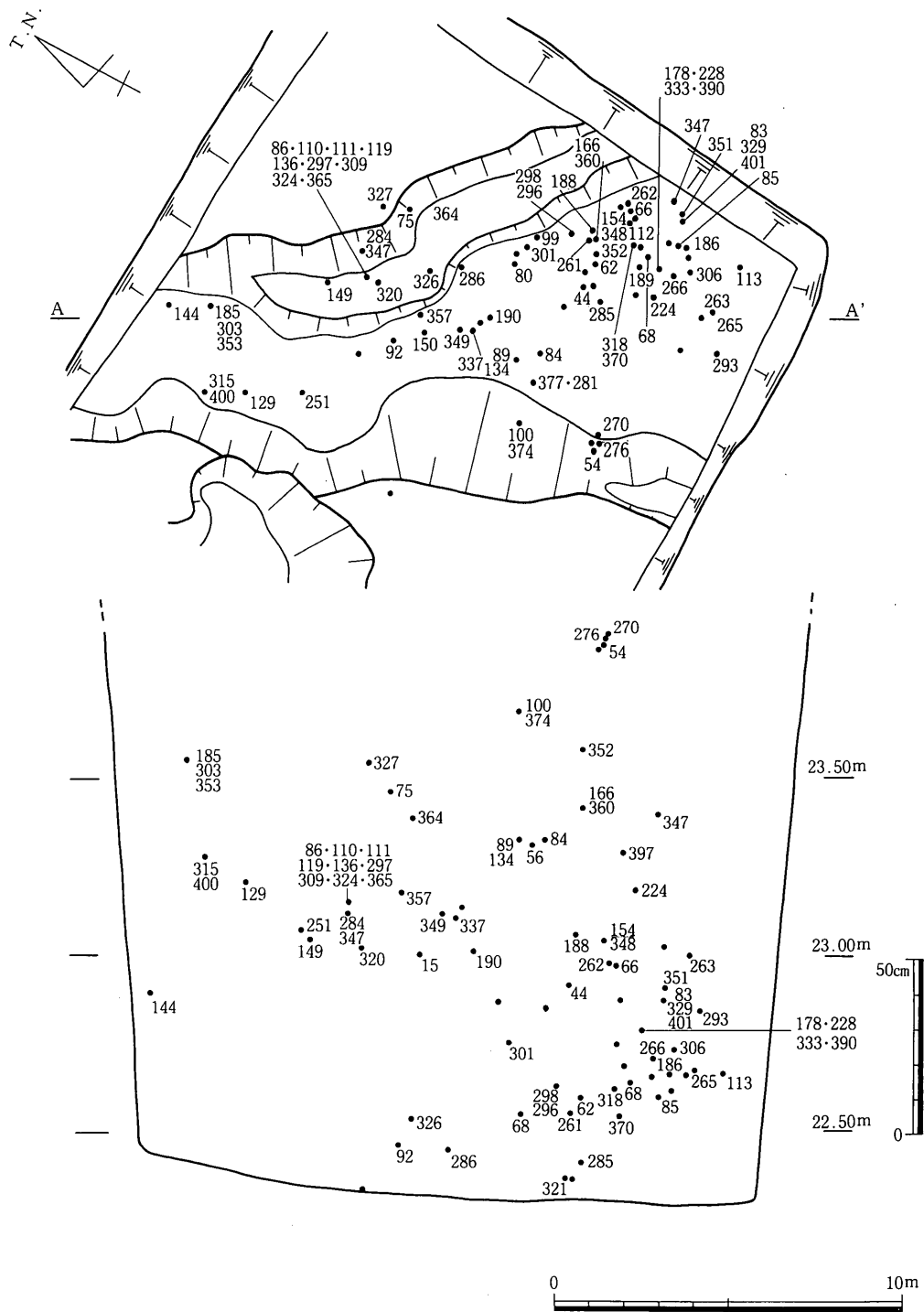


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
40	弥・壺				中・普	良好	明赤褐・橙	ナデ	ナデ	連弧文	
41	弥・鉢	18.4			中・普	良好	黒褐・ゴイ褐	不明	不明		金銀母
42	弥・鉢				中・普	良好	赤褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ		

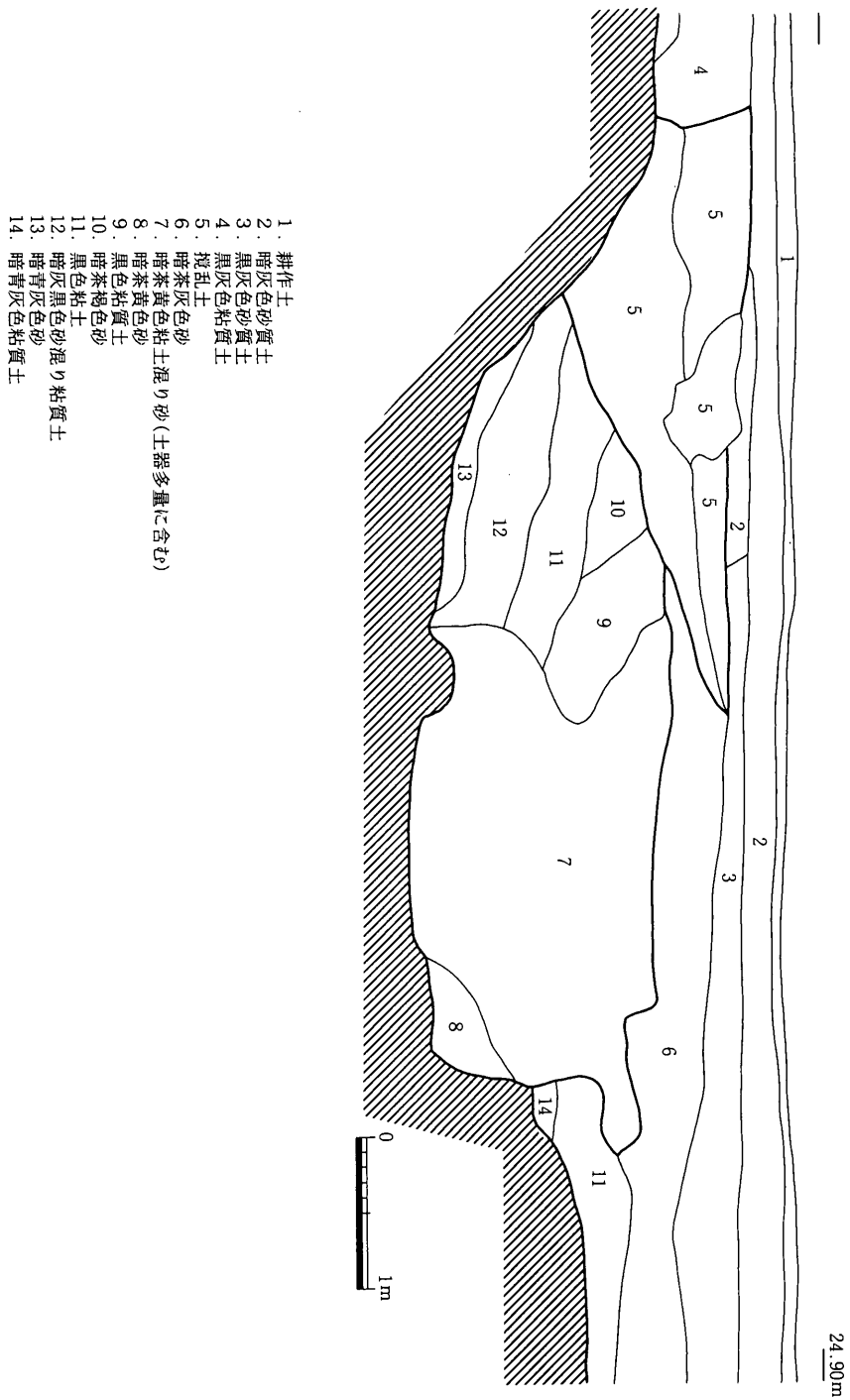
第555図 F区S P03・04出土遺物(1/4)

S R01 (第556～598図, 図版86・87図)

F 1区で検出した旧河道である。北西-南東方向に流れ調査区を斜めに横切っている。調査区の西側のF 3区からF 1区の北側には丘陵があり、この旧河道もこの丘陵に規制されて調査区の北側から東側に向きを変えるものと思われる。南東側の続きはG 2区で検出した旧河道に続くものと思われる。河の検出面は現地表から1.0m下で幅は北側が5.0m、南側が11.0mで南側が広がっている。深さは1.0m～1.7mで南側に向かって深くなっていることから、この旧河道は北西から南東に向かって流れていたことが分かる。旧河道の東側の掘りこみは段になっており、途中に1mほどのテラスが形成されている。河の埋土は基本的には砂層である。黒色系の粘土と砂層の互層の水平堆積が形成された後に、暗茶黄色のやや粘質の砂層が大きく切り込んでいることから、旧河道が一度自然に埋まった後に一気に流れが走ったことが分かる。そしてこの層から土器が多量に出土している。また北側の調査区壁際と中央部の西肩部分では上面からの攪乱が及んでおり、埋土の上層部で



第556图 F区SR01遗物平面分布图(1/200), 垂直分布图(1/20)



第557図 F区SR01断面図(1/50)

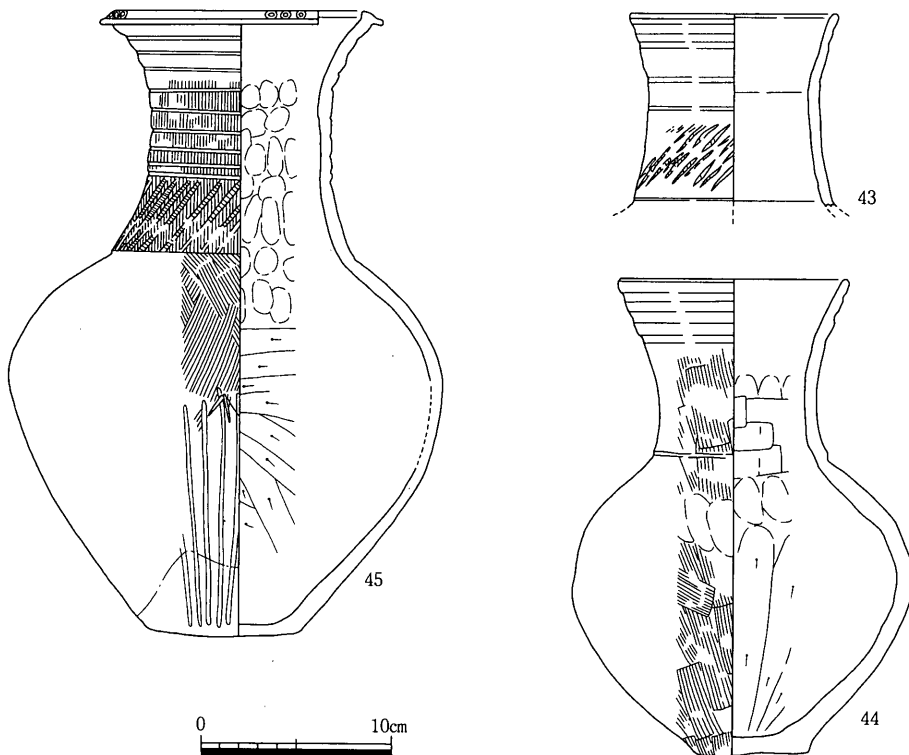
は一部古代以降の遺物が混入している。主に弥生時代Ⅳ～Ⅴ期末の土器が出土したが、出土状況としては旧河道の底に近い部分から上層部まで見られ、一括性は高くない。しかし弥生時代Ⅴ期の土器はローリングを受けておらず残りが良いことから、ある程度同時に廃棄されたものと思われる。

43～123は壺である。主に頸部から口縁部の形態により分類した。

43～45は頸部からやや開き気味にそのまま口縁部に至るものである。43・44は口縁部付近に凹線が施されている。45は体部中央にヘラ記号が施されている。

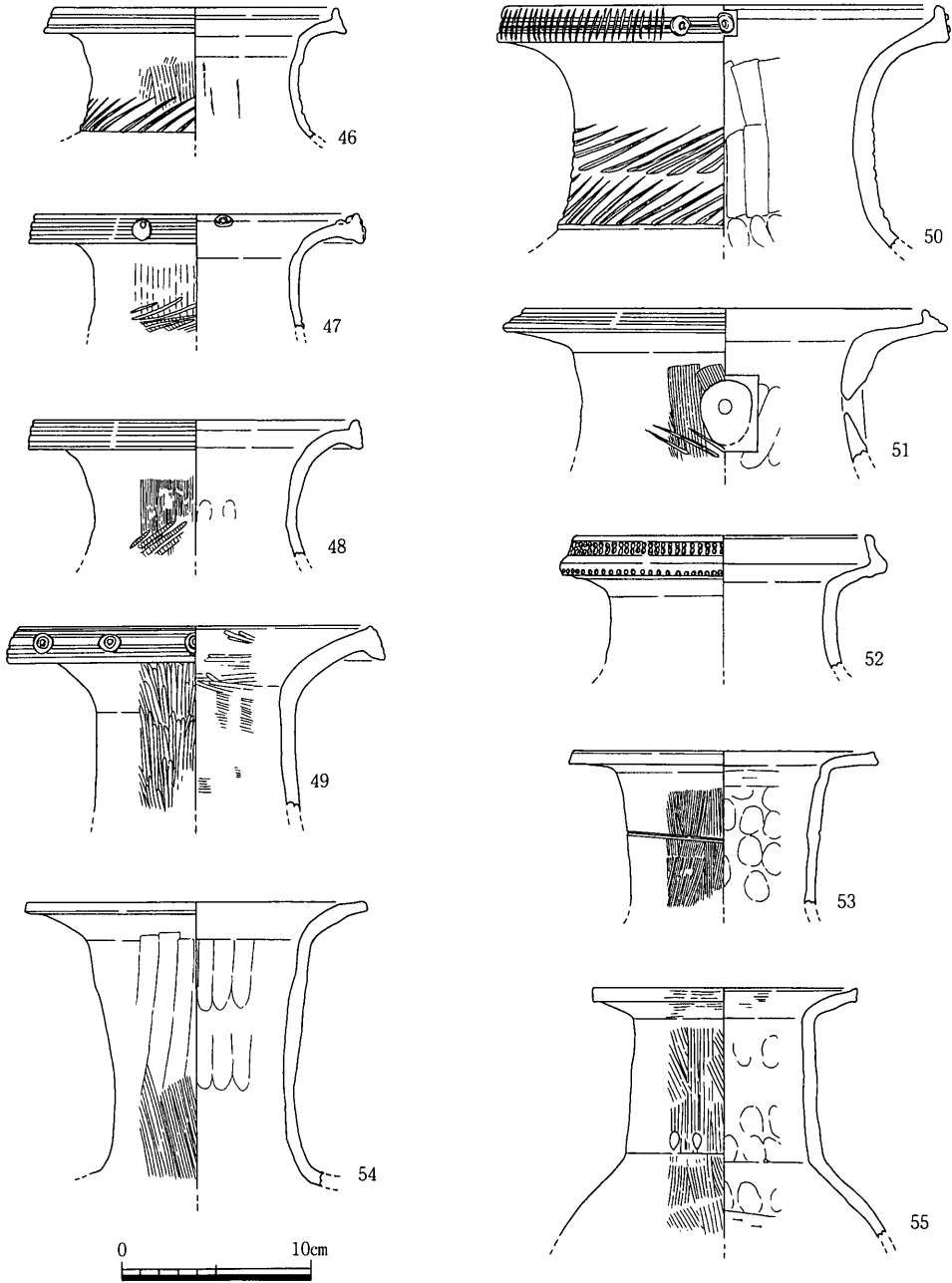
46～52は頸部が長く口縁部端部を拡張するものである。47・49・50は口縁部に円形浮文があり、47は内面にも円形浮文がある。51は頸部中央に焼成後に穿孔している。52は口縁部端部を上方に拡張して内傾させている。さらに口縁部外側に棒状工具による細かい刺突文が3段施されている。46～48・50・51は頸部下半にヘラ圧痕文を施している。

53～58は頸部が長く直立し、口縁部が頸部から鋭く開くものである。頸部外面はハケ目調整が多いが56はヘラミガキを施している。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
43	弥・壺	10.4			精緻	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	頸部ヘラ圧痕文→ナデ	
44	弥・壺	11.9	25.1	5.7	中・普	良好	にぶい橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ	頸部に凹線3条	
45	弥・壺	12.8	32.9	7.9	細・普	良好	黄褐	ハケ目・ミガキ	ナデ		ヘラ記号

第558図 F区SR01出土遺物(1)(1/4)



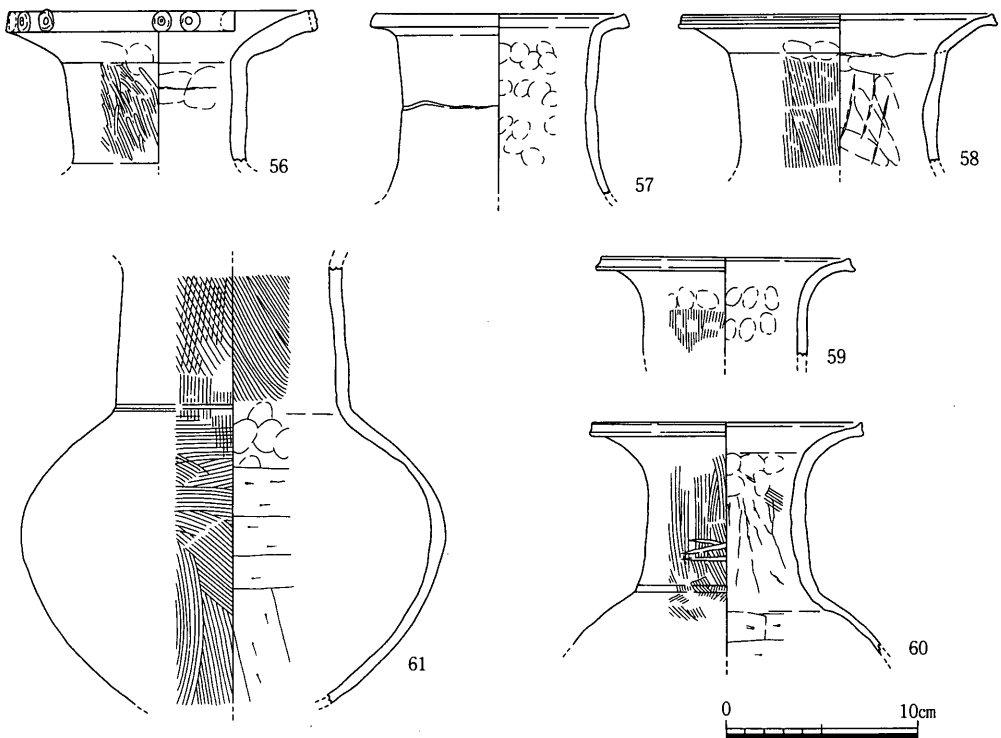
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
46	弥・壺	14.8			中・普	良好	浅黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ	頸部上半に強いナデ	
47	弥・壺	17.0			細・普	良好	コイ黄橙・橙	ハケ目	ナデ	端部と内面に円形浮文	頸部にへら圧痕文
48	弥・壺	17.2			中・普	良好	にぶい黄	ナデ・ハケ目	ナデ		
49	弥・壺	18.6			中・普	良好	灰黄褐	ミガキ	ミガキ・ハ目一ナデ		
50	弥・壺	23.2			中・多	不良	黒・明褐	ナデ	ナデ	頸部へら圧痕文	
51	弥・壺	21.2			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	板ナデ・ナデ	頸部に穿孔1ヶ所有り	金環母・角閃石
52	弥・壺	15.3			中・普	良好	橙	不明	不明	口縁端部に竹管文	
53	弥・壺	16.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ	頸部に沈線1条	金環母・角閃石
54	弥・壺	17.9			中・普	良好	浅黄橙	ハケ目一板ナデ	ナデ		
55	弥・壺	14.0			中・普	良好	にぶい褐	ハケ目	ハ目一ナデ・ハ目	頸部棒状工具列点文	金環母・環母

第559図 F区SR01出土遺物(2)(1/4)

59～65は口縁部は頸部から丸みをもって開くものである。61は外面に様々な方向から原体の異なるハケ目を重ねている。62は大型の壺で頸部と体部の境に断面凹形の突帯を1条貼り付けている。65は口縁部端部を上方に拡張しており、口縁部外面に擬凹線を施している。また頸部下半に板状工具の戸口部で押し引いた文様を施している。

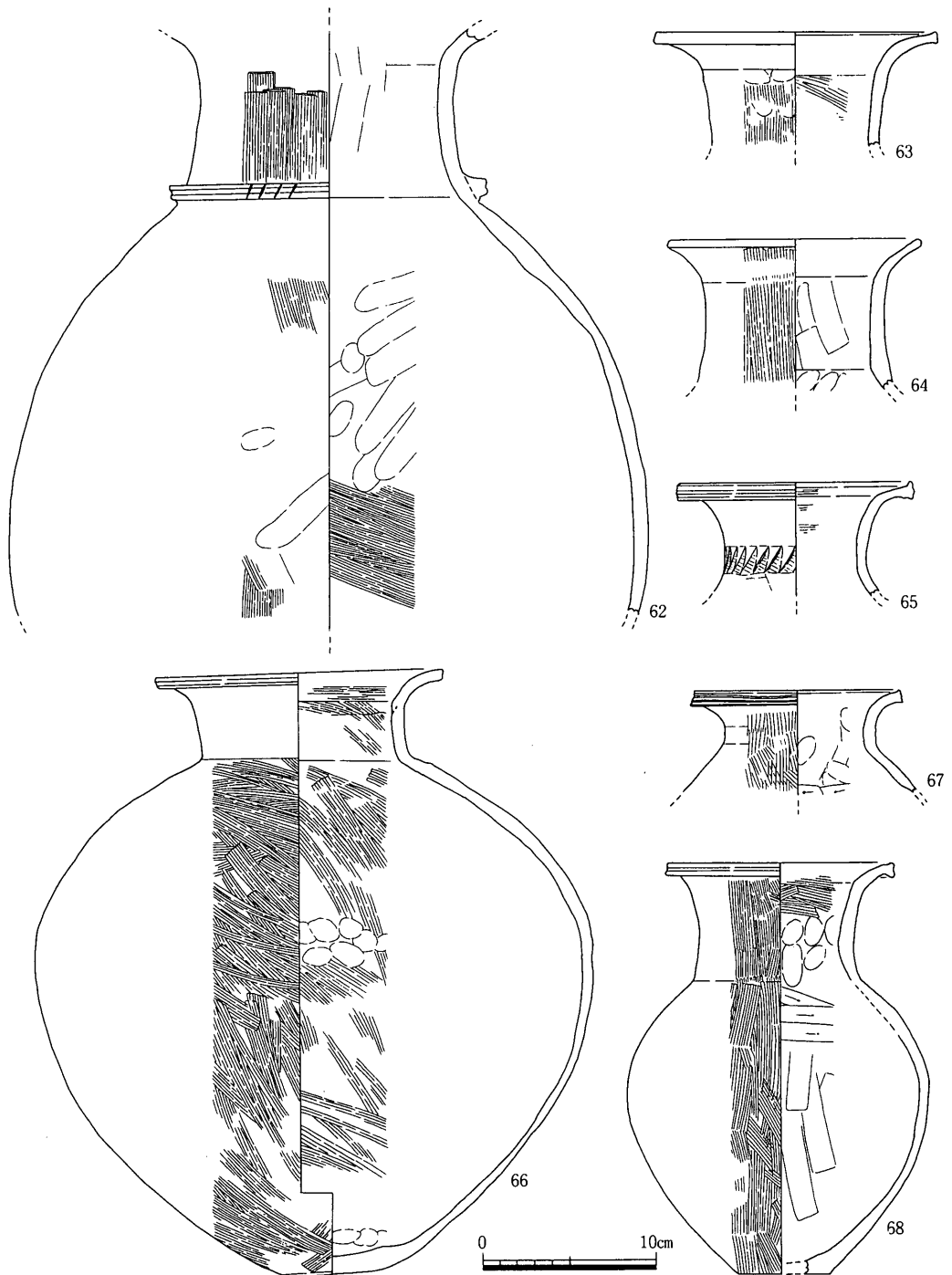
66～72は頸部がこれまでのものほど長くないもので、口縁部は頸部から丸みをもって開くものである。66は体部は球形に近いが上半にやや張りが欠ける。内・外面全体にハケ目を丁寧に施している。底部はやや小さめの平底である。頸部はほぼ直立している。67は口縁部外面にヘラ描き沈線を施している。69・71は頸部と口縁部の境が不明瞭で、口縁部はやや外反して短く終わる。71は内・外面を丁寧にナデており、非常に精緻な作りである。

73～85は頸部は中ぐらいの長さで口縁部が頸部から稜をもって鋭く開くものである。頸部は内傾するもの(73・74・79・80・83・85)、ほぼ直立するもの(76～78・81・82・84)、外傾するもの(75)の3種類がある。75は体部は若干縦長の球形で、底部は平底となって



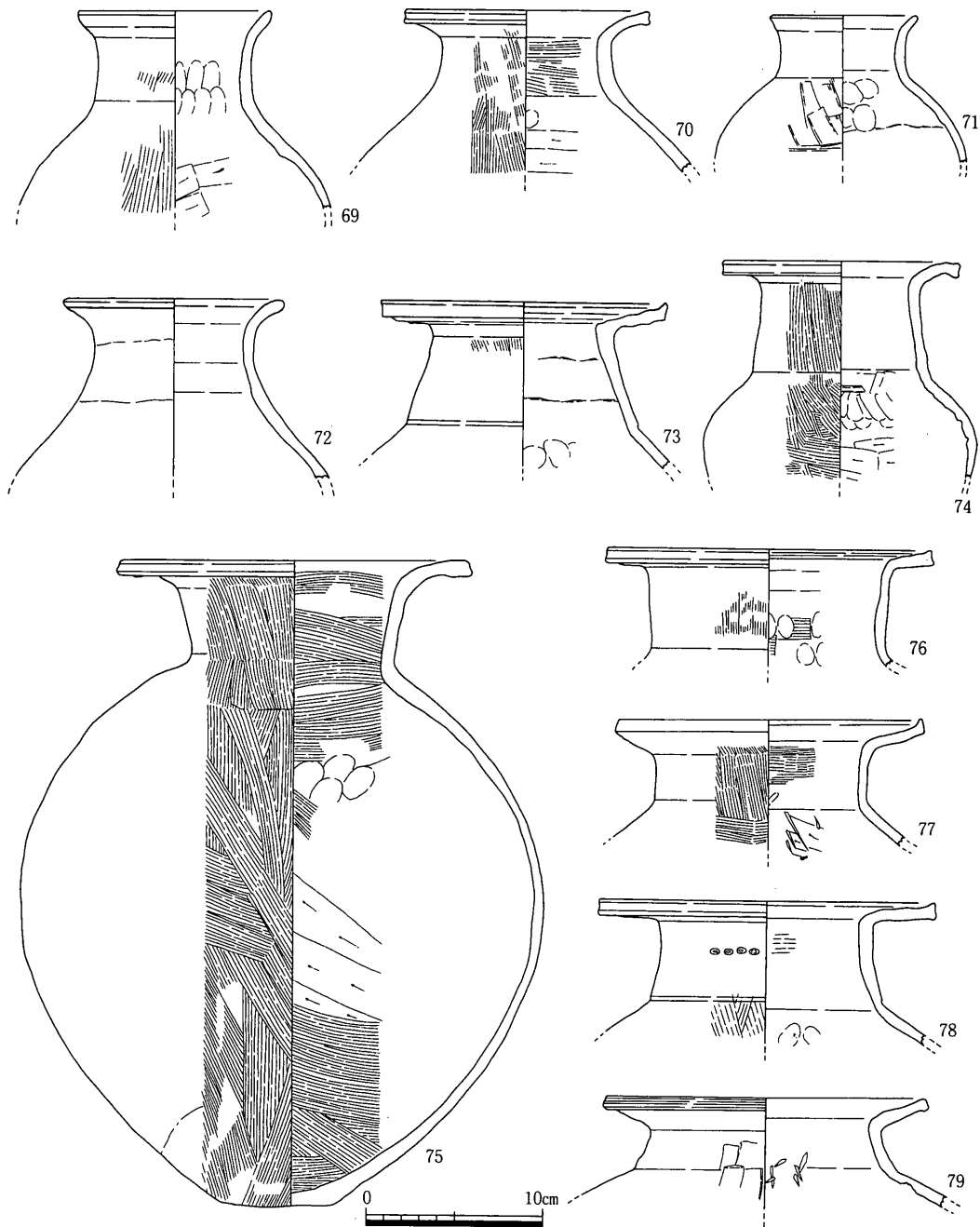
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
56	弥・壺	15.7			中・普	良好	浅黄橙	ナデ・ミガキ	ナデ	円形禊文12個	
57	弥・壺	13.0			細・少	良好	淡黄橙	不明	不明	頸部へラ描き沈線1条	
58	弥・壺	16.2			中・普	良好	明褐	ハケ目	ナデ		金蚕母・角閃石
59	弥・壺	13.1			細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ		
60	弥・壺	14.1			中・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		金蚕母
61	弥・壺				中・普	良好	橙	ハケ目	ハケ目・ケズリ		

第560図 F区SR01出土遺物(3)(1/4)



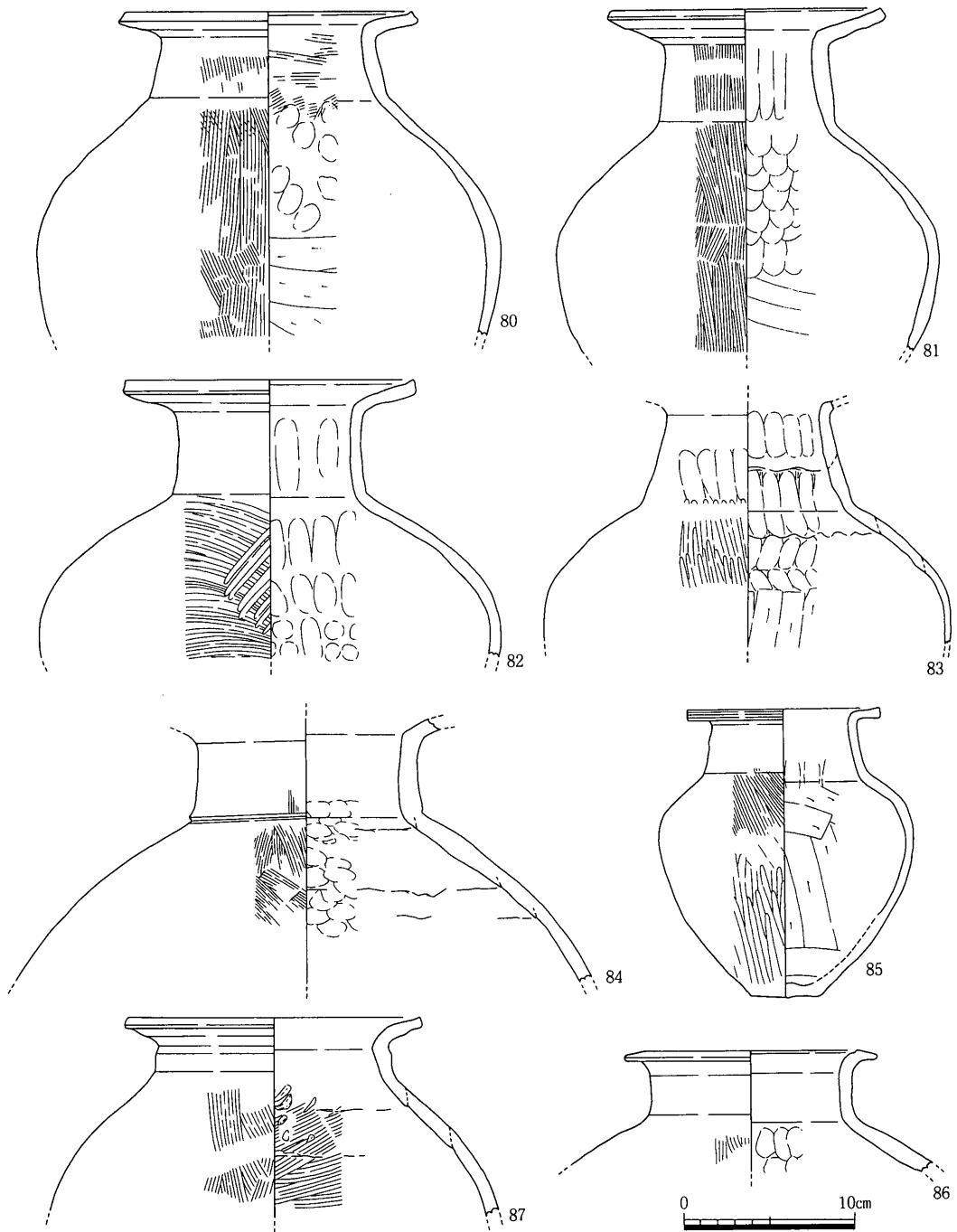
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
62	弥・甕				中・普	良好	黒・ニブイ黄褐	ハケ目→ナデ	ナデ・ハケ目		
63	弥・甕	16.2			中・普	良好	にぶい橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		金襴母
64	弥・甕	14.7			中・普	良好	灰黄	ハケ目	板ナデ		
65	弥・甕	13.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目→ナデ	頸部にヘラ疋痕文	金襴母・襷母
66	弥・甕	16.6	34.8	5.8	中・普	良好	にぶい黄	ナデ・ハケ目	ハケ目		
67	弥・甕	11.9			中・普	良好	淡黄・黄灰	ハケ目	ナデ・ケズリ		
68	弥・甕	13.1	23.6	5.4	細・普	良好	褐・明黄褐	ハケ目	ハケ目・ケズリ・ナデ		金襴母

第561図 F区SR01出土遺物(4)(1/4)



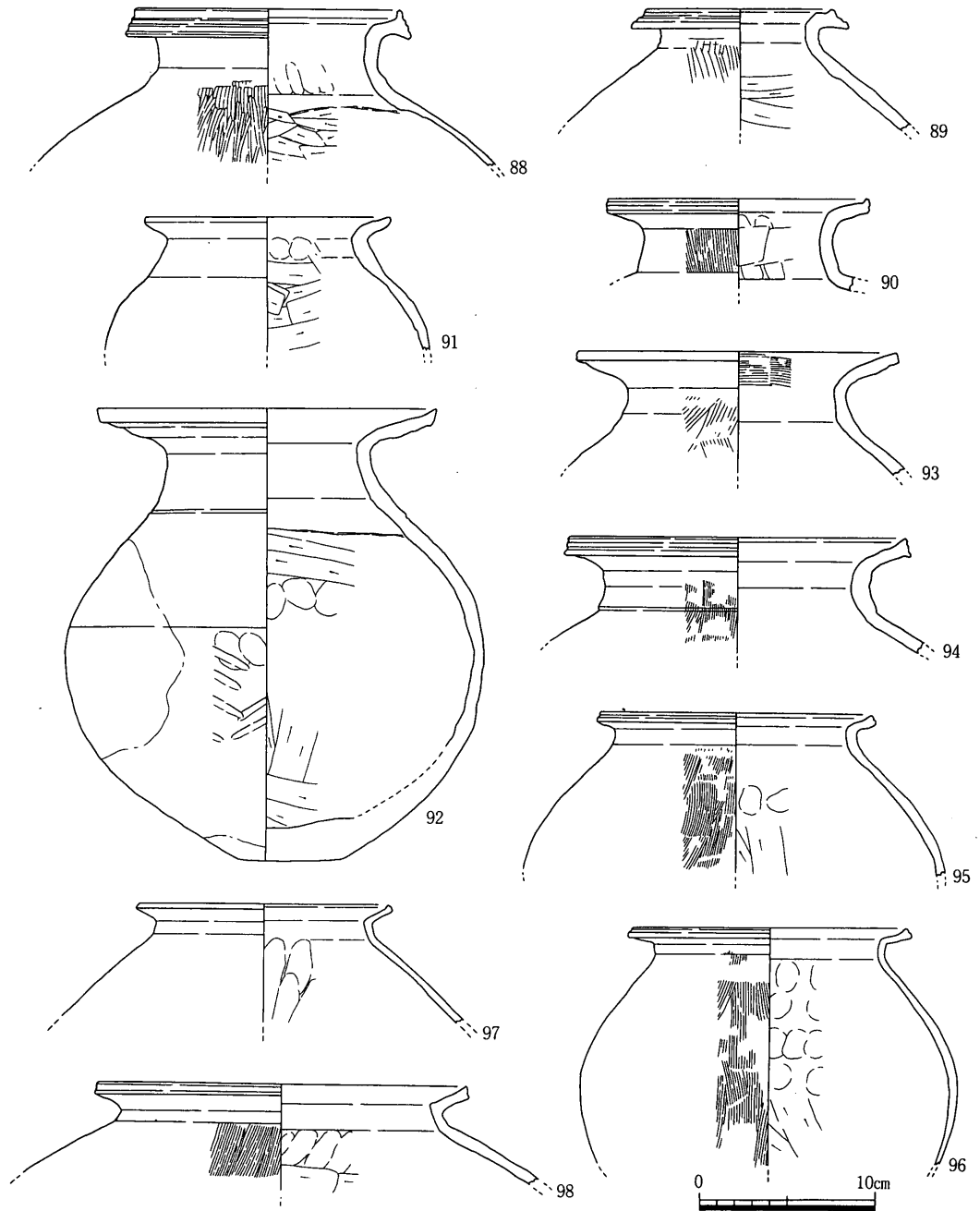
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
69	弥・壺	10.9			細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
70	弥・壺	13.8			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ・ハケ目・ケズリ		金雲母・角閃石
71	弥・壺	8.2			細・普	良好	暗灰黄	ナデ・板ナデ	ナデ		金雲母・韓式
72	弥・壺	12.6			中・普	良好	暗灰黄	ナデ	ナデ		金雲母・雲母
73	弥・壺	16.2			細・多	良好	橙	ナデ・ハケ目→ナデ	ナデ		金雲母
74	弥・壺	13.2			中・普	良好	灰黄	ハケ目	ケズリ・ナデ		
75	弥・壺	12.2	36.0	5.3	中・普	良好	黒・コブイ黄橙	ハケ目	ハケ目・ケズリ		
76	弥・壺	18.2			細・多	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ・ハケ目		金雲母・角閃石
77	弥・壺	17.6			細・普	良好	にぶい橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目・ケズリ		
78	弥・壺	19.0			中・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		金雲母
79	弥・壺	18.0			精緻	良好	灰黄褐	板ナデ	ナデ	内面棒状工具の刺突痕	金雲母

第562図 F区SR01出土遺物(5)(1/4)



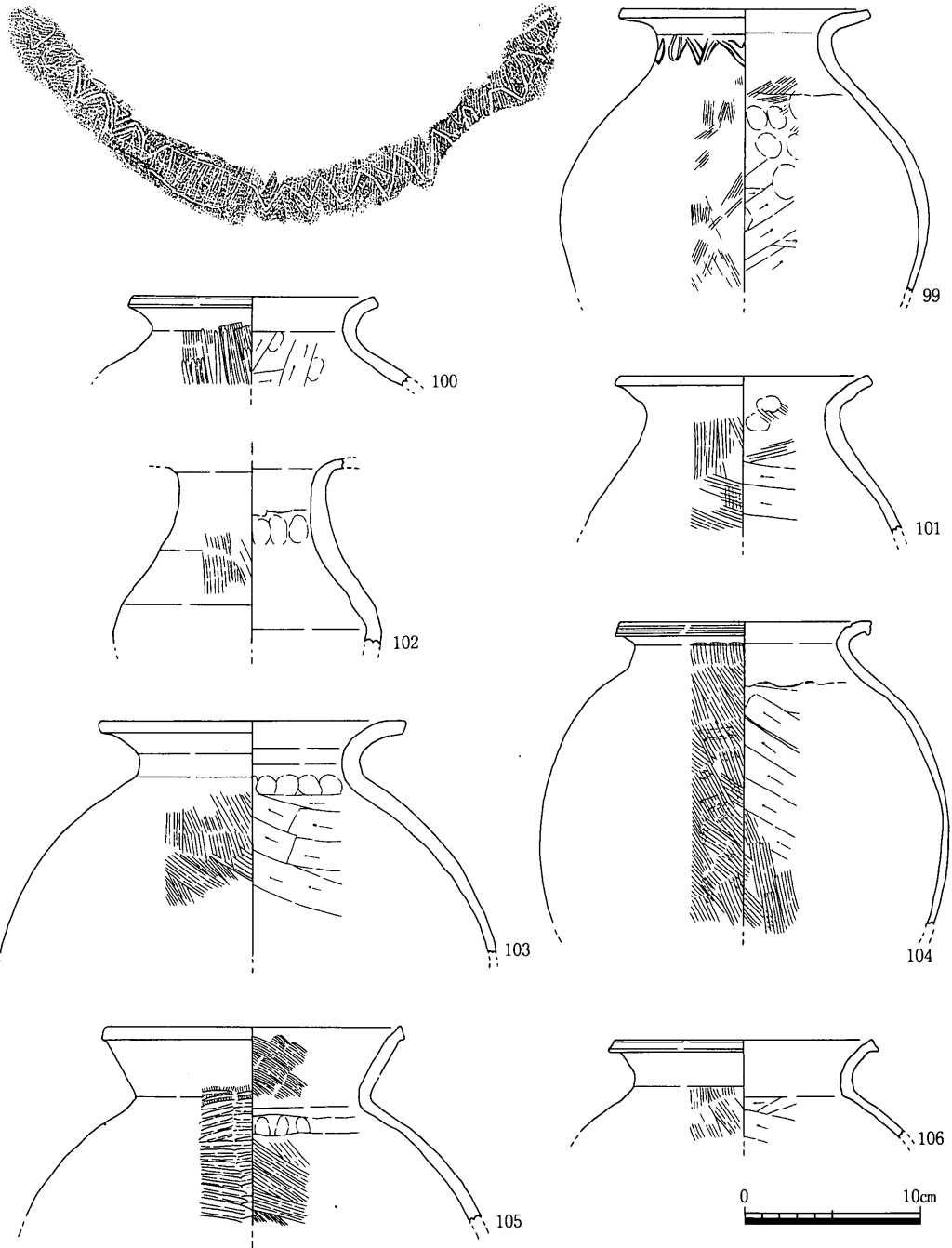
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
80	弥・壺	16.8			微・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ハ目・ケズリ・ナデ		金罌母
81	弥・壺	15.7			中・普	良好	橙	ハケ目	ナデ		
82	弥・壺	16.6			中・普	良好	橙	ナデ・ミガキ	ナデ	胴部外面交叉状ミガキ	角閃石
83	弥・壺				細・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ケズリ		金罌母・角閃石
84	弥・壺				中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ		
85	弥・壺	11.2	16.8	3.9	中・普	良好	コブイ黄褐・黒	ナデ・ハ目・ナデ	ナデ・ケズリ		金罌母
86	弥・壺	12.4			中・普	良好	浅黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ	口縁内面に沈線1条	
87	弥・壺	17.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	内面に工具痕多い	金罌母

第563図 F区SR01出土遺物(6)(1/4)



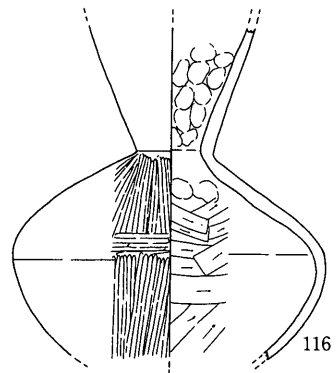
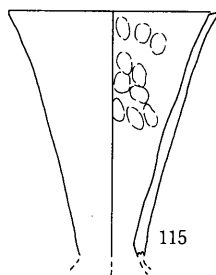
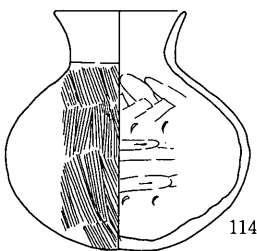
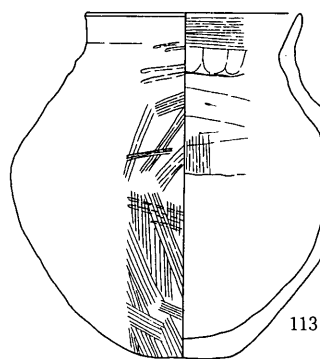
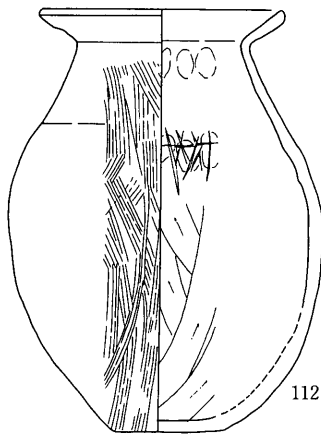
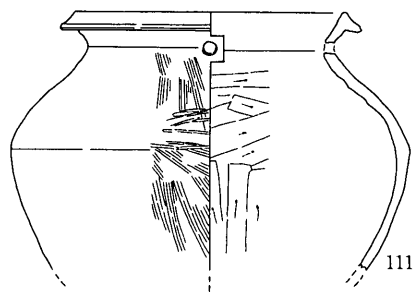
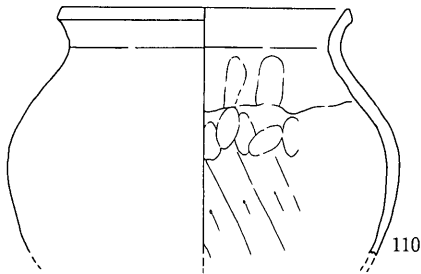
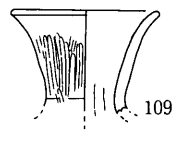
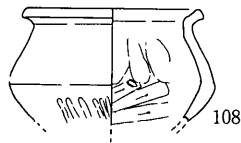
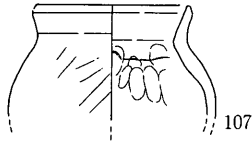
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
88	弥・壺	14.9			中・多	良好	灰褐・黒褐	拵'・ハ目→拵'キ	ナデ・ケズリ		
89	弥・壺	10.6			中・普	良好	浅黄橙	ハケ目・ナデ	ナデ・ケズリ	口縁下端を横へ拡張	
90	弥・壺	14.9			中・普	良好	橙	ハケ目・ナデ	ナデ		金雲母・角閃石
91	弥・壺	14.0			中・普	良好	灰白	不明	ナデ・ケズリ		
92	弥・壺	19.4	25.2	6.0	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ・ケズリ	口縁外面ナデの凹凸	
93	弥・壺	18.2			中・普	良好	にぶい黄橙	拵'・ハ目→拵'	ハケ目・ナデ		
94	弥・壺	19.2			中・普	良好	にぶい橙	ナデ・ハケ目	ナデ	頸部下部に段有り	
95	弥・壺	15.4			中・普	良好	浅黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
96	弥・壺	14.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		金雲母
97	弥・壺	14.2			細・普	良好	にぶい褐	不明	ナデ		角閃石
98	弥・壺	21.2			中・普	良好	明赤褐・橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		金雲母

第564図 F区SR01出土遺物(7)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
99	弥・壺	13.9			中・普	良好	明黄褐	ハケ目・ナデ	ナデ・ハケ目・ナズリ	頸部に絵画状の線刻	金雲母
100	弥・壺	13.6			中・普	良好	にぶい橙	ナデ・ハケ目→叩き	ナデ・ケズリ		
101	弥・壺	14.0			中・普	良好	浅黄橙・灰	ナデ・ハケ目	ハケ目→ナデ・ナズリ		
102	弥・壺				中・普	良好	灰	ハケ目・ナデ	ナデ		
103	弥・壺	17.4			中・普	良好	灰黄	ハケ目・ナデ	ケズリ・ナデ		
104	弥・壺	14.3			中・普	良好	明赤褐	叩き→ハケ目	ナデ・ナズリ・ハケ目		角閃石
105	弥・壺	16.7			中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ハケ目→叩き	ハケ目		金雲母
106	弥・壺	14.4			中・普	良好	橙～黒	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		

第565図 F区SR01出土遺物(8)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
107	弥・壺	8.2			細・普	良好	にぶい黄橙	ケズリ→ナデ	ナデ	内面接合痕顕著	金雲母
108	弥・壺	9.2			微・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ケズリ		金雲母・角閃石
109	弥・壺	7.8			中・普	良好	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ		金雲母
110	弥・壺	21.2			中・普	不良	にぶい黄橙	不明	ハケ目・ケズリ		
111	弥・壺	14.1			中・普	良好	浅黄橙	ナデ・ハケ目・ミガキ	ナデ・ハケ目・ケズリ	頸部に1ヶ所穿孔	
112	弥・壺	12.6	21.8	5.9	細・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ・ケズリ		金雲母
113	弥・壺	11.2	17.9	4.0	中・普	良好	にぶい黄	叩き→ハケ目	ハケ目・ケズリ・ナデ	内面に粘土痕残る	金雲母
114	弥・壺	6.8	12.4	3.1	中・普	良好	淡黄・黒	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		内・外面に煤付着
115	弥・壺	11.1			細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	内面しぼり目	
116	弥・壺				中・普	良好	暗灰黄	ナデ・ミガキ	ケズリ	胴部中央横のミガキ	

第566図 F区SR01出土遺物(9)(1/4)

いる。外面は頸部から下を全体にハケ目調整を行なっている。内面は体部中央部分にヘラケズリが残る他はハケ目を施している。77・79の内面には細い棒状工具の痕跡が多く残る。81～83の頸部内面は指で上下にナデており、体部上半には指押さえの痕が顕著に残る。82は体部外面に波状のヘラミガキを施している。

86～98は頸部が短く口縁部が外へ開くものである。86は口縁部端部を横へつまみ出し、外側に斜めの面を作り出している。88・89は口縁部端部を上下に拡張しており、外面に擬凹線を施している。88は体部外面をハケ目の後にヘラミガキを施している。90は口縁部端部を上方へ拡張している。91は口縁部から頸部にかけて器壁が厚くなっている。92は口縁部を強くナデており外面に凹凸が生じ、口縁部端部外面には面をもっている。体部は球形で底部は肥厚した平底となっている。外面にはヘラミガキ、内面にはヘラケズリを施している。95・96は甕に近い形態であるが、短いながら頸部と考えられる部分があるので壺とした。97・98は頸部が短く内傾し、口縁部は内面に鋭い稜をもって外方に短く開く。

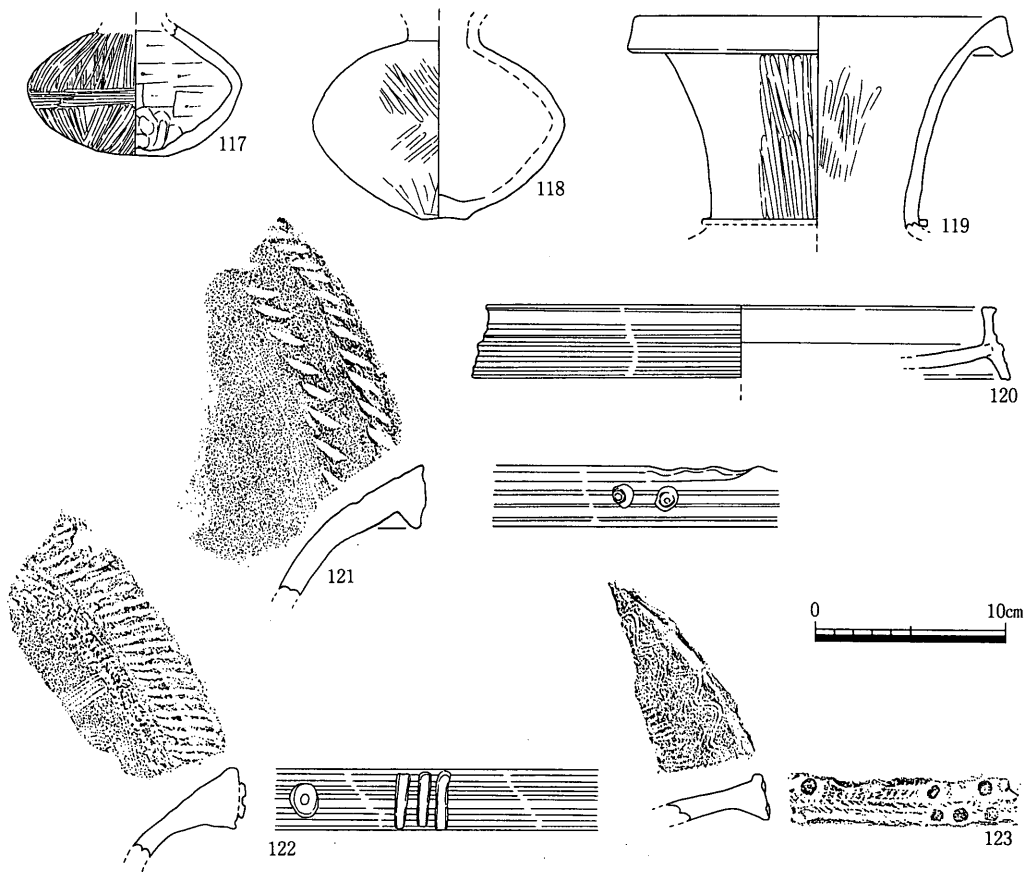
99～114は頸部をほとんどもたないものであるが、全体の形態から壺と判断したものである。99は頸部外面にヘラ状工具で描かれた絵画状のものが巡っている。基本的に鋸歯文のように描かれており、一部に長方形の中に縦線が描かれている。何を意味するのかは不明である。102は肩の張らない体部からなだらかに頸部に移るものである。105・106は甕と考えられなくもないが、口縁部と体部の接続部の幅が狭いため壺のほうが適当であると考えたものである。108はおそらく脚台の付くものであろう。体部は中央部で屈曲しており、111は口縁部端部を斜め下方に拡張し外側に面を作り出している。さらに頸部に1箇所焼成前の穿孔が見られる。112は西洋梨形の体部で、外面は叩きの後にハケ目を施している。

115～118は細頸壺である。頸部は長くラップ状に開く。体部は玉葱形をしており、外面中央部に横方向のヘラミガキを、上下に縦方向のヘラミガキを施している。120は口縁部端部を上下に大きく拡張しており、外面に幅広い面を作り出している。口縁部端部から直線的に伸びるが、途中で欠損している。器台とも考えられるが、吉備地方に見られる特殊壺のような形態と考えたい。

121～123は大型の壺の口縁部で、いずれも口縁部外面に円形ないし棒状の浮文を貼りつけ、内面にも文様を施している。

124～279は甕である。主に口縁部の形態から分類した。

124～138は口縁部端部を拡張し、口縁部外側に面を作り出すものである。大多数は口縁

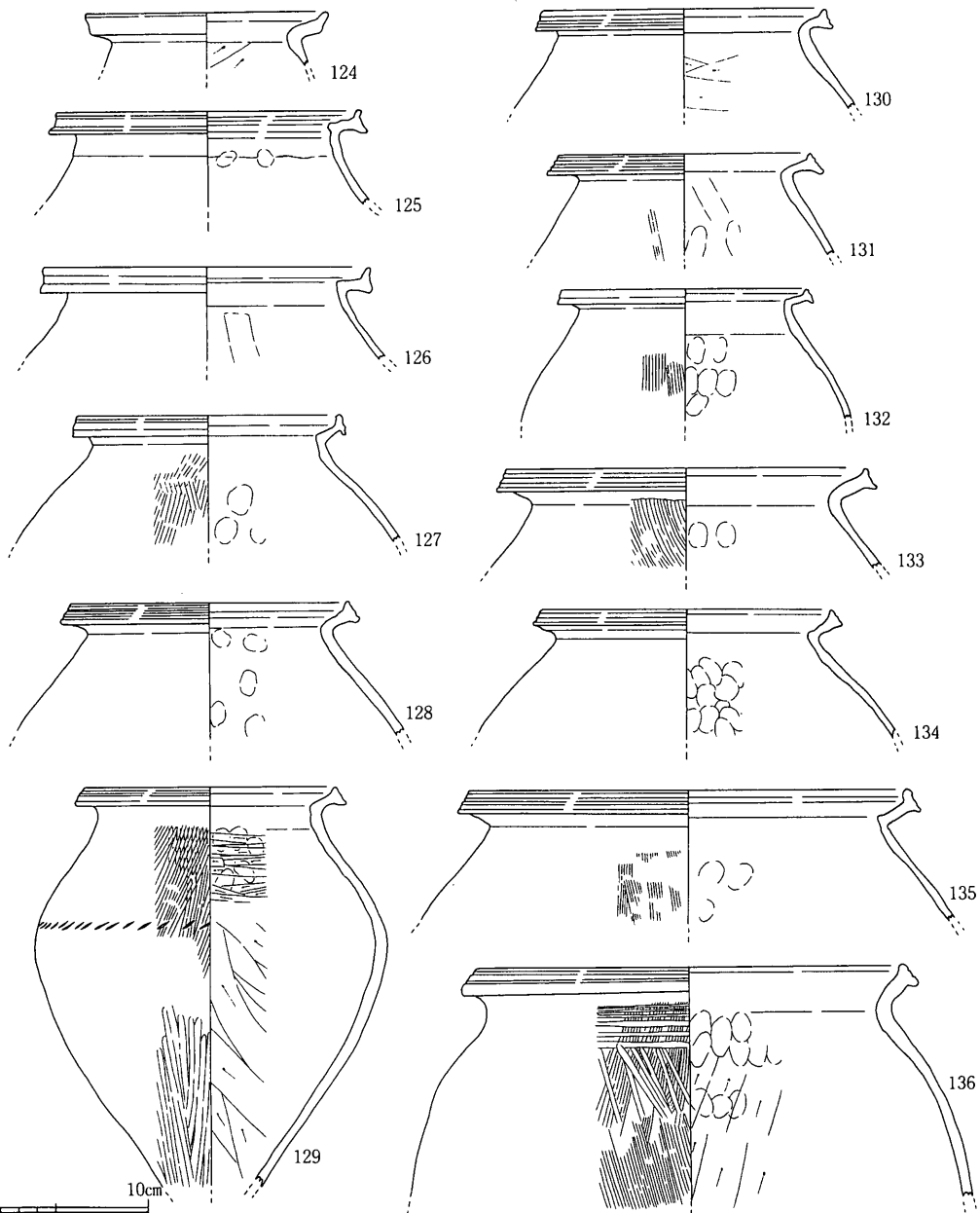


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
117	弥・壺			2.3	中・普	良好	黒褐・暗灰黄	ハケ目→ミガキ	ケズリ・板ナデ	胎部中央部横ミガキ	金雲母
118	弥・壺			2.3	中・普	良好	にぶい褐	ミガキ・ケズリ→ナデ	ナデ		金雲母・角閃石
119	弥・壺	19.5			中・普	不良	灰黄褐・黄橙	ミガキ	ミガキ	頸部に突帯1条巡る	
120	弥・壺	27.2			中・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ		金雲母・角閃石
121	弥・壺				中・普	良好	赤褐	不明	ナデ・ハケ目		
122	弥・壺				細・普	良好	灰白	不明	不明	円形浮文・棒状浮文	内面に麻状文
123	弥・壺	15.6			中・普	良好	にぶい黄橙	不明	不明	内面に櫛描波状文	

第567図 F区SR01出土遺物(10)(1/4)

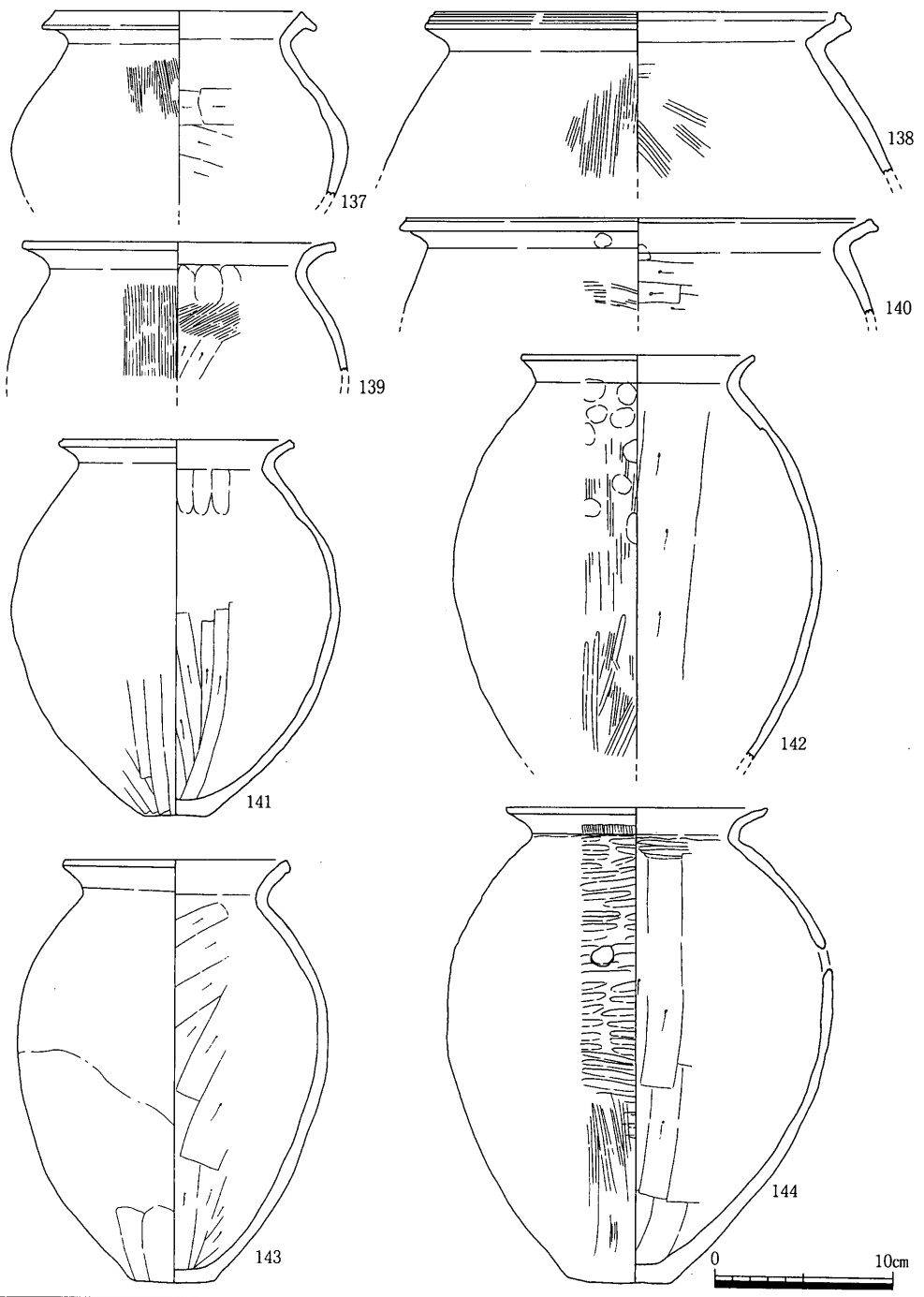
部外面に沈線ないし凹線を施している。口縁部端部の拡張は上方に拡張するもの(124・126・134・138)、下方に拡張するもの(129・137)、上下に拡張するもの(125・127・128・130~133・135・136)がある。129は体部は倒卵形で外面下半にはヘラミガキを施している。内面のヘラケズリは上部にまで及んでいる。136は体部外面はハケ目の後に口縁部直下に横方向のヘラミガキを、その下に斜め方向のヘラミガキを施している。138は内面にもハケ目を施している。

139~184は口縁部は体部から曲線的に開くものである。体部外面の調整は叩きのみのもので、叩きの後にハケ目のもの、ハケ目のみのもの、ヘラミガキの加わるものがある。141・



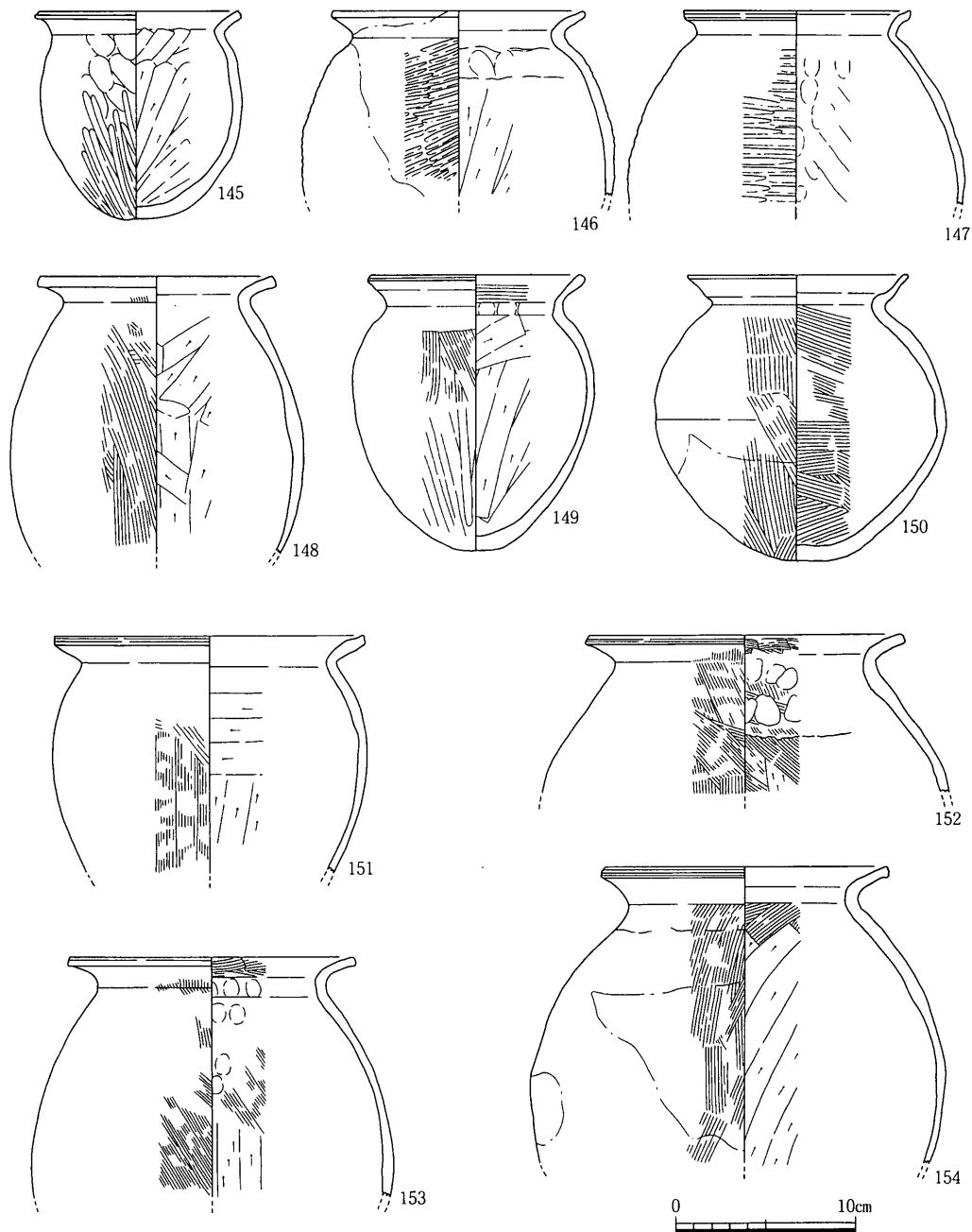
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
124	弥・甕	13.0			細・普	良好	橙	ナデ	ナデ・ケズリ		金雲母
125	弥・甕	16.4			中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	口縁強いナデ	
126	弥・甕	19.6			細・普	良好	コブイ褐・赤褐	不明	ナデ		
127	弥・甕	14.2			中・普	良好	灰黄	ハケ目	ナデ		
128	弥・甕	15.1			微・普	良好	暗灰黄・黒	ナデ	ナデ		
129	弥・甕	13.6			微・普	良好	暗灰黄	ハケ目・折・ミガキ	ナデ・ケズリ	単位の小さいケズリ	外面に煤付着
130	弥・甕	15.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ケズリ		
131	弥・甕	13.6			微・普	良好	利-ブ黒・黒	ハケ目→ナデ	ナデ		
132	弥・甕	13.4			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ナデ		金雲母
133	弥・甕	19.4			中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目	ナデ		
134	弥・甕	15.7			中・普	良好	明赤褐	ナデ	ナデ		金雲母
135	弥・甕	23.8			中・普	良好	浅黄	ハケ目	ナデ		金雲母
136	弥・甕	23.2			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ミガキ	ナデ・ケズリ		

第568図 F区SR01出土遺物(11)(1/4)



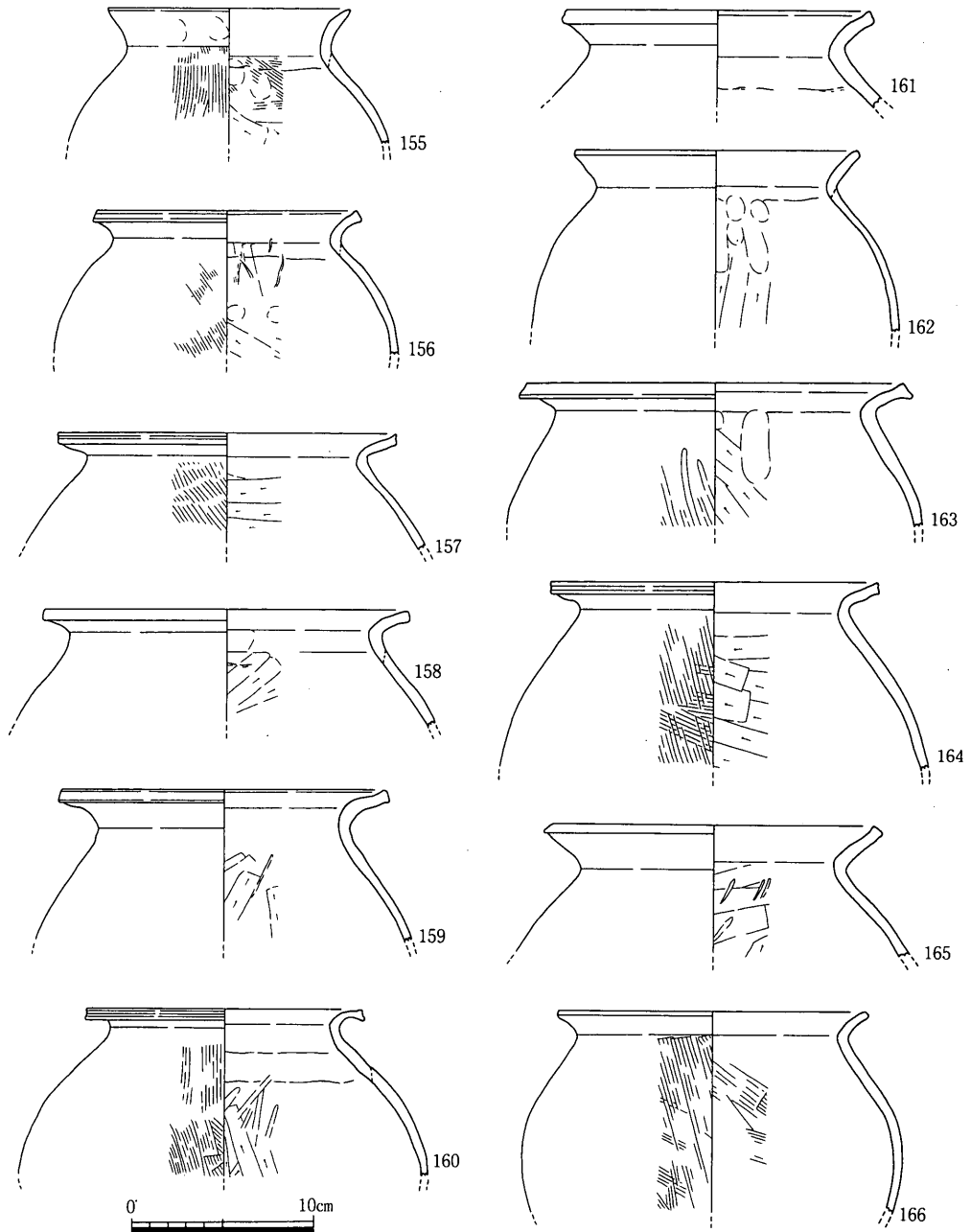
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
137	弥・甕	14.0			粗・普	良好	浅黄橙	ハケ目	ケズリ		角閃石
138	弥・甕	22.8			中・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		
139	弥・甕	17.4			中・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目・ナズリ		雲母
140	弥・甕	26.0			粗・普	良好	黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
141	弥・甕	12.6	20.0	3.6	中・普	良好	明褐	ナデ・板ナデ	ナデ・ケズリ		金雲母
142	弥・甕	13.0			細・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目・ミガキ	ナデ・ケズリ		金雲母
143	弥・甕	12.4	23.7	4.8	中・普	不良	浅黄橙	ナデ	ケズリ		
144	弥・甕	14.6	26.5	4.7	中・普	良好	にぶい褐	叩きハケ目	ナデ・ミガキ・ナズリ		金雲母

第569図 F区SR01出土遺物(12)(1/4)



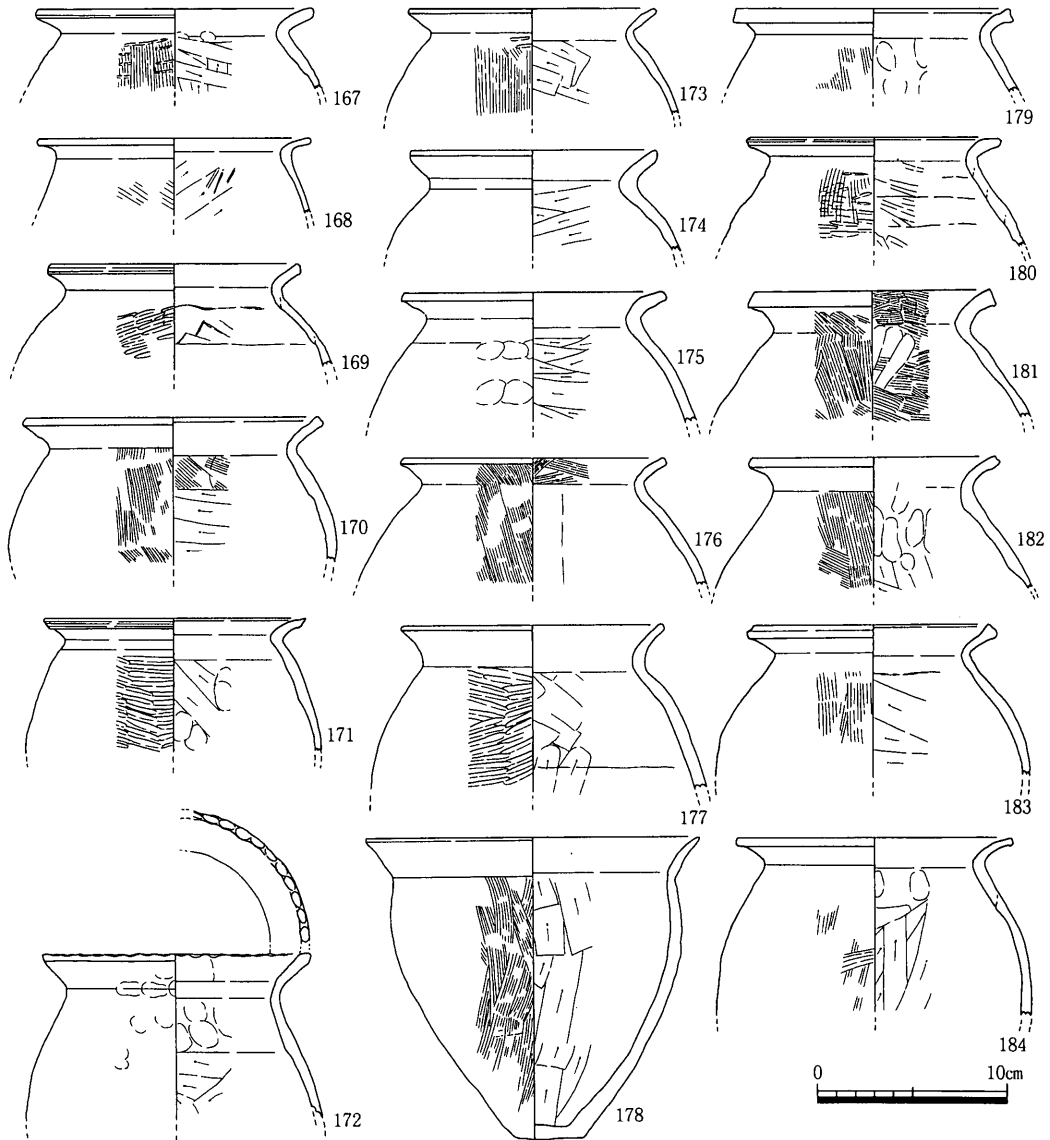
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
145	弥・甕	11.0	11.5	3.4	中・普	良好	灰黄褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ケズリ	内面下半粗いミガキ	金襴母
146	弥・甕	14.0			中・普	良好	暗灰黄	ナデ・叩き	ナデ・ケズリ		金襴母
147	弥・甕	12.6			中・普	良好	にぶい褐	叩き	板ナデ		金襴母
148	弥・甕	13.0			細・普	良好	浅黄・灰黄	ハケ目	ケズリ	内面に強いケズリ	金襴母
149	弥・甕	11.6	15.3	2.7	中・普	良好	橙	打・ハケ目・ミガキ	ハケ目・ケズリ	外面叩きの痕跡有り	金襴母
150	弥・甕	12.4	15.8	3.5	中・普	良好	橙	ハケ目・ナデ	ハケ目		
151	弥・甕	17.2			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ケズリ		
152	弥・甕	17.6			中・普	良好	灰黄	ハケ目→ナデ	ハケ目・ケズリ		
153	弥・甕	15.8			中・普	良好	灰黄	ハケ目	ハケ目・ケズリ		
154	弥・甕	15.8			中・多	良好	明赤褐	ハケ目→ナデ	ハケ目・ケズリ		

第570図 F区SR01出土遺物(13)(1/4)



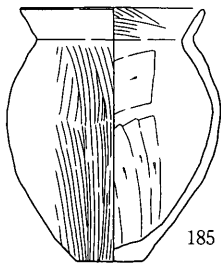
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
155	弥・甕	13.4			中・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目・ナデ		金器母
156	弥・甕	14.2			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ	内面に工具痕多い	
157	弥・甕	18.6			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ケズリ		
158	弥・甕	20.0			中・普	不良	浅黄橙	不明	ナデ・ケズリ		
159	弥・甕	17.8			中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ・ケズリ		金器母
160	弥・甕	15.2			中・普	良好	灰白	ハケ目	ナデ・ケズリ	内面棒状工具のナデ	
161	弥・甕	16.6			粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
162	弥・甕	15.4			中・多	良好	浅黄	不明	ナデ・ケズリ		
163	弥・甕	20.6			中・普	良好	灰白	ミガキ	ケズリ		
164	弥・甕	16.0			中・普	良好	灰黄	ハケ目	ナデ・ケズリ		
165	弥・甕	18.6			中・普	良好	褐	ナデ	板ナデ		
166	弥・甕	16.6			中・普	良好	橙	ハケ目・ナデ	ハケ目		

第571図 F区SR01出土遺物(14)(1/4)

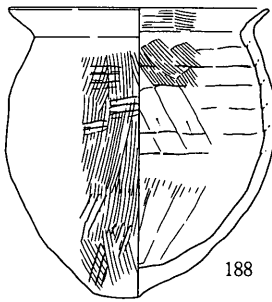


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
167	弥・甕	14.7			細・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ナデ・ケズリ		金雲母
168	弥・甕	14.2			中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
169	弥・甕	13.0			細・多	良好	灰黄褐	ナデ・叩き	板ナデ		金雲母
170	弥・甕	14.6			中・普	良好	橙	ハケ目	ハケ目・ケズリ		金雲母・角閃石
171	弥・甕	13.8			微・普	良好	灰黄	ナデ・叩き	ナデ・ケズリ		金雲母
172	弥・甕	14.2			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ケズリ	口縁端面に指頭圧痕	金雲母
173	弥・甕	12.8			中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ケズリ		金雲母
174	弥・甕	12.8			微・普	良好	橙	ナデ	ナデ・ケズリ		金雲母
175	弥・甕	13.6			微・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ケズリ		金雲母
176	弥・甕	13.6			微・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ハケ目・ナデ		
177	弥・甕	13.9			中・普	良好	にぶい褐	叩き	ナデ・ケズリ		金雲母
178	弥・甕	17.6	15.8	3.7	微・普	良好	灰黄	ナデ・叩き→ハケ目	ナデ・ケズリ		
179	弥・甕	15.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ		金雲母
180	弥・甕	13.0			中・普	良好	明赤褐・黒褐	叩き→ナデ	ハケ目・ケズリ		金雲母
181	弥・甕	12.3			細・少	良好	にぶい褐	ハケ目	ハケ目		
182	弥・甕	12.7			中・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ	内面に工具痕多い	
183	弥・甕	12.3			中・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		金雲母
184	弥・甕	14.4			粗・普	良好	にぶい褐	ハケ目	ナデ・ケズリ		

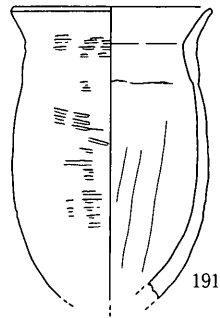
第572図 F区SR01出土遺物(15)(1/4)



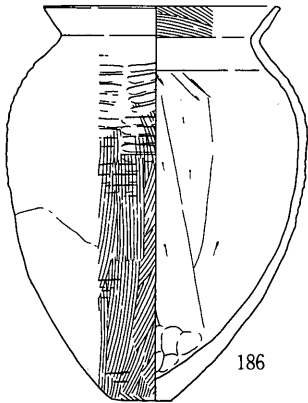
185



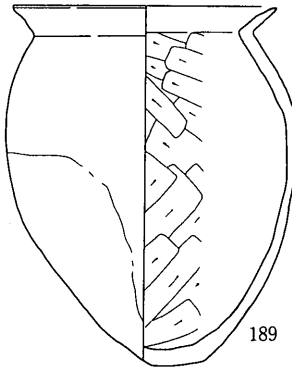
188



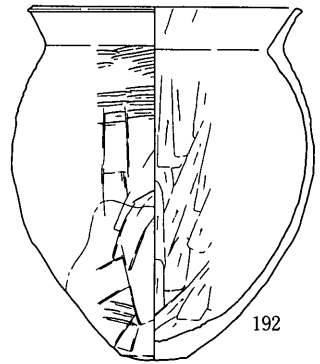
191



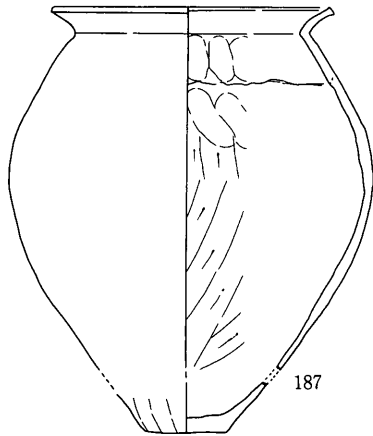
186



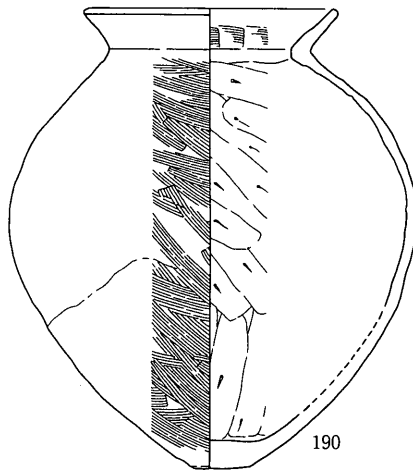
189



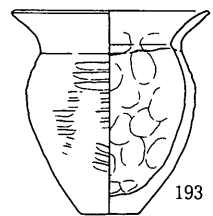
192



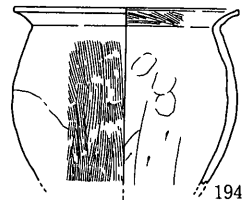
187



190



193

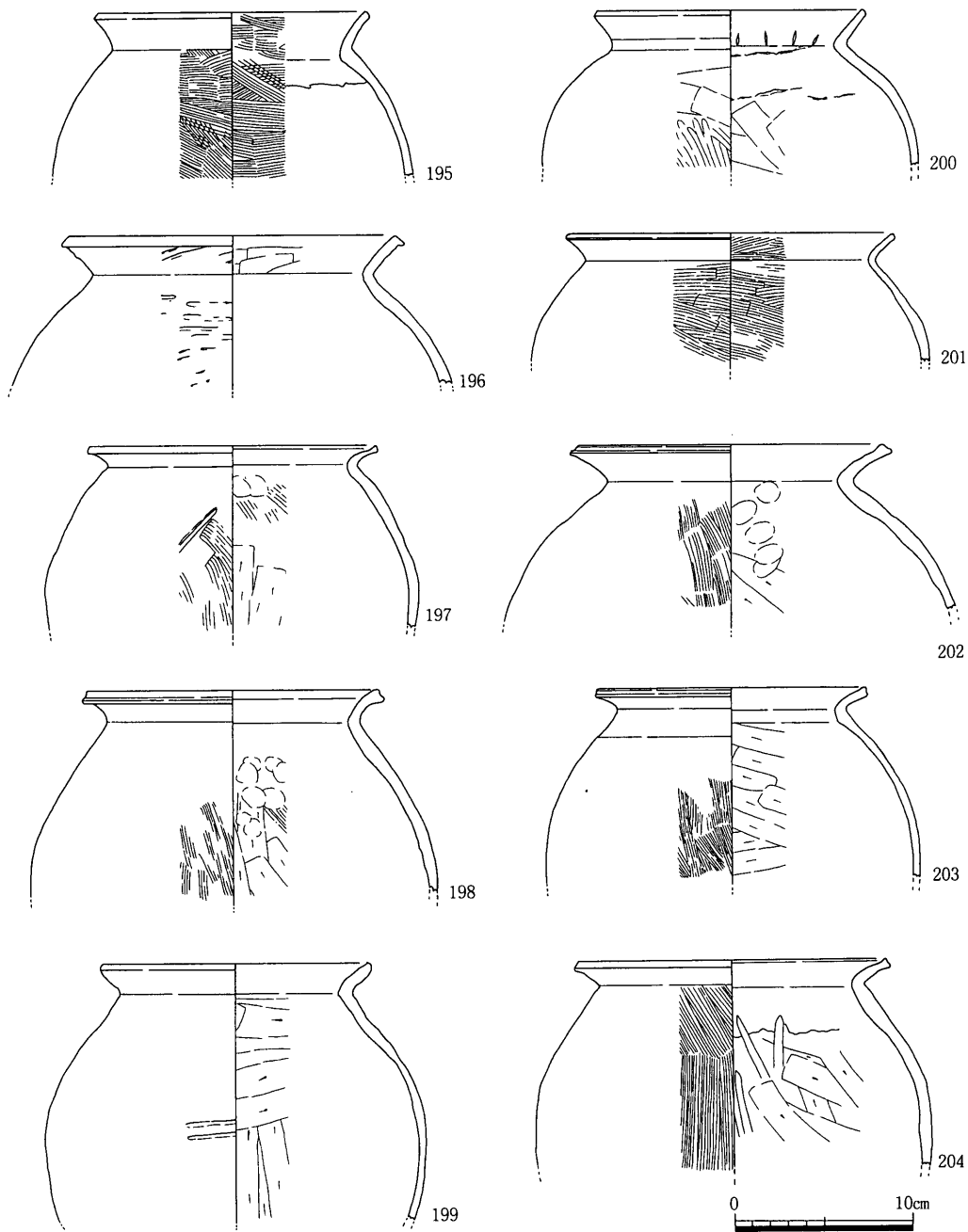


194



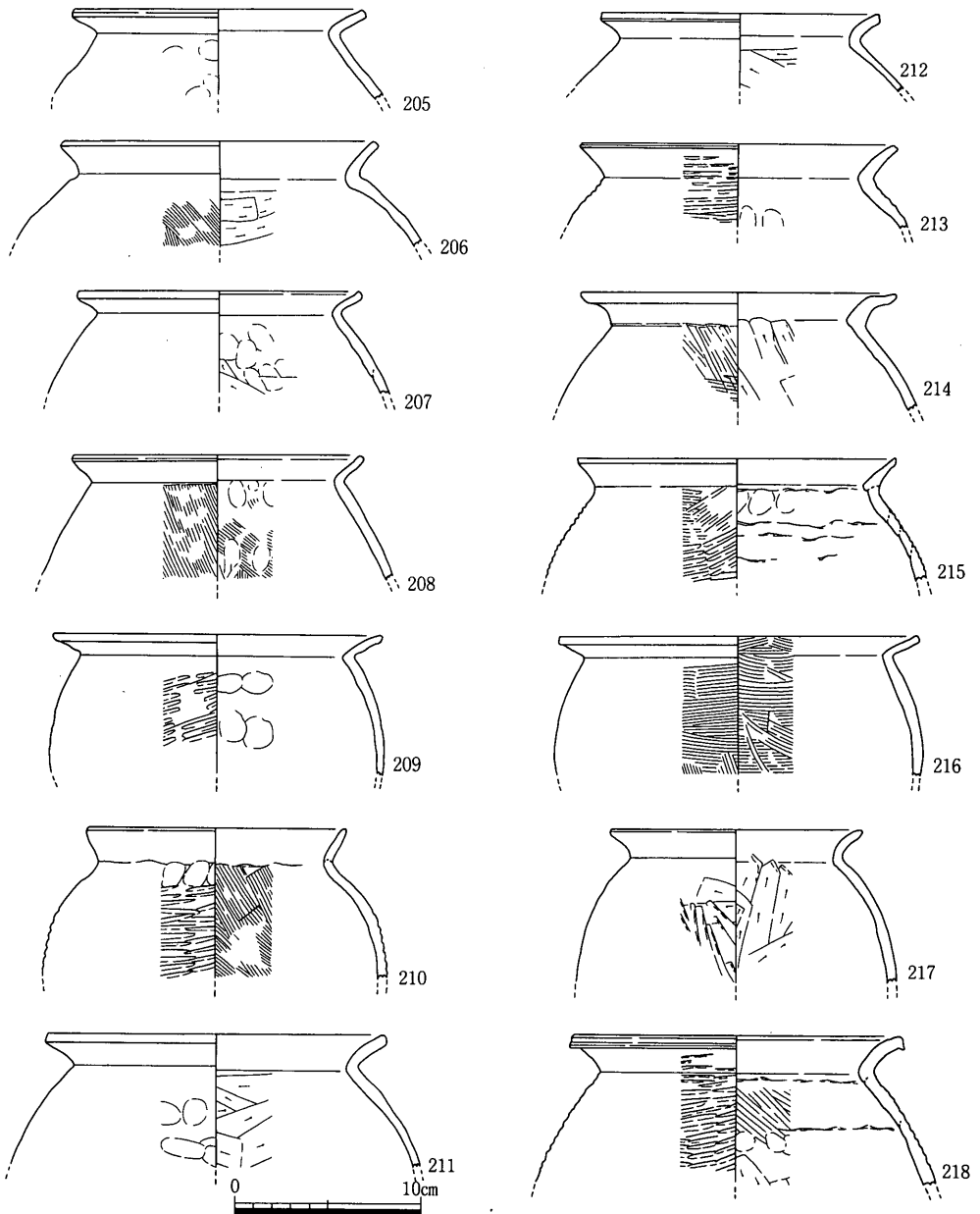
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
185	弥・甕	9.6	13.1	3.5	中・普	良好	橙	ハケ目・ナデ	ハケ目・ケズリ		金曇母
186	弥・甕	12.5	20.1	3.2	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ハケ目・ケズリ		金曇母・曇母
187	弥・甕	14.5	22.4	4.3	中・普	良好	黒褐	ナデ	ナデ・ケズリ		金曇母
188	弥・甕	13.7	15.0	2.4	中・普	良好	橙	叩き→ハケ目	ハケ目・ケズリ→ナデ	全体に歪んで粗い作り	
189	弥・甕	13.9	18.2	2.9	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ケズリ	全体に歪んでいる	
190	弥・甕	12.8	24.1	2.9	中・多	良好	橙	ハケ目	ハケ目→ナデ・ケズリ		
191	弥・甕	10.4			中・普	良好	黄褐・黒	叩き→ナデ	板ナデ	砲弾形の器形	金曇母
192	弥・甕	13.9	18.0	3.4	中・普	良好	にぶい赤褐	叩き→板ナデ	ナデ・ケズリ		金曇母
193	弥・甕	10.5	10.7	3.0	細・普	良好	浅黄橙	叩き→ナデ	ナデ		金曇母
194	弥・甕	11.8			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ・ケズリ	口縁内面ハケ目	金曇母

第573図 F区SR01出土遺物(16)(1/4)



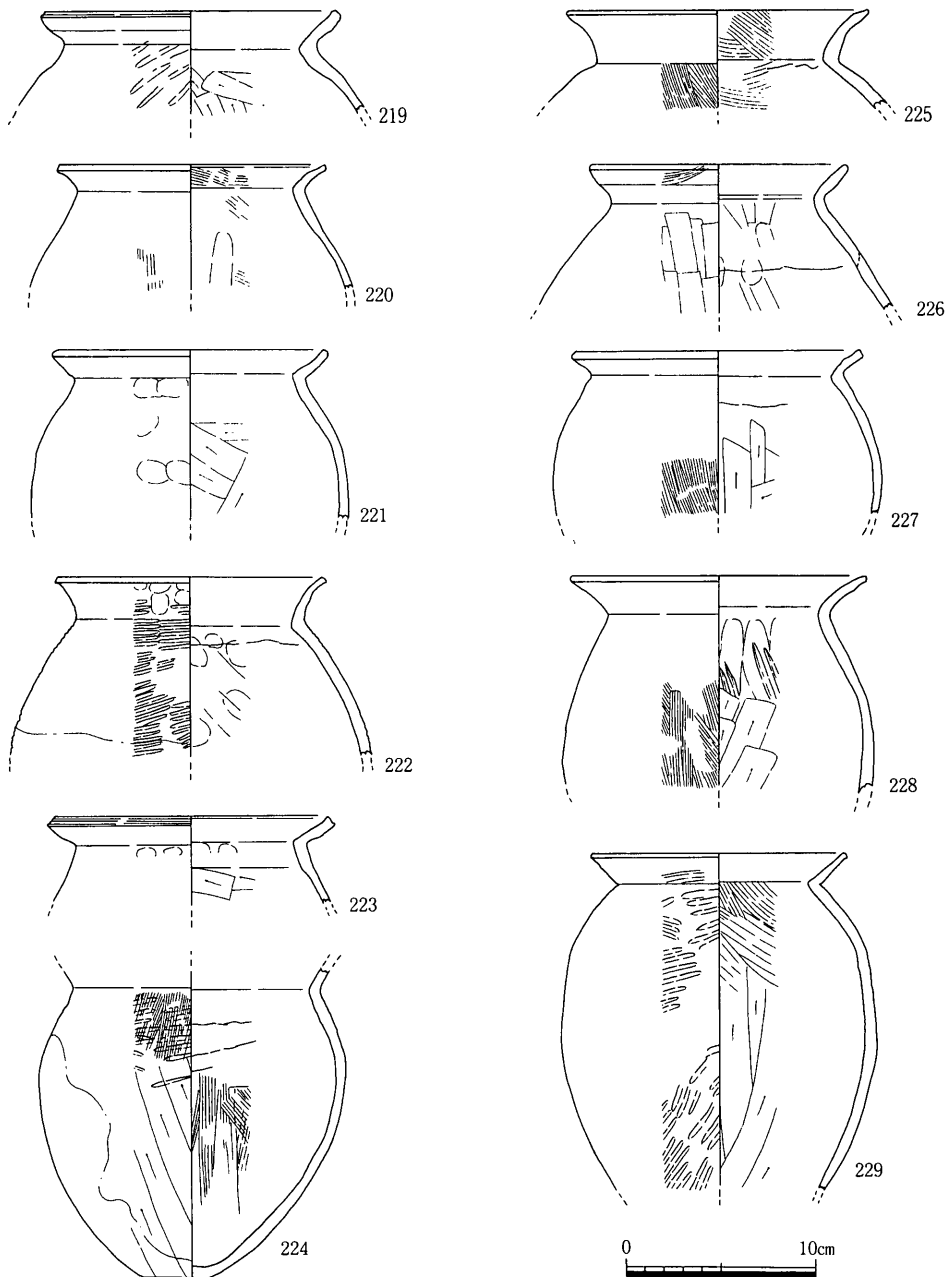
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
195	弥・甕	15.0			細・普	良好	灰黄・黒	ハケ目	ハケ目		金襴母
196	弥・甕	18.4			中・普	良好	黒・橙	叩き→ナデ	ナデ	口縁外面に叩き	金襴母
197	弥・甕	15.8			細・普	良好	黄灰	ハケ目	ナデ・ケズリ		金襴母
198	弥・甕	16.2			中・普	良好	灰オリーブ	好'・内目→好'	好'・好'リ・内目		
199	弥・甕	14.7			中・普	良好	灰黄・浅黄	叩き→ナデ	ケズリ		襷母
200	弥・甕	14.8			細・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ミガキ	ナデ		金襴母
201	弥・甕	18.1			細・少	良好	灰黄褐・黒	ナデ・ハケ目	ハケ目		金襴母
202	弥・甕	16.8			細・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
203	弥・甕	15.1			中・多	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ	内面に粗いケズリ	
204	弥・甕	17.2			中・普	良好	にぶい橙・橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ	内面に工具痕有り	

第574図 F区SR01出土遺物(17)(1/4)



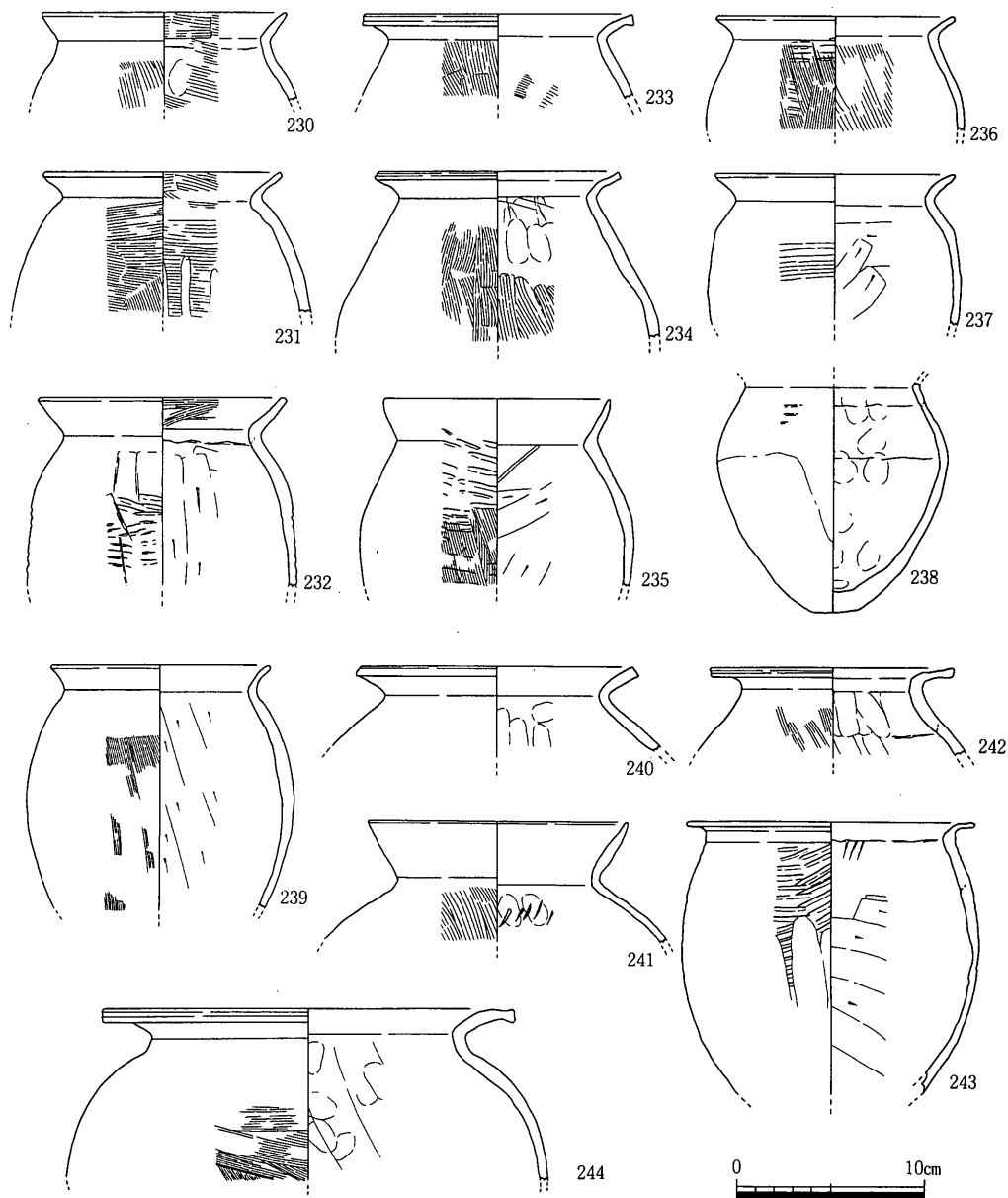
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
205	弥・甕	15.4			中・普通	良好	暗灰黄	不明	ナデ		
206	弥・甕	16.5			中・普通	良好	橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		金曇母
207	弥・甕	14.9			細・普通	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ・ケズリ		金曇母
208	弥・甕	15.3			中・普通	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ・ハケ目		
209	弥・甕	17.6			中・普通	良好	灰白	叩き	ナデ		
210	弥・甕	14.0			中・普通	良好	にぶい褐	ナデ・叩き	ナデ・ハケ目		
211	弥・甕	18.0			中・普通	良好	灰黄	ナデ	ケズリ	内面ケズリは任意方向	
212	弥・甕	14.8			細・普通	良好	にぶい黄褐	ナデ	ケズリ		
213	弥・甕	16.6			細・多	良好	にぶい黄橙	叩き	ナデ	口縁外面に叩き	金曇母
214	弥・甕	16.6			細・多	良好	橙	叩き→ハケ目	ナデ・ケズリ		金曇母
215	弥・甕	17.0			中・普通	良好	ゴブイ褐・灰褐	叩き	ナデ	内面接合痕顯著	曇母
216	弥・甕	19.4			細・普通	良好	暗灰	ナデ・ハケ目	ハケ目		金曇母
217	弥・甕	13.4			細・普通	良好	褐灰	打・ケズリ→板打	ナデ・ケズリ		金曇母
218	弥・甕	17.4			細・多	良好	にぶい黄橙	叩き	打・ハケ目・ケズリ	口縁外面に叩き	金曇母・角閃石

第575図 F区SR01出土遺物(18)(1/4)



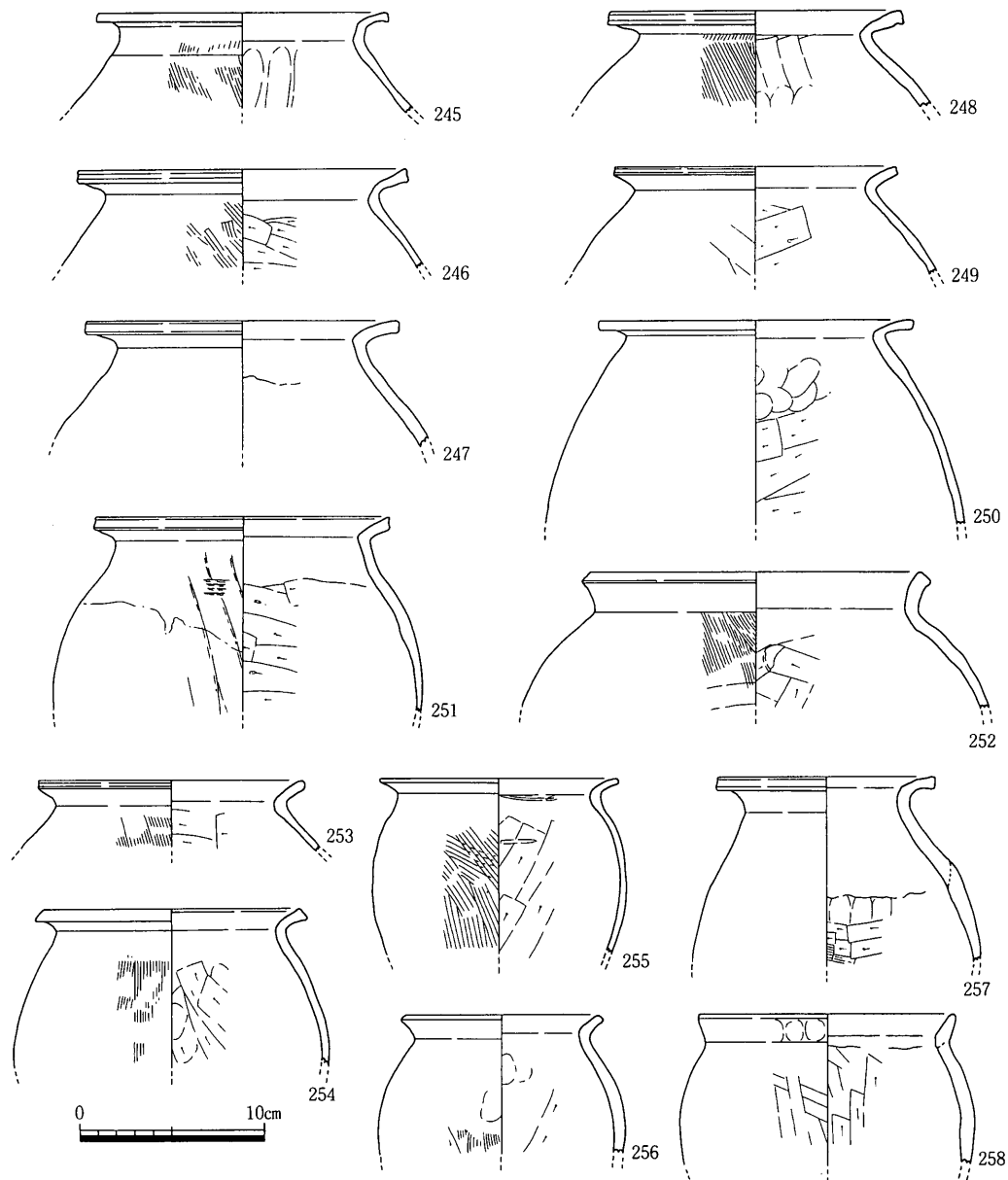
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
219	弥・甕	15.8			中・普	良好	にぶい橙	叩き→ナデ	ナデ・ケズリ	口縁端面沈線1条	
220	弥・甕	14.0			中・普	良好	にぶい黄褐	不明	ハケ目・ナデ		金雲母
221	弥・甕	14.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ケズリ	口縁強いナデ	金雲母・雲母
222	弥・甕	14.0			粗・少	良好	にぶい黄橙	叩き	ナデ	口縁外面に叩き	金雲母
223	弥・甕	14.4			細・少	良好	灰白	ナデ	ナデ・ケズリ		
224	弥・甕			3.4	中・普	良好	灰黄	叩き→ハケ目・ケズリ	ナデ・ハケ目		
225	弥・甕	16.0			細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ハケ目		金雲母
226	弥・甕	13.4			中・普	良好	橙	板ナデ	板ナデ	口縁外面ハケ目工具痕	金雲母
227	弥・甕	14.9			中・普	良好	コブイ褐・黄灰	叩き→ハケ目	ナデ・ケズリ		
228	弥・甕	15.6			中・普	不良	にぶい黄	ハケ目・ナデ	ナデ・ケズリ		
229	弥・甕	13.4			中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目・叩き→ナデ	ハケ目・ケズリ		金雲母

第576図 F区SR01出土遺物(19)(1/4)



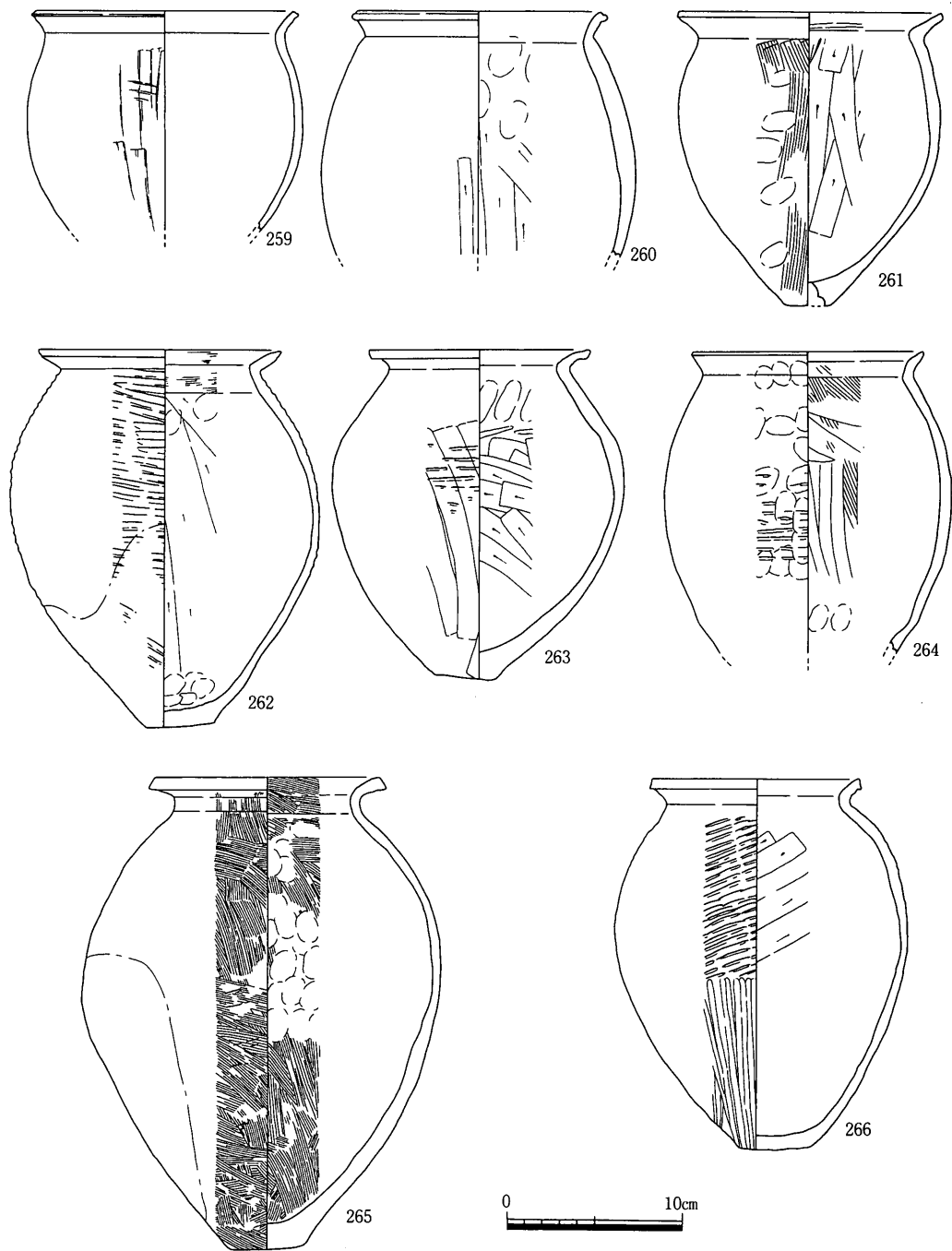
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
230	弥・甕	13.0			細・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ハケ目		
231	弥・甕	12.6			細・普	良好	暗灰黄	ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ		金雲母
232	弥・甕	13.1			中・普	良好	褐灰	叩き→ナデ	ハケ目・ケズリ		金雲母
233	弥・甕	12.2			中・普	不良	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ・ハケ目		
234	弥・甕	14.6			中・普	良好	灰褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		金雲母
235	弥・甕	12.2			中・普	良好	黒へにぶい橙	ナデ・叩き→ハケ目	ナデ・ケズリ		
236	弥・甕	12.6			細・普	不良	灰オリーブ	ナデ・叩き→ハケ目	ナデ・ハケ目		金雲母
237	弥・甕	12.9			細・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ナデ	ナデ・ケズリ		金雲母
238	弥・甕			2.4	細・普	良好	橙	叩き→ナデ	ナデ		金雲母・角閃石
239	弥・甕	11.8			細・普	良好	にぶい橙・黒	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ	外面に煤付着	
240	弥・甕	14.6			細・普	良好	橙	不明	不明		金雲母
241	弥・甕	14.0			微・普	良好	暗灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ	体部内面に工具痕有り	金雲母
242	弥・甕	13.1			細・少	不良	灰白	ハケ目	ナデ		
243	弥・甕	15.0			中・普	良好	橙・黒	叩き→ナデ	ナデ・ケズリ		雲母
244	弥・甕	21.9			細・普	良好	黒・にぶい褐	ナデ・ハケ目	ナデ		金雲母

第577図 F区SR01出土遺物(20)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
245	弥・甕	15.7			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ナデ		
246	弥・甕	17.7			中・普	良好	暗灰黄	ハケ目	ケズリ		金罍母
247	弥・甕	16.7			中・普	良好	褐灰・コブイ橙	ナデ	ナデ		金罍母
248	弥・甕	16.0			細・普	良好	にぶい褐	ハケ目	ナデ		
249	弥・甕	15.2			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ケズリ		
250	弥・甕	17.0			中・普	良好	橙	不明	ケズリ		
251	弥・甕	15.8			中・普	良好	にぶい黄褐	叩き→ナデ	ナデ・ケズリ		金罍母・角閃石
252	弥・甕	17.8			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ケズリ・ナデ		金罍母
253	弥・甕	14.4			中・普	良好	橙	ハケ目	ナデ		
254	弥・甕	14.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ・ケズリ		金罍母
255	弥・甕	13.0			中・普	良好	コブイ褐・橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ	体部上半に工具痕有り	罍母
256	弥・甕	11.0			中・普	良好	黒褐	ナデ・ケズリ	ケズリ→ナデ		金罍母
257	弥・甕	11.8			中・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ・ナズリ・ハケ目		
258	弥・甕	14.0			中・普	良好	灰褐・橙～黒	ナデ・叩き→板ナデ	ナデ・ケズリ	口縁指押えで作り出す	

第578図 F区SR01出土遺物(21)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
259	弥・甕	14.6			精緻	良好	黒褐	叩き→板ナデ	ナデ		金罨母
260	弥・甕	14.6			中・普	良好	灰オリーブ	ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	口縁端部横つまみ出し	
261	弥・甕	15.0	16.2	2.7	細・普	良好	橙	ハケ目・ナデ	ハケ目・ケズリ		金罨母
262	弥・甕	13.9	21.1	4.0	中・普	良好	にぶい褐	叩き→ナデ	ハ目・ナデ		金罨母
263	弥・甕	12.7	18.4	3.7	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・叩き→ナデ	ナデ・ケズリ		金罨母
264	弥・甕	13.1			中・普	良好	黒・黄褐	叩き→ナデ	ハケ目→板ナデ		金罨母・角閃石
265	弥・甕	13.0	26.9	4.2	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ハケ目		金罨母・罨母
266	弥・甕	11.8			中・普	良好	褐灰	叩き・ミガキ	ケズリ・ナデ	内外面に煤が付着	金罨母

第579図 F区SR01出土遺物(22)(1/4)

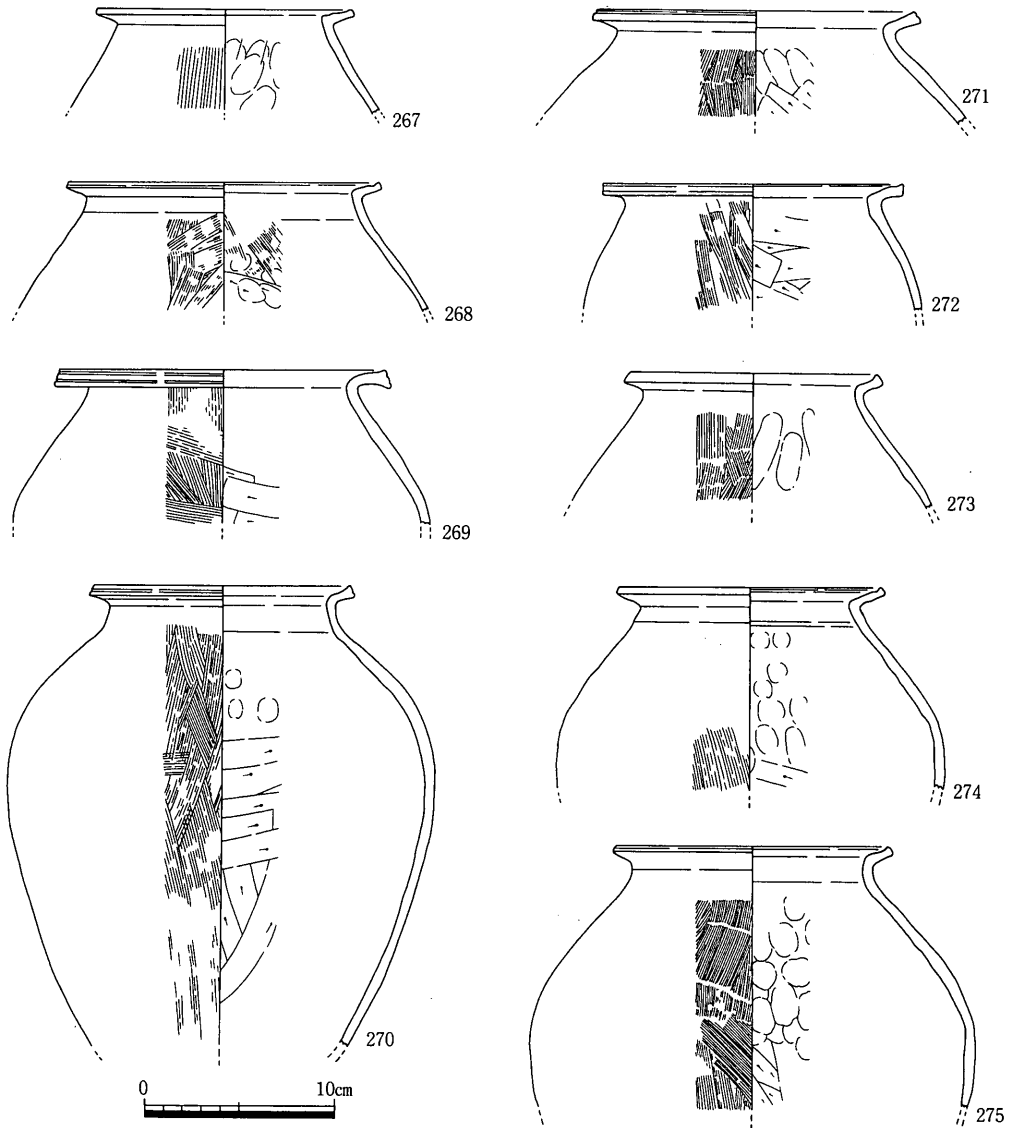
143・144の底部はしっかりとした平底となっている。144は体部外面全体に叩きを施した後下部のみにハケ目調整を行なっている。また口縁部と体部の接続部の内面には棒状工具でヘラミガキ状にナデている。体部中央やや上部に焼成後の穿孔が1箇所ある。145・149・150の底部は丸底に近い平底で安定は悪い。145は体部外面上半には指押さえ、下半にはヘラミガキを施している。150は体部はほぼ球形で内・外面全体にハケ目を施している。口縁部は強いナデのために段状となっている。152・153は口縁部内面にもハケ目を施している。155の口縁部端部は鋭利に尖らせている。163は口縁部端部下半をつまみ出している。160は口縁部全体を丸く折り返しており、端部は若干拡張している。172は口縁部端部の上方に指頭圧痕が全周巡っている。178の体部は丸みが少なく、底部はしっかりとした平底となっている。181は口縁部から下全体にハケ目を施している。

185～241は口縁部は内面に稜をもって鋭く屈曲するものである。188・189は全体に歪んでいる。190は体部は球形に近く、外面全体と口縁部内面にハケ目を施している。191は体部は砲弾形をしている。外面は叩きの後にナデ、内面は板状工具でナデている。193は器高10.7cmと小型で、口縁径のほうが体部最大径より大きくなっている。底部はしっかりとした平底で厚手になっている。体部外面は叩きの後にナデている。195・201・216・225・230・231・234・236は体部内・外面にハケ目を施している。196は口縁部端部を下方につまみ出している。213・218・222・235は外面の叩きが口縁部まで及んでいる。214は口縁部の先端を強くナデたため全体にゆるいS字状になっている。221の口縁部は口縁部内面に鋭い稜をもって内湾して立ち上がる。224は体部外面の下半にヘラケズリを施している。241は口縁部は高く、直線的に斜め上方に立ち上がり、端部は丸く収めている。布留式の甕に似ているものである。

242～250は口縁部が内面に稜をもって横へ開くものである。243は体部上半に比べて口縁部はかなり薄くなっている。244は口縁部端部を強くナデている。246・249は口縁部の開きはあまり強くない。

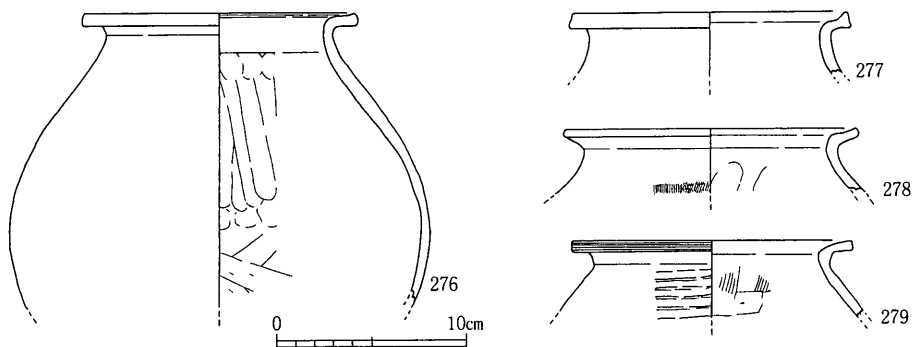
251～266は口縁部は短く、斜め上方に立ち上がるものである。252の口縁部は直立に近くなっており、端部に斜めの面をもつ。257は口径が小さく体部に張りが無い。口縁部の開きは横に近い。260は口縁端部を若干横へつまみ出している。体部は肥厚しており外面にもヘラケズリを施している。261は口径と体部最大径がほぼ同じである。265は体部外面は叩きの後にハケ目を全体に施しており、内面も体部中央を除き全体にハケ目を施している。266は体部外面下半にヘラミガキを施している。

267～279は口縁部は短く横に開くものである。体部外面はハケ目のものが多いが、270は叩きの痕跡が僅かに残る。体部内面も上半は指押さえで、下半にヘラケズリを施すものが多い。276は体部最大径がさがっており、上半の張りがない。277は口縁部端部が肥厚しており、外側に面をもっている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
267	弥・甕	13.4			粗・普	良好	ゴイ黄橙・黒	ハケ目→ナデ	ナデ		
268	弥・甕	16.4			微・普	良好	暗灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目・ケズリ		金罌母
269	弥・甕	17.2			中・普	良好	暗灰黄	ハケ目→ナデ	ナデ・ケズリ		
270	弥・甕	13.0			中・普	良好	ゴイ黄橙・橙	叩き→ハケ目	ナデ・ケズリ		角閃石
271	弥・甕	16.0			中・普	良好	にぶい褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		金罌母
272	弥・甕	15.8			細・普	良好	にぶい黄	ハケ目	ケズリ		金罌母
273	弥・甕	12.9			細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ		角閃石
274	弥・甕	13.7			中・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		金罌母・角閃石
275	弥・甕	14.4			中・普	良好	灰黄褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		金罌母

第580図 F区SR01出土遺物(23)(1/4)



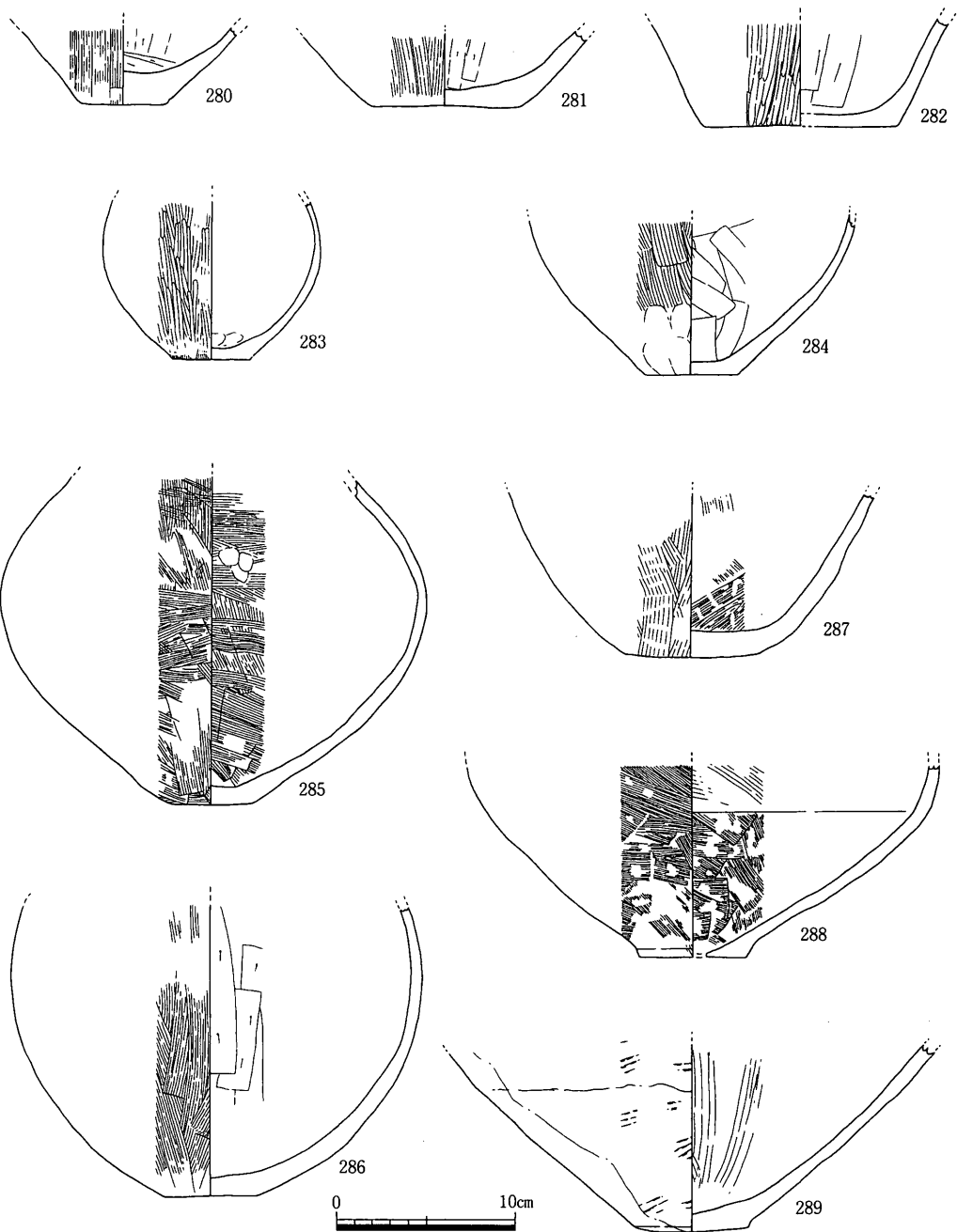
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
276	弥・甕	14.2			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ケズリ・ナデ		金曇母
277	弥・甕	15.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
278	弥・甕	18.6			微・普	良好	黄灰	ナデ・ハケ目	ナデ		
279	弥・甕	14.7			中・普	良好	にぶい褐	叩き	ハケ目・ケズリ		金曇母

第581図 F区SR01出土遺物(24)(1/4)

280～289は壺の体部～底部である。281・282は幅広の平底で、282は外面にヘラミガキが施されている。288は底部に焼成前の穿孔がある。289は大型の壺で体部外面は叩きの後にナデている。

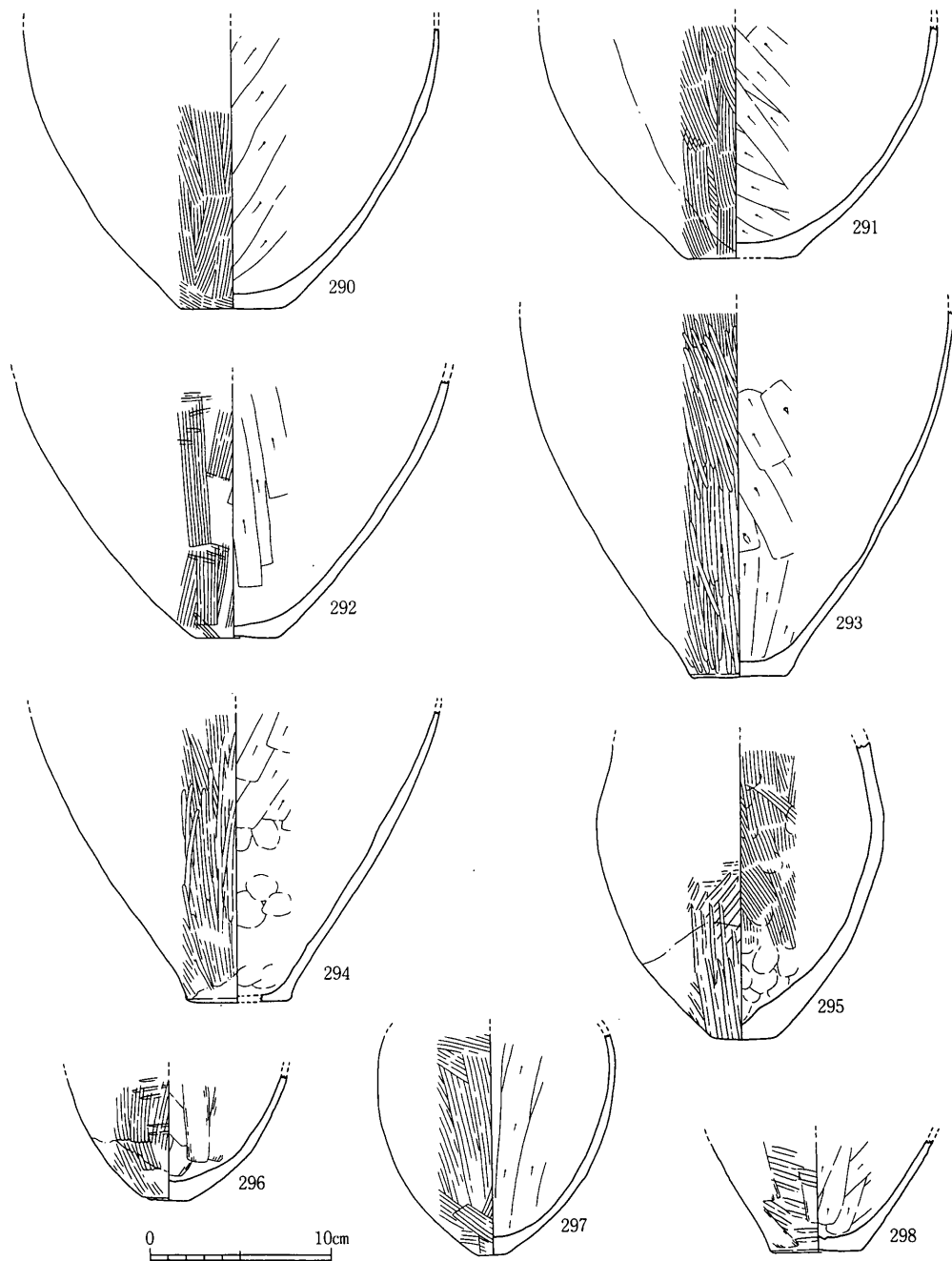
290～307は甕の体部～底部である。壺になるものも含まれる可能性があるが、完形に近いものから類推した。293・294は体部外面にハケ目の後に下半にヘラミガキを施している。295は体部下半の底部付近に縦方向の叩きを加えている。296は底部外面にまで叩きが及んでいる。299は底部外面にもヘラミガキを施している。300・302・306は底部外面にまでハケ目を施している。また306は体部内面全体にハケ目を施している。

308～328は高杯である。308は杯部は口径が小さく口縁部が直立するもので、内・外面にヘラミガキを施している。円盤充填となっており、脚柱部は直線的になっており外面はヘラミガキである。309～311は杯部は直線的に立ち上がり、口縁部を強くナデることによって短く屈曲させて立ち上がらせ、端部は上面に幅広の面をもたせるものである。杯部内・外面には蜘蛛の巣状に多角形になるヘラミガキを一面に施している。310は欠損しているものの杯部と脚部の接続は円盤充填となっている。312は口縁部が欠損しているが309と同様のタイプと思われる。314は口縁部が直立に近く立ち上がり、端部を外側につまみ出している。口縁部内面と杯部の内・外面にヘラミガキを施している。315も口縁部は直立し杯部はハケ目の後にヘラミガキを施している。接続は円盤充填によるものと思われる。316～319は杯部が稜をもって鋭く外反するものである。316・319は杯部外面にヘラケズリを施している。317は口縁部端部を強くナデたため内側に段が形成されており、口縁部の



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
280	弥・壺			5.0	中・普	良好	灰黄褐～黒	ハケ目	ケズリ		金雲母
281	弥・壺			8.5	中・普	良好	灰・浅黄	ハケ目	ケズリ	底外面にハケ目	雲母
282	弥・壺			10.8	粗・普	良好	灰黄	ミガキ	ケズリ		
283	弥・壺			4.3	中・普	良好	灰白・黒	ミガキ	板ナデ		
284	弥・壺			5.2	粗・普	良好	にぶい黄	ハケ目・ナデ	板ナデ		
285	弥・壺			5.0	中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ハケ目		
286	弥・壺			5.0	中・普	良好	黒・橙	ハケ目	ケズリ・ナデ		金雲母
287	弥・壺			7.3	中・普	良好	黄灰・灰黄	叩き→ハケ目	ハケ目		
288	弥・壺			6.0	中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ハケ目	底に焼成前穿孔	
289	弥・壺			6.4	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ナデ	ハケ目		金雲母

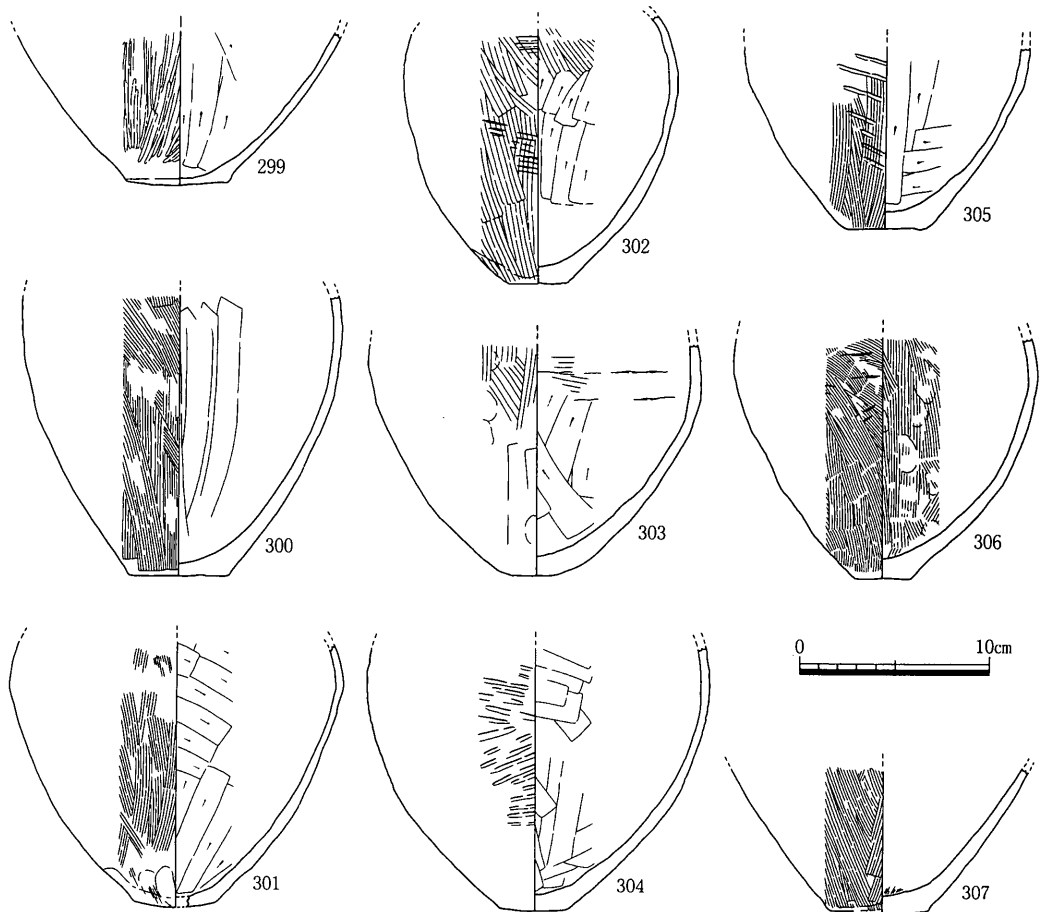
第582図 F区SR01出土遺物(25)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
290	弥・甕			5.6	中・普	不良	褐	ハケ目	ケズリ		
291	弥・甕			5.6	粗・多	不良	にぶい褐	ハケ目	ケズリ	底外面ハケ目	
292	弥・甕			4.7	中・普	良好	ゴイ黄褐・黒	叩き→ハケ目	ケズリ	底外面に叩き	金雲母
293	弥・甕			5.3	中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目→ミガキ	ケズリ		
294	弥・甕			5.8	中・多	良好	褐灰	ハケ目→ミガキ	ケズリ・ナデ		雲母・角閃石
295	弥・甕			3.8	中・普	良好	にぶい橙	叩き→ナデ	ハケ目	底部内面に絞り痕	金雲母
296	弥・甕			2.8	細・普	良好	明赤褐・黒褐	叩き→ハケ目	板ナデ	底外面叩き	金雲母
297	弥・甕			1.6	中・多	良好	明褐・黒	叩き→ハケ目	ケズリ		
298	弥・甕			5.2	中・普	良好	暗赤褐	叩き→板ナデ	ケズリ		金雲母

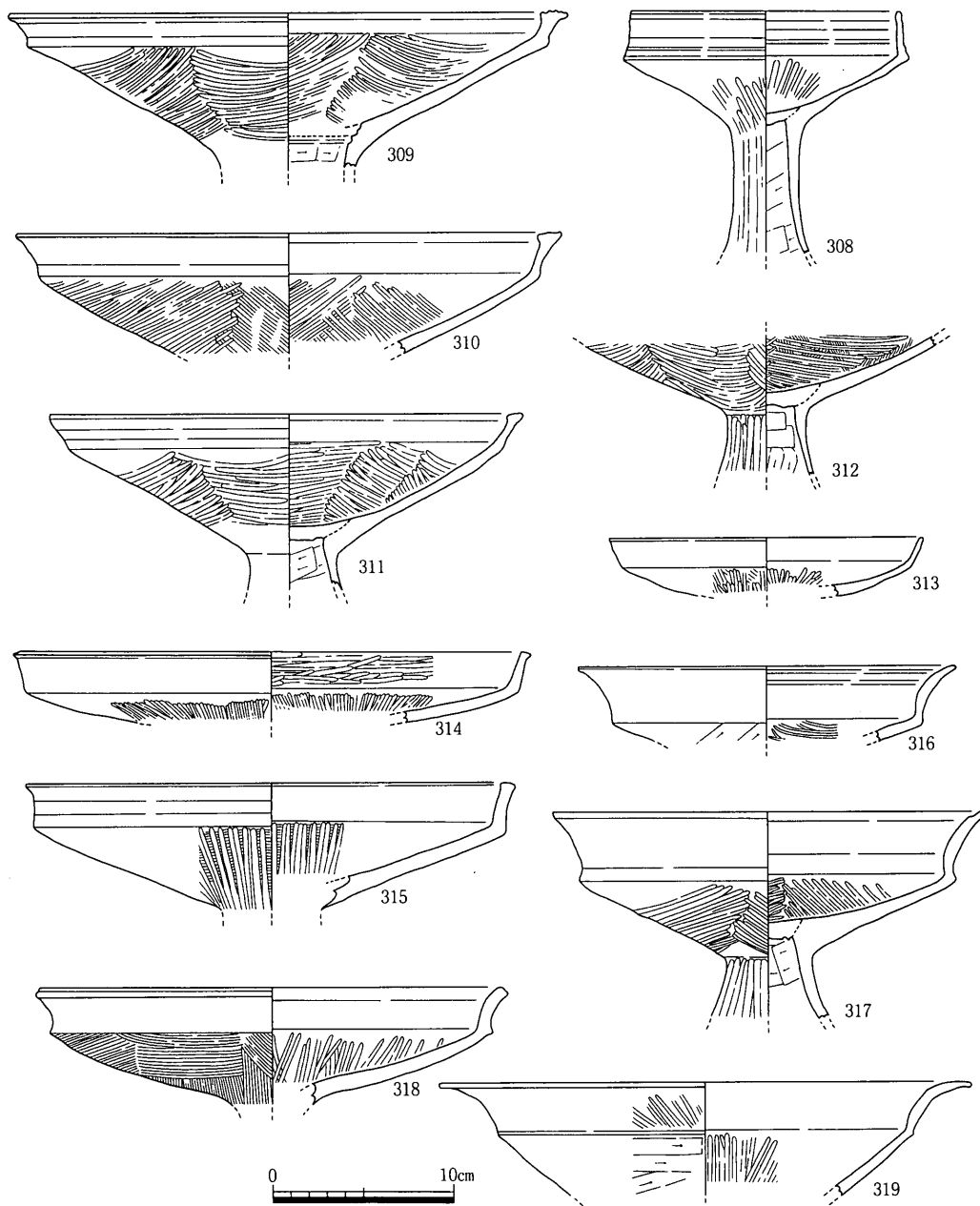
第583図 F区SR01出土遺物(26)(1/4)

立ち上がりは大きくなっている。杯部の内・外面には蜘蛛の巣状の多角形のヘラミガキが施されている。脚部とは円盤充填を行っており、脚部外面はヘラミガキで面取りを行ない、内面にはヘラケズリを行なっている。318は杯部外面はハケ目となっている。319は杯部は折り返すように強く外反している。欠損しているが、杯部の立ち上がりは急で、法量のおおきな杯部となっている。320・321は杯部の口径は小さく、内湾して立ち上がるものである。320は杯部と脚部の内・外面ともにハケ目を施している。321は杯部の口縁部端部は尖っている。脚部は現存で透し穴は1つである。杯部と脚部の接続部には指押さえ痕が多数見られ全体にナデている。322～326は脚端部に幅広の面をもつ高杯の脚部である。324



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
299	弥・甕			5.4	中・普	良好	暗褐	ミガキ	ケズリ	底外面ミガキ	金雲母
300	弥・甕			5.2	中・普	良好	橙・黒褐	ハケ目	板ナデ		
301	弥・甕			4.2	中・多	良好	明赤褐	ハケ目	ケズリ		
302	弥・甕			3.1	細・普	良好	灰黄褐	叩き→ハケ目	ハ目・ケズリ・ナデ		金雲母
303	弥・甕			2.2	中・普	良好	にぶい橙	ハケ目・板ナデ	ハケ目・ケズリ		金雲母・角閃石
304	弥・甕			3.7	細・少	良好	灰黄	叩き→ナデ	板ナデ		
305	弥・甕			4.4	中・普	良好	黒褐	叩き→ハケ目	ケズリ		金雲母
306	弥・甕			3.0	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ハケ目	底外面ハケ目	金雲母
307	弥・甕			5.1	中・普	良好	にぶい褐	ハケ目	不明		

第584図 F区SR01出土遺物(27)(1/4)

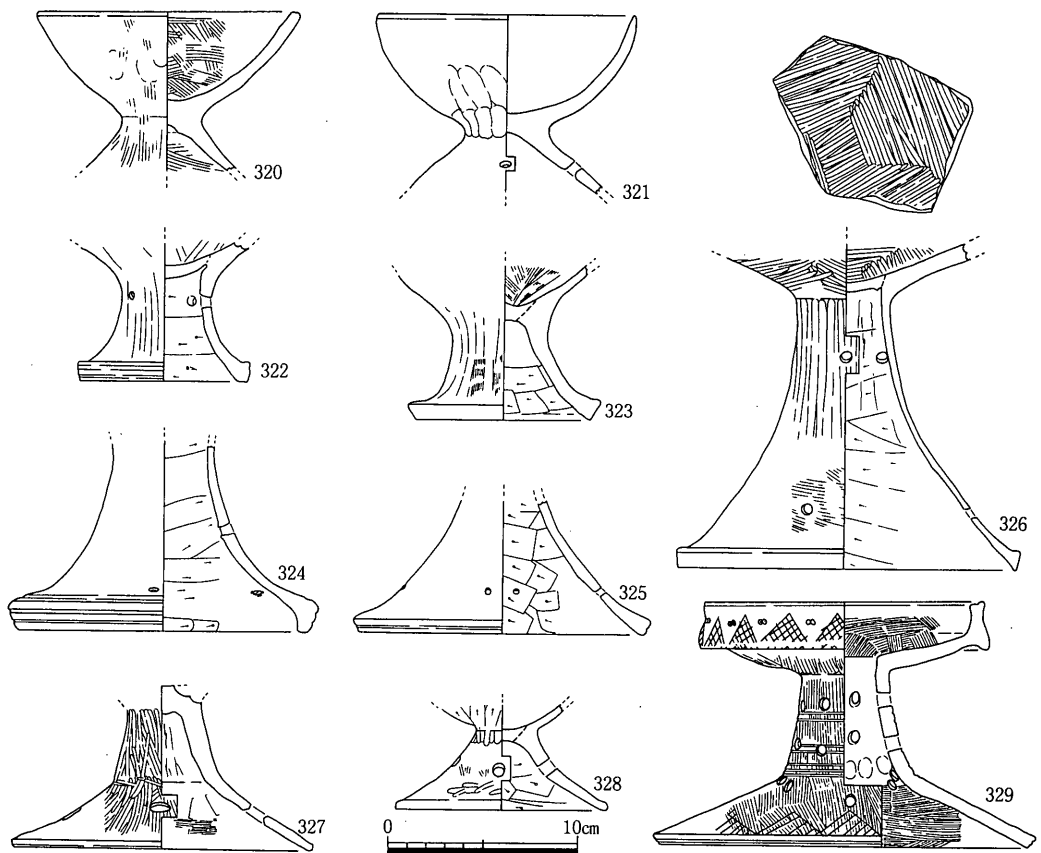


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
308	弥・高杯	14.8			中・普	良好	灰白	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ・ケズリ	円盤充填	
309	弥・高杯	31.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	円盤充填	くもの巣状ミガキ
310	弥・高杯	30.2			微・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	格子状のミガキ	
311	弥・高杯	26.2			中・普	良好	にぶい橙	ミガキ・ナデ	ミガキ・ケズリ	円盤充填	角閃石
312	弥・高杯				細・普	良好	灰黄褐	ミガキ	ハ目→ミガキ・ケズリ	円盤充填・格子状ミガキ	金雲母
313	弥・高杯	17.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ハ目→ミガキ		雲母・角閃石
314	弥・高杯	28.8			微・普	良好	灰黄	ナデ・ミガキ	ミガキ		
315	弥・高杯	26.6			中・普	良好	灰黄	ナデ・ハ目→ミガキ	ナデ・ハ目→ミガキ	円盤充填	雲母
316	弥・高杯	21.0			中・普	良好	にぶい橙	ナデ・ケズリ	ナデ・ミガキ		角閃石
317	弥・高杯	23.8			中・普	良好	にぶい褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ・ケズリ	円盤充填・格子状ミガキ	角閃石
318	弥・高杯	26.2			中・普	良好	灰白	ナデ・ハケ目	ナデ・ミガキ		
319	弥・高杯	29.5			細・普	良好	にぶい黄橙	ミガキ・ケズリ	ナデ・ミガキ		金雲母

第585図 F区SR01出土遺物(28)(1/4)

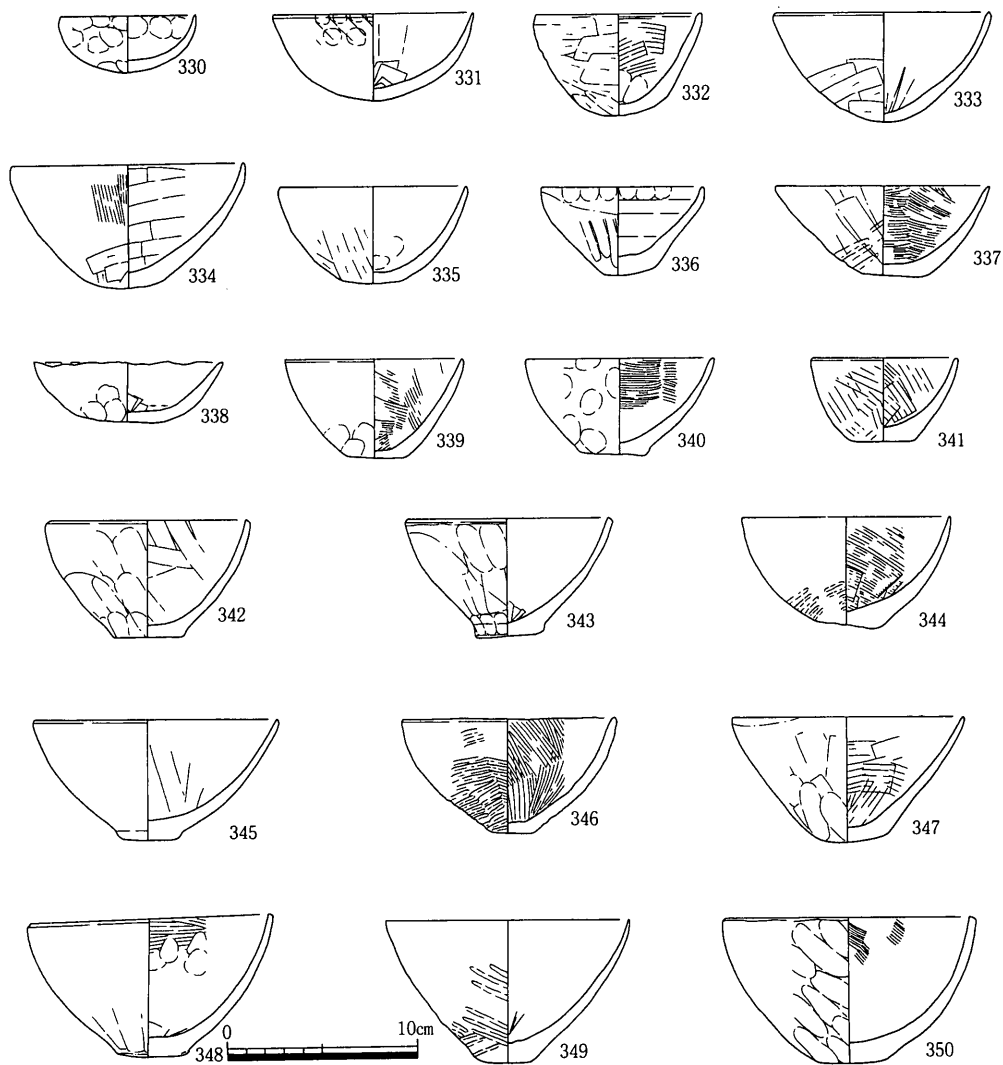
は端部を下方に拡張し、端部外面に沈線が2条巡る。326は脚部は長く、上下2段に円形の透し穴がある。杯部内面には蜘蛛の巣状の多角形のヘラミガキがある。327は脚部の中程で屈曲するもので、外面には丁寧にヘラミガキを施している。

329は器台である。全体に丁寧な作りで、外面に装飾を加えている。口縁部は上下に拡張するが、特に上方に大きく拡張し外側に面を作る。口縁部端部は強くナデており凹線状の窪みが形成されている。外側の面には格子の入った鋸歯文を巡らし、その下部を後に棒状工具で一部ナデ消している。さらに鋸歯文の間には2個1単位の小さい竹管文が施されている。筒部は下に向かって緩やかに開き、沈線を巡らせた後に上下に6個ずつの透し穴



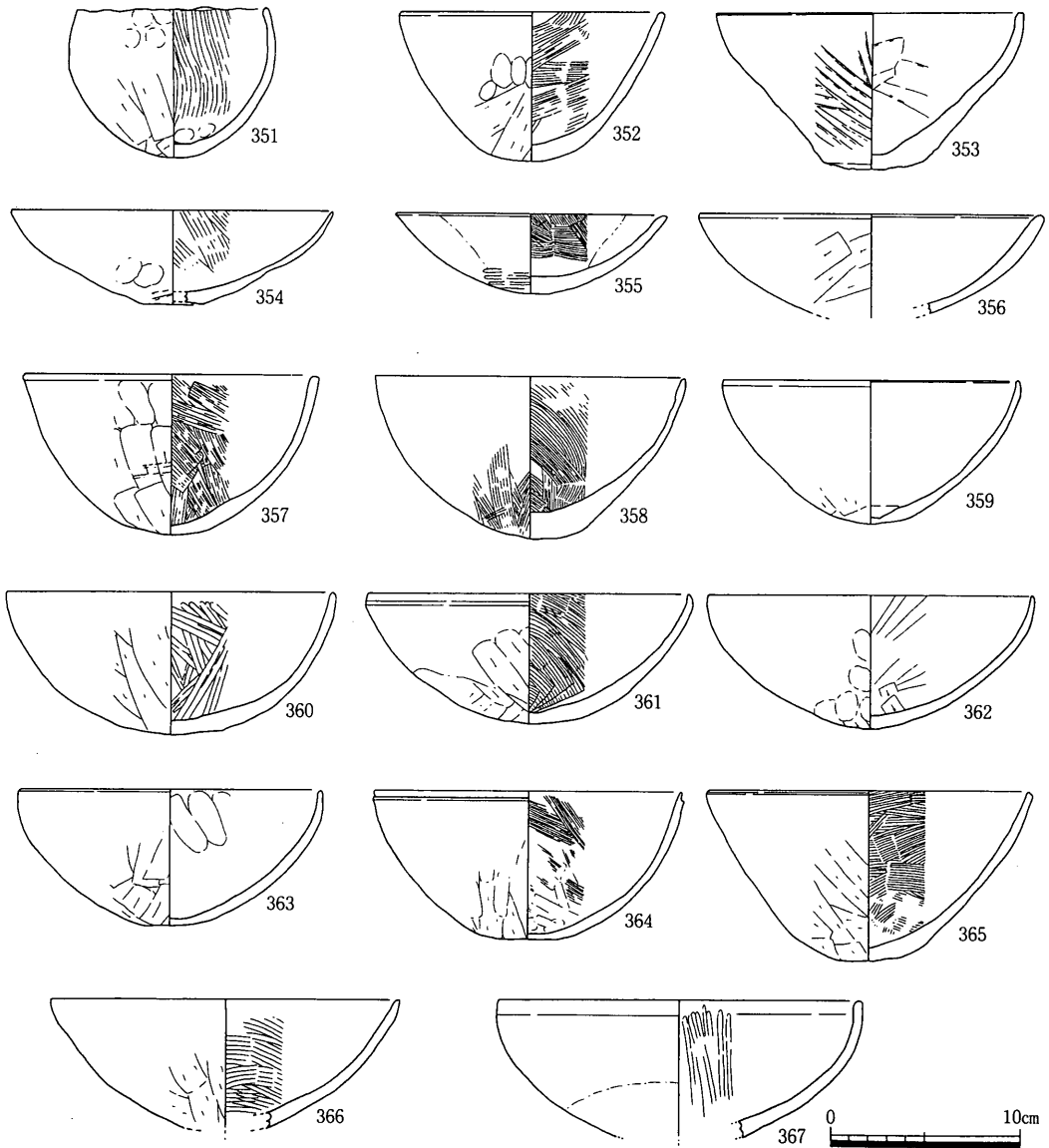
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
320	弥・高杯	12.6			細・普	良好	にぶい褐	ハケ目→ナデ	ハケ目		金曇母・角閃石
321	弥・高杯	13.4			中・普	良好	明褐	ナデ	ナデ	透し穴現存1つ	金曇母・角閃石
322	弥・高杯			8.8	中・普	良好	黒	ナデ・ミガキ	ナデ・ケズリ	円盤充填・脚部面取り	四方透し
323	弥・高杯			9.2	精緻	良好	灰黄	板ナデ・ハケ目	ハケ目・ケズリ	円盤充填	金曇母
324	弥・高杯			15.2	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ケズリ		
325	弥・高杯			15.0	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ケズリ	四方透し	
326	弥・高杯			19.8	中・普	良好	にぶい黄橙	ミガキ・ハケ目	ミガキ・ケズリ	透し穴上下2段各3個	金曇母
327	弥・高杯			15.6	中・普	良好	灰黄褐	ハケ目→ミガキ	ハケ目→ナデ	四方透し・差込み法	金曇母
328	弥・高杯			11.0	細・普	良好	にぶい黄橙	ケズリ・ミガキ	ナデ・ケズリ	円盤充填・四方透し	金曇母
329	弥・器台	14.6	12.6	19.2	細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ	文様→棒状工具のナデ	金曇母

第586図 F区SR01出土遺物(29)(1/4)



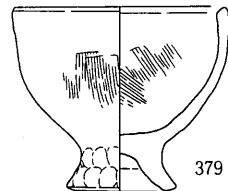
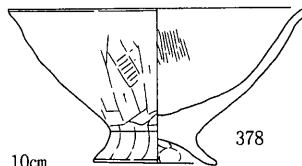
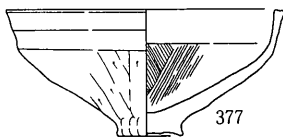
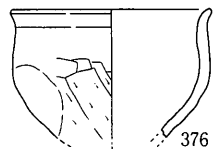
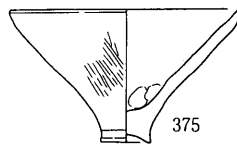
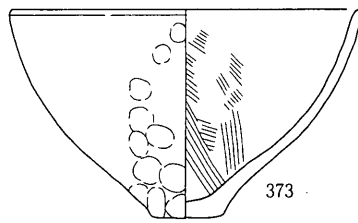
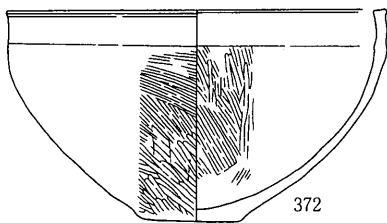
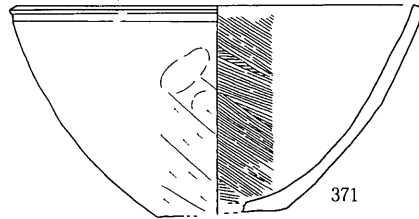
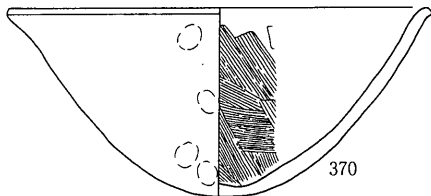
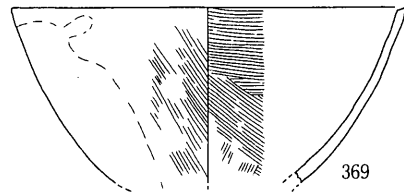
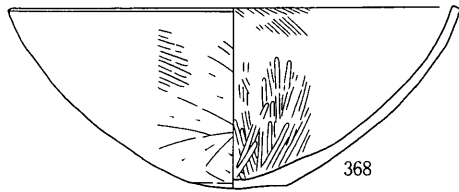
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
330	弥・鉢	7.2	2.9		中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		金曇母・角閃石
331	弥・鉢	10.6	4.4	7.1	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	板ナデ	口縁端部連続指押さえ	金曇母
332	弥・鉢	8.8	5.1	3.4	細・普	良好	にぶい橙	ケズリ	ハケ目→ナデ		金曇母
333	弥・鉢	11.5	5.5		細・普	良好	褐灰・赤褐	ナデ・ケズリ	ナデ	内面に板状工具痕有り	金曇母・角閃石
334	弥・鉢	12.2	6.4		中・普	良好	橙	ナデ・ケズリ・ハケ目	板ナデ		金曇母
335	弥・鉢	9.8	5.0	3.2	中・普	良好	橙	ナデ・ケズリ	ナデ	底外面ヘラケズリ	金曇母
336	弥・鉢	8.5	4.6	2.7	細・普	良好	黄褐・黒	板ナデ	ナデ	外面連続する板ナデ	金曇母・雲母
337	弥・鉢	11.4	4.8	3.3	中・普	良好	にぶい橙	叩き→板ナデ	ハケ目		金曇母
338	弥・鉢	10.0	3.1	3.5	微・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		金曇母
339	弥・鉢	9.4	5.2	3.1	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目	底外面ケズリ	金曇母
340	弥・鉢	10.0	5.1	3.5	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ハケ目		金曇母
341	弥・鉢	7.7	4.4	3.3	中・普	良好	橙	叩き→ハケ目	ハケ目	内面非常に粗いハケ目	金曇母
342	弥・鉢	10.8	6.1	3.6	中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	板ナデ		
343	弥・鉢	11.0	6.2	3.7	細・普	良好	暗灰黄	ナデ	板ナデ		金曇母
344	弥・鉢	11.0	5.8	3.1	微・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ナデ	ハケ目		
345	弥・鉢	13.0	6.3	3.3	細・普	良好	橙・明黄橙	ナデ	板ナデ		金曇母
346	弥・鉢	11.4	6.0	2.3	中・多	良好	灰黄褐	叩き	ハケ目		金曇母
347	弥・鉢	12.2	6.6	3.5	中・普	良好	橙	ナデ・ケズリ	ハケ目→ナデ	底外面ヘラ削り	金曇母
348	弥・鉢	12.5	7.5	3.9	細・普	良好	にぶい赤褐	ナデ	ハケ目→ナデ		金曇母
349	弥・鉢	12.8	7.5	2.4	微・普	良好	橙	叩き→ナデ	板ナデ		
350	弥・鉢	13.4	7.6	3.5	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ハケ目→ナデ		

第587図 F区SR01出土遺物(30)(1/4)



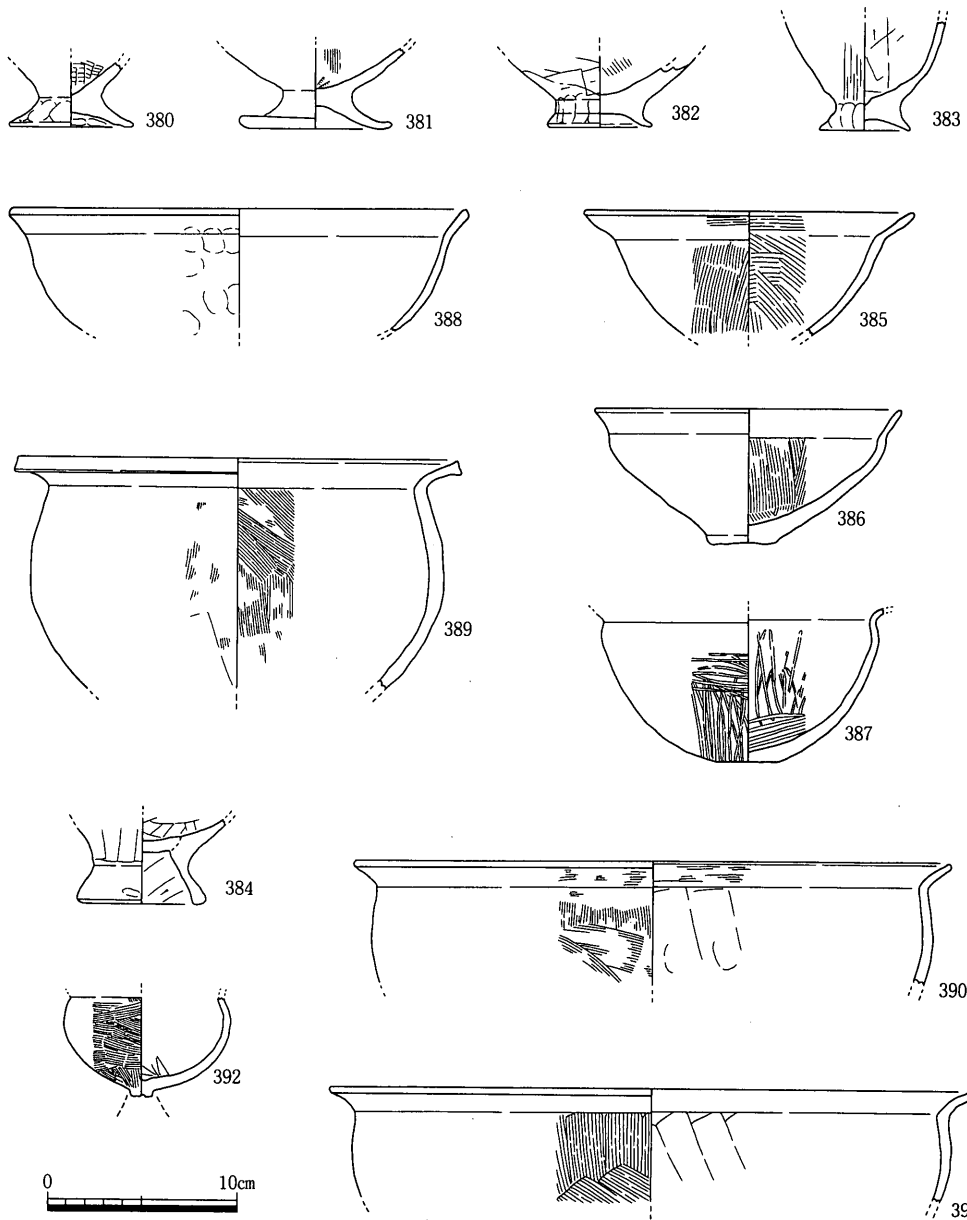
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
351	弥・鉢	5.0	7.6		中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	ハケ目・ナデ	口縁手づくね整形	
352	弥・鉢	14.0	7.7		中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ	ハケ目	丸底	金雲母
353	弥・鉢	16.1	8.2	5.2	中・普	良好	明赤褐	ハケ目・ナデ	ナデ	外面工具痕が強く残る	角閃石
354	弥・鉢	17.0	4.8	3.3	微・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・叩き	ハケ目→ナデ		金雲母
355	弥・鉢	14.4	4.1		中・普	不良	灰黄	ナデ・叩き	ハケ目・ナデ		
356	弥・鉢	18.0			細・普	良好	コブイ黄橙・黒	ケズリ	ナデ		金雲母
357	弥・鉢	15.6	8.2	5.0	中・多	良好	橙	叩き→ハケ目・ナデ	ハケ目	外面上下交互に削り	
358	弥・鉢	16.4	8.2	3.5	中・普	良好	灰黄褐	ナデ・ハケ目	ハケ目	内面うず巻き状ハケ目	内面に黒斑
359	弥・鉢	15.6	7.3		中・普	良好	褐灰	不明	不明		金雲母・角閃石
360	弥・鉢	17.3	7.4		中・普	良好	にぶい黄橙	ケズリ	ナデ	内面ミガキ状のナデ	金雲母
361	弥・鉢	17.0	6.7		中・普	良好	明褐	ナデ・ケズリ	ハケ目		金雲母
362	弥・鉢	17.2	7.0		中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	板ナデ		金雲母
363	弥・鉢	16.1	7.1		中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	ナデ		金雲母
364	弥・鉢	16.2	7.8	5.2	中・普	良好	灰黄褐・黒	ナデ・ケズリ	ハケ目		金雲母・角閃石
365	弥・鉢	17.0	8.9		中・普	良好	にぶい褐	ナデ・ケズリ	ハケ目		雲母
366	弥・鉢	18.4			中・普	良好	にぶい橙	ナデ・ケズリ	ナデ・ハケ目		金雲母
367	弥・鉢	19.2			中・普	良好	にぶい黄	不明	ミガキ		金雲母

第588図 F区SR01出土遺物(31)(1/4)



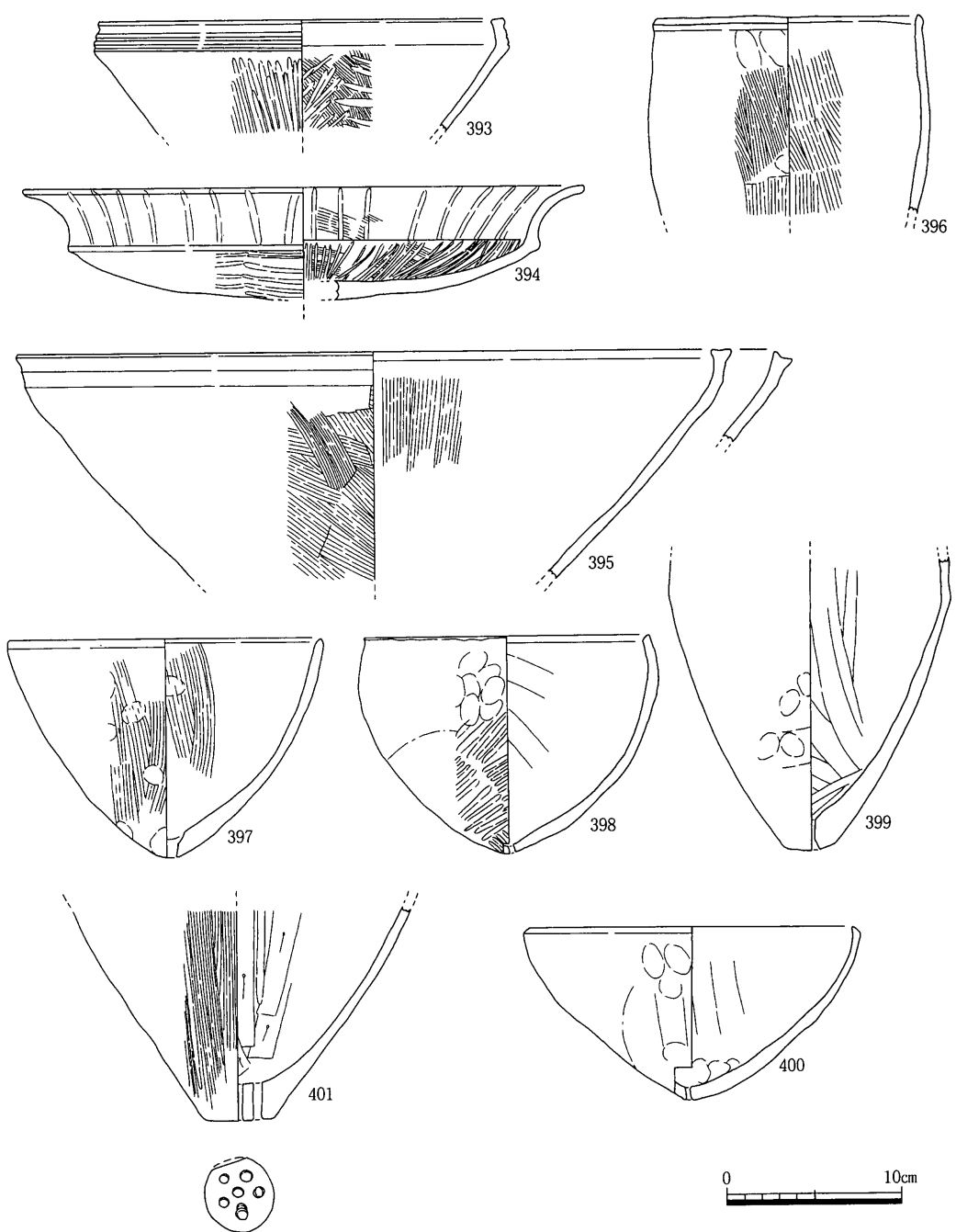
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
368	弥・鉢	23.8	9.2	5.2	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ケズリ	ハケ目→ミガキ		金雲母・雲母
369	弥・鉢	20.8			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ハケ目		金雲母
370	弥・鉢	22.5	9.9		中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目		金雲母
371	弥・鉢	21.8	11.0	7.0	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	ハケ目		
372	弥・鉢	19.8	11.1	5.2	中・普	良好	にぶい橙	ケズリ・ハケ目→ミガキ	ナデ・ハケ目・ミガキ		金雲母
373	弥・鉢		10.9	3.9	中・普	良好	黄橙・黒褐	ナデ	ハケ目		
374	弥・鉢	25.2			中・普	不良	にぶい橙	ハケ目・ナデ	ミガキ		
375	弥・鉢	12.2	7.0	2.6	中・普	良好	灰黄	ハケ目	ナデ		
376	弥・鉢	10.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	不明		金雲母
377	弥・鉢	14.6	6.6	3.5	中・普	良好	淡黄橙	ナデ・ケズリ	ナデ・ハケ目	脚台を指で作り出す	
378	弥・鉢	15.6	8.1	6.5	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・叩き→ケズリ	ナデ・ハケ目→ナデ		
379	弥・鉢	11.0	9.6	5.8	細・少	不良	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ		

第589図 F区SR01出土遺物(32)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
380	弥・鉢			6.6	中・普	良好	灰黄橙	ナデ	ハケ目	内面くもの巣状ハケ目	金罌母・罌母
381	弥・鉢			8.1	中・普	良好	橙	ナデ	ハケ目		金罌母
382	弥・鉢			5.6	中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ	ハケ目→ナデ		金罌母
383	弥・鉢			4.8	中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ケズリ		金罌母
384	弥・鉢			6.8	精緻	良好	灰白	ナデ	ミガキ・ケズリ	内面に粗いミガキ	
385	弥・鉢	17.4			微・普	良好	にぶい褐	ハケ目	ハケ目	全面に粗いハケ目	罌母
386	弥・鉢	16.2	7.0	3.6	細・普	良好	にぶい黄・黒	ナデ	ナデ・ハケ目	口縁強いナデ	
387	弥・鉢			3.3	中・普	良好	灰オリーブ	ミガキ	ミガキ		
388	弥・鉢	23.8			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		金罌母
389	弥・鉢	23.3			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		金罌母
390	弥・鉢	31.2			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ハケ目・板ナデ		
391	弥・鉢	34.0			細・普	良好	にぶい褐	ハケ目	板ナデ		金罌母
392	弥・鉢			1.1	粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ	差し込み法	

第590図 F区SR01出土遺物(33)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
393	弥・鉢	23.2			細・普	不良	灰白・灰	ミガキ	ハケ目→ミガキ		
394	弥・鉢	32.2			中・普	良好	にぶい黄	ミガキ	ハケ目→ミガキ	間隔のあいたミガキ	
395	弥・鉢	41.0			中・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	口縁の1ヶ所注ぎ口	
396	弥・鉢	15.0			中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目	ハケ目		金罍母
397	弥・甌	17.8	12.4		細・普	良好	黄褐・コブイ黄	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		金罍母
398	弥・甌	16.4	12.4		細・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・叩き	板ナデ		
399	弥・甌			2.0	粗・普	良好	灰黄	叩き→ナデ	板ナデ	底内面に黒斑	
400	弥・甌	18.4	9.9		中・普	良好	橙	ナデ	ナデ	外面に板状工具痕有り	金罍母
401	弥・甌			4.0	中・普	良好	にぶい橙	ハケ目→ミガキ	ケズリ→ミガキ	底6ヶ所穿孔	

第591図 F区SR01出土遺物(34)(1/4)

をあけている。脚部端部に鋸歯文を施し、上部に2個1単位の透し穴が現存で1単位合計2個あり、他の残存部からおそらく2個1単位のものが4単位あるものと思われる。さらに下段に現存で2個ある。内・外面ともハケ目で丁寧に仕上げられている。

330～396は鉢である。330～334は小型で底部が丸底のものである。332は外面全体がヘラケズリのままで器壁が厚くなっている。335～341は小型で底部は平底になっているものである。336は底部が肥厚しており全体に歪んでいる。338は全体に手捏ね成形で、口縁部も整えられていない。342～350は器高が6～7cmで体部は内湾して大きく立ち上がるもので、底部は平底になっているものである。344・346・349は外面に叩きを施した後にナデている。内面はハケ目の後にナデているものが多い。351は口径が体部の最大径より小さくなっており、全体に球形をしている。口縁部は整えられていない。353は体部下半は直線的であるが口縁部付近を強くナデて内湾させている。外面には粗いハケ目を施している。354・355は口径の割には器高が低くなっている。356～365は口径が17cm前後のもので底部は丸底である。体部は内湾して大きく開くものも多く、サラダボール形をしているものである。外面はヘラケズリの後に口縁部をナデるものが多い。366・367は口径19cm前後のもので底部は丸底となっており、367は内面にヘラミガキを施している。368～372は口径が20cmを超えるものである。368は内面にハケ目の後にヘラミガキを施している。371は口縁部端部を強くナデたため外側に凹線が形成されている。372は体部は内湾しながら立ち上がりそのまま真上に伸びるものである。口縁部外面はナデのためやや抉れている。内・外面ともハケ目の後にヘラミガキを施している。373は底部が突出している。375～384は脚が付くものである。375・377は突出した小さな脚が付くもので、375の体部は直線的に開く。足高の脚には外反するもの(378・381・382)と直線的なもの(379・380・383・384)とがある。385～391は口縁部が屈曲して外側に開くものである。385・386は内面に稜をもって強く屈曲し、387は内・外面にヘラミガキを施している。390・391は口径が30cmを超える大型のものである。392は体部は小型で扁平な球状で、脚部との接続部は突出している。外面はハケ目で丁寧に調整している。394は高杯の杯部の形をした鉢である。体部中程で大きく外反する。外反した部分には縦方向に間隔をおいたヘラミガキが見られる。内面はハケ目の後にヘラミガキを施している。395は注ぎ口が1箇所ある片口鉢である。396は直線的に立ち上がる体部で口縁部端部は外側に面をもつ。

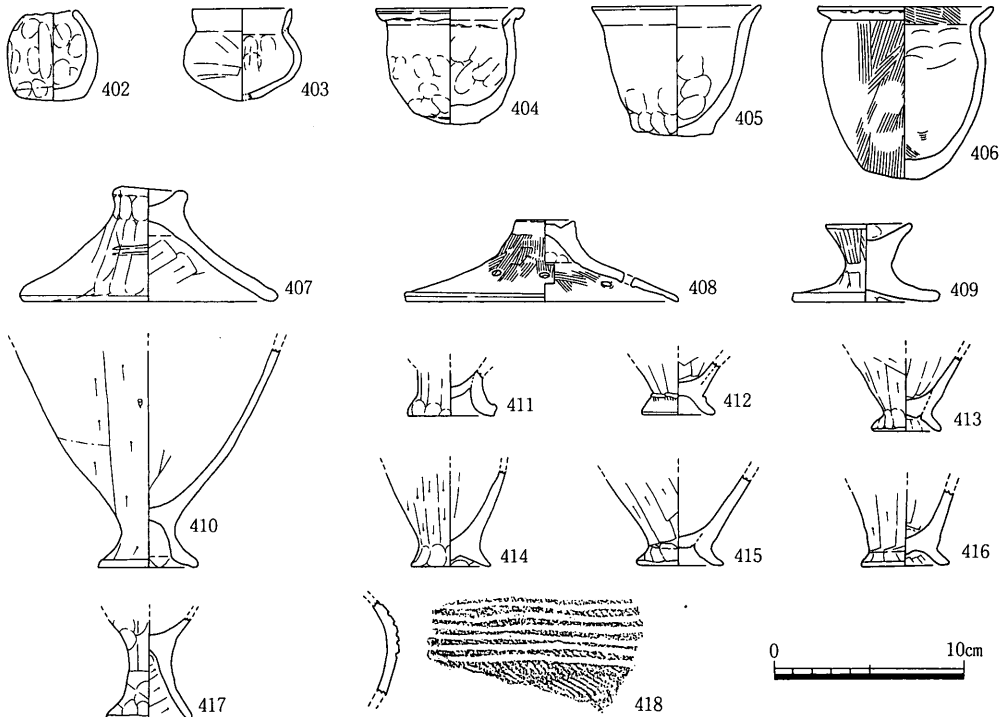
397～401は甗である。398は底部の穿孔は斜めになっている。399は砲弾形の体部となっている。401は底部に円形の穿孔が6箇所あり、1箇所は穿孔し直している。

402～406はミニチュア土器である。402は全体に手捏ねで成形しており、体部全体を内側に曲げている。404は口縁部を横へつまみだし、内面に斜めの面をもつ。

407～409は蓋である。408は高杯の脚部を転用したもので円形の透しが6箇所ある。

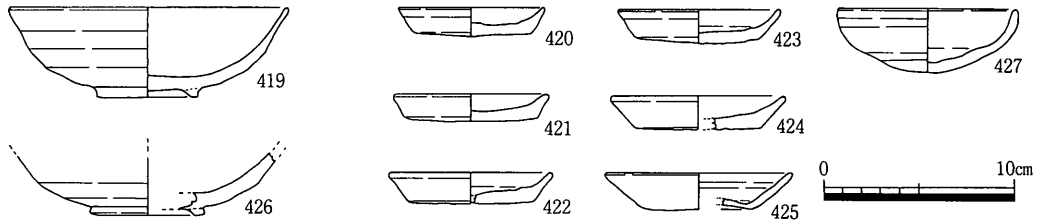
410～417は製塩土器である。いずれも外面はヘラケズリとなっている。410の脚部は内面が肥厚し稜をもって屈曲している。417は製塩土器にしては脚部が長いが、体部のプロポジションや調整などから製塩土器とした。

418は縄文時代後期の浅鉢である。外面に縄文を施した後に沈線を現存で6本巡らせている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
402	弥・ミニ	2.6	4.6	3.5	細・普	良好	黒・にぶい黄	ナデ	ナデ	底黒斑	金銀母
403	弥・ミニ	5.2	4.8		微・普	良好	黄灰	ナデ	板ナデ		金銀母
404	弥・ミニ	7.7	6.1	3.2	細・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ		
405	弥・ミニ	9.0	6.7	4.0	中・普	良好	にぶい・黄橙	ナデ	ナデ		金銀母
406	弥・ミニ	9.3	9.0	2.8	微・普	良好	にぶい褐	ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ		金銀母
407	弥・蓋	13.2	6.0		中・普	良好	にぶい褐	叩き→ナデ	ナデ・ケズリ		
408	弥・蓋	14.3	4.3		中・普	良好	にぶい褐	ハケ目	ハケ目・ナデ	6ヶ所の穿孔	金銀母・角閃石
409	弥・蓋	7.7	4.1	4.3	中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ		金銀母
410	弥・製塩			5.3	中・普	良好	灰白	ケズリ	板ナデ	外面全体にケズリ	
411	弥・製塩			4.6	中・普	不良	にぶい黄褐	ケズリ	不明		
412	弥・製塩			3.8	中・普	良好	明赤褐	ケズリ	不明		
413	弥・製塩			3.6	中・普	良好	にぶい黄橙	ケズリ	ナデ		
414	弥・製塩			4.2	中・多	良好	黄灰・黒	ケズリ	ナデ	外面ケズリ稜線目立つ	
415	弥・製塩			4.6	細・普	良好	橙	ケズリ	ナデ		
416	弥・製塩			4.6	中・普	良好	にぶい黄	ケズリ	板ナデ		
417	弥・製塩			4.4	中・普	良好	灰オリーブ	ナデ	ケズリ		
418	縄・浅鉢				中・普	良好	暗灰黄	縄文	ナデ	ヘラ描沈線6条	

第592図 F区SR01出土遺物(35)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
419	土・碗	14.5	4.6	5.3	中・普	良好	浅黄橙	不明	不明	底へラ切り→ナデ	金罨母・罨母
420	土・小皿	7.7	1.5	6.3	中・普	良好	浅黄橙	不明	不明	底へラ切り→板状圧痕	罨母
421	土・小皿	8.2	1.4	7.1	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
422	土・小皿	8.5	1.6	6.6	細・少	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
423	土・小皿	8.6	1.7	6.5	細・少	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
424	土・小皿	8.9	1.7	6.6	細・少	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
425	土・小皿	10.0	1.8	5.6	中・普	良好	灰黄	ナデ	ナデ	底上げ底	
426	瓦質・碗			6.1	中・少	不良	灰白・灰	ケズリ	不明		
427	須・杯身	9.5	3.3	5.3	中・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		

第593図 F区SR01出土遺物(36)(1/4)

419～427は古代以降の土器で、最上層の攪乱部付近から出土したものである。419は回転台成形の土師器の碗である。420～425は土師器小皿である。420～422は口縁部は底部から短く引き出されている。425は内面立ち上がり部に角をもつ。422は底部はへラ切りの後にナデている。420・421・423・424は底部はへラ切りの後に板状圧痕を施しているものである。426は十瓶山産の瓦質土器の碗である。427は須恵器の杯身で底部がやや突出している。

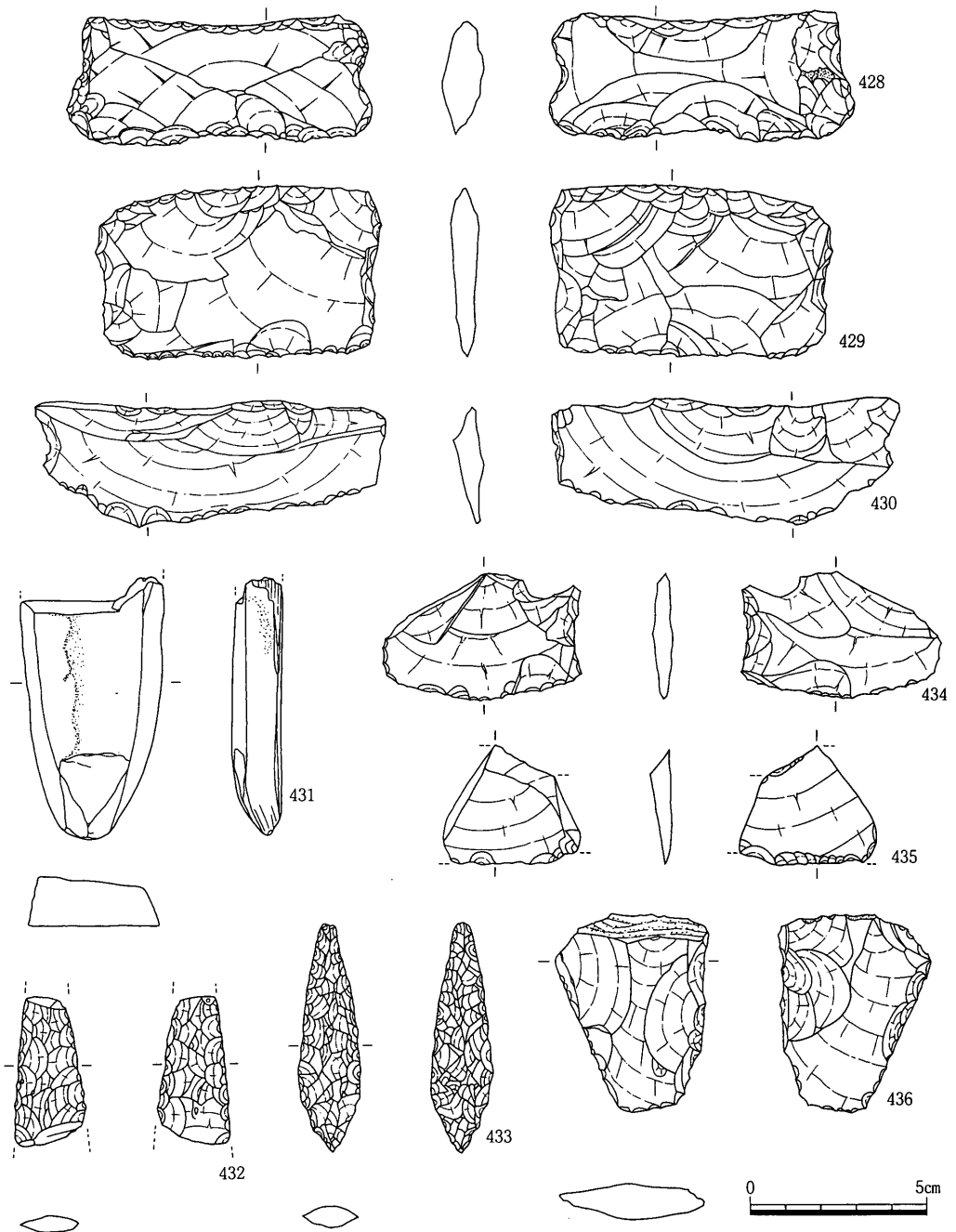
428～445は石器である。図化はしなかったがサヌカイトの剥片や破片も多く出土した。

428～430は打製石庖丁で両側縁に抉りを入れるもので、平面形は長方形である。428は厚手の石庖丁で、特に中央部に剥離の際の稜が顕著に残っている剥片を素材にしており、刃部と背部に丁寧に調整を加えている。429は長さの割に幅が広がっている。430は刃部の調整はあまり丁寧になく、背部には調整を加えていない。

431は磨製の柱状片刃石斧の刃部の破片である。刃部が縦に半分に折れており、刃部には使用痕と考えられる擦痕がある。結晶片岩製である。

432・433は石槍で、両面とも丁寧に鱗状剥離を加えて整形している。433は完存しており、最大幅は下半にきている。432は上下ともに欠損しているが、433と同じ形態のものと考えられる。

434～440はスクレイパーである。436は自然面以外の3辺に剥離調整を加えている。437は自然面の残る母岩から剥離した剥片を使用している。刃部を丁寧に作り出しており、鋭利なものとなっている。439は平面形は扇形で幅広の刃部になっている。刃部は片刃で非常に鋭利になっている。440は不定形の剥片を利用したもので、刃部は鋭利である。

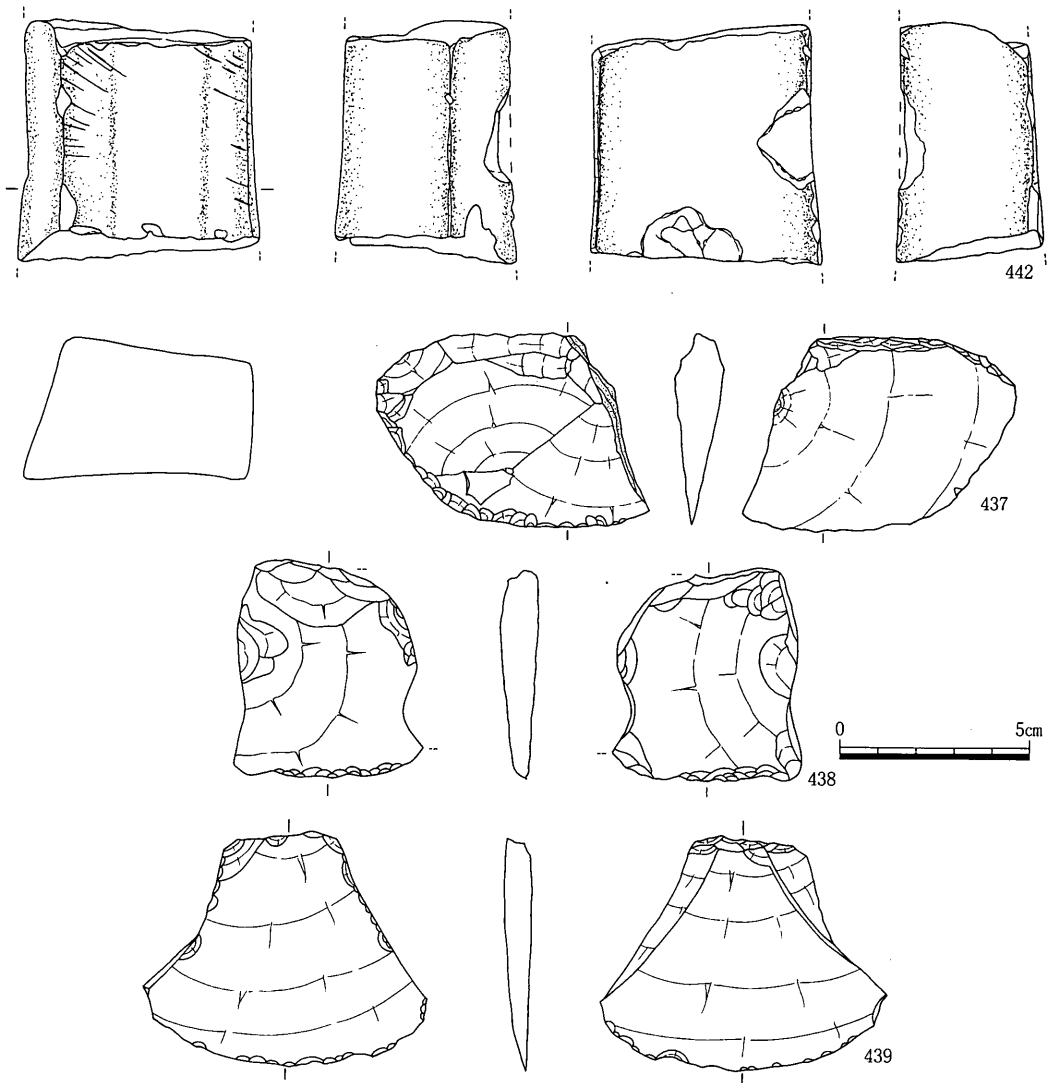


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
428	打製石胞丁	8.6	3.4	1.1	48.3	サヌカイト		
429	打製石胞丁	8.0	4.8	0.8	45.8	サヌカイト		
430	打製石胞丁	9.8	3.3	0.8	29.3	サヌカイト		
431	柱状片刃石斧	7.4	5.1	1.4	70.9	結晶片岩	刃部に使用痕あり	
432	石槍	4.2	2.0	0.5	4.9	サヌカイト		
433	石槍	6.5	1.8	0.7	7.1	サヌカイト		
434	スクレイパー	3.6	2.6	0.5	12.6	サヌカイト		
435	スクレイパー	3.9	3.3	0.6	7.1	サヌカイト		
436	スクレイパー	5.6	4.2	1.0	22.5	サヌカイト		

第594図 F区SR01出土遺物(37)(1/2)

441は凹石である。平面形は円形に近く、側面も丸くなっている。両面中央部に窪みがある。砂岩製である。

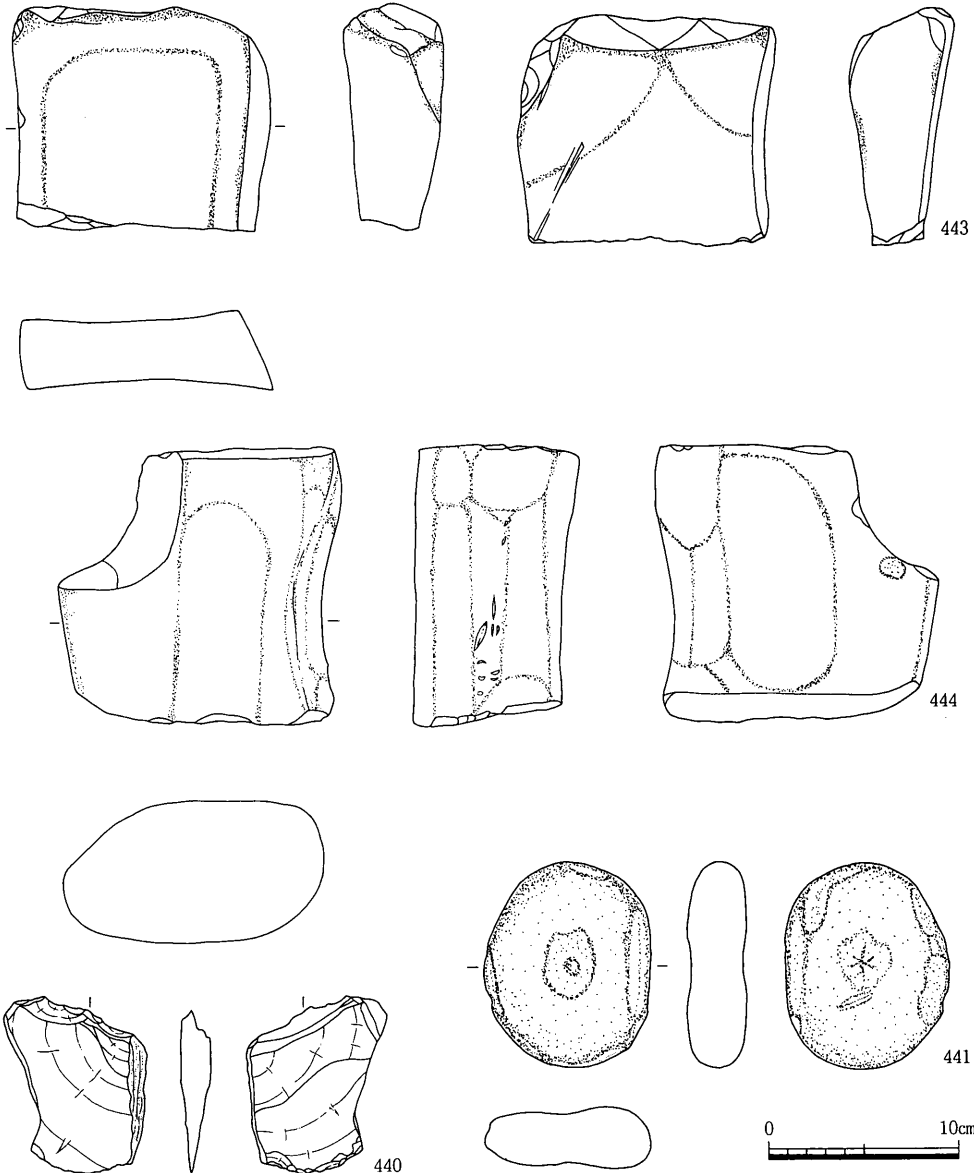
442～445は砥石である。442は上下が欠損しているが、柱状の砥石と考えられる。4面とも使用しているがあまり丹念に使用はしていない。1面に擦痕が見られるが、おそらく鉄器の角が当たったものと考えられる。断面は長方形に近い台形となっている。443は扁平な板石を利用した砥石である。4面とも使用しているが、特に広い2面を頻繁に使用しており、面も窪んでいる。444は平面形は正方形に近いが、厚さが7.5cm、重さ2.57kgと大



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
437	スクレイパー	7.1	5.1	1.3	36.2	サヌカイト		
438	スクレイパー	4.9	5.6	1.0	37.5	サヌカイト		
439	スクレイパー (搔器)	6.1	7.5	0.7	30.3	サヌカイト		
442	砥石	6.0	6.4	3.6	240.2	砂岩	4面使用している	

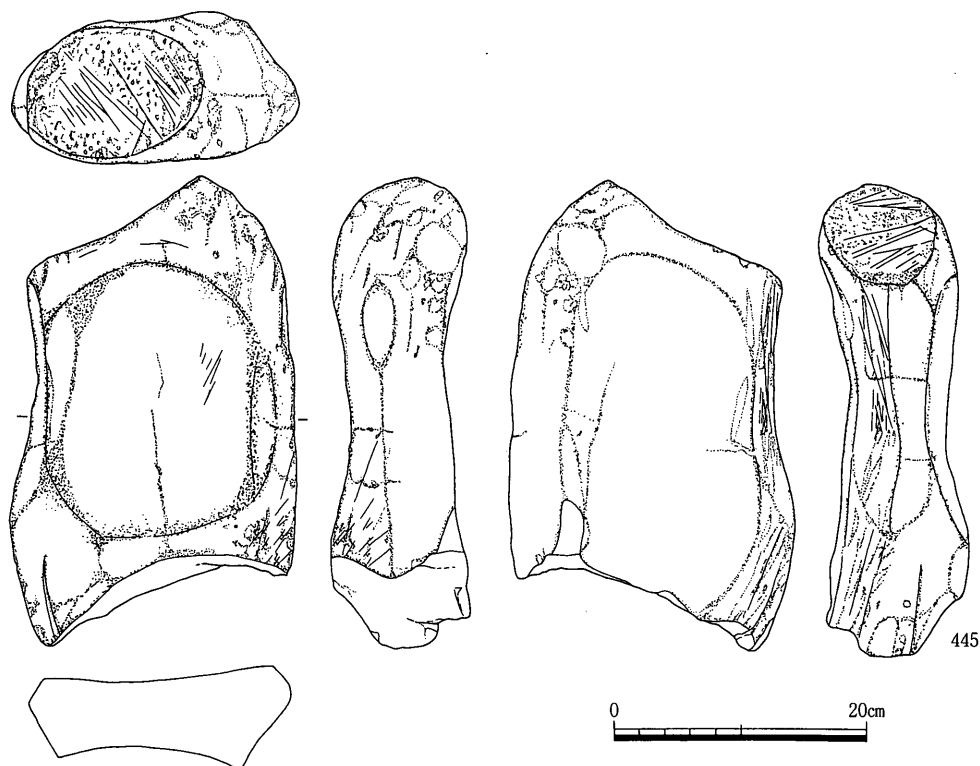
第595図 F区SR01出土遺物(38)(1/2)

型のものである。断面は長楕円形で枕のような形をしている。3面を使用しており使用に伴う窪みは認められない。445は最大長36cm，最大幅22.1cm，最大厚11.1cmの大型の砥石である。砂岩製の河原石を使用しており，一部欠損しているが平面形は長楕円形と思われる。現存部の5面をすべて使用している。欠損部も使用していた可能性が高い。元来の面から1.6cmほど窪んでいる部分があり，使用頻度の高さが伺える。戸口部分は故意に打撃を加



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
440	スクレイパー（擦器）	6.8	8.6	1.5	121.7	サヌカイト		
441	凹石	10.8	8.7	3.2	455.4	砂岩		
443	砥石	11.4	12.3	4.7	1071.1	砂岩	4面使用している	
444	砥石	14.5	14.0	7.5	2570.6	砂岩		

第596図 F区SR01出土遺物（39）（1／4）



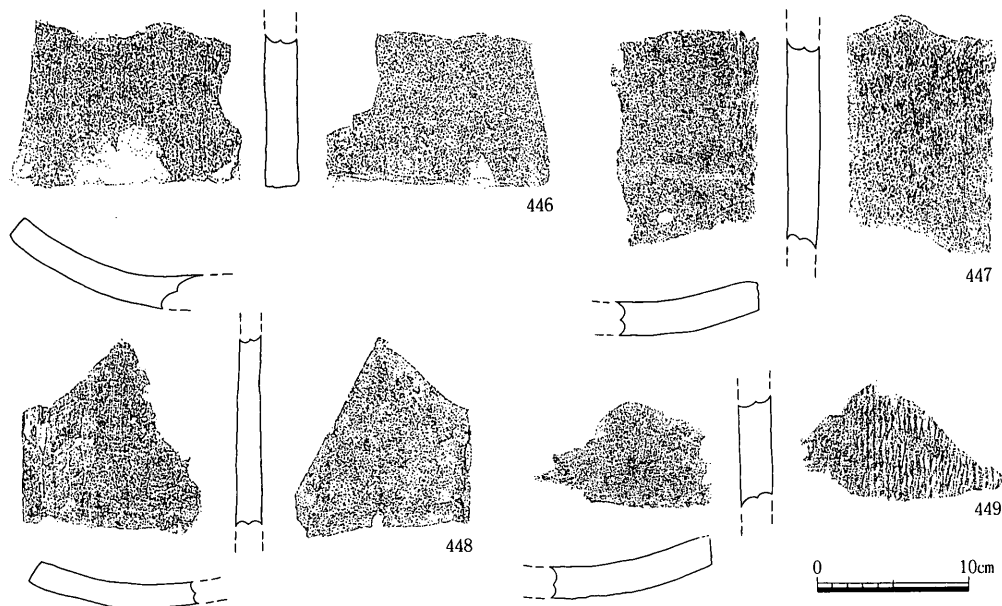
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
445	砥石	29.0	22.1	11.1	9202.6	砂岩		

第597図 F区SR01出土遺物(40)(1/6)

えて面を作り出して作業面としており、擦痕が明瞭に残っている。これほどまで使い込んだ砥石の存在の背景には、鉄器が貴重品であり何度も刃を磨き直して使用したことで、鉄器を多く使用する作業（掘削作業や木製品の製作）を行なったことが考えられる。砥石の年代は弥生時代～中世の時間幅が考えられる。そのほとんどが最下層近くから出土しているが、これは砥石が重いため底に沈んだものと考えられる。

446～449は平瓦である。これらは最上層の攪乱部付近から出土している。449は凸面に縄目叩きを施している。

以上SR01出土遺物を見てきたが、縄文時代後期から鎌倉時代までの時期幅がある。しかし古代以降の遺物は最上層の攪乱部付近から出土しており、混入と考えられる。圧倒的多数は弥生時代の遺物である。弥生時代IV期とV期の遺物があるが、両者は混在して出土した。これは河が最後に一気に埋まった時にIV期の遺物もかきまぜたと考えられる。またV期の遺物はローリングをほとんど受ておらず残りもよく、一気に埋まったか、あるいは投棄されたものと考えられる。土器には祭祀用と考えられるものも含まれることから、同時に投棄された可能性が高いものと考えたい。



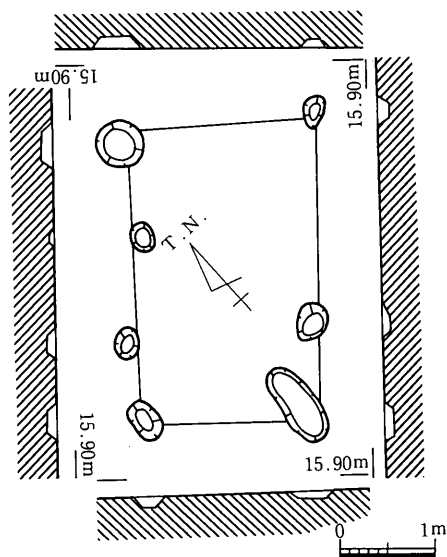
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長	
446	平瓦	2.1	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	0	1	中・普通	灰	良好		9.7
447	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕→ナデ	1			中・普通	灰黄	不良	凹面糸切り痕	13.1
448	平瓦	1.7	ナデ	布目圧痕→ナデ	1			中・普通	灰	良好		12.2
449	平瓦	2.1	縄目叩き	ナデ	1			粗・普通	灰黄	良好		6.6

第598図 F区SR01出土遺物(41)(1/5)

(3) 古代の遺構・遺物

SB01(第599図)

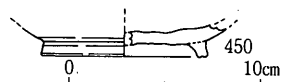
F3区で検出した掘立柱建物で、同一遺構面の溝が埋没した後に建てられている。梁行は1間で1.9m、桁行は3間で3.1mで、建物面積は $5.9\text{m}^2 \approx 1.8$ 坪となっている。北東側の桁行列の柱穴の一つは検出出来なかった。柱穴の平面形はほぼ円形で、南側コーナーの柱穴は長楕円形である。柱穴の深さは15cm前後と残りは非常に悪い。柱穴の埋土は褐色粘質土の単一層である。また建物の主軸方位は $N-41^\circ-E$ となっている。柱穴から古代末と思われる須恵器甕や土釜の細片が少量出土したにとどまる。付近に建物はなく単独の作業小屋のようなものと考えられる。



第599図 F区SB01平・断面図(1/80)

S D02 (第600図)

F 3 区の北東コーナー付近で検出した溝である。幅50~80cm, 深さ15cm前後, 長さ5.2mの直線的な溝で, 埋土は褐色粘質土の単一層である。450は須恵器杯で断面方形の高台をやや外向きに貼り付けている。

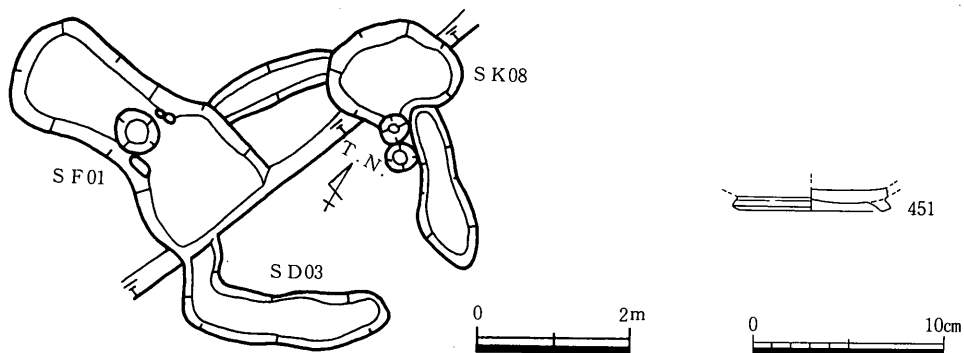


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法的特徴	備考
450	須・杯			8.8	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		

第600図 F区S D02出土遺物(1/4)

S D03 (第601図)

F 3 区のS D02の西側に近接して検出した溝である。方形に巡るが東側の一箇所が途切れている。さらに西側の二箇所のコーナー部分が他の遺構で切られている。溝は幅50~70cm, 深さ20cm前後で一辺2.5mほどで屈曲するものである。埋土は褐色粘質土の単一層である。西側が窯跡(S F01)と重なっている。当初窯の排水施設とも考えられたが, 窯の東側の部分では段差があり窯との前後関係は不明であるが, 窯の北側の部分では窯と直接つながらず前後関係が認められたため, 窯とは無関係のものと判断した。451は須恵器杯で断面方形で外側に大きくふんばる高台をもつ。古代末においてこのような形状の溝は塚状の墓の周溝に類例があるが, 本例はそうした例かどうかは不明である。

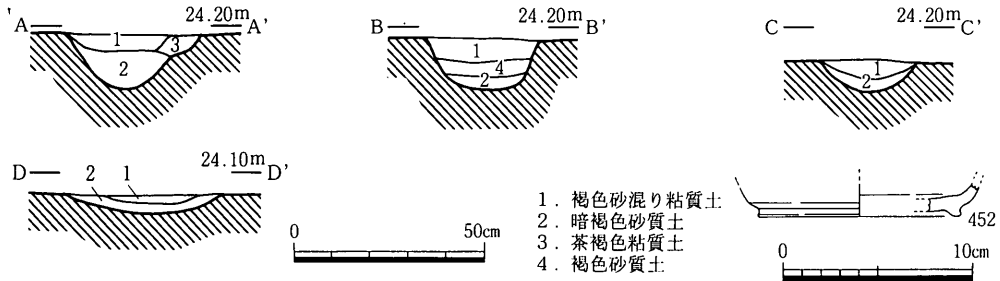


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法的特徴	備考
451	須・杯			8.4	細・少	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	

第601図 F区S D03平面図(1/100), 出土遺物(1/4)

S D04 (第602図)

F 3 区の東端で検出した北東-南西方向の溝である。幅20~50cm, 深さ10~20cm程度で長さは南側が調査区外に延びるので不明である。断面形はほぼU字形をしており南に向かって浅くなっている。452は須恵器杯で断面方形の高台をやや外向きに貼り付けている。

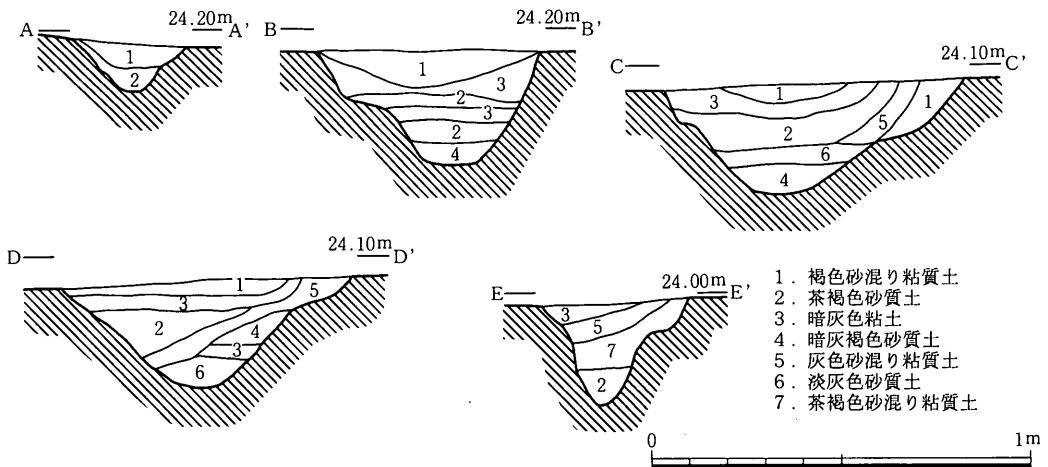


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
452	須・杯			10.6	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		

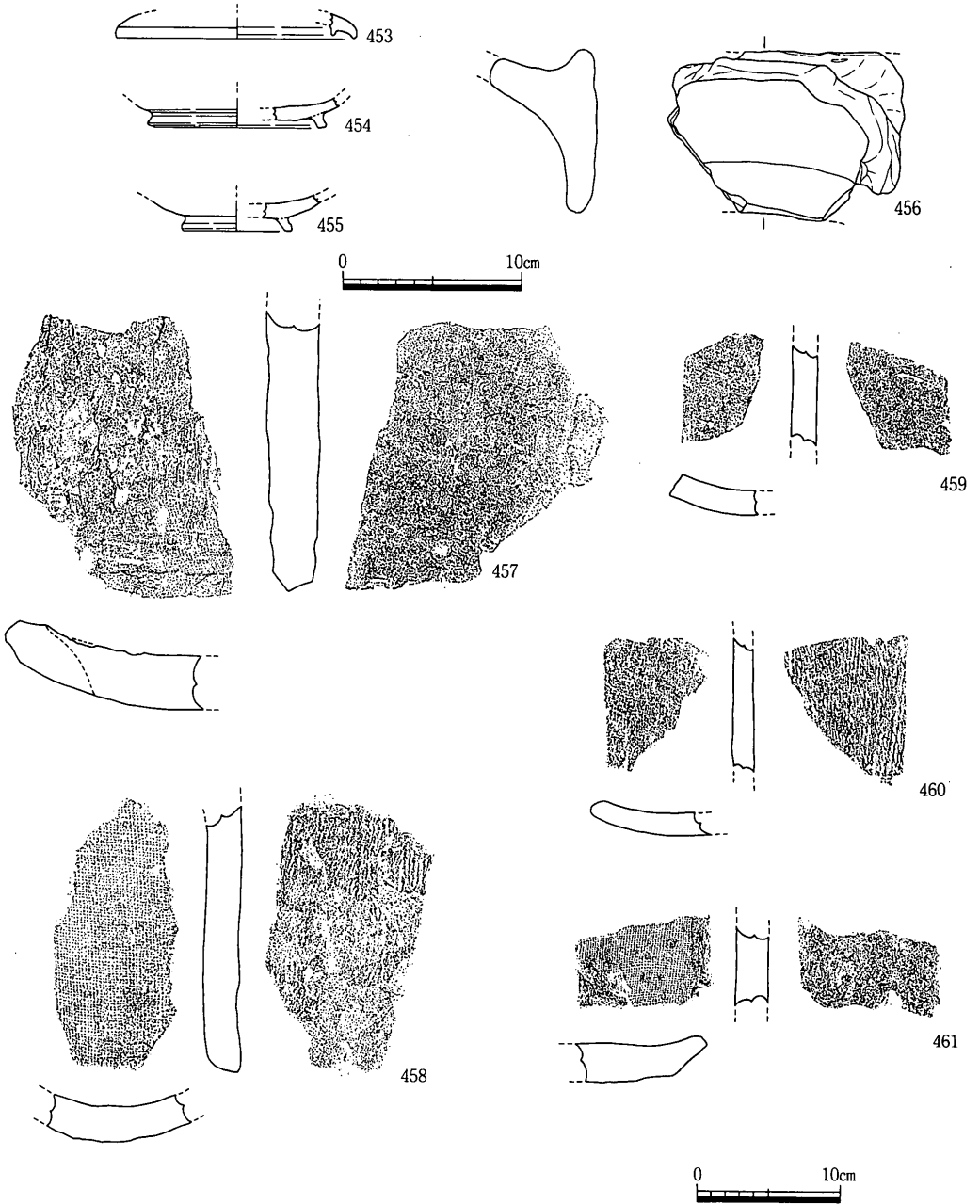
第602図 F区SD04断面図(1/20), 出土遺物(1/4)

SD05 (第603・604図)

F3区のSD04の東約1mの所で検出した溝である。SD04とほぼ平行で、やや蛇行しながら南側が調査区外に延びる。幅0.3~1mで途中で幅広になったり狭くなったりしている。深さは10~30cmで段掘りになっており、中央部が深くなっている。全体に南に向かって下っている。埋土は上部が粘質土、下部が砂質土となっている。455は須恵質の椀で十瓶山産の瓦質土器の可能性はある。456は竈の正面上部の破片で、鏝は斜め上方に張り出す。457~461は平瓦である。457は全体に厚手に作られており、凹面には粘土板の接合部分が剥離しており観察出来る。端面はヘラズリで面取りしている。458は凸面は縄目叩きの後に叩きを半分ほどナデ消している。460は凹面に糸切り痕が残っており、凸面は縄目叩きが施されている。461は側面の形状から判断すると、一枚作りで成形されたと考えられる。



第603図 F区SD05断面図(1/20)



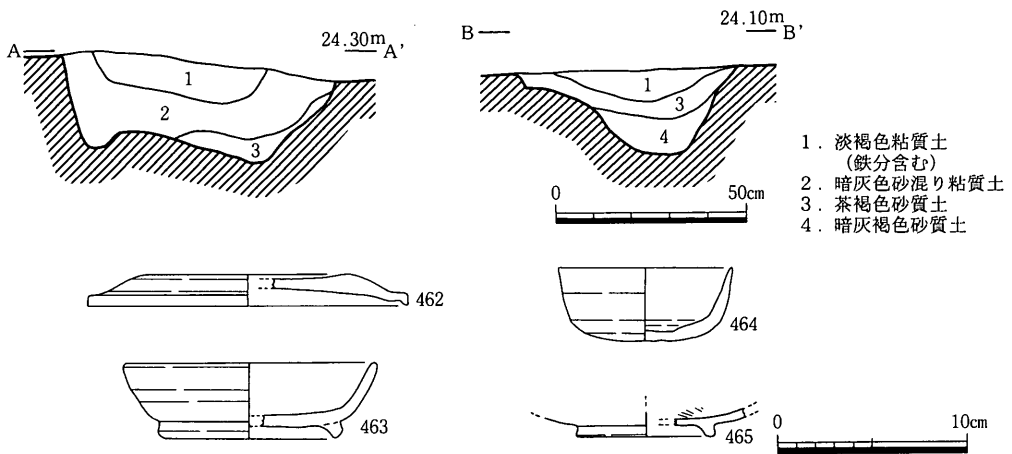
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
453	須・杯蓋	13.3			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
454	須・杯			9.9	中・普	良好	明紫灰・灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
455	須・碗			6.2	細・普	不良	灰白	ナデ	ナデ		
456	土・甕				中・多	良好	黄橙〜ニグイ褐	ナデ	ナデ		

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
457	平瓦	3.6	ナデ	布目圧痕→ナデ	4	20	中・多	灰白	良好		18.5
458	平瓦	2.4	縄目叩き→ナデ	布目圧痕		17	粗・普	灰黄	不良		18.3
459	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕→ナデ	1		中・普	灰・灰白	良好		6.1
460	平瓦	1.3	縄目叩き	布目圧痕	4		中・普	灰白	良好	凹面糸切り痕	8.7
461	平瓦	2.8	不明	布目圧痕	7		中・普	にぶい黄橙	不良	一枚作り	5.6

第604図 F区SD05出土遺物(1/4, 1/5)

S D06 (第605図)

F 3区でS D05の西側に隣接して検出した溝である。F 3区の南壁から北東に24mほど行ったところで東に弧を描いて屈曲する。その後南東のF 1区に入り、8mで東に向きを変えて3m程で収束する。溝の南側は調査区外に延び、南に向かって低くなっている。また南側部分でS D05に切られる部分がある。埋土の上部は粘質土が、下部は砂質土が堆積している。断面形は北側ほどV字形に近くなっている。462は須恵器の杯蓋で天井部は屈曲し、端部を下方に拡張する。465は黒色土器B類の椀である。断面方形の高台を貼り付けている。



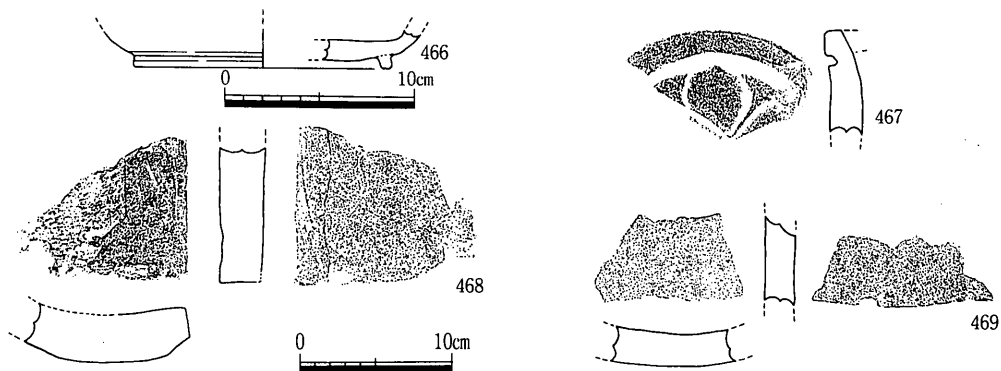
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
462	須・杯蓋	16.9			細・少	良好	灰	不明	ナデ		
463	須・杯	13.4	4.0	8.8	中・普	良好	灰白	ナデ・ケズリ	ナデ		
464	須・杯	9.2	3.9	6.1	中・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ	内面に漆が付着	金翠母
465	黒B・椀			7.3	中・普	良好	黒	ナデ	不明		

第605図 F区S D06断面図(1/20), 出土遺物(1/4)

S D07 (第606図)

F 3区でS D06の西側から東側に向かって延びており、中央部分でS D06に切られている溝である。幅は0.7~1.3m、深さ30cm前後で埋土はマンガンを含む褐色粘質土の単一層である。466は須恵器の壺の底部である。断面方形の高台を貼り付け、体部は急激に立ち上がる。467は軒丸瓦である。瓦当面の一部しか残存していない。外区は素縁で幅は1.4cmである。弁は単弁で幅広のもので、弁端は若干の反転を見る。間弁は弁の横から始まり大柄なものである。瓦当裏面は剥離しており丸瓦部との接続方法は不明である。468は平瓦である。凸面側に布目圧痕が残っており、凹形の成形台によって一枚作りされた可能性が

あるものである。凹面には叩き痕は認められずナデている。平瓦の製作技法を考える上で興味深い資料である。469も平瓦である。凸面はナデ、凹面は布目圧痕をナデ消しているものである。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
466	須・盆			13.5	中・昔	良好	灰白	ナデ	ナデ	底接合→ナデ	

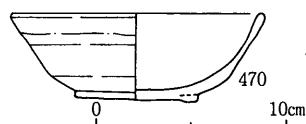
遺物番号	直径	中房径	蓮子数	内区径	弁幅	弁数	外区幅	外区内縁幅	外区外縁幅	外区外縁高	形態・手法の特徴	備考
467					3.7		1.6		1.6			

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
468	平瓦	2.8	布目圧痕→ナデ	ナデ	1	1 6	中・昔	灰・灰白	良好	凸面布目の痕跡	8.6
469	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕→ナデ			細・昔	灰	良好		5.3

第606図 F区SD07出土遺物(1/4, 1/5)

SD08 (第607図)

F1区の西側のSD06の南側に隣接して検出したほぼ南北方向の溝である。長さ3.9m、幅30~40cm、深さ10cm程度で、埋土は褐色粘土の単一層であった。470は十瓶山産の瓦質土器の碗である。体部は下半で屈曲した後に直線的に立ち上がる。体部中央部は強くナデているため器壁が薄くなっている。底部は円盤状の高台を貼り付けた後に、外面をナデて高さ1mm、幅5mmの低い高台を作り出している。口縁部外面は重ね焼きのため暗灰色~銀色となっている。内・外面ともにナデている。

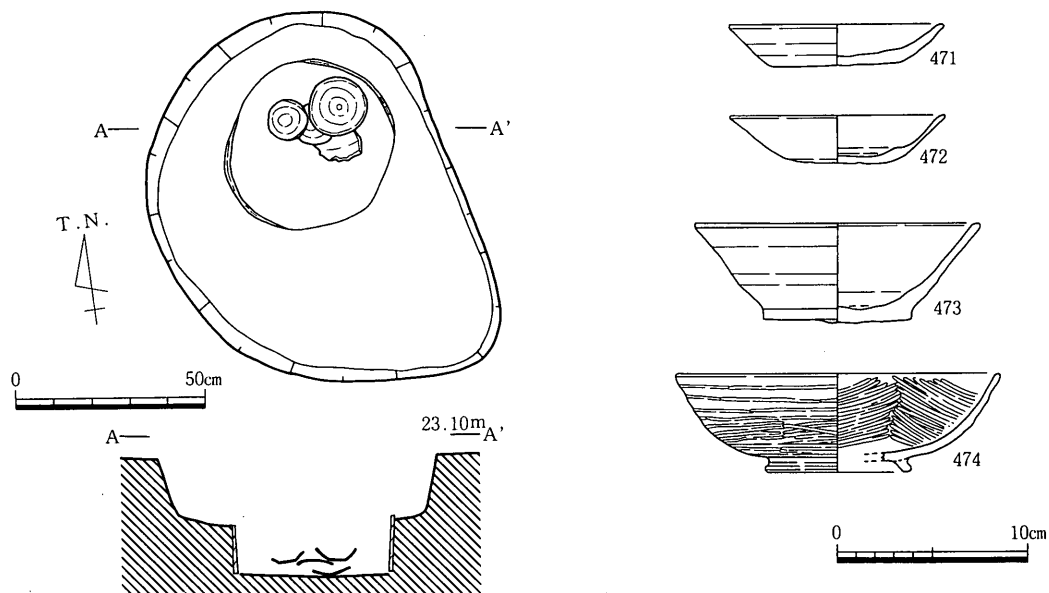


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
470	瓦質・碗	13.2	4.6	6.4	中・少	良好	灰白	ナデ	ナデ	高台ナデでつぶれる	

第607図 F区SD08出土遺物(1/4)

SE01 (第608図, 図版82)

F4区のほぼ中央で検出した井戸である。平面形は楕円形で、長径1.1m、短径0.8mとなっている。検出面から15cmほど下で円形の曲物を検出した。曲物は掘形の北側に据えられており、13cmしか残っていなかった。埋土は灰褐色粘土の単一層であり、一度に埋まったと考えられる。曲物内より黒色土器碗と土師器杯がまとまって出土した。曲物は非常に脆弱であり、図化は不可能であった。471は体部に2段のナデを施しており、底部はヘラ切り後ナデている。472は体部を非常に強くナデているため立ち上がり部から急激に器壁が薄くなっている。底部はヘラ切り後板状圧痕を施している。473は回転台成形の土師器の杯である。体部は長く直線的に延びる。底部は突出しており高台状になっており、ヘラ切り後板状圧痕を施している。474は黒色土器B類である。体部の上半は直線に近く立ち上がり、口縁部付近を強くナデている。外面には体部を外周する直線のヘラミガキを、内面には井桁状のヘラミガキを施している。高台は断面方形で、外向きに貼り付けている。全体に丁寧な作りである。

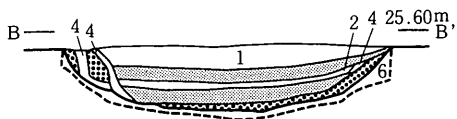
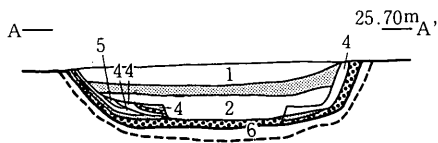
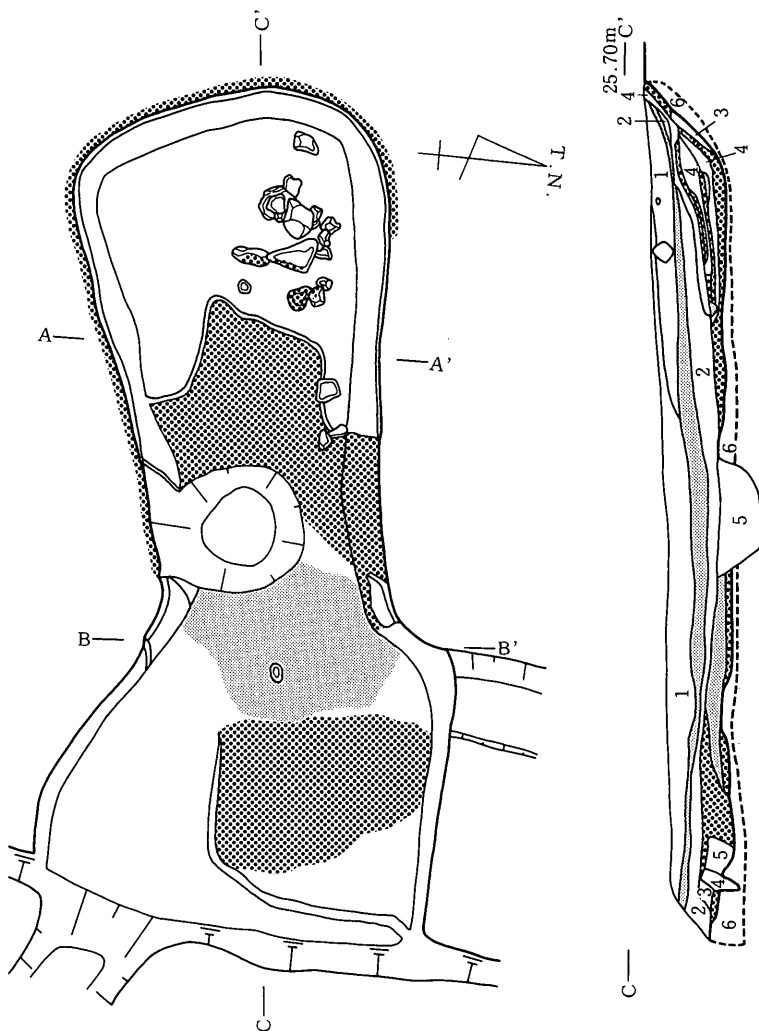


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
471	土・杯	11.4	2.2	7.0	中・普	良好	灰・浅黄	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
472	土・杯	11.2	2.5	5.2	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
473	土・杯	14.8	5.2	7.8	中・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ	回転台成形	金器母
474	黒B・碗	17.1	5.2	7.7	細・少	良好	黒	ミガキ	ミガキ	丁寧なミガキ	

第608図 F区SE01平・断面図, 遺物出土状況(1/20), 出土遺物(1/4)

S F 01 (第609・610図, 図版82~84)

F 3 区の北東部で検出した窯跡である。丘陵部からテラス状に変換した平坦部に構築されている。平面形は中央部のやや窪んだ長方形をしている。焚口部は後世の遺構面の成形により削られている。窯体規模は現存長3.3m, 床面最大幅は1.45m, 床面最小幅は0.65mである。床面の傾斜角度はほとんどなく, 床面標高は25.3mである。また窯体の主軸方位はN-81° - Eである。窯体は先端部から2mほどの部分でくびれている。このくびれ部から先端部にかけてが焼成部, くびれ部から下が燃焼部と考えられる。先端部分は45°で立ち上がり, 煙出しの穴などの施設は検出出来なかった。焼成部は天井部が崩落したと思われる粘土塊が堆積していた。焼成部は煙道部に向かってやや広がっている。焼成によって赤変した土と, 非常に固く締まった灰色粘土層が交互に3層見られたことから, この窯は3回の操業が考えられる。最終操業面には一面に炭化物が広がっており, 人頭大の礫が数個まとまっていた。窯壁は粘土を貼っており, 高熱のため粘土の外側の地山粘土が赤変していた。また南側の窯壁は粘土と外側の赤変した地山粘土との間に炭化物層が見られたので, 窯壁を補修したと考えられる。焼成部には燃焼部寄りに後世の遺構が一部切り込んでおり, 窯体が壊されている。また燃焼部の窯壁は粘土層と赤変した焼土層が交互に2層確認出来たことから, 少なくとも2回の補修を行なっていることが解る。窯壁の粘土はほとんどが剥落している。さらにこの部分では床面に黄褐色粘質土層をはさんで2層の炭化物層が見られ, 全体に炭化物は厚く堆積している。床面の粘土も大部分剥離しているが, 焼土面はかなり残っている。焚口部は残存状態が悪く, 後世に地山面をカットされており詳細は不明である。475は須恵器高杯で脚部は端部付近で大きく外側に屈曲し, 端部は斜め下方に拡張し外側に面を作り出す。476も高杯の脚部で端部付近で外側に短く屈曲して, 外側に面を作り出す。その他図化出来なかったが凹面・凸面ともナデている平瓦の破片が1つあった。熱残留磁気測定の結果によると3回の操業のうち2回目の操業面の資料は975~1050年, 最下層の1回目の操業面は925~1050年という年代を得た⁽¹⁾。最終操業面は具体的な年代が得られなかったが, 1回目と2回目の年代差が50年であることから考えると, 1100年までの間と推定出来る。このことからこの窯の操業は10世紀前半から11世紀末までである。しかし窯体内の出土遺物は7世紀後半のものであり, この遺物は窯の廃絶時の混入とも考えられよう。窯体内からは操業時期の10世紀前半から11世紀末の遺物は出土しなかった。窯の灰原部分と想定出来る付近のF 3区包含層からは瓦がある程度出土しており, 後述する7世紀後半のS X 02との関連も考えられなくもない。従って窯の年代は7世紀後

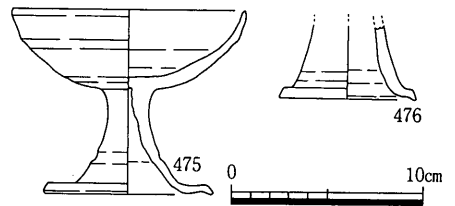


- 1. 褐色粘質土
- 2. 黄褐色粘質土
- 3. 暗褐色砂質土
- 4. 灰色粘土(固くしまる)
- 5. 淡褐色砂質土
- 6. 黄褐色花崗岩ばい乱土(地山)
- 炭化物層
- 焼土層



第609図 F区SF01平・断面図(1/30)

半と10世紀前半～11世紀末の2つの年代を考慮しておく。残存している床面の傾斜がないことから平窯といえるが、ロストル式ではないがそれ以上のことは不明である。何を焼いたかが問題であるが、ここでは瓦を焼成した可能性を指摘するにとどめておきたい。

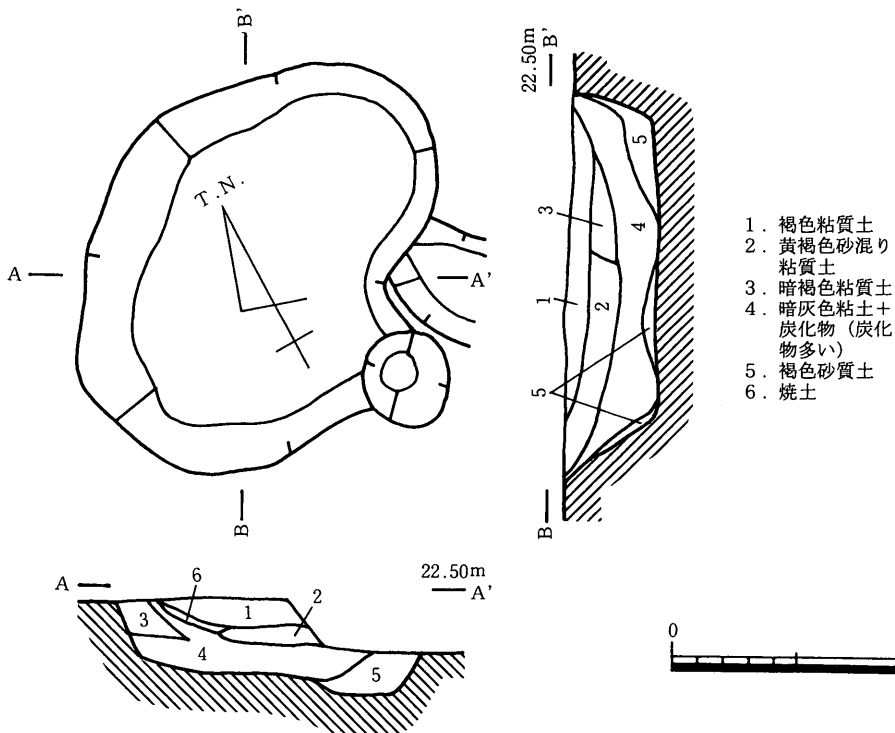


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
475	須・高杯	12.0	9.3	8.7	微・昔	良好	灰白	ナデ	ナデ		
476	須・高杯			7.2	微・昔	不良	灰白	ナデ	ナデ		

第610図 F区SF01出土遺物(1/4)

SK08 (第611図)

F3区の北東部の窯跡SF01のすぐ北側に隣接して検出した土坑である。平面形は不整形な楕円形で、後世のピットで切られている部分が突出しており、東西方向に長くなっている。土坑の規模は長径1.7m、短径1.1m、深さ35cmとなっている。上面が後世の整地により一部カットされている。土坑の下半には炭化物が厚く堆積しており、焼土ブロックも

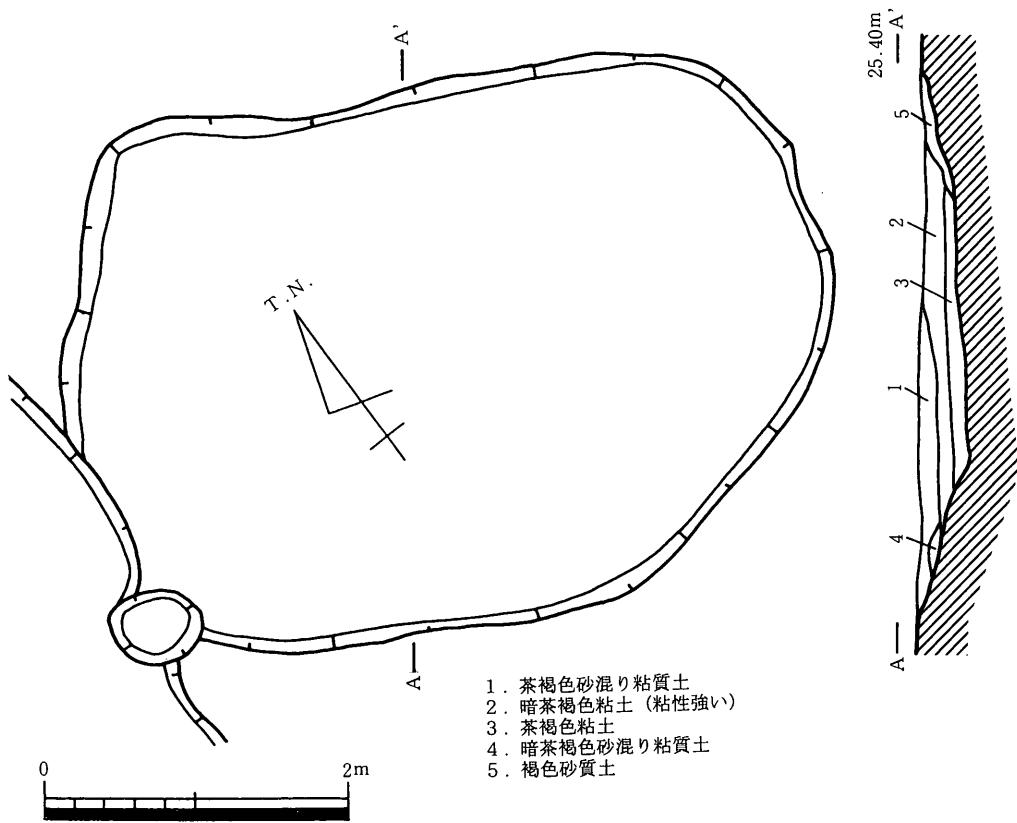


第611図 F区SK08平・断面図(1/30)

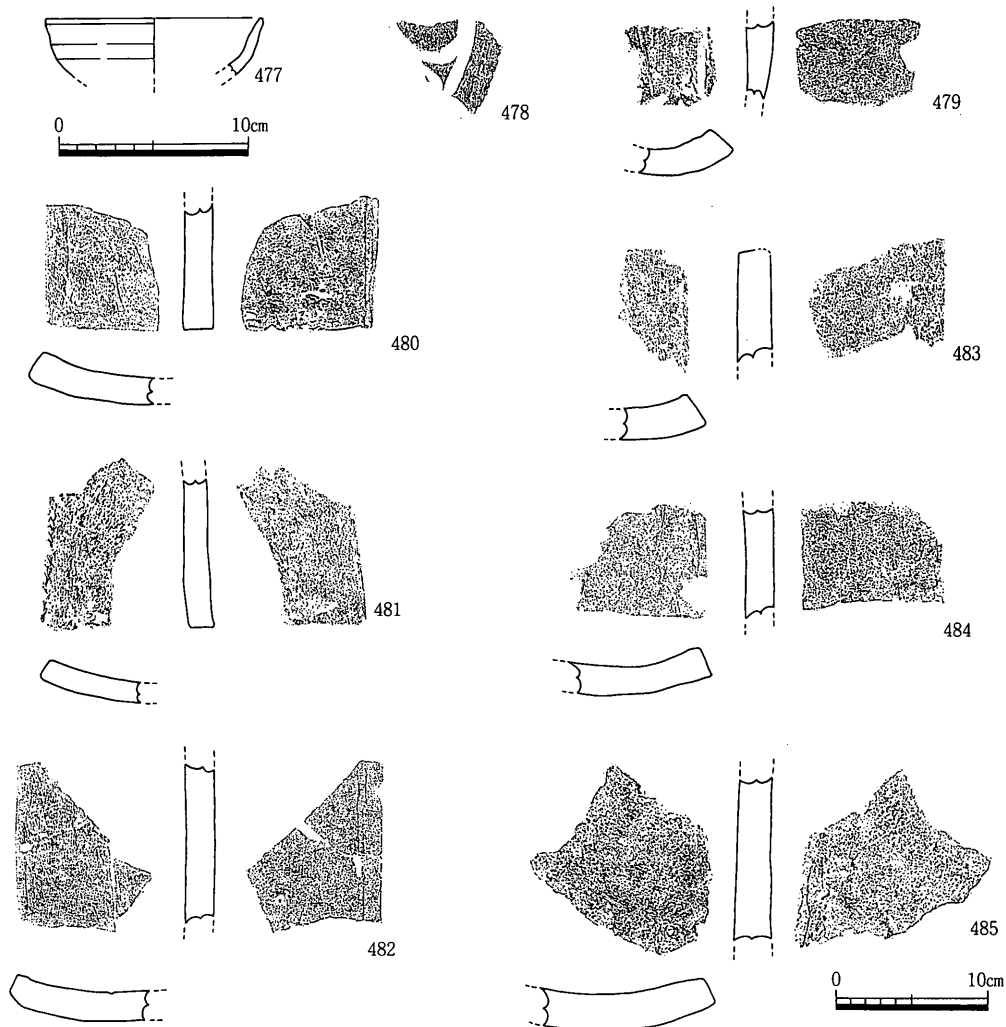
一部見られたが焼土は混入したものと思われ、この土坑で火を焚いた状況ではない。遺物は出土しなかったが、窯跡に隣接することから、窯で焼成した土器を掻き出した後に一時的に入れた土坑の可能性がある。

SX01 (第612・613図)

F3区の北東部で検出した落ち込み状の遺構である。平面形は不整形で長方形に近い形をしている。遺構の東側は丸みを帯びており、西側のコーナー部分はSD02に切られている。長径5.1m、短径3.6m、深さ15~20cmと浅く底部は平坦に近づいている。遺構の埋土は粘性の強い茶褐色系の粘土が中心となっている。遺構の性格は不明である。477は須恵器の杯である。上半部の破片であるが、体部が途中で屈曲し口縁部は直線的になっている。478は軒丸瓦の瓦当面の破片である。外区は素縁で幅は1.8cmである。弁は単弁で幅広のものである。間弁は蓮弁のやや上から始まっている。瓦当の厚さは外区の部分で3.4cmである。479~485は平瓦である。いずれも凸面はナデている。483は凹面に布目圧痕を残している。485は凹面は全体にナデ、479~482・484は凹面は布目圧痕の後ナデている。



第612図 F区SX01平・断面図 (1/50)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
477	須・杯	11.4			細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		

遺物番号	直径	中房径	蓮子数	内区径	弁幅	弁数	外区幅	外区内縁幅	外区外縁幅	外区外縁高	形態・手法の特徴	備考
478							1.8		1.8			

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
479	平瓦	1.6	ナデ	布目圧痕→ナデ	1		粗・普	灰白	良好		5.0
480	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	1 6	精緻	灰	良好		7.7
481	平瓦	1.3	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	1 6	精緻	灰白	不良		9.5
482	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕→ナデ	4		粗・普	灰白	良好		10.5
483	平瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	1	1 6	中・普	灰白	不良		6.7
484	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕→ナデ	1		粗・普	灰白	良好		7.1
485	平瓦	2.4	ナデ	ナデ	1		中・普	灰白	良好		10.6

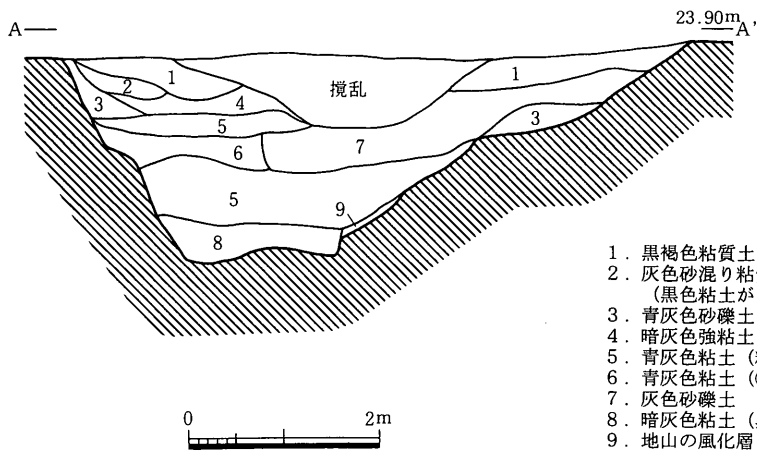
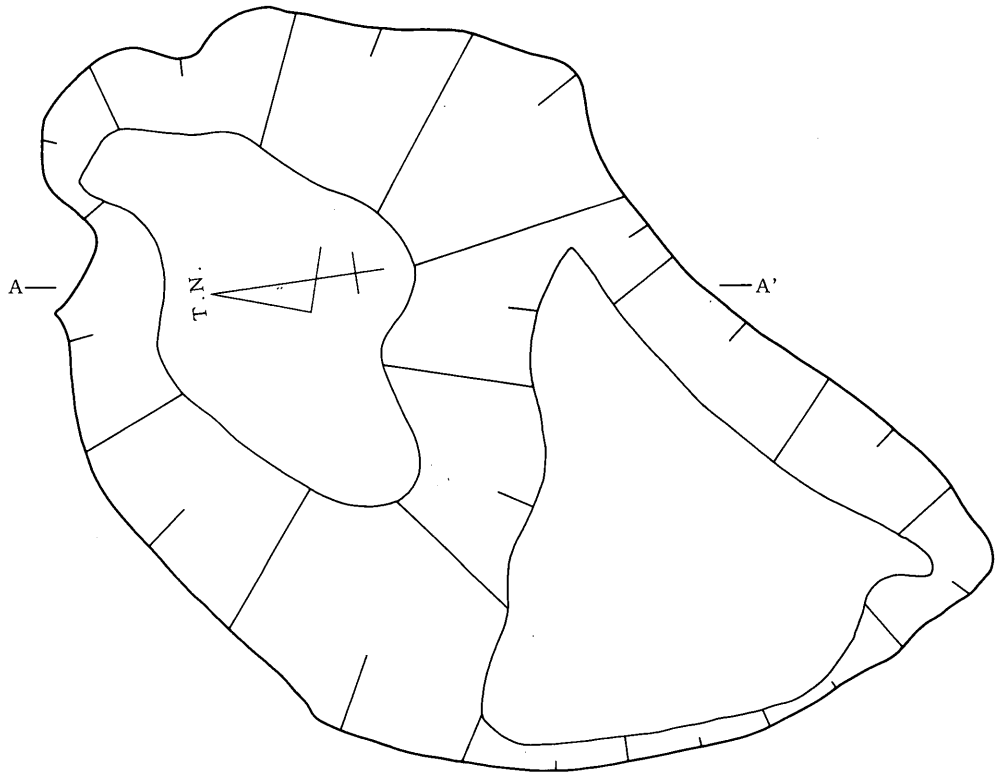
第613図 F区SX01出土遺物(1/4, 1/5)

S X 02 (第614～622図, 図版87・88)

F 1 区のほぼ中央部で検出した落ち込み状の遺構である。平面形は不整形で楕円形が歪んで南西側が先細りの様になっている。長軸は10.9m, 短軸6.0mである。南西側半分は検出面から20～30cmほどで平坦なテラス状になり, そこから北東側に大きく落ち込み土坑状になる。最も深い部分で検出面から2.2mほど下がる。北東側の深い部分の上部は一部攪乱されていたが下部に影響はなかった。また北東コーナー部分は弥生時代の旧河道であるSR01を切っているため, 北東部分を中心に弥生土器が混入している。埋土はテラス部分から北東部の上層にかけては黒褐色粘質土で, 深い部分は灰色系の粘性の強い粘土となっている。遺構の西側のテラス部分の底部から土器・瓦・木器が集中して出土した。

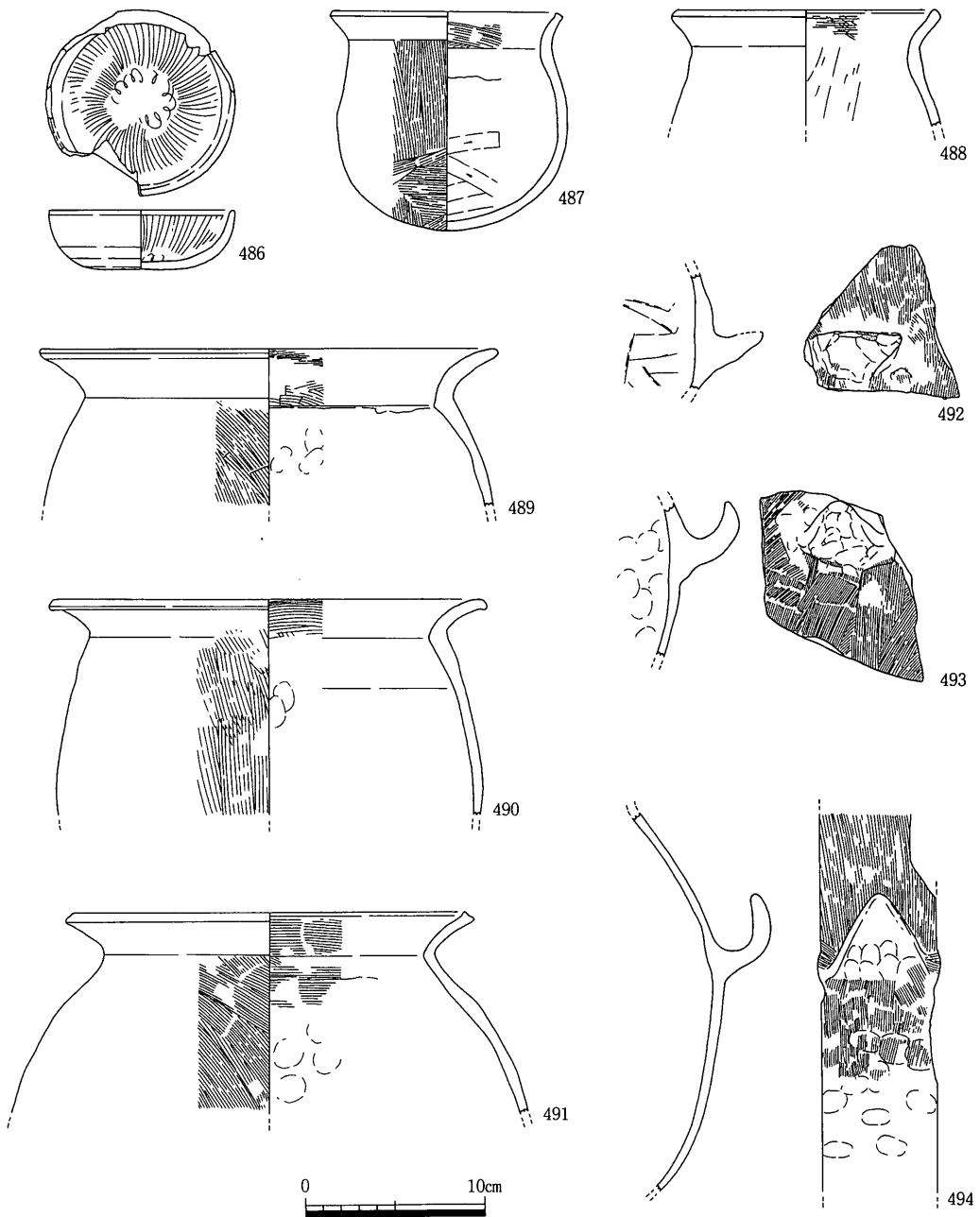
486～497は土師器である。486は杯で内面に放射状暗文を施し, 見込み部は螺旋状暗文を施している。外面はナデている。487～491は甕である。いずれも口縁部内面にハケ目を施している。487は体部は小さく, 外面に縦方向のハケ目の後に, 下半に横方向のハケ目を施している。489・490は口縁部は外反し, 立ち上がり部内面には鋭い稜をもつ。体部の張りはほとんどなく, 長胴になるものと思われる。492～494は甕の把手部で, 舌状になっている。いずれも体部の最も張った部分に付いている。495は鉢で口縁部のナデのために内面に沈線状の段が生じている。497は大型の鉢である。口縁部は外反気味に開き, 端部外面に面をもつ。体部は扁平な半球状で, 下半の内・外面に粗いハケ目を施している。498～503は混入した弥生土器である。498は口縁部端部が欠損している。頸部は外反して開く。体部外面には叩きを施している。

504～520は須恵器である。504～513は杯である。504・505は体部は直線的に立ち上がるものである。506～510は体部は途中で屈曲して端部に向かって上方に立ち上がる。底部は不安定ながら平底に近くなっており, ヘラ切りのまま未調整である。506～510の口径は10cm前後である。511は体部はドーム状で端部付近でゆるく屈曲して立ち上がる。底部はヘラ切りで未調整となっている。古墳時代タイプの杯蓋の可能性はあるが, 底部の調整から判断して杯身としたが古い要素を持つものである。512は体部は底部から明瞭に屈曲して直線的に立ち上がるもので口径は13cmとなっている。底部外面に墨書が認められるが文字は不明である。514・515は高杯で杯部は内湾して立ち上がる。脚部は端部付近で屈曲し, 端部外面に面をもつ。516～518は壺である。516・517ともに口縁部を強くナデて屈曲させている。518は体部の屈曲が強くなっている。519・520は甕である。519は口縁部が肥厚している。体部外面は叩きの後に細かいカキ目を施している。520は口縁部の強いナデのた



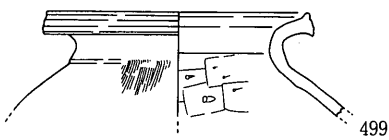
1. 黒褐色粘質土
2. 灰色砂混り粘質土
(黒色粘土がブロック状に入る)
3. 青灰色砂礫土
4. 暗灰色強粘土 (粘性強い)
5. 青灰色粘土 (粘性強い)
6. 青灰色粘土 (⑤より粘性弱い)
7. 灰色砂礫土
8. 暗灰色粘土 (黒色不腐土を含む)
9. 地山の風化層 (黒色粘土ブロック含む)

第614図 F区SX02平・断面図 (1/80)

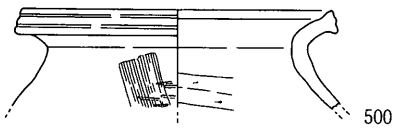


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法的特徴	備考
486	土・杯	10.2	3.2	6.5	中・普	良好	暗灰黄	ナデ	ミガキ	放射状とラセン状暗文	
487	土・甕	12.5	12.0		細・普	良好	黒・にぶい橙	ハケ目	ハケ目・ナデ		蜜母
488	土・甕	14.4			中・普	不良	黒・灰黄褐	不明	ハケ目・ナデ		
489	土・甕	25.4			細・多	良好	灰・黄灰	ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ		
490	土・甕	24.0			微・普	良好	灰黄	ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ		金罌母
491	土・甕	21.8			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ		
492	土・甕				細・多	良好	にぶい黄橙	ハケ目	板ナデ		
493	土・甕				中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目・ナデ	ハケ目		金罌母・角閃石
494	土・甕				中・普	良好	灰・黒	ハケ目・ナデ	ナデ		金罌母

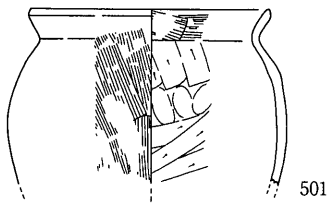
第615図 F区SX02出土遺物(1)(1/4)



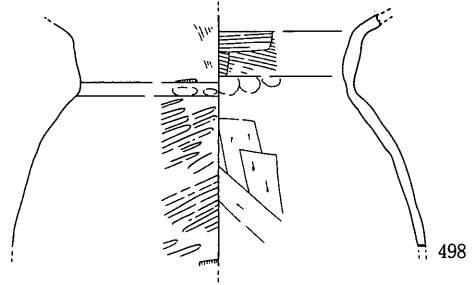
499



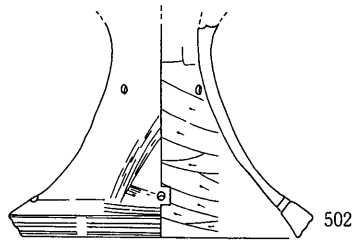
500



501



498



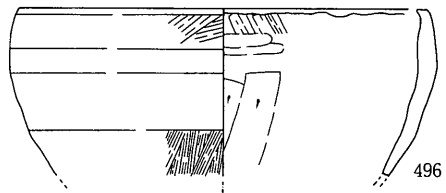
502



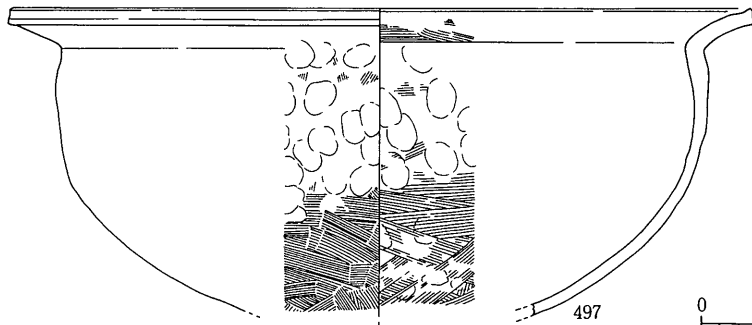
503



495



496

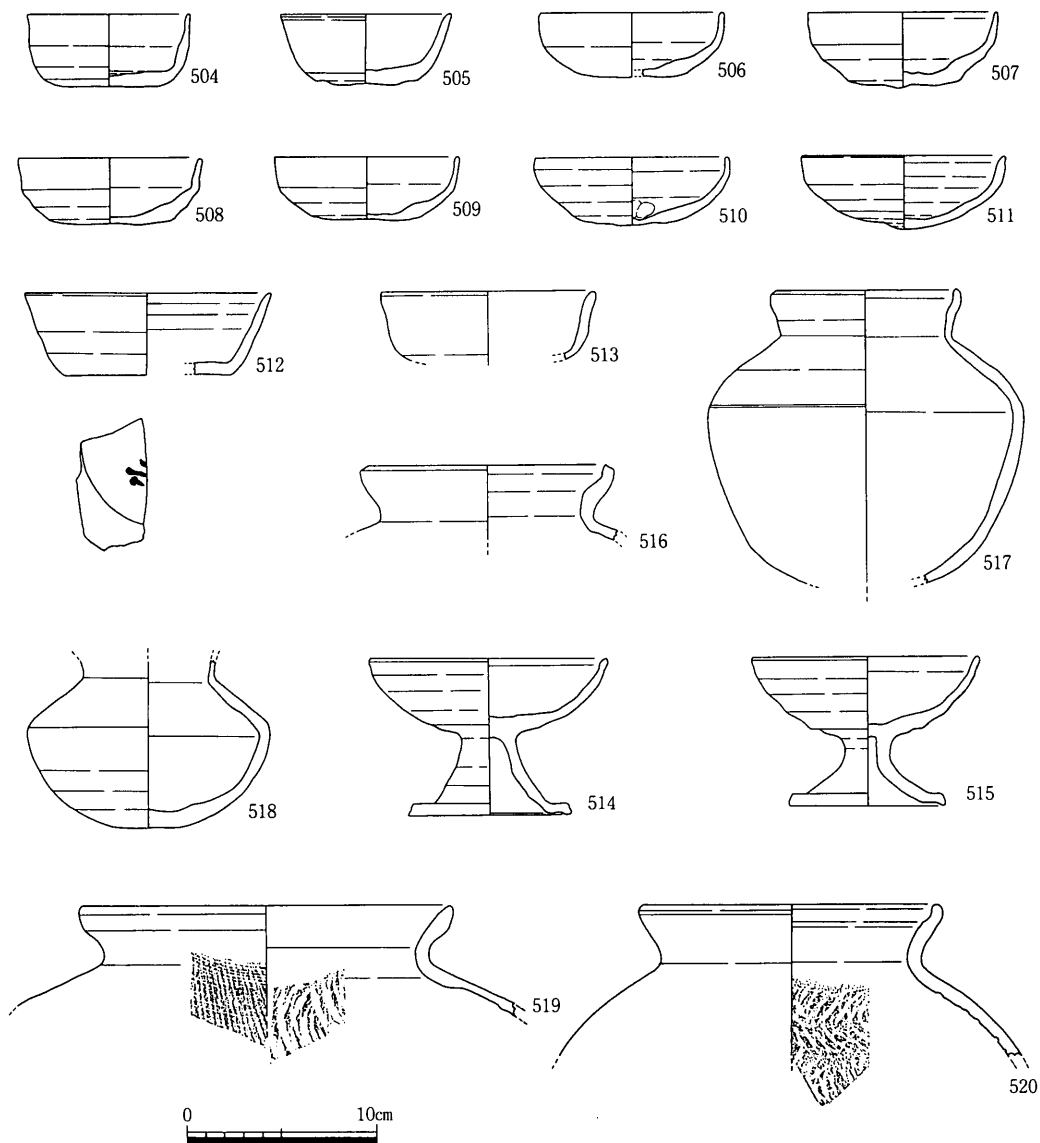


497



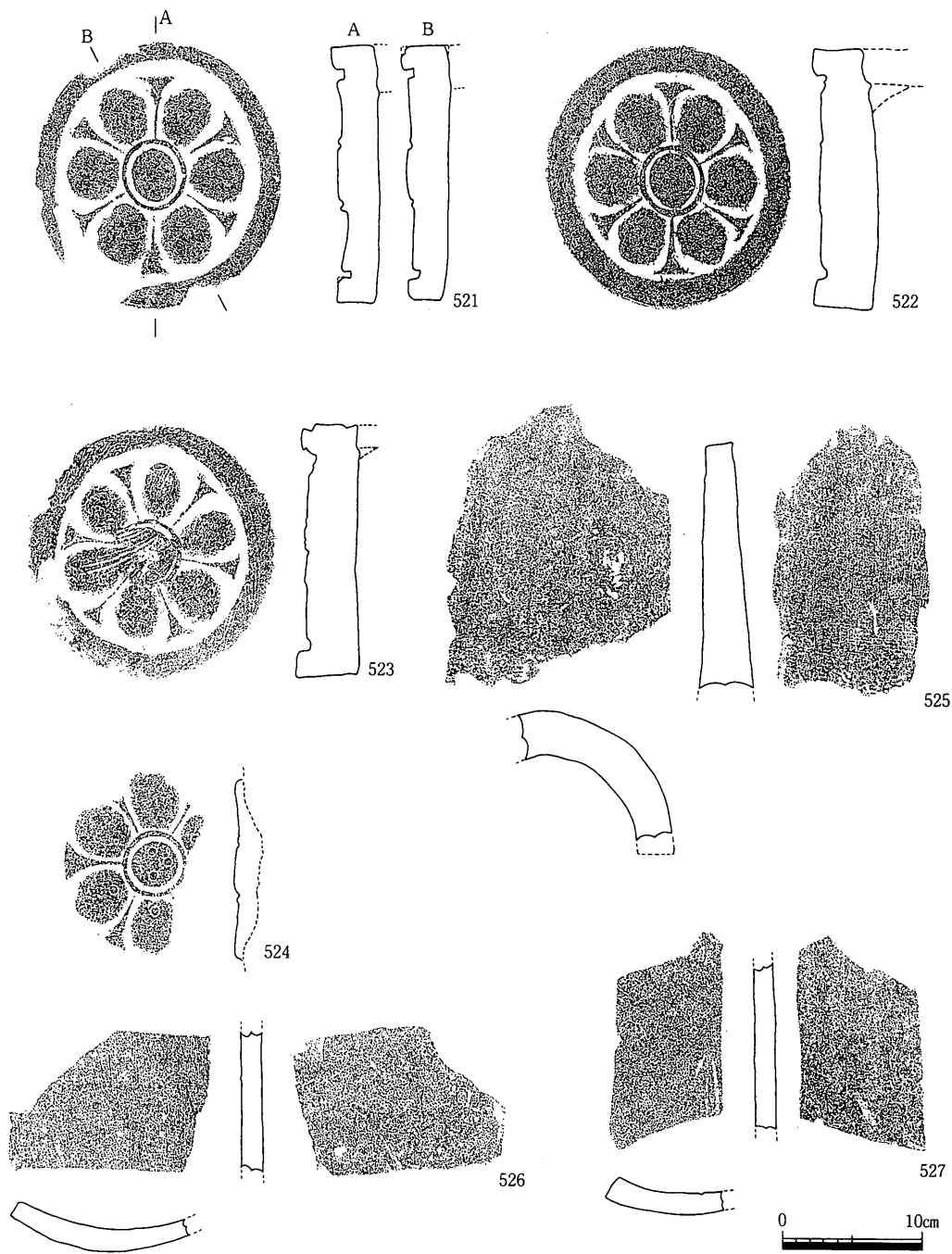
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
495	土・鉢	16.6			細・普	良好	灰黄褐	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	端部上方へつまみ上げ	
496	土・鉢	21.4			中・普	良好	黄灰	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		金雲母
497	土・鉢	38.9			細・普	良好	コブイ黄橙・黒	ナデ・ハケ目	ハケ目・ナデ	胴部上半ハケ目→ナデ	金雲母・角閃石
498	弥・壺	17.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ・叩き	ハケ目→ナデ・ナデ		金雲母
499	弥・壺	13.8			中・多	良好	灰・灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ		
500	弥・壺	16.3			中・普	良好	浅黄橙	叩き→ハケ目・ナデ	ナデ・ケズリ		金雲母
501	弥・壺	12.5			中・普	不良	灰白	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		
502	弥・高杯			14.6	微・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ケズリ	上下2段の透し穴	角閃石
503	弥・鉢	10.8	4.8	3.1	細・普	良好	にぶい橙	ナデ	板ナデ		

第616図 F区S X02出土遺物(2)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
504	須・杯	8.6			精緻	良好	暗灰	ナデ	ナデ	底へら切り→ナデ	
505	須・杯	9.0	3.6	5.3	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
506	須・杯	9.6	3.3	5.9	中・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ	底へら切り	
507	須・杯	10.0	3.4	6.0	細・普	良好	灰・茶褐	ナデ・ケズリ	ナデ	底へら切り	
508	須・杯	9.6	3.4	6.6	精緻	不良	暗茶褐	ナデ・ケズリ	ナデ	底へら切り→ナデ	
509	須・杯	9.8	3.2	5.8	細・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ	底へら切り	
510	須・杯	10.2	3.5	4.5	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底へら切り	
511	須・杯	10.6	3.8	6.7	中・少	良好	灰白	ナデ・ケズリ	ナデ	底へら切り	
512	須・杯	13.0	4.3	9.0	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		墨色
513	須・杯	11.4			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
514	須・高杯	12.6	8.6	8.6	細・普	良好	灰・暗灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
515	須・高杯	12.0	7.7	8.2	中・普	良好	淡灰・灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
516	須・壺	12.6			細・少	良好	灰白・暗灰	ナデ	ナデ		
517	須・壺	9.4			中・普	良好	暗灰	ナデ	ナデ		
518	須・壺			4.0	中・少	良好	灰・暗灰	ナデ	ナデ・ケズリ		
519	須・甕	19.4			微・普	不良	灰白	ナデ・叩き	ナデ		
520	須・甕	16.0			中・普	不良	灰白	不明	ナデ		

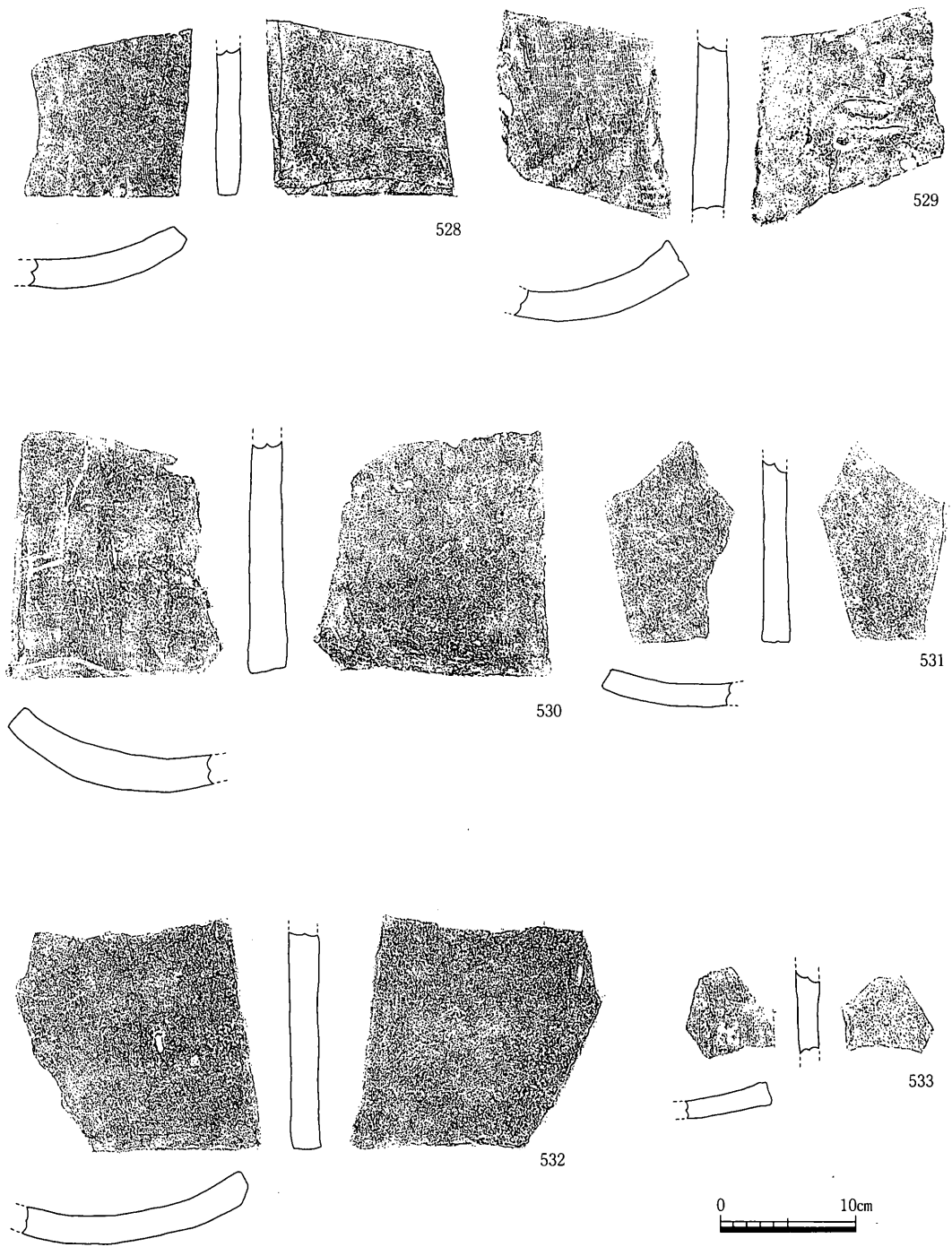
第617図 F区SX02出土遺物(3)(1/4)



遺物番号	直径	中房径	蓮子数	内区径	弁幅	弁数	外区幅	外区内縁幅	外区外縁幅	外区外縁高	形態・手法の特徴	備考
521	16.8	3.3	0	15.1	3.3	6	1.7		1.7	2.8		
522	17.2	3.4	0	15.5	3.3	6	1.7		1.7	4.2	丸瓦接合部に刻み目	
523	17.2	3.5	0	15.6	3.3	6	1.6		1.6	4.4	瓦当面に箱型の痕と傷有り	
524		3.4	4		3.6	6					蓮子内に珠文を1個配す	

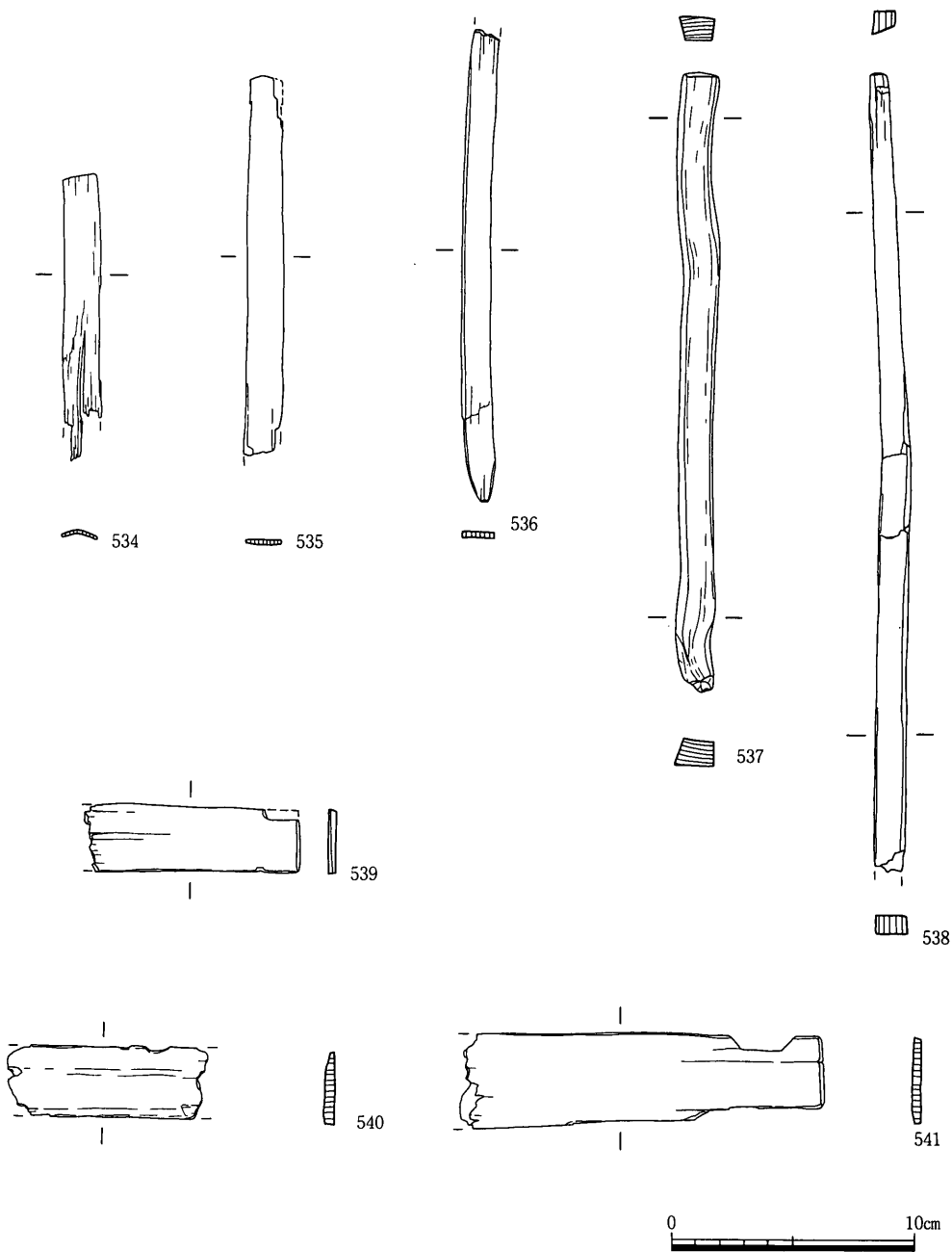
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
525	野丸瓦	3.0	ナデ	布目圧痕		16	中・少	暗灰	良好	瓦当剝離部に刻み目有り	16.7
526	平瓦	1.5	ナデ・ケズリ	ナデ	1		中・昔	灰	良好	凸面側面付近を幅広にケズリ	9.7
527	平瓦	1.5	ナデ	布目圧痕→ナデ	1		中・昔	灰白	良好		11.7

第618図 F区SX02出土遺物(4)(1/5)



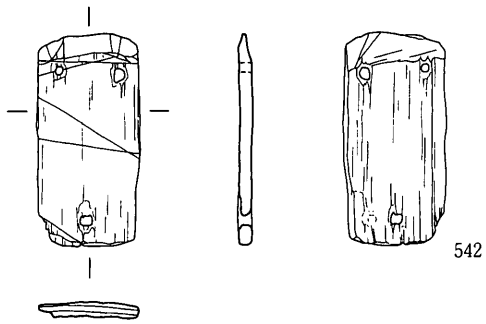
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
528	平瓦	1.9	ナデ	布目瓦痕→ナデ	1	1 6	粗・普通	暗灰	良好		10.4
529	平瓦	2.4	ナデ	布目瓦痕→ナデ	1		中・普通	灰・暗灰	良好		12.2
530	平瓦	2.5	ナデ	布目瓦痕→ナデ	1	1 6	中・普通	黒	良好		18.0
531	平瓦	1.6	板ナデ	ケズリ・ミガキ	1	1 6	粗・普通	黒	良好		13.3
532	平瓦	2.1	ナデ	布目瓦痕→ナデ	6	1 8	中・普通	灰	良好		15.7
533	平瓦	1.4	ナデ	布目瓦痕→ナデ	1		粗・普通	灰白	良好		6.1

第619図 F区SX02出土遺物(5)(1/5)

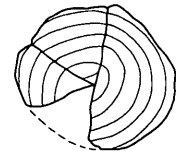
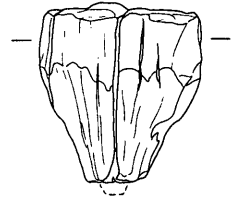
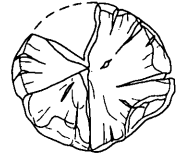


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
534	斎串	11.4	1.5	0.1	柁目	上端部若干斜めに加工している	
535	斎串	15.2	1.5		柁目		
536	斎串	18.8	1.2	0.3	柁目		
537	棒状木製品	24.8	1.6	1.1	板目		
538	棒状木製品 (斎串?)	32.0	1.2	0.9	柁目		
539	板材	8.9	2.7	0.3	板目		木製模造品?
540	刀形の一部	8.2	3.0		柁目	両側面を丁寧に仕上げている	
541	刀形	14.9	3.8		柁目	柄の部分に切り込みを入れている	

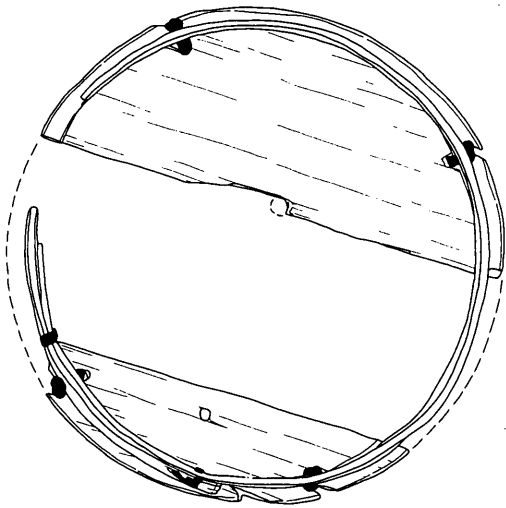
第620図 F区SX02出土遺物(6)(1/3)



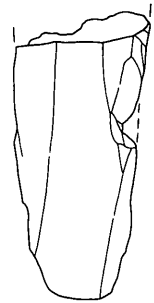
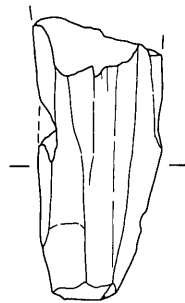
542



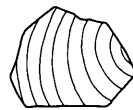
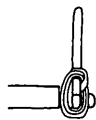
543



545



544



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
542	部材 (箱め具?)	8.2	4.0	0.6	板目	3ヶ所に釘穴で表面にケビキあり	
543	独楽	7.0		6.4	芯持		
544	杓	11.1	5.2		柁目	端部を削り出して尖らす	
545	円形曲物	19.4	3.9	0.9	不明		

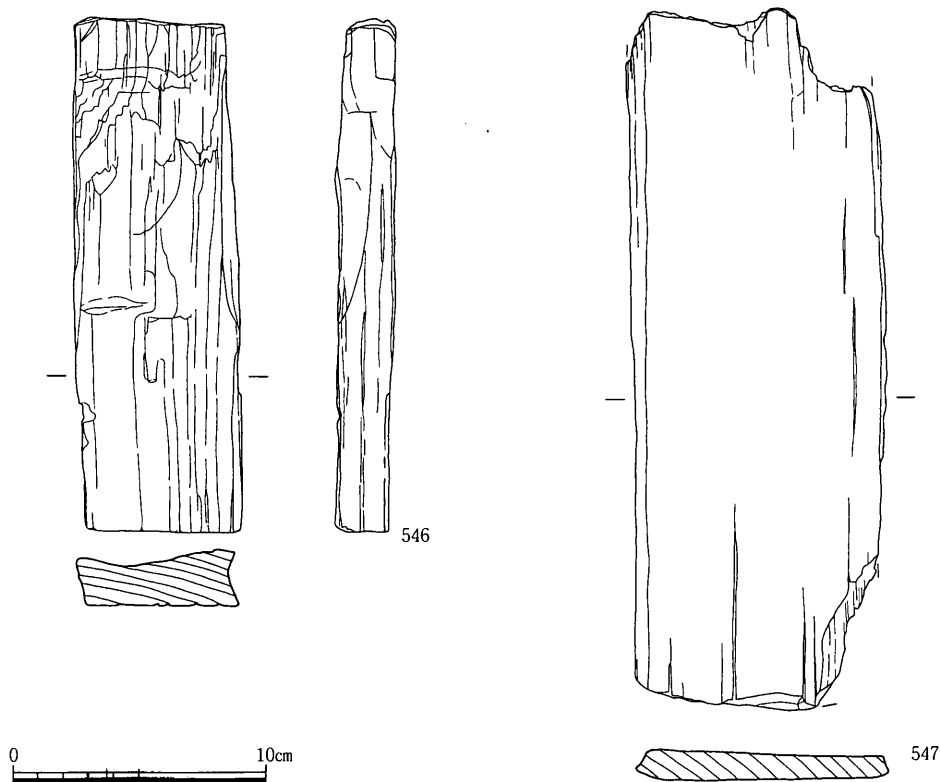
第621図 F区SX02出土遺物(7)(1/3)

め、内面に凹線が形成されている。

521～533は瓦である。521～525は軒丸瓦で、521～524はいずれも単弁六葉の瓦当文様を持つ。外区は素縁で幅は1.5cmである。蓮弁は子葉を持たない素弁で、蓮弁の最大幅は3.0cmと大形で蓮弁の先端の反りは弱い。間弁は蓮弁の先端に揃えており、先端は中房に接する程に延びている。全体にT字に近い形で、外区側は肥厚している。中房の周りには幅2mm程の圏線が1条巡っている。中房の蓮子は523に1つ痕跡が認められるのみである。521は丸瓦部との接続部分にかきべらによる刻み目が認められる。523は瓦当面の中房部から蓮弁にかけて傷があるが、おそらく范型からはずす時についた傷と思われる。524は瓦当部のみ破片である。中房には蓮子が現状では3個認められるが、元来は4個あったと思われる。蓮弁内の下部には蓮子が1個施されているのがこの瓦の大きな特徴である。525は軒丸瓦の丸瓦部で瓦当部分は剥離している。瓦当部の接続部分には、かきべらによる刻み目がある。凸面はナデ、凹面には布目圧痕が残っている。526～533は平瓦である。いずれも凸面はナデている。526は凸面の側面側に幅広のケズリを施している。529は凹面の側縁部分が突出しており、凸型の成形台による一枚作りのものと考えられる。

534～547は木製品である。534～536は斎串である。534は頭部を若干斜めに加工している。535は頭部は圭頭状で、頭部の直下に切り掛けが1箇所施されている。536は斎串の下半の部分であり、端部は剣先状に仕上げている。537は棒状木製品で、先端部が焦げている。539～541は木製模造品と考えられる。539は端部の上部を削り柄状に作り出しているものである。540は刀形の身の部分の破片と思われる。541は端部の上部を削り窪め、下部を削り柄を作り出している。刀形と考えられる。542は建築部材で留め具のようなものと考えられる。長方形の板材を使用しており、上部に2箇所、下部に1箇所の釘穴が認められる。片側にはケビキがV字形に施されている。543は独楽と考えられるものである。砲弾形で下半に向かって鉛筆状に削りだしている。上面は研磨しており、下部の突出部は欠損している。545は円形曲物である。底板は縁辺部の幅9mmほどを段状に削り出し、段の部分に側板を乗せて側板を裏側から支えている。側板は2段に綴じられており、底板との接合は段の上側と下側に穿孔し、紐で3重に綴じている。底板との接合部は円を4分割した部分に認められる。紐は樺皮を使用している。側板の直径は18.5cm、底板の直径は20.0cm、側板の高さは3.4cm、底板を含んだ高さは4.0cmである。

S X02出土の遺物の年代は須恵器の年代観から7世紀後半と考えられる。7世紀後半でも510は古い要素を、511・517は新しい要素を含んでいるものである。遺物は大部分は遺



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法的特徴	備考
546	板材	19.8	6.5	2.2	板目		
547	板材	27.2	10.0	1.2	柃目		

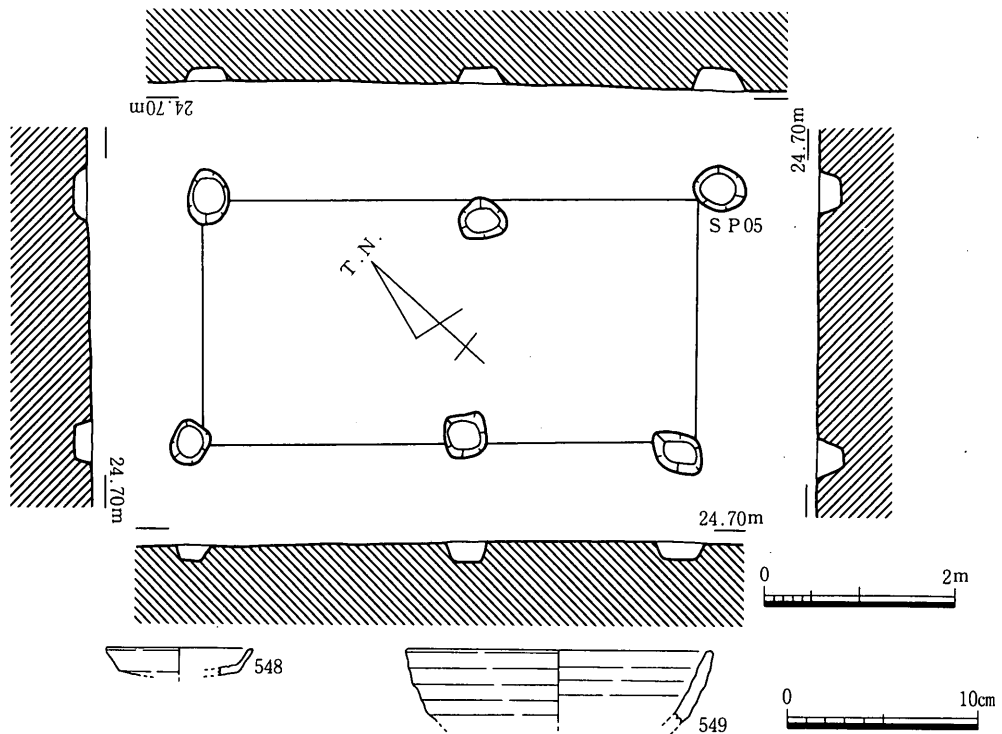
第622図 F区SX02出土遺物(8)(1/3)

構の底面に貼り付くように出土したため、一括性は高いと考えられる。このことから考えると521～524の軒丸瓦の年代は7世紀後半代となる。遺構の性格は廃棄土坑にしては大きすぎるため、現段階では不明と言わざるを得ない。

(4) 中世の遺構・遺物

S B02 (第623図, 図版81)

F1区の西側で検出した掘立柱建物である。梁行は1間で2.5m、桁行は2間で北側が5.4m、南側が5.2mで建物面積は桁行を5.3mとすると13.3㎡≒4.0坪である。柱穴はやや不整形の隅丸の方形である。深さは20～30cmで、埋土は暗褐色粘質土の単一層であった。建物の主軸方位はN-41°-Wとなっている。建物の柱穴からは土器の細片が出土したが、図化出来たものは、SP05から出土した2点である。548は土師器小皿で立ち上り部外面に



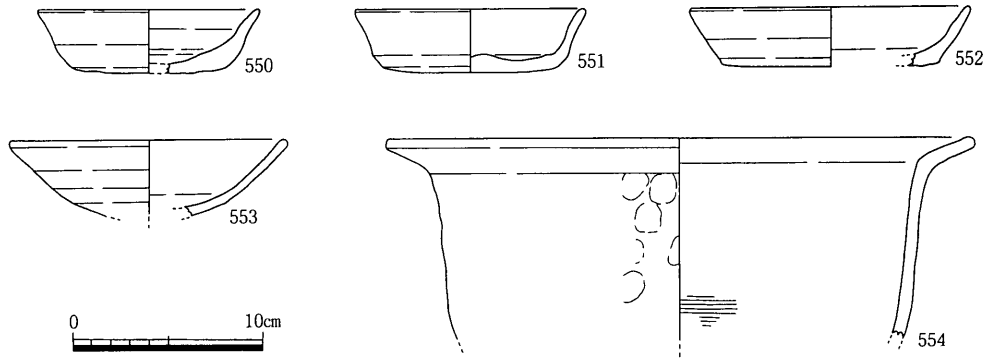
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
548	土・小皿	7.8		6.2	中・昔	良好	橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	器母
549	土・碗	15.8			中・昔	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	回転台成形	

第623図 F区SB02平・断面図(1/80), SP05出土遺物(1/4)

稜をもち、体部外面を強くナデる。549は回転台成形の土師器碗である。体部には回転ナデの稜線が残る。出土遺物より建物の年代は13世紀代と考えられる。

SD09 (第624図)

F1区の北西側で検出した溝である。北西コーナー付近から東へ2mほどで南西方向に90°屈曲しそのまま10mほど延びて収束する。全体に逆L字形をしているが、屈曲部はやや不整形となっている。幅は25~80cm、深さ20cmほどで、埋土は暗茶褐色粘質土の単一層である。埋土から古代~中世の土器が出土した。550~552は土師器杯である。550は立ち上り部内面が肥厚しており、口縁部はやや外反している。552は立ち上り部外面には明瞭な稜を形成している。553は十瓶山産の瓦質土器碗である。底部は欠損している。体部は若干下半で内湾し、上半は直線的に立ち上り、全体に開き気味の体部である。554は土師質の土鍋である。口縁部は内面に稜をもって外反する。体部外面の上半には指押しえ痕が多く残る。内面下半にはハケ目が残っている。土師器の杯は11世紀前後のものであるが、553は14世紀前後のもと考えられる。その他図化出来なかったが、14世紀前後と考えら



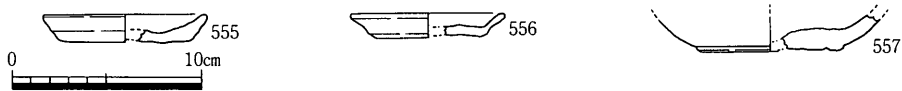
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
550	土・杯	11.4	3.3	8.0	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
551	土・杯	12.0	3.3	9.2	中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	底へラ切り	
552	土・杯	14.4	3.1	11.4	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
553	瓦質・碗	14.3			微・普	良好	灰白・灰	ナデ	ナデ		十瓶山産
554	土・土鍋	30.8			細・普	良好	橙・黒褐	ナデ	ナデ・ハケ目		金罌母・罌母

第624図 F区SD09出土遺物(1/4)

れる土師器小皿もある程度出土している。

SX03 (第625図)

F1区の南西コーナー付近で検出した遺構である。平面形は下半の膨らんだ方形となっている。長辺は4.7m, 短辺は北側で2.3m, 南側で3.3mとなっている。深さは20cm前後で底部は平坦になっている。埋土は暗茶褐色粘質土の単一層となっている。遺構の性格は不明である。555・556は土師器小皿で, 556は体部外面を強くナデている。557は土師器碗で, 高台は低くつぶれている。体部は上半が欠損しているが, 下半は丸みを帯びている。557は古代末のものと思われるが, 他は13世紀中～後半のものと考えられる。図化出来なかったが, 13世紀中～後半の土師器小皿, 碗などが出土している。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
555	土・小皿	8.5	1.5	6.9	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へラ切り	罌母
556	土・小皿	8.0	1.3	5.4	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り	
557	土・碗			7.4	中・普	良好	浅黄橙・褐灰	ナデ	ナデ		

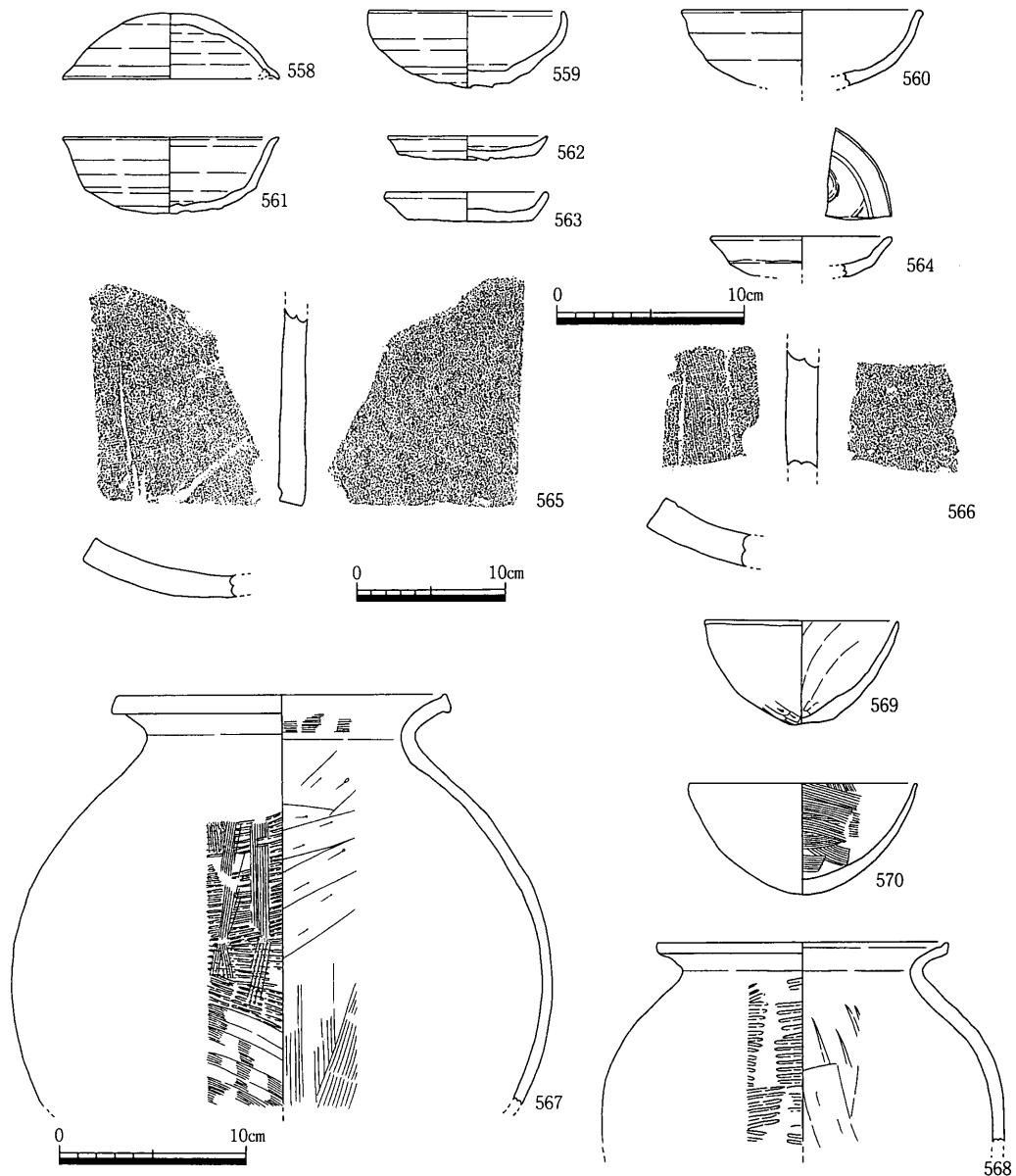
第625図 F区SX03出土遺物(1/4)

(5) 包含層出土遺物 (第626～631図)

558～566はF 1区の包含層出土の遺物である。558は須恵器の杯蓋で、口縁部内面にかえりを持つ。体部はドーム状になっている。561は丸みを帯びた底部を持ち、体部は直線的に立ち上る。562は土師器小皿で、口縁部は底部から短くつまみ出したものである。563は底部は糸切りになっている。564は青磁小皿で、口縁部は外面に稜をもって立ち上る。内面見込み部に一部であるが文様が見られる。龍泉窯系のものである。565・566は平瓦でいずれも凸面はナデ、凹面は布目圧痕の後にナデている。

567～570はF 2区の包含層出土の遺物である。567は口縁部端部を若干上下に拡張して外側に面をもつ。体部外面は叩きの後にハケ目を施しているが、下半は叩きを完全に消している。内面は上半はヘラケズリ、下半はハケ目を施している。569は鉢で、外面は底部をヘラケズリしているが、雑な作りである。570は底部は丸底で、内面は全体にハケ目を施している。

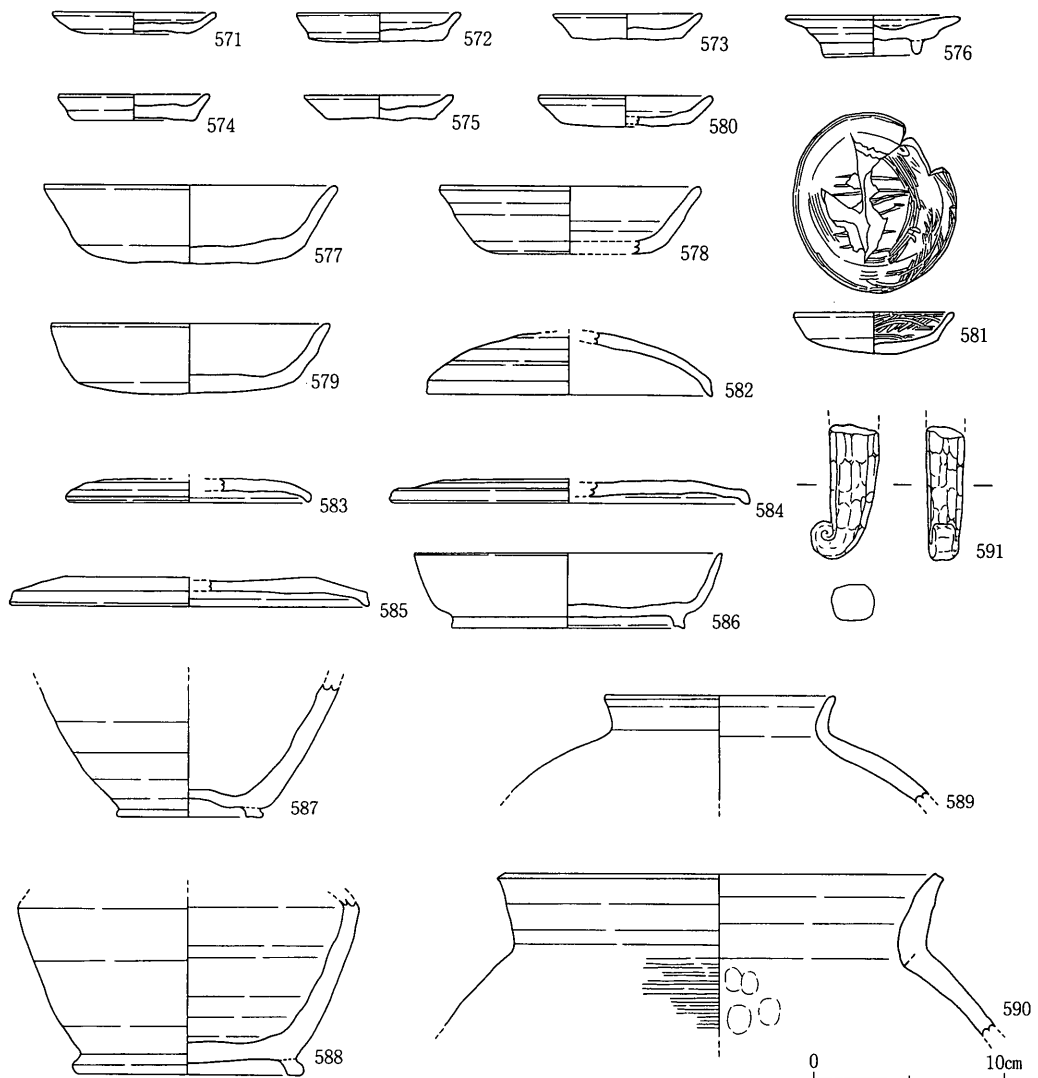
571～621はF 3区の包含層出土の遺物である。571～576は土師器小皿で、572～575は肥厚する底部から体部は短く立ち上り、外面を強くナデている。574の底部は糸切りとなっている。576は土師器の小皿に高台の付いたものである。体部は浅く、途中で外側に屈曲する。高台は立ち上り部のやや内側に付き、底部はヘラ切りとなっている。托に近いもので、10世紀後半頃のものと考えられる。577～579は土師器杯で、578は回転台成形のものである。580・581は瓦器小皿である。580は内・外面全体にナデている。581は口縁部を強くナデている。内面には口縁部に平行な暗文と、見込み部に横方向の暗文を施している。全体に銀色に近い色になっている。586は須恵器杯で、高台は立ち上り部のやや内側に付き、内面には段がある。589は灰釉陶器の壺である。口縁部は短く若干外反する。外面には全体に灰釉が付着する。590は須恵器甕で外面に平行叩きを施す。591は香炉か盤の脚と思われる。外面は面取りを行っており、先端は内側に丸めている。獣脚を表しているものと考えられる。592は軒丸瓦である。外区は素縁で幅は1.9cmである。蓮弁は単弁で最大幅は3.7cmで全体に幅広の大きな蓮弁である。蓮弁の先端の反転は小さい。蓮弁は子葉を持たない素弁である。間弁は蓮弁の先端に合わせており外区側は大きく傾斜する。また蓮弁の内部の下半に珠文を1つ配している。中房の周りには圈線が1条巡っている。中房の内部は欠損しており蓮子は不明である。中房径は3.4cmである。瓦当の上半は欠損しているが、直径は17.6cmに復元出来る。瓦当の厚さは外区部分で2.2cmである。593～609は平瓦である。593・596・607は両面に糸切り痕が残る。598は凸面に平行叩きを施している。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
558	須・杯蓋	11.6	3.4		微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
559	須・杯	10.4	4.0	4.0	中・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
560	須・杯	13.0			中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
561	須・杯	11.6	4.0	9.2	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り	
562	土・小皿	8.6	1.3	7.3	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	赤色顔料が付着
563	土・小皿	8.7	1.5	6.7	中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	底系切り	
564	甕・小皿	9.8			微・普	良好	オリブ灰	ナデ・ケズリ	ナデ	内面コールドール付着	龍泉窯
567	弥・壺	17.6			中・普	良好	灰・コブイ橙	叩き→ハケ目	ハケ目→ナデ・ケズリ	細かい叩き	
568	弥・甕	15.6			粗・普	良好	明赤褐	叩き	ナデ・ケズリ		金罨母
569	弥・鉢	10.3	5.6		中・普	良好	明赤褐	ナデ・ケズリ	板ナデ	底外面指で器壁を削る	罨母
570	弥・鉢	12.3	6.0		中・普	良好	橙	ナデ	ハケ目	丸底	罨母

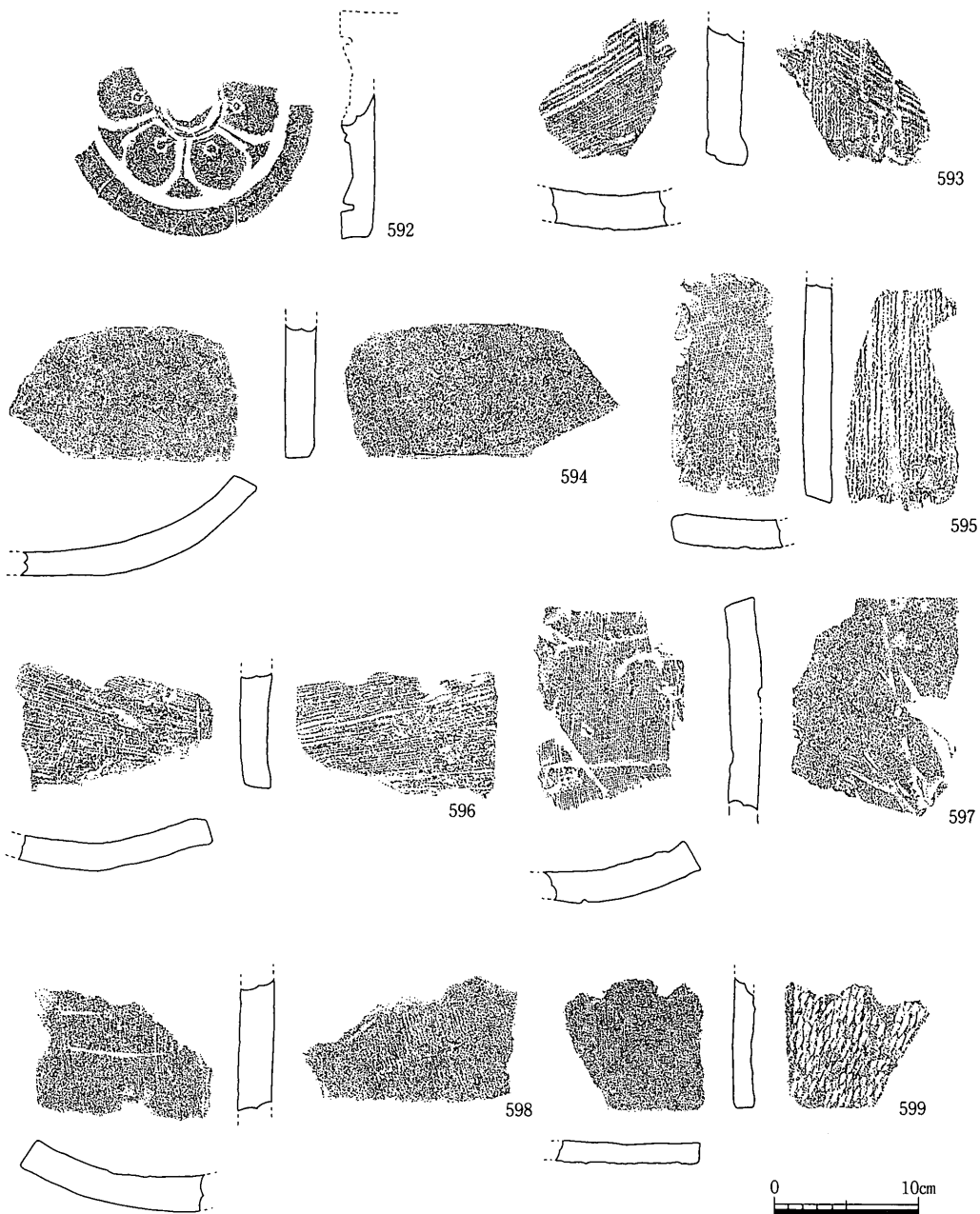
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
565	平瓦	1.7	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	16	中・普	灰白	良好		9.3
566	平瓦	2.4	ナデ	布目圧痕→ナデ	1		細・普	灰白	良好		7.5

第626図 F 1・2区包含層出土遺物 (1/4, 1/5)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
571	土・小皿	8.6	1.1	5.5	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
572	土・小皿	8.7	1.4	7.1	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
573	土・小皿	7.8	1.3	5.7	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
574	土・小皿	8.0	1.3	6.4	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ナデ	底糸切り	
575	土・小皿	7.9	1.3	5.8	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板状圧痕	
576	土・高台皿	9.2	2.1	5.1	中・少	不良	淡黄	ナデ	ナデ		
577	土・杯	15.5	3.9	10.6	中・普	不良	灰白	ナデ・ケズリ	ナデ	底ヘラ切り→ケズリ	
578	土・杯	13.5	3.4	8.6	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	回転台成形	
579	土・杯	14.7	3.6	11.0	中・普	不良	暗灰黄・橙	ナデ・ケズリ	ナデ	底外面ヘラ削り	
580	瓦・小皿	8.9	1.6	6.8	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→板ナデ	
581	瓦・小皿	8.6	2.1	7.0	精緻	良好	暗灰	ナデ	ミガキ		
582	須・杯蓋	15.0			中・普	良好	灰白	ケズリ・ナデ	ナデ		
583	須・杯蓋	12.6			精緻	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
584	須・杯蓋	18.7			精緻	良好	暗青灰	ケズリ・ナデ	ナデ		
585	須・杯蓋	19.0	1.4		細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
586	須・杯	16.2	3.9	12.2	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
587	須・壺			7.7	中・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ	高台外面にハケ目	
588	須・壺			12.2	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	外面に自然釉	
589	灰・壺	12.0			微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
590	須・甕	22.5			中・普	良好	灰	ナデ・叩き	ナデ		
591	土・獸足				中・普	良好	橙	ナデ		先端を内側に丸めこむ	金銀母

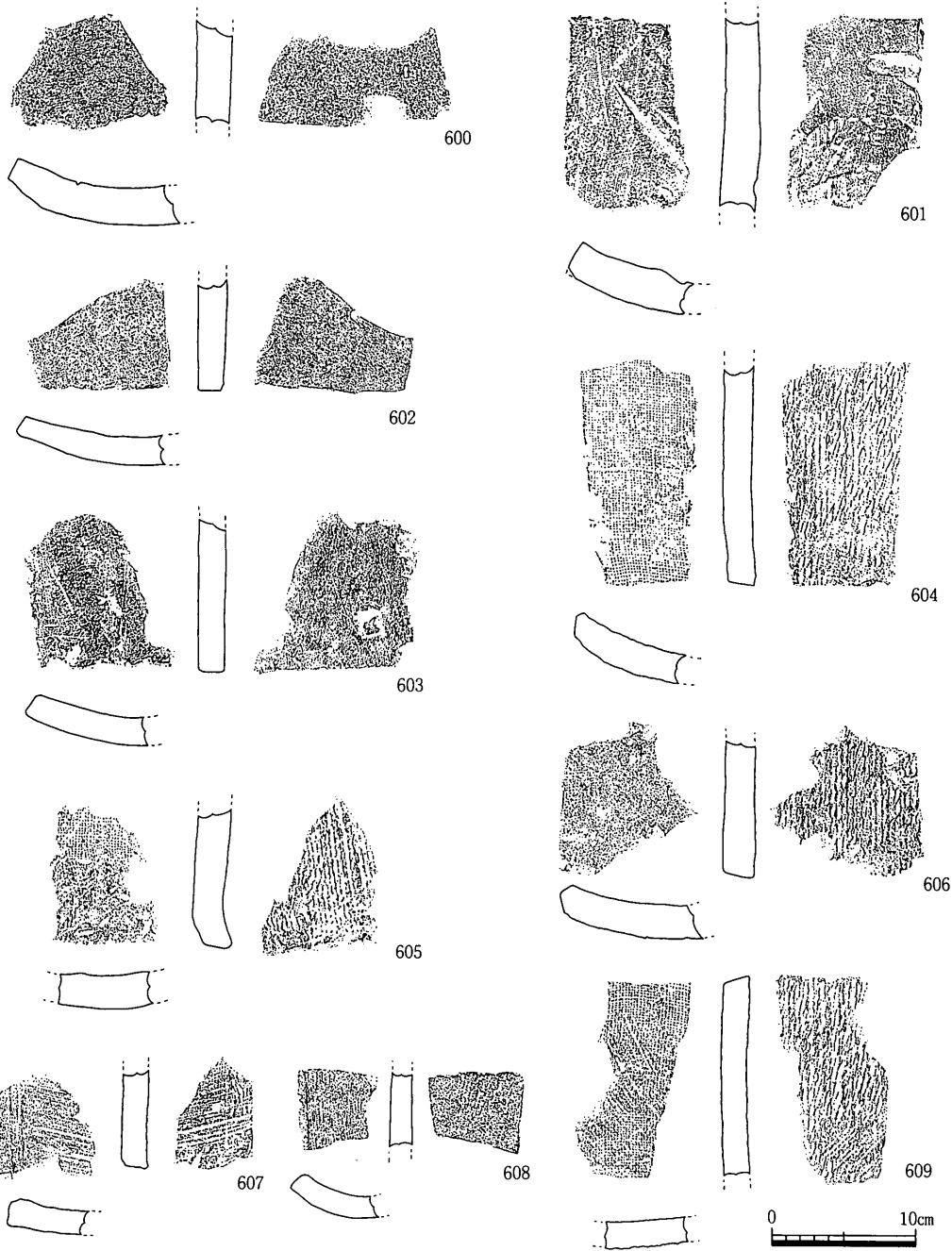
第627図 F 3 区包含層出土遺物 (1) (1 / 4)



遺物番号	直径	中房径	蓮子数	内区径	弁幅	弁数	外区幅	外区内縁幅	外区外縁幅	外区外縁高	形態・手法の特徴	備考
592	17.6	3.4	4	15.7	3.7	6	1.9		1.9	2.2	蓮子内に珠文を1個配す	

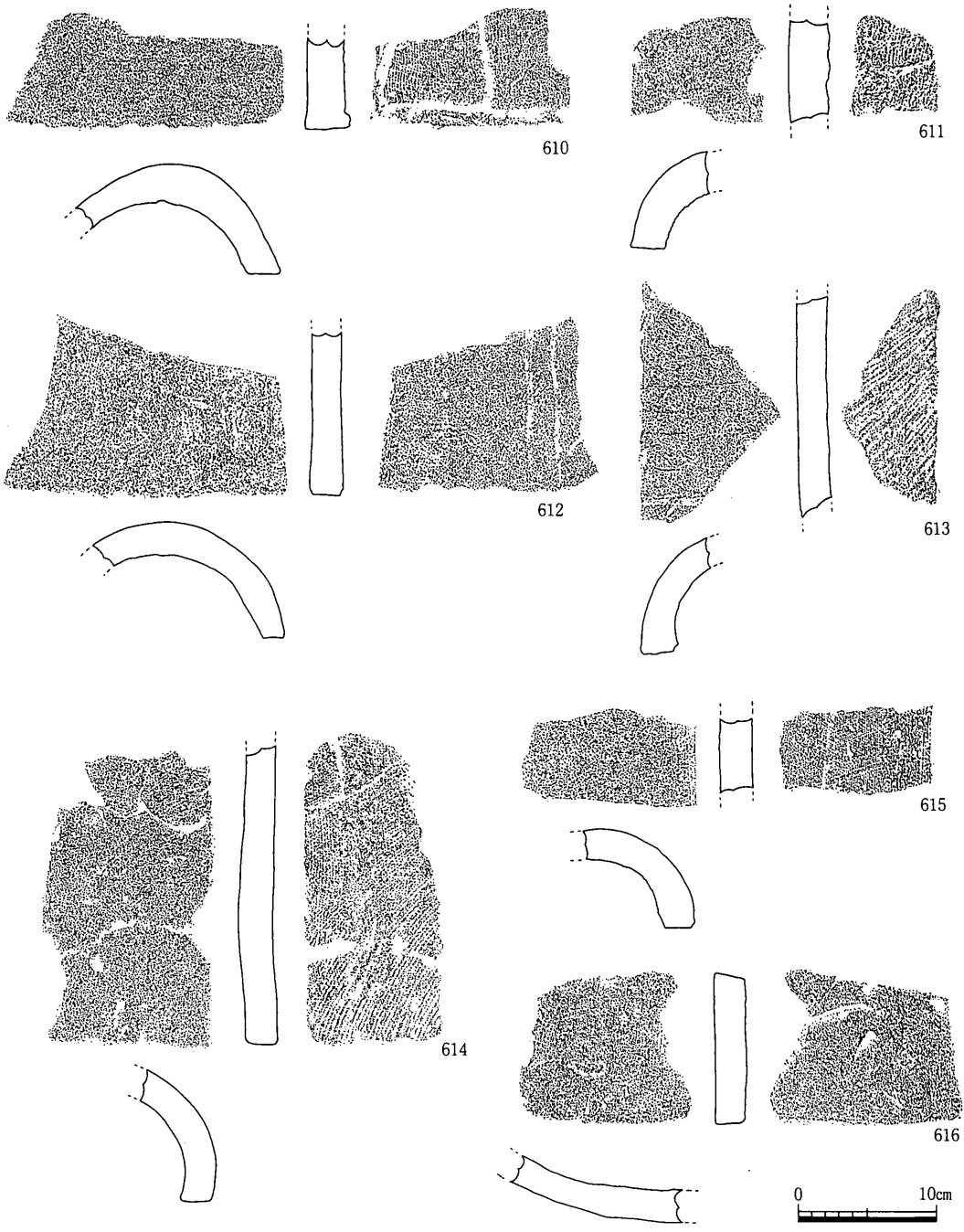
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
593	平瓦	2.3	縄目叩き	布目圧痕		1 6	粗・普	灰白	良好	凹凸面糸切り痕	8.6
594	平瓦	2.0	ナデ	ナデ		1 1 6	細・普	灰白	良好		9.0
595	平瓦	2.0	縄目叩き	布目圧痕		2 1 7	中・普	灰白	良好		14.6
596	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕→ナデ		2 1 6	中・普	灰白	良好	凹凸面糸切り痕	7.8
597	平瓦	2.1	板ナデ	布目圧痕		1 1 6	中・多	灰	良好		14.5
598	平瓦	2.3	平行叩き→ナデ	布目圧痕		1	中・普	灰	良好		8.6
599	平瓦	1.3	縄目叩き	布目圧痕		1 1 6	中・普	浅黄	良好	端面布目圧痕・一枚作り	9.1

第628図 F 3区包含層出土遺物(2)(1/5)



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
600	平瓦	2.4	ナデ	ナデ	6		中・普	灰白	良好	一枚作り	6.6
601	平瓦	2.5	ナデ	布目圧痕	1		中・普	灰白	良好		12.7
602	平瓦	2.1	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	16	中・普	灰白	良好		7.3
603	平瓦	1.9	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	16	粗・普	灰・灰白	良好		10.4
604	平瓦	1.9	縄目叩き	布目圧痕	6	16	中・普	黒褐	良好		15.0
605	平瓦	2.3	縄目叩き	布目圧痕		19	中・普	黄灰	良好		9.4
606	平瓦	2.1	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	6	16	細・普	灰黄	良好		8.9
607	平瓦	1.7	板ナデ	板ナデ	2	18	中・普	黄灰	良好	凹凸面糸切り痕	6.9
608	平瓦	1.5	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	2		細・普	灰	良好	凹面糸切り痕	5.2
609	平瓦	1.6	縄目叩き	布目圧痕		16	中・普	暗灰	良好	凹凸面糸切り痕、縦・斜位の叩き	13.8

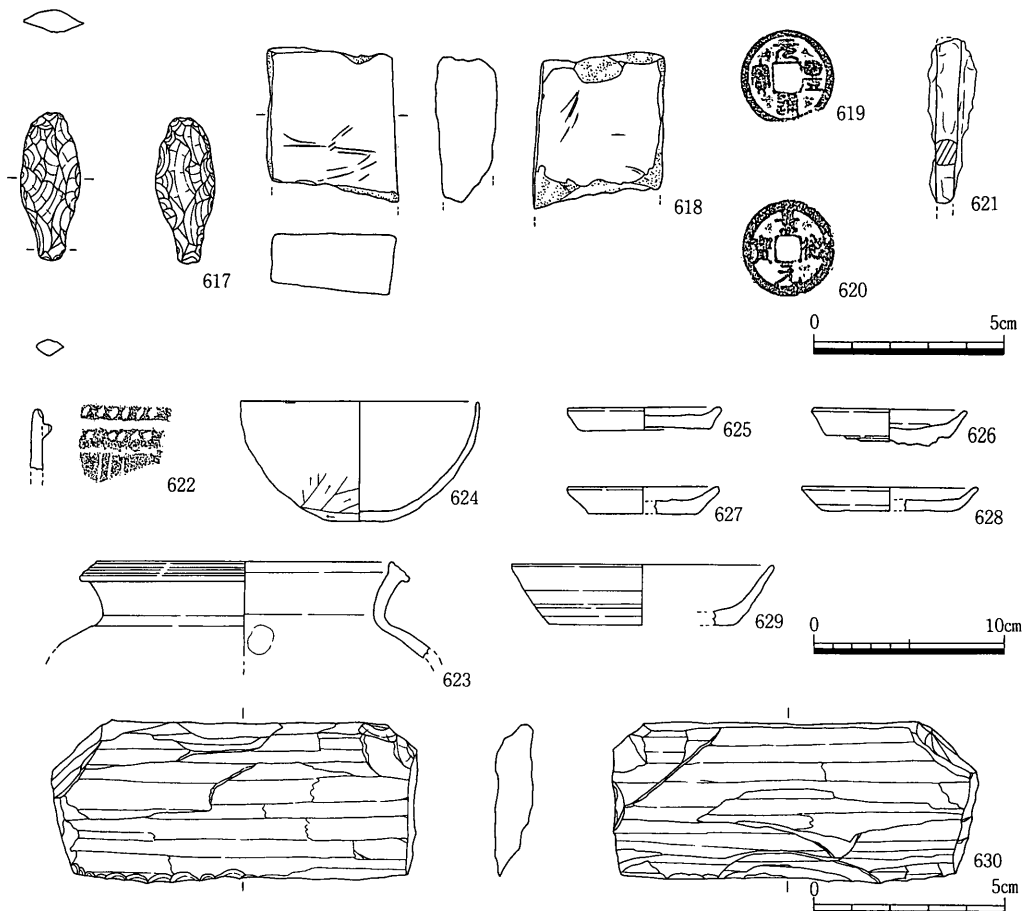
第629図 F 3区包含層出土遺物(3)(1/5)



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
610	丸瓦	3.2	ナデ	布目瓦痕	1	16	粗・普	にぶい黄橙	良好	凹面布端痕・糸切り痕有り	6.3
611	丸瓦	2.8	ナデ	布目瓦痕	1	1	中・普	黄橙	不良	凹面糸切り痕	7.3
612	丸瓦	2.3	ナデ	布目瓦痕→ナデ	1	16	粗・少	灰白	良好	凹面模骨痕	11.7
613	丸瓦	1.8	ナデ	布目瓦痕	1	1	粗・多	灰白	良好	凹面糸切り痕	6.0
614	丸瓦	2.4	ナデ	布目瓦痕	1	16	粗・普	灰	良好	凹面糸切り痕	21.4
615	丸瓦	2.3	ナデ	布目瓦痕	1	1	中・普	灰	良好	凹面糸切り痕	7.4
616	道具瓦	2.4	板ナデ	布目瓦痕→ケズリ		16	中・普	灰白	良好		10.8

第630図 F3区包含層出土遺物(4)(1/5)

599は全体に扁平で端面にまで布目圧痕が及んでいることから、一枚作りで製作されたことがわかる。凸面には粗い縦位の縄目叩きが施されている。600も側面の形状から一枚作りによるものと思われる。601は凹面にヘラ工具による圧痕が見られる。604は凸面に縦と斜め方向の縄目叩きを重ねている。605は乾燥時に瓦自身の重みで端面付近が屈曲したも



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
617	石鏝	3.3	1.6	0.5	3.2	サヌカイト		
618	砥石	3.3	3.7	1.5	30.9	流紋岩		
630	打製石廬丁	9.6	4.1	1.0	67.9	結晶片岩		

遺物番号	材質	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	形態・手法の特徴	備考
619	銅	古銭(元豊通宝)	2.5	2.5	0.1	2.0	1078年初鋳	
620	銅	古銭(景徳元寶)	2.4	2.4	0.1	1.9	1004年初鋳	
621	鉄	鉄釘	3.7	0.7	0.8	5.9		

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
622	縄・深鉢				中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
623	弥・盞	15.4			中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
624	弥・鉢	12.4	6.0	3.6	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	ナデ		金製母
625	土・小皿	8.0	1.1	7.0	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
626	土・小皿	8.2	1.8	6.5	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り一板状圧痕	
627	土・小皿	8.0	1.4	5.8	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
628	土・小皿	9.4	1.2	7.4	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
629	土・杯	13.6	3.2	9.8	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	回転台成形	

第631図 F 3・4区包含層出土遺物(1/2, 1/4)

のと思われる。609は両面に糸切り痕が残り、凸面には縦と斜め方向の縄目叩きを施している。610～615は丸瓦である。610は凹面に糸切り痕と布端痕が残る。612は凹面に模骨痕が残る。613・614は凹面に糸切り痕が残る。616は道具瓦である。凹面側から見て上下の面は端部整形しており、凹面側から見て上部右側の角から斜め下に鋭角に三角形に端部整形を行なっている。617は凸基有茎の石鏃である。全長は3.25cmで、重さは3.2gとなっている。先端部はやや鋭利さに欠け、茎部はしっかりとした作りになっている。サヌカイト製である。618は砥石で直方体をしている。3面使用しているが特に側面を頻繁に使用していたものである。619は元豊通宝、620は景德元寶で両者とも北宋銭である。

622～630はF4区の包含層出土の遺物である。622は縄文時代晩期の深鉢である。口縁部端部に刻み目を施し、端部から7mmほど下に刻み目突帯を1条貼り付けている。623は口縁部端部を上下に拡張している。629は土師器杯で、回転台成形のものである。630は打製石庖丁で、平面形は長方形で下部に小さな剥離を加えて刃部を作り出している。結晶片岩製である。

3. 小結

F区は縄文時代晩期から中世にかけての遺構・遺物を検出した。

縄文時代はF2・4区で、晩期の遺物と土坑などの遺構を検出した。県内で旧河道内や包含層で縄文時代の遺物の発見例は多数あるが、それ以外からの縄文時代の遺構や遺物の類例はまだ少なく、住居跡は発見出来なかったがそれ以外の生活痕跡を発見出来たことは貴重な資料と言える。

弥生時代はIV期とV期の遺構・遺物を検出した。IV期では竪穴住居跡と製塩土器の土坑が注目される。特に当該期の製塩土器の出土例はまだ少なく貴重な資料と言える。また、海岸部ではなく、前田東・中村遺跡のような内陸部で出土したということは、塩の流通を考える上で重要である。またV期では旧河道SR01から多量の土器が出土した。旧河道からの出土とはいえ、V期後半～終末にかけての高松平野東部の土器群を考える上でも重要な資料と言える。この旧河道からはIV期の土器も少ないながら出土している。

古墳時代では明瞭な遺構・遺物は検出できなかった。

古代では、F1区の落ち込み状遺構SX02が注目される。遺構内より7世紀後半と考えられる土器とともに軒丸瓦を含む瓦類が出土した。特に軒丸瓦はいわゆる百済系の単弁のもので、蓮弁の中に珠文を配するものがあるなど、本遺跡の北側の宝寿寺で出土した軒丸

瓦と同文である。この瓦はF 3区の包含層からも出土している。またF 3区では7世紀後半あるいは10世紀後半～11世紀と考えられる平窯を検出した。窯は調査区内では1基のみであったが、集落内で瓦あるいは土器の生産を自給していた可能性がある。しかしこの時期の遺構・遺物はF区では少なくむしろE区のほうに多いが、このことは生産域と生活域が集落内でしっかりと分かれていたことを示唆するものと言えよう。

中世の遺構・遺物はF 1区の上面に見られた程度で量的には少ない。

以上、F区の概要を述べてきた。谷部の旧河道の周辺部に遺構が見られたが全体に遺構は東へは広がらずに、調査区の南北に広がるものと思われる。西側は丘陵部で、この丘陵の上部はすでに削平されており、調査段階での遺構の広がりはこの丘陵の裾部分と尾根を越えた丘陵の西斜面に展開している。

(註1) 1989年7月21日に花園大学前中一晃教授に資料採取・測定依頼したものである。

第7節 G調査区

1. 調査区の概要（第362～634図）

南北幅75～90m，東西幅40m程で北東側が長く突出するG調査区は，道路センターで南北に2つの小調査区に分けて調査を行なった。南北方向はほぼ平坦であるが，北端部やや手前から傾斜し70cmほど高くなる。東西方向は西から東に向かって緩やかに下っており，比高差は1mほどである。現地表面は北西側で標高25m前後，南西側で標高24m前後，南東部で標高23m前後となっている。

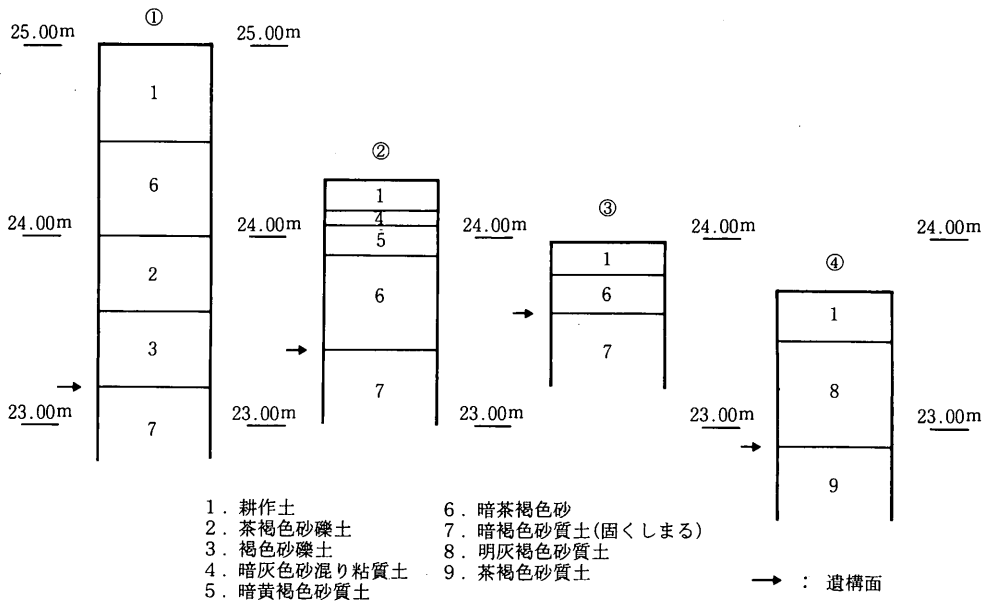
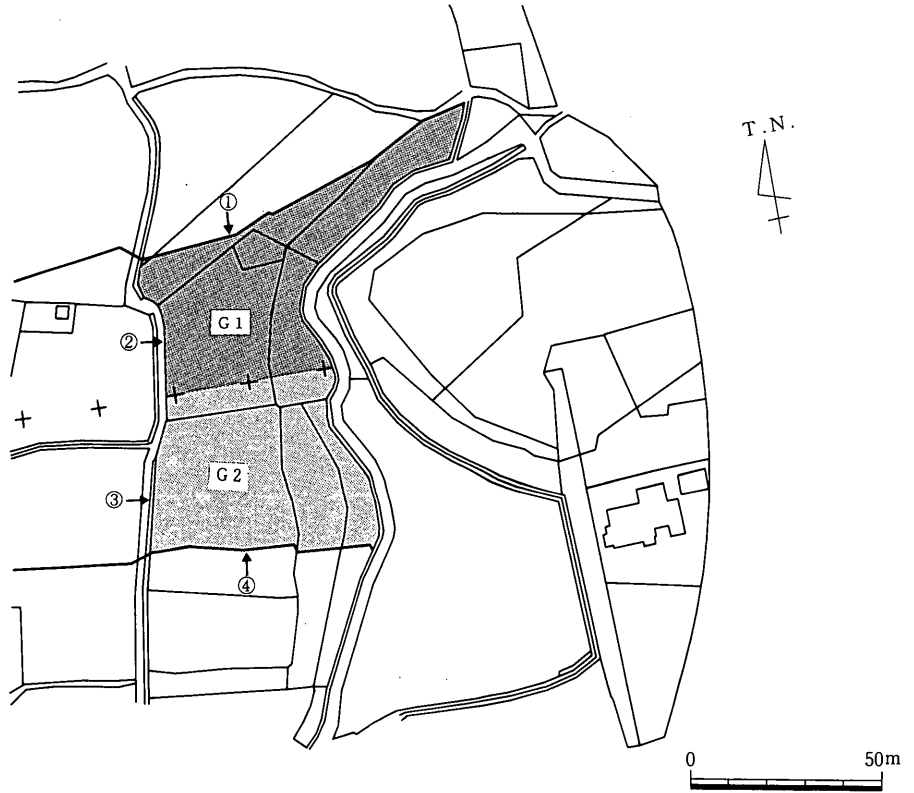
本調査区は，東側の丘陵とF3区の丘陵部にはさまれた狭い谷間部に相当する。その谷間部に旧河道が流れるという状況である。遺構面は耕作土下40cm程であるが，河の浸食，堆積などで遺構検出面は一定でない。遺構面は褐色系の砂質土が中心である。地山はグライ化した花崗岩質の土であるが，旧河道の多方向からの堆積と扇状地の斜面堆積のため遺構の側面の土は多様であり，調査区全体で複雑な堆積となっている。

2. 調査の成果

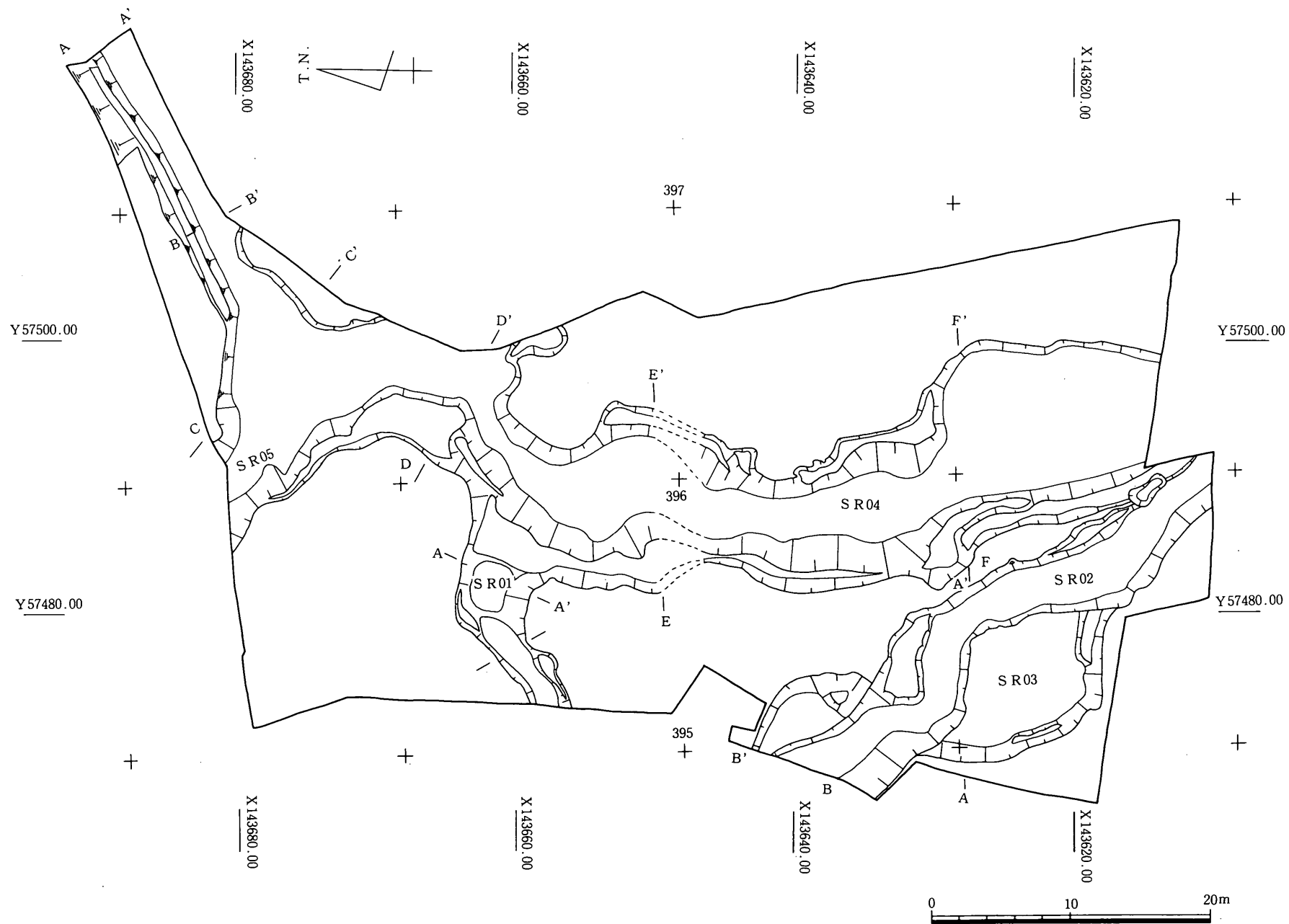
(1) 縄文時代の遺構・遺物

S R01（第635・636図，図版91）

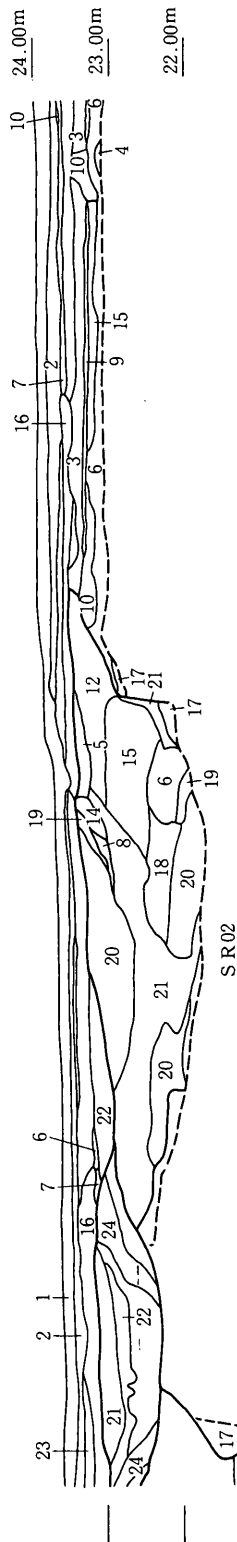
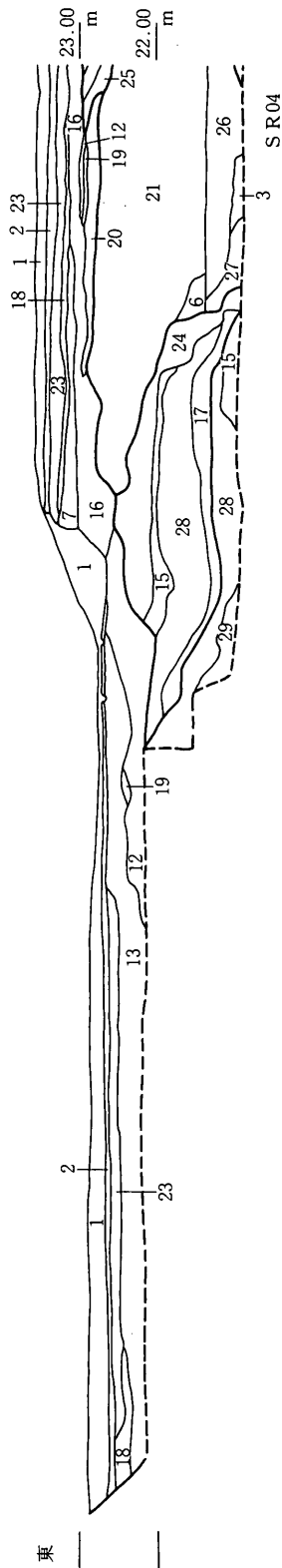
G1区の南西部から東側へ若干屈曲し，S R04に切られる旧河道である。幅は2.5～6.5mで，東に向かって広がっており，掘り込み部の傾斜も緩くなっている。深さは1m前後で東側が一段深くなっており，S R04との交点部分はテラス状になっている。埋土は下部には細かい礫を含む砂層が中心で，上部は粘土がラミナ状に入る砂質土が中心となっている。西側になるほど灰色系の粘土の堆積が厚くなっている。1は深鉢である。口縁部端部は先細りとなり，内面側に傾斜する面をもつ。体部は現存部では直線的である。全体に摩滅しているが文様などはない。粗い胎土や色調から縄文土器と考えられる。2は木製品である。一部欠損しているが一端が剣先状になっている。鋤などの農耕具の形状に近いが，柄との装着部分がない。断面は中央部が厚くなっている。人為か自然のものか不明であるが釘穴大の穴が多数開いている。ここに柄を紐で固定してスコップ状にしていた可能性もあるが詳しい用途は不明である。他に遺物は出土せず，自然河川に混入した遺物と考えられる。



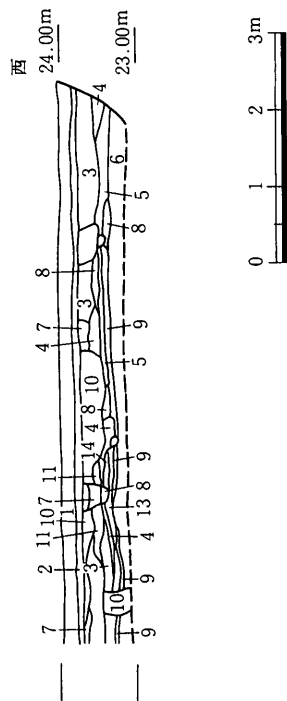
第632図 G区小調査区割図 (1/2000), 基本土層柱状図 (1/40)



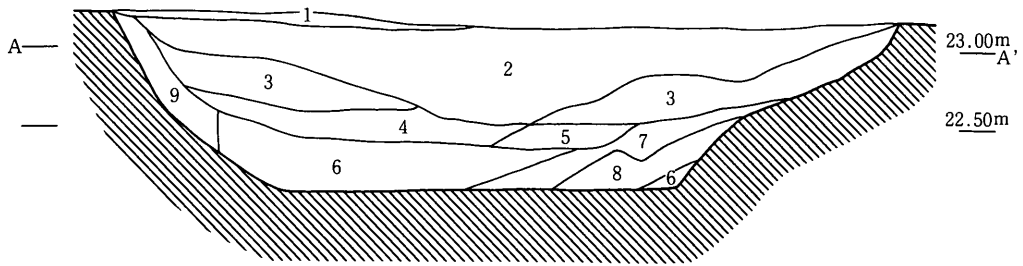
第633図 G区遺構平面図 (1/400)



- | | |
|-------------------|------------------------|
| 1. 耕土 | 16. 明灰褐色砂質土 |
| 2. 床土 | 17. 青灰色粘質土 |
| 3. 明茶褐色砂質土(固くしまる) | 18. 明灰色砂質土 |
| 4. 暗茶褐色砂質土 | 19. 暗褐色細砂 |
| 5. 暗茶褐色粘質土 | 20. 茶褐色砂質土(細礫含む) |
| 6. 暗褐色粘質土(固くしまる) | 21. 黒褐色粘土と灰色砂の互層(ラミナ状) |
| 7. 暗褐色砂質土 | 22. 暗褐色砂質土 |
| 8. 褐色砂質土 | 23. 淡黄褐色砂質土 |
| 9. 黄褐色粘質土 | 24. 暗灰褐色砂質土 |
| 10. 黒褐色砂質土(固くしまる) | 25. 灰色砂質土混り粘質土 |
| 11. 暗黒褐色砂質土 | 26. 褐色粘土混り砂質土(細礫含む) |
| 12. 茶褐色砂質土 | 27. 褐色粘土混り粘質土 |
| 13. 明褐色砂質土 | 28. 暗灰色砂質土 |
| 14. 明褐色細砂 | 29. 黄褐色砂質土 |
| 15. 暗灰色砂混り粘質土 | |



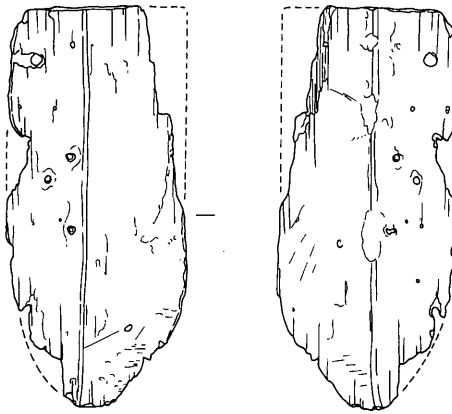
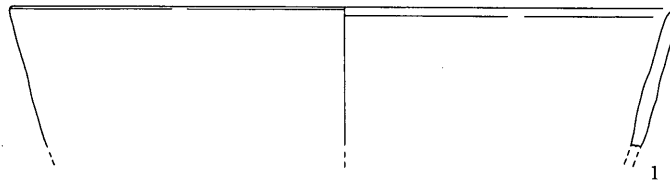
第634図 G区南壁断面図 (1/100)



1. 茶褐色砂質土(鉄分含む)
2. 褐色粘土混り砂質土(茶褐色粘土がラミナ状に混る)
3. 暗褐色細砂
4. 褐色砂混り粘質土
5. 茶褐色細砂
6. 明褐色砂質土
7. 灰色砂
8. 灰色砂混り粘質土
9. 青灰色粘土



第635図 G区SR01断面図 (1/50)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1	縄・深鉢	34.9			粗・昔	良好	にぶい黄橙	不明	不明		

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
2	用途不明	20.1	9.4	1.0	板目	穿孔4ヶ所	

第636図 G区SR01出土遺物 (1/4)

(2) 弥生時代の遺構・遺物

S R 02 (第637～715図, 図版91～94)

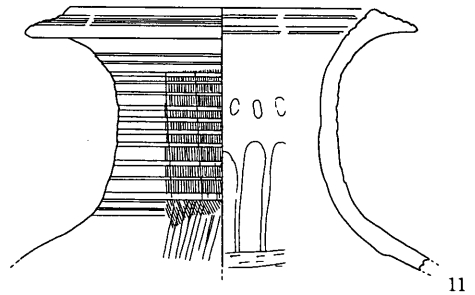
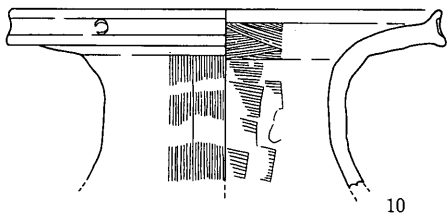
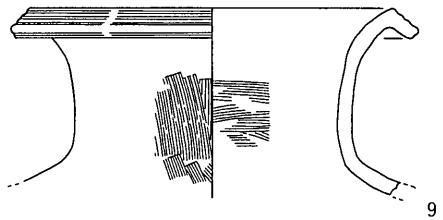
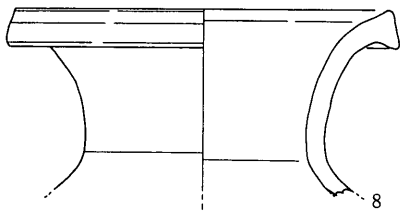
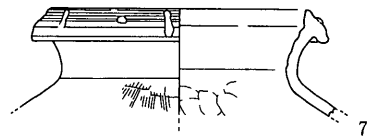
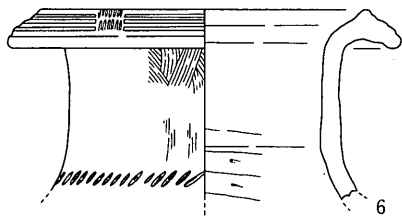
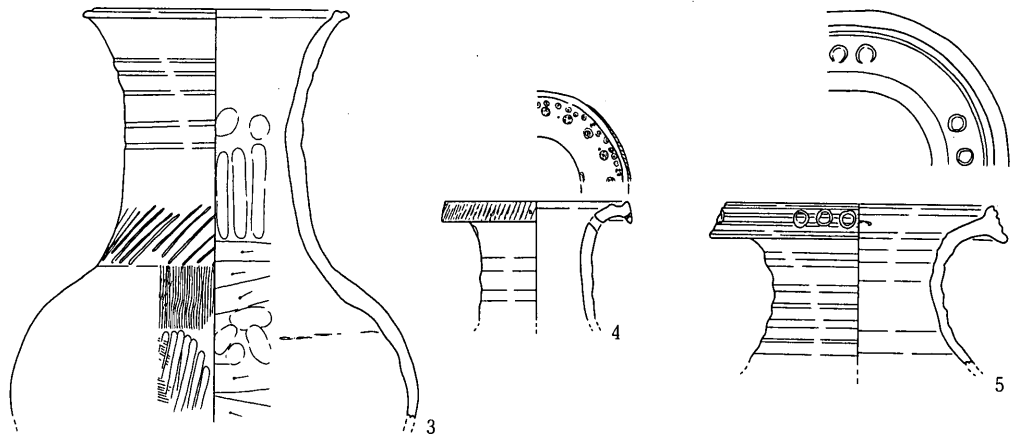
G 2 区の西辺中央部から南辺中央部にかけて、若干蛇行しながら流れる旧河道である。河の検出面は現地表面から40cmほど下であった。河幅は3.5～7.6mで中央部が狭くなっている。また中央部から西側にかけての北岸部分はテラス状になっており、河底部分は抉るように砂質土が堆積している。さらに南辺部分は一部南側へ拡張したところ、S R 04に切られていることが確認された。深さは0.8～1.5mで底のレベルは部分的に凹凸があるもののほぼ一定である。埋土は褐色系の砂質土が中心になっている。埋土の下半部分から多量の弥生時代終末期を中心とする土器・木器・石器などの遺物が出土したが、特に土器はほとんどローリングを受けておらず残りは非常に良好であったことから、この河は一度に埋ったものと思われる。

3～96は壺である。主に頸部から口縁部の形態により分類した。

3は長い頸部が緩やかに外反してそのまま口縁部に至る。口縁部端部は上側にナデにより窪んだ面をもつ。頸部外面には凹線が5条巡り、頸部下半にはヘラ圧痕文が施される。

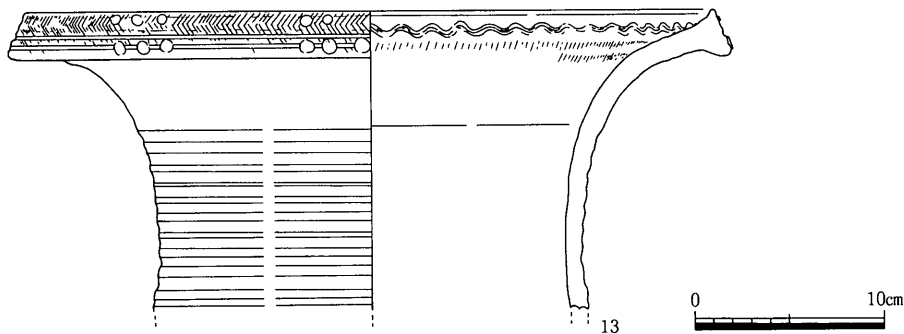
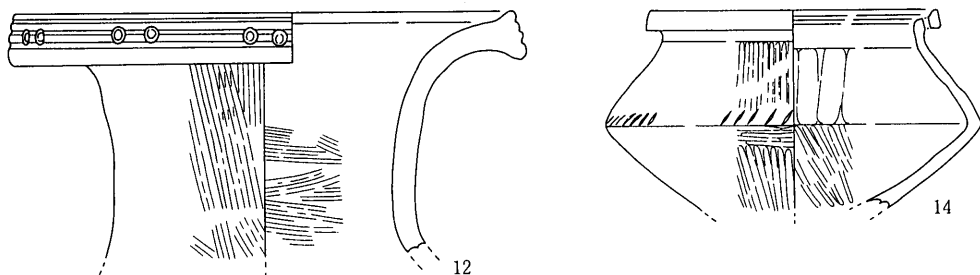
4～14は口縁部端部を拡張して面を持たせるものである。4・5・7・10・12・13は口縁部端部を上下に拡張するものである。4は口縁部端部下半に8個の穿孔が、頸部上部に2個1単位の穿孔が2単位で合計4個の穿孔が施されている。また口縁部内面には大小の竹管文が施され、口縁部外面の面にはヘラ状工具による刻み目が巡らされている。5は口縁部外面に3個1単位の竹管文が4単位で合計12個、口縁部内面に2個1単位の竹管文が4単位で合計8個がそれぞれ施されている。頸部には凹線が6条巡る。7は口縁部外面に円形浮文と棒状浮文を貼りつけている。10・12は口縁部外面に竹管文を施す。13は口縁部外面に綾杉文を施した後に沈線を2条巡らせ、最後に上下2段に円形浮文を貼りつけている。内面には櫛描き波状文とヘラ状工具による線刻を入れている。8は口縁部端部を下方に拡張している。6・9は口縁部端部の下端を斜め下方に拡張している。11は口縁部端部の下端を横へ拡張している。14は口縁部端部を上方に拡張しており口縁部に1箇所穿孔を施している。体部中央で強く屈曲し、算盤玉のような形状をしている。体部中央に列点文を施し、外面と内面下半にヘラミガキを施している。

15～21は長い頸部から口縁部が鋭く屈曲するものである。17は頸部の一部分であるが、外面にヘラ状工具により絵画と思われるものを描いている。絵画の内容は不明であるが、外側に丸く90°に屈曲する2本線を描き、中に横方向の線を現存で3本引いている。18は



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
3	弥・壺	14.0			中・普	良好	橙	片・ハケ目・ミガキ	ナデ・ケズリ		
4	弥・壺	9.6			微・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ		
5	弥・壺	15.7			細・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	口縁両面に竹管文	
6	弥・壺	17.0			中・普	良好	明赤褐	ハケ目→ナデ	ナデ・ケズリ		
7	弥・壺	13.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ		金雲母
8	弥・壺	19.6			粗・普	良好	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		金雲母
9	弥・壺	19.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ・ハケ目		
10	弥・壺	22.6			粗・普	良好	浅黄橙	ハケ目	ハケ目		
11	弥・壺	16.0			粗・普	良好	灰黄	ハケ目・ミガキ	ナデ・ケズリ		

第637図 G区SR02出土遺物(1)(1/4)

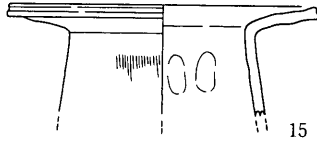


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
12	弥・甗	26.2			粗・普	良好	橙	ハケ目	ハケ目		
13	弥・甗	36.4			中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		
14	弥・甗	15.6			細・普	良好	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ	内面に*状の細い板付*	金雲母

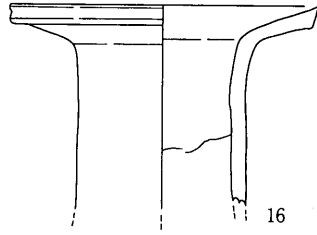
第638図 G区SR02出土遺物(2)(1/4)

体部はほぼ球形で底部はしっかりとした平底となる。頸部は若干外反し、口縁部は横に開く。外面は全体にハケ目を施し、内面は体部と頸部の接続部にハケ目を、体部下半にはヘラケズリを施している。19は口縁部を強くナデている。21は口縁部は長く斜め上方に立ち上がる。体部と頸部の外面にハケ目を施した後にはヘラミガキを少々施している。

22～37は長い頸部から口縁部が丸みをもって立ち上がるものである。22は体部長と頸部長はほぼ等しく、体部最大径と口径もほぼ等しい。頸部外面にはハケ目の上に3個の竹管文が施されている。底部は平底で体部外面には丁寧にヘラミガキを施している。23・29・30の頸部は直線的に立ち上がり、26・29の頸部径は小さくなっている。26は頸部外面に幅広のヘラ圧痕文がある。29・30は口縁部が大きく開くが、31は口縁部の開きは小さい。32は体部がやや扁平で、底部内面には指押さえが顕著で器壁が窪んでいる。底部は丸底になっている。33は体部が縦長で底部はしっかりとした平底である。34は口縁部端部を上方へ若干つまみ上げている。頸部と体部の接続部には沈線状の段が生じている。体部内面には上部からヘラケズリが施されている。36は典型的な長頸壺で、口縁部内面にもハケ目がある。口縁部端部は強くナデることにより、下方へ若干拡張している。体部はほぼ球形で内面は



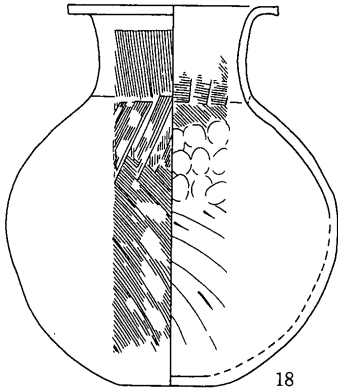
15



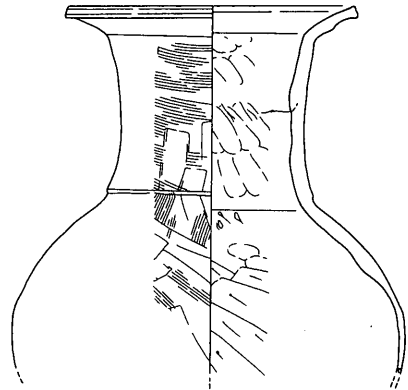
16



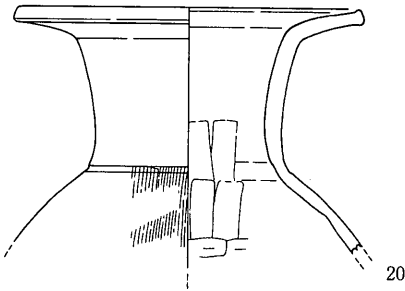
17



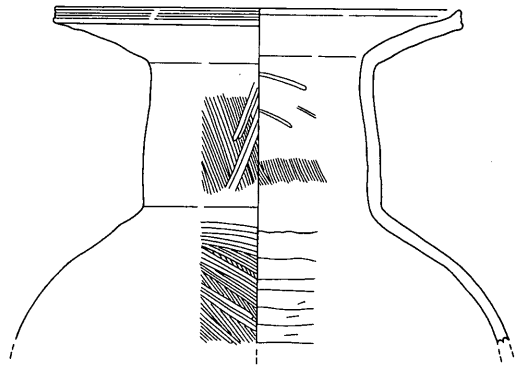
18



19



20



21

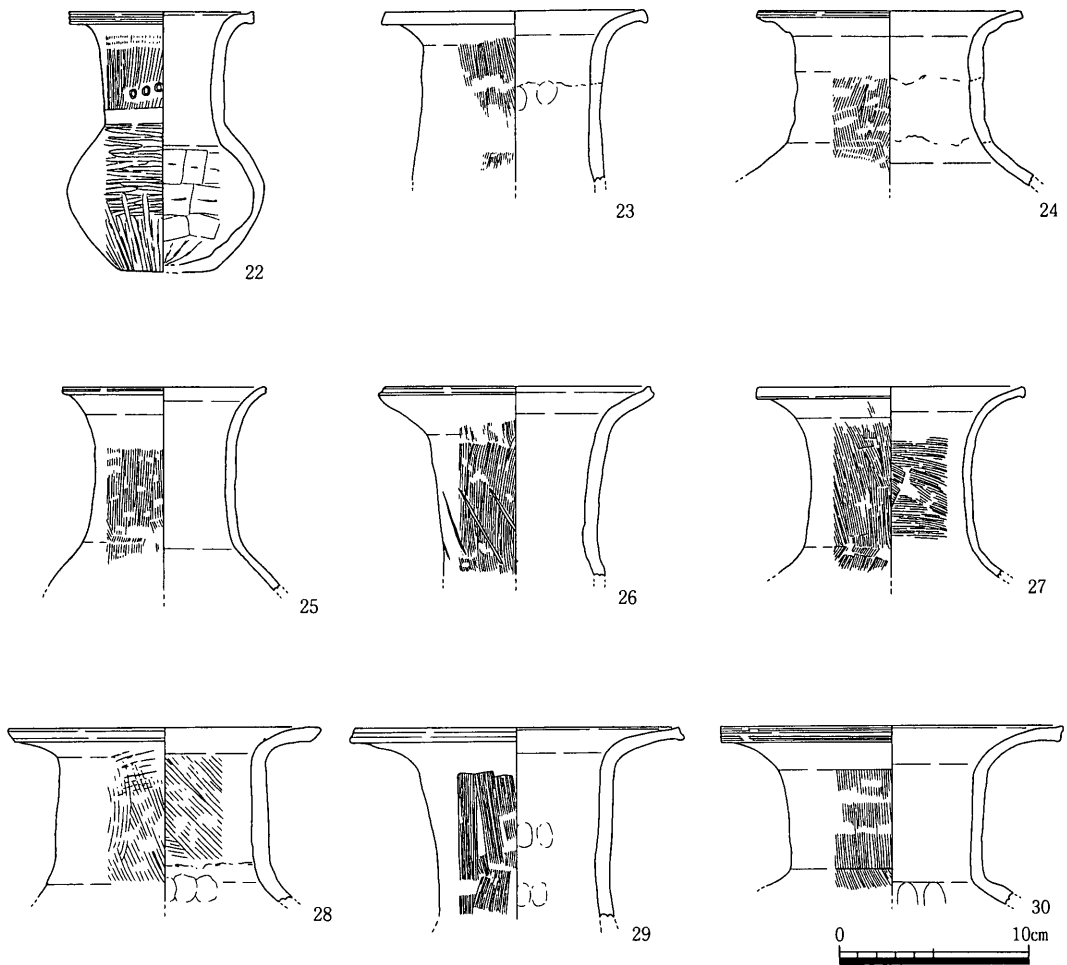


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
15	弥・甕	16.0			粗・普	良好	橙・コイ黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ		金雲母
16	弥・甕	16.2			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		金雲母
17	弥・甕				微・普	良好	にぶい褐	不明	不明	絵画土器	金雲母
18	弥・甕	11.1	19.5	5.0	細・普	良好	橙・コイ黄橙	ハケ目	ハケ目・ケズリ		金雲母
19	弥・甕	14.8			中・普	良好	にぶい赤褐	ハケ目→板ナデ	ケズリ		金雲母・角閃石
20	弥・甕	18.4			中・普	良好	灰黄褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		金雲母・角閃石
21	弥・甕	21.2			粗・普	良好	橙・にぶい橙	ハケ目→ミガキ	ナデ・ハケ目・ケズリ		金雲母・角閃石

第639図 G区SR02出土遺物(3)(1/4)

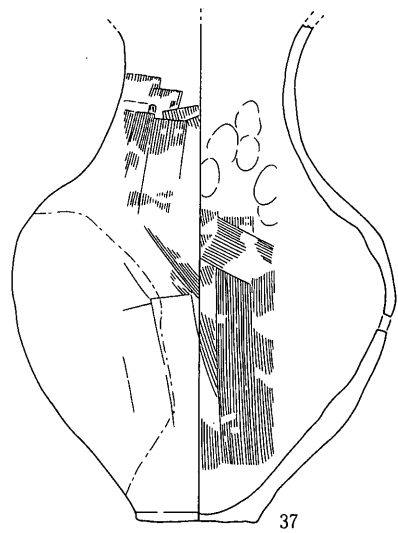
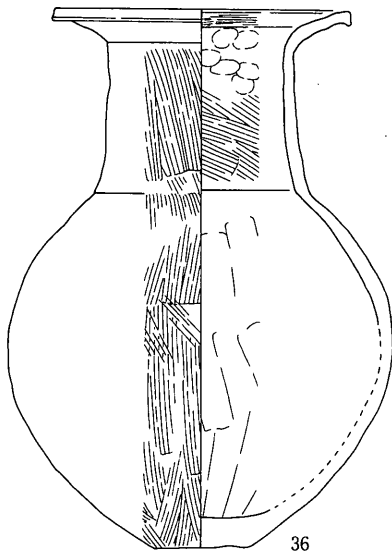
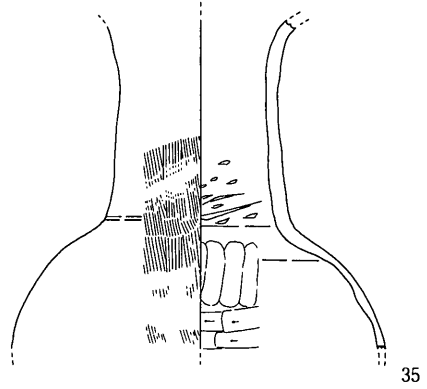
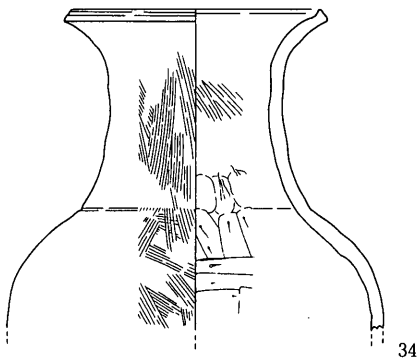
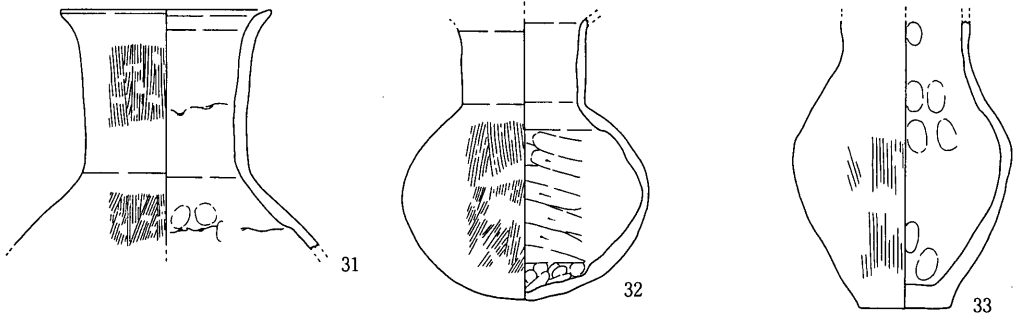
板状工具でナデている。底部は平底である。37は体部の最大径は上部にあり倒卵形となっており、体部の肩は張っている。体部に焼成後の穿孔が1箇所ある。また頸部は外反の度合いが強い。22~37は32と33が摩滅している他はすべて頸部外面にハケ目を施している。

38~46は中位の頸部から口縁部が緩やかに開くものである。38は口縁部端部を上下に若干拡張し、端面に擬凹線を2条施している。40は口縁部は上方が若干内湾し、端部を上方につまみ上げている。布留式の甕の口縁部によく似ている。41は頸部内面にヘラミガキの



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
22	弥・壺	9.8	13.7	5.1	中・普	良好	黒・にぶい黄	ハケ目・ミガキ	ナデ・ケズリ		
23	弥・壺	13.6			粗・普	良好	淡黄	ハケ目	ナデ		
24	弥・壺	13.8			微・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ		
25	弥・壺	10.6			微・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ナデ		金雲母・角閃石
26	弥・壺	13.9			中・普	良好	黄灰	ハケ目	ナデ		
27	弥・壺	13.9			中・普	良好	暗灰黄	ハケ目	ナデ・ハケ目		金雲母・角閃石
28	弥・壺	16.4			微・普	良好	橙	叩き→ハケ目	ナデ・ハケ目	頸部上半に叩き	金雲母
29	弥・壺	17.1			粗・多	良好	浅黄橙	ハケ目	ナデ		
30	弥・壺	18.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ		金雲母・角閃石

第640図 G区SR02出土遺物(4)(1/4)



0 10cm

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
31	弥・壺	11.0			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目・ナデ	ナデ		
32	弥・壺				中・普	良好	淡黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
33	弥・壺			4.6	中・普	良好	灰白	ナデ・ハケ目	ナデ		
34	弥・壺	13.0			中・普	良好	明褐灰	ハケ目	ハケ目・ナデ		金銀母
35	弥・壺				中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ナデ・ケズリ		金銀母・角閃石
36	弥・壺	15.4	28.4	4.9	中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ハケ目・板ナデ		金銀母
37	弥・壺			6.3	中・普	良好	灰黄	ハケ目・ナデ	ナデ・ハケ目	体部に焼成後穿孔1個	

第641図 G区SR02出土遺物(5)(1/4)

痕跡が残る。42は口縁部端部を上下に大きく拡張し、外側に面を作り出し鋸歯文を施している。頸部下端には断面三角形の刻み目突帯を貼りつけている。43は外反する頸部から大きくラッパ状に開く口縁部をもち、端部は下方へ若干つまみ出している。口縁部端面には表現の異なる2種類の櫛描き波状文を施している。体部の上端部には櫛描き波状文と思われる文様が施されている。44は口縁部端面に櫛描き波状文の後に竹管文を施している。46は体部から頸部にかけて歪んでいる。体部は球形に近いが若干下膨れとなっている。体部外面には叩きの後に全体に丁寧にハケ目を施している。内面も全体にハケ目を施している。また頸部と体部の境には沈線が1条巡っている。

47～61・68は頸部は中位であるが、口縁部が鋭く屈曲し横へ開くものである。頸部は内傾するもの(47～51・54・55・59)、直立するもの(56・58・60・61・68)、外傾するもの(52・53・57)の3種類に分かれる。48は体部にヘラミガキを施した後に頸部と体部の境に沈線を1条巡らせている。50は口縁部は長く水平に開き、口縁部の下部は強いナデにより凹線状になっている。頸部の外面には、ヘラ状工具により直角に曲がる線を4条引いた、絵画状の文様がある。52は口縁部内・外面と頸部内面にハケ目を施し、頸部外面はハケ目の後にナデている。53は体部はやや縦長の球形で、底部は平底である。体部外面は叩きの後にハケ目を施している。体部内面下半にもハケ目を施している。54は大型の壺である。内傾した頸部から長めの口縁部が大きく開き、口縁部端面を強くナデている。口縁部は頸部より肥厚している。体部は最大径が上半にあり、肩が張っている。体部外面の上半はナデているが、下半はヘラミガキが残り、内面はヘラケズリを施している。底部は丸底に近い不安定な平底である。体部中央よりやや下に焼成後の穿孔が1箇所認められる。祭祀的な仮器か壺棺としての用途も考えられる。56は口縁部端部を上方につまみ上げる。57は口縁部端面に擬凹線を施し、頸部は若干屈曲しながら外反する。59は頸部は強く内傾し、体部の最大径は上半にある。60は体部は扁平気味で、内面には粘土紐の接合痕が顕著に残る。また外面下半にはハケ目の下に叩き痕が僅かに残っている。頸部の上部に鳥の足跡状の線刻が1箇所ある。絵画的な記号と思われる。61は体部内面の上半を指で縦方向に強くナデている。68は頸部は若干内傾気味であるがほぼ直立し、長い肥厚した口縁部が水平に近く開く。体部は球形に近く外面にヘラミガキを、内面には全体にハケ目を施す。底部は安定した平底である。

62～67は短い頸部から口縁部が鋭く屈曲するものである。62は短い口縁部が斜め上方に立ち上がる。64は口縁部端部を上方につまみ上げ、外側に面を作るものである。頸部は非

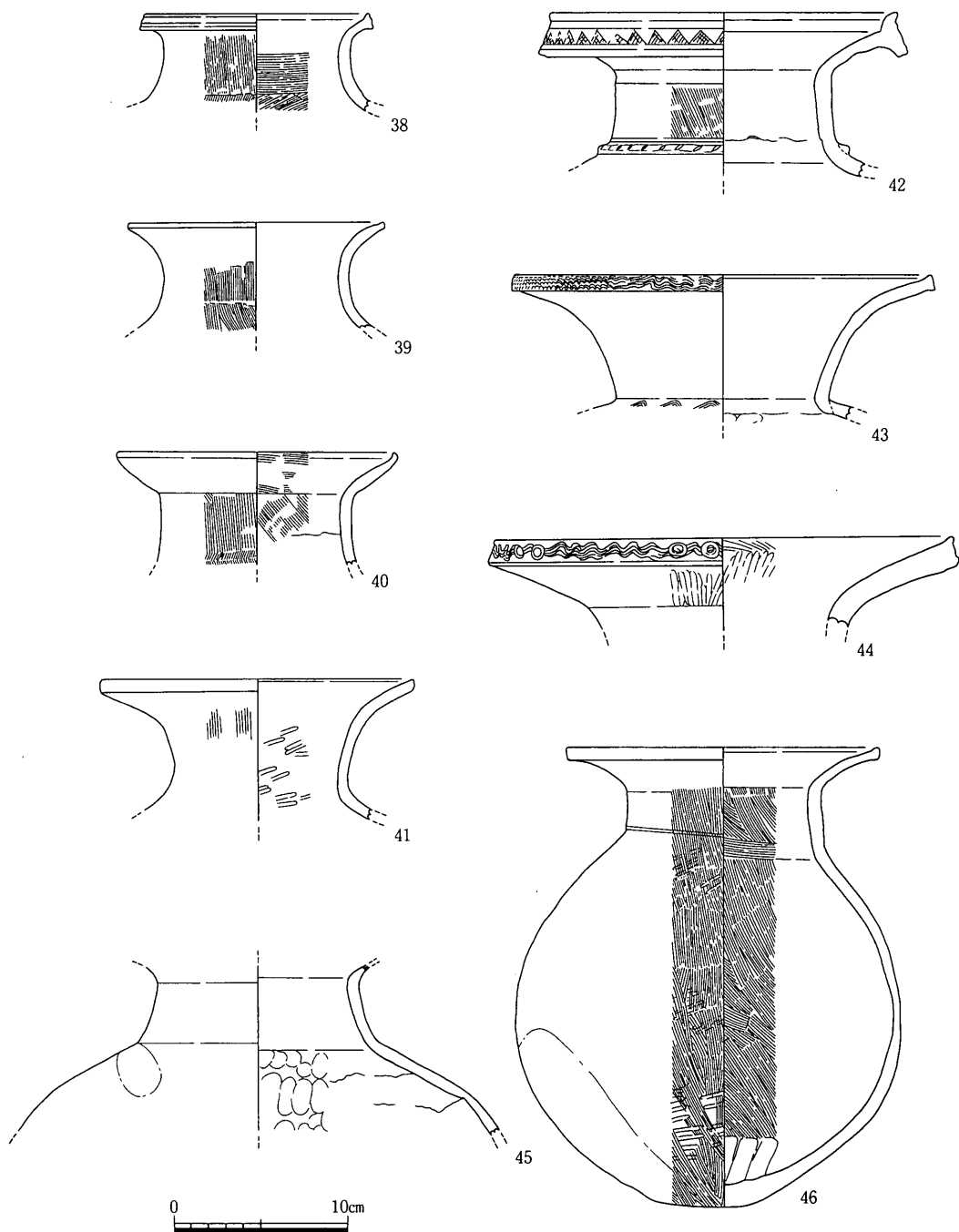
常に短くなっており、甕に近いものである。65は口縁部端部を強くナデており、端面には擬凹線が1条巡る。66は口縁部は頸部から屈曲した後に斜め上方に直線的に立ち上がる。体部外面は叩きの後にハケ目を施しており、内面はヘラケズリとなっている。67は頸部は直線的に内傾し、口縁部は外反気味に立ち上がる。頸部以上に比べて体部は非常に大きくなっている。体部は倒卵形で、最大径は上半にある。体部外面下半には叩き痕が残っており、内面は下半にヘラケズリを施している。底部は安定した平底となっている。

69～74は頸部と体部の区別が不明瞭なものである。69は口縁部屈曲部外面をナデる他はハケ目となっている。70は口縁部が肥厚し、内面が2段に屈曲し上側に面をもっている。71は口縁部端部を上下に拡張し、外側の面に擬凹線を2条施している。72は頸部幅が小さくなっており、口縁部が屈曲してそのまま体部に至るものである。体部内面にはヘラケズリによって器壁を抉り取っている。73の体部は球形となっている。74は頸部と体部の接合部分の内面に段が生じている。

75～80はミニチュアの壺である。器高はいずれも7cm前後である。75は体部の中心部が張り、算盤玉のような形をしている。76は口縁部を直立に近く立ち上がらせている。78は体部はやや扁平で、底部は丸底になっている。体部外面下半には丁寧なヘラミガキを施している。79は口縁部立ち上り部の外面に強く指押さえを行なっている。80は口縁部は内面に鋭い稜をもって直線的に斜め上方に立ち上がる。体部外面には板ナデが、内面には指ナデが施されている。

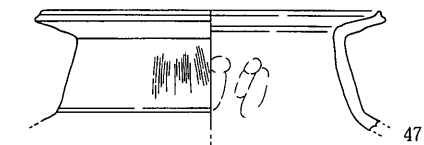
81は口縁部は上部で外反し、端部を下方につまみ出す。体部はやや扁平な球形で底部は平底であるが、全体に少し歪む。82は口縁部は直線的に立ち上がり、端部は丸く納める。体部は縦長で最大径は中心部にあり、底部は肥厚している。体部外面にはヘラミガキを施している。83は口縁部のみの破片であるが、口縁部は頸部から真横に開き、端部を大きく上下に拡張し外側に幅広の面を作り出している。外側の面には櫛描き波状文がある。

84～88・90・91は二重口縁壺である。84は口縁部と頸部の内・外面に丁寧にヘラミガキを施したのちに口縁部外面に櫛描き波状文を、端面にはヘラ描きの斜格子文が施されている。口縁部の2段目の立ち上がり部の内面は窪んでいる。85は口縁部の2段目の立ち上がり部外面は突出する。頸部外面には2方向のヘラ圧痕文が施されている。86は口縁部2段目の立ち上り部は外反し、屈曲部を斜め下方に拡張する。口縁部外面には2個1単位の円形浮文を貼りつけ、その間に鋸歯文を4個配している。頸部下端には断面三角形の刻み目突帯を1条貼り付けている。口縁部内面には細いヘラミガキを、頸部外面には太いヘラミ

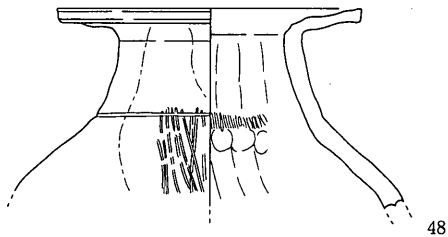


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
38	弥・甕	12.8			中・普	良好	灰白	ハケ目	ハケ目		金甕母
39	弥・甕	14.6			細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ		金甕母
40	弥・甕	16.2			中・普	良好	ゴブイ黄褐・黒	ハケ目	ハケ目→ナデ		
41	弥・甕	17.9			中・普	良好	橙	ハケ目→ナデ	ナデ・ミガキ		金甕母
42	弥・甕	20.0			中・普	良好	浅黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ		
43	弥・甕	24.0			細・普	良好	橙	ナデ	ナデ		甕母・角閃石
44	弥・甕	26.4			粗・普	良好	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ		角閃石
45	弥・甕				中・普	良好	黒・ゴブイ黄橙	不明	不明		金甕母・角閃石
46	弥・甕	18.1	26.3	5.4	細・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ハケ目		金甕母・角閃石

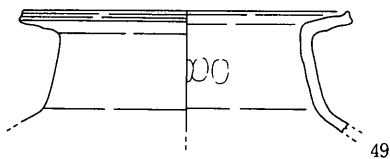
第642図 G区SR02出土遺物(6)(1/4)



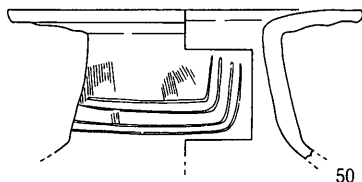
47



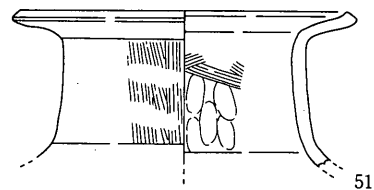
48



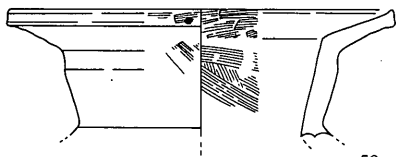
49



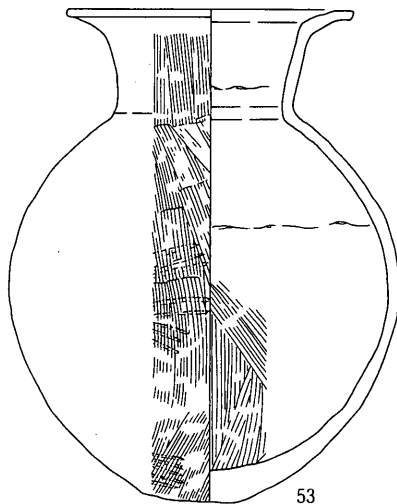
50



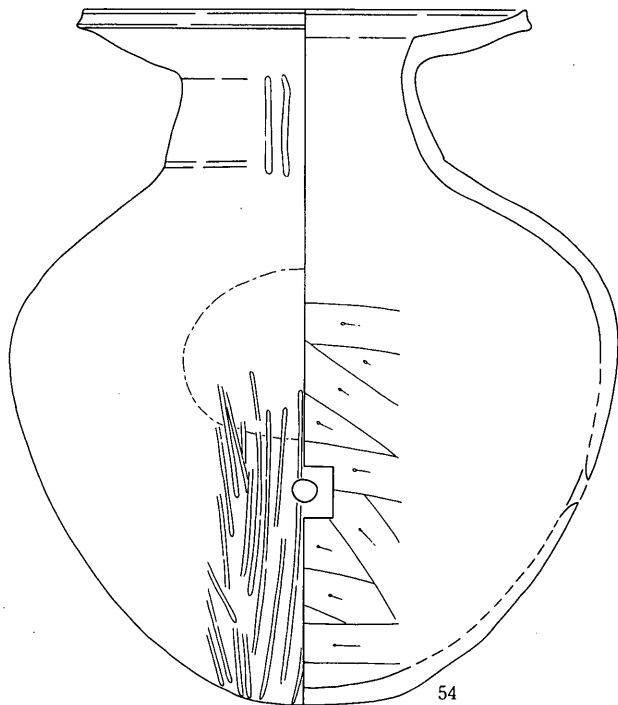
51



52



53

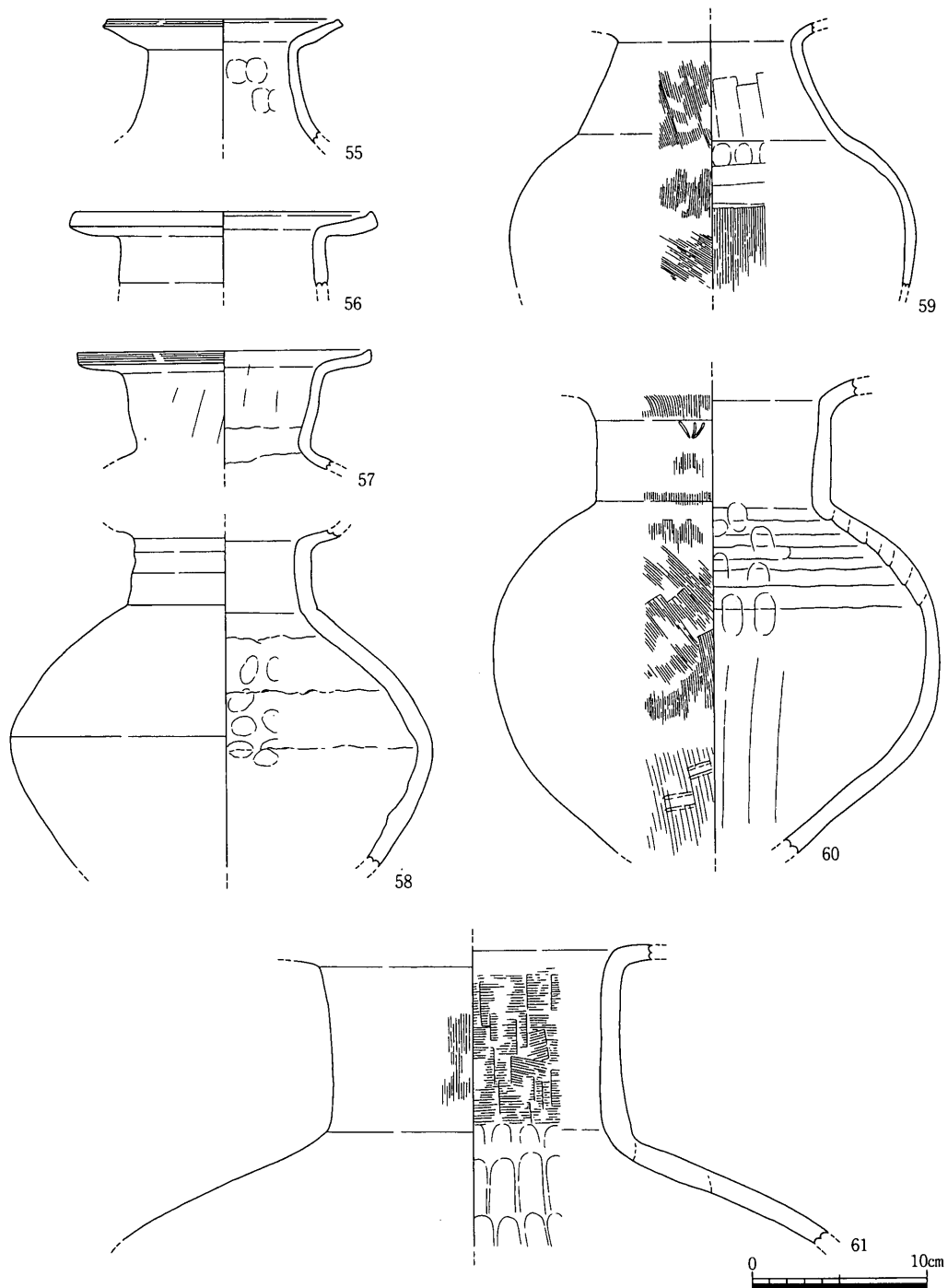


54



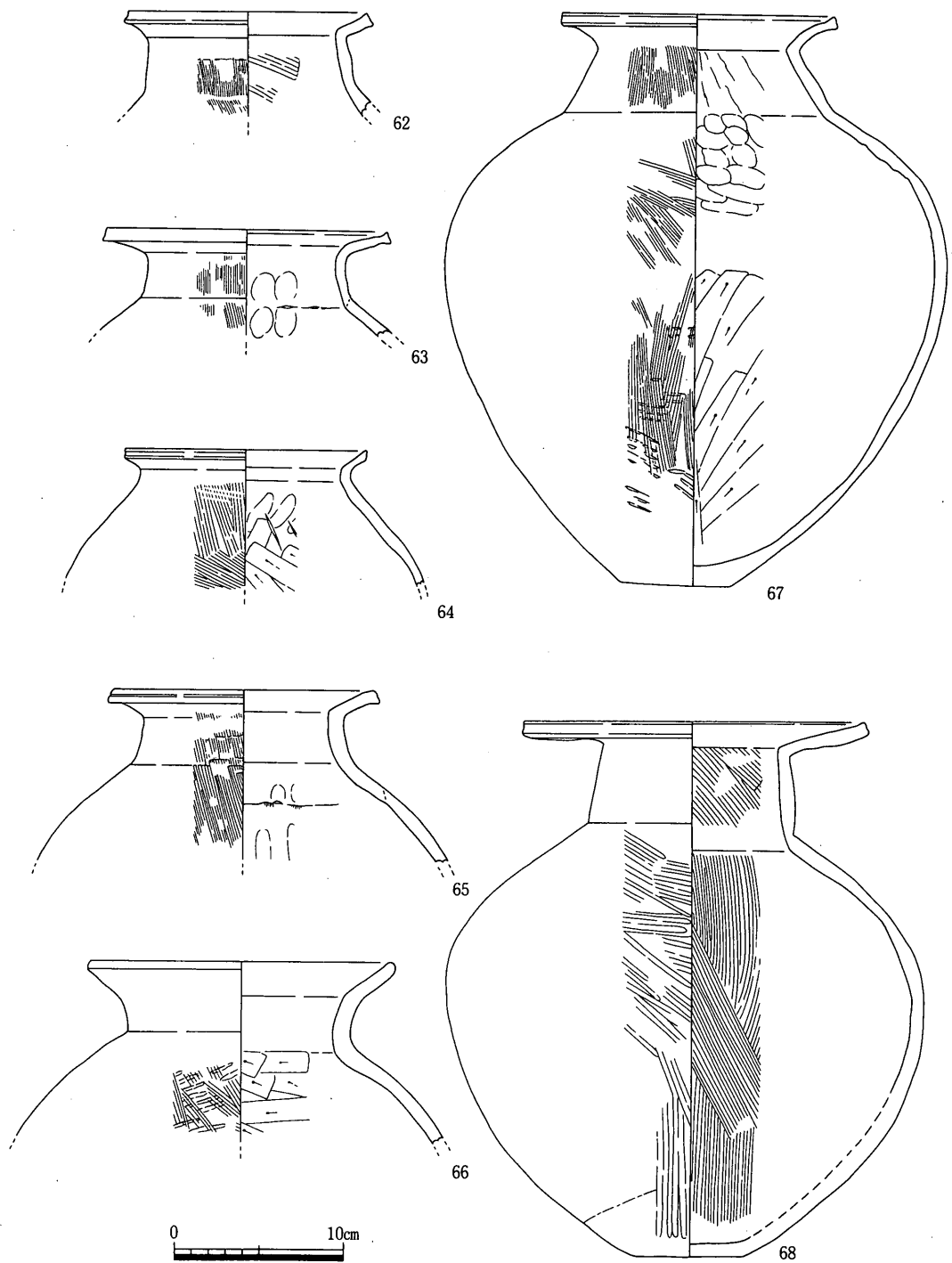
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
47	弥・壺	17.5			細・普	良好	灰黄褐	ハケ目	ナデ		金雲母・角閃石
48	弥・壺	15.9			中・普	良好	橙	ナデ・ミガキ	ナデ		金雲母・角閃石
49	弥・壺	17.4			細・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ		金雲母・角閃石
50	弥・壺	18.4			中・普	良好	明褐	ハケ目→ナデ	ナデ	絵画状の文様	金雲母
51	弥・壺	18.0			細・普	良好	灰黄褐	ハケ目	ハケ目・ナデ		角閃石
52	弥・壺	19.9			中・普	良好	にぶい褐	ハケ目→ナデ	ハケ目		金雲母・角閃石
53	弥・壺	15.0	24.7	5.1	粗・普	良好	橙	叩き→ハケ目	ナデ→ハケ目		金雲母・角閃石
54	弥・壺	23.0	35.7	8.7	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ケズリ	胴部に焼成後穿孔	雲母・角閃石

第643図 G区SR02出土遺物(7)(1/4)



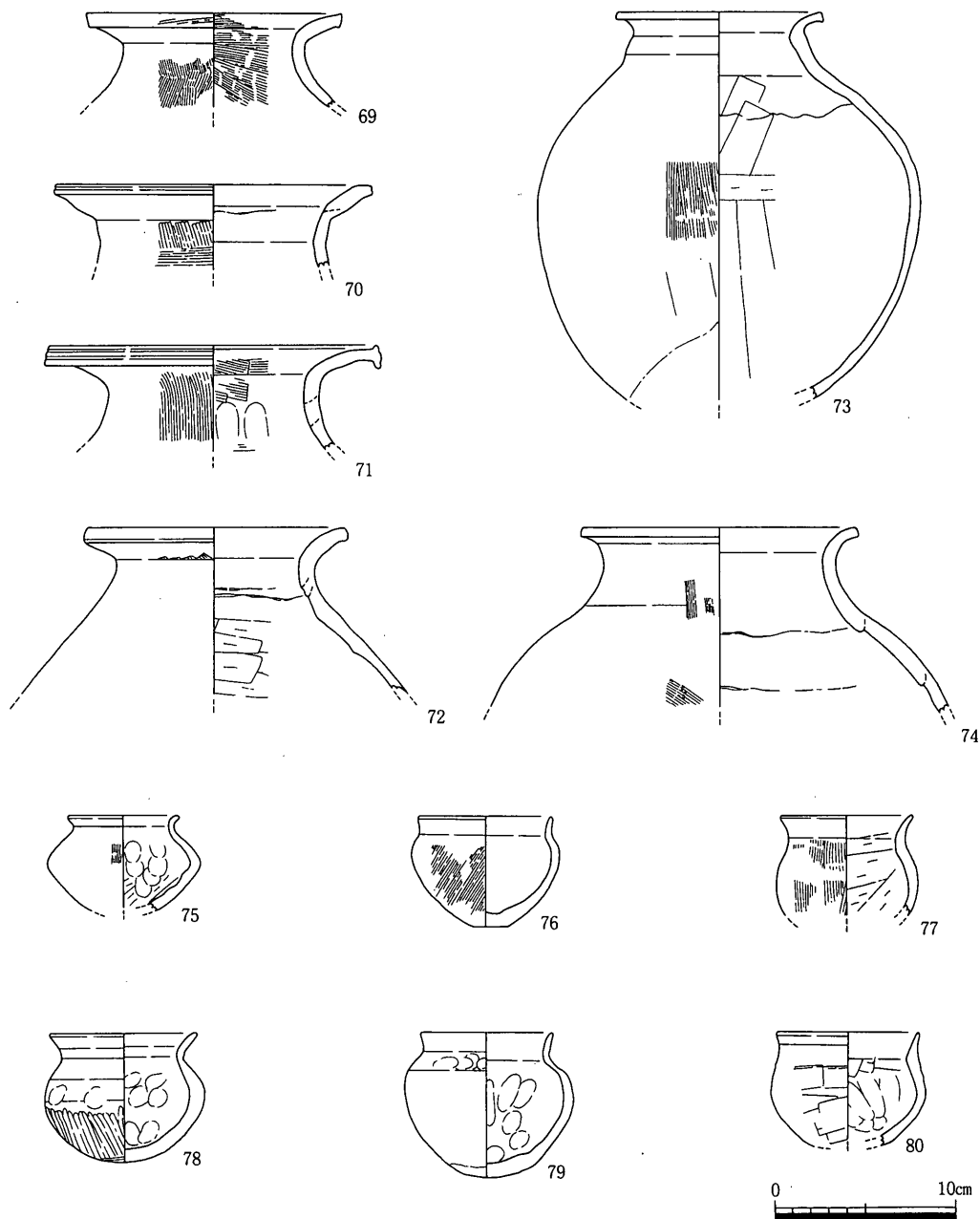
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
55	弥・盃	13.2			細・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		金鬚母・角閃石
56	弥・盃	16.8			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
57	弥・盃	16.7			粗・普	良好	明赤褐	ナデ	ナデ		
58	弥・盃				中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		角閃石
59	弥・盃				中・普	良好	橙	ハケ目	ハケ目・板ナデ		金鬚母
60	弥・盃				中・普	良好	橙	叩きハケ目	ナデ	頸部に「」記号	
61	弥・盃				粗・普	良好	橙	ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		

第644図 G区SR02出土遺物(8)(1/4)



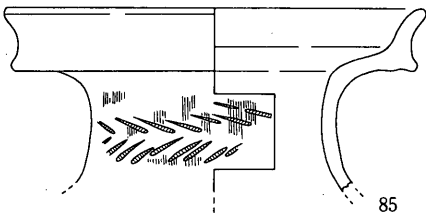
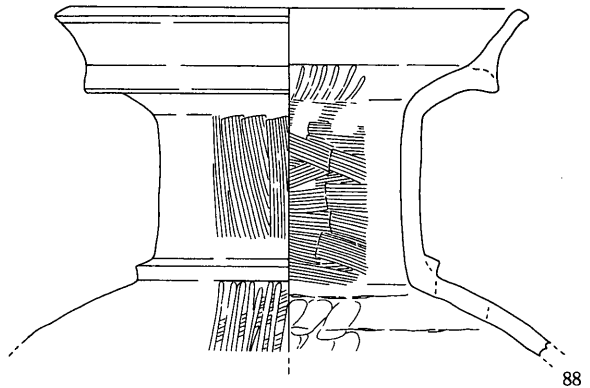
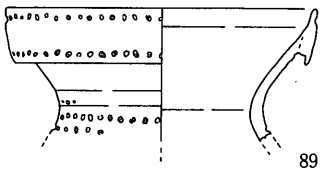
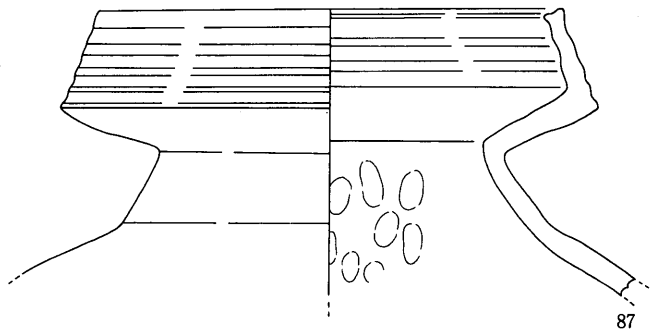
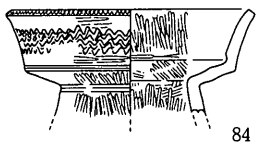
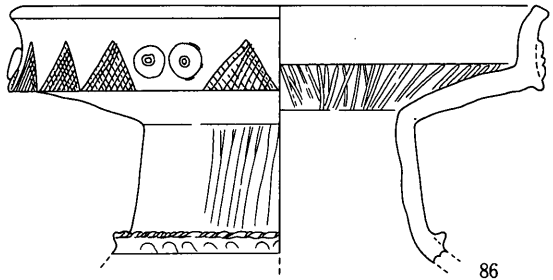
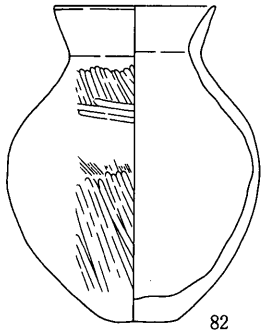
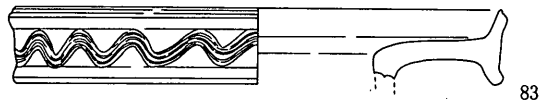
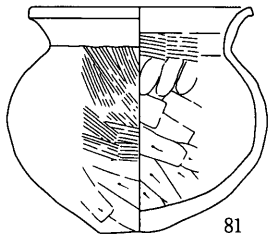
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
62	弥・壺	13.9			細・普	良好	にぶい赤褐	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ		金雲母
63	弥・壺	16.6			中・普	良好	橙	ハケ目	ナデ		金雲母
64	弥・壺	14.3			中・普	良好	黄橙	ハケ目	ケズリ		
65	弥・壺	15.2			中・普	良好	にぶい褐	ハケ目	ナデ		金雲母
66	弥・壺	17.8			中・普	良好	橙	叩き→ハケ目	ナデ・ケズリ		
67	弥・壺	15.8	32.4	6.5	細・普	良好	にぶい黄褐	肘目・叩き→肘目	ナデ・ケズリ		金雲母・角閃石
68	弥・壺	19.9	31.0	6.0	中・普	良好	橙	ミガキ・ナデ	ハケ目		

第645図 G区SR02出土遺物(9)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
69	弥・甕	14.0			細・普	良好	にぶい褐	ハケ目	ハケ目		金罌母・角閃石
70	弥・甕	17.4			中・普	良好	灰黄褐	ハケ目	ナデ		金罌母
71	弥・甕	18.0			中・普	良好	灰白	ハケ目	ハケ目・ナデ		
72	弥・甕	14.1			中・多	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ケズリ		
73	弥・甕	11.2			中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目→ナデ	ナデ・ケズリ		金罌母
74	弥・甕	15.1			粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目・ナデ	ナデ		金罌母
75	弥・ミニ甕	6.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ケズリ		金罌母・角閃石
76	弥・ミニ甕	7.3	6.1	1.9	中・少	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ		
77	弥・ミニ甕	7.2			中・普	良好	黒	ハケ目	ケズリ		
78	弥・ミニ甕	8.1	7.0		微・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ミガキ	ナデ	丸底	金罌母・角閃石
79	弥・ミニ甕	7.2	8.0	3.1	中・普	良好	黒	ナデ	ナデ		金罌母
80	弥・ミニ甕	7.6			細・普	良好	灰黄褐	板ナデ	ナデ		金罌母

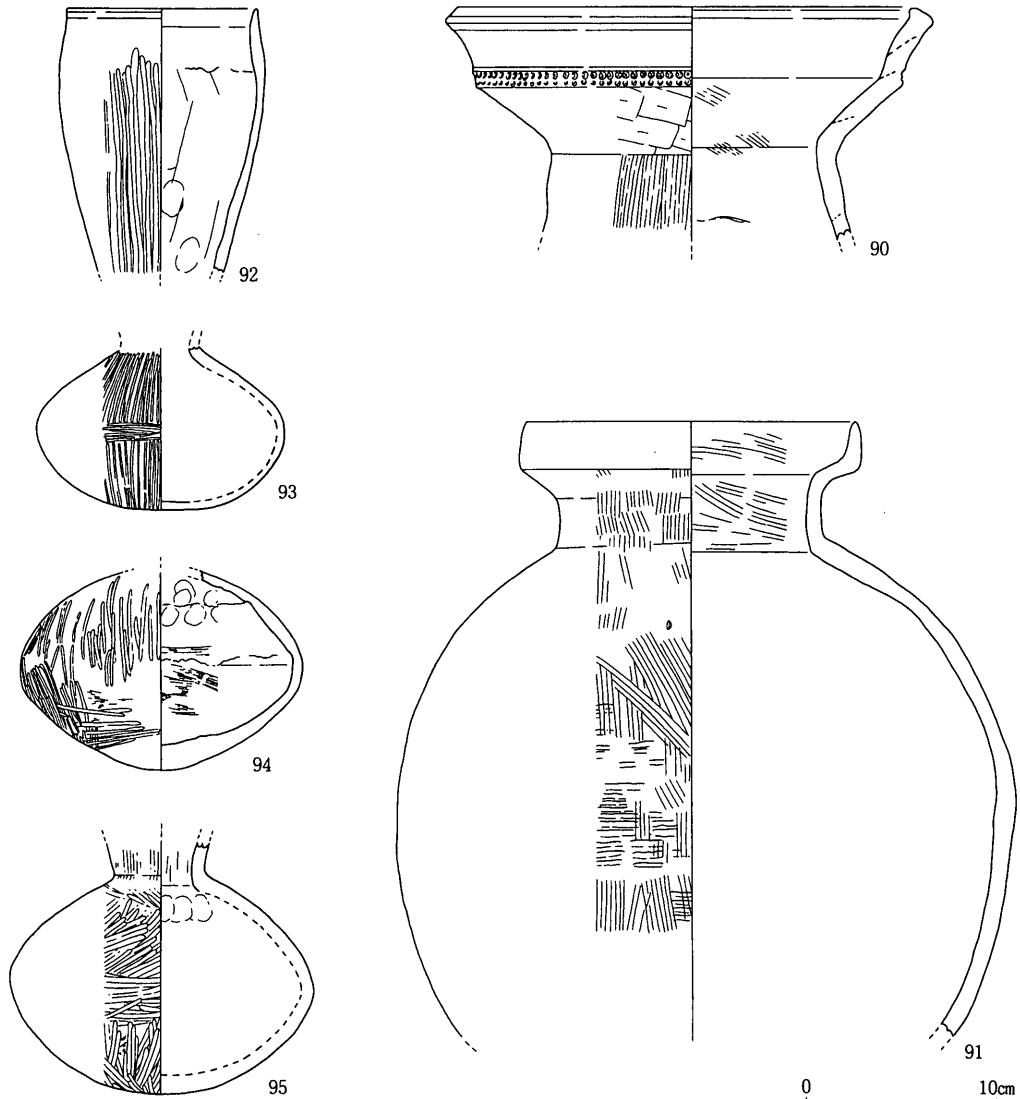
第646図 G区SR02出土遺物(10)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法的特徴	備考
81	弥・壺	11.9	11.5	3.7	粗・多	不良	灰黄	ハケ目・ケズリ	ナデ・ハケ目・ケズリ		
82	弥・壺	8.4	15.9	3.8	粗・普	良好	灰黄褐	ハケ目→ミガキ	ナデ		角閃石
83	弥・壺	25.6			中・普	良好	橙・にぶい褐	ナデ	ナデ		金雲母・角閃石
84	弥・壺	13.1			中・普	良好	橙	ミガキ	ミガキ		
85	弥・壺	21.8			粗・普	良好	橙・浅黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ		
86	弥・壺	26.9			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ		金雲母・角閃石
87	弥・壺	24.4			中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ		角閃石
88	弥・壺	25.0			中・普	良好	黒・灰黄	ハケ目→ミガキ	辺キ・ハケ目・ナデ		角閃石
89	弥・壺	16.4			粗・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	口縁に粘土貼付ける	

第647図 G区SR02出土遺物(11)(1/4)

ガキを施している。87は内傾する頸部からほぼ直角に立ち上がり、再度直角に屈曲し直線的に内傾する口縁部をもち、端面はナデにより窪んでいる。口縁部外面には凹線が4条巡っている。88は85と同様に口縁部の2段目の立ち上がり部外面が突出し、1段目の立ち上がり部内面に間隔の開いたヘラミガキを施している。頸部下端には断面三角形の突帯を1条貼り巡らせている。90は口縁部端部を内側につまみ出している。口縁部の2段目の屈曲



0 10cm

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
90	弥・壺	24.1			粗・普	不良	黄褐	ナデ・ヘラミガキ・ハケ目	ハケ目→ナデ	口縁外面に2段竹管文	金器母
91	弥・壺	17.2			粗・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ハケ目・ナデ	外面に粗圧痕有り	
92	弥・壺	10.0			中・普	良好	灰黄	ナデ・ミガキ	ナデ	丁寧な作り	
93	弥・壺			4.5	中・普	良好	黄褐	ミガキ	ナデ		金器母
94	弥・壺				中・普	良好	暗ニイ黄橙	ハケ目→ミガキ	ハケ目→ナデ		
95	弥・壺				中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ・ミガキ	ナデ		

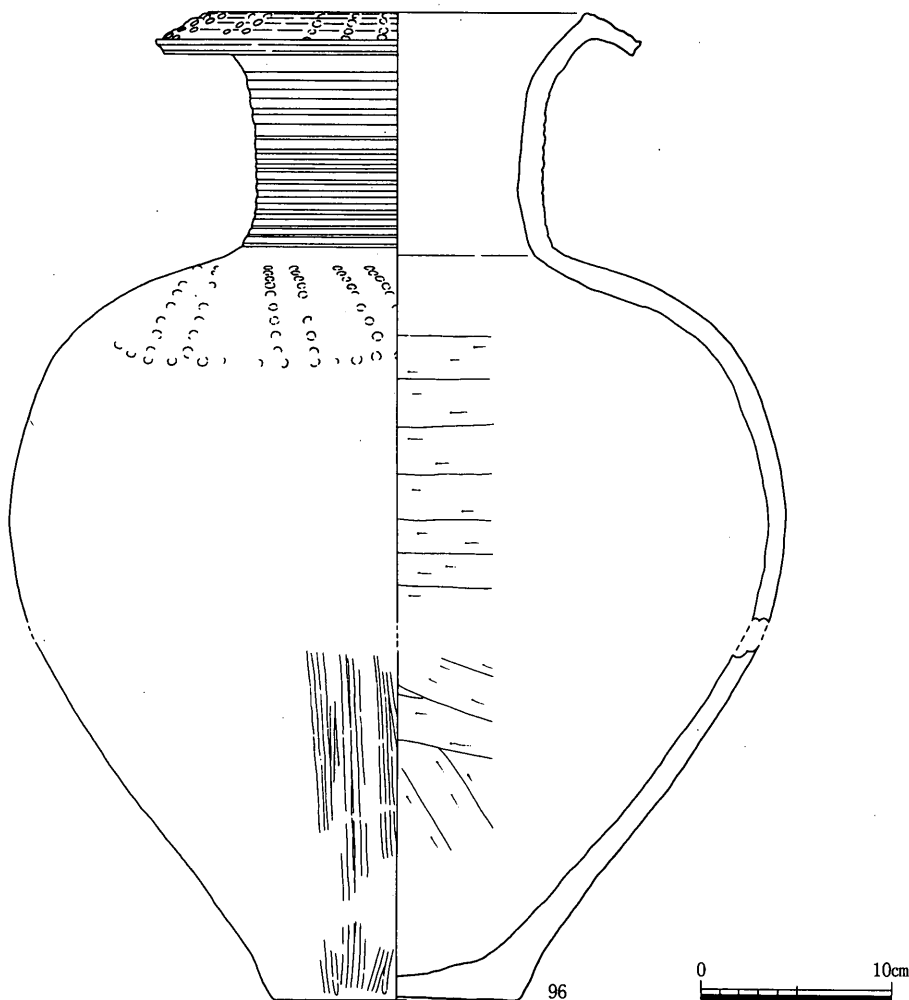
第648図 G区SR02出土遺物(12)(1/4)

部外面に竹管文を2段巡らせ、1段目の外面はヘラケズリを行なっている。91は2段目の口縁部は直立し、頸部も直立する。体部外面は叩きの後にハケ目を施している。また体部外面に1箇所刳の痕跡が認められた。

89は口縁部外面に粘土を貼り付け、外側に幅広の面を作り出している。面の下端は垂下し、外面と頸部下端に棒状工具による刺突文を配している。

92~95は細頸壺である。92は頸部で上部で緩く内側に屈曲し、端部は丸く納める。外面は縦に長いヘラミガキを施している。93~95は体部でいずれも扁平で算盤玉のような形をしている。外面はヘラミガキになっているが、93と95は中央部のみ横方向のヘラミガキとなっている。93は不安定ながら平底に近く、94・95は丸底となっている。

96は口縁部を斜め下方に大きく屈曲させ外面に幅広の面を作り出し、縦に4個1単位の



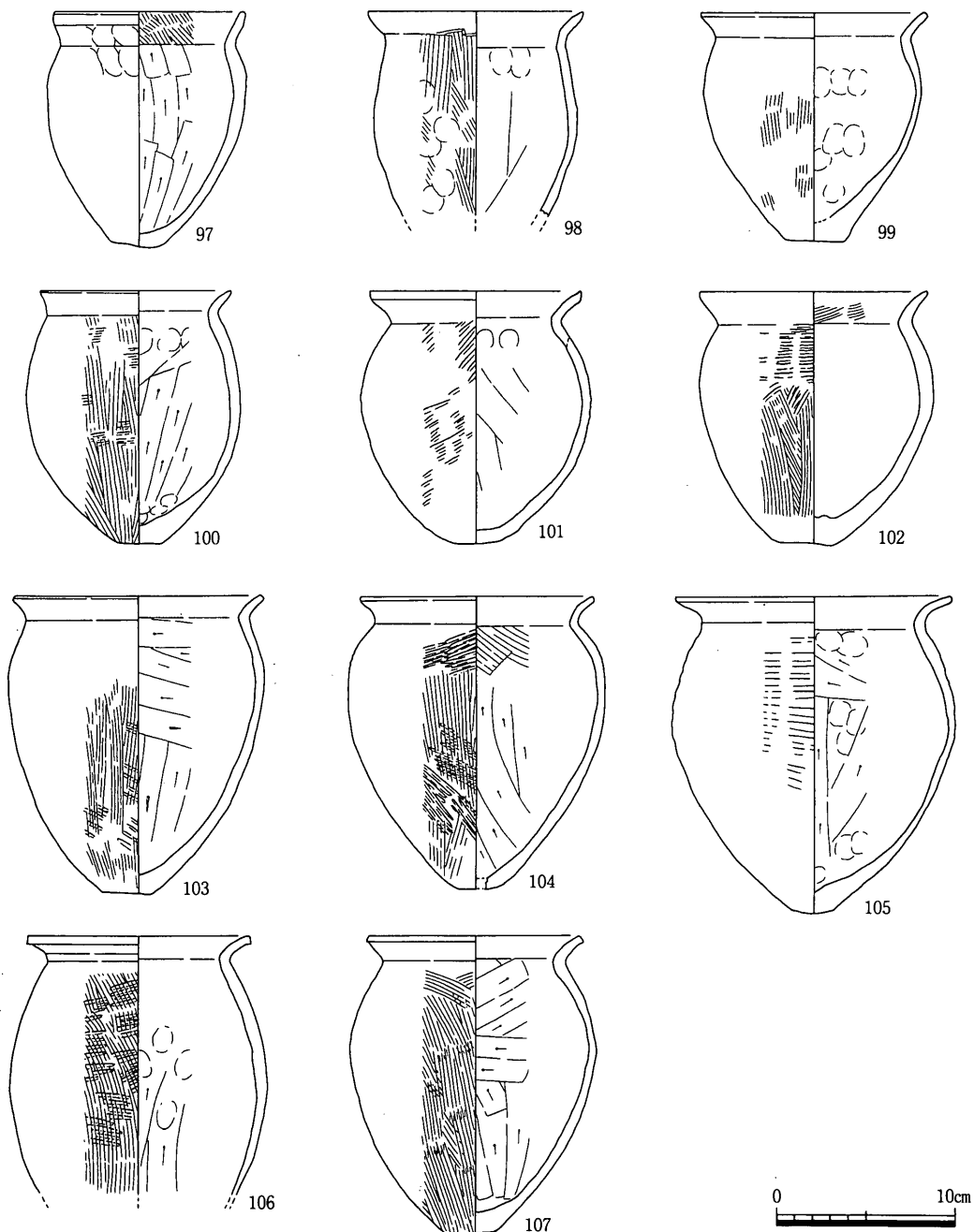
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
96	弥・壺	20.0	51.6	13.0	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ケズリ	口縁と体部に竹管文	

第649図 G区SR02出土遺物(13)(1/4)

竹管文を配している。頸部外面には沈線を巡らせている。体部は最大径が上半にある倒卵形で、肩が張っており、底部は安定した平底になっている。体部上半部には縦方向に竹管文を配し、下半にはヘラミガキを施している。

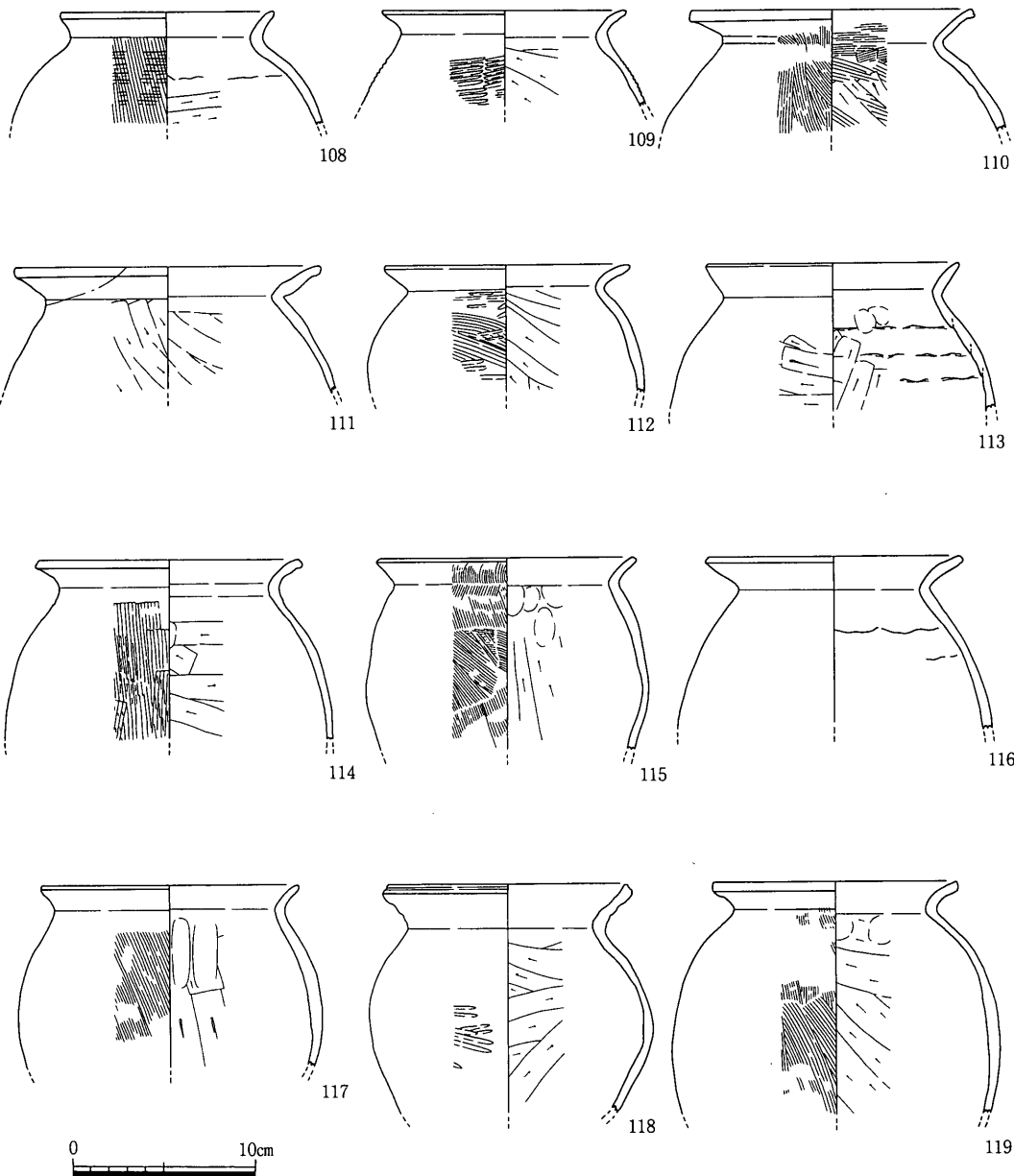
97～292は甕である。主に口縁部の形態により分類した。

97～157は口縁部が曲線的に丸く屈曲し、斜め上方に立ち上がるものである。97～102は器高が13cm前後の小型の甕である。97～100・102は体部に張りはなく長細くなっている。101の体部は倒卵形で、口縁部端部は外側に面を作る。100・102は体部外面は叩きの後にハケ目を施している。また102は全体的に厚くなっている。103・104・106は体部外面に叩きの後にハケ目を施している。104は体部は倒卵形で最大径は上半にある。体部外面にはハケ目は丁寧ではなく、特に上半部には叩きが明瞭に残る。103・104とも口縁部の屈曲の丸みは弱い。103・105・107は体部内面のヘラケズリが全体に及ぶ。110は口縁部端部が肥厚し、内面はヘラケズリの後にハケ目を施している。111・113は体部外面にヘラケズリを施している。115は体部外面に丁寧にハケ目を施し、口縁部外面にまで及んでいる。118は口縁部の中央部が強いナデのために窪んでいる。120は体部の最大径は中央部にある。外面は全体にハケ目が及び、口縁部内面にもハケ目を施している。体部下半に焼成後の穿孔が1箇所認められる。底部は安定した平底となっている。121は体部の最大径が上半にあり、底部内面にハケ目を施している。口縁部は肥厚し、端部を丸く納めている。122は体部内面の上半部に指押さえ痕が顕著である。125は体部外面には叩きを施した後に下半は板ナデで叩き痕を消している。127は口縁部端部を若干上下に拡張している。体部の張りはほとんどなく、内面の上半にはハケ目がある。128は口縁部は長めで、中央部付近を強くナデしており、先端部が外側に屈曲している。体部外面は叩きの後にハケ目を施し、内面も口縁部以下にハケ目を施している。129は口縁部は緩く内湾して立ち上がり受け口状になっている。また体部上半の器壁が肥厚している。132は体部の下半は欠損しているが、最大径は中央やや下寄りにあるものと思われる。内面には粘土紐の接合痕が明瞭に残っている。133の体部はやや寸づまりの倒卵形で、口縁部と体部の境界部分にまで叩きが及んでいる。体部の下半は内・外面ともに板ナデを施している。134は口縁部屈曲部の幅が狭く、壺に類似した形態になっている。体部内面の粘土紐の接合部には指押さえが顕著である。135は体部の下半は欠損しているが、上半部は大きく脹らんでいる。外面は叩きの後に下半にヘラケズリを施している。内面上半には指押さえ痕が多く残る。136の口縁部は全体に肥厚し体部外面にはヘラミガキが、内面上半は板ナデが施されている。137は体部



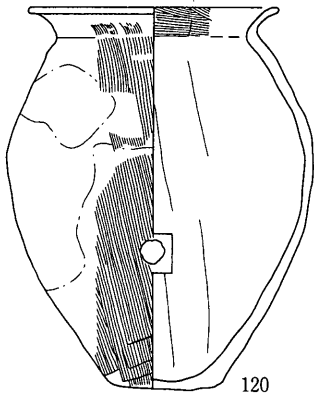
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
97	弥・甕	10.7	12.7	3.0	粗・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ハケ目・ケズリ		
98	弥・甕	12.0			粗・普	良好	にぶい橙	ハケ目	板ナデ		
99	弥・甕	12.8	12.3	3.2	中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ		金罌母・角閃石
100	弥・甕	10.7	13.6	2.5	中・普	良好	橙	叩き→ハケ目	ケズリ		金罌母・角閃石
101	弥・甕	11.9	13.6	2.6	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ナデ	板ナデ		
102	弥・甕	12.8	13.7	3.4	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ハケ目・ナデ	一部ハケ目→叩き	金罌母
103	弥・甕	13.6	16.6	2.7	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ケズリ		金罌母
104	弥・甕	13.0	16.3	1.6	微・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ハケ目・ケズリ	外面粗いハケ目	
105	弥・甕	15.5	2.2	17.6	中・普	良好	にぶい褐	叩き→ナデ	ケズリ		金罌母・角閃石
106	弥・甕	12.4			微・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ナデ・ケズリ		金罌母
107	弥・甕	12.2	16.4	2.8	細・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ケズリ		角閃石

第650図 G区SR02出土遺物(14)(1/4)

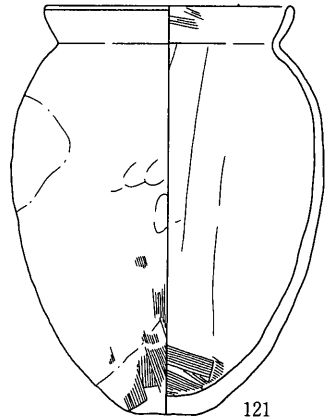


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
108	弥・甕	11.8			中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ナデ・ケズリ		金曇母
109	弥・甕	12.4			粗・普	良好	にぶい褐	叩き	ケズリ		
110	弥・甕	15.2			細・普	良好	赤褐	ハケ目	ケズリ→ハケ目		金曇母・角閃石
111	弥・甕	16.8			中・普	良好	にぶい黄橙	ケズリ	板ナデ		金曇母・角閃石
112	弥・甕	13.5			細・普	良好	橙・黒	叩き→ハケ目	ケズリ		金曇母
113	弥・甕	13.7			細・普	良好	にぶい褐	ナデ・ケズリ	ケズリ・ナデ		金曇母・角閃石
114	弥・甕	14.2			細・普	良好	にぶい褐	ハケ目	ケズリ		金曇母
115	弥・甕	13.7			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ・ケズリ	口縁内面ナデの擦痕	金曇母
116	弥・甕	13.8			中・普	良好	橙・灰・橙	ナデ	ナデ		
117	弥・甕	14.0			粗・普	良好	にぶい褐	ハケ目	ケズリ		金曇母
118	弥・甕	13.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ナデ	ケズリ		
119	弥・甕	13.4			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ケズリ		

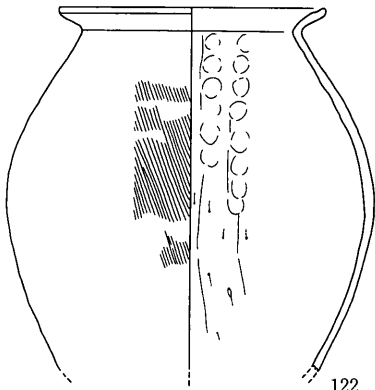
第651図 G区 S R 02出土遺物 (15) (1 / 4)



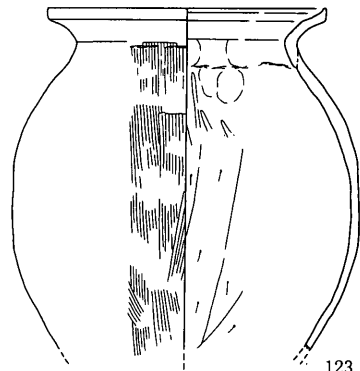
120



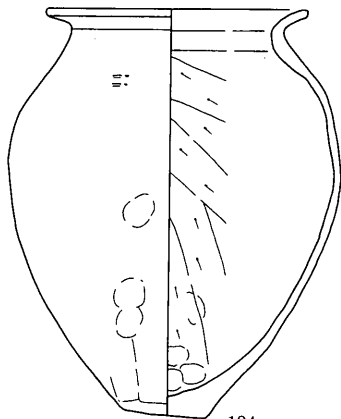
121



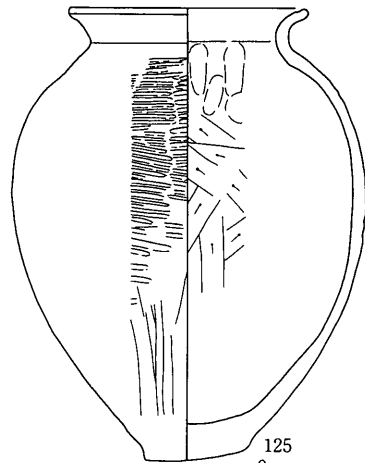
122



123



124

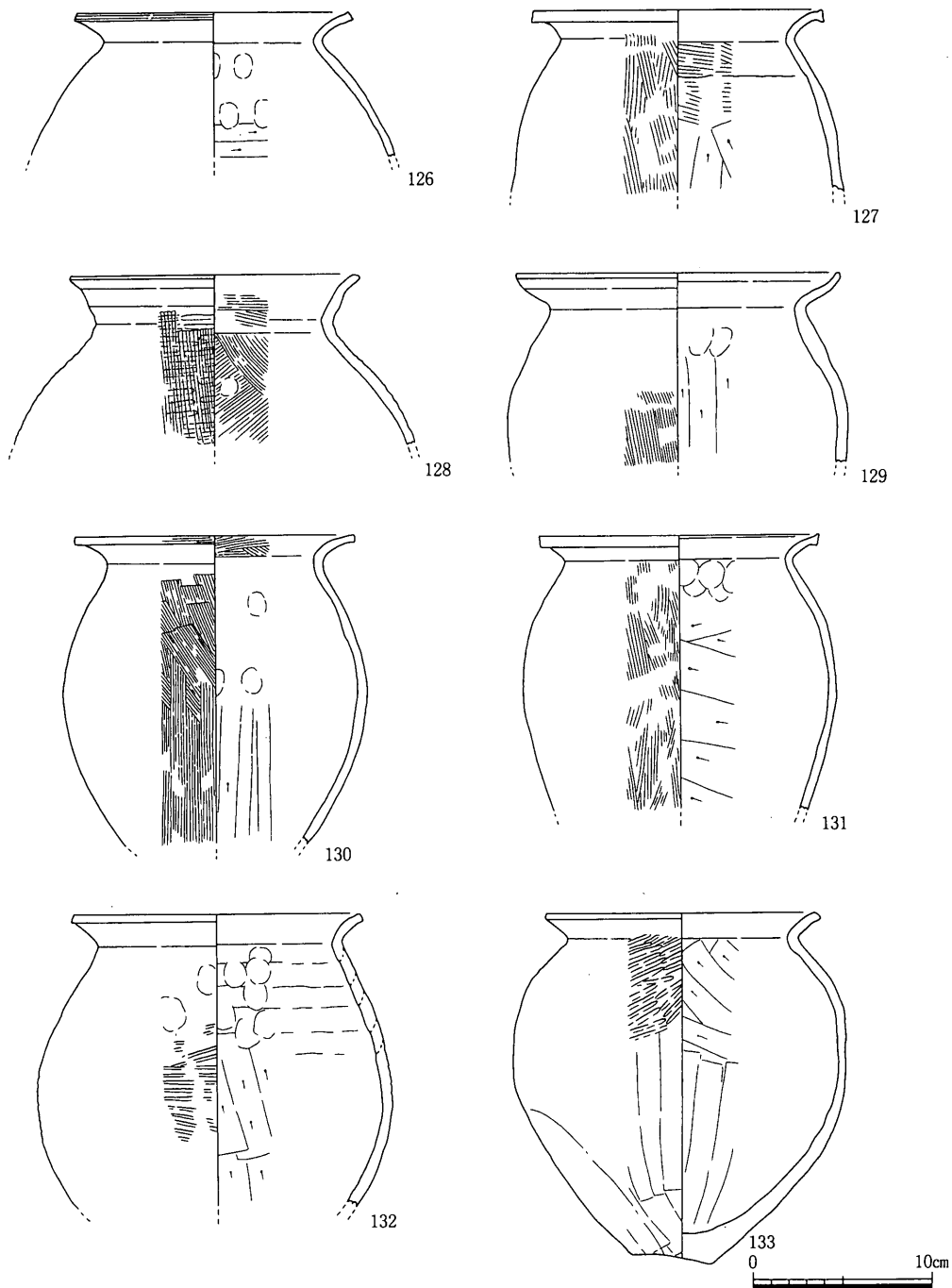


125



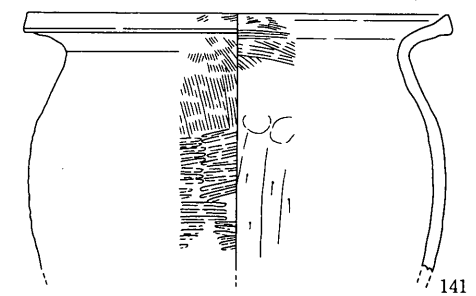
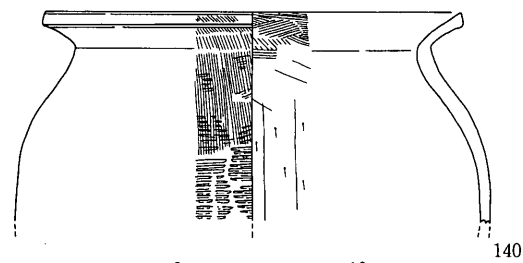
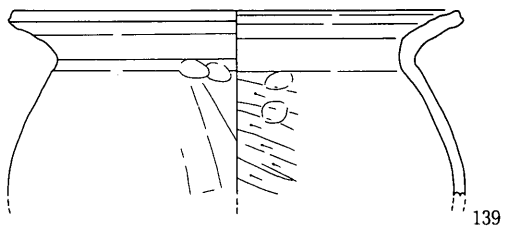
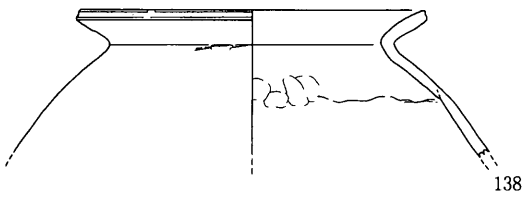
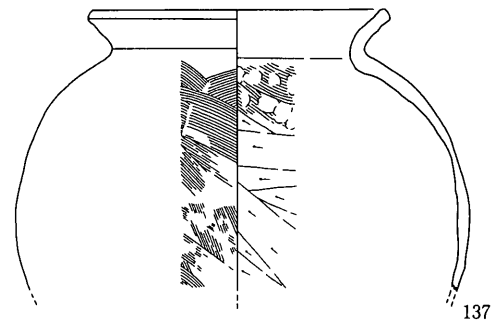
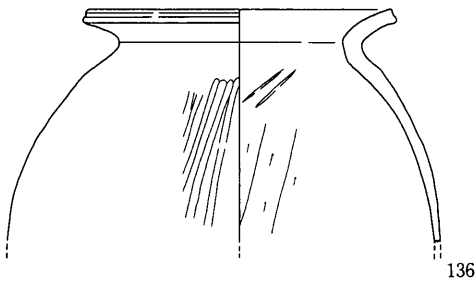
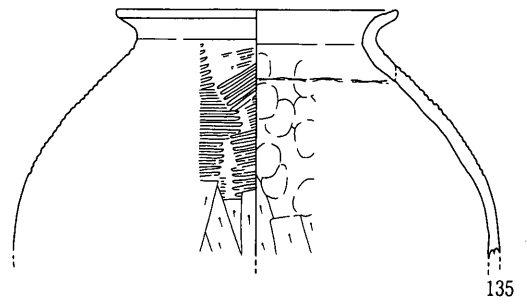
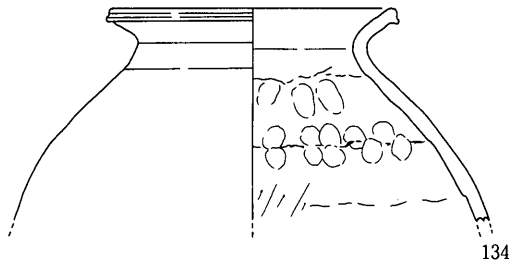
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
120	弥・甕	13.0	19.3	5.7	細・普	良好	橙	ハケ目	ハケ目→ナデ	体部に焼成後穿孔	
121	弥・甕	12.6	20.6	3.6	細・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	板ナデ・ハケ目		金雲母・角閃石
122	弥・甕	14.0			中・普	良好	にぶい黄	ハケ目→ナデ	ケズリ		
123	弥・甕	14.6			中・普	良好	灰黄褐・黒	ハケ目	ケズリ		
124	弥・甕	13.7	21.4	4.4	中・普	良好	褐	叩き→ナデ	ケズリ	煤付着	金雲母・雲母
125	弥・甕	12.4	23.8	5.3	細・普	良好	明黄褐～黒	叩き	ナデ・ケズリ		金雲母

第652図 G区SR02出土遺物(16)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
126	弥・甕	15.0			微・普	良好	明赤褐	ナデ	ナデ・ケズリ		金罨母
127	弥・甕	16.1			細・普	良好	灰黄褐	ハケ目	ハケ目・ケズリ		金罨母
128	弥・甕	15.6			中・普	良好	褐灰・ニブイ橙	叩き→ハケ目	ハケ目		金罨母・角閃石
129	弥・甕	18.0			中・普	良好	橙	ハケ目→ナデ	ケズリ		金罨母・角閃石
130	弥・甕	15.4			中・普	良好	赤褐	ハケ目	ハ目・ナデ・ケズリ		金罨母
131	弥・甕	15.6			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ケズリ		金罨母
132	弥・甕	16.0			粗・普	良好	橙・橙～黒	叩き→ナデ	ケズリ	内面に粘土継接合痕	金罨母
133	弥・甕	15.4	19.5	4.4	細・普	良好	にぶい橙	叩き→板ナデ	ケズリ→板ナデ		金罨母

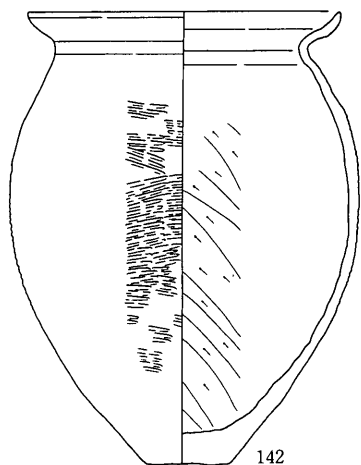
第653図 G区SR02出土遺物(17)(1/4)



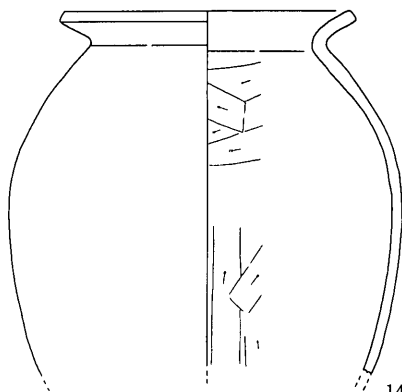
0 10cm

遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
134	弥・甕	15.0			中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ケズリ		金雲母
135	弥・甕	14.8			細・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ケズリ	ケズリ		金雲母
136	弥・甕	16.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ミガキ→ナデ	板ナデ・ケズリ		金雲母
137	弥・甕	15.4			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ハケ目・ケズリ		金雲母
138	弥・甕	18.0			細・多	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		金雲母
139	弥・甕	23.4			中・普	良好	浅黄	ナデ	ケズリ→ナデ		金雲母
140	弥・甕	21.8			中・普	良好	橙・ブイ赤褐	叩き→ハケ目	ハケ目・ケズリ		金雲母
141	弥・甕	22.0			粗・普	良好	にぶい橙	叩き→ハケ目	ハケ目・ナデ		金雲母

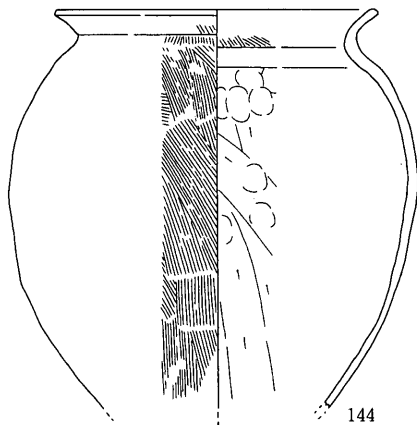
第654図 G区SR02出土遺物(18)(1/4)



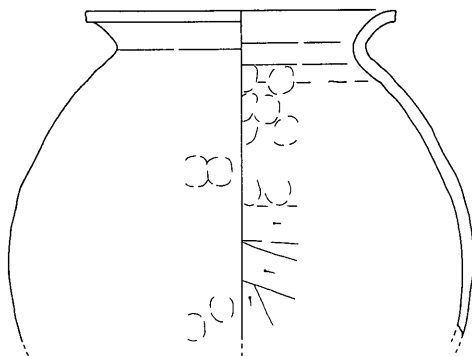
142



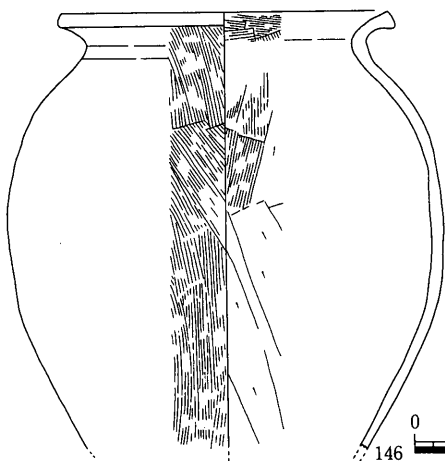
143



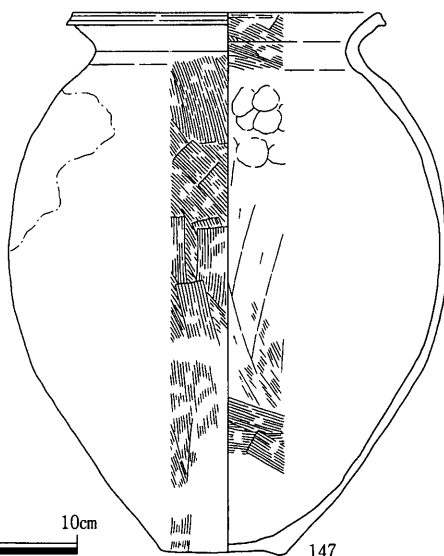
144



145



146



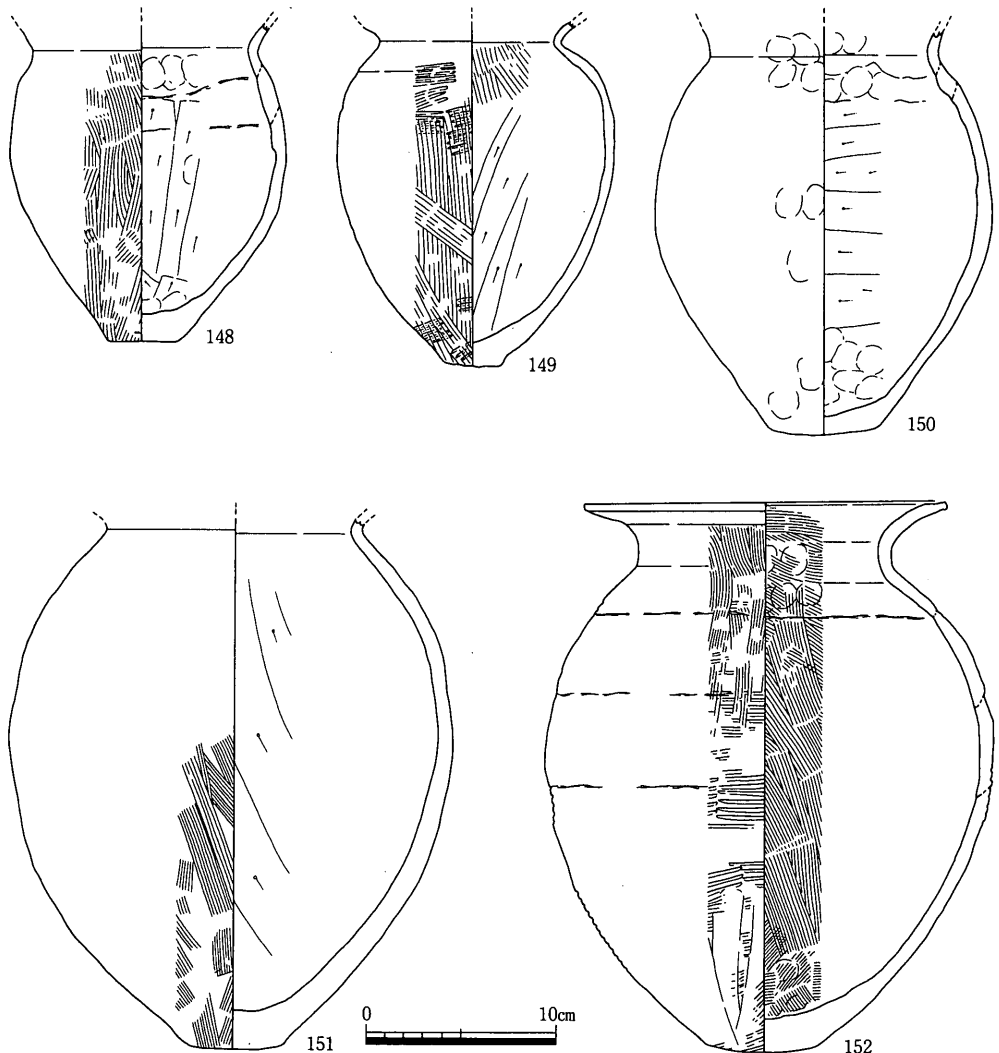
147



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
142	弥・甕	16.4	23.3	4.4	粗・普	良好	にぶい黄褐	叩き→ナデ	ケズリ	底外面ケズリ	金雲母・角閃石
143	弥・甕	15.0			粗・多	良好	灰黄	不明	ケズリ		
144	弥・甕	17.1			粗・普	良好	橙	ハケ目	ナリ・ナ目→ナ		金雲母・雲母
145	弥・甕	16.2			中・普	良好	にぶい橙・黒	ナデ	ナデ・ケズリ	外面に煤付着	金雲母
146	弥・甕	17.2			粗・普	良好	にぶい赤褐	ハケ目	ハケ目・ケズリ		金雲母
147	弥・甕	16.0	28.4	6.5	粗・普	良好	橙	ハケ目	ハケ目・ケズリ		

第655図 G区SR02出土遺物(19)(1/4)

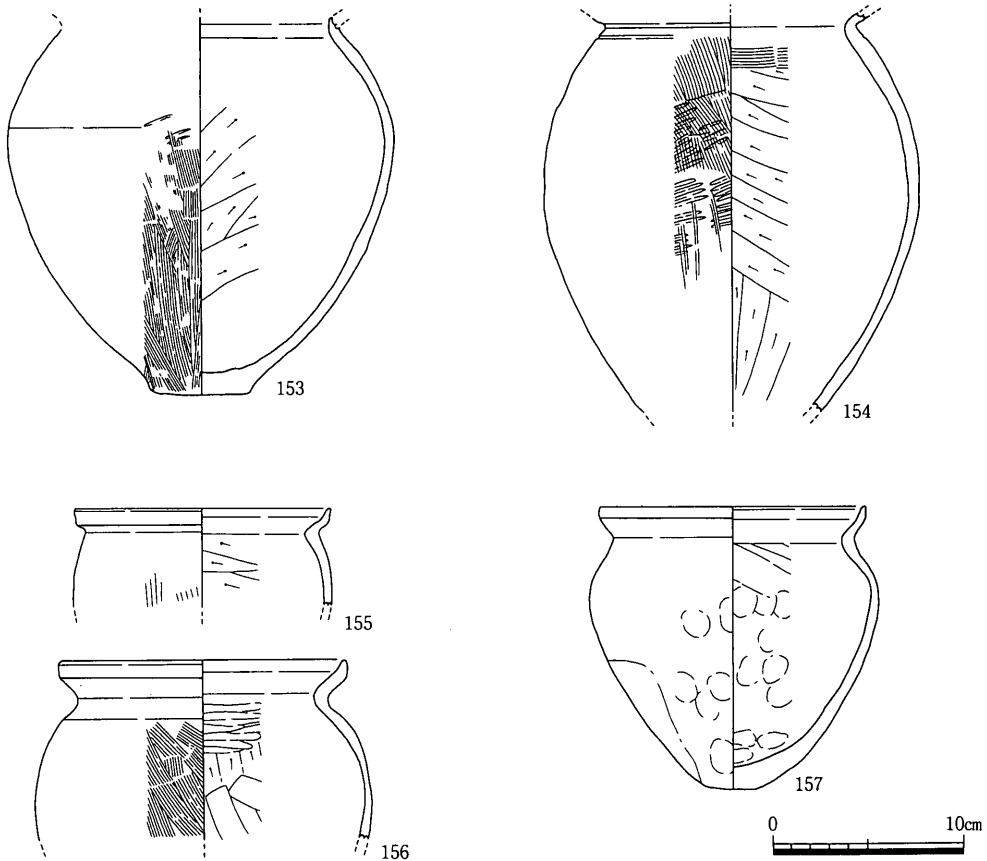
下半は欠損しているが、上半は大きく膨らんでいる。内面の上端部にはハケ目が見られる。139は口縁部が肥厚し、141の口縁部はナデることにより、端部を肥厚させ外側に幅広の面をつくる。142は口縁部は丸味を帯びて大きく屈曲したのちに、若干内湾しながら立ち上がり、弱い受け口状となっている。体部は外面に叩きを、内面にはヘラケズリを上半にまで施している。底部は平底で肥厚している。143は体部内面の上半は横方向の、下半は縦方向のヘラケズリとなっている。144は口縁部と体部の接続部の内・外面にハケ目を施している。145は体部最大径はほぼ中央部にあり、肩は張らない。146は口縁部端部を下方に



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
148	弥・甕			3.6	中・普	良好	灰黄・黒褐	ハケ目	ケズリ		
149	弥・甕			3.0	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ハケ目・ケズリ		金雲母・角閃石
150	弥・甕			6.0	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ケズリ		
151	弥・甕			5.0	中・普	良好	橙	ハケ目	ケズリ		
152	弥・甕	18.9	28.9	6.0	粗・普	良好	浅黄橙	叩き→ハケ目	ハケ目		金雲母・角閃石

第656図 G区SR02出土遺物(20)(1/4)

拡張し、口縁部の内・外面と、体部外面全体、内面上半にハケ目を施している。147は口縁部端部は外側に面をもち、口縁部内面にハケ目を施している。底部は立ち上り部が突出し、輪台状になっている。器高が28.4cmと大型の甕である。148～151は口縁部端部は欠損している。149は体部は肩が張る倒卵形で、外面は叩きの後にハケ目を施すが、上半はハケ目が及ばず叩きがそのまま残っている。内面上端部にもハケ目を施している。底部は突出する平底である。150は体部内・外面に指押しえ痕が多く残り、全体に雑な作りである。152は口縁部は大きくラップ状に開き、端部を強くナデている。口縁部から体部に至るまで若干の頸部状の部分が見られる。体部は外面に叩きの後に上半はハケ目を、下半はナデを施しているが、上半のハケ目は口縁部にまで及んでいる。内面は口縁部以下底部に至るまでハケ目となっている。体部外面には凹凸が見られ、煤が付着している。153の底部は突出しており、底部外面はハケ目の後にナデている。体部上半はハケ目の下に僅かに

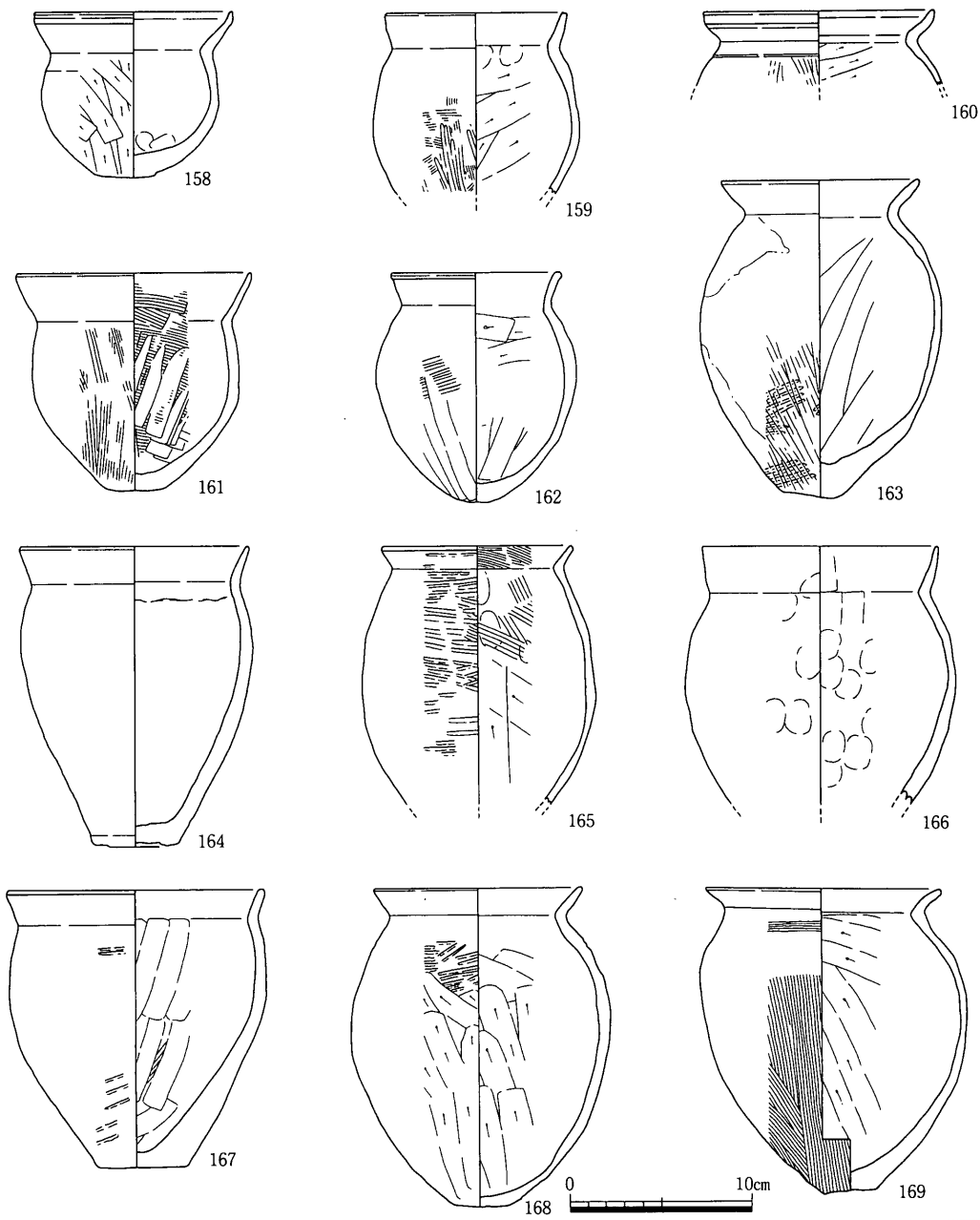


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
153	弥・甕			5.1	粗・普	良好	にぶい黄褐	叩き→ハケ目	ケズリ		金罌母・角閃石
154	弥・甕				中・普	良好	にぶい黄褐	叩き→ハケ目	ハケ目・ケズリ		角閃石
155	弥・甕	13.4			中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目→ナデ	ケズリ		金罌母
156	弥・甕	15.2			中・普	良好	明褐	ハケ目	ケズリ→ミガキ		金罌母・角閃石
157	弥・甕	14.0	14.8	2.5	粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ		金罌母

第657図 G区SR02出土遺物(21)(1/4)

叩きが残っている。154も体部外面にハケ目の下に叩きが残っている。155～157は口縁部端部を上方につまみ出し、外側に面を作り出すものである。156は体部内面はヘラケズリの後に上端部に幅広のヘラミガキを施している。157は体部最大径は上半にあり、肩が張っている。全体にナデており指押さえ痕が多い。

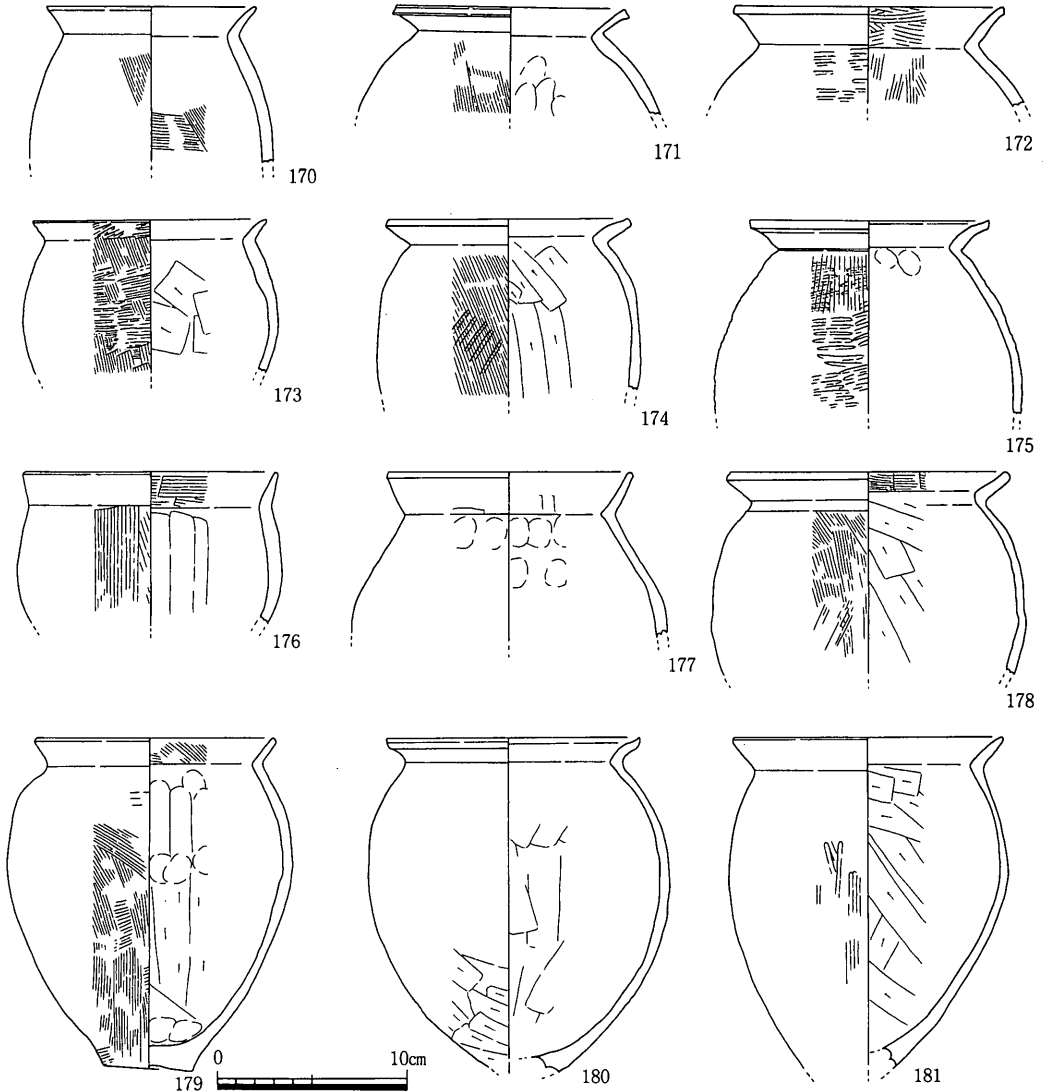
158～222は口縁部が鋭く屈曲し、斜め上方に立ち上るものである。158・161・162は器高が13cm未満の小さなものである。158は口径が体部最大径を上回るもので、口縁部端部をやや上方につまみ出している。体部は小さく外面全体にヘラケズリを施している。159は体部外面下半にヘラミガキを施す。160は口縁部は弱い受け口状になっている。161は口縁部は長く、内面に鋭い稜をもって立ち上がる。体部は張りがなく内面は口縁部以下がハケ目となっているが、体部にはその後板ナデを雑に施している。163は下半部が歪んでおり、底部は突出気味に肥厚している。体部内面には板状工具痕が残っている。164は体部下半が直線的になっており、底部は上げ底の輪台になっている。165は口縁部外面にも叩きが及び、口縁部内面はハケ目となっている。166は口縁部は内面に鋭い稜をもって立ち上り、若干内湾気味となっている。167は体部下半は直線的になり、底部にかけて肥厚する。外面は叩きをナデ消している。168は体部外面は叩きの後に下半にヘラケズリを施している。内面下半もヘラケズリである。169は体部が全体に歪んでいる。外面はハケ目、内面は全体にヘラケズリとなっている。170は口縁部立ち上り部の径が短くなっている。体部の張りもほとんどない。171は口縁部端部を下方にやや拡張し、体部は下半は欠損しているが上半は大きく開く。172は口縁部は典型的な「く」字口縁となっており、口縁部内面にはハケ目を施している。体部は大きく開き、外面には叩きが認められる。173は体部上半は肥厚しており、下半はヘラケズリのため薄くなっている。外面は叩きの後にハケ目を施しているが、叩きは口縁部まで及んでいる。174は体部中央部は直線的になり、内面には口縁部直下までヘラケズリを施している。175は口縁部下半は肥厚し、上半はナデにより途中で外反する。体部外面は叩きの後に上半のみにハケ目を施している。176は体部は下半が欠損しているが、扁平になっている。177は口縁部端部はやや肥厚し丸く納める。178は口縁部全体が肥厚し、内面にハケ目を施している。体部外面には煤が付着している。179は体部最大径は上半にあり、倒卵形となっている。底部は肥厚し若干の上げ底となっている。体部外面は叩きの後にハケ目を施している。180は口縁部端部を上方につまみ上げ、外側に面を作り出している。体部は最大径がほぼ中央にあり、全体に丸みを帯びている。外面の下半にヘラケズリが施されている。181は全体に歪んでおり、体部外面



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
158	弥・甕	10.8	8.9	3.3	微・普	良好	にぶい橙	ナデ・ケズリ	ナデ		金雲母
159	弥・甕	10.2			細・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目→ミガキ	ケズリ		金雲母・角閃石
160	弥・甕	12.6			微・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ケズリ		金雲母
161	弥・甕	12.8	11.9	3.4	細・普	良好	黒褐	ハケ目	ハケ目→板ナデ		雲母
162	弥・甕	9.3	12.1	2.4	中・普	良好	褐灰・灰黄褐	叩き→板ナデ	ケズリ・ナデ		
163	弥・甕	10.8	17.4	2.7	微・普	良好	灰黄褐	叩き→ハケ目	板ナデ		金雲母・角閃石
164	弥・甕	12.6	16.5	4.4	中・普	良好	橙	不明	不明	底外面ケズリ	
165	弥・甕	10.4			中・普	良好	橙	叩き	ハケ目・ケズリ		金雲母
166	弥・甕	13.0			粗・普	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ		金雲母
167	弥・甕	14.2	15.3	5.0	中・多	良好	淡橙	叩き→ナデ	ハケ目→板ナデ		
168	弥・甕	11.3	17.6	3.1	中・普	良好	にぶい褐	叩き→ケズリ	ケズリ・ナデ		金雲母・角閃石
169	弥・甕	12.9	16.9	3.0	中・普	良好	にぶい褐	ハケ目	ケズリ		金雲母

第658図 G区SR02出土遺物(22)(1/4)

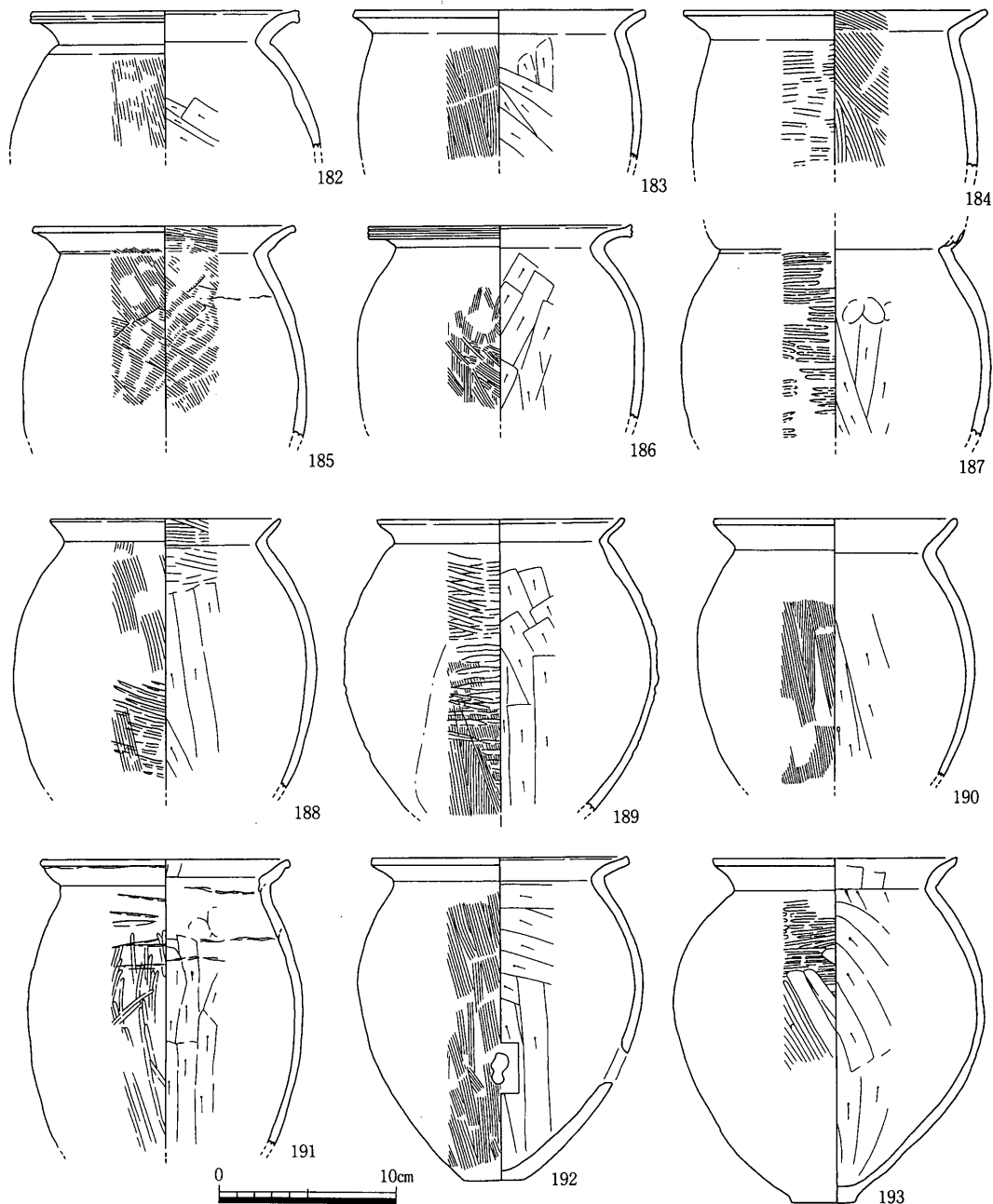
中央部にヘラミガキが少々認められる。内面は口縁部直下まで全体にヘラケズリとなっている。182は口縁部は外反し、立ち上り部内面に鋭い稜をもつ。口縁部端部は外側に面をもつ。183・184ともに体部の張りはほとんどない。184の口縁部は直線的で、内面は口縁部以下全体にハケ目を施している。185は口縁部立ち上り部の外面にまでハケ目が及んで



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
170	弥・甕	11.0			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ハケ目		金罌母
171	弥・甕	12.0			微・普	良好	赤・ブ黒・黒	ハケ目	ナデ		金罌母
172	弥・甕	14.0			中・普	良好	黄褐・黒	叩き→ナデ	ハケ目		金罌母・角閃石
173	弥・甕	12.3			細・普	良好	にぶい橙	叩き→ハケ目	ケズリ	口縁部外面に叩き	金罌母・角閃石
174	弥・甕	12.4			中・普	良好	褐灰・橙	叩き→ハケ目	ケズリ		罌母
175	弥・甕	12.5			細・普	良好	にぶい褐	叩き→ハケ目→ナデ	ナデ		金罌母・角閃石
176	弥・甕	13.2			細・普	良好	灰赤・ブ・灰	ハケ目→ナデ	ハケ目・板ナデ		金罌母
177	弥・甕	12.8			中・普	良好	黒・にぶい橙	ナデ	ナデ		金罌母
178	弥・甕	14.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ハケ目・ケズリ		金罌母・角閃石
179	弥・甕	12.7	17.4	4.7	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ハケ目・ケズリ		角閃石
180	弥・甕	13.3			中・普	良好	黒褐	ナデ・ケズリ	板ナデ		
181	弥・甕	14.2			粗・普	良好	ニブイ黄橙・黒	ナデ・ミガキ	ケズリ		金罌母

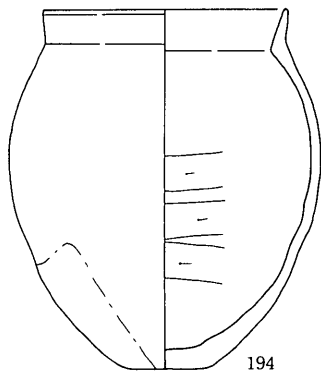
第659図 G区SR02出土遺物(23)(1/4)

いる。186は口縁部は外反し外側に面をもち、沈線が2条巡らされている。187は口縁部端部が欠損しているものの内湾して立ち上り、内面に鋭い稜をもつ。体部外面には全体に叩きが見られ、煤が下半に付着している。188は口縁部内面と体部上端部内面にハケ目を施している。189は体部外面の叩きは2重に施しており、下半はハケ目で消している。口縁部は薄くなっている。191は体部の張りはなく、長胴になっている。体部外面にはヘラミガキが施されている。口縁部は肥厚し、端部は丸く突出している。192は体部最大径は中央やや上寄りにあり、倒卵形をしている。また体部中央やや下寄りに焼成後の穿孔が1箇所認められる。193の体部も倒卵形で、底部は突出した平底となっている。体部外面は叩きの後に下半にハケ目とナデを施している。口縁部端部は先細りになっている。194は口縁部は直立に近く直線的に立ち上り、端部は丸く納める。195は体部外面は叩きの後にナデているが、下半は叩きが残る。体部中央部から下は器壁がヘラケズリのため薄くなっている。底部は肥厚している。196は体部最大径は上半にあり肩が張っているが、全体に歪んでいる。197は外面の叩きは口縁部にまで及んでいる。体部内面はヘラケズリの後にハケ目を施している。198の体部は倒卵形となっている。199は口縁部端部は先細りで丸く納めている。体部外面には叩きの後に粗いハケ目を施しているが、叩きは口縁部立ち上り部にまで及んでいる。外面には煤が付着している。200は体部内面上半に粘土紐の接合痕が残っている。また体部内面上端部にはヘラ状工具の端部の当たった痕がある。201は口縁部端部は先細りとなっている。底部内面には指押さえ痕が顕著であり、肥厚している。202は体部外面に粗いハケ目の後にヘラケズリを施している。203は口縁部端部が先細りとなる。体部は上半のみであるが、球形となっている。204は体部内面上端に粗いハケ目を施す。205は口縁部は外反し、端部は外側に面をもつ。口縁部内面には細かいハケ目を施す。206は口縁部端部を上方につまみ上げている。体部外面にはヘラミガキが施されている。体部内面上端部はヘラケズリのために段になっている。207は口縁部は典型的な「く」字口縁で、端部は外側に肥厚する。体部内面の上半は縦方向に指でナデており、下半は器壁に凹凸が見られる。208は全体に均整のとれた形をしている。体部外面はヘラケズリの後に叩きを2重に施し、最後に上半にハケ目を施している。209は体部下半が途中で終わったような感じで、幅広の凹凸のあるやや歪んだ底部となっている。210は体部の張りが無い。211は体部最大径が上半にあり、それ以下は直線的になる。212は底部はヘラケズリによって器壁を抉りとり、雑な作りとなっている。体部には叩きを強く施している。213は口縁部をナデることによって端部を肥厚させている。214は体部外面に叩きを、内面

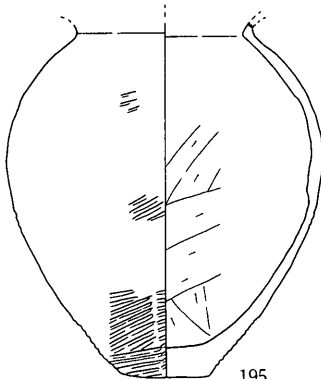


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
182	弥・甕	15.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ナデ・ケズリ		金雲母
183	弥・甕	16.6			中・普	良好	暗褐・コブイ褐	ハケ目	ケズリ		金雲母
184	弥・甕	16.9			中・多	良好	黒褐	叩き→ナデ	ハケ目		金雲母
185	弥・甕	14.6			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ハケ目		
186	弥・甕	14.8			中・普	良好	コブイ黄褐	ハケ目	ケズリ	内面に鋭いケズリ	金雲母
187	弥・甕				中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ナデ	ナデ・ケズリ		金雲母・角閃石
188	弥・甕	13.0			中・普	良好	コブイ黄褐・黒	叩き→ハケ目→ナデ	ハケ目・ケズリ	外面に煤付着	金雲母
189	弥・甕	14.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ケズリ		角閃石
190	弥・甕	13.6			中・普	良好	にぶい褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		角閃石
191	弥・甕	13.8			中・普	良好	灰黄褐	叩き→ミガキ	ナデ・ケズリ		金雲母
192	弥・甕	14.4	18.3	3.4	中・普	良好	にぶい黄・黒	ハケ目	ケズリ	胴部に焼成後穿孔	雲母・角閃石
193	弥・甕	13.8	19.4	3.6	中・普	良好	にぶい褐～黒	ナデ→ミガキ・板ナデ	ケズリ		金雲母

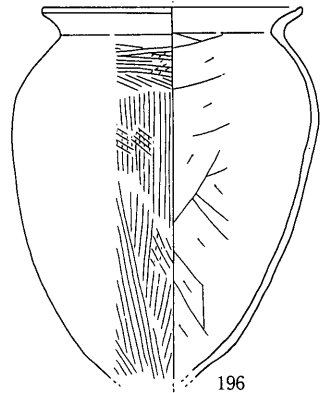
第660図 G区SR02出土遺物(24)(1/4)



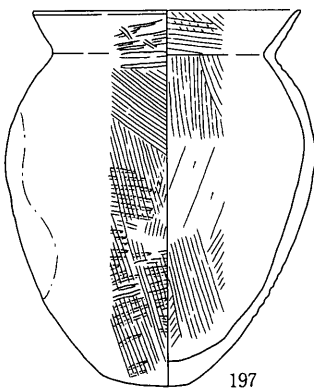
194



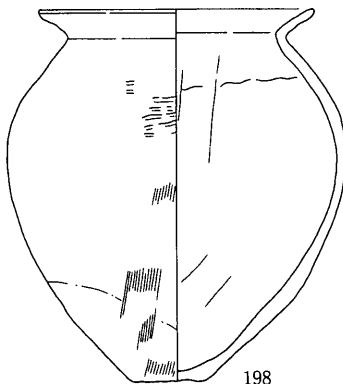
195



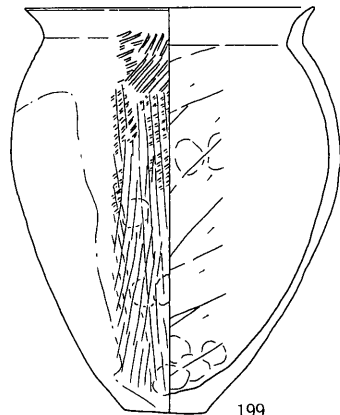
196



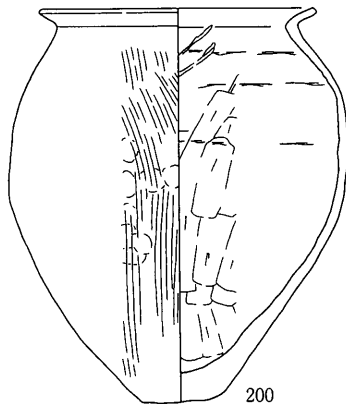
197



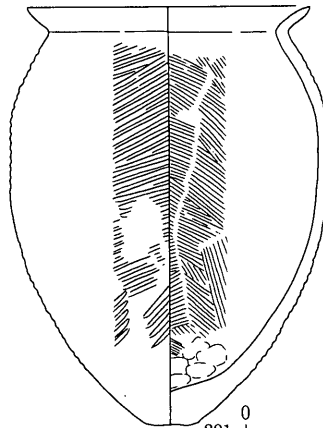
198



199



200

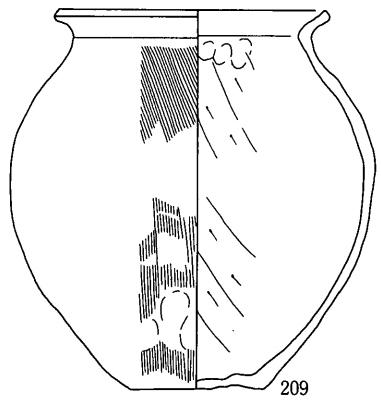
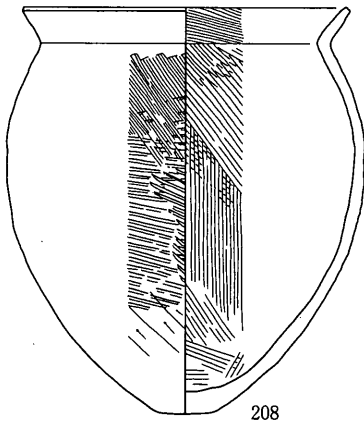
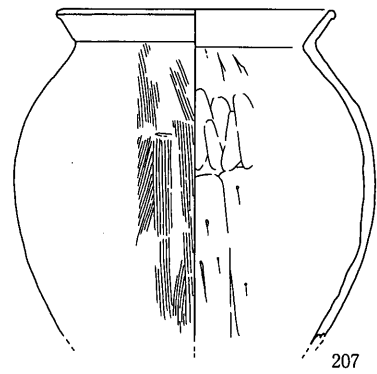
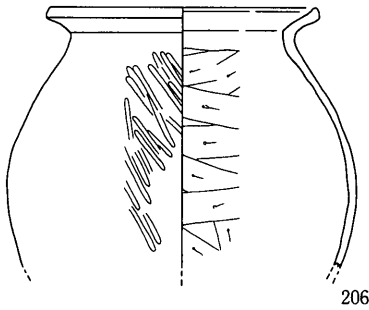
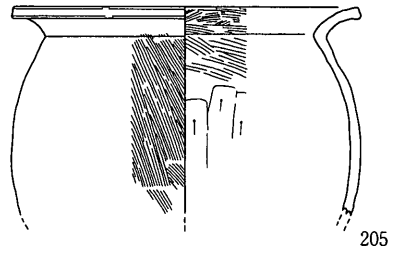
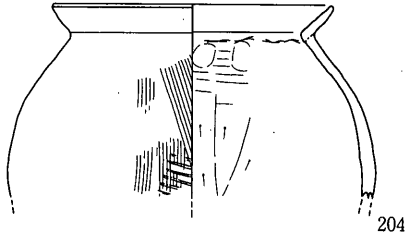
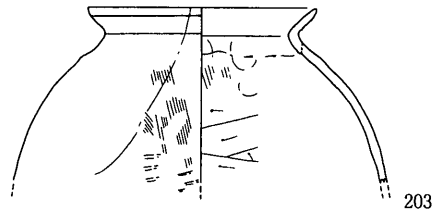
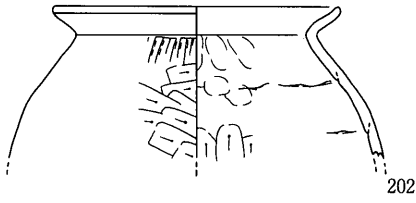


201



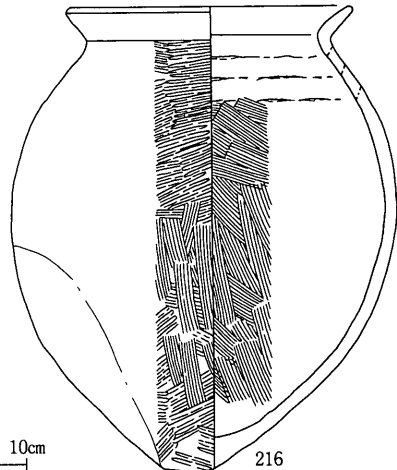
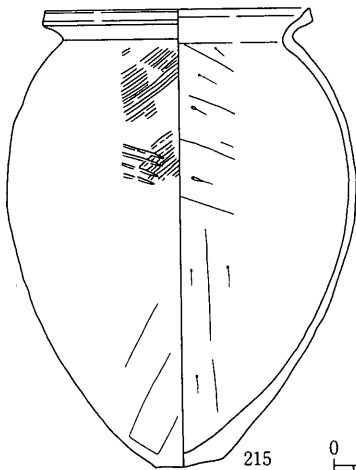
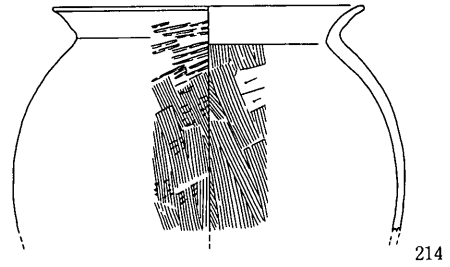
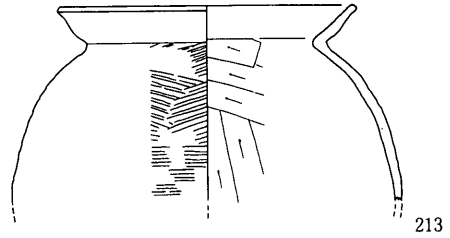
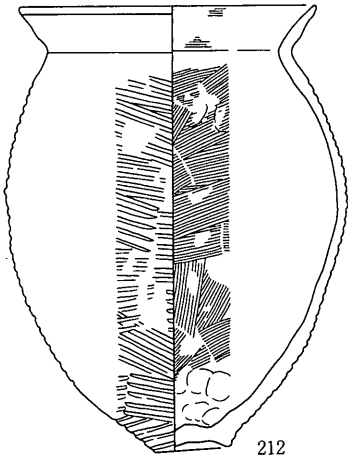
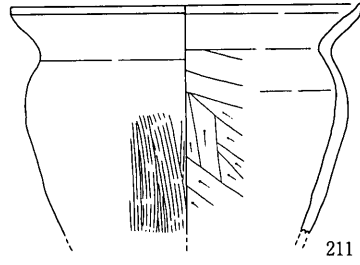
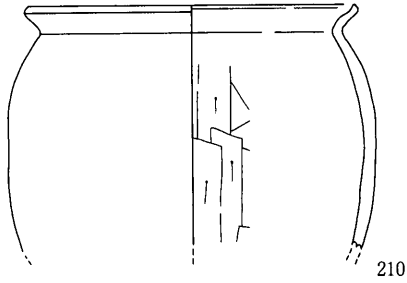
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
194	弥・甕	12.7	18.2	5.0	中・普	良好	橙・黒	ナデ	ナデ・ケズリ	底外面にケズリ	金雲母
195	弥・甕			4.7	粗・普	良好	黒褐・暗灰黄	叩き→ナデ	ナデ・ケズリ		金雲母・雲母
196	弥・甕	13.6			中・普	良好	明黄褐	ハケ目	ケズリ		金雲母
197	弥・甕	14.0	19.6	4.6	細・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ハケ目→ケズリ	口縁外面に叩き	
198	弥・甕	14.4	19.5	3.9	中・普	良好	にぶい黄	叩き→ハケ目	ナデ		金雲母・角閃石
199	弥・甕	15.3	21.2	4.3	中・普	良好	橙	叩き→ハケ目	ケズリ		金雲母
200	弥・甕	14.3	20.6	4.1	中・普	良好	灰黄褐	ハケ目	ナデ・ケズリ		金雲母・角閃石
201	弥・甕	14.8	21.9	2.9	細・普	良好	明赤褐	叩き	ハケ目		金雲母・角閃石

第661図 G区SR02出土遺物(25)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
202	弥・甕	14.8			細・普	良好	にぶい赤褐	ハケ目→ケズリ	ナデ・ケズリ		金雲母
203	弥・甕	12.0			中・普	良好	灰黄褐・橙	叩き→ハケ目	ハ目→好・好リ		金雲母
204	弥・甕	14.6			粗・普	良好	にぶい橙	叩き→ハケ目	ハケ目・ケズリ		
205	弥・甕	17.9			細・普	良好	赤褐	ハケ目	ハケ目・ケズリ		金雲母
206	弥・甕	14.0			中・普	良好	にぶい黄橙	ミガキ	ケズリ		
207	弥・甕	14.0			中・多	良好	赤褐	ハケ目	ナデ・ケズリ		金雲母
208	弥・甕	18.8	21.2	3.4	中・普	良好	灰黄・黒褐	好リ→叩き→ハ目	ハケ目		
209	弥・甕	14.0	19.9	7.0	粗・普	良好	橙	ハケ目	ケズリ		

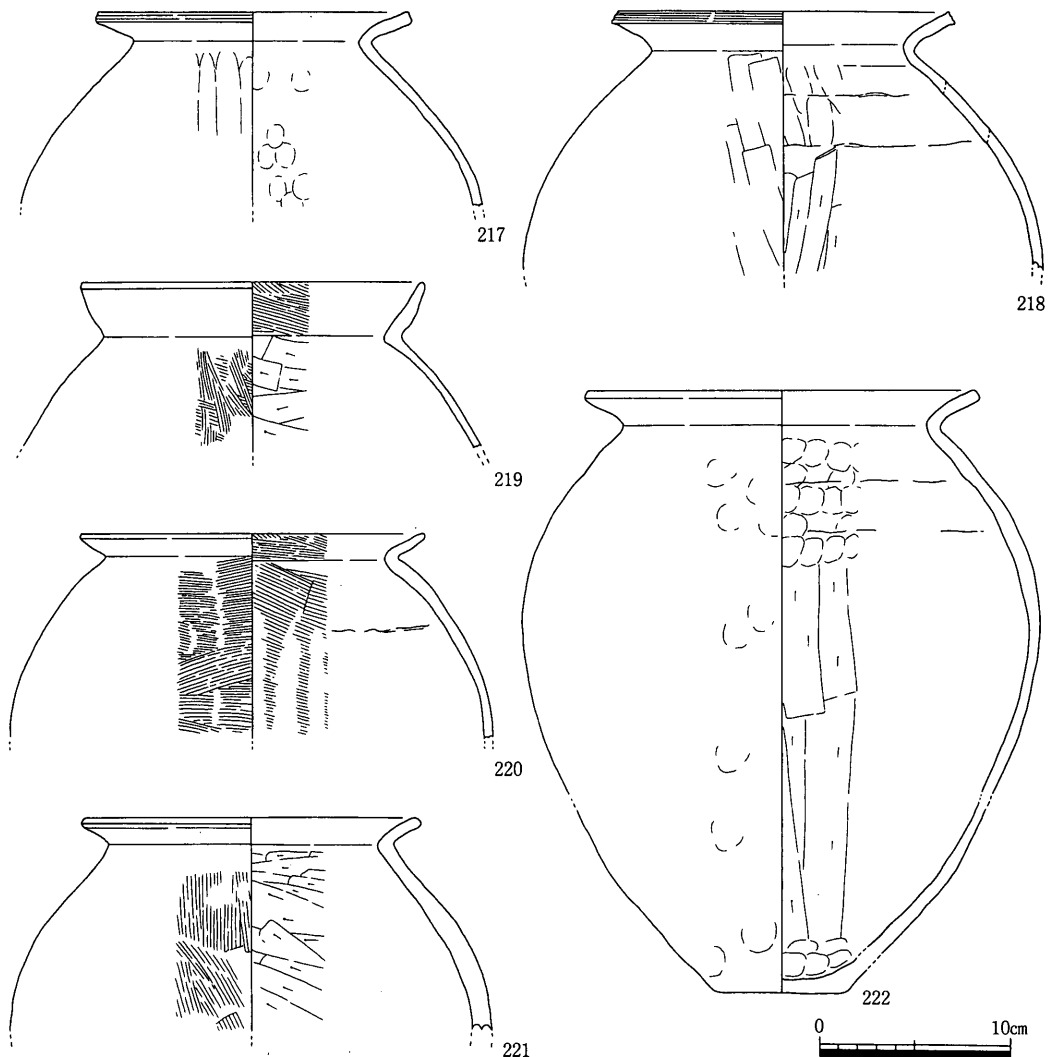
第662図 G区SR02出土遺物(26)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
210	弥・甕	17.0			中・多	良好	浅黄橙・褐灰	ナデ	ケズリ		
211	弥・甕	18.4			中・普	良好	にぶい黄	ナデ・ハケ目	ケズリ		金雲母
212	弥・甕	15.7	23.3	4.1	粗・普	良好	褐・橙	叩き	ハケ目	底上げ底	
213	弥・甕	15.4			中・普	良好	橙・赤褐	叩き	ケズリ		金雲母
214	弥・甕	16.4			中・普	良好	にぶい褐	叩き→ハケ目	ケズリ→ハケ目		金雲母
215	弥・甕	14.0	24.0	3.7	粗・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ナデ	ケズリ		
216	弥・甕	15.1	24.4	2.7	中・普	良好	橙	叩き→ハケ目	ナデ・ハケ目	底外面叩き	

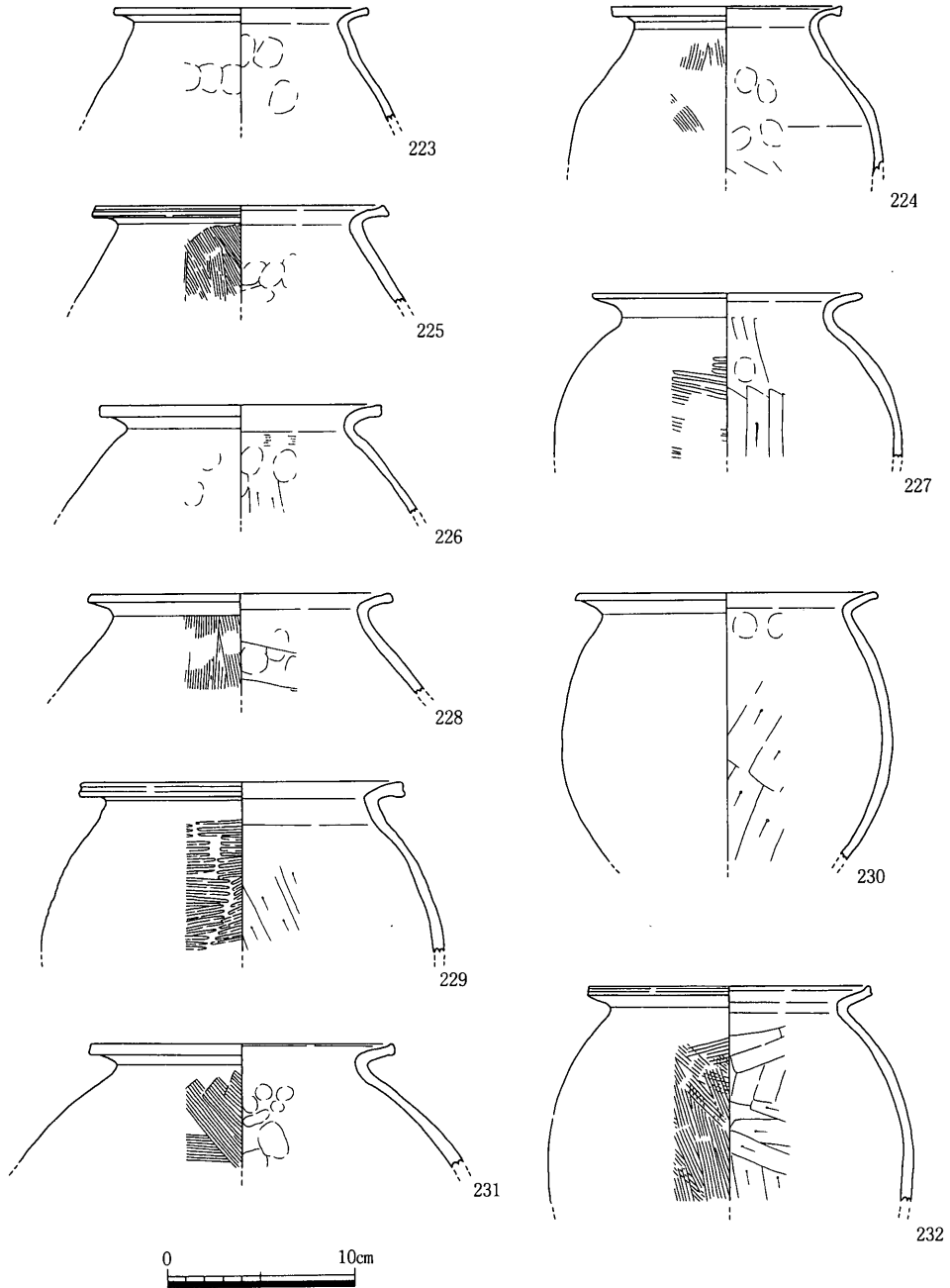
第663図 G区SR02出土遺物(27)(1/4)

にはヘラケズリをそれぞれ施した後に丁寧にハケ目を施している。外面の叩きは口縁部にまで及んでいる。215は口縁部端部を上方につまみ上げ、外側に面を作っている。216は体部外面全体に丁寧に叩きを施した後に、中央部のみにハケ目を加えている。内面上端部には粘土紐の接合痕が残る。217は体部上半を指で縦方向にナデている。これに対し218は板状工具でナデている。219は口縁部の中央が肥厚し、内面にハケ目を施す。220は全体にハケ目が及ぶ。221は体部上半は中央部に向うほど肥厚している。222は体部内面の上半に粘土紐接合部を中心に指押さえ痕が顕著である。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
217	弥・甕	16.2			細・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		金雲母
218	弥・甕	18.0			中・普	良好	にぶい橙	板ナデ	ナデ・ケズリ		金雲母・角閃石
219	弥・甕	17.8			中・普	良好	橙	ハケ目	ハケ目・ケズリ		金雲母
220	弥・甕	18.0			細・普	良好	明褐	ハケ目	ハケ目		金雲母
221	弥・甕	17.0			細・普	良好	にぶい赤褐	ハケ目	ケズリ		金雲母
222	弥・甕	20.2	31.5	6.7	粗・普	良好	にぶい褐	ナデ	ケズリ		金雲母・角閃石

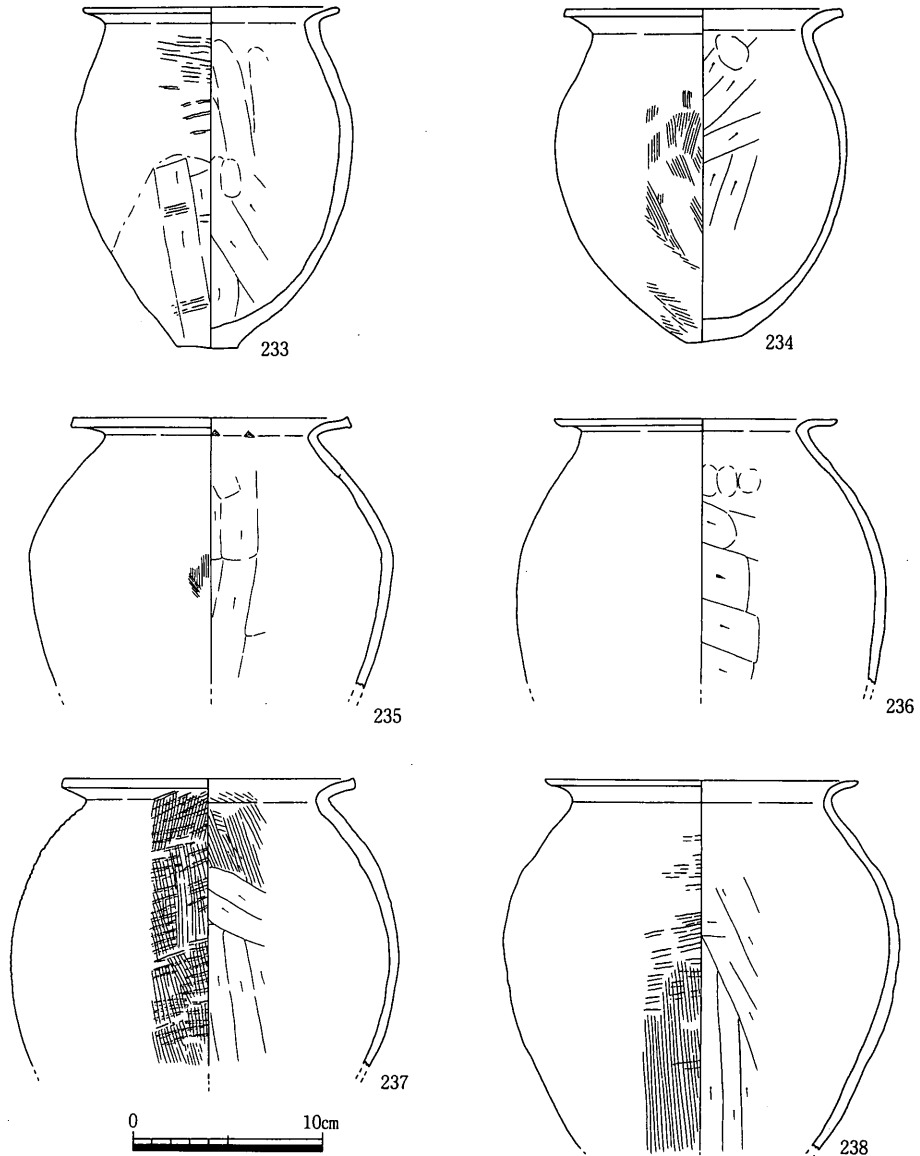
第664図 G区SR02出土遺物 (28) (1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
223	弥・甕	13.5			細・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ		金罨母
224	弥・甕	12.2			微・普	良好	にぶい褐	ハケ目→ナデ	ナデ・ケズリ		角閃石
225	弥・甕	15.2			細・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ナデ		角閃石
226	弥・甕	15.0			中・普	良好	橙	ナデ	ハメ→ナデ・ケズリ		罨母
227	弥・甕	14.2			微・普	良好	黒褐	叩き→ナデ	板ナデ・ケズリ		金罨母
228	弥・甕	16.0			中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目	ナデ		金罨母・角閃石
229	弥・甕	16.8			中・普	良好	にぶい橙	叩き	ナデ・ケズリ		金罨母
230	弥・甕	15.8			中・普	良好	橙~コブイ赤褐	ナデ	ナデ・ケズリ		金罨母
231	弥・甕	16.0			中・普	良好	明黄褐	ハケ目	ナデ		金罨母
232	弥・甕	15.2			中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目	ナデ・ケズリ		角閃石

第665図 G区SR02出土遺物(29)(1/4)

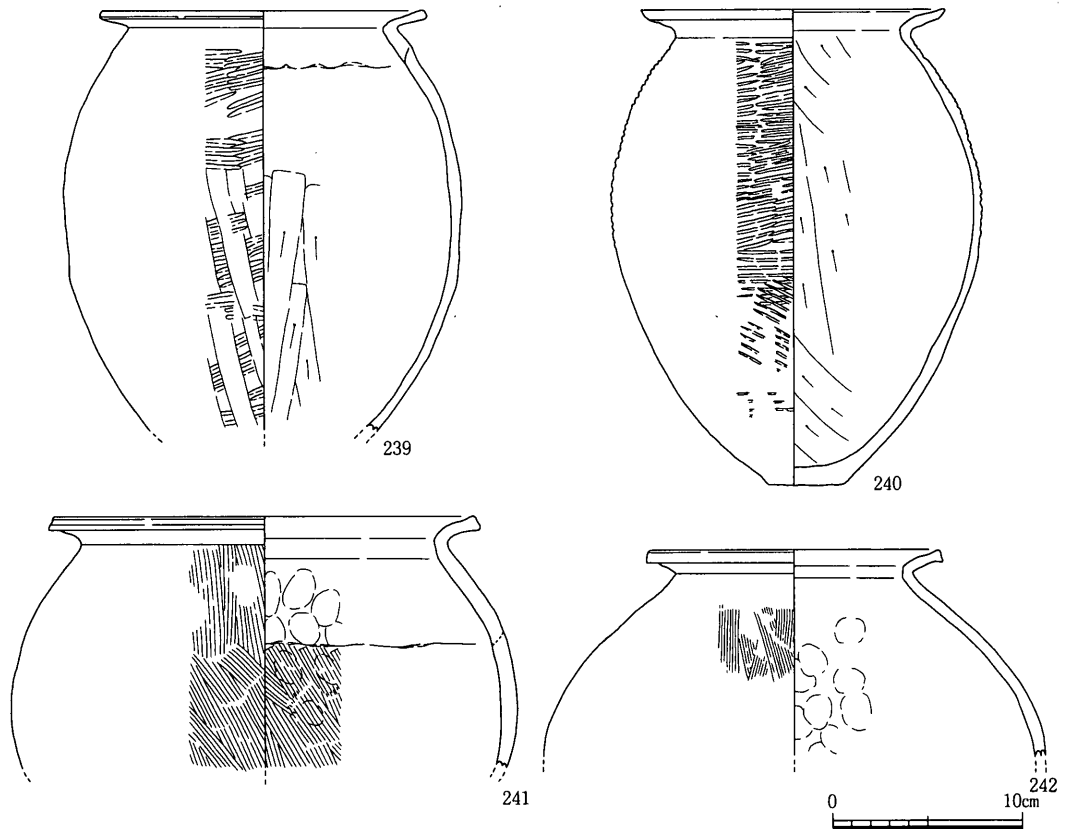
223～242は口縁部が大きく横へ開くものである。223・225はともに体部の肩の張りがな
い。224は口縁部は丸みをもって大きく反転し，端部を若干上方へ拡張する。226は口縁部
が肥厚するものである。227は体部から口縁部が直立気味になった後に丸みをもって大き
く開き，端部は丸く納める。体部外面には叩きが施されている。229は口縁部は外側に面
をもち，沈線が1条巡っている。体部外面には叩きが施されている。231は体部上半のみ



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
233	弥・甕	13.4	17.2	3.7	中・普	良好	黄褐	叩き→ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	外面下半叩き後ナデ	金雲母・角閃石
234	弥・甕	14.4	16.8	3.0	中・普	良好	黄褐	ハケ目	ケズリ・ナデ		金雲母
235	弥・甕	14.4			細・普	良好	ニブイ褐・黒	ハケ目→ナデ	ケズリ		金雲母
236	弥・甕	14.8			粗・普	良好	にぶい褐～黒	ナデ	ケズリ	口縁部水平に開く	雲母・角閃石
237	弥・甕	15.4			中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ハケ目・ケズリ		金雲母・角閃石
238	弥・甕	16.4			中・普	良好	ニブイ黄・橙	叩き→ハケ目	ナデ・ケズリ	外面に煤	金雲母・角閃石

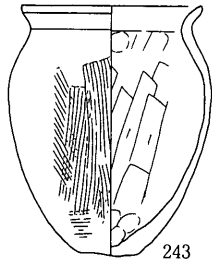
第666図 G区SR02出土遺物(30)(1/4)

のものであるが、大きく球形に開く。体部内面には指押さえが顕著である。232は口縁部端部を上方につまみ上げ、外側に面をもち擬凹線が1条巡っている。体部外面には全体にハケ目が施されている。233は体部上半は肥厚しているが、下半はヘラケズリのため薄くなっている。体部外面上半は叩き、下半はヘラケズリとなっている。底部は突出した平底である。234は下半が歪んでいる。236は長めの口縁部は真横に開く。237は体部外面に叩きの後にハケ目を施しているが、外面の叩きとハケ目は口縁部にまで及んでいる。体部内面上端部はハケ目となっている。238は口縁部はやや直立気味に立ち上がった後に横に開く。体部外面は叩きの後に下半にハケ目を施している。239・240は体部の張りはあまりなく、体部最大径はほぼ中央部にある。外面には叩きを施している。239は叩きの後に板ナデを部分的に行なっている。240の口縁部端部は先細りになる。体部外面の叩きは強く施されている。241は口縁部端部に面をもち、擬凹線が巡る。体部は内・外面ともにハケ目である。242は体部が大きく膨らんでいる。

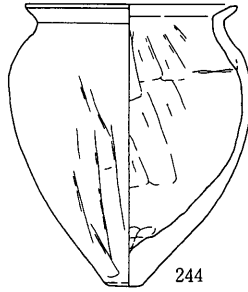


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
239	弥・甕	17.5			中・普	良好	にぶい橙	叩き→板ナデ	ナデ・ケズリ		金襴母
240	弥・甕	16.0	25.5	4.0	中・普	良好	にぶい黄褐	叩き	ケズリ		
241	弥・甕	22.7			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ハケ目		
242	弥・甕	15.0			細・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ		金襴母・角閃石

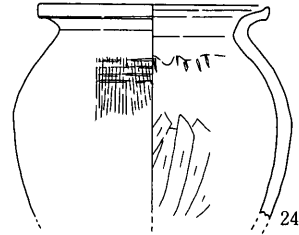
第667図 G区SR02出土遺物(31)(1/4)



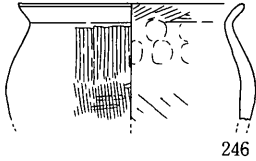
243



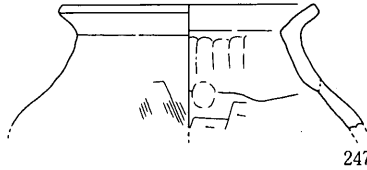
244



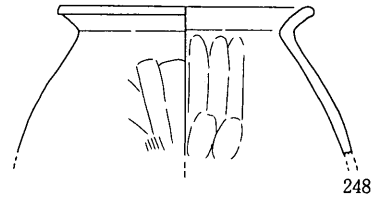
245



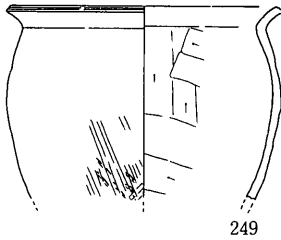
246



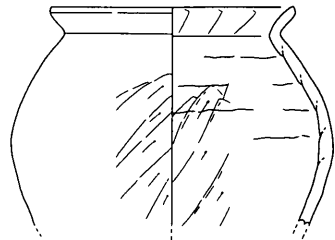
247



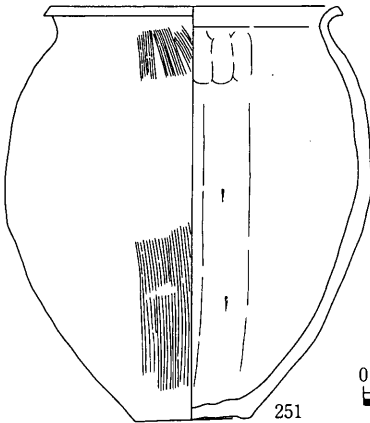
248



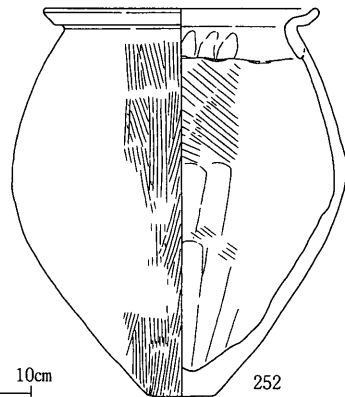
249



250



251



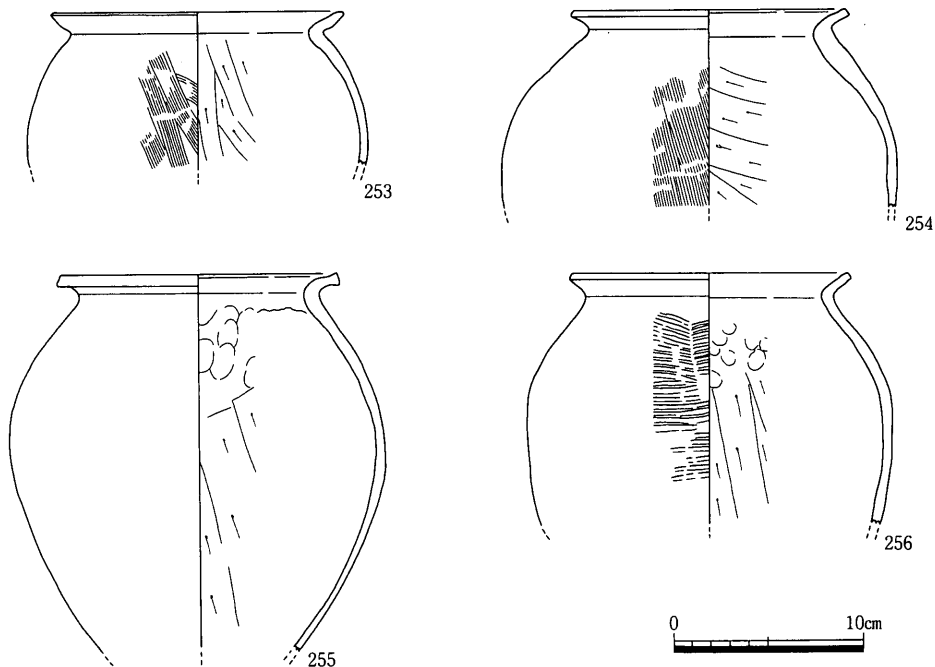
252



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
243	弥・甕	9.4	12.8	4.0	細・普	良好	灰黄褐・黒褐	叩き→ハケ目	ケズリ		金罌母
244	弥・甕	11.0	14.0	2.0	細・普	良好	灰褐	板ナデ	ケズリ	外面板状工具痕多い	金罌母・角閃石
245	弥・甕	12.1			細・普	良好	にぶい黄褐	叩き→ハケ目	ナデ・ケズリ		金罌母・角閃石
246	弥・甕	11.8			細・普	良好	黄灰・浅黄	叩き→ハケ目	ハケ目・ナデ・ケズリ		
247	弥・甕	13.0			中・普	良好	浅黄橙・灰白	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
248	弥・甕	13.5			中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ハケ目	ナデ		
249	弥・甕	14.0			中・普	良好	明黄褐	ナデ・ハケ目	ケズリ		金罌母
250	弥・甕	12.7			中・普	良好	にぶい赤褐	ナデ・ケズリ	板ナデ・ケズリ		金罌母
251	弥・甕	15.1	22.0	6.0	中・普	良好	橙・橙～黒	ハケ目・ナデ	ナデ・ケズリ		罌母
252	弥・甕	14.5	20.5	3.6	細・普	良好	褐	ハケ目	ハケ目・板ナデ		金罌母・角閃石

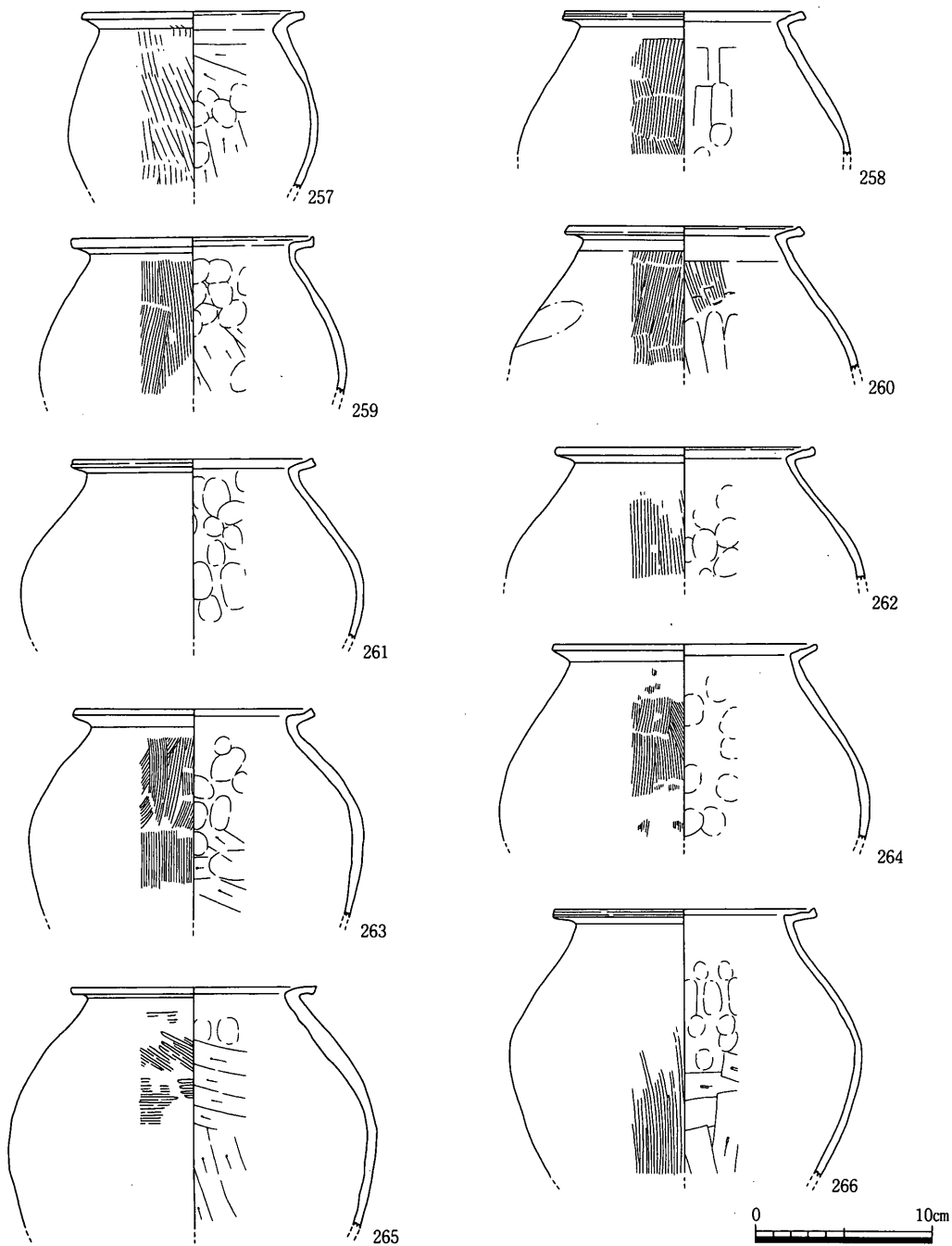
第668図 G区SR02出土遺物(32)(1/4)

243～256は短めの口縁部が斜め上方に立ち上がるものである。243は器高が12.8cmと小型である。体部外面は大部分がハケ目となっているが、底部付近に若干叩きが残っている。底部は少々歪んでいる。244は体部最大径は上半にあり、体部上半に比べて底部は小さくなる。また底部付近はかなり肥厚している。245は口縁部端部を上方につまみ上げている。体部内面上端部にヘラ状工具による傷痕がある。247は体部上半の接合部が若干ずれており、さらに強く押すようにナデているので壺の頸部のような形状となっている。また体部内面上端部は指で縦方向にナデている。250は口縁部内面に板ナデを断続的に施し、板の木口部の痕跡が残っている。体部は内・外面にヘラケズリを施し、また内面には粘土紐の接合痕が残っている。251は底部は幅広で若干輪台状になる。252は口縁部は横に開いた後に斜め上方に立ち上がり二重口縁状になる。体部最大径は中央部にあり、底部は内面中央部が盛り上がっている。体部内面はハケ目の後に板ナデを下半に施している。253は口縁部が肥厚しており、端部は上面に緩い面をもっている。254は体部上端部は肥厚しているが、それ以下はヘラケズリのために薄くなっている。体部は上半のみであるが、大きく膨らんでいる。255は体部外面全体をナデている。256は体部外面には叩きを、内面にはヘラケズリを施している。また体部内面上端部には指押さえ痕が顕著である。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
253	弥・甕	15.4			細・普	良好	橙・黒	ハケ目	ケズリ		金罌母
254	弥・甕	14.4			中・普	良好	明赤褐	ハケ目	ナデ・ケズリ	口縁部直下の器壁厚い	金罌母
255	弥・甕	14.6			中・普	良好	にぶい黄	ナデ	ケズリ		金罌母・角閃石
256	弥・甕	14.5			中・普	良好	にぶい橙	叩き	ナデ・ケズリ		金罌母・角閃石

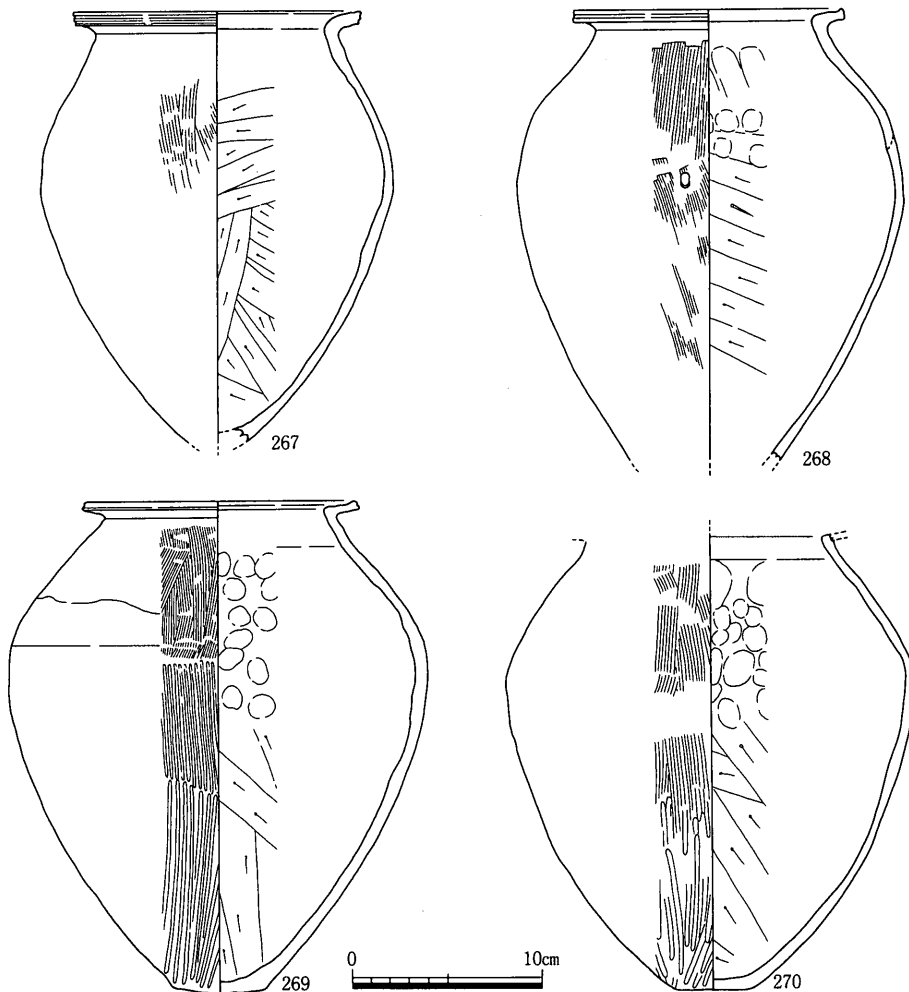
第669図 G区SR02出土遺物(33)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
257	弥・甕	12.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ケズリ		角閃石
258	弥・甕	13.4			微・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ		金雲母・角閃石
259	弥・甕	13.6			細・普	良好	にぶい褐	ハケ目	ケズリ		金雲母・雲母
260	弥・甕	13.6			細・普	良好	黄褐	ハケ目	ハケ目・ナデ		
261	弥・甕	13.6			中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ		金雲母・角閃石
262	弥・甕	14.6			中・普	良好	橙	ハケ目	ナデ		金雲母・角閃石
263	弥・甕	13.4			細・普	良好	にぶい黄・黒	ハケ目	ケズリ		金雲母・角閃石
264	弥・甕	14.8			中・普	良好	褐灰・橙	ハケ目	ナデ		角閃石
265	弥・甕	13.9			中・普	良好	明褐～暗褐	叩き→ナデ	ケズリ		金雲母・角閃石
266	弥・甕	14.6			中・普	良好	明褐	ナデ・ミガキ	ケズリ		金雲母・角閃石

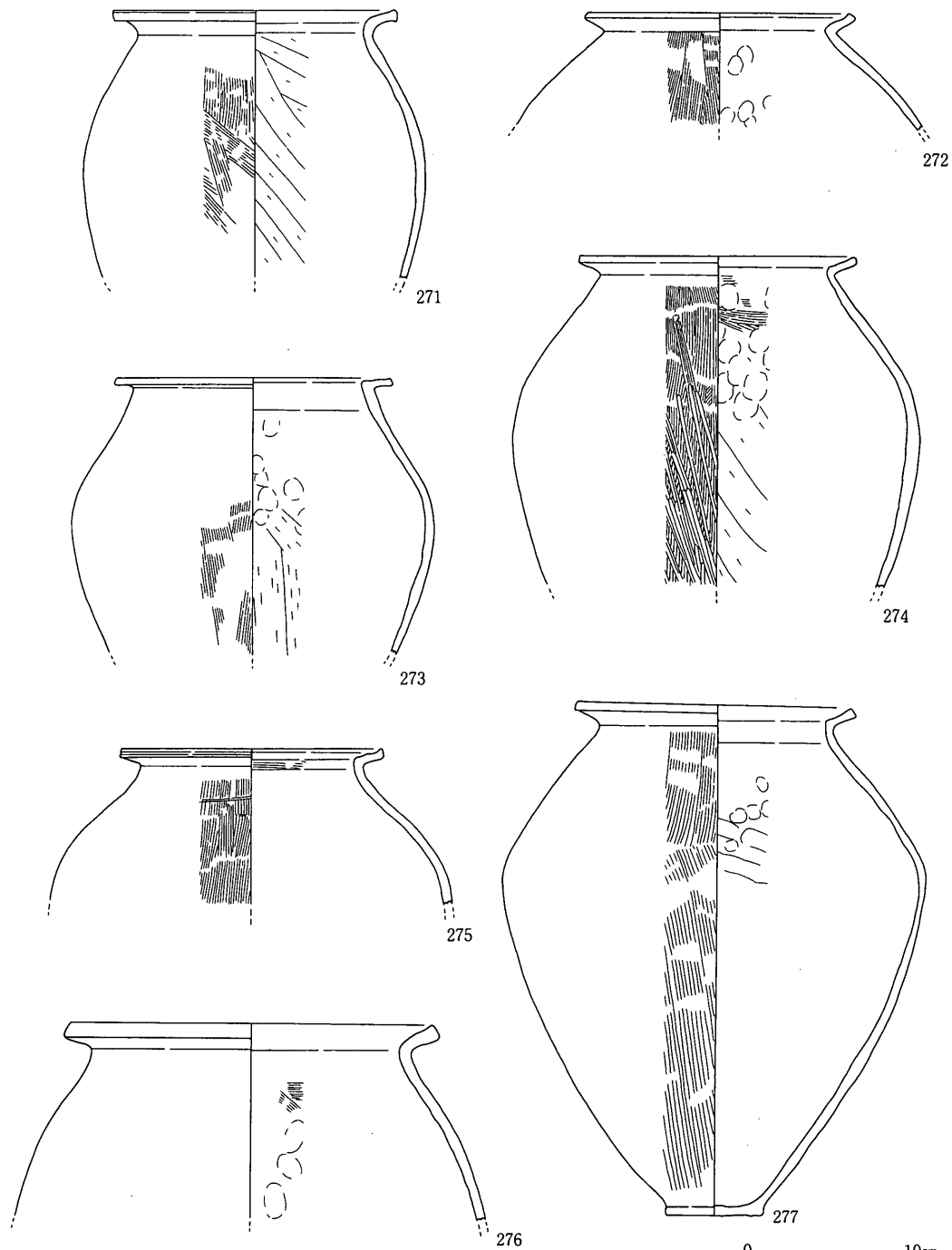
第670図 G区SR02出土遺物(34)(1/4)

257~279は口縁部は短くほぼ横へ開くものである。この一群は体部内面の上半を指押さえ、下半をヘラケズリするものが多いが、ヘラケズリが上端部にまで及ぶものもある。体部最大径は上半にあり、倒卵形のものが多くなっている。257は体部上半の器壁の一部が極端に薄くなっている。外面には粗いハケ目を施している。内面のヘラケズリは上端部にまで及ぶ。259は口縁部端部を上方へつまみ上げている。260は体部内面上端部にハケ目を施している。262は口縁部端部を強くナデており、口縁部内面に凹線が生じている。264は体部外面に煤が付着している。265は体部上半が肥厚し、外面には叩きが施されているが、下半は摩滅している。266は体部外面の上半はナデているが、下半にはヘラミガキが施されている。267は口縁部端部は外側に面をもち、擬凹線が2条巡っている。体部外面に煤



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
267	弥・甕	15.0			微・普	良好	黒・コブイ黄褐色	ハケ目→ナデ	ナデ・ケズリ		金罌母
268	弥・甕	14.2			粗・普	良好	赤褐色	ハケ目	ケズリ	体部に焼成後穿孔2個	金罌母
269	弥・甕	14.1	25.7	4.9	中・普	良好	にぶい褐色	ハケ目・ミガキ	ケズリ	外面に煤付着	角閃石
270	弥・甕			4.2	中・普	良好	黒・コブイ黄褐色	ハケ目→ミガキ	ケズリ	底ヘラミガキ	金罌母

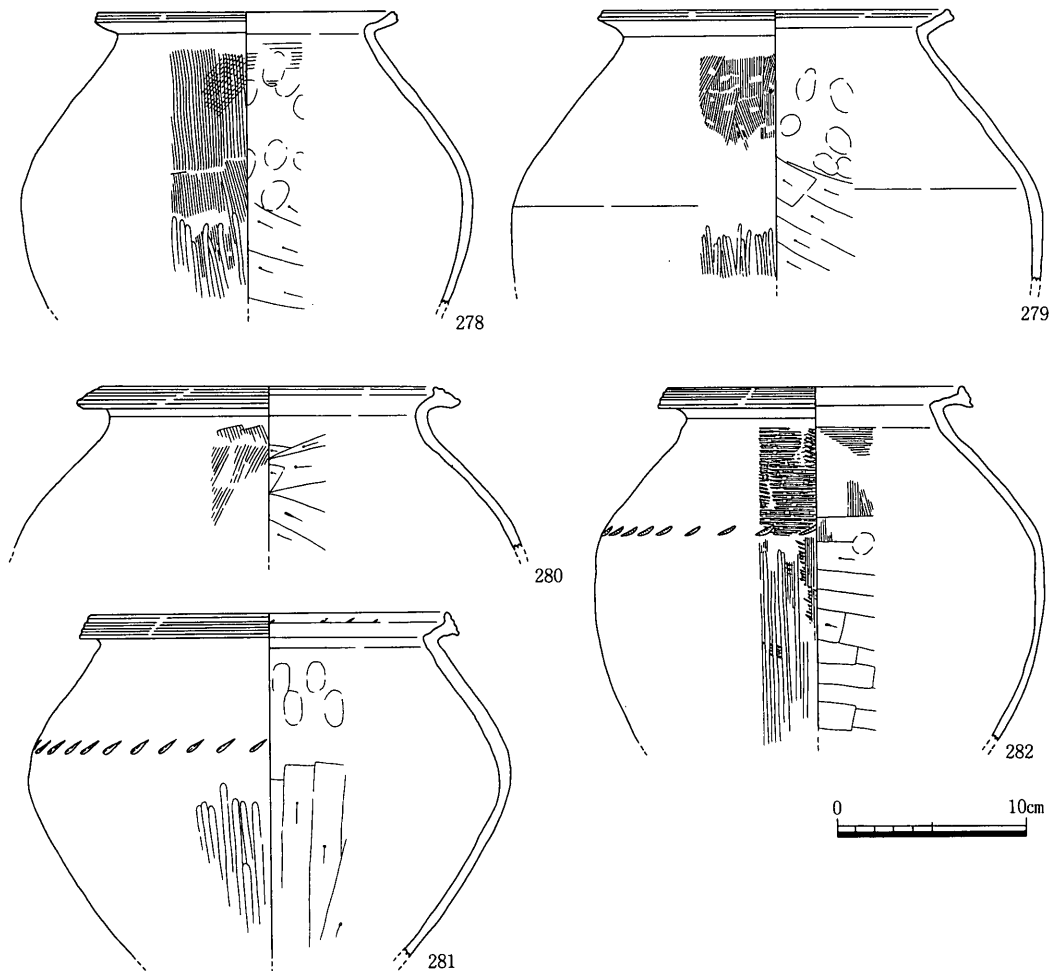
第671図 G区SR02出土遺物(35)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
271	弥・甕	16.4			中・普	良好	灰黄	ハケ目	ケズリ		
272	弥・甕	15.0			中・普	良好	明褐	ハケ目	ナデ		金罍母・角閃石
273	弥・甕	15.8			粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ケズリ		角閃石
274	弥・甕	16.0			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目→ミガキ	ハケ目・ケズリ		角閃石
275	弥・甕	15.3			細・普	良好	暗灰黄	ハケ目	ハケ目・ナデ		金罍母
276	弥・甕	21.0			中・普	良好	浅黄橙	不明	不明		
277	弥・甕	15.8	29.8	5.7	中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目	ナデ	外面煤・内面炭化米	角閃石

第672図 G区SR02出土遺物(36)(1/4)

が付着している。体部内面のヘラケズリは様々な方向から施されている。268は口縁部内には板ナデとなっているが、板状工具の木口部の痕跡が断続的に残っている。体部内面上端部は指で斜め方向にナデている。体部の最大径部分に焼成後の穿孔が1箇所認められる。269は体部外面の最大径部分より上側はハケ目となっているが、下側はヘラミガキとなっている。底部は平底である。270は体部の最大径部分が角張っている。体部外面の下半はハケ目の後にヘラミガキを施している。底部外面もヘラミガキとなっている。271は口縁部は丸みを帯びて屈曲する。272は体部の上半のみの破片であるが、大きく膨らんでいる。273は口縁部は真横に開き、体部外面には煤が付着している。274は体部最大径部分のやや下が肥厚している。外面はハケ目の後に下半に間隔のあいたヘラミガキを施している。体



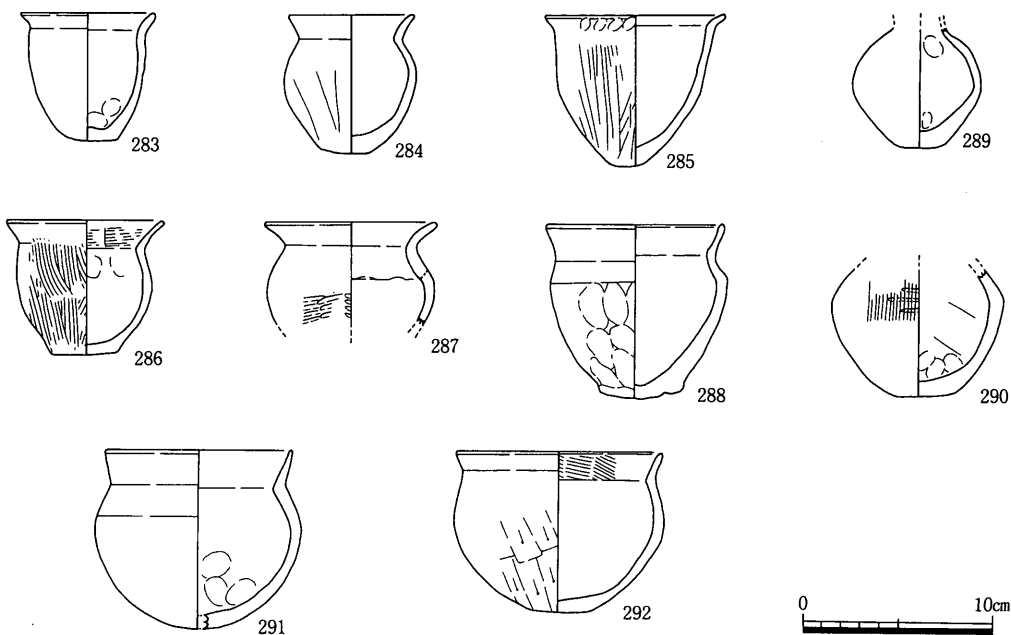
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
278	弥・甕	15.6			中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目・ミガキ	ナデ・ケズリ・ハケ目		
279	弥・甕	18.0			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目・ナデ・ミガキ	ナデ・ケズリ		角閃石
280	弥・甕	17.5			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ケズリ		
281	弥・甕	18.8			中・普	良好	灰白・褐灰	ナデ・ミガキ	ナデ・ケズリ		
282	弥・甕	15.4			微・普	良好	黒褐	ナデ・ハケ目・ミガキ	ハケ目・ナデ・ケズリ		金銀母

第673図 G区SR02出土遺物(37)(1/4)

部内面上端部にはハケ目が少々見られる。275は口縁部を2段にナデており、端部はナデることによって上方に拡張している。口縁部立ち上り部内面にハケ目が見られる。体部外面には煤が付着している。276は口縁部が肥厚する。277は口縁部立ち上り部内面に鋭い稜をもつ。体部内面は全体にナデており、底部は突出気味である。内面には炭化米が付着していた。278は体部外面下半にハケ目の後にヘラミガキを施している。体部内面の上端部にはハケ目が僅かに見られる。279も体部外面下半にヘラミガキが見られる。

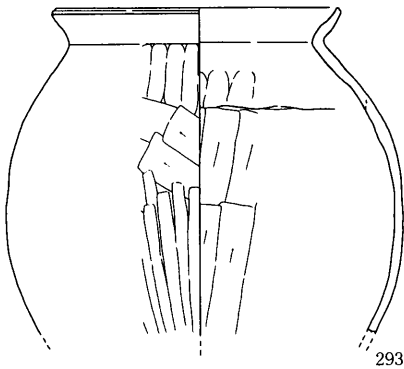
280~282は口縁部端部を上下に拡張するものである。281は体部外面の最大径部分に小さなヘラ圧痕文が施され、口縁部内面にはヘラ状工具による傷跡が残る。282は体部外面は叩きの後に下半にハケ目を施し、最後に下半にヘラミガキと丁寧に調整を重ねているが、最大径部より上側は叩きがそのまま残っている。最大径部にヘラ圧痕文がある。体部内面の上端部にはハケ目が少々残っている。

283~292は器高が10cm以下のミニチュア品で、壺とした75~80とは形態的に大差はないが、一応甕に分類した。283・285・286・291・292は甕に近い形態である。284・289・290

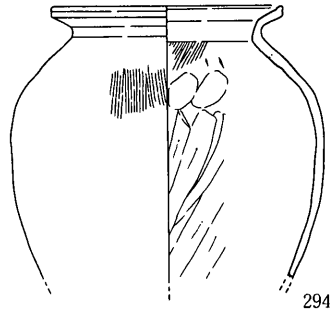


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
283	弥・ミニ甕	7.1	6.6	2.7	微・普	良好	褐	ナデ	ナデ		金雲母
284	弥・ミニ甕	6.6	7.2	2.5	中・普	良好	にぶい黄褐	板ナデ	ナデ		金雲母
285	弥・ミニ甕	9.5	7.8	1.9	中・普	良好	明褐	ハケ目	ナデ		金雲母・角閃石
286	弥・ミニ甕	8.3	6.9	3.4	中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ハケ目・ナデ		金雲母・角閃石
287	弥・ミニ甕	9.0			中・普	良好	橙・ブイ黄褐	叩き→ナデ	ナデ		
288	弥・ミニ甕	9.4	9.1	4.2	細・普	良好	黄橙	ナデ	ナデ	底外面ケズリ	金雲母
289	弥・ミニ甕			2.7	細・普	良好	灰白・灰黄	ナデ	ナデ		
290	弥・ミニ甕			3.0	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ハケ目	ナデ		金雲母
291	弥・ミニ甕	9.8	9.5		中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		金雲母・角閃石
292	弥・ミニ甕	10.9	8.5	3.1	中・普	不良	橙	ナデ・ケズリ	ハケ目・ナデ		

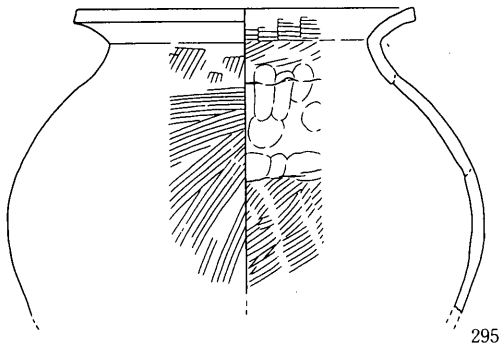
第674図 G区SR02出土遺物(38)(1/4)



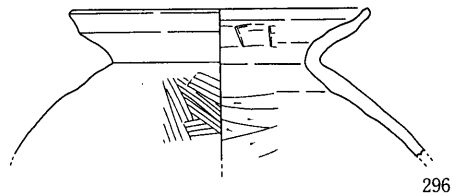
293



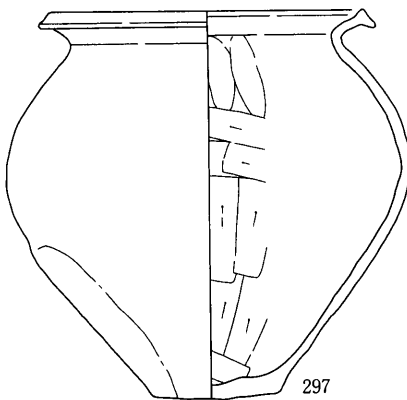
294



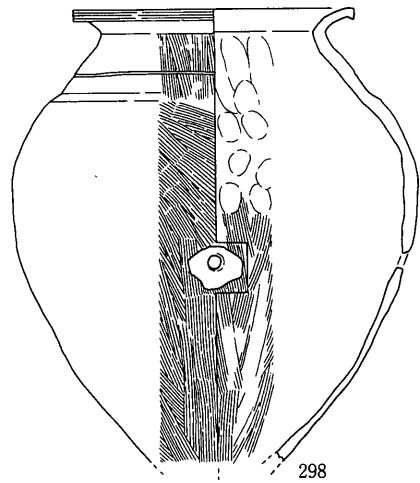
295



296



297

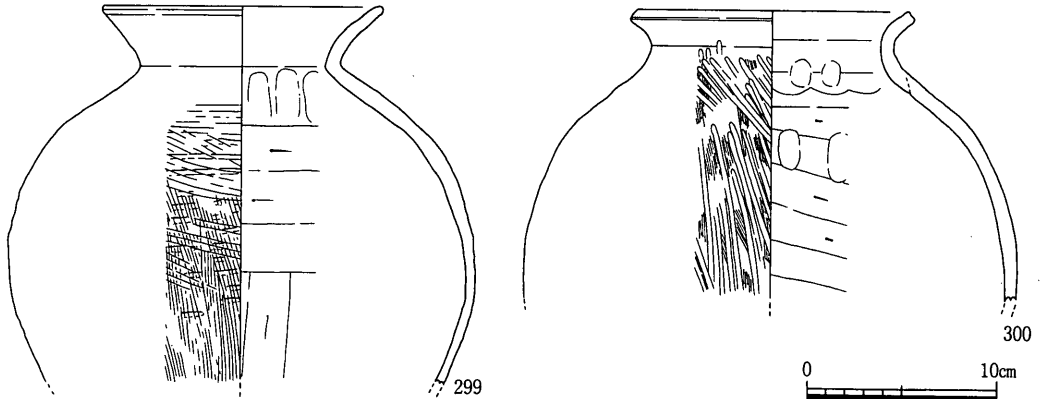


298



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
293	弥・甕	15.3			中・普	良好	灰黄褐・黒褐	板ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	外面に煤付着	
294	弥・壺	12.2			細・普	良好	にぶい褐	ハケ目・ナデ	ケズリ・ハケ目		金雲母・角閃石
295	弥・甕	17.8			細・普	良好	灰白	ハケ目	ハケ目・ナデ		
296	弥・壺	15.6			微・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ケズリ・板ナデ	口縁部内面へラ工具痕	金雲母・角閃石
297	弥・壺	16.1	20.2	6.7	中・多	良好	にぶい橙	ナデ	ケズリ		
298	弥・壺	14.9			細・多	良好	にぶい褐	ハケ目	ハケ目・ナデ	体部焼成後穿孔1ヶ所	金雲母・雲母

第675図 G区SR02出土遺物(39)(1/4)

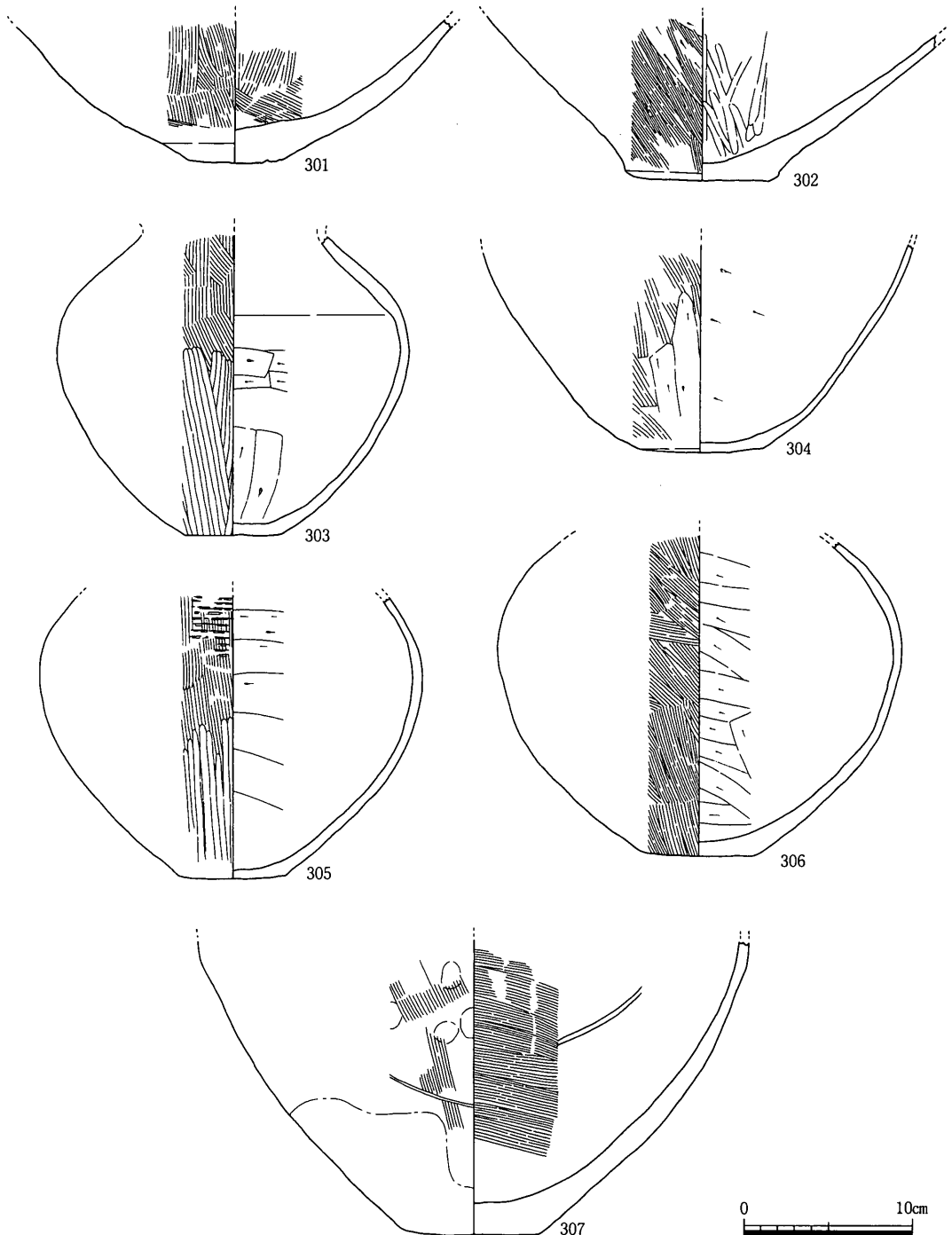


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
299	甕・甕	14.6			中・普	良好	橙～黒	叩き→ハケ目	ナデ・ケズリ	外面に煤付着	金罌母
300	甕・壺	14.2			中・普	良好	灰白	ハケ目→ミガキ	ケズリ		

第676図 G区SR02出土遺物(40)(1/4)

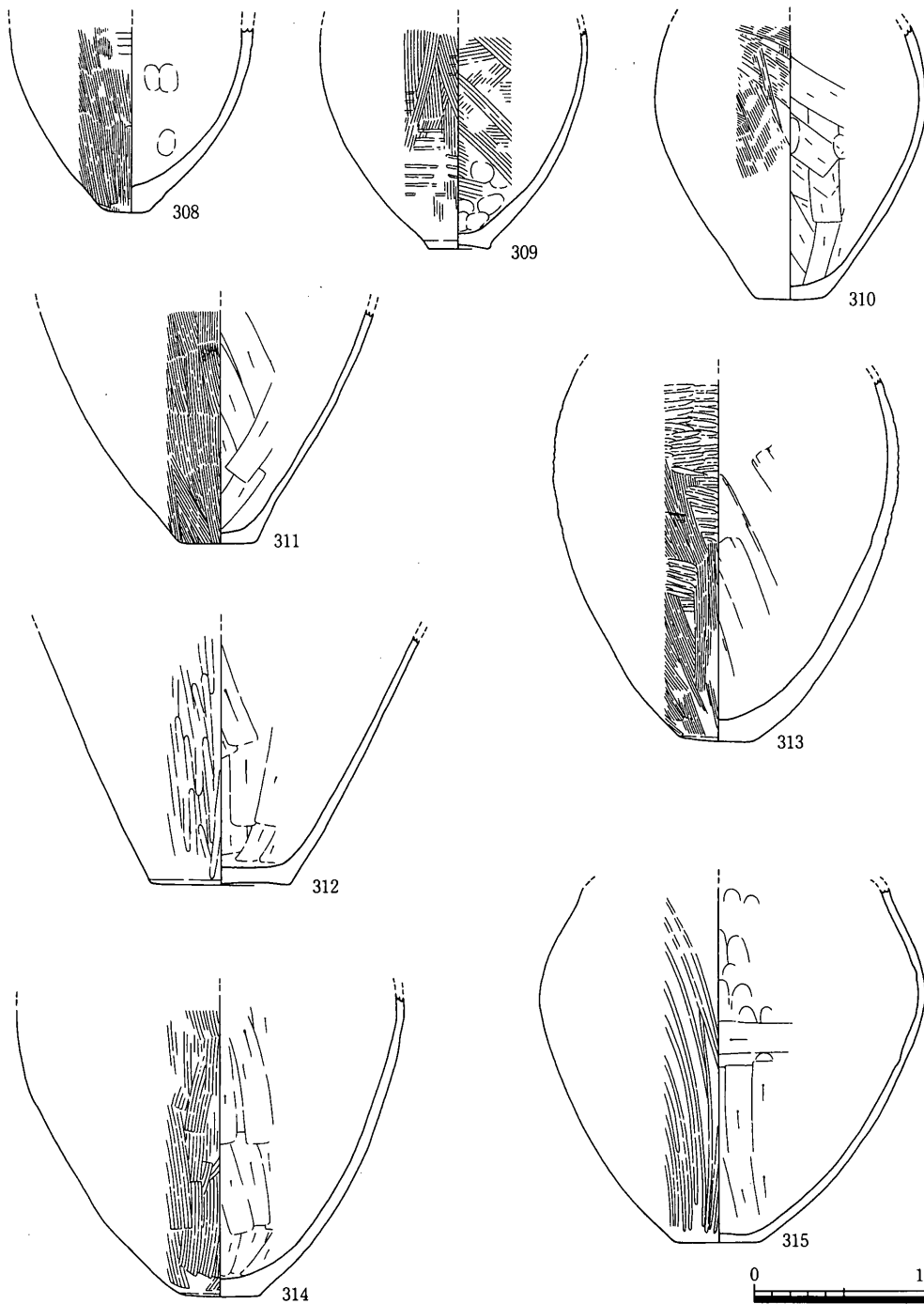
は壺に近い形態である。また287・288は甕と壺の中間形態となっている。284は丸底に近いものである。285は口縁部全体を指押さえてつまみ出している。体部外面は粗いハケ目となっている。286は口縁部内面にハケ目を施している。底部は安定した平底となっている。287は体部外面に叩きが一部見られる。288は体部上端が鋭く内側に屈曲した後に口縁部が緩く内湾して立ち上がるものである。体部外面は全体に指押さえを行なっている。底部外面はヘラケズリのままで雑になっている。291は口縁部立ち上り部内面には鋭い稜をもつ。口縁部端部は先細りとなっている。底部は丸底である。292も口縁部立ち上り部内面に鋭い稜をもち、口縁部内面にはハケ目を施す。体部は扁平で、外面下半にヘラケズリを施す。底部はやや不安定な平底である。

293～300は甕と壺の中間形態のものである。294・296・297・298・300は一応壺に分類しておく。294は体部からやや外傾した短い頸部の後に、口縁部が立ち上がる。体部最大径は上半にある。体部内面上端部にはハケ目が見られ、最大径部以下はヘラケズリとなっている。296は長い口縁部の先端部をナデてやや内側に曲げている。口縁部内面は板ナデとなっているが、板状工具の木口部の痕跡が断続的に見られる。297は口縁部端部を下方に拡張して外側に斜めの面を作りだす。体部外面を全体にナデており、底部は幅広の平底となっている。298は体部上半が段になっており、段と口縁部との間を頸部とすると壺になる。頸部は内傾しヘラ描き沈線が1条巡っている。体部は内・外面にハケ目を施している。また体部中央に焼成後の穿孔が一箇所認められる。300は体部は上半のみであるが球形となっている。体部外面はハケ目の後に口縁部直下からヘラミガキを施している。口縁部は外側に平坦な面をもつ。293・295・299は甕と考えたい。295は口縁部内面に断続的に



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
301	弥・壺			5.6	中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目	ハケ目		金雲母
302	弥・壺			9.1	中・普	良好	にぶい橙	ケズリ→ハケ目	板ナデ→ミガキ		金雲母
303	弥・壺			5.7	中・普	良好	灰黄	ハケ目→ミガキ	ナデ・ケズリ		雲母
304	弥・壺			7.4	中・普	良好	赤褐	ハケ目→ケズリ	ケズリ→ナデ		金雲母
305	弥・壺			6.3	中・普	良好	黒・灰黄	ケズリ→ハケ目→ミガキ	ケズリ		
306	弥・壺			6.7	中・普	良好	黒・コブイ黄橙	ハケ目	ケズリ		
307	弥・壺			8.1	粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ナデ	ハケ目		金雲母・角閃石

第677図 G区SR02出土遺物(41)(1/4)



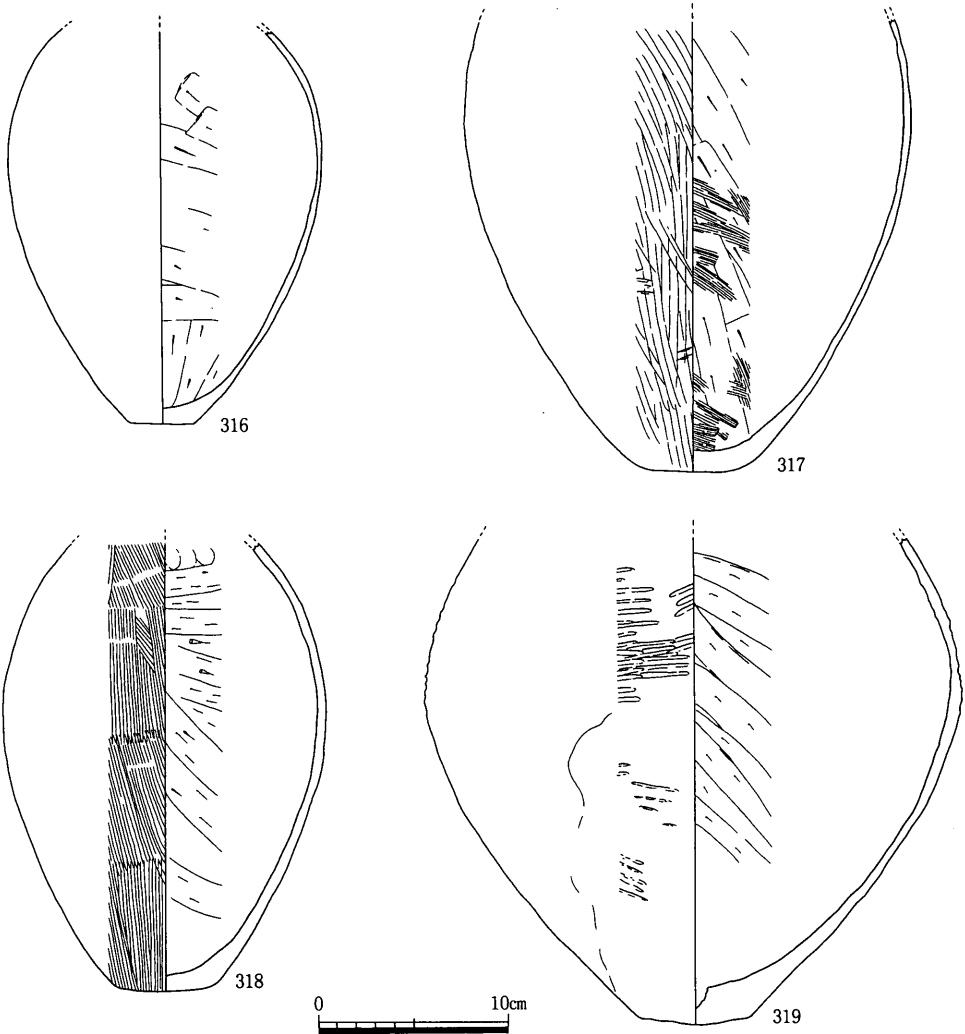
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
308	弥・甕			2.8	中・普	良好	浅黄	叩き→ハケ目	ナデ	底外面ハケ目	
309	弥・甕			3.3	中・普	良好	明赤褐	叩き→ハケ目	ハケ目	底上げ底	雲母
310	弥・甕			3.8	微・普	良好	明褐	ハケ目→ナデ	ケズリ		金雲母
311	弥・甕			4.5	細・普	良好	褐灰	ハケ目	ケズリ		金雲母
312	弥・甕			7.8	中・普	良好	にぶい橙	ミガキ	ケズリ		
313	弥・甕			4.4	中・普	良好	灰褐	叩き→ハケ目	板ナデ	底外面ハケ目	金雲母
314	弥・甕			4.5	中・普	良好	褐灰	ハケ目	ケズリ		
315	弥・甕			4.6	中・普	良好	褐～明褐	ミガキ	ケズリ		金雲母

第678図 G区SR02出土遺物(42)(1/4)

ハケ目を施している。299は口縁部の立ち上り部の径が短く壺のような形態だが、外面に煤が付着しており煮沸に使用したと考えられるので甕とした。口縁部は外反し端部は丸く納める。体部は球形で叩きの後にハケ目を施している。

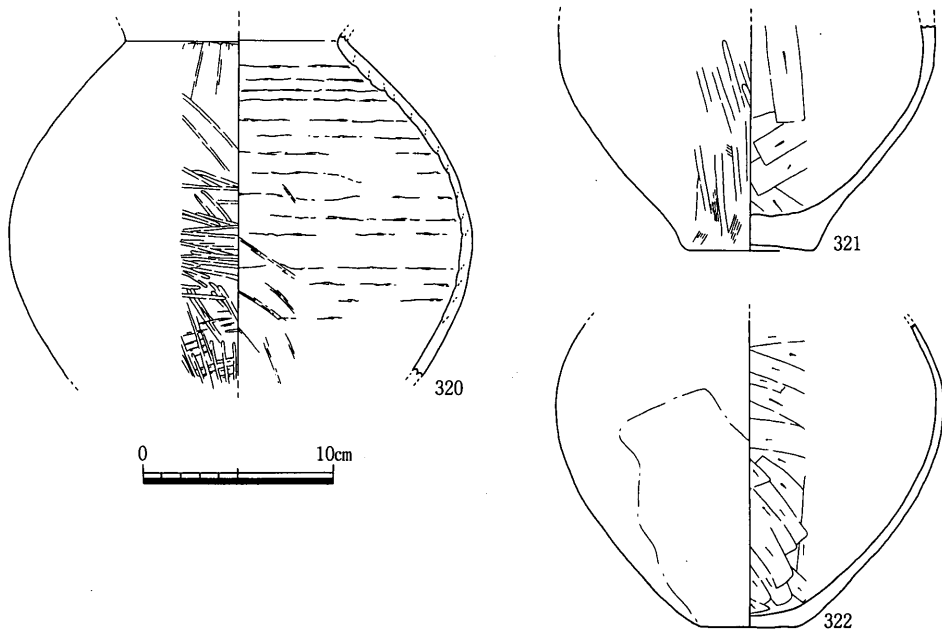
301～307は壺の体部～底部である。いずれも平底となっている。外面はハケ目が基本となっているが、303・305は下半にヘラミガキをハケ目の後に施している。305はハケ目の下に叩きが残っている。302は内面に板ナデの後に幅広のヘラミガキを加えている。

308～322は甕の体部～底部である。308・309は体部の外面に叩きの後にハケ目を施す。312は体部外面にはヘラミガキを施し、底部は幅広の平底となる。313は体部外面は叩きの



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
316	弥・甕			3.4	中・普通	良好	にぶい褐	ナデ	ケズリ		金雲母・角閃石
317	弥・甕			5.3	中・普通	良好	にぶい赤褐	叩き→ハケ目	ケズリ→ハケ目		金雲母・角閃石
318	弥・甕			5.2	中・普通	良好	にぶい黄	ハケ目	ケズリ	砲弾形の長細い胴部	
319	弥・甕			5.5	微・普通	良好	にぶい黄褐	叩き→ナデ	ケズリ・ナデ	内面に炭化米付着	

第679図 G区SR02出土遺物(43)(1/4)



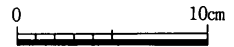
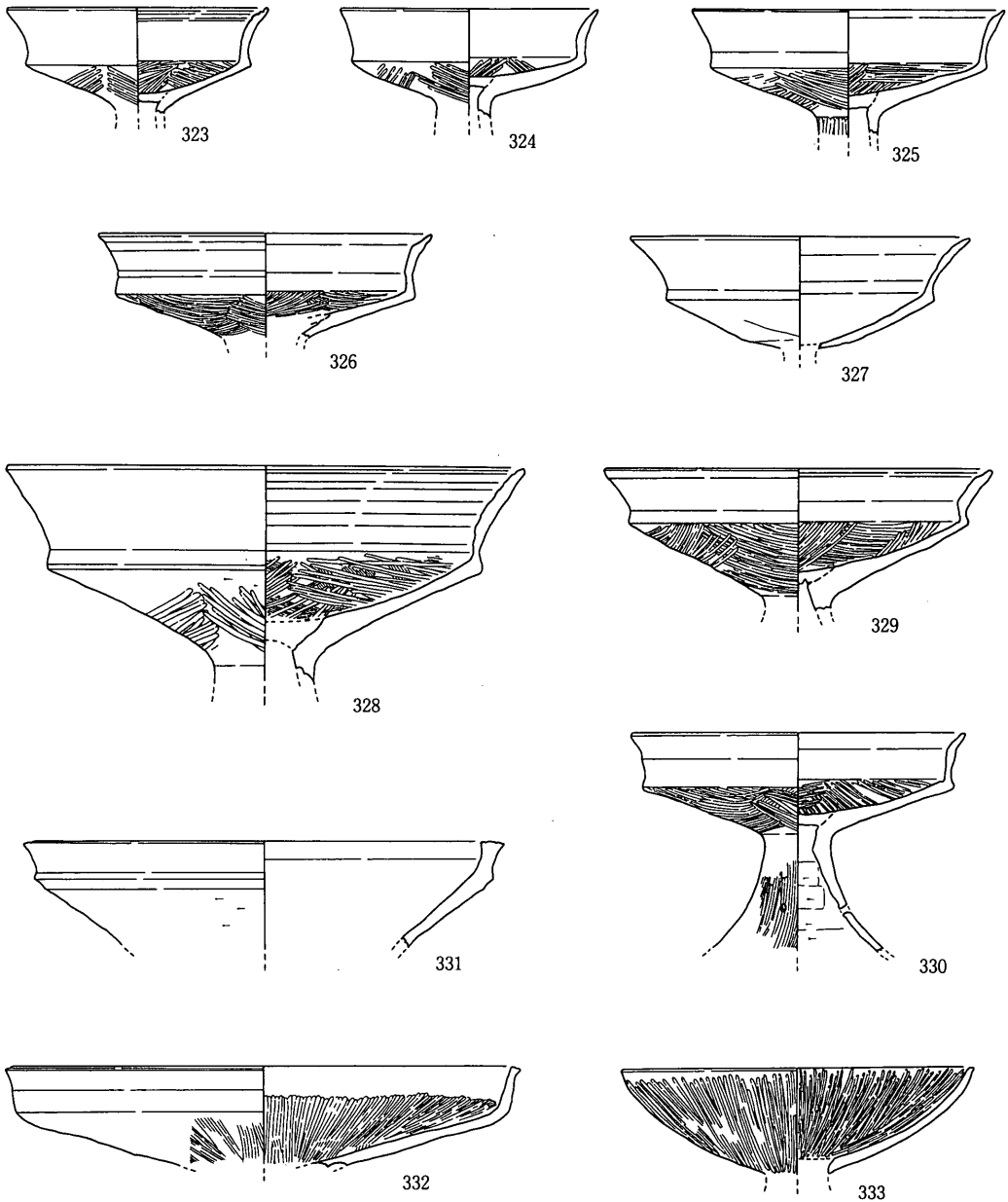
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
320	弥・甕				中・昔	良好	にぶい赤褐	叩き→ミガキ	ナデ		金雲母・角閃石
321	弥・甕			6.8	中・昔	良好	黒・ニブイ黄橙	ハケ目→ミガキ	ケズリ	底外面ミガキ	
322	弥・甕			5.2	中・昔	良好	灰黄褐	ナデ	ケズリ		金雲母・角閃石

第680図 G区SR02出土遺物(44)(1/4)

後にハケ目を施すが、上半は叩きが残る。底部外面までハケ目が及ぶ。315は体部外面に長いヘラミガキを施している。317は体部外面に叩きの後に粗いハケ目を、内面にヘラケズリの後に細かいハケ目を施している。318は体部最大径は小さく体部に張りはなく細長くなっている。319は体部最大径は中央部にあり大きく膨らむ。体部外面は強い叩きの後にナデている。内面に炭化米が付着している。320～322は壺と甕の中間形態となっている。320は体部外面に叩きの後にヘラミガキを施す。内面には粘土紐の接合痕が顕著に残る。321は外面の底部付近にハケ目が僅かに残る。底部は肥厚する。

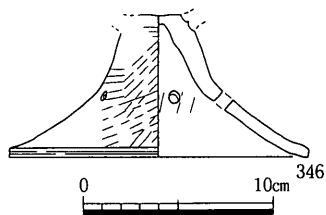
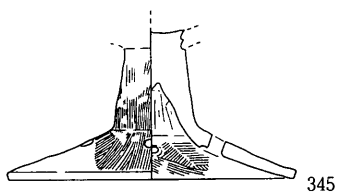
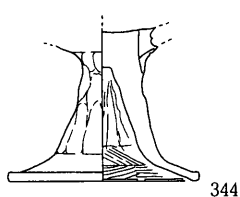
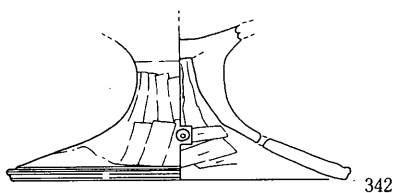
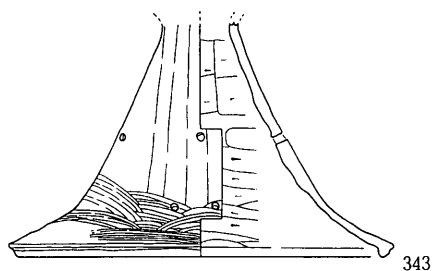
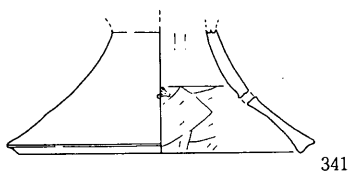
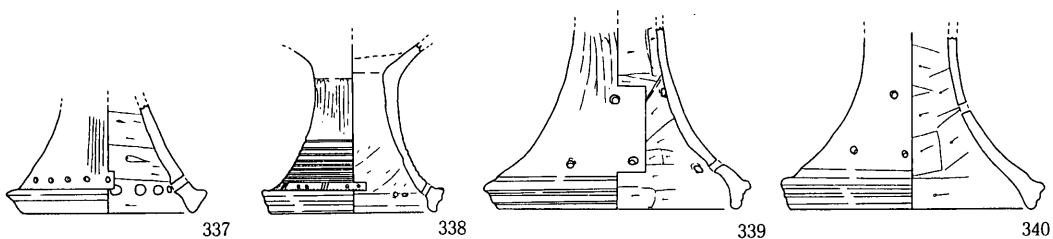
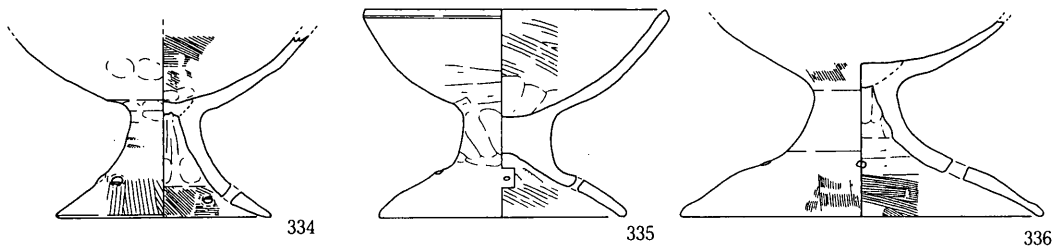
323～354は高杯である。323～330は口縁部の立ち上りは大きく、外反するものである。327は摩滅しているが、他のものは杯部内・外面に丁寧にヘラミガキを施している。内面のヘラミガキは格子状に、外面のものは波状になる。323・325・326・329・330は口縁部端部を強くナデている。328は口縁部内面に凹線が生じ、杯部内面にはハケ目の後にヘラミガキを加えている。323～326、328～330は杯部と脚部との接続はいずれも円盤充填になっている。331は口縁部が短く屈曲して立ち上り、上側に面を作り出す。332は口縁部はほぼ上方に立ち上り、杯部は深い皿状になっている。杯部内面にはヘラミガキを放射状に丁寧に施している。333～336は杯部が丸みをもって内湾して立ち上がるものである。333は

杯部内・外面にヘラミガキを丁寧に施し、脚部との接続は差し込み法によっている。334は杯部内面はハケ目となっている。脚部はそのままゆるく外反して開き、端部は丸く納める。脚部には2穴2単位の合計4個の透し穴がある。円盤充填となっている。335は杯部外面下半にヘラケズリを施す。脚部は若干内湾し、中実で4方透しがある。336は脚部端部付近を強くナデている。円盤充填である。337～354は脚部のみである。337～343は脚部端部を拡張して外側に幅広の面を作り出す。337は脚部端部に19個の穿孔があるが、このうち貫通しているものは2個のみである。338は脚部外面に沈線を9条巡らし、端部に2個1単位の透し穴が8単位、合計16個ある。1単位間にはヘラ状工具による縦方向の線が3本施されている。また透し穴の下部にはヘラ状工具による細かい刻み目が巡っている。円盤充填である。339・340は脚部に上段に3個、下段に6個の透し穴がある。339の端部は下方へ大きく拡張している。342は脚部端部の拡張は弱く、外面は板ナデとなっている。透し穴は現存で2個である。円盤充填である。343は脚部は下部で外反してラップ状に開いている。脚部は高く、端部の径も大きくなっている。脚部に上段に4個、下段に8個の透し穴があるが、上段の1個と下段の2個が三角形に1単位となり合計4単位になる。外面の下半に連弧状のヘラミガキを施す。内面は全体にヘラケズリとなっている。344は脚部は下部で大きく屈曲する。杯部とは差し込み法で接続する。透し穴は無い。345は脚部中位で屈曲し、内・外面全体にハケ目を丁寧に施している。差し込み法である。346は外面に粗いハケ目を施している。347は脚部端部で屈曲し、端部が広く接地する。円盤充填の可能性が高く、透し穴は無い。348は脚部は上位で屈曲して直線的に開く。杯部下部にはヘラミガキが残っている。349は脚部端部は丸く納め、透し穴は無い。350は脚部の上部の内面が大きく開いている。端部付近で丸みをもって外に開き、端部を上方につまみ上げている。外面の上半にはヘラミガキが残り、内面は指でナデている。351は脚部の内面の上部は直立する平坦面を形成している。352は脚部外面にヘラミガキを施した後下半をナデている。大きめの透し穴が4個認められる。353は脚部全体に外反し、端部は外側を向くが丸く納めている。外面はハケ目の後にヘラミガキを丁寧に加えており、上端部にハケ目の痕跡が僅かに残っている。内面の先端部は棒状工具で器壁を削り取っている。端部内面はハケ目を施している。円盤充填であるが、充填した粘土円盤は脚部内面に突出している。354も脚部全体に外反している。脚部外面は中位のヘラケズリを施しているが、上端と下端にはハケ目が僅かに見られる。内面の上半にはしぼり目が残る。透し穴は6個ある。



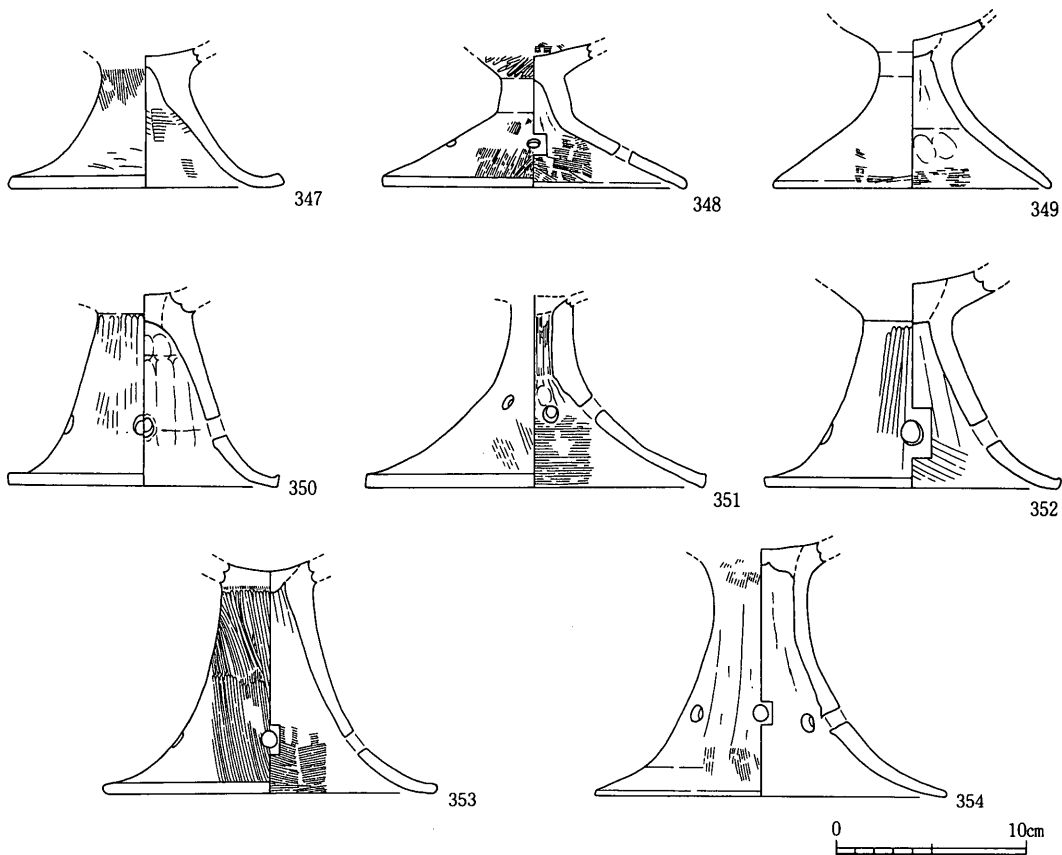
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
323	弥・高杯	14.0			粗・普	良好	明褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	円盤充填	金雲母・角閃石
324	弥・高杯	14.0			中・普	良好	橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	円盤充填	金雲母・角閃石
325	弥・高杯	16.8			細・普	良好	橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	円盤充填	金雲母・角閃石
326	弥・高杯	18.1			細・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	円盤充填	金雲母・角閃石
327	弥・高杯	18.2			粗・普	良好	明赤褐	不明	不明		
328	弥・高杯	28.0			中・普	良好	にぶい褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	円盤充填	金雲母・角閃石
329	弥・高杯	21.0			中・普	良好	橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	円盤充填、格子状ナデ	角閃石
330	弥・高杯	18.0			中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	円盤充填、三方透し	角閃石
331	弥・高杯	23.4			粗・普	良好	橙	ナデ・ケズリ	不明		角閃石
332	弥・高杯	27.0			細・普	良好	灰白	ハケ目→ナデ	ナデ・ミガキ		
333	弥・高杯	19.1			中・普	良好	にぶい黄橙	ミガキ	ミガキ	差し込み法	

第681図 G区SR02出土遺物(45)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
334	弥・高杯			11.4	細・普	良好	にぶい橙	ハケ目・ナデ	ハケ目	円盤充填、透し穴4個	角閃石
335	弥・高杯	15.9	10.7	12.9	中・多	良好	にぶい褐	ナデ・ケズリ	ハケ目→ナデ	四方透し	金雲母
336	弥・高杯			19.2	中・普	良好	橙	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	円盤充填、四方透し	
337	弥・高杯			9.0	中・普	良好	にぶい赤橙	ミガキ	ケズリ・ナデ	透し穴19個	
338	弥・高杯			8.7	中・普	良好	灰黄褐	ミガキ	ケズリ	円盤充填、透し穴16個	
339	弥・高杯			12.4	中・普	良好	にぶい赤褐	ミガキ・ナデ	ケズリ	透し穴9個	金雲母
340	弥・高杯			12.9	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ケズリ	透し穴9個	
341	弥・高杯			16.2	粗・普	良好	黒褐・コブイ褐	ナデ	ナデ・ケズリ	三方透し	金雲母・雲母
342	弥・高杯			18.2	細・普	良好	黄褐	板ナデ	ナデ・ケズリ	円盤充填、透し穴現存2ヶ	金雲母
343	弥・高杯			19.2	粗・普	良好	にぶい黄橙	ケズリ→ナデ・ミガキ	ケズリ	透し穴12個	
344	弥・高杯			10.1	細・普	不良	灰白	ナデ	ハケ目	差込み法、透し穴なし	
345	弥・高杯			15.0	中・普	良好	橙	ハケ目	ハケ目	差込み法、四方透し	
346	弥・高杯			15.8	細・普	良好	明赤褐・橙	ハケ目	板ナデ	三方透し	金雲母

第682図 G区SR02出土遺物(46)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
347	弥・高杯			14.5	細・普	良好	明褐	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	透し穴なし	金器母・角閃石
348	弥・高杯			15.9	細・普	良好	にぶい橙	ミガキ・ハケ目	ハケ目	四方透し	角閃石
348	弥・高杯			14.5	中・普	良好	にぶい橙	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ	円盤充填、透し穴なし	角閃石
350	弥・高杯			12.1	中・普	良好	浅黄橙	ミガキ	ナデ	円盤充填、四方透し	
351	弥・高杯			17.8	中・普	良好	橙	ハケ目→ナデ	ハケ目	円盤充填、五方透し	
352	弥・高杯			15.6	中・普	良好	浅黄橙・橙	ミガキ	ナデ・ハケ目	円盤充填、四方透し	金器母
353	弥・高杯			17.7	中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目→ミガキ	ナデ・ハケ目	円盤充填、四方透し	
354	弥・高杯			18.5	粗・普	良好	浅黄	砂目・クズリ→ナデ	ナデ	円盤充填、六方透し	

第683図 G区SR02出土遺物(47)(1/4)

355～515は鉢であるが、主に口径によって大・中・小に分かれる。

355・356は口径が8cm未満のものである。355は器高とも小さく丸底の浅い皿状になっている。356は底部は突出気味の不安定な平底である。

357～381・394・406・407・409・412・413・415・422は口径が10～12cm程度のもので、丸底のもの(357～366・394・422)と平底のもの(367～381・406・407・409・412・413・415)に分かれる。357は底部は突出しており、ヘラケズリとなっている。口縁部端部は上方へつまみ上げている。358は口縁部が緩く外反する。361は器高が他のものに比べて高くなっている。362は口縁部は内湾し端部は先細りとなっている。体部外面には叩きを施すが、底部は未調整で凹凸がそのまま残る。363・364は体部下半にはヘラケズリが残ってい

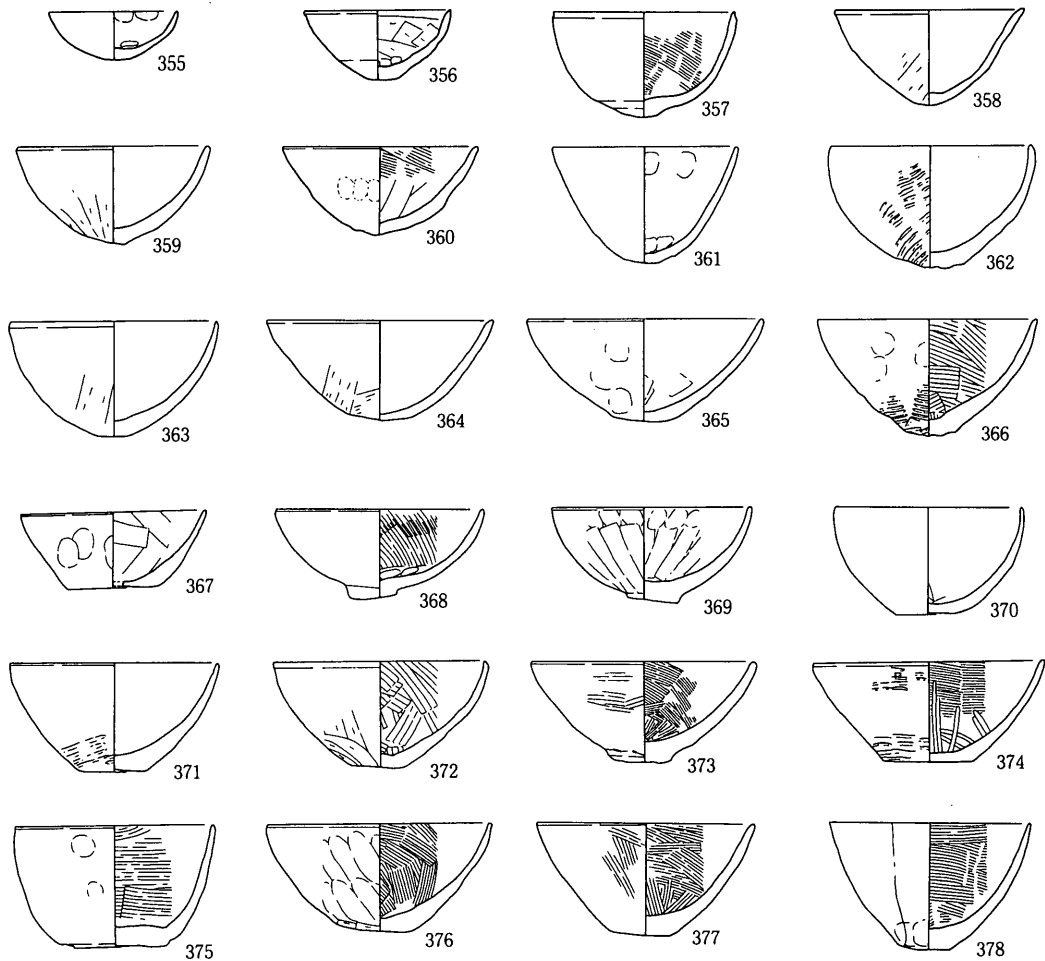
る。366は体部外面下半には叩きが見られ、底部外面にはヘラ状工具による圧痕がある。体部内面は全体にハケ目を施している。367は幅広の安定した平底となっており、体部立ち上り部が肥厚している。368・369は突出した底部で、369は体部内・外面に板ナデを施している。372は口縁部端部をナデて先細りにしている。体部下半から底部外面にかけてはヘラケズリの後に軽くナデている。373・374は体部外面に叩きを施した後にナデている。374は体部内面にハケ目の後にヘラミガキを施している。底部は幅広の安定した平底で、外面はヘラケズリとなっている。375は肥厚する底部から直立に近く体部は立ち上がる。376は体部外面に指で連続的にナデている。また口縁部端部を強くナデて、外側に凹線が生じている。379は体部下半を強くナデて、底部をしぼり出すように突出させている。体部下端部外面に叩きが残る。381は丸底に近い不安定な平底である。394は体部外面のヘラケズリは上半にまで及ぶ。407・409の底部は突出する。412は器高が高く、体部が直線的になっている。

382～393・395～405・408・410・411・414・416～421・423は口径が13～16cm程度のもので、丸底のもの（382～393・395～405）と平底のもの（408・410・411・414・416～421・423）に分かれる。383は口縁部は内傾する。387は体部外面は叩きの後に下半にヘラケズリを施している。内面は原体の異なる2種類のハケ目を施している。口縁部は不整形である。388は口縁部端部をナデて外側に平坦な面を作り出している。389は体部外面全体にヘラケズリを施している。391は体部内面はハケ目の後に全体にヘラミガキを施し、底部外面はヘラケズリの後にナデている。398は口縁部はナデのため器壁が非常に薄くなっている。体部外面は上半はハケ目、下半は叩きの後にナデている。底部外面はヘラケズリとなっている。399は底部内面が窪んでいる。403は口縁部がナデのため器壁が薄くなっている。405は体部外面上半は叩きを、下半はヘラケズリを施している。内面下半はヘラミガキとなっている。また体部内面に黒斑がある。408は口縁部端部を上方につまみ出している。417は体部外面にハケ目がある。419は口縁部内面にハケ目を施している。421は内面の底部付近にハケ目を細かく重ね、口縁部端部は先細りとなっている。423は底部は欠損しているが、平底になるものと思われる。口縁部端部は上側に平坦な面をもっている。体部内面はヘラミガキとなっている。

424～447・449～458・460～464は口径が17～22cm程度のもので、丸底のもの（424～441）と平底のもの（442～447・449～455）がある。456～464は底部が欠損している。丸底のものは全般にサラダボールのような形をしている。425は口縁部端部をやや内側につまみ出

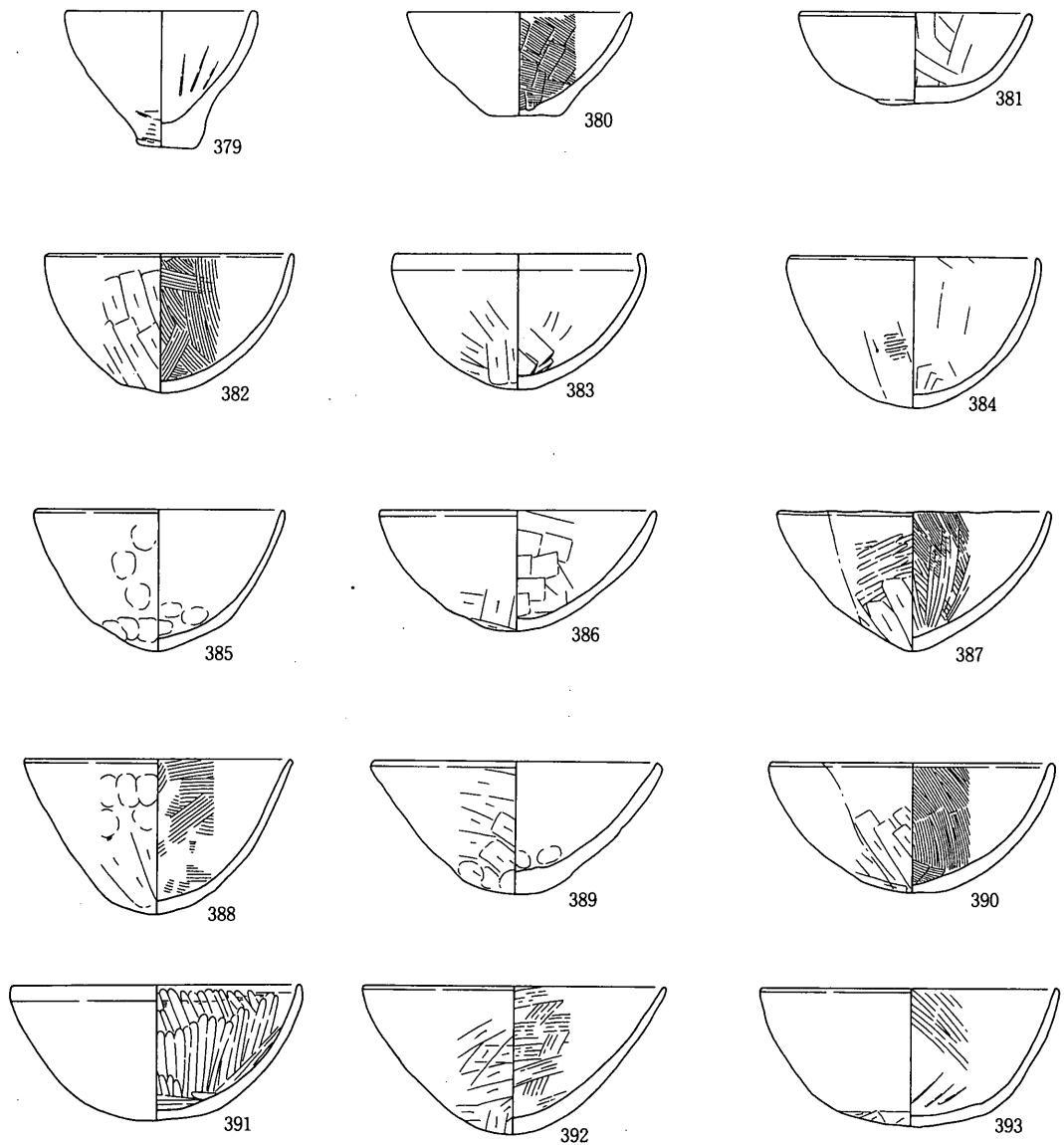
し、外側に面をもつ。427は体部内面にヘラミガキを施している。428は体部外面にヘラケズリの後に下半から底部にかけてハケ目を施している。429は底部外面はヘラケズリにより凹凸が残る。431は体部内面に単位の細かいハケ目を全体に施している。433は体部外面は叩きの後にヘラケズリ、内面はハケ目の後にヘラミガキとなっている。436は口縁部端部を強くナデており、外面に凹線が生じている。また端部上面に平坦な面が形成されている。437は体部下半が肥厚している。439は体部は上半で大きく内湾し、口縁部は内傾気味となる。体部外面はヘラケズリの後にヘラミガキを施している。442は体部外面下半を指で押すように断続的にナデている。444・445は体部内面をハケ目の後に指ナデを施している。445は体部中央部の器壁が、外面のヘラケズリにより口縁部よりも薄くなっている。449は口径の割に器高が高く、法量が大きくなっている。450は口縁部がナデのため若干外反している。452は体部全体が大きく内湾し、口縁部は内傾している。453は体部外面中央部にヘラ状工具によるカキ目がある。体部下端には叩きが残っている。454は口縁部端部の上側に平坦な面をもつ。455は口縁部を強くナデている。456は体部が上半で緩く外反し、口縁部端部は内側に面をもつ。457は口縁部端面と内側にそれぞれ沈線が1条巡っている。460は口縁部端部を若干内傾させている。体部外面は板ナデとなっている。462は内面の底部付近に板ナデを施している。463は体部から口縁部にかけて2段階に屈曲している。端部は上側に平坦な面を作り出している。体部内面は放射状に3段のヘラミガキを施している。464は口縁部端部は先細りとなっている。

465～483は底部に脚台が付くものである。466は底部を搾りだして脚部を作り出している。467は体部は短く直線的で、下端部を強くナデている。高台状の脚が付く。468は口縁部を強くナデているため、内側に凹線が生じている。脚部は指で強く押さえながらナデている。471・472も高台状の脚が付いている。473は脚部は強い指押さえにより搾り出し、脚端部を外側に引っ張り出している。475は体部は上部で屈曲し、口縁部は直線的に斜め上方に立ち上がり、端部は平坦な面となっている。476は扁平な体部から口縁部は鋭く屈曲して直線的に斜め上方に立ち上がる。脚は長めで直線的に開いている。外面全体と脚部内面にハケ目を施している。477も扁平な体部から口縁部が鋭く屈曲して立ち上がるもので、脚部は短い。478は体部は下半で鋭く屈曲して真上に立ち上り、さらに口縁部も鋭く屈曲し内湾しながら立ち上がる。脚部は欠損しているが、脚部の剥離痕が見られる。481は体部は短く直線的である。小型器台に似ているが、脚部が体部との接合部からすぐに薄くなることから、短い脚部が付くものと思われ、脚台付きの鉢と考えた。482は体部外面



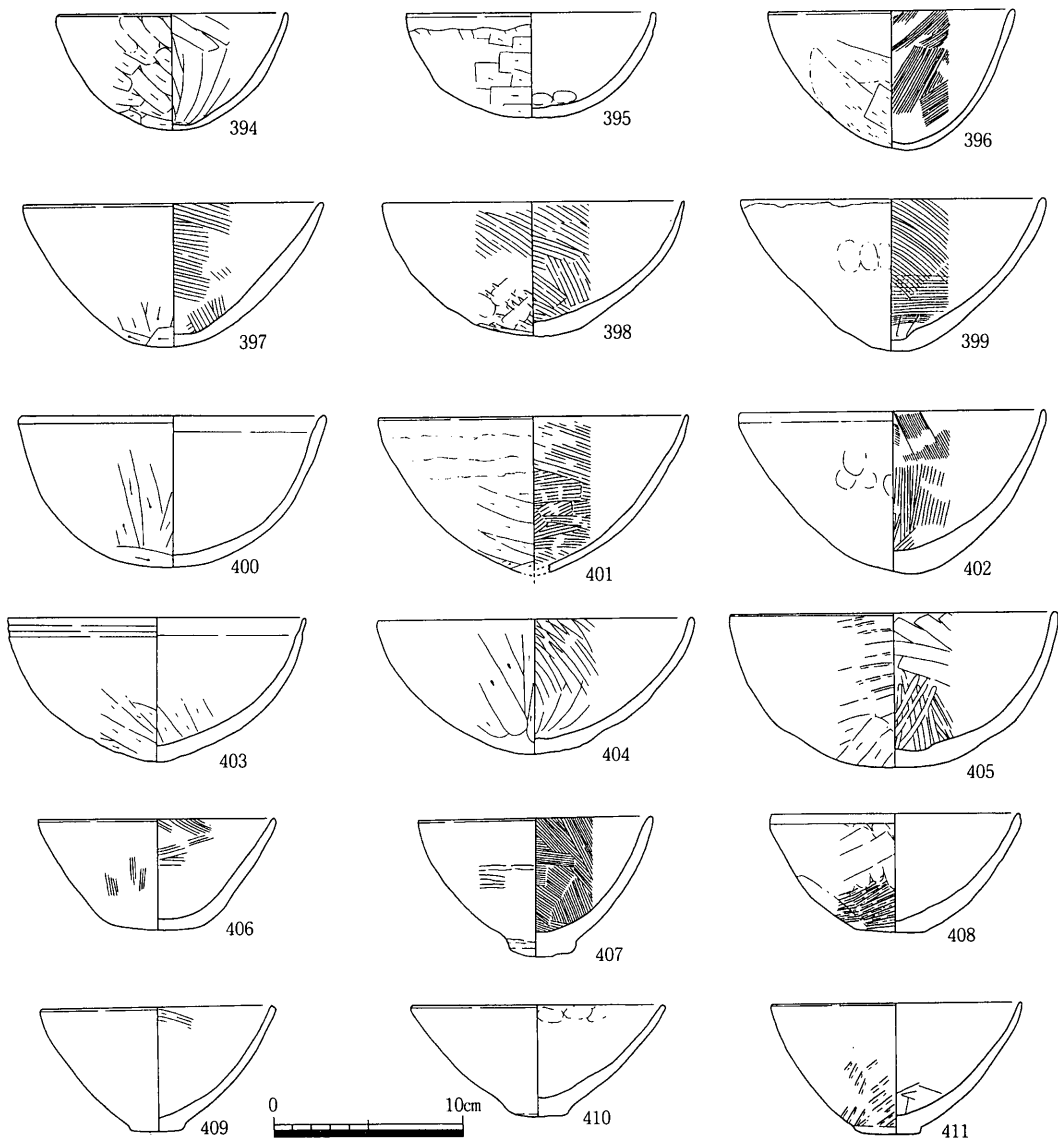
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
355	弥・鉢	6.8	2.4		細・普	良好	コブイ褐・灰褐	ナデ	ナデ		金雲母
356	弥・鉢	7.6	3.5	1.6	中・普	良好	橙	ナデ	ケズリ		
357	弥・鉢	9.6	5.3		微・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目		
358	弥・鉢	10.2	4.7		細・普	良好	にぶい黄褐	ケズリ	ナデ		金雲母
359	弥・鉢	10.2	5.0		中・普	良好	橙	ナデ・ケズリ	ナデ	底突出	金雲母・角閃石
360	弥・鉢	10.2	4.5		中・普	良好	黄褐	ナデ	ハケ目・ナデ	口縁部不整形	
361	弥・鉢	9.8	6.0		中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		角閃石
362	弥・鉢	10.5	6.3		粗・普	良好	浅黄	叩き→ナデ	ナデ	底未調整	
363	弥・鉢	10.8	6.1		中・普	良好	明褐	ナデ・ケズリ	ナデ		金雲母・角閃石
364	弥・鉢	12.0	5.3		中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ	ナデ		金雲母・角閃石
365	弥・鉢	12.4	5.4		中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		金雲母・雲母
366	弥・鉢	11.6	6.2		粗・普	良好	にぶい褐	叩き→ナデ	ハケ目	底へラ疔痕	角閃石
367	弥・鉢	9.7	4.0	4.8	細・普	良好	にぶい黄・黒	ナデ	板ナデ		金雲母
368	弥・鉢	10.8	4.4	2.5	中・普	良好	赤褐	不明	ハケ目	底歪み突出する	角閃石
369	弥・鉢	10.6	5.0	2.7	細・普	良好	にぶい黄橙	板ナデ	板ナデ		金雲母
370	弥・鉢	9.8	5.6	3.3	微・普	良好	褐・にぶい褐	ナデ	ナデ		金雲母
371	弥・鉢	10.9	5.8	3.3	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ナデ	ナデ		
372	弥・鉢	11.2	5.6	2.8	粗・普	良好	褐	ナデ・ケズリ	ハケ目		金雲母
373	弥・鉢	11.5	5.3	2.4	中・普	良好	にぶい黄褐	叩き→ナデ	ハケ目		
374	弥・鉢	12.2	5.3	4.9	中・普	良好	橙・コブイ黄橙	叩き→ナデ	ハケ目→ミガキ	底外面ケズリ	金雲母
375	弥・鉢	10.6	6.3	6.0	微・普	良好	にぶい橙	ナデ	ハケ目		金雲母・角閃石
376	弥・鉢	11.8	5.7	3.8	細・普	良好	橙	ナデ・ケズリ	ハケ目		金雲母
377	弥・鉢	11.4	5.9	3.3	粗・普	良好	にぶい橙	ハケ目→ナデ	ハケ目		
378	弥・鉢	10.6	6.6	2.6	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目		

第684図 G区SR02出土遺物(48)(1/4)



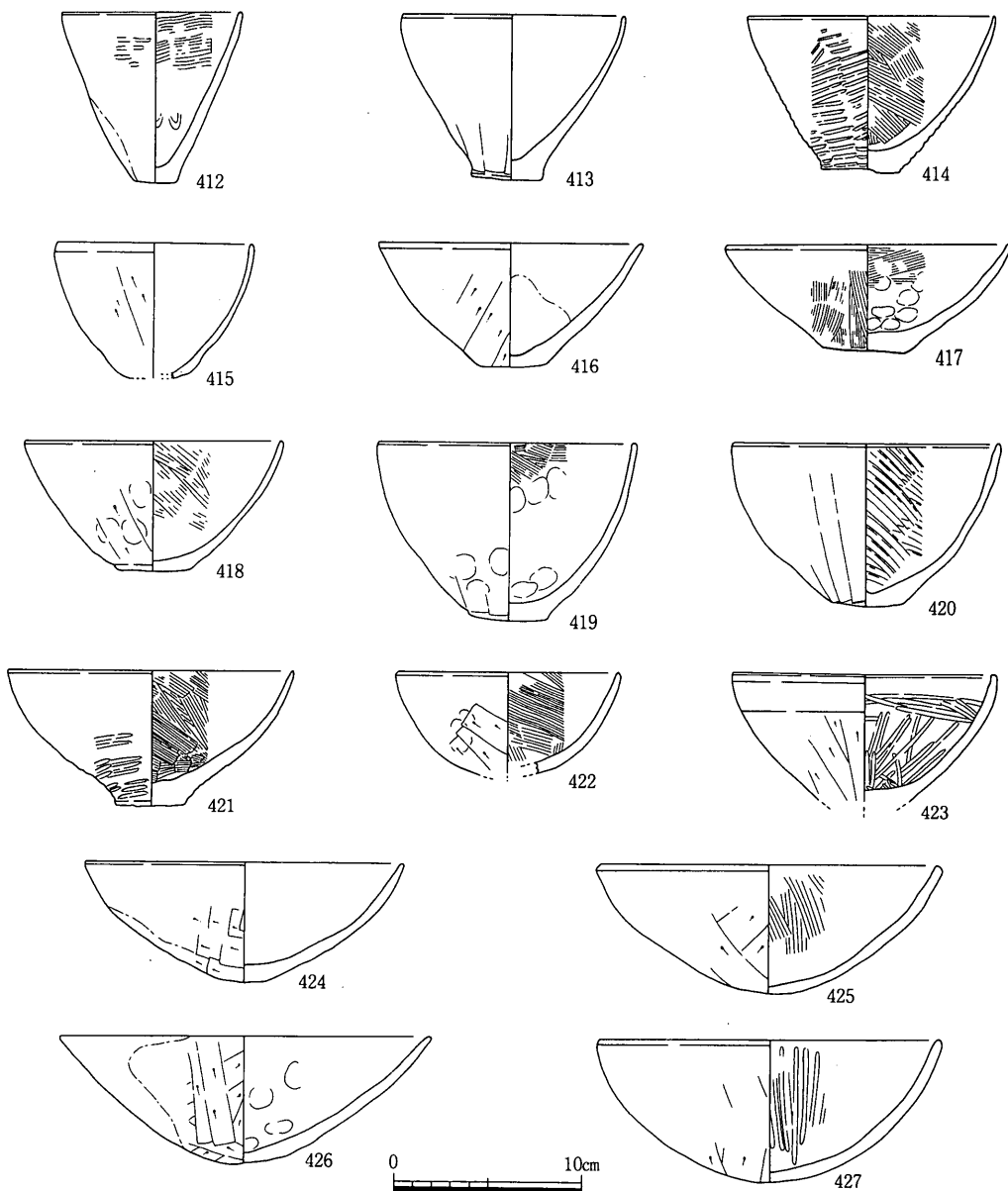
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
379	弥・鉢	9.7	7.0	2.9	細・普	良好	褐	叩き→ナデ	板ナデ		金雲母
380	弥・鉢	11.8	5.3	3.8	微・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目	底外面に木の葉状痕	金雲母
381	弥・鉢	12.0	4.7	4.2	細・普	良好	橙・赤褐～黒	ナデ	板ナデ		金雲母・角閃石
382	弥・鉢	13.2	7.1		中・普	良好	灰黄褐	ケズリ	ハケ目		金雲母
383	弥・鉢	13.0	6.9		中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	板ナデ		金雲母・角閃石
384	弥・鉢	13.0	7.7		中・普	良好	橙・灰褐	打・ケズリ→叩き	板ナデ		金雲母
385	弥・鉢	13.2	7.3		中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ	底不整形	金雲母
386	弥・鉢	14.5	6.2		細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	板ナデ		金雲母
387	弥・鉢	14.5	7.2		細・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ケズリ	ハケ目	2種類のハケ目	金雲母
388	弥・鉢	14.0	8.2		粗・普	良好	にぶい橙	ナデ・ケズリ	ハケ目		金雲母
389	弥・鉢	15.0	7.0		粗・普	良好	ケズリ	ナデ	ナデ		
390	弥・鉢	15.2	6.9		中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	ハケ目		金雲母
391	弥・鉢	15.2	7.1		細・普	良好	にぶい褐	ナデ	ハケ目→ミガキ	底外面ケズリ→ナデ	金雲母
392	弥・鉢	16.0	7.8		中・普	良好	にぶい黄	ナデ・ケズリ	ハケ目→ナデ		金雲母
393	弥・鉢	15.6	7.3		中・普	良好	明赤褐	ケズリ	ハケ目→ナデ		金雲母

第685図 G区SR02出土遺物(49)(1/4)



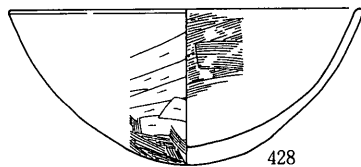
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法的特徴	備考
394	弥・鉢	12.2	6.0		細・普	良好	にぶい褐	ナデ・ケズリ	板ナデ	口縁部歪む	
395	弥・鉢	15.0	5.4		微・普	良好	褐灰・橙	ナデ・ケズリ	ナデ	外面交互にケズリ	
396	弥・鉢	13.0	7.2		中・普	良好	明赤褐	ナデ・ケズリ	ハケ目	体部下半歪む	
397	弥・鉢	15.8	7.3		中・普	良好	橙	ナデ・ケズリ	ハケ目		金曇母
398	弥・鉢	15.9	7.0		細・普	良好	にぶい黄褐	ハケ・ケズリ・ツギナデ	ハケ目		金曇母・角閃石
399	弥・鉢	15.9	7.8		中・普	良好	浅黄	ナデ・ケズリ	ハケ目	内面くもの巣状のハケ目	曇母
400	弥・鉢	15.8	7.8		中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ	ナデ		金曇母・角閃石
401	弥・鉢	16.2	8.0		微・普	良好	灰黄・コブイ橙	ナデ・ケズリ	ハケ目		
402	弥・鉢	16.0	8.4		中・普	良好	黄褐・コブ黒	ナデ	ハケ目	内面原体の異なるハケ目	金曇母
403	弥・鉢	15.6	7.5		中・普	良好	浅黄	ナデ・ケズリ	ケズリ→ナデ		
404	弥・鉢	16.4	7.1		粗・普	良好	にぶい橙	ケズリ→ナデ	ハケ目		金曇母・角閃石
405	弥・鉢	17.2	8.1		中・普	良好	灰黄褐・黒	叩き→ナデ・ケズリ	板ナデ・ミガキ		
406	弥・鉢	12.6	5.8	5.0	中・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		金曇母
407	弥・鉢	12.3	7.3	3.5	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ナデ	ハケ目		金曇母
408	弥・鉢	13.3	6.3	3.7	細・普	良好	にぶい黄褐	板ナデ・叩き	ナデ	底外面ケズリ	金曇母
409	弥・鉢	12.1	6.6	2.9	中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ハケ目→ナデ		金曇母・角閃石
410	弥・鉢	13.2	5.9	2.9	細・普	良好	明赤褐	不明	不明		
411	弥・鉢	13.2	6.9	3.6	中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・叩き	ナデ	底突出	金曇母・角閃石

第686図 G区SR02出土遺物(50)(1/4)

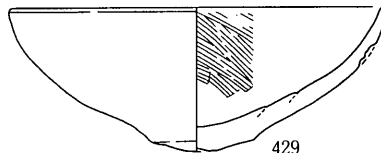


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
412	弥・鉢	9.6	8.7	2.4	中・普	良好	橙	叩き→ナデ	ハケ目・ナデ		金曇母・角閃石
413	弥・鉢	11.8	8.4	3.7	中・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ		金曇母・曇母
414	弥・鉢	13.1	8.0	4.1	細・普	良好	橙	叩き	ハケ目		金曇母・角閃石
415	弥・鉢	10.4	6.8	3.6	中・普	良好	明褐	ケズリ→ナデ	ナデ		
416	弥・鉢	14.0	6.2	3.7	中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ	ナデ	底外面ケズリ	
417	弥・鉢	15.2	5.4	4.5	細・普	良好	灰黄褐	ハケ目→ナデ	ハケ目→ナデ		金曇母・角閃石
418	弥・鉢	13.6	6.8	4.0	粗・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ	ハケ目→ナデ		
419	弥・鉢	13.7	9.2	4.0	中・普	良好	明赤褐	ナデ	ハケ目→ナデ		金曇母・角閃石
420	弥・鉢	14.3	8.5	3.9	中・普	良好	灰黄褐	ナデ	ハケ目		金曇母
421	弥・鉢	15.1	7.0	3.6	中・普	良好	明赤褐	叩き→ナデ	ハケ目		
422	弥・鉢	11.6			中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ	ハケ目	2種類のハケ目原体	金曇母
423	弥・鉢	14.0			微・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ	ミガキ		金曇母
424	弥・鉢	17.0	6.3		中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ	ナデ		金曇母・角閃石
425	弥・鉢	18.0	6.7		細・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ	ハケ目・ナデ		金曇母・角閃石
426	弥・鉢	19.8	6.7		中・普	良好	にぶい黄褐	ケズリ	ナデ		金曇母・角閃石
427	弥・鉢	18.0	7.6		粗・普	良好	橙・黒	ナデ・ケズリ	ミガキ		金曇母

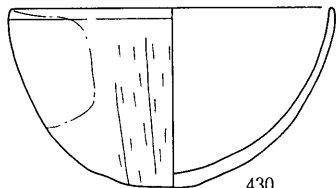
第687図 G区SR02出土遺物(51)(1/4)



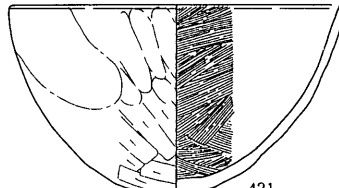
428



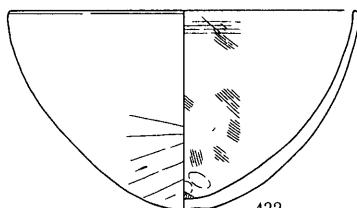
429



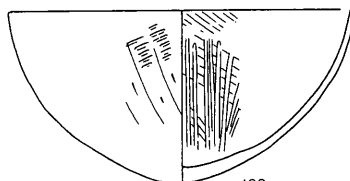
430



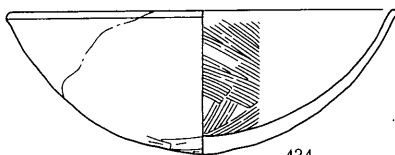
431



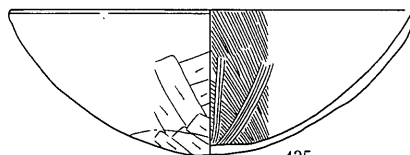
432



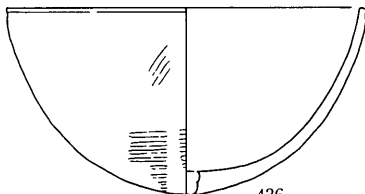
433



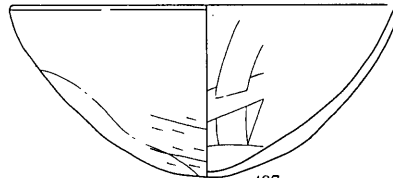
434



435



436

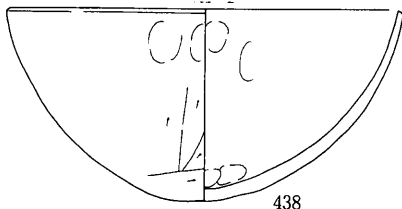


437

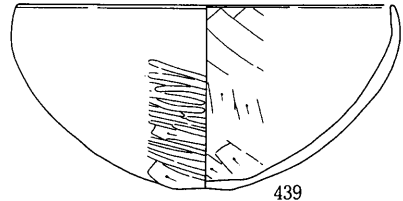


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
428	弥・鉢	18.6	7.9		微・普	良好	にぶい黄褐	ケズリ→ハケ目	ハケ目・ナデ		金雲母・角閃石
429	弥・鉢	19.5	7.3		中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ハケ目	底乱雑なケズリ	金雲母・角閃石
430	弥・鉢	16.8	9.3		中・普	良好	明褐	ケズリ	ナデ		金雲母
431	弥・鉢	17.7	9.7		中・普	良好	橙	ナデ・ケズリ	ハケ目		
432	弥・鉢	18.2	10.5		中・普	良好	にぶい赤褐	ナデ・ケズリ	ハケ目→ナデ		金雲母・角閃石
433	弥・鉢	17.8	9.1		中・普	良好	にぶい褐	叩き→ケズリ・ナデ	ハケ目→ミガキ	楕円形に歪む	金雲母・角閃石
434	弥・鉢	20.2	7.6		細・普	良好	にぶい赤褐	ナデ・ケズリ	ハケ目		金雲母・角閃石
435	弥・鉢	21.5	7.6		中・普	良好	にぶい褐	ナデ・ケズリ	ハケ目		金雲母・角閃石
436	弥・鉢	18.8	9.7		中・普	良好	にぶい赤褐	ナデ・叩き	不明		金雲母
437	弥・鉢	20.6	9.0		粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	板ナデ		

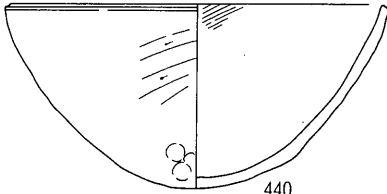
第688図 G区SR02出土遺物(52)(1/4)



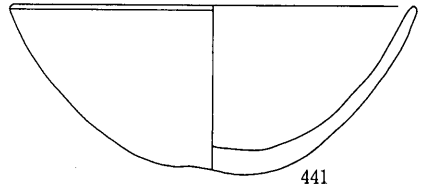
438



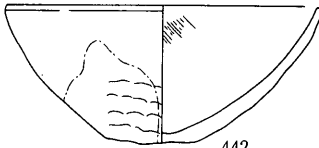
439



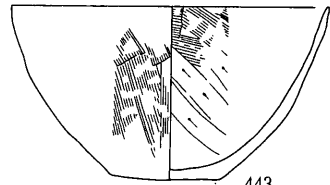
440



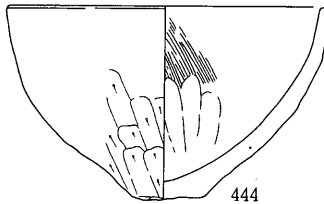
441



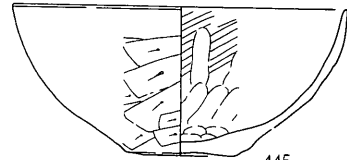
442



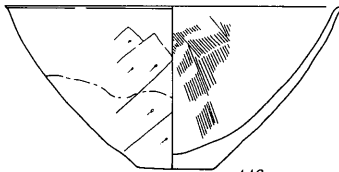
443



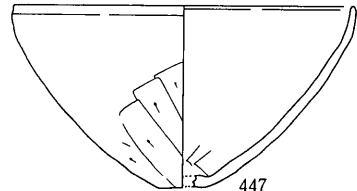
444



445



446

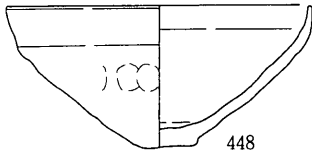


447

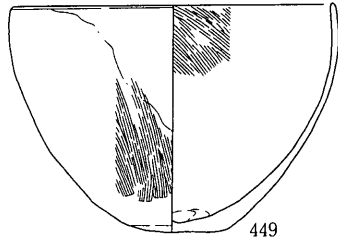


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
438	弥・鉢	20.4	10.9		中・普	良好	灰黄褐	ナデ・ケズリ	ナデ		
439	弥・鉢	20.0	9.5		粗・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ→ミカキ	ナデ・ケズリ→ナデ		金罌母
440	弥・鉢	19.6	9.3		中・普	良好	にぶい黄褐	ケズリ→ナデ	ハケ目→ナデ		金罌母
441	弥・鉢	21.0	8.5		中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	底不整形	
442	弥・鉢	16.5	7.0	4.7	中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ハケ目→ナデ		金罌母
443	弥・鉢	16.6	8.7	5.5	微・普	良好	橙	ハケ目	ハケ目・ケズリ		
444	弥・鉢	16.6	10.2	3.7	細・普	良好	褐灰～灰黄褐	ナデ・ケズリ	ハケ目→ナデ		金罌母
445	弥・鉢	17.5	8.0	5.9	中・普	良好	にぶい赤褐	ナデ・ケズリ	ハケ目→ナデ	口縁部歪む	金罌母
446	弥・鉢	17.8	8.5	4.0	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	ハケ目		金罌母・角閃石
447	弥・鉢	17.8	9.5	2.6	粗・普	良好	にぶい褐	ナデ・ケズリ	ナデ		金罌母・角閃石

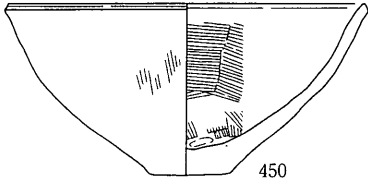
第689図 G区SR02出土遺物(53)(1/4)



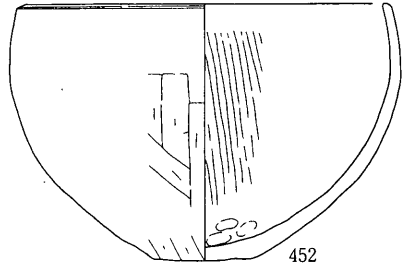
448



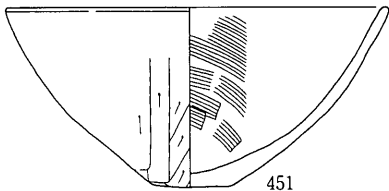
449



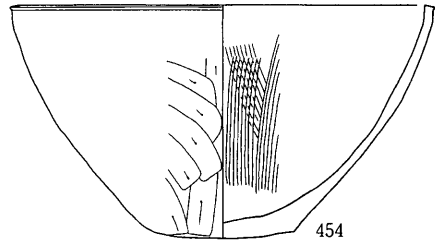
450



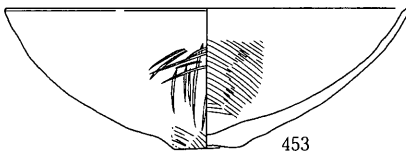
452



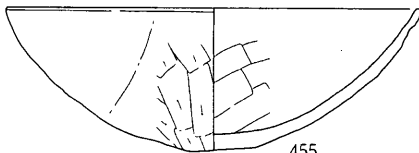
451



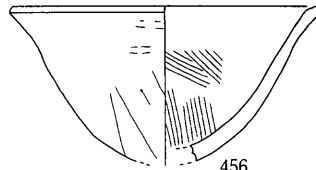
454



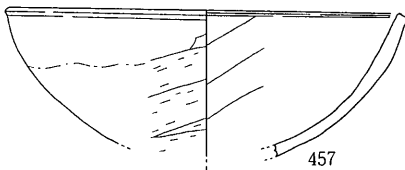
453



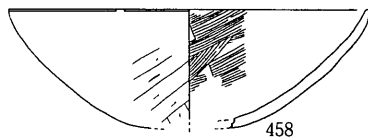
455



456



457

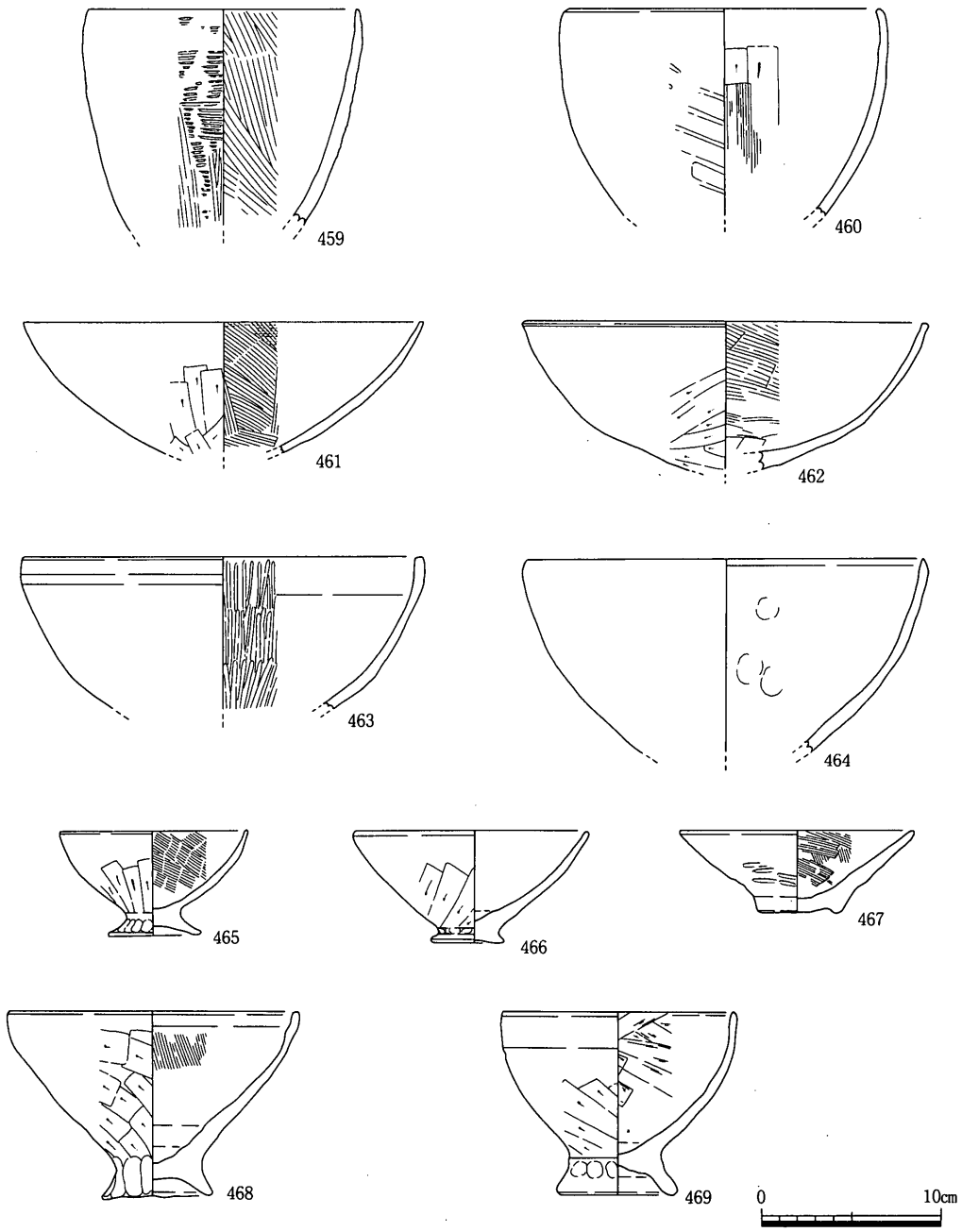


458



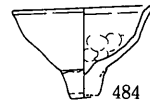
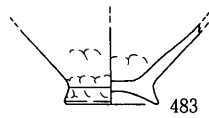
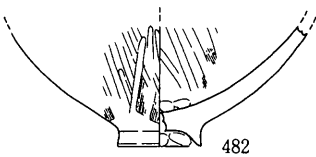
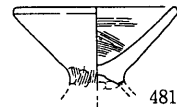
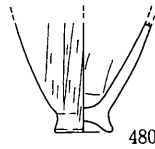
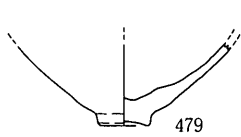
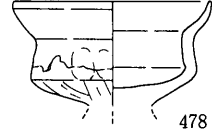
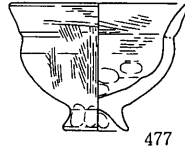
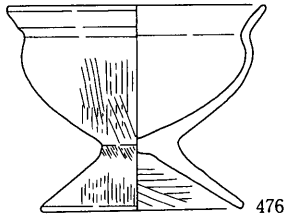
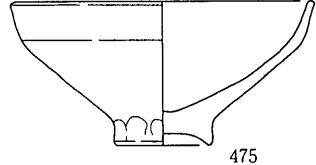
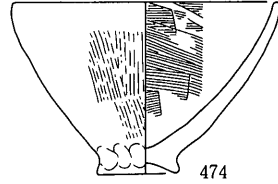
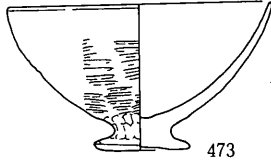
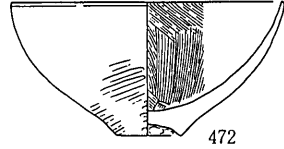
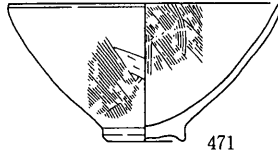
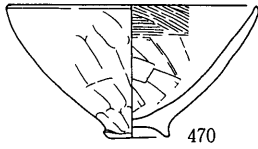
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
448	弥・鉢	15.9	7.3	3.4	粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ		蟹母・角閃石
449	弥・鉢	16.8	11.8	5.4	中・普	良好	明赤褐	ハケ目	ナデ・ハケ目	底外面ハケ目	金蟹母・角閃石
450	弥・鉢	18.8	8.9	4.3	中・普	良好	橙	ハケ目→ナデ	ハケ目		
451	弥・鉢	20.2	9.4	4.4	中・普	良好	コブ・黄褐・黒	ナデ・ケズリ	ハケ目→ナデ	底外面ヘラケズリ	金蟹母・角閃石
452	弥・鉢	18.8	13.5	5.4	中・普	良好	にぶい褐	ナデ・ケズリ	ハケ目→ナデ		金蟹母・蟹母
453	弥・鉢	21.1	7.4	3.7	粗・普	良好	明褐	叩き→ナデ	ハケ目		金蟹母・角閃石
454	弥・鉢	22.4	12.2	7.9	中・普	良好	明黄褐	ナデ・ケズリ	ハケ目		金蟹母
455	弥・鉢	21.9	7.5	3.6	細・普	良好	橙	ナデ・ケズリ	板ナデ	外面上下交互にハケ目	金蟹母・角閃石
456	弥・鉢	16.0			中・普	良好	橙	叩き→ナデ・ケズリ	ナデ・ハケ目		金蟹母
457	弥・鉢	20.5			中・普	良好	にぶい橙	ナデ・ケズリ	板ナデ		
458	弥・鉢	19.0			中・普	良好	にぶい褐	ナデ・ケズリ	ハケ目→ナデ		金蟹母

第690図 G区SR02出土遺物(54)(1/4)



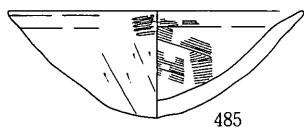
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
459	弥・鉢	15.0			中・普	良好	黒・にぶい褐	叩き→ハケ目	ハケ目	非常に粗いハケ目	
460	弥・鉢	16.8			細・普	良好	暗灰黄	叩き→板ナデ	打・ケズリ→ハケ目		金雲母
461	弥・鉢	22.4			中・普	良好	にぶい褐	ナデ・ケズリ	ハケ目		金雲母・角閃石
462	弥・鉢	21.9			細・少	良好	にぶい褐	ナデ・ケズリ	ハケ目・板ナデ		金雲母・角閃石
463	弥・鉢	22.4			細・多	良好	にぶい褐	不明	ミガキ		金雲母
464	弥・鉢	22.0			中・普	良好	橙・にぶい橙	不明	ナデ		金雲母・角閃石
465	弥・鉢	10.5	5.8	5.2	中・普	良好	浅黄	ナデ・ケズリ	ハケ目		
466	弥・鉢	13.2	6.2	4.1	中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ケズリ	ナデ	底突出	角閃石
467	弥・鉢	12.9	4.6	4.5	中・普	良好	にぶい褐	叩き→ナデ	ハケ目	底指整形	金雲母
468	弥・鉢	16.3	10.3	6.2	中・普	良好	明赤褐	ナデ・ケズリ	ハケ目→ナデ		金雲母
469	弥・鉢	12.8	10.2	6.8	粗・普	良好	橙	ナデ・ケズリ	板ナデ		

第691図 G区SR02出土遺物(55)(1/4)

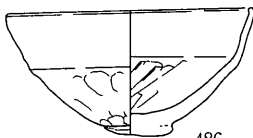


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
470	弥・鉢	13.0	6.8	3.1	細・普	良好	にぶい褐	ナデ	ハケ目→板ナデ		金罌母
471	弥・鉢	14.3	7.0	4.0	中・普	良好	にぶい黄橙	ク*リ→ハケ目・ナデ	ハケ目・ナデ		金罌母
472	弥・鉢	14.3	6.8	3.5	中・普	良好	にぶい褐	叩き→ナデ	ハケ目		金罌母・角閃石
473	弥・鉢	13.2	7.7	4.7	細・普	良好	にぶい赤褐	叩き	ナデ		金罌母・角閃石
474	弥・鉢	14.1	9.0	4.3	細・普	良好	黄褐・明黄褐	ハケ目→ナデ	ハケ目		金罌母
475	弥・鉢	16.0	7.5	4.8	中・普	良好	明赤褐・赤褐	不明	ナデ	底を指で押し上げる	
476	弥・鉢	13.4	10.8	10.4	中・普	良好	にぶい橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		金罌母・角閃石
477	弥・鉢	9.4	6.7	3.5	中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ハケ目・ナデ	脚部を貼り付ける	角閃石
478	弥・鉢	10.4			粗・普	良好	にぶい橙	ケズリ・ナデ	ナデ	全体に指押さえ顕著	金罌母
479	弥・鉢			2.4	中・普	不良	黒	ナデ	ナデ		金罌母
480	弥・鉢			3.0	細・普	良好	暗灰黄	ケズリ	ナデ		
481	弥・鉢	8.2			中・普	良好	橙	ナデ・ハケ目	ハケ目		金罌母
482	弥・鉢			4.4	中・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目→ミガキ	ハケ目→ミガキ		金罌母
483	弥・鉢			4.8	細・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		金罌母・角閃石
484	弥・鉢	7.4			細・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ	差し込み法	金罌母

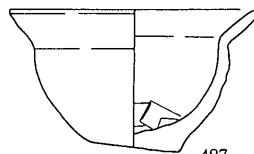
第692図 G区SR02出土遺物(56)(1/4)



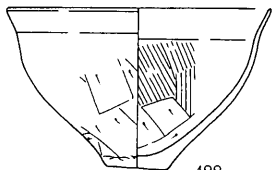
485



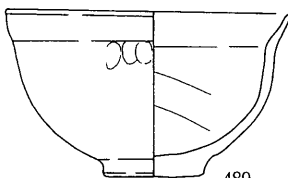
486



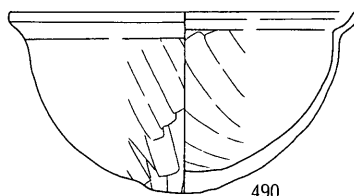
487



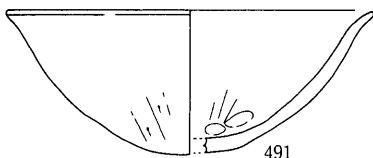
488



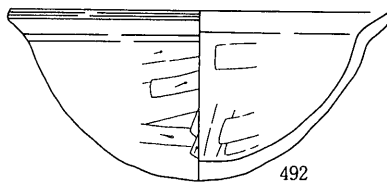
489



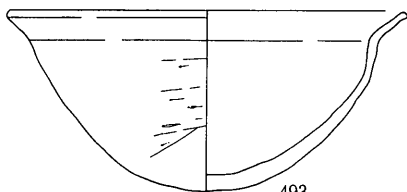
490



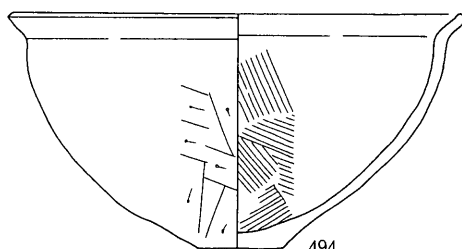
491



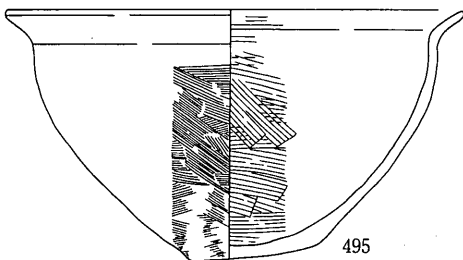
492



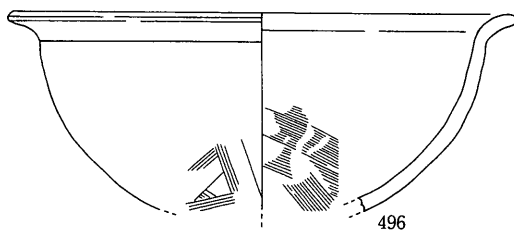
493



494



495

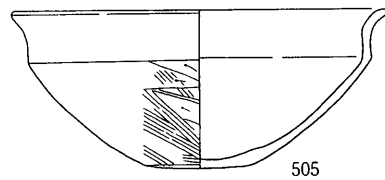
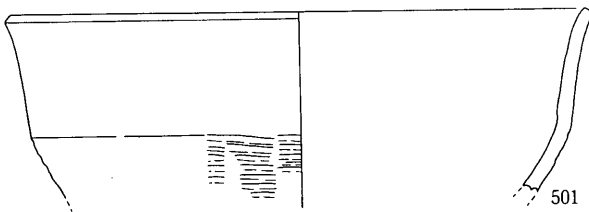
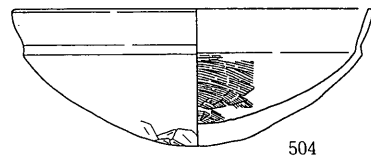
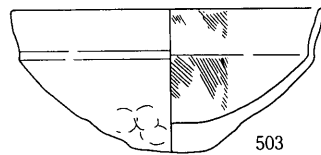
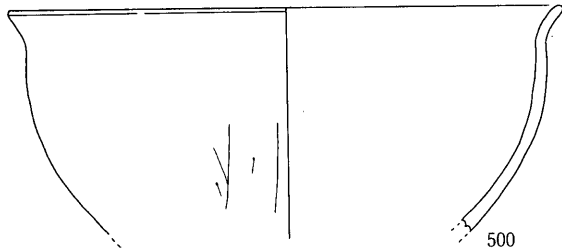
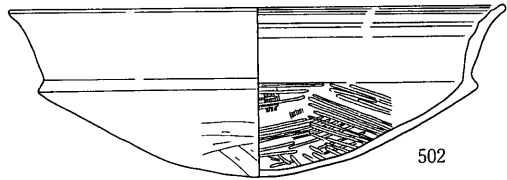
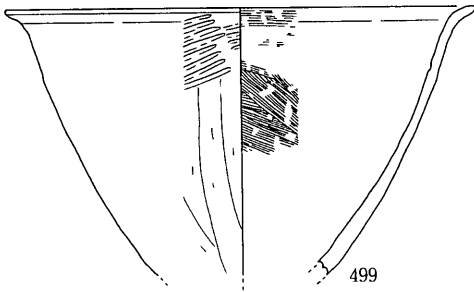
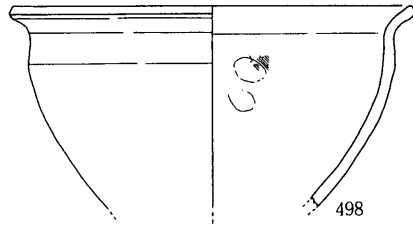
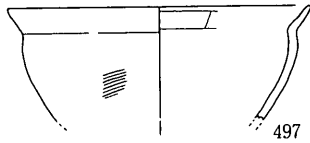


496



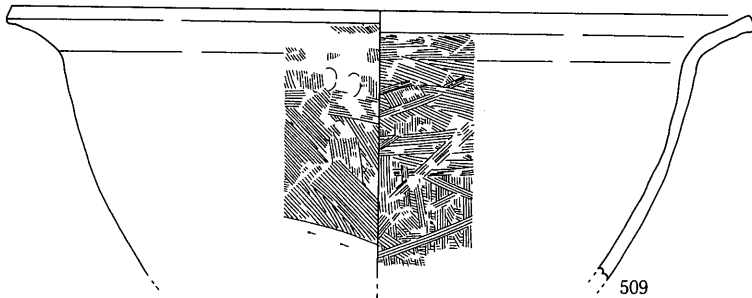
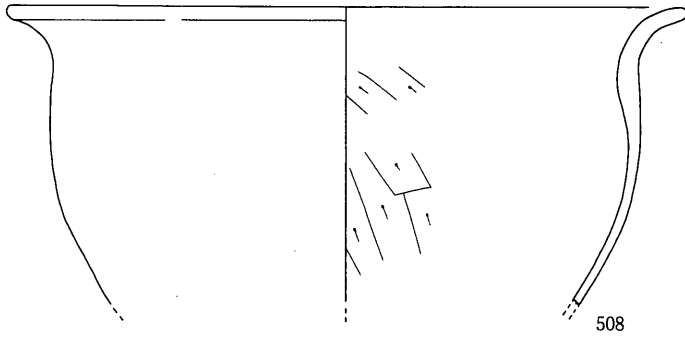
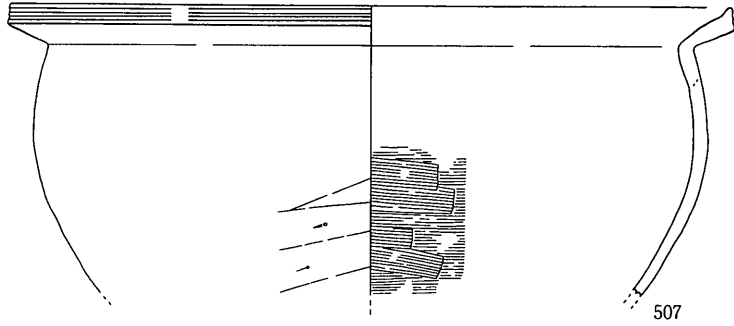
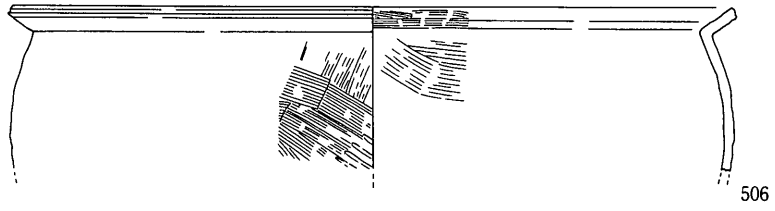
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
485	弥・鉢	15.8	5.4		中・普	良好	橙・にぶい黄	叩き→ケズリ	ハケ目→ナデ		金雲母・角閃石
486	弥・鉢	12.7	6.5	3.5	中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ	口縁部歪む、底突出	金雲母
487	弥・鉢	13.1	7.2	4.6	中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		金雲母
488	弥・鉢	13.9	8.1	3.3	粗・普	良好	にぶい赤褐	ナデ・ケズリ	ハケ目・ケズリ		金雲母
489	弥・鉢	15.0	8.5	5.2	細・普	良好	灰黄	ナデ	板ナデ	底外面ハケスリ→ハケ目	
490	弥・鉢	18.3	9.2		細・普	良好	コブイ褐・黒褐	板ナデ	板ナデ		金雲母・角閃石
491	弥・鉢	18.2	7.2		中・普	良好	灰白・コブイ橙	ナデ・ケズリ	ナデ		金雲母・角閃石
492	弥・鉢	19.8	8.6		中・普	良好	灰黄・暗灰黄	ナデ・ケズリ	ナデ		金雲母
493	弥・鉢	20.8	9.4		中・普	良好	にぶい黄	ナデ・ケズリ	ナデ		金雲母・角閃石
494	弥・鉢	23.5	12.3	4.7	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	ハケ目		金雲母
495	弥・鉢	24.4			中・普	良好	明赤褐・明褐	ハケ目	ハケ目	底外面ハケ目	金雲母
496	弥・鉢	26.8			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目		金雲母

第693図 G区SR02出土遺物(57)(1/4)



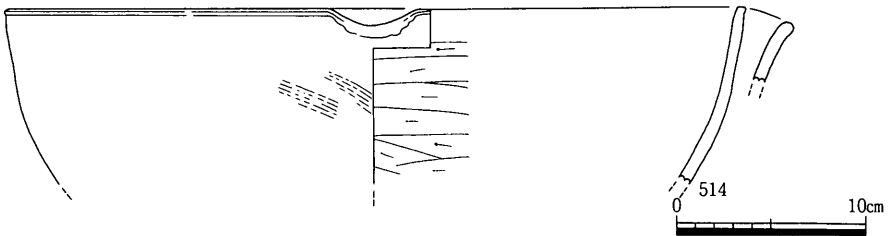
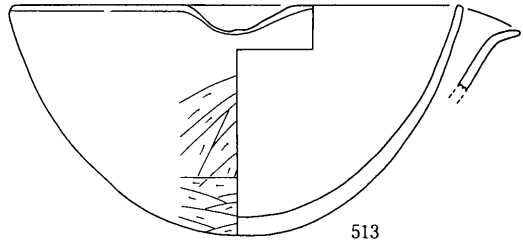
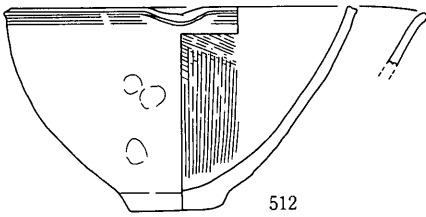
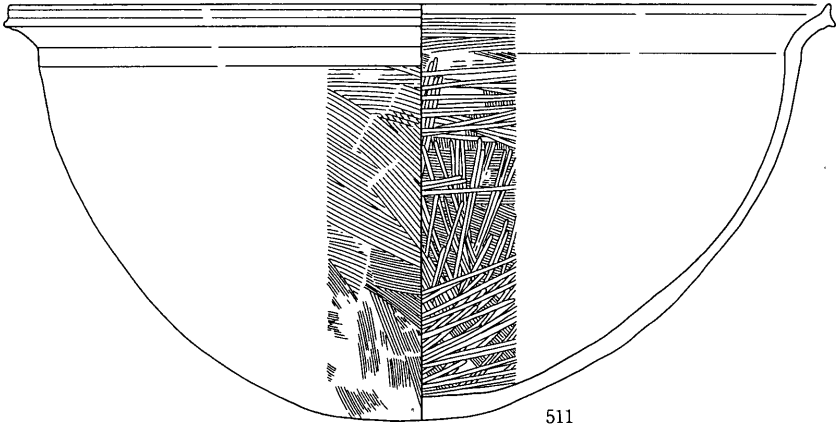
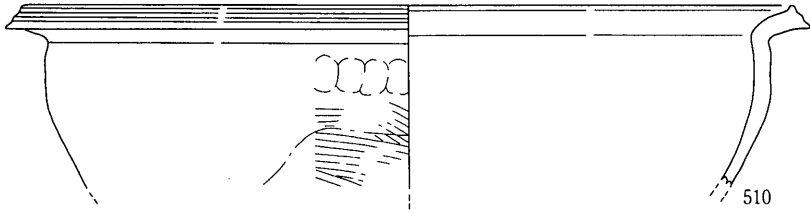
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
497	弥・鉢	15.6			微・普	良好	橙・コア赤褐	叩き→ナデ	ナデ		金罌母
498	弥・鉢	21.0			中・普	良好	にぶい橙	不明	ハケ目→ナデ		金罌母・角閃石
499	弥・鉢	24.6			細・普	良好	橙	叩き・ケズリ	ハケ目・ナデ		金罌母
500	弥・鉢	29.0			中・普	良好	橙・黒	ナデ・ケズリ	ナデ		金罌母・角閃石
501	弥・鉢	31.0			細・普	良好	にぶい褐	ナデ・叩き	ナデ		金罌母・角閃石
502	弥・鉢	26.0	8.8		中・普	良好	にぶい黄	ナデ・ケズリ	打・ハ目→ミガキ	高杯の杯部状の形態	金罌母・角閃石
503	弥・鉢	16.5	7.6	4.4	中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ハケ目→ナデ		金罌母・角閃石
504	弥・鉢	18.5	7.3		中・普	良好	にぶい橙	ナデ・ケズリ	ハケ目・ナデ	底外面ケズリ	金罌母
505	弥・鉢	19.8	8.3	5.6	粗・普	良好	明褐	打・スリ・ハ目	ナデ	底外面ケズリ	金罌母

第694図 G区SR02出土遺物(58)(1/4)



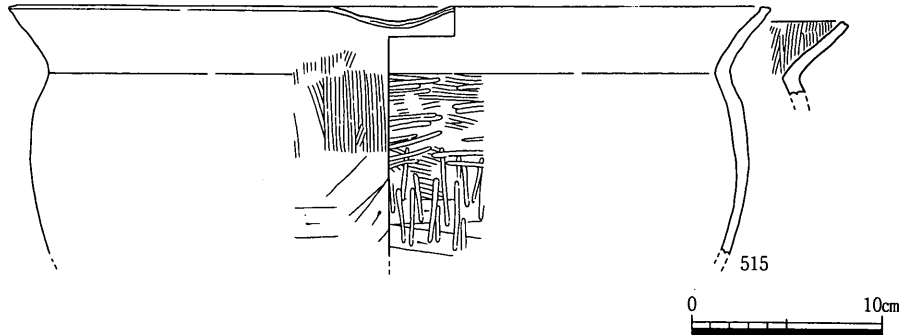
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
506	弥・鉢	37.8			中・普通	良好	浅黄	叩き→ハケ目	ハケ目→ナデ		
507	弥・鉢	38.0			細・普通	良好	にぶい褐	ナデ・ケズリ	ナデ・ハケ目		金罌母・角閃石
508	弥・鉢	36.0			細・普通	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ・ケズリ	注ぎ口有り	金罌母
509	弥・鉢	39.0			細・普通	良好	にぶい黄橙	ハケ目・ケズリ	ハケ目		金罌母・角閃石

第695図 G区SR02出土遺物(59)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法的特徴	備考
510	弥・鉢	40.8			中・普	良好	橙	ハケ目	ナデ		角閃石
511	弥・鉢	43.2	21.6	9.5	細・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目	ハケ目→ミガキ		金銀母
512	弥・鉢	18.6	10.1	4.9	中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ハケ目	注ぎ口1ヶ所	金銀母・角閃石
513	弥・鉢	23.3	12.1		中・普	良好	暗灰黄	ナデ	ナデ	注ぎ口1ヶ所	角閃石
514	弥・鉢	38.2			細・普	良好	橙	ハケ目→ナデ	ケズリ	注ぎ口1ヶ所	角閃石

第696図 G区SR02出土遺物(60)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
515	弥・鉢	39.0			微・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目・ケズリ	ハケ目・ケズリ→ミガキ	注ぎ口内面ハケ目	金盃母

第697図 G区SR02出土遺物(61)(1/4)

にハケ目の後にヘラミガキを施している。

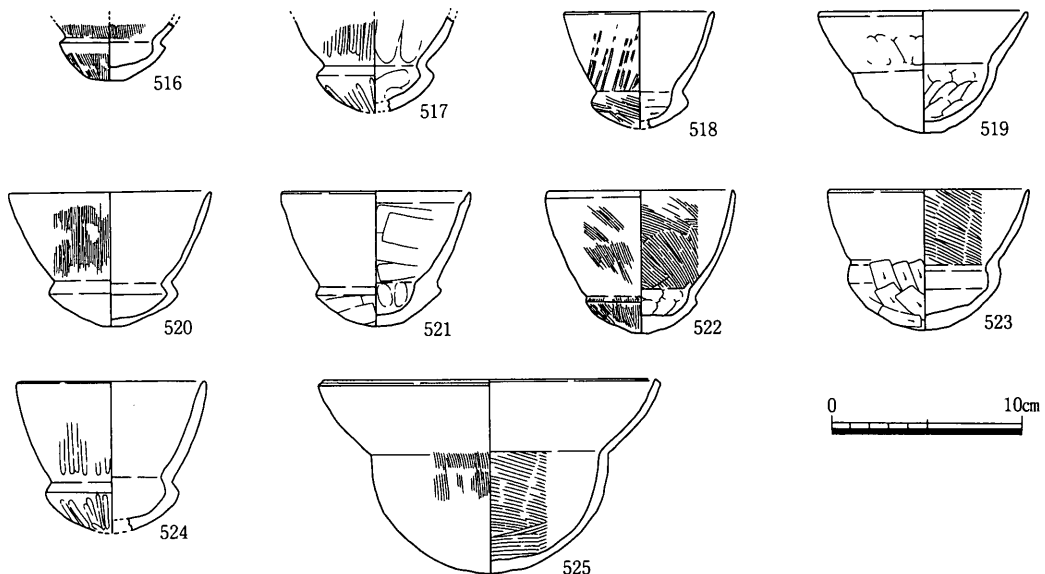
484は体部は中程で屈曲し、口縁部も外側に屈曲している。脚部は厚く突出しているがおそらく差し込み法による脚部が下に付くものと思われる。

485～505は口縁部が鋭く屈曲するものである。485は口縁部は短く外側に屈曲し、端部は先細りとなる。口縁部外面に叩きが施されている。486は口縁部に2段のナデが見られ端部は内側に肥厚している。底部は突出したものがつぶれている。488は全体に薄い作りとなっている。490は口縁部端部を上方につまみ上げて、受け口状にしている。495は体部内・外面と底部外面に丁寧にハケ目を施している。499は器高が高く深鉢形になっている。外面の体部上半から口縁部にかけて叩きが施されている。内面は口縁部と体部上半にハケ目を施している。501は口径が31cmと大型のもので、口縁部は長く若干の外反を見る。体部外面には叩きが施されている。502は高杯の杯形の鉢である。口縁部立ち上り部には外面に鋭い稜をもっている。口縁部は外反し、内面には強いナデにより凹線が形成されている。体部は浅く扁平で、外面にはヘラケズリを、内面にはハケ目の後に丁寧にヘラミガキを施している。503～505は口縁部立ち上り部外面に鋭い稜線が形成され、505の口縁部は強く外反する。

506～511は口径が30cmを超える大型品である。507・510・511は口縁部端部を拡張し外側に面を作り出し、擬凹線を施している。509は体部内・外面に丁寧にハケ目を施している。511は体部は半球形で内・外面に丁寧にハケ目を施し、内面にはさらにヘラミガキを加えている。内面には赤色顔料が若干付着している。

512～515は口縁部の1箇所注ぎ口を作り出しているものである。515は口縁部内面にもハケ目を施し、体部内面にハケ目とヘラケズリを施した後にヘラミガキを加えている。

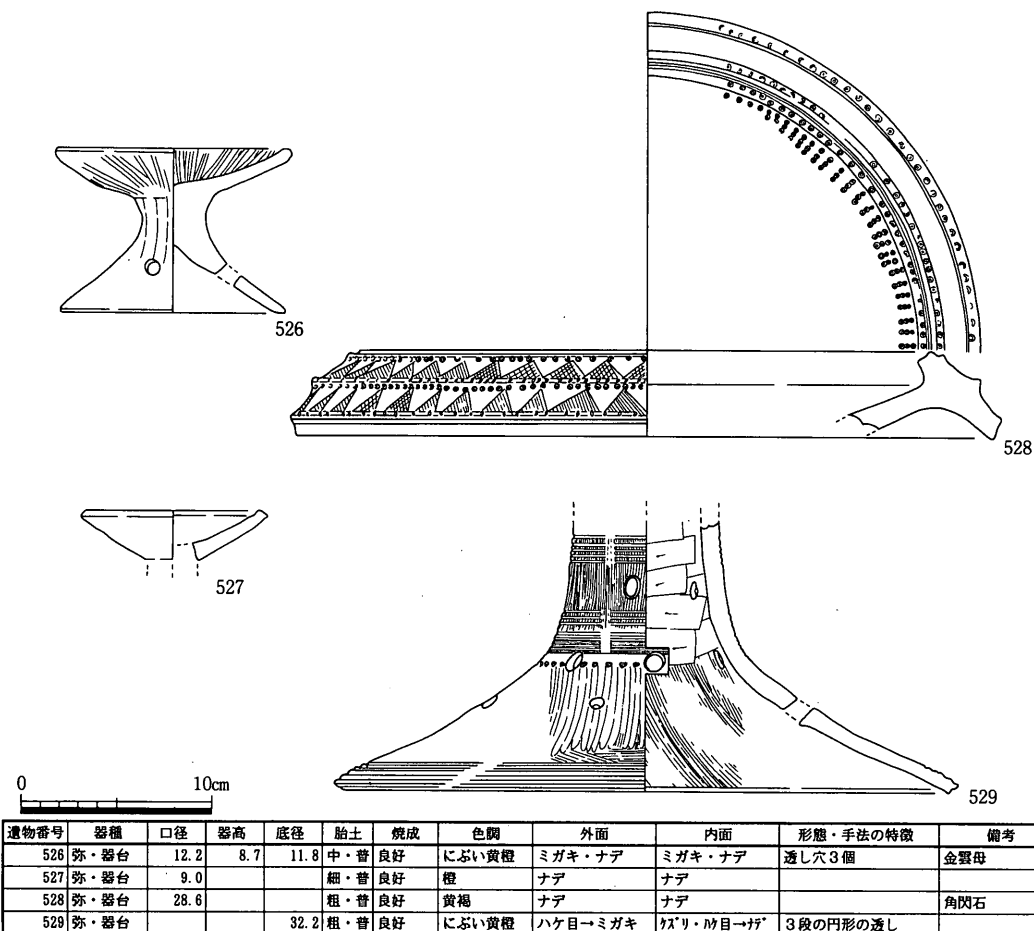
516～525は小型丸底壺である。いずれも体部最大径よりも口径が大きく上回っている。516・517は口縁部は欠損している。体部は扁平になっており、最大径は上端部にあり、最大径の部分で鋭く屈曲している。517は口縁部と体部の外面はヘラミガキとなっている。内面は指でナデている。518・520～522・524は口縁部の高さと同部の高さの比がほぼ2：1になるものである。これに対し519・523・525はほぼ等しくなっている。518は体部最大径部で屈曲し、屈曲部分が肥厚している。口縁部外面には縦方向のヘラミガキを、体部外面には横方向のヘラミガキを施している。521は口縁部内面にナデにより段が生じ、端部は先細りになる。体部の上端で屈曲しそのまま口縁部に至る。屈曲部は肥厚し、外面に鋭い稜をもつ。522は口縁部は緩く内湾し、端部は先細りとなる。体部外面はハケ目となっている。523は体部から丸みを帯びて口縁部に至り、体部はやや大きめになっている。体部外面はヘラケズリを施している。524は口縁部と体部の外面に縦方向のヘラミガキが施されている。525は他のものに比べると大型になっている。口縁部は緩く内湾し端部は外側に平坦な面を作る。体部は半球形で底部はやや肥厚している。体部外面はハケ目の後にナデしており、内面はハケ目となっている。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
516	弥・小丸				粗・普	良好	橙	ハケ目	ハケ目・ナデ		
517	弥・小丸				細・普	良好	にぶい橙	ミガキ	ナデ		金雲母
518	弥・小丸	8.0	6.1		中・普	良好	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ・ケズリ		金雲母・角閃石
519	弥・小丸	10.9	6.5		細・普	良好	にぶい赤褐	ナデ	ナデ		金雲母
520	弥・小丸	10.6	7.1		中・普	良好	橙	ハケ目・ナデ	ナデ		角閃石
521	弥・小丸	10.0	7.2		細・普	良好	橙	ナデ	ケズリ→ナデ	底砲弾形に突出	角閃石
522	弥・小丸	9.7	7.5		細・普	良好	にぶい褐	ハケ目→ナデ	ハケ目・ナデ	底砲弾形に突出	金雲母・角閃石
523	弥・小丸	10.6	7.4		細・普	良好	にぶい褐	ナデ・ケズリ	ハケ目・ナデ		金雲母
524	弥・小丸	10.0			中・普	良好	橙・明黄橙	ミガキ	ナデ		角閃石
525	弥・小丸	17.4	10.2		中・普	良好	暗灰黄	ハケ目→ナデ	ナデ・ハケ目		金雲母

第698図 G区SR02出土遺物(62)(1/4)

526~529は器台である。526・527は小型器台である。526は受け部は直線的で端部は丸く納める。受け部の内・外面はヘラミガキとなっている。脚部も直線的に開き、中実になっている。脚部には3個の透し穴がある。528は器台の口縁部である。端部は斜め方向に上下に大きく拡張して、外側に幅広の面を作り出している。端面の上部と中央部に断面三角形の突帯を巡らせ、中央部の突帯の上下に鋸歯文を巡らせ、鋸歯文の上には小さな竹管文を巡らす。また中央部の突帯と口縁部の下端部には刻み目を入れる。さらに上部と中央部の突帯の上側と内傾する口縁部上端面、口縁部端部内側の立ち上り部分の下側に竹管文を巡らしている。全体に装飾を加えている。529は器台の筒部から脚部である。脚部は直線的に大きく開き、端部は斜めの面をもつ。これに比べて筒部は細くなっている。筒部はハケ目の後に2段にわたり沈線を巡らしている。脚部上端部には刺突文が、脚部端部には沈線がそれぞれ巡っている。脚部端面にも沈線が巡っている。脚部外面にはハケ目を施した後ヘラミガキを、内面はハケ目をそれぞれ施している。筒部内面にはヘラケズリを施



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
526	弥・器台	12.2	8.7	11.8	中・普	良好	にぶい黄橙	ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	透し穴3個	金雲母
527	弥・器台	9.0			細・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
528	弥・器台	28.6			粗・普	良好	黄褐	ナデ	ナデ		角閃石
529	弥・器台			32.2	粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目→ミガキ	ハズリ・竹目→ナデ	3段の内形の透し	

第699図 G区SR02出土遺物(63)(1/4)

している。また筒部から脚部にかけて3段の透し穴がある。

530～541は甗である。530は体部は直線的で、底部外面にヘラケズリを施す。531は口縁部端部は先細りとなり、体部外面には叩きを施している。534は口縁部端部外面にはヘラ描き沈線が2条巡っている。体部内面はハケ目となっている。536～541は砲弾形の甗である。536は体部は全体に内湾し、口縁部は内傾する。537は口縁部外面にハケ目を施し、体部外面は板ナデとなっている。底部の穿孔は偏った場所にある。538は体部下端部に叩きを施し、口縁部内面にはハケ目を施している。541の底部はかなり肥厚している。

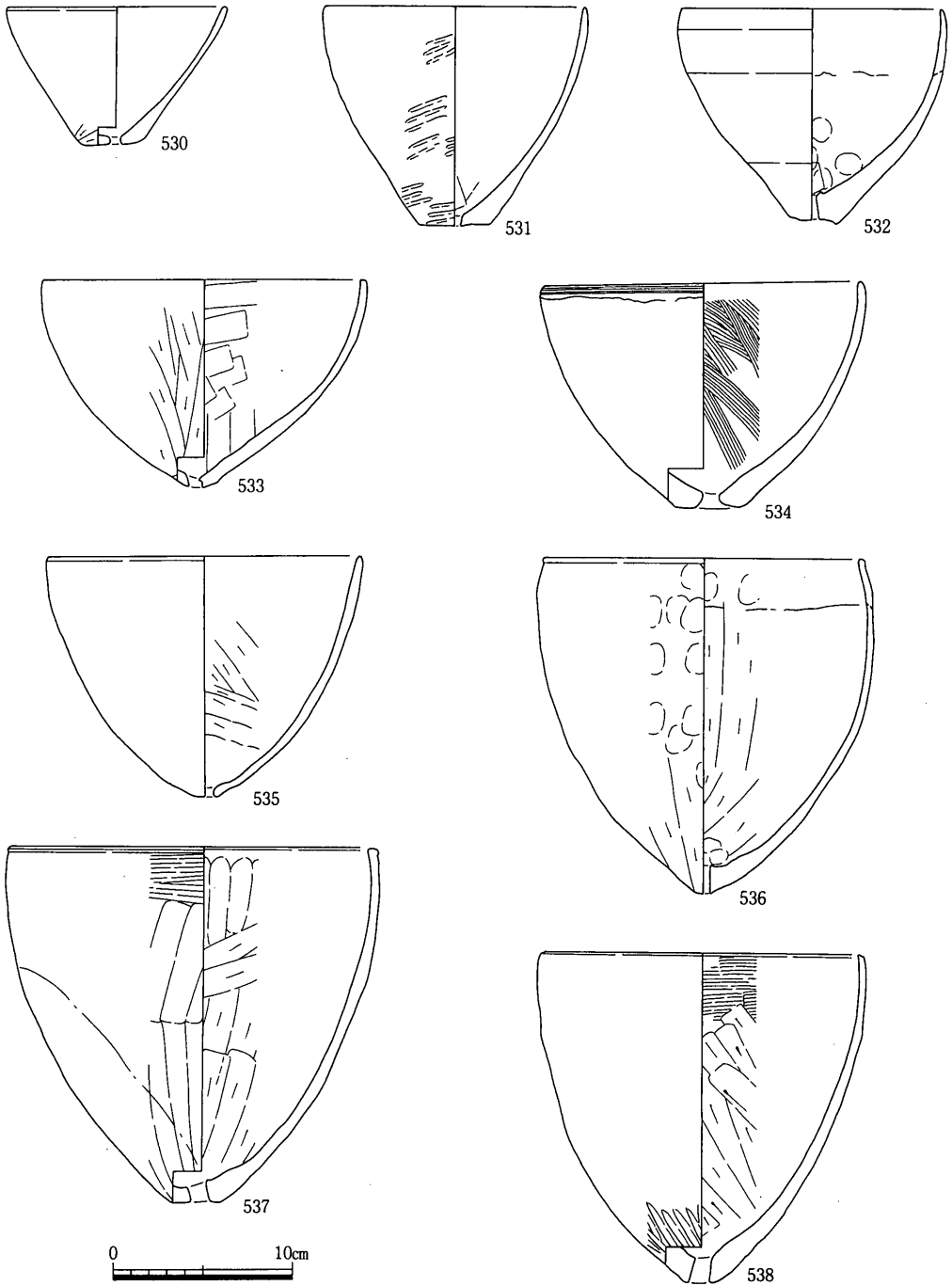
542～547は蓋である。543は蓋のつまみ部で中空のものに円盤充填している。544は甗の底部を転用したものである。上部から側面に向かって2個1対の穴が両方に開いている。穴に紐を通して使用していたものと考えられる。545はつまみ部は中実で指でナデて搾っている。裾部の端部をナデている。546はつまみ部は窪んでおり、裾部は緩く外反して開く。外面は板ナデである。547もつまみ部は窪んでおり、つまみの端部は大きく張り出している。裾部は大きく「ハ」字形に開いている。

548は壺の一種と考えられ、徳利形をしている。体部は下膨れで西洋梨のような形をしており、底部は不安定な丸底に近い平底である。口縁部は直線的で端部は先細りになる。

549は手焙り形土器である。球形の体部の上部に穴をあけ、その穴の下部に叩きを施して斜めの面を作り出している。体部下半は叩きの後に板ナデを施している。底部は丸底になっている。外面に装飾等がないことから、壺の頸部が欠損したものを転用したのかも知れない。

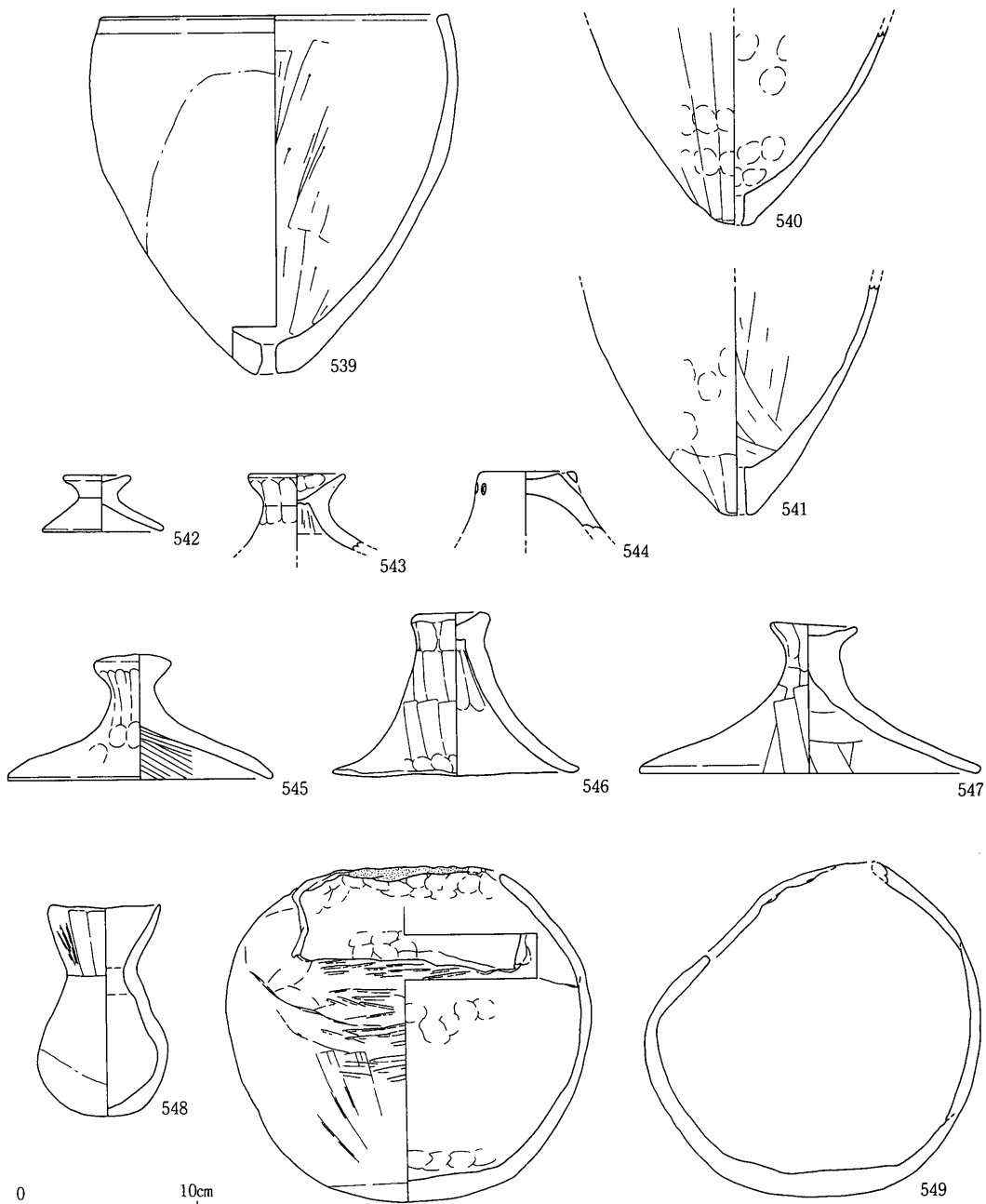
550～559はミニチュア土器で283～292と基本的に同じであるが、554・559を除いてこれらほど形が整っていない。壺とも甗とも言い難いものである。550は体部をそのまま内湾させたものである。551は鉢に近いものである。552は底部は肥厚しており、口縁部を強くナデている。553・558は口縁部は不整形で大きく歪み、553の底部は丸底であるが、558は安定した幅広の平底である。554は甗に近くなっている。555は外面全体に指押さえ痕が見られ、口縁部端部を若干つまみ出す。内面はヘラケズリとなっている。557も全体に歪み、内・外面は板ナデである。559は体部は上半で屈曲し、口縁部も鋭く屈曲して立ち上がる。口縁部端部は外側に面をもち擬凹線を施している。

560～563は製塩土器でいずれも脚部のみである。560は体部外面はヘラケズリで、脚部には指押さえを施している。561は脚部はナデている。560・561とも体部下端は直線的になっている。562は体部下半は丸みをもって立ち上がっており、外面には叩きを施してい



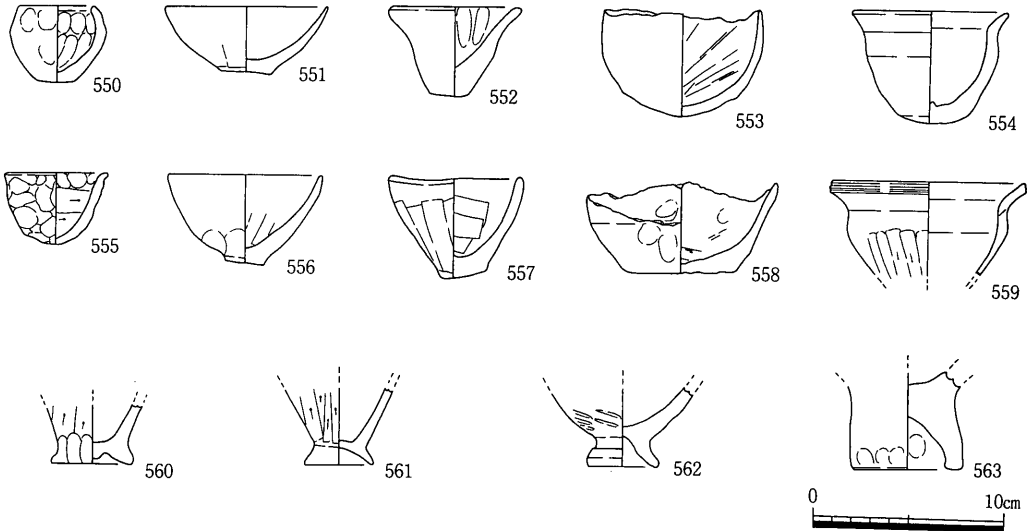
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
530	弥・甌	12.3	7.5	3.1	中・普	良好	橙	ナデ・ケズリ	ナデ	底外面ケズリ	
531	弥・甌	14.5	11.8	4.0	微・普	良好	にぶい黄橙	叩き→ナデ	ナデ		金雲母・角閃石
532	弥・甌	14.4	11.6	2.6	中・普	良好	黒・ゴイ黄橙	ナデ	ナデ		
533	弥・甌	18.0	11.1		中・普	良好	ゴイ黄褐・橙	ナデ・ケズリ	板ナデ	外面上下交互のケズリ	金雲母
534	弥・甌	17.7	12.1		中・普	良好	灰黄褐～黒	ナデ	ハケ目		金雲母・角閃石
535	弥・甌	17.5	13.1		粗・普	良好	灰黄	ナデ	ケズリ→ナデ		金雲母
536	弥・甌	17.9	18.3		粗・普	良好	橙	ケズリ・ナデ	ケズリ	口縁槽円形に歪む	金雲母
537	弥・甌	20.7	19.7		中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目・板ナデ	ナデ・ケズリ		
538	弥・甌	17.5	18.3		中・普	良好	褐	ナデ・叩き	ハケ目・ケズリ		金雲母・角閃石

第700図 G区SR02出土遺物(64)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
539	弥・甌	19.2	20.1		中・普	良好	明赤褐	ナデ	ケズリ		金曇母・角閃石
540	弥・甌				中・普	良好	にぶい黄橙	板ナデ	ナデ		金曇母
541	弥・甌				細・普	良好	橙	ナデ	ケズリ		金曇母・曇母
542	弥・蓋	6.8	3.1		粗・普	良好	褐灰	ナデ	ナデ		金曇母
543	弥・蓋			5.3	中・普	良好	黒褐・灰黄褐	ナデ	ナデ		金曇母
544	弥・蓋			5.5	中・普	良好	浅黄橙	ナデ	ケズリ		
545	弥・蓋	15.0	6.9		中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ハケ目		金曇母
546	弥・蓋	14.0	9.0		中・普	良好	浅黄橙	板ナデ	ナデ		金曇母
547	弥・蓋	19.3	8.5		中・普	良好	にぶい黄橙	板ナデ	板ナデ		曇母
548	弥・德利形	6.3	11.8	4.0	粗・普	良好	橙	ナデ	ナデ		角閃石
549	弥・手焙形	12.1	18.8	10.5	中・普	良好	にぶい褐	叩き一板ナデ	ナデ	前面叩きで窓部を作る	金曇母・角閃石

第701図 G区SR02出土遺物(65)(1/4)

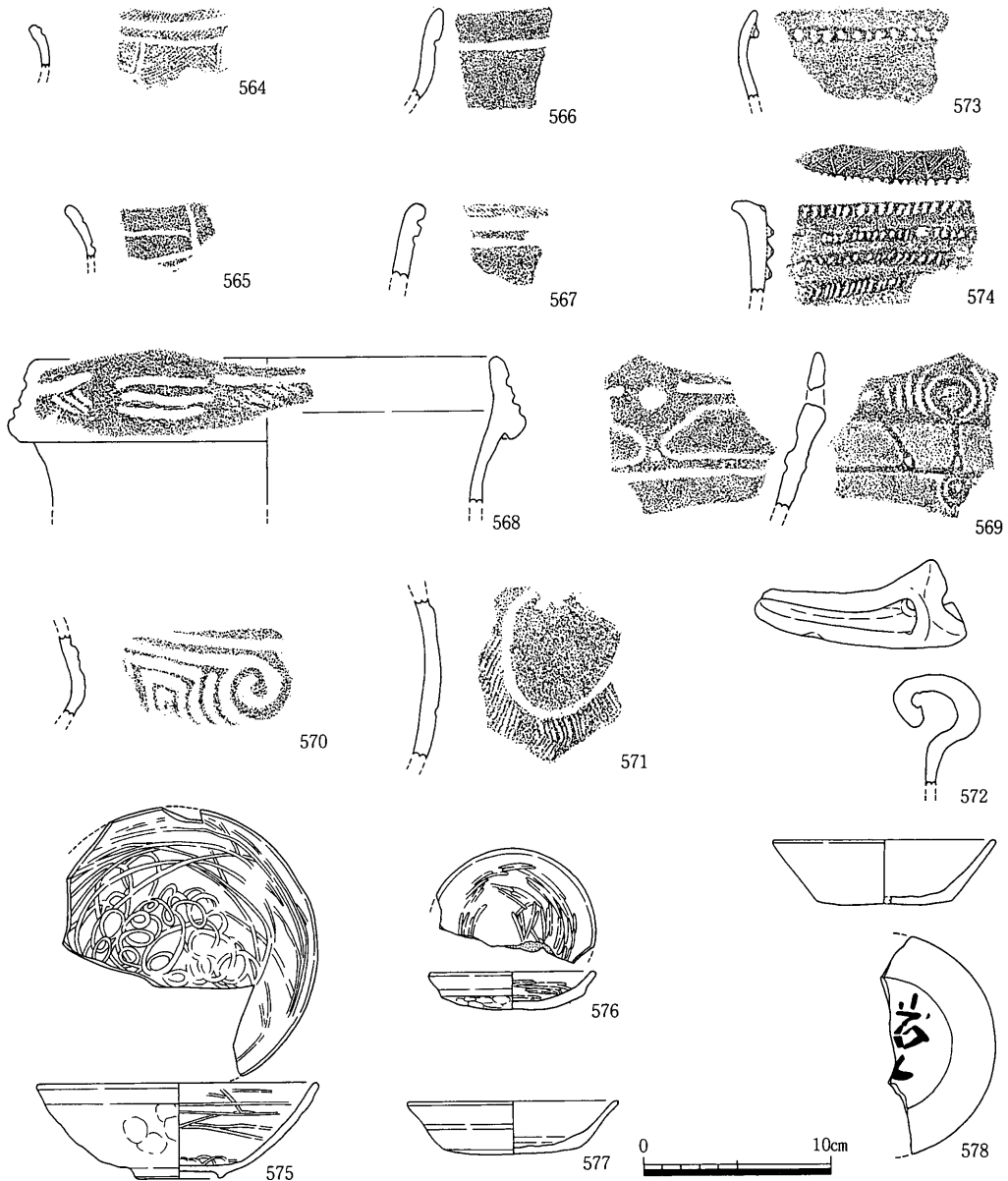


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
550	弥・ミニ	4.0	4.0	2.1	細・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		金雲母・角閃石
551	弥・ミニ	8.6	3.5	2.6	中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ		金雲母
552	弥・ミニ	7.0	4.6	2.0	細・普	良好	明褐	ナデ	ナデ		金雲母・角閃石
553	弥・ミニ	8.2	5.5		粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	板ナデ	口縁部不整形	金雲母
554	弥・ミニ甕	8.0	5.9	2.5	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		
555	弥・ミニ	5.4	3.7		中・普	良好	橙	ナデ	ケズリ	手捏ね	
556	弥・ミニ	8.0	4.7	2.0	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	板ナデ		金雲母
557	弥・ミニ	7.2	5.3	2.4	中・普	良好	浅黄	板ナデ	板ナデ		
558	弥・ミニ	10.0	4.7	5.6	微・普	良好	橙	ナデ	ナデ	甕を転用	角閃石
559	弥・ミニ甕	10.3			細・普	良好	褐灰	ナデ・ケズリ	ナデ		金雲母
560	弥・製塩			4.2	細・普	良好	黒・フイ褐	ケズリ	ナデ		金雲母
561	弥・製塩			3.6	中・普	良好	灰黄	ケズリ	ナデ		
562	弥・製塩			3.6	中・普	良好	橙	叩き→ナデ	ナデ		金雲母
563	弥・製塩			5.4	中・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ	脚部不整形に垂む	

第702図 G区SR02出土遺物(66)(1/4)

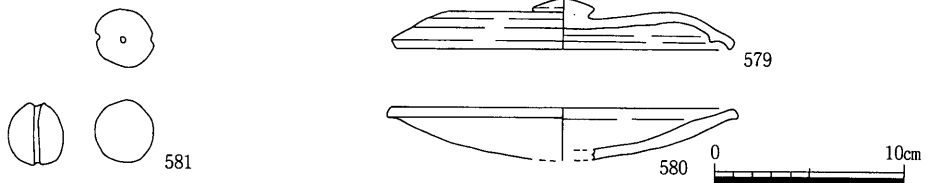
る。脚部は外反している。563はしっかりとした器高の高い脚部である。脚端部は平坦な面をもち若干内側に肥厚するが、しっかりと接地している。脚端部の外面には指押さえを加えている。

564～573は縄文土器である。564は浅鉢である。口縁部下に横方向の沈線を2条施し、その下に縦方向の沈線で区画する。外面には縄文を2方向に施し、区画した部分は磨消する部分がある。内面はヘラミガキとなっている。566は口縁部下に沈線を1条巡らす。567は口縁部外面に沈線を2条施し、その間に縄文を転がしている。568は深鉢で口縁部は緩やかな波状になり肥厚している。波状になっている部分の外面に3本の短い沈線を施し、そこから両方向に1本の沈線を引いている。1本沈線の下には縄文を施している。内・外面ともに貝殻条痕になっている。569は深鉢で口縁部は鋭い波状になっている。口縁部の内・外面に文様を施している。口縁部外面の波状部分には中央の穿孔部の周りに円を配置し、そこから波紋状に両側に沈線を入れる津雲A式に見られる文様を施している。内面は



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
564	縄・浅鉢				中・普	良好	褐灰	ナデ・縄文	ミガキ		
565	縄・浅鉢				細・普	良好	褐灰	不明	ナデ		
566	縄・深鉢				細・普	良好	灰黄褐	ミガキ	ミガキ		
567	縄・深鉢				中・普	良好	黄褐	ナデ	ナデ		
568	縄・深鉢	24.6			中・普	良好	にぶい黄橙	貝殻条痕	貝殻条痕	波状口縁	金曇母
569	縄・深鉢				粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	波状口縁	
570	縄・深鉢				中・普	良好	黒褐・浅黄	不明	不明		金曇母
571	縄・深鉢				粗・普	良好	黄褐	ナデ・縄文	ナデ		金曇母
572	縄・深鉢				中・普	良好	灰白	不明	不明		
573	縄・深鉢				中・普	良好	にぶい黄褐	ケズリ	ナデ		
574	弥・盃				細・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ		角閃石
575	瓦・椀	15.0	5.1	4.8	精緻	良好	褐灰	ナデ	ナデ	暗文	和泉型
576	瓦・小皿	8.8	2.1	7.7	精緻	良好	暗灰	ナデ	ナデ	暗文	和泉型
577	土・杯	11.2	2.8	7.2	細・普	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ	底へラ切り→板状圧痕	
578	須・杯	12.0	3.5	7.2	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		墨凸

第703図 G区SR02出土遺物(67)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
579	須・杯蓋	17.4	2.6		粗・昔	良好	灰	ナデ	ナデ		
580	須・転用硯	18.0			中・昔	良好	灰	ナデ	ナデ	蓋の内面を硯に転用	
581	土錘	短軸2.9	長軸3.2		中・昔	良好	橙・黒	ナデ	不明	切れ目を巡らす	

第704図 G区SR02出土遺物(68)(1/4)

穿孔部を中心に沈線で区画をしている。571は体部の破片であるが、沈線で楕円形に区画し、内部は磨消し、外部には縄文を施している。572は口縁部の突起の破片である。573は口縁部のやや下に刻み目突帯を貼り巡らす。

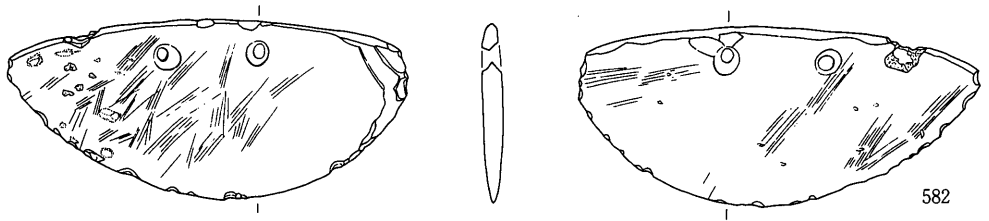
574は弥生時代中期の壺あるいは鉢の口縁部である。端部は内側に折り曲げ、端部屈曲部には刻み目を施している。端部の下に断面三角形の刻み目突帯を3条巡らせている。

575は瓦器の椀である。体部はほぼ直線的に立ち上り、口縁部端部をナデている。体部外面には指押さえ痕が顕著である。内面には見込み部に螺旋状暗文を、上半部は横方向の暗文がそれぞれ施されている。底部には断面方形の高台が付く。576は瓦器の小皿で、口縁部を強くナデており、体部との境には稜が形成されている。体部から底部の外面には全体に指押さえ痕が見られ、内面には暗文を施している。578は須恵器の杯である。体部は直線的で底部外面に墨書がある。字は不明である。580は須恵器の転用硯である。内面には墨が付着している。581は球形の土錘で、中央部に穿孔し周囲には切れ目を巡らしている。

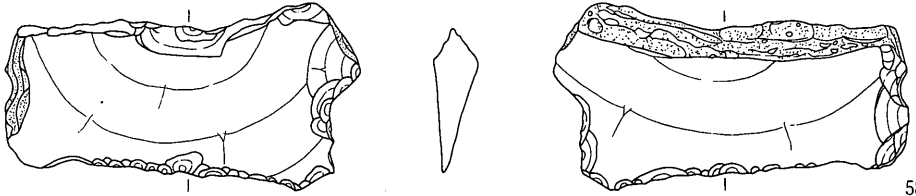
582～602は石器である。582と592は磨製石庖丁である。582は背部はほぼ直線となるが刃部は大きく外湾し、全体に半月形となる。背部側に2箇所の穿孔があり、紐部としている。穿孔は両面からされている。体部の両面に斜めの擦痕が認められるが、刃部付近には明瞭な擦痕は認められない。592は磨製石庖丁の一部で、唯一背部の一部のみが現状をとどめている。結晶片岩製である。583～591は打製石庖丁で、585以外は両側に抉りを入れている。583はほぼ長方形に近く、背部には自然面を残す。大きな一枚の剥片に刃部を作り出した簡単なものである。584は一部欠損しているが長方形のものである。刃部・背部ともに両面から調整を加えている。刃部は片面に剥離調整が多いが、これは刃部を再生した結果と思われる。両側の抉りは小さい。585は刃部と背部が外湾するものであるが、背

面には自然面が残り、湾曲した部分を利用したものと思われる。背部は片面調整である。586は刃部、背部とも直線で長方形をしているものである。刃部には大きな剥離の後に小さな剥離を加えているが、これは刃部を鋭利にしようとしたためと思われる。587は結晶片岩製のものである。588は抉りは小さいものである。589は側面の下方に抉りを入れている。590は刃部は外湾し、背部は直線となっている。刃部・背部ともに両面調整であるが刃部は使用のため鋭さが失われている。591は背部の調整は部分的に施されている程度である。刃部は直線で両面調整を行なっている。593～597はスクレイパーである。大きさや形状は様々であるが、594が横に刃を作り出す以外は下あるいは上下に刃を作り出す。598は石鏃で、長さ5cmと大型品である。側縁部のみに調整を加えている。599～602は石斧である。599は打製石斧で刃部に使用痕と考えられる擦痕がある。600は磨製の太型蛤刃石斧で刃部から上が縦に欠損している。刃部は両刃で斜めに使用痕と考えられる擦痕がある。601は打製石斧で完存している。全長は16.6cmでやや下半が幅広となるが、短冊形に近いものである。刃部は一方に偏向しており、使用痕と考えられる擦痕が多数認められる。頭部にも擦痕が認められるが、途中で刃部を逆転させたのかも知れない。側縁の中程には剥離調整を集中的に加えている部分があり、ここが柄と接合した部分と考えられる。602は磨製の扁平片刃石斧である。全長7.9cmと小型のものである。上部は縦に剥離欠損しているが、平面形は長方形である。刃部と体部の片側に擦痕が認められる。

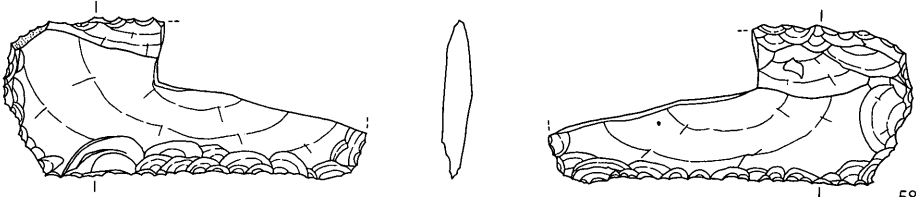
603～632は木器である。603は鋏の未製品と考えられる。上端と下端をそれぞれ斜めに加工している。広鋏を作り出す途中と考えられ、舟形隆起は無い。604は組合せ鋏の未製品である。上部を細くしており、着柄部を作り出そうとしているものと思われる。605・606は又鋏の刃先の一部と考えられ、606は両側を丁寧に加工している。607～609は板材で、607は穿孔が1箇所認められる。610は一木鋏の未製品である。全長は116.2cm、鋏身は50.8cm、柄は46.3cm、柄の握り部は19.1cmとなっており、身の幅と握り部の幅がほぼ同じになっている。身は一部欠損しているものの長方形と思われる。身の片面は上手に加工しており全体に平坦で一部加工痕が見られる程度であるが、反対側の面は恐らく鉄斧と考えられる鉄器を使用して加工した際の加工痕が不規則に多く残る。上手に加工出来なかったらしく、鉄器の刃が食い込んだり木面に段が生じている。柄はほぼ丸く仕上げているが、一部まだ加工したままになっている。握り部は逆三角形にする途中で、削り抜きを施していない状態である。また握り部の先端部は外側に向かって両面から加工している。全体に形は整っている状態である。611は梯子で、現存長は149.8cm、最大幅は14.0cmである。厚さは階段



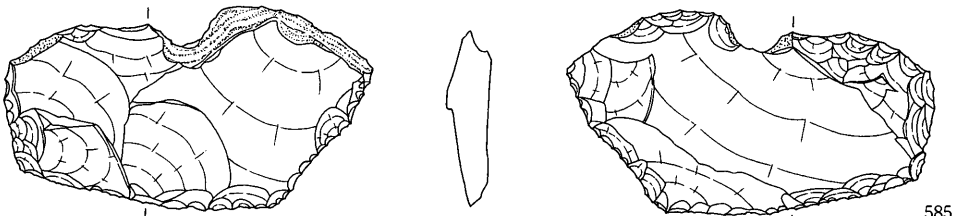
582



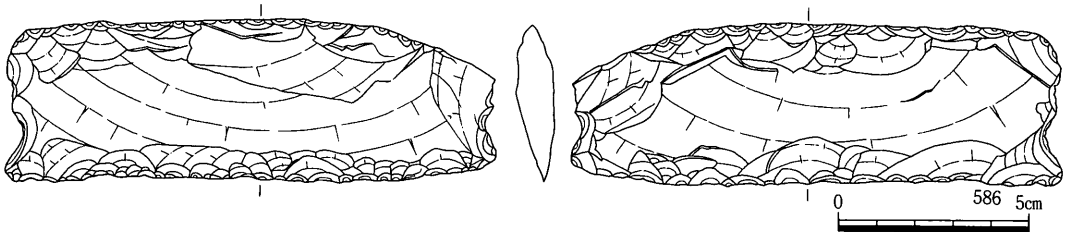
583



584

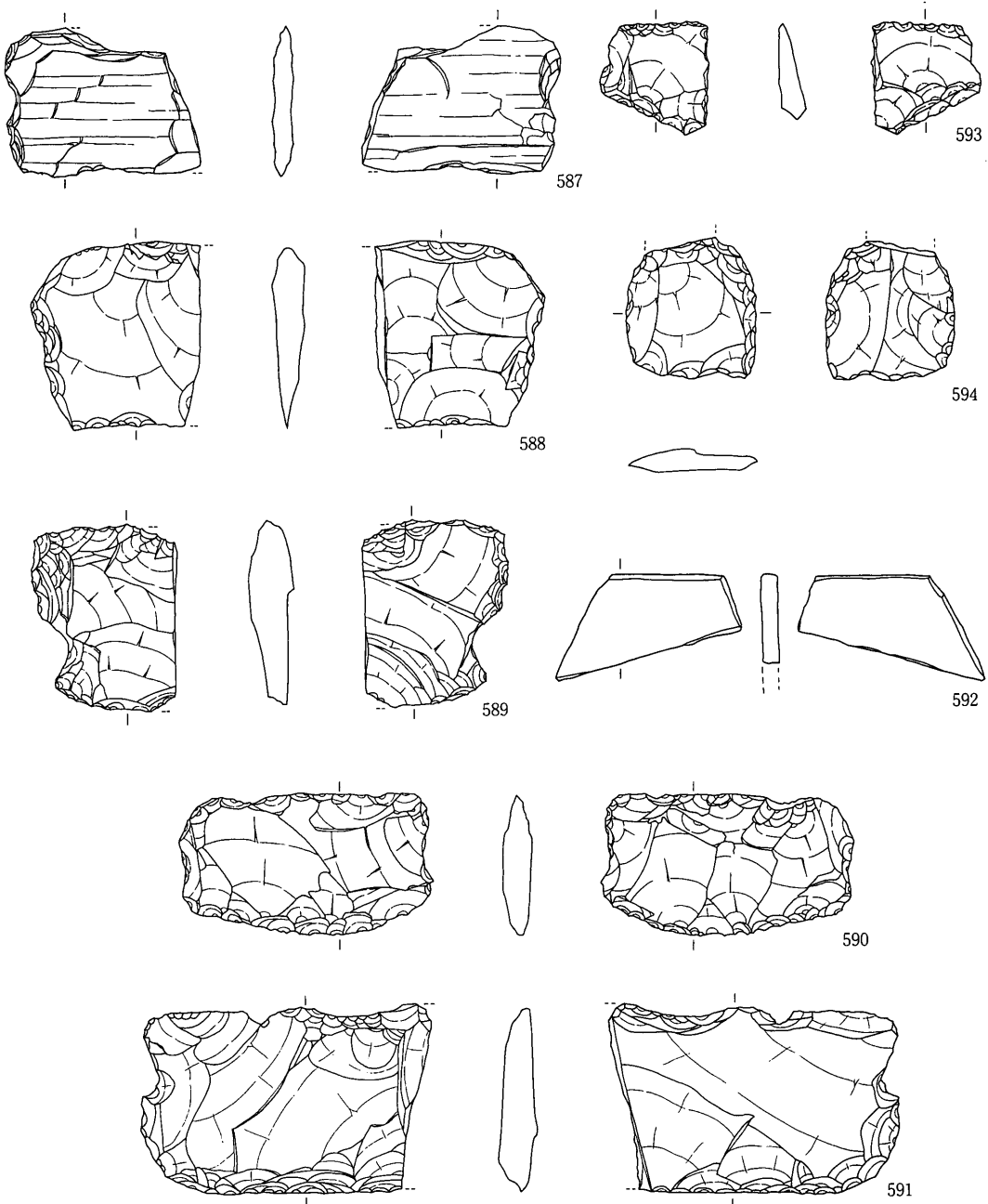


585



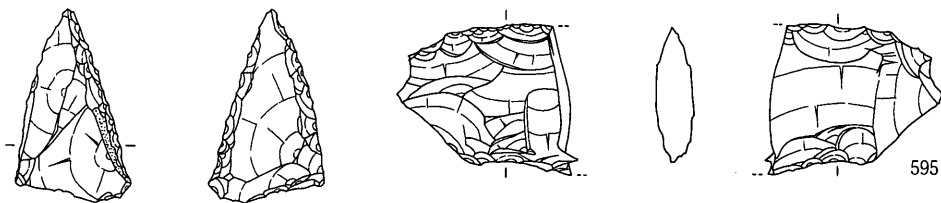
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
582	磨製石庖丁	10.5	4.6	0.7	36.8	結晶片岩		
583	打製石庖丁	9.3	4.7	1.1	47.9	サヌカイト	刃部が使用のため摩滅している	
584	打製石庖丁	9.2	4.0	0.7	29.8	サヌカイト		
585	打製石庖丁	9.5	5.3	1.1	58.2	サヌカイト		
586	打製石庖丁	12.8	4.3	0.1	77.7	サヌカイト		

第705図 G区SR02出土遺物(69)(1/2)



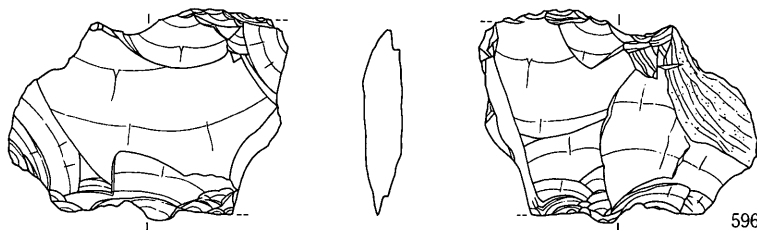
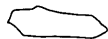
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
587	打製石庖丁	5.3	4.1	0.6	19.2	結晶片岩		
588	打製石庖丁	4.8	5.2	0.9	30.9	サヌカイト		
589	打製石庖丁	4.1	5.2	1.3	35.0	サヌカイト		
590	打製石庖丁	4.0	7.1	0.8	32.6	サヌカイト		
591	打製石庖丁	8.1	5.3	1.0	58.9	サヌカイト		
592	磨製石庖丁の一部			0.5	10.7	結晶片岩		
593	スクレイパー	3.0	3.0	0.7	6.7	サヌカイト		
594	スクレイパー	3.8	3.7	0.8	13.2	サヌカイト		

第706図 G区SR02出土遺物(70)(1/2)

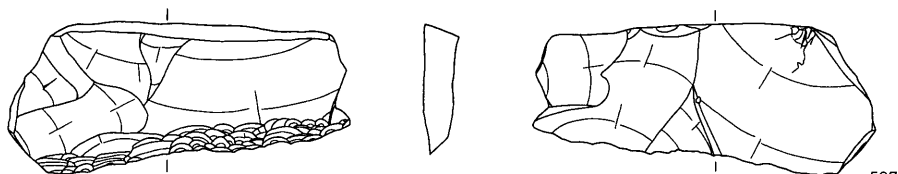


598

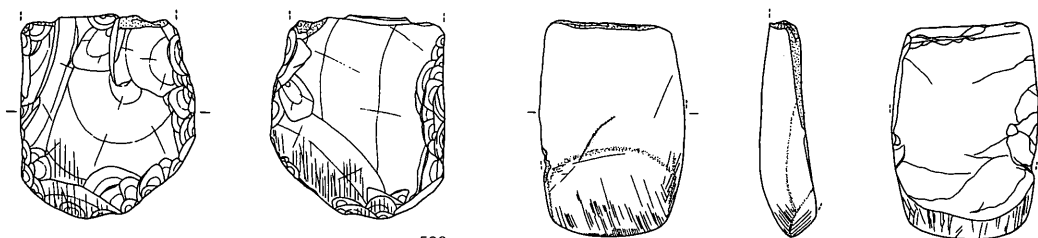
595



596

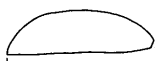
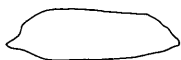


597



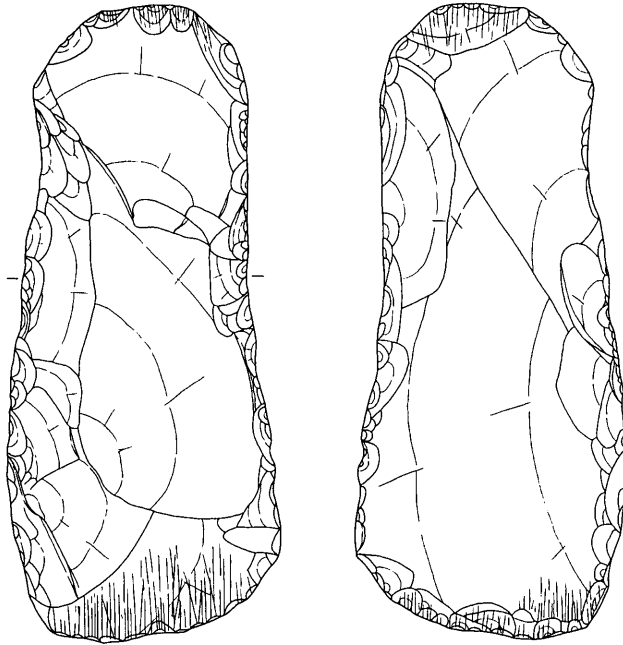
599

600

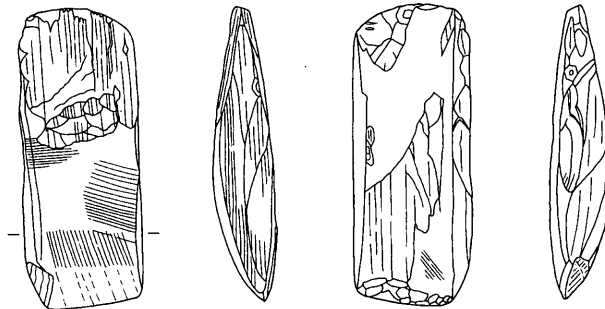
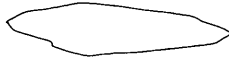


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
595	スクレイパー	4.6	3.7	1.0	23.0	サヌカイト		
596	スクレイパー	7.0	5.1	1.0	48.5	サヌカイト		
597	スクレイパー	9.0		0.9	36.1	サヌカイト		
598	石鏃	5.0	3.1	0.8	10.2	サヌカイト		
599	打製石斧	5.3	4.6	1.3	43.2	サヌカイト	使用時の擦痕あり	
600	大型蛤刃石斧（磨製）	11.1	7.6	2.6	384.9	緑泥片岩	使用時の擦痕あり	

第707図 G区SR02出土遺物(71)(1/2, 1/4)



601

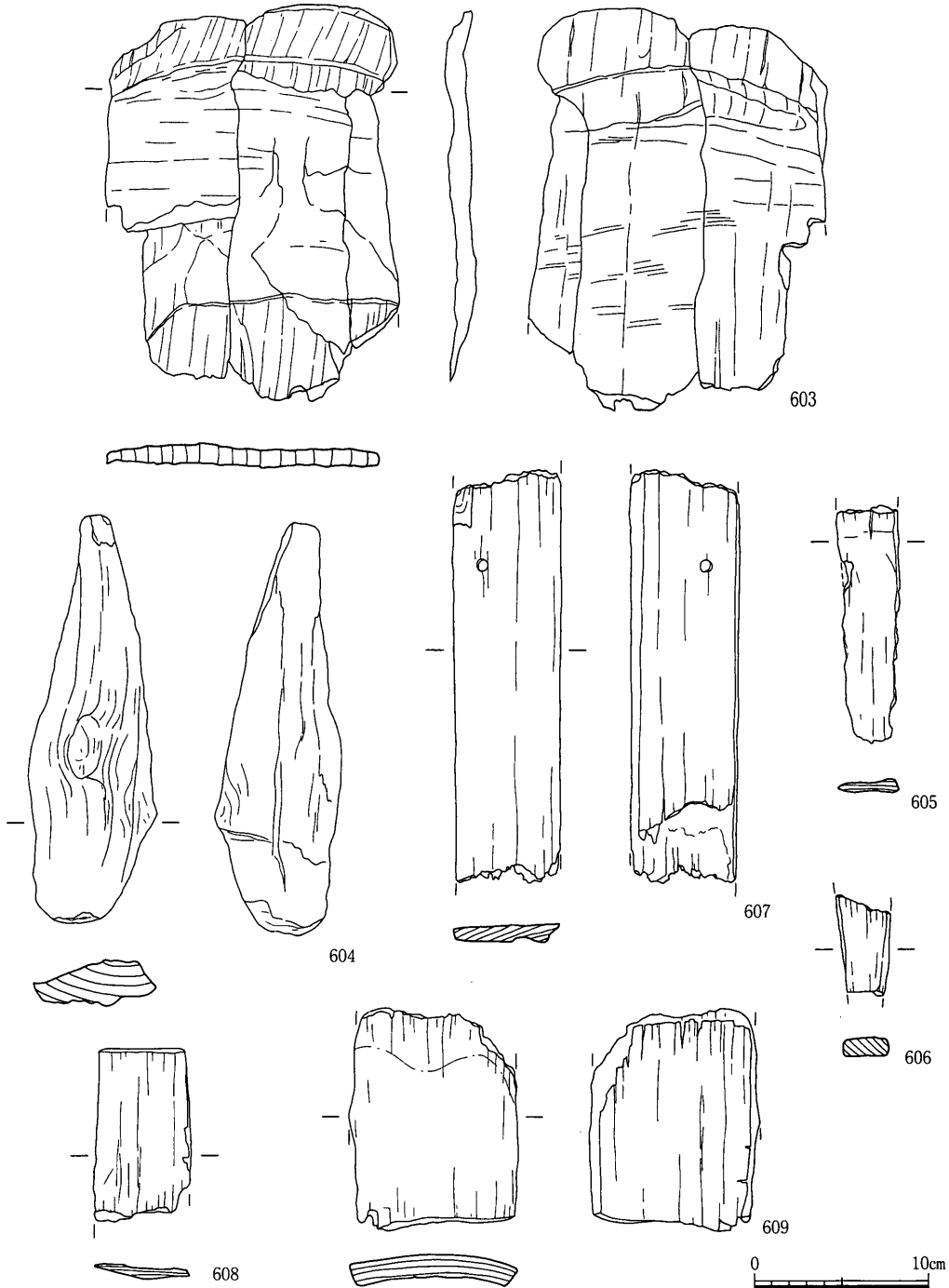


602



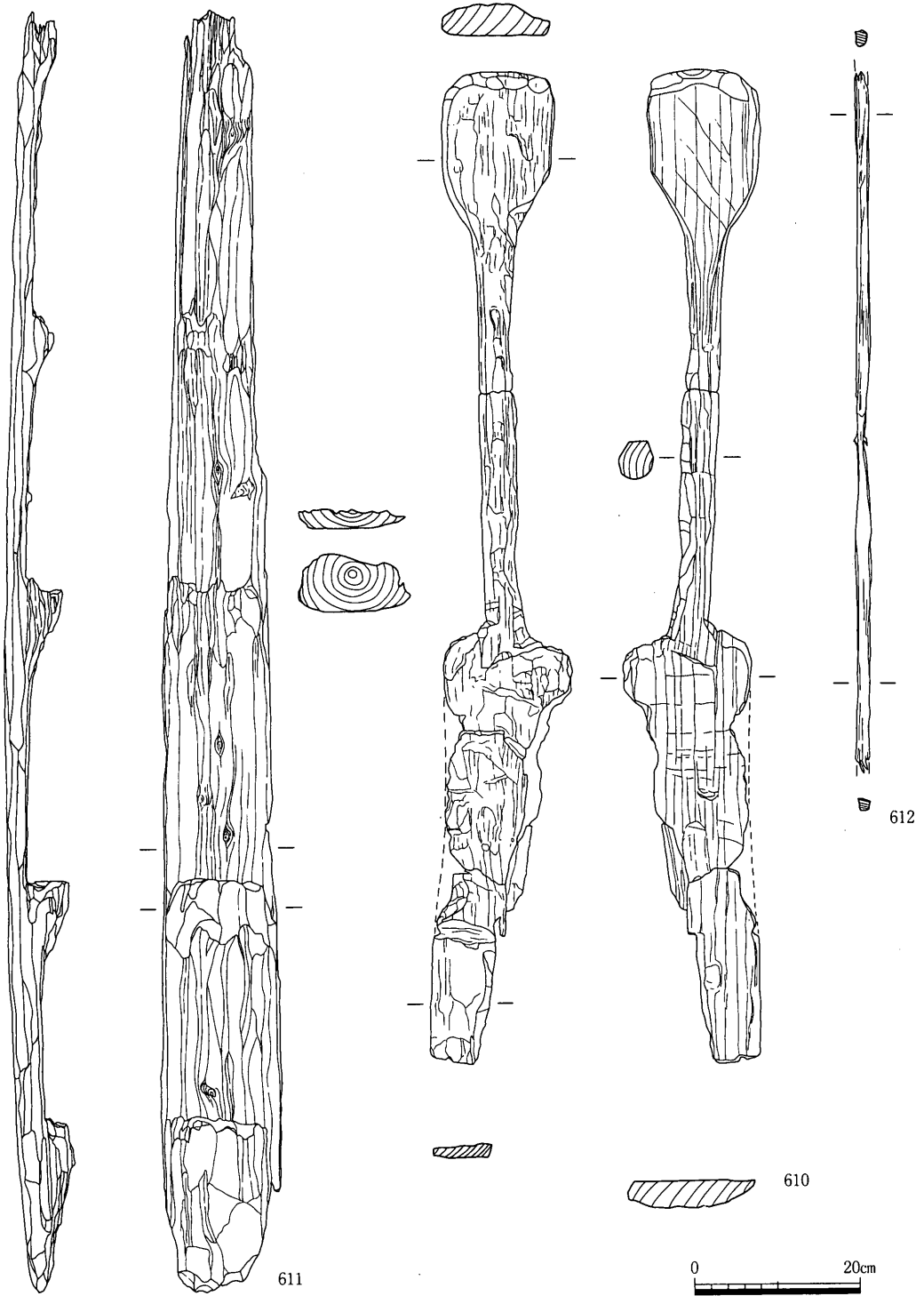
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
601	打製石斧	16.6	7.1	1.4	221.5	サヌカイト	使用痕の擦痕多い	
602	扁平片刃石斧（磨製）	7.9	3.2	1.5	74.9	緑泥片岩		

第708図 G区SR02出土遺物(72)(1/2)



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法的特徴	備考
603	鉄の未製品?	21.5	15.4	1.3	柃目	両端を斜めに加工している	
604	鋳の未製品	22.4	6.9	3.3	板目	両端をそれぞれ加工している	
605	鉄	13.1	3.5	0.9	板目		
606	鉄	5.6	3.0	1.1	柃目		
607	板材	22.9	6.2	1.0	板目	穿孔1ヶ所	
608	板材	9.7	5.4	0.7	板目		
609	板材	12.5	9.5	1.3	板目		

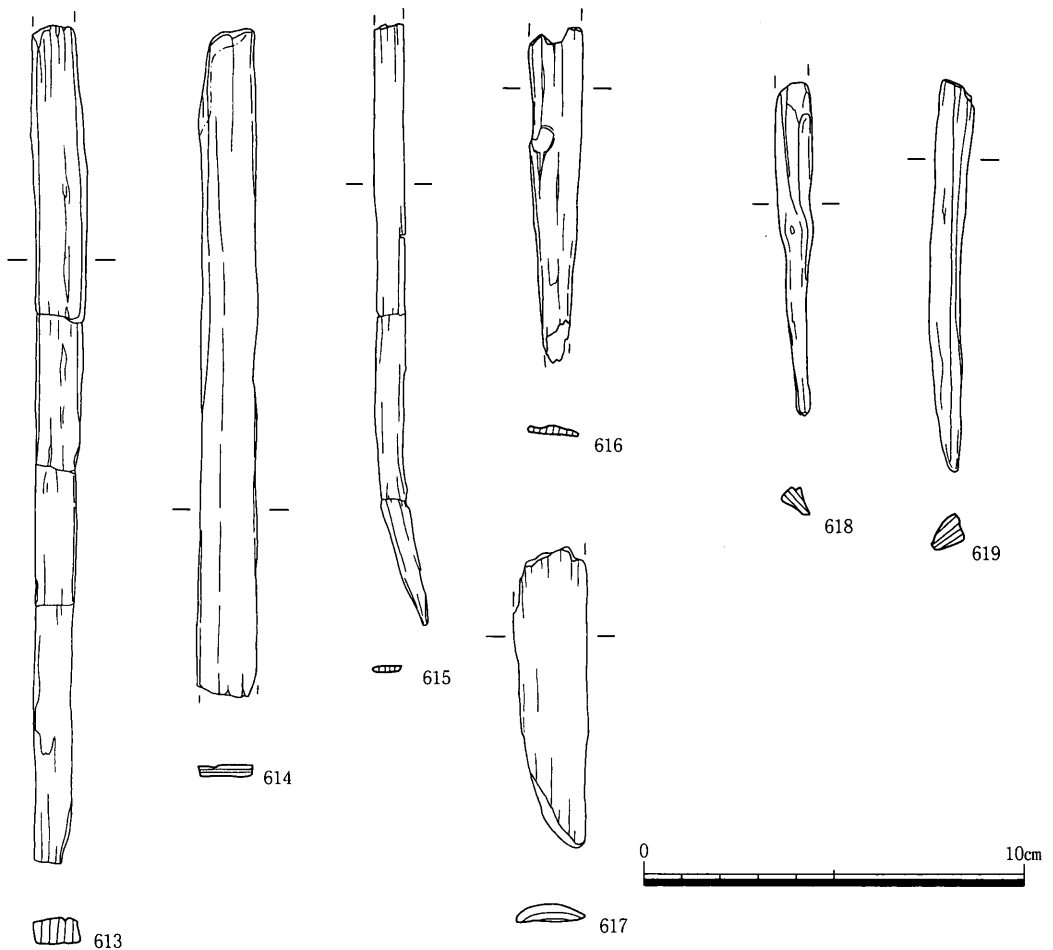
第709図 G区SR02出土遺物(73)(1/4)



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
610	鋤 (未製品)	116.2	12.8	3.6	柃目		
611	梯子	149.8	14.0	7.2	芯持		
612	棒状木製品 (弓?)	82.5	1.8	1.9	板目	中央部を細く仕上げる	

第710図 G区SR02出土遺物 (74) (1/8)

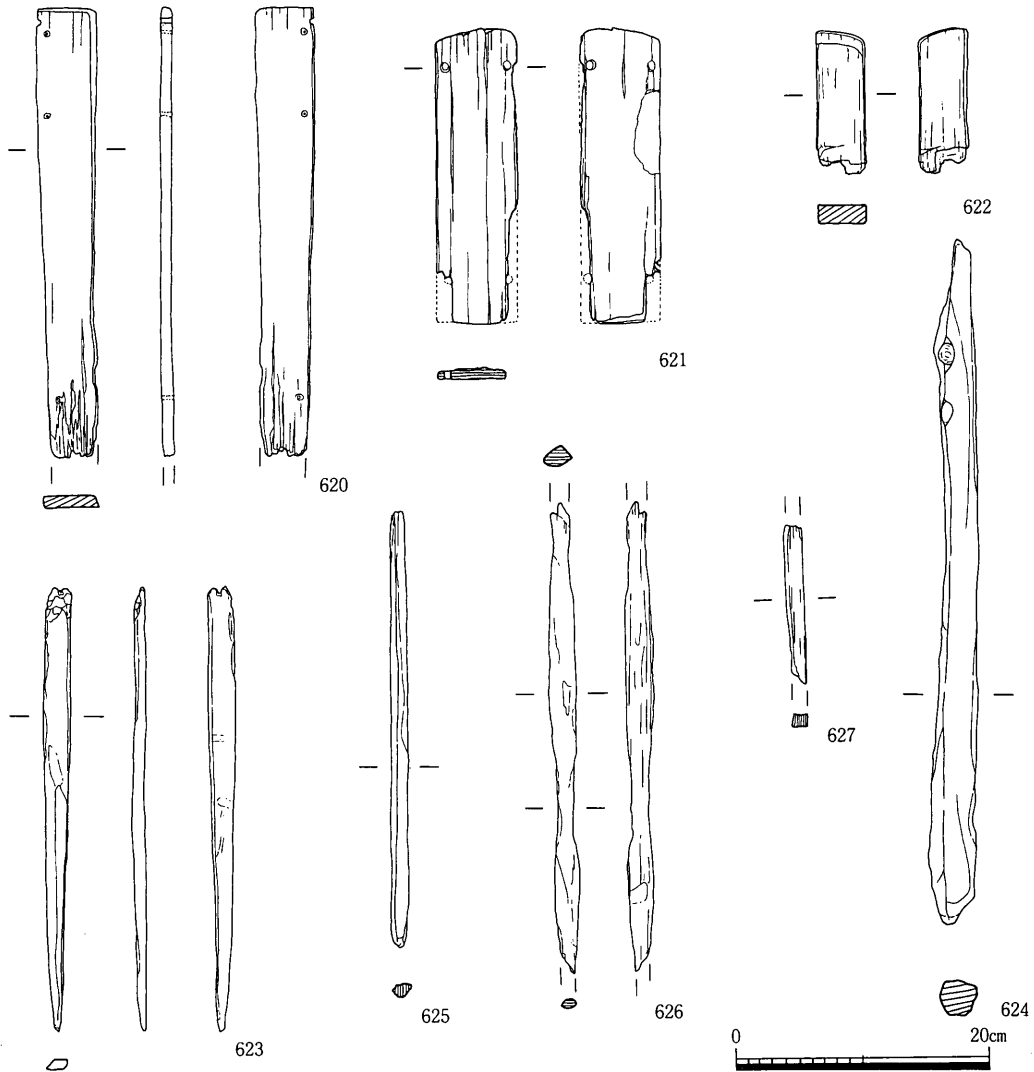
部で7 cm前後、それ以外のところでは3 cm前後である。階段部は現存で5段あり、下から20cm程のところに最初の段があり、そこからほぼ30cm間隔で段を設けている。芯持ちの丸太材を直方体に加工した後に、階段部を削り残して製作している。階段部は4 cmほど直角に削り込んで段を作っている。612は棒状の木製品の中央部を細く削り出しているもので、両端は欠損している。断面は方形となっている。弓の可能性はある。613～616は板材であるが、615・616は先端を尖らせている。617は先端を刀状に加工している。613～617はS R02の南端部のS R04との交点部分で出土しており、S R04の遺物が混入したと考えたと



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
613	板材 (齋串)	20.7	1.4	0.7	柁目		
614	板材 (齋串)	17.3	1.6	0.3	板目	端部がこげている	
615	板材 (齋串)	15.3	0.8	0.2	柁目		
616	板材 (齋串)	8.5	1.4	0.2	柁目		
617	刀状木製品	7.7	2.0	0.5	板目	先端を刀状にする	
618	木針	8.5	0.9	0.6	柁目		
619	木針	10.0	1.0	0.8	柁目		

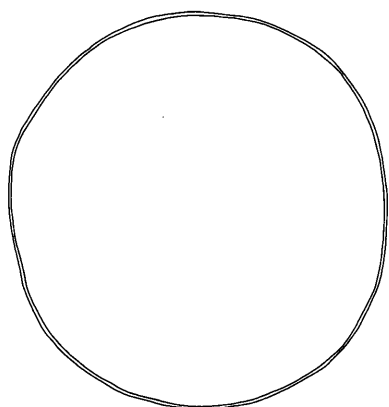
第711図 G区S R02出土遺物 (75) (1/2)

613~616は斎串の可能性ある。618・619は木針で断面は角張っており先端を鋭利に尖らせている。620~622は建築部材である。620は穿孔が4箇所認められる。621は上部をやや斜めに加工し、上下にそれぞれ2個ずつの穿孔がある。622は先端は丸味を持たせて斜めに加工し、ほぞ状に作り出している。623~625は先端を尖らせており623の上端部には穿孔の痕跡のようなものがある。626は612と同様に中央部を細く削出している。628は杓文

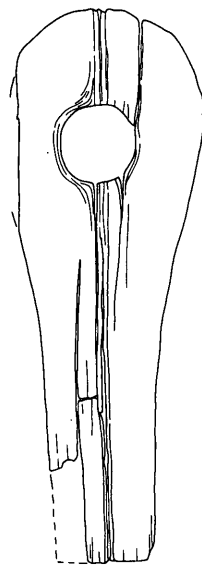
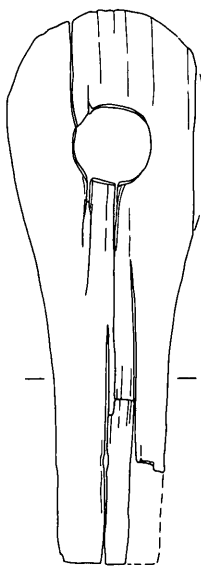


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
620	建築部材	35.0	4.8	0.9	板目	釘穴が4ヶ所	
621	建築部材	23.0	6.4	0.9	板目	上下にそれぞれ2ヶ所の穿孔	
622	建築部材	11.0	4.0	1.4	板目	先端をほぞ状に作り出す	
623	杖?	35.1	2.1	1.0	不明		
624	杖	53.3	3.7	2.7	板目	先端がにぶく尖る	
625	棒状木製品	34.4	1.4	1.0	柾目	両端を丸く取める	
626	棒状木製品	37.0	2.2	1.6	板目	中央部を細く加工している	
627	棒状木製品	12.6	1.4	1.0	柾目		

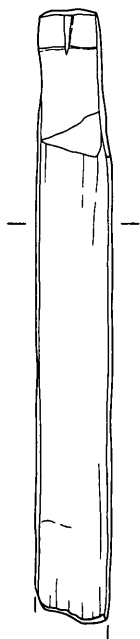
第712図 G区SR02出土遺物(76)(1/6)



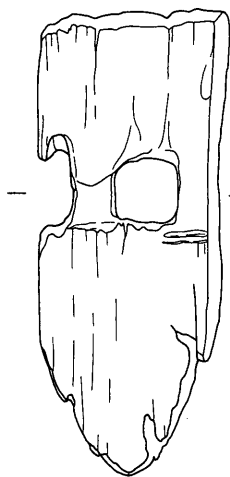
632



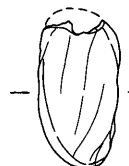
628



629



630

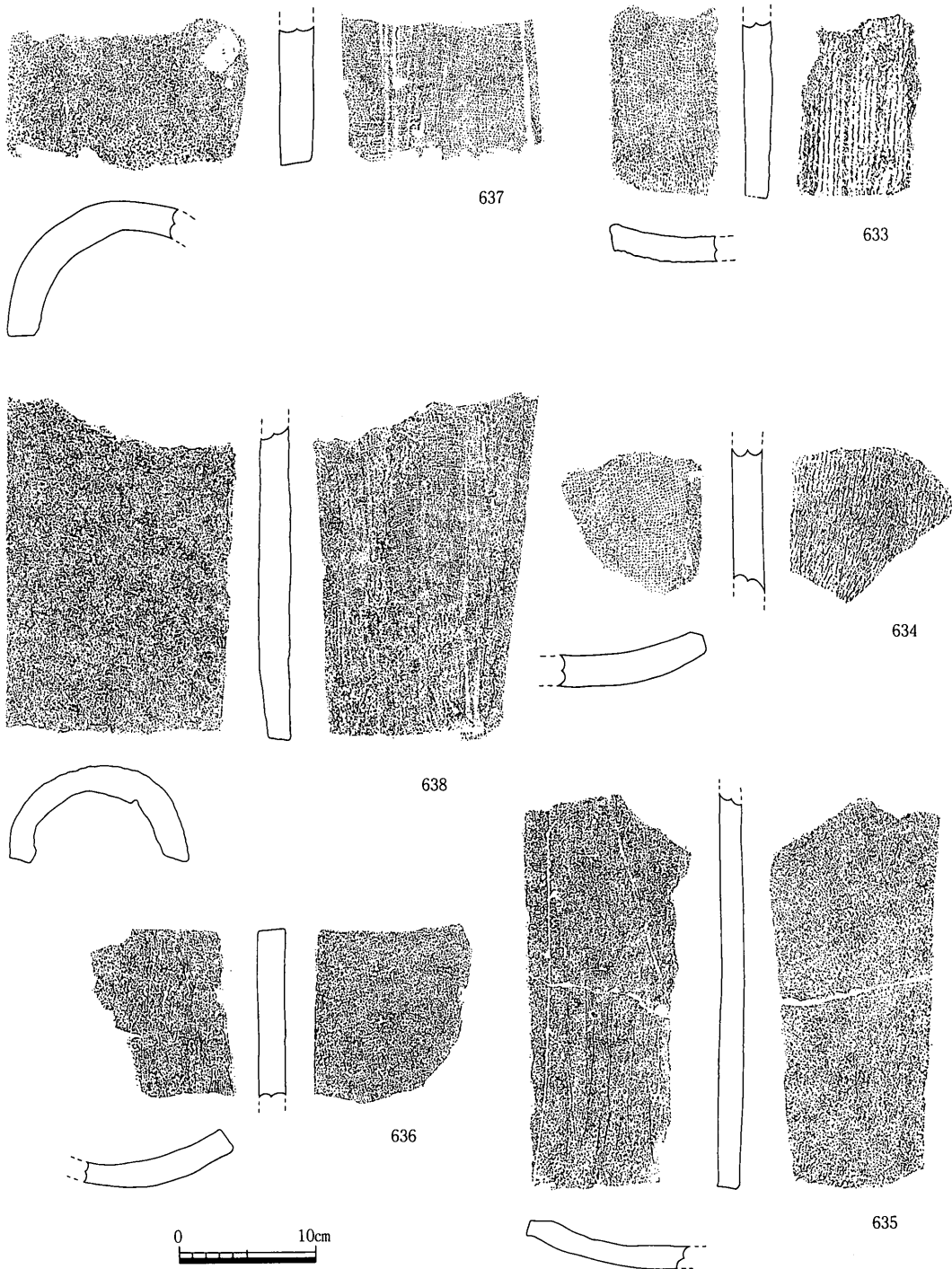


631



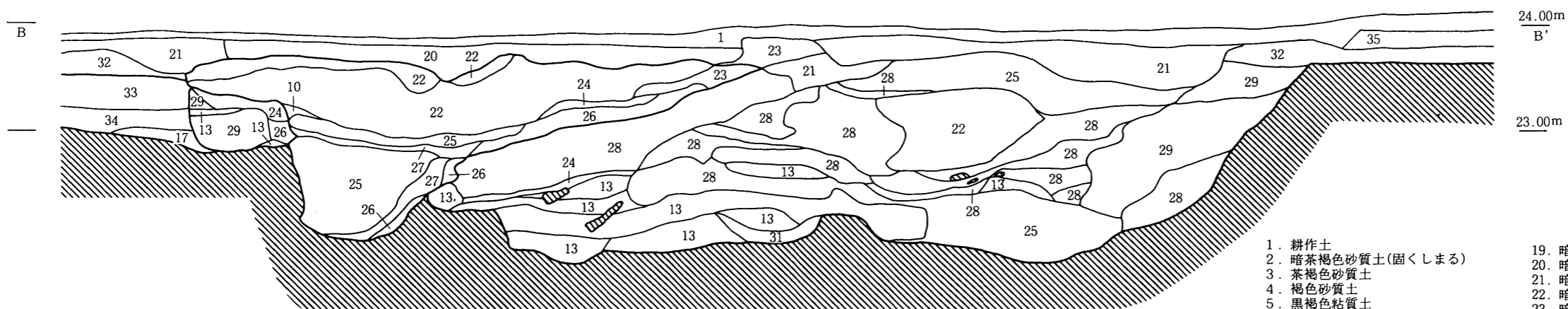
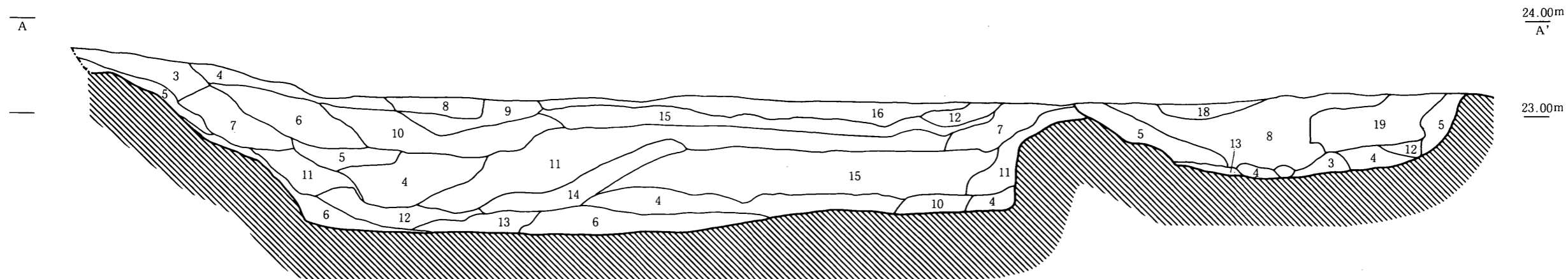
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
628	用途不明	42.3	14.9	0.4	柾目		
629	部材	31.9	4.0	1.9	板目		
630	用途不明	24.0	10.0	1.8	板目	先端三角形、中央に穴が2ヶ所	
631	用途不明	7.6	4.3	1.8	柾目	縁辺を丁寧加工する	
632	曲物	8.1	39.6	0.3	柾目		

第713図 G区SR02出土遺物(77)(1/4, 1/6, 1/8)



遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
633	平瓦	1.9	縄目叩き	布目圧痕	7	1 6	粗・普通	黄灰・黒褐	不良		12.4
634	平瓦	2.3	縄目叩き	布目圧痕	2		中・普通	浅黄	不良		10.6
635	平瓦	1.5	ナデ	布目圧痕→ナデ	8	1 6	粗・普通	灰白	良好		28.5
636	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	1 6	細・少	灰	良好		12.1
637	丸瓦	2.6	ケズリ	布目圧痕	1 1	1 6	中・普通	灰	良好	模骨痕	9.5
638	丸瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	1 3	1 6	粗・普通	灰白	良好	凸面端部布目圧痕、粘土板接合痕	22.8

第714図 G区SR02出土遺物(78)(1/5)



- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1. 耕作土 | 19. 暗茶褐色砂礫土 |
| 2. 暗茶褐色砂質土(固くしまる) | 20. 暗灰色砂質土 |
| 3. 茶褐色砂質土 | 21. 暗灰茶色砂質土 |
| 4. 褐色砂質土 | 22. 暗黄茶色砂 |
| 5. 黒褐色粘質土 | 23. 暗黄色砂混り粘質土 |
| 6. 灰色細砂 | 24. 暗青灰色粘土 |
| 7. 黒褐色砂質土 | 25. 暗茶色砂 |
| 8. 橙褐色砂質土 | 26. 暗青灰色砂混り粘質土 |
| 9. 明灰色砂質土 | 27. 暗茶黄色砂混り粘質土 |
| 10. 褐色砂質土 | 28. 暗灰黑色砂 |
| 11. 黒褐色砂混り砂質土 | 29. 黒色砂混り粘質土 |
| 12. 暗褐色砂質土 | 30. 黒色粘土 |
| 13. 暗灰色砂 | 31. 暗灰色礫 |
| 14. 暗灰色砂混り粘質土 | 32. 暗褐茶色粘質土 |
| 15. 暗褐色砂質土 | 33. 暗茶褐色粘質土(固くしまる) |
| 16. 灰色砂質土(細礫含む) | 34. 暗灰褐色粘質土(固くしまる) |
| 17. 青灰色粘質土 | 35. 暗茶褐色砂 |
| 18. 茶褐色細礫土 | |



第715図 G区SR02・03断面図(1/50)

字形をしており、幅広の部分は一部欠損しているが、中央に直径6cmの円形の穴があいている。裏側には中央部に上端から下端まで、断面が山形のレール状の突起が2本ありその上部を中心に赤色顔料が付着している。断面は4mmで全体に丁寧に仕上げている。用途は不明である。629は先端のやや下の部分を削って細くしている。他の部材と組み合わせたものと思われる。630は先端を両側から加工して尖らせている。中央部からやや偏った場所に方形の穴があり、その横の側縁際に欠損しているが楕円の穴がある。穿孔部に柄を通して掘り具とも見れるが、穿孔部が中心よりずれているためまっすぐ力が伝わらず掘り具としては不相当であろう。またもう一つの楕円形の穴の意味が不明である。用途は不明と言わざるを得ない。631は長楕円形のもので、縁辺を丁寧に加工し磨いている。632は曲物であるが、SR02の南端部のSR04との交点部分で出土し、恐らくSR02が埋没した後に上面から掘り込まれたもので砂質土のため掘り方が確認出来なかったものである。

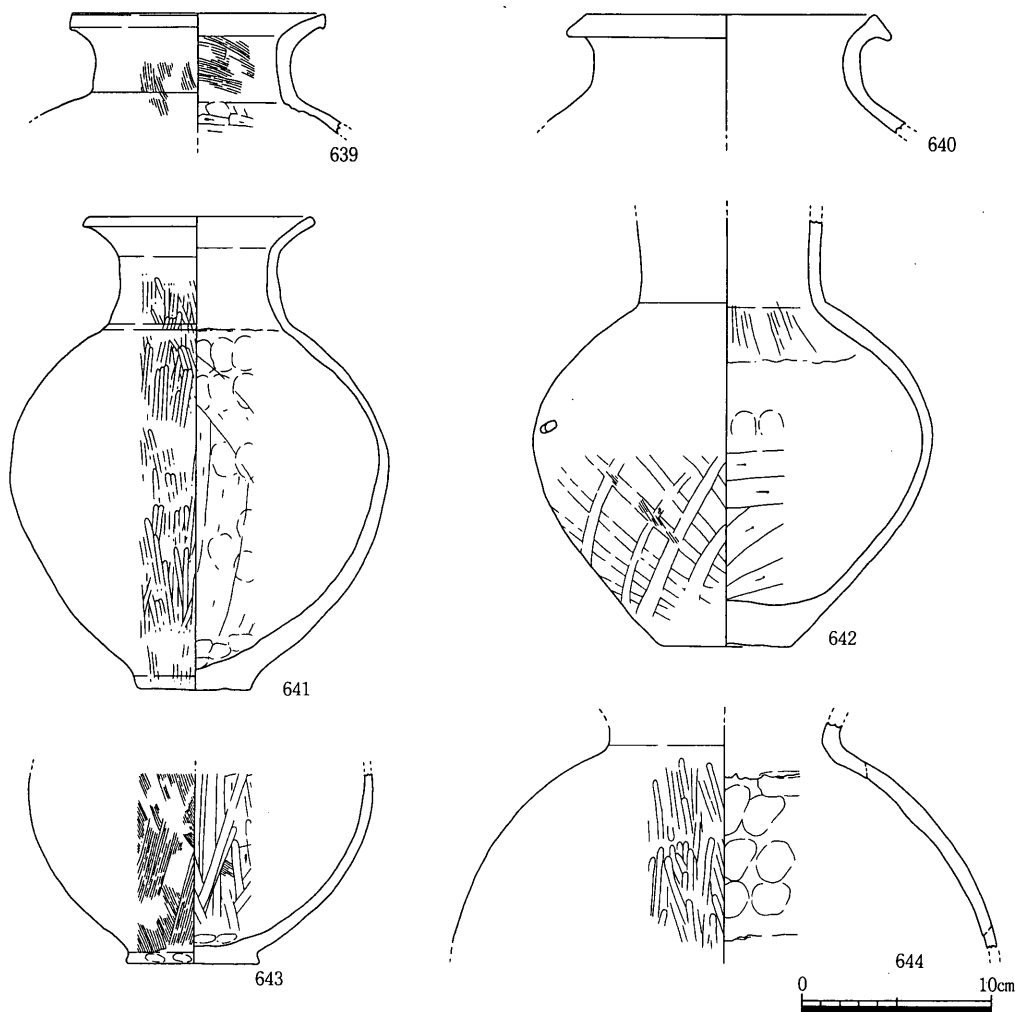
633～638は瓦である。633～636は平瓦である。633・634は凸面に縄目叩きを施している。635の側縁端部は外反している。637・638は丸瓦で637の凸面は現存部分ではヘラケズリとなっている。凹面には模骨痕が残っている。638は凸面の端部には布目圧痕が見られる。また凹面には粘土板接合痕が残っている。

以上SR02出土の遺物について長々と述べてきたが、一部他の時期の混入品が見られたが基本的には弥生時代後期後半～終末の時期のものである。圧倒的多数を占める後期後半～終末の土器は旧河道出土遺物ながら、その出土状況からある程度の一括性が考えられるものである。また石器・木器は量的には少ないが、石庖丁や石斧など農具や工具など日常生活に必要なものが出土している。

SR03 (第715～721図, 図版91・94)

G2区の西辺中央部から南辺中央部にかけて、SR02と重なりながら大きくS字形に蛇行する旧河道である。河の西側の肩はSR02より南側へ大きく張り出すが、北から東側にかけての肩はSR02に重なっている。河の検出面は現地表面から40cmほど下であった。河幅は推定で7.7～14mで南側が狭くなっている。深さは1.35～1.80mで中央部ではSR02より50cmほど深くなっている。川底のレベルは南側が若干低くなっており、凹凸はあまりなくほぼ一定である。北西から南東に向かって流れていたものと考えられる。埋土は砂～砂質土が中心で、粘土の堆積はほとんど無い。遺物は土器・木器・石器が少量出土したのみである。

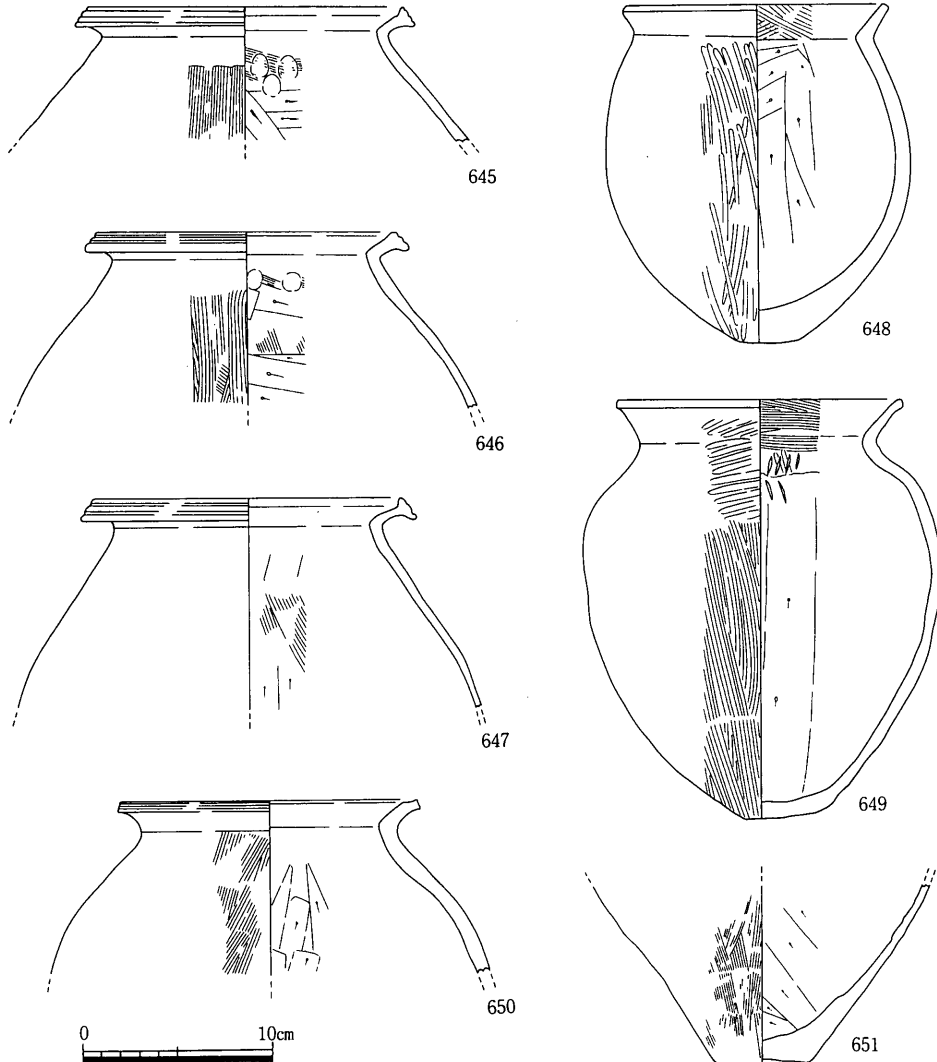
639～644は壺である。639は頸部はやや内傾し、口縁部端部は外側に面をもつ。640は口縁部端部を拡張している。641はほぼ直立する頸部から、丸みを帯びて口縁部は立ち上がる。体部は最大径が中央やや上側にあり、底部は安定した平底である。外面は頸部から体部にかけてヘラミガキで、底部外面にはヘラケズリを施している。642は体部がやや扁平で、底部は肥厚する。体部外面の下半には籠目の痕跡が明瞭に残っている。643は底部は高台状に突出する。体部内面にはヘラケズリとハケ目の後に、太いヘラミガキを施す。



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法的特徴	備考
639	弥・壺	13.3			細・普	良好	にぶい赤褐	ハケ目→ナデ	ハケ目・ケズリ		金雲母・角閃石
640	弥・壺	15.5			中・普	良好	黄橙	不明	不明		
641	弥・壺	11.6	24.4	6.1	粗・普	良好	黒・にぶい橙	ミガキ	ナデ・ケズリ	底外面ケズリ	金雲母
642	弥・壺			6.7	中・普	良好	橙～にぶい橙	ミガキ	ナデ・ケズリ	外面に籠目有り	
643	弥・壺			6.8	中・普	良好	明赤褐	ハケ目	ハケ目・ケズリ→ミガキ	底突出	金雲母
644	弥・壺				中・普	良好	にぶい黄橙	ミガキ	ナデ		金雲母

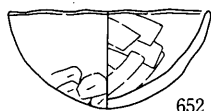
第716図 G区SR03出土遺物(1)(1/4)

645～651は甕である。645～647は口縁部端部を拡張し、外側に面を作り出し擬凹線を施すものである。いずれも体部上半は直線的である。648は口縁部は内面に鋭い稜をもって直線的に立ち上がり、体部は肩の張りはなく底部は肥厚している。体部外面はヘラミガキとなっている。649は口縁部直下に体部の肩の張りがあり倒卵形になっている。外面の叩きは体部上半から口縁部にまで及ぶ。650は口縁部は内面に鋭い稜をもって屈曲し、端部の強いナデのため上面に凹線が形成されている。651は底部外面にハケ目を施す。

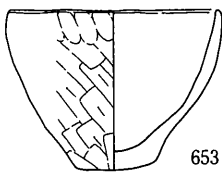


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
645	弥・甕	16.6			中・普	良好	橙・浅黄橙	ハケ目	ハケ目・ケズリ		
646	弥・甕	15.6			中・普	良好	橙	ハケ目	ケズリ		
647	弥・甕	16.0			中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ハ目・ヌリ・ナデ		
648	弥・甕	13.5	17.7	3.3	中・普	良好	コブイ黄褐・黒	ミガキ	ハケ目・ケズリ		金曇母
649	弥・甕	14.9	22.0	4.4	微・普	良好	コブイ黄橙・黒	叩きハケ目	ハケ目・ケズリ	外面に煤付着	金曇母
650	弥・甕	15.9			細・普	良好	橙	ハケ目	ナデ・ケズリ		金曇母
651	弥・甕			4.9	粗・普	良好	明褐	ハケ目	ケズリ	底外面ハケ目	金曇母

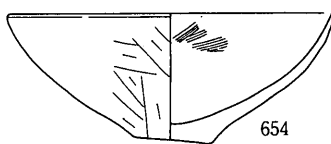
第717図 G区SR03出土遺物(2)(1/4)



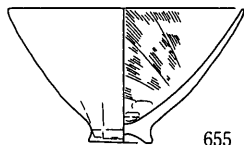
652



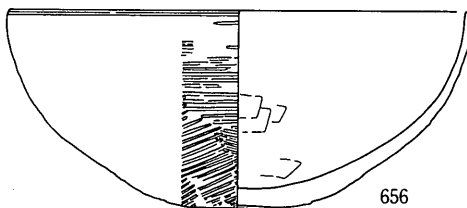
653



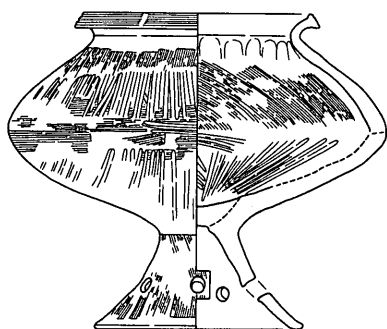
654



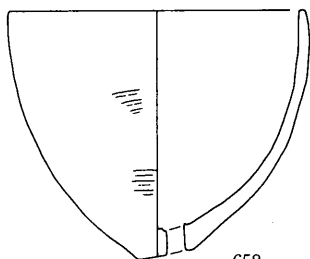
655



656



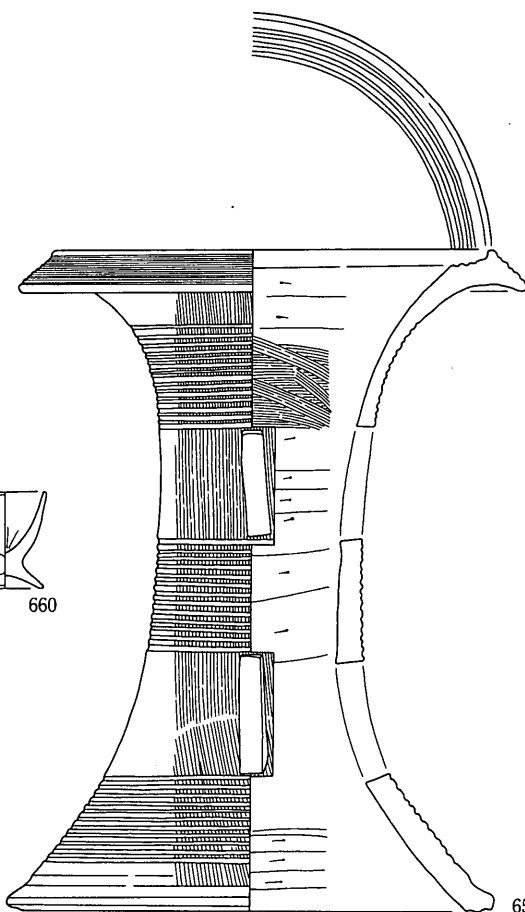
657



658



660

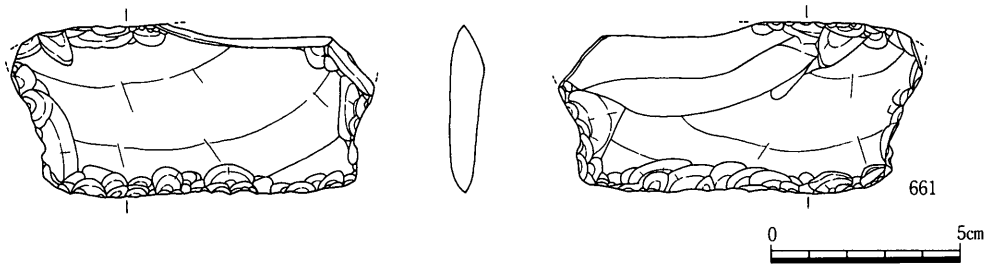


659



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
652	弥・鉢	10.7	5.0		中・普	良好	橙・にぶい褐	ナデ・ケズリ	板ナデ		金罍母
653	弥・鉢	11.2	8.2	4.3	中・普	良好	橙	ナデ・ケズリ	ナデ	底外面ケズリ	金罍母・角閃石
654	弥・鉢	17.2	6.7	4.2	中・普	良好	橙	ケズリ・ナデ	ハケ目→ナデ	底外面ケズリ	金罍母
655	弥・鉢	12.5	6.8	3.4	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ハケ目	底上げ底で突出	角閃石
656	弥・鉢	24.0	10.0	7.4	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き	ナデ	外面全体に叩き	
657	弥・鉢	12.0	16.1	11.4	中・普	良好	明黄褐～褐灰	ハケ目→シキ・ナデ	ハケ目・ミガキ	円盤充填	
658	弥・甌	17.6	13.0	2.9	中・普	良好	浅黄橙～黒	叩き→ナデ	ナデ	歪んでいる	
659	弥・器台	22.8	34.4	25.7	粗・普	良好	橙	ハケ目	ケズリ・ハケ目	2段四方形透し	
660	弥・ミニ	5.0	5.1	3.2	中・普	良好	にぶい褐・黒	ナデ	ナデ		角閃石

第718図 G区SR03出土遺物(3)(1/4)



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法的特徴	備考
661	打製石庖丁	9.6	4.3	0.9	51.8	サヌカイト		

第719図 G区SR03出土遺物(4)(1/2)

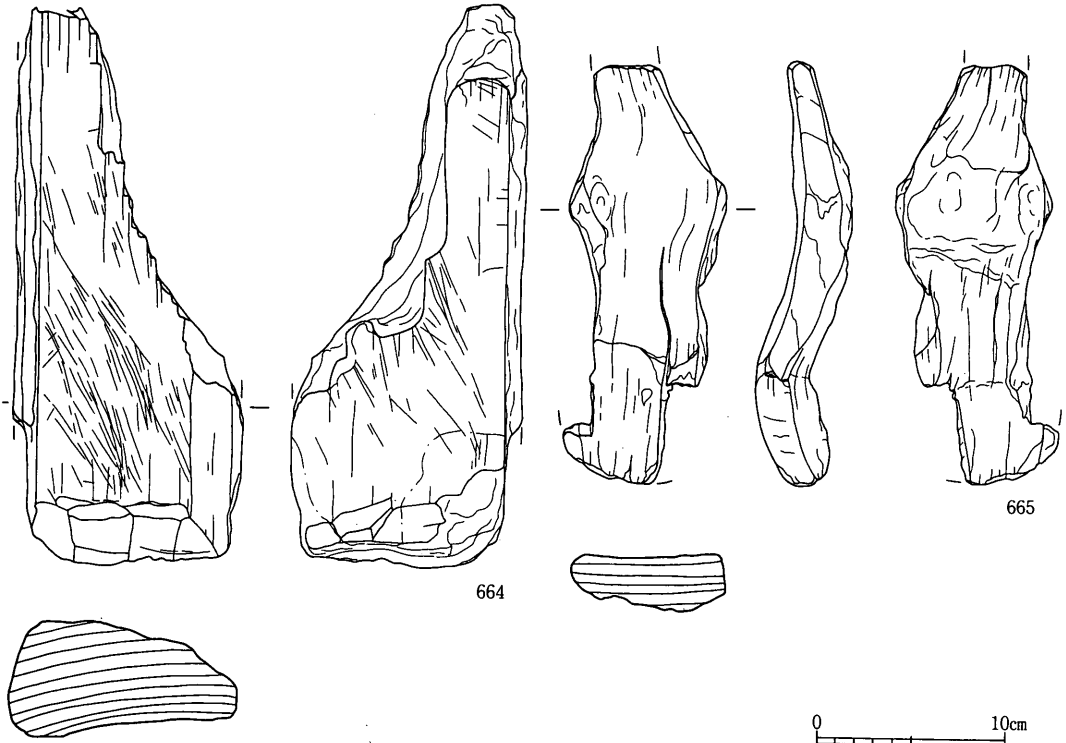
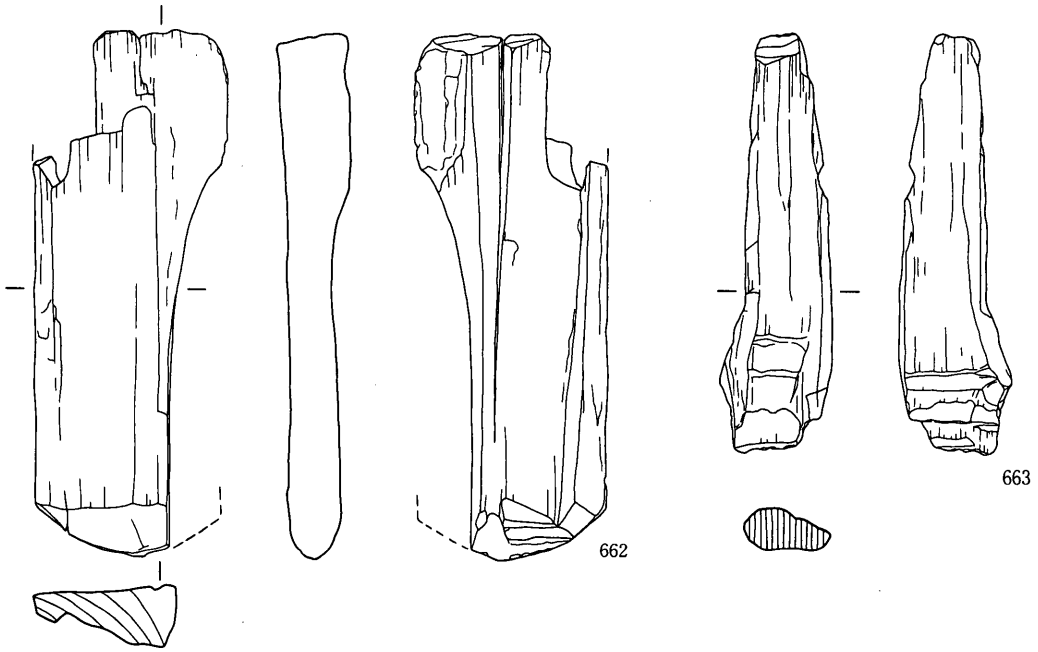
652~657は鉢である。652は底部は丸底で口縁部端部は不整形である。653・654は底部は平底で体部外面はヘラケズリとなっている。655は底部に短い脚台が付くもので、体部は直線的で口縁部端部は先細りとなる。656は底部は丸底でサラダボール形をしている。体部外面には叩きを施している。657は長めの脚台の付く鉢である。口縁部は丸味をもって屈曲し、端部は上下に拡張し外側に面を作り出す。体部は扁平で算盤玉のような形をしている。体部外面はハケ目の後にヘラミガキを施している。内面は上半はハケ目、下半はヘラミガキとなっている。脚は若干外反し、端部を横へつまみ出す。脚部には5個の透し穴がある。円盤充填である。

659は器高が22.8cmの大型の器台である。直径11cmほどの筒部から口縁部と脚部が同じように外反して「ハ」字形に開く。口縁部端部は上下に拡張し、外側に幅広の斜めの面を作り出し、沈線を巡らせている。口縁部内面にも沈線が3条巡っている。脚部端部を強くナデており、接地面もナデており凹線が生じている。外面は全体にハケ目を施した後にヘラ描き沈線を上部に14条、中央部に13条、下部に11条それぞれ巡らせている。内面は全体にヘラケズリを施した後に上部に一部ハケ目を施している。上下2段にそれぞれ長方形の透し穴を施している。

660も鉢の一種と思われる。器高は5.1cmと小型で、体部は直立に近く立ち上がる、脚部は短く直線的である。エッグスタンドに似た形である。

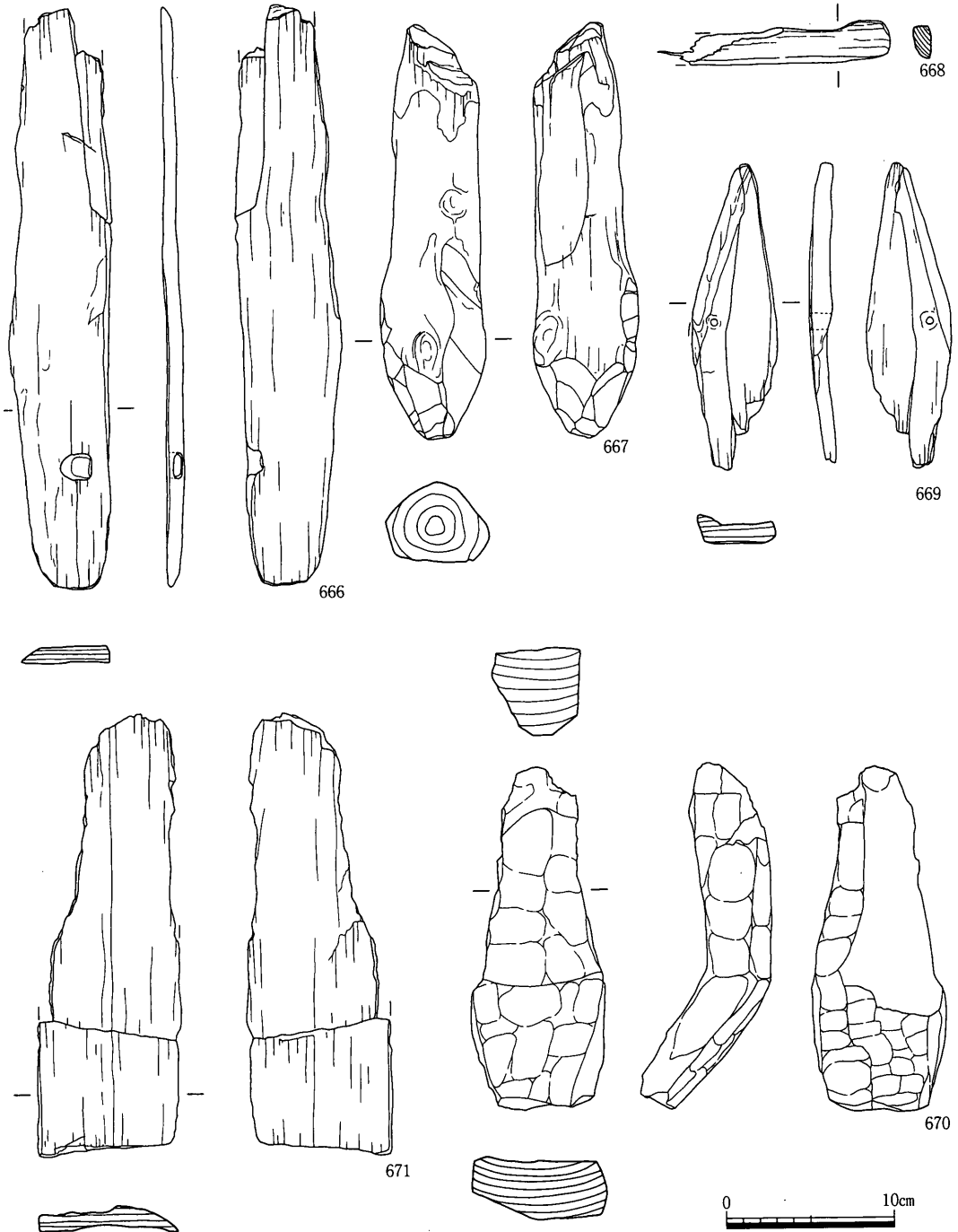
661は石庖丁である。長方形で両側に抉りがある。刃部は直線となっており、両面から調整を加えている。背部は半分ほど欠損しているが全体に両面から調整を加えているものと思われる。

662~671は木器である。662~665は鋤あるいは鍬の未製品と考えられる。662・664は長方形の鋤身の製作途中で、先端部は少し削り出している。663は組合せ式の鋤か鍬で、着



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
662	鋤の未製品	26.5	9.8	3.0	板目		
663	鋸あるいは鋤の未製品	21.2	5.8	2.1	柃目		
664	鋤の未製品	29.7	12.1	6.0	板目	先端部に煤が付着	
665	鋤の未製品	21.9	8.3	2.9	板目		

第720図 G区SR03出土遺物(5)(1/4)



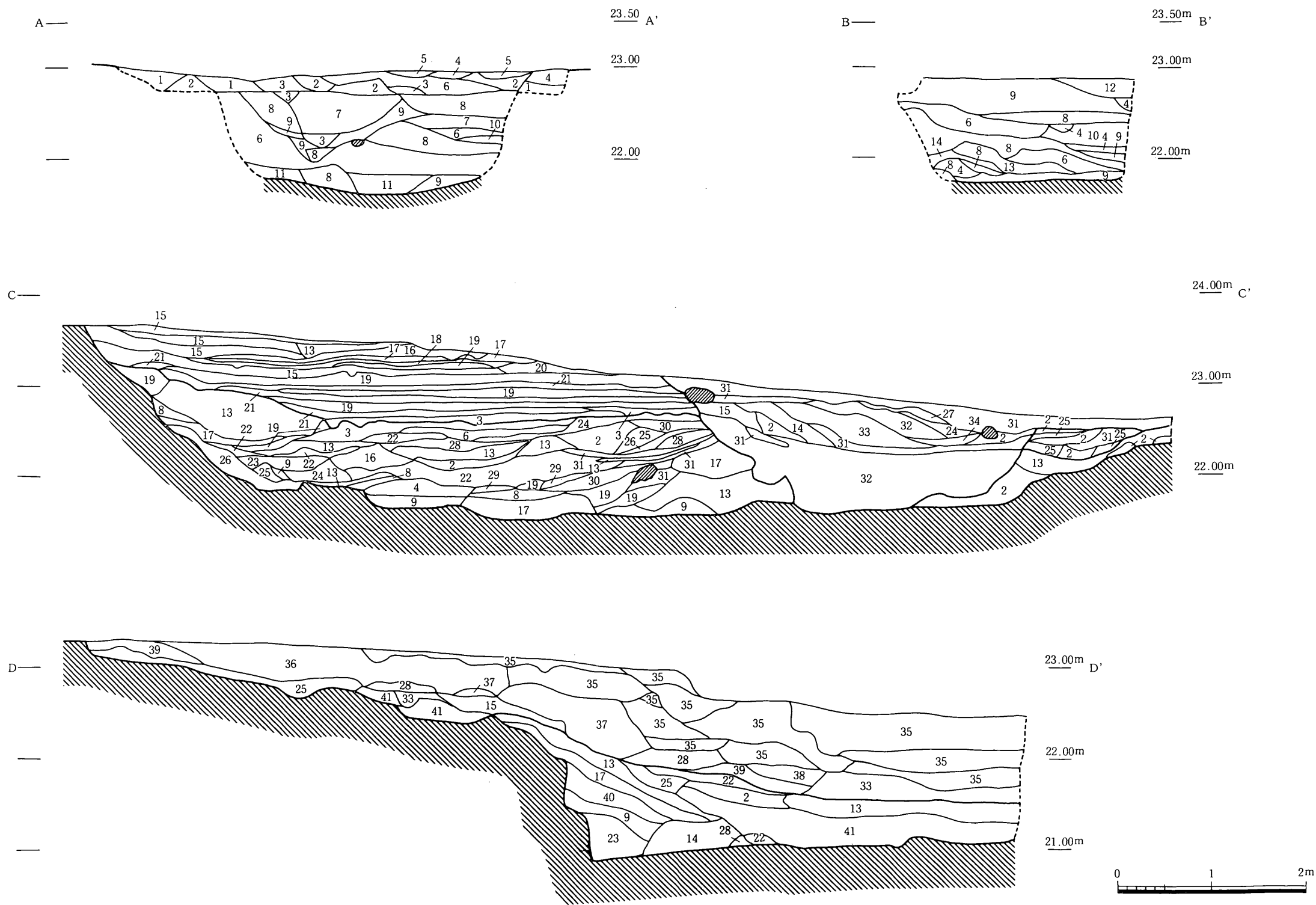
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
666	建築部材?	33.6	5.8	0.9	板目	先端付近に斜めに方形の孔をあけている	
667	杭	23.9	6.1	4.6	芯持		
668	刀形(柄の部分)	13.7	2.2	1.0	板目		
669	用途不明	17.7	5.0	1.7	板目		
670	杓子の木製品	20.0	7.8	3.9	板目	全体に加工痕	
671	板状木製品	25.1	8.4	1.2	板目		

第721図 G区SR03出土遺物(6)(1/4)

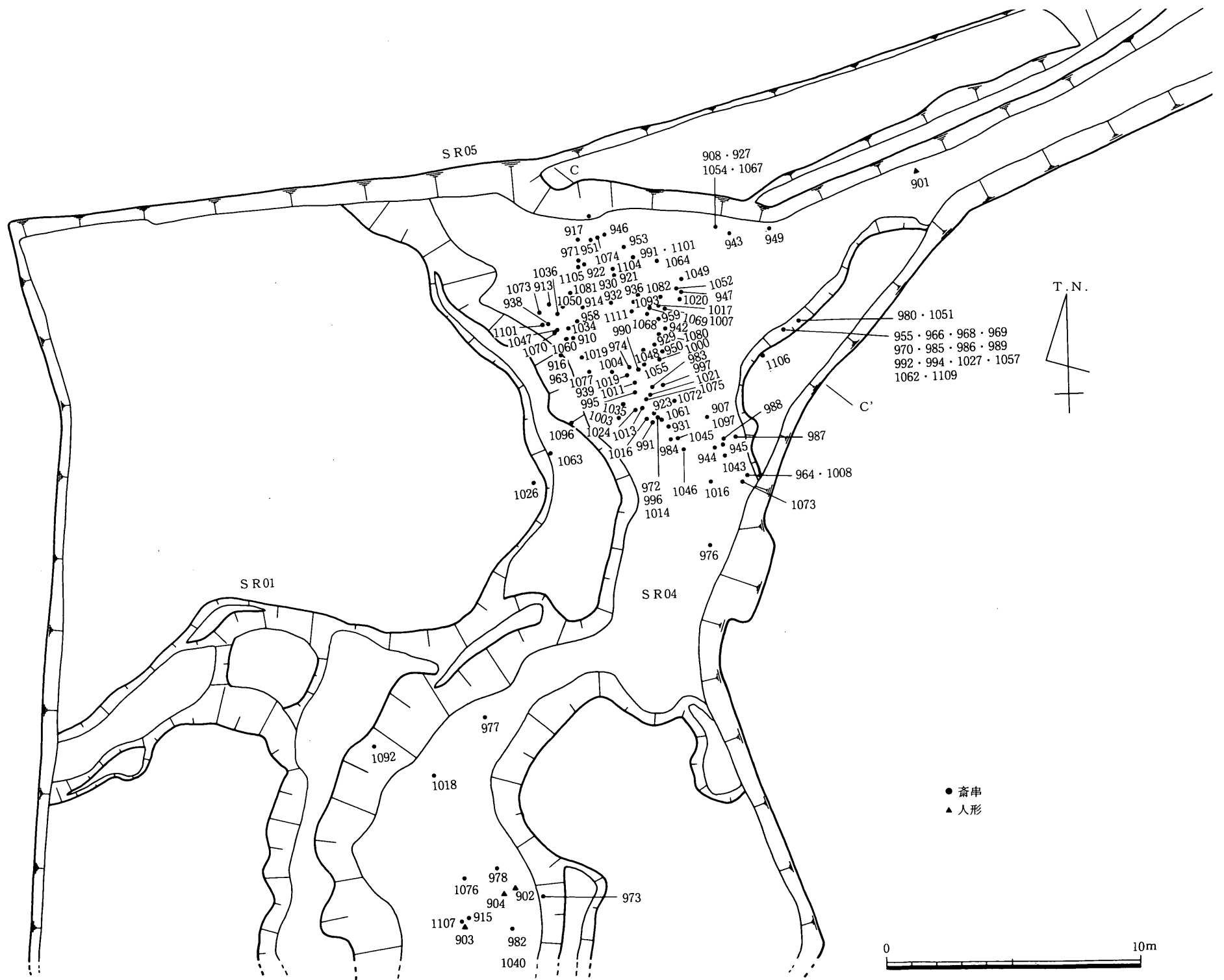
柄部はある程度形が整っているが、身を作り出す途中で破損したものと思われる。665は組合せ鋤で、身は破損しているが長楕円形のものと思われる。着柄部から身に至る部分はまだ歪んだままで、身も全体に歪んでいる。666は先端部から6.5cmほど上に、斜めに側縁方向に斜めの穿孔がある。668は形代の柄の部分と思われる。669は菱形で片方の側縁が盛り上がっており、断面は三角形の縁を作り出しており、側縁の最も突出した部分に円形の穿孔が1つ施されている。用途は不明である。670は真中で屈曲しており、ゴルフクラブのような形をしている。全体に加工痕が顕著である。杓の未製品と考えられ、削り貫きはまだ施されていない。

S R04 (第722～783図, 図版95～98)

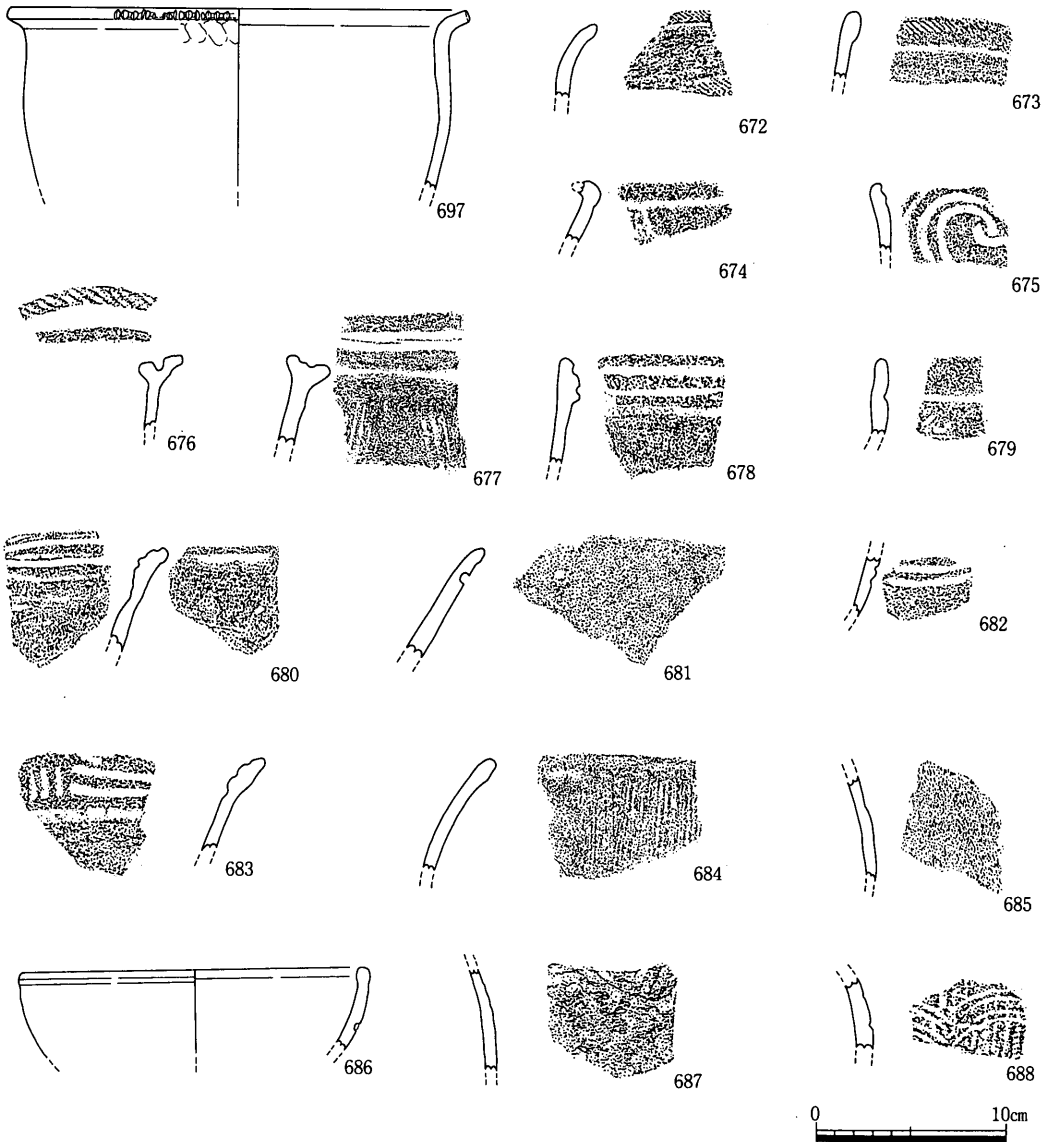
G1区の北東部からG2区の中央部に流れる旧河道で、G1区の中央部分でS字に蛇行している。G1区の北東部は調査区の都合上、河の中央部を部分的に調査するにとどまった。幅は6～14mでG1区の屈曲部分が狭くなっている。深さは0.8～2.8mで河底のレベルは北から南に向って低くなっており、80～90cm程の差がある。G2区の北半分の部分は南半分より部分的に深くなっている。S R01との交点部分は段になっている。G2区の南側を拡張したところ、S R04がS R02を切っていることが確認出来た。旧河道の検出面は耕作土から50cmほど下であった。埋土は大きく上層と下層に分かれ、上層は粘質土、下層は砂・砂質土・砂混り粘質土が中心となっている。下層は縄文時代後期～弥生時代後期の遺物が中心となっている。これに対して上層は奈良時代以降の遺物が中心となっている。特にC-C'の土層観察ベルトによると、この付近は斎串を中心とする木製品が多量に出土した地点であるが、これら木製品の出土レベルを検討すると、上層の粘質土が水平堆積している部分の下部から出土している。このことから下層部分が一度埋没した段階で上層部分に木製品が廃棄されたと考えられる。S R05との先後関係は、土層観察からはよく分からなかったが、C-C'の土層観察ベルトで切り合いが認められなかったことと、木製品の出土位置とレベルから考えると北東側からの流れに乗っていること、さらにS R05部分に木製品が無いことからS R04がS R05を切っているものと考えられる。またS R05との交点部分の東側に遺物の空白区があるが、これはC-C'の土層観察ベルト部分のC'側の新しい流れによって遺物が流されたものと考えられる。上層部分は南へ向うほど薄くなり、G2区部分では弥生時代までの遺物のほうが多い。以上のことから、この河は縄文時代後期から弥生時代後期まで開口し、半分ほど埋没した後に再び奈良時代から室町時代



第722图 G区SR04断面图(1)(1/50)



第724图 G区SR04北半部畜串·人形出土位置图(1/200)



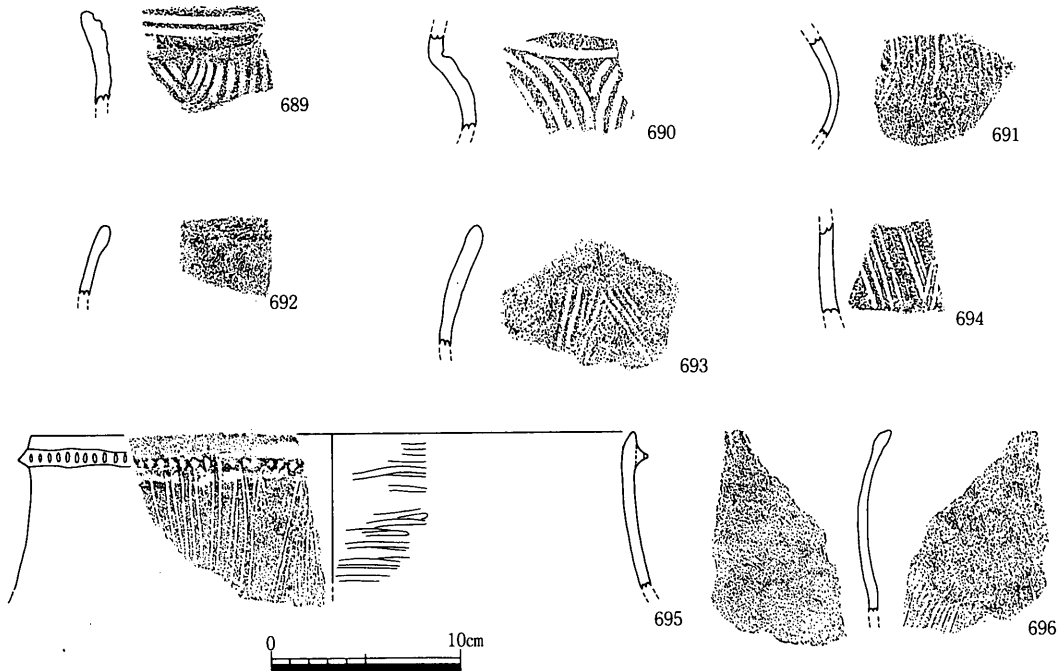
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
672	縄・深鉢				中・普	良好	暗灰黄	ミガキ	ミガキ		
673	縄・深鉢				中・普	良好	黒	ミガキ	ナデ	口縁部外側に縄文	
674	縄・深鉢				中・多	不良	にぶい黄橙	不明	不明		
675	縄・深鉢				中・普	良好	黄灰	不明	不明		金雲母
676	縄・深鉢				中・普	良好	黒	不明	不明		
677	縄・深鉢				中・多	良好	黒	不明	不明		
678	縄・深鉢				中・普	良好	黒褐・黄橙	ナデ	ナデ		
679	縄・深鉢				中・普	良好	灰黄・黄灰	不明	不明		金雲母
680	縄・深鉢				中・普	良好	灰リ・ア・灰白	ミガキ	ナデ		
681	縄・深鉢				粗・多	良好	にぶい黄橙	不明	ミガキ		
682	縄・深鉢				中・普	良好	にぶい黄橙	不明	不明		
683	縄・深鉢				中・普	良好	黒・にぶい褐	不明	不明		
684	縄・深鉢				粗・多	良好	暗灰黄	貝殻条痕	不明		
685	弥・壺				粗・普	良好	灰黄	不明	ミガキ		段をもつ壺
686	縄・浅鉢	17.3			中・普	良好	褐灰・灰黄褐	不明	不明	未貫通の孔1ヶ所有り	雲母
687	縄・深鉢				中・普	良好	灰黄	貝殻条痕	不明		
688	縄・深鉢				中・普	良好	黒褐～赤褐	ナデ	ケズリ		
697	弥・壺	24.0			粗・多	良好	褐灰	ナデ	不明	口縁部端部に刻み目	

第726図 G区SR04出土遺物(1)(1/4)

にかけて開口していたものと考えられる。

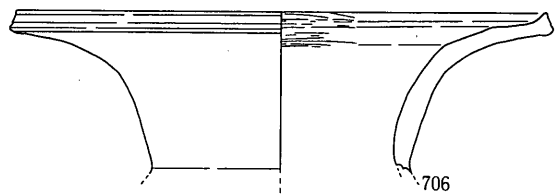
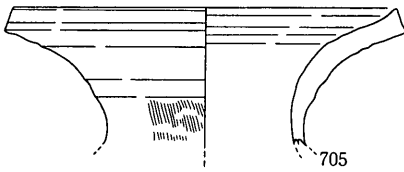
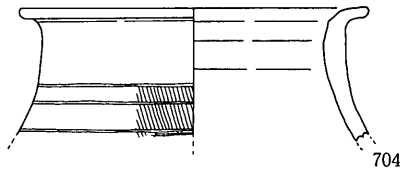
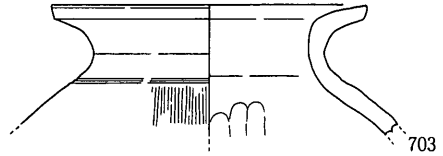
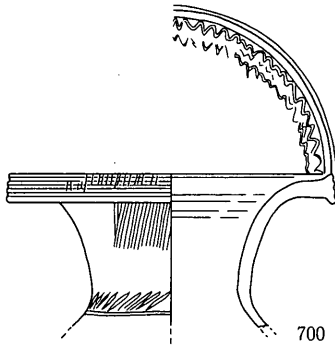
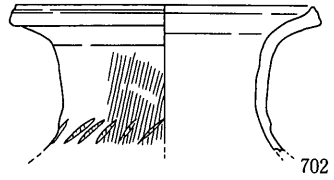
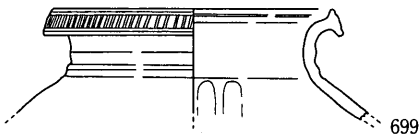
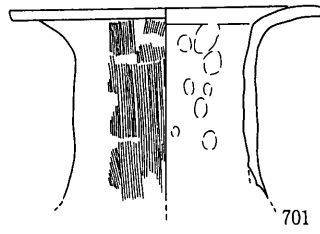
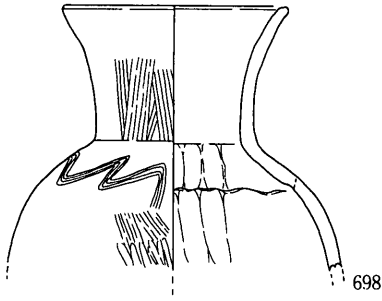
河の埋土からは縄文時代後期～室町時代までの土器とともに、木器が多量に出土した。

672～790は下層から出土した土器である。672～684・687・693・694・696は縄文時代後期の深鉢である。672は口縁部端部外面とやや下に縄文を施し、縄文と縄文の間にヘラミガキを施している。内面もヘラミガキとなっている。673は口縁部端部は肥厚し、端部外面には縄文を施している。674は口縁部端部は内傾し、端部屈曲部のやや下に沈線を1条巡らせている。676は口縁部は肥厚し上側に幅広の面を持ち、沈線を1条施している。また沈線より外側に縄文を加えている。677は口縁部の上面に沈線を2条施している。678は口縁部外面に、680は口縁部内面にそれぞれ沈線を施している。683は口縁部内面に3条の横方向の沈線と短い3条の縦方向の文様を施している。684は口縁部端部は肥厚し、外面には条痕を施している。693は波状口縁のものである。696は口縁部端部は内側に肥厚しカキ目状の文様を加えている。686・689～691は縄文時代後期の浅鉢である。686は口縁部端



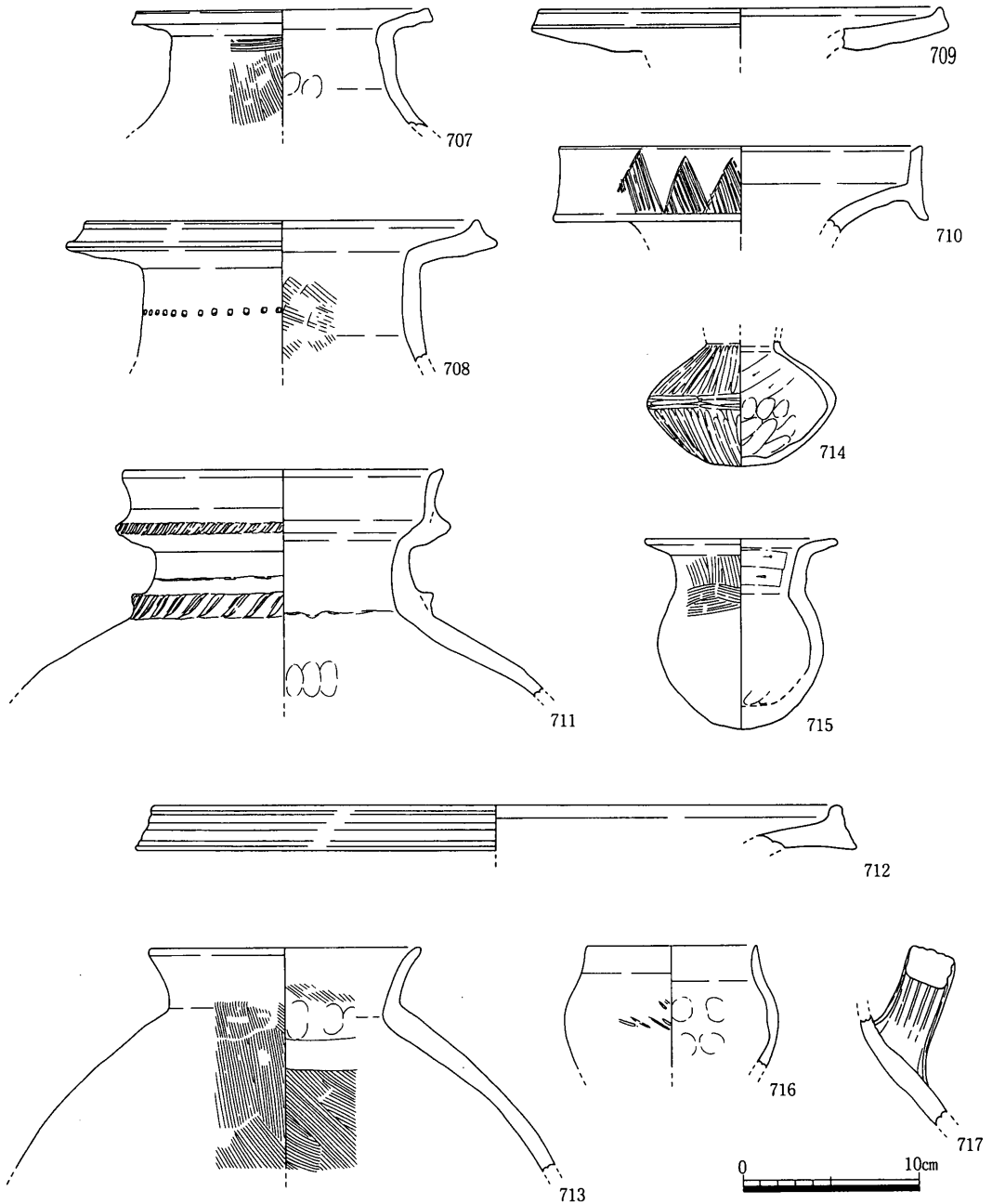
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
689	縄・浅鉢				粗・普	不良	黒・浅黄橙	不明	不明		
690	縄・浅鉢				粗・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ		金罌母
691	縄・浅鉢				中・普	良好	赤-7 黒・暗灰	不明	不明		
692	縄・深鉢				中・普	良好	暗灰黄	ナデ	ナデ		
693	縄・深鉢				中・普	良好	褐灰・黄橙	ナデ		波状口縁	
694	縄・深鉢				粗・普	良好	赤-7 黒・灰黄	ナデ	ミガキ		
695	縄・深鉢	32.0			中・普	不良	黒・浅黄	ナデ	ミガキ	一条刻み目突帯	
696	縄・深鉢				中・普	良好	黄灰	ナデ	不明		

第727図 G区SR04出土遺物(2)(1/4)



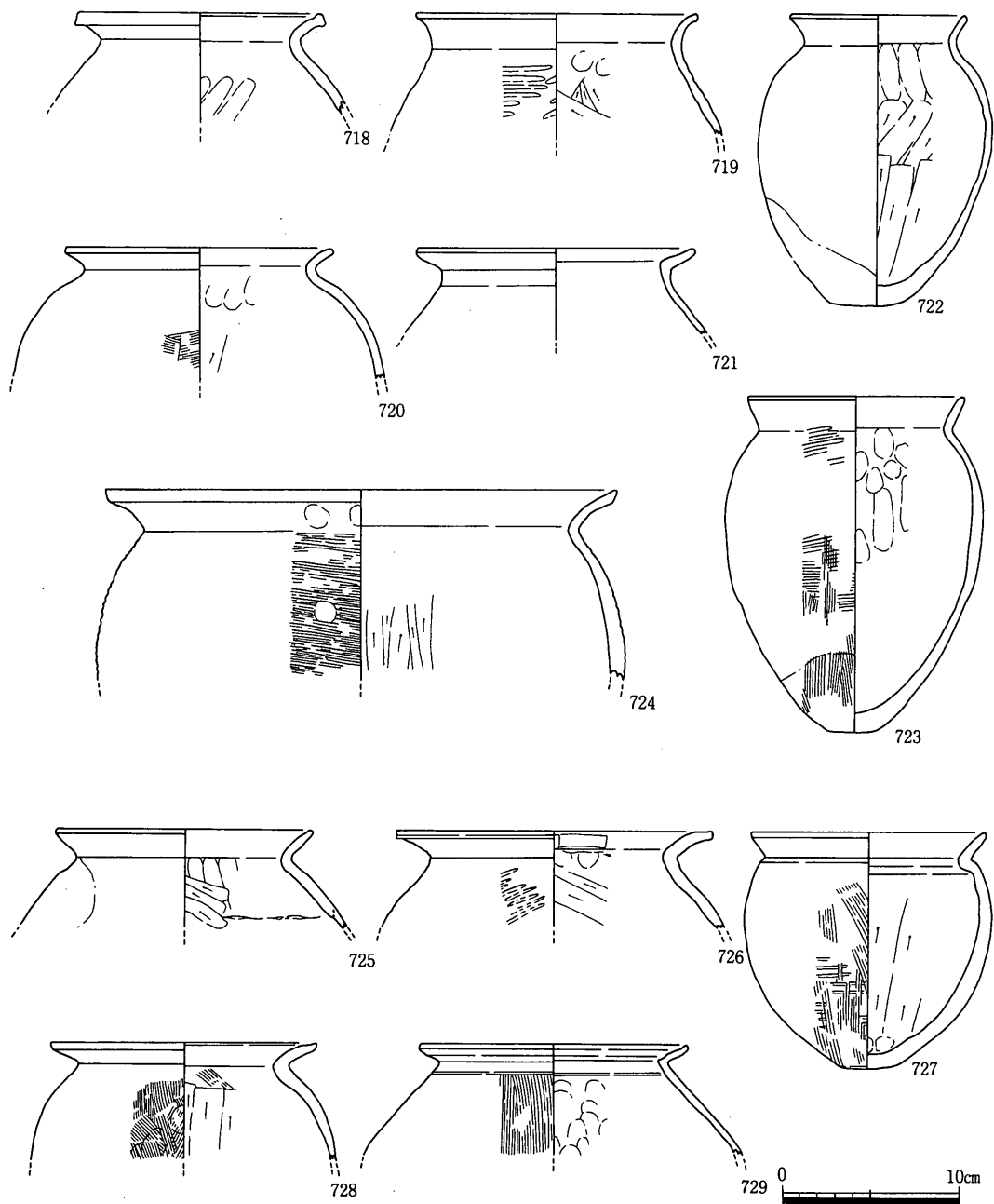
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
698	弥・壺	11.9			細・普	良好	明褐	ハケ目・ミガキ	ナデ	体部に未完結の櫛描文	
699	弥・壺	14.8			中・多	良好	褐灰・浅黄橙	ナデ	ナデ	頸部強くナデる	
700	弥・壺	17.0			中・普	良好	灰・コブイ黄橙	ハケ目	ナデ		
701	弥・壺	16.4			細・普	良好	黄褐	ハケ目	ナデ		金雲母・雲母
702	弥・壺	15.6			中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	不明		角閃石
703	弥・壺	16.4			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ		金雲母
704	弥・壺	18.2			中・普	良好	黄褐・暗灰黄	ナデ・ハケ目	ナデ		雲母・角閃石
705	弥・壺	20.2			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ハケ目	ナデ		
706	弥・壺	28.0			中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ナデ・ハケ目		金雲母・角閃石

第728図 G区SR04出土遺物(3)(1/4)



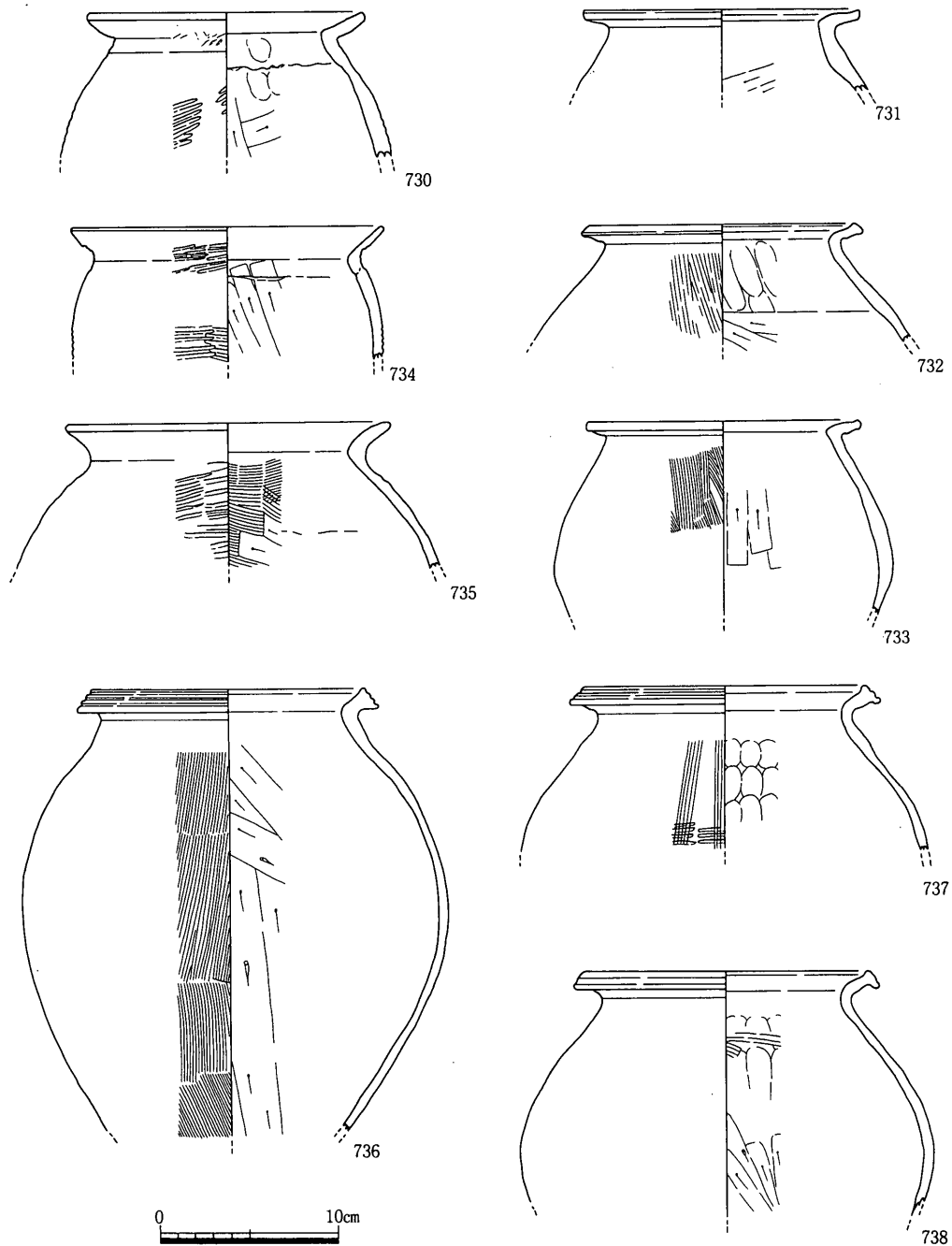
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
707	弥・壺	16.4			粗・普	良好	浅黄橙	ハケ目	ナデ		
708	弥・壺	22.4			細・普	良好	橙	ナデ	ナデ・ハケ目		
709	弥・壺	22.6			中・普	良好	明赤褐	ナデ	ナデ		金銀母
710	弥・壺	20.6			細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	口縁部に鋸歯文	器母
711	弥・壺	18.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		角閃石
712	弥・壺	38.8			粗・普	良好	にぶい黄	ナデ	ナデ		
713	弥・壺	15.2			細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ→ハケ目	ナデ・ハケ目		角閃石
714	弥・壺			3.6	細・普	良好	にぶい黄	ミガキ	ケズリ・ナデ	外面に丁寧なミガキ	
715	弥・壺	10.8	10.7		微・普	良好	コブイ黄橙・黒	ハケ目・ナデ	ケズリ・ナデ	丸底、頸部外反	器母
716	弥・壺	9.6			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・叩き	ナデ		金銀母・器母
717	弥・水差し				中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ケズリ・ナデ		金銀母

第729図 G区SR04出土遺物(4)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
718	弥・甕	13.4			粗・普	良好	ニブイ褐・褐灰	ナデ	ナデ		雲母
719	弥・甕	15.8			微・普	良好	橙	叩き→ナデ	ケズリ		金雲母
720	弥・甕	15.0			中・普	良好	ニブイ黄橙・褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ		
721	弥・甕	15.6			微・普	良好	橙	不明	不明		金雲母・角閃石
722	弥・甕	9.9	15.8	3.3	中・普	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ・ケズリ	全体に歪んでいる	金雲母
723	弥・甕	12.0	18.2	2.8	細・普	良好	黄褐・黒	叩き→ハケ目	ナデ		角閃石
724	弥・甕	2.9			細・普	良好	にぶい黄橙	叩き	ケズリ→ナデ		金雲母
725	弥・甕	14.5			中・普	良好	にぶい黄褐	不明	ケズリ		金雲母
726	弥・甕	17.8			微・普	良好	橙	叩き→ナデ	板ナデ・ケズリ		金雲母
727	弥・甕	13.2	13.2	3.0	中・普	良好	にぶい褐	叩き→ハケ目	ケズリ		雲母・角閃石
728	弥・甕	15.0			中・普	良好	にぶい褐	ハケ目	ケズリ		金雲母・雲母
729	弥・甕	15.0			中・普	良好	明赤褐	ハケ目	ナデ	口縁内面に鋭い稜もつ	金雲母・角閃石

第730図 G区SR04出土遺物(5)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
730	弥・甕	15.4			微・普	良好	にぶい黄褐	叩き→ナデ	ナデ・ケズリ		金雲母・角閃石
731	弥・甕	15.4			中・普	良好	にぶ黄褐	ナデ	ナデ・ケズリ		金雲母・角閃石
732	弥・甕	14.9			細・少	不良	灰白	ハケ目	ナデ・ケズリ		金雲母
733	弥・甕	15.2			粗・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目・ナデ	ナデ・ケズリ	胴部肥厚	金雲母
734	弥・甕	17.6			細・多	良好	褐灰・ニブイ橙	叩き・ナデ	ケズリ	口縁外面にも叩き	
735	弥・甕	18.0			細・普	良好	にぶい黄橙	叩き	ハケ目・ケズリ		金雲母
736	弥・甕	15.2			粗・普	良好	浅黄	ハケ目	ケズリ		
737	弥・甕	15.8			細・普	良好	黒褐	叩き→ハケ目→ナデ	ナデ		雲母・角閃石
738	弥・甕	16.0			中・普	良好	褐	不明	ナデ・ハケ目・ナデ		金雲母・角閃石

第731図 G区SR04出土遺物(6)(1/4)

部が若干肥厚し、体部はボール状になる。689・690は外面に幾何学的な沈線文を施している。688は外面に縄文の上に連弧文状の沈線文を加えている。縄文時代中期の可能性がある。695は縄文時代晩期の深鉢である。口縁部端部のやや下に断面三角形の刻み目突帯を貼り付けている。内面にはヘラミガキを施している。687は時期は不明であるが、外面に巻貝による条痕が見られる。685は弥生時代前期古段階の壺で、外面に段がある。697は弥生時代前期の甕である。口縁部は如意状で、外面に刻み目を巡らせている。

698～790は弥生時代IV期～終末にかけての土器である。698～716は壺である。698は体部外面の上半に櫛描き波状文が、中程にはヘラミガキが施されている。699は口縁部端部を上下に拡張し外側に幅広の面を作り、その面に縦方向の短いヘラ描き文様を施す。頸部は強くナデている。700も口縁部端部を上下に拡張し、口縁部外面に沈線を3条巡らせた後に上部にヘラ工具で刻み目を少し加えている。頸部下半にはヘラ圧痕文を施し、その下に沈線を1条巡らせている。704は口縁部は内傾する頸部から短く真横に開き、頸部外面にはヘラ描き沈線を3条巡らす。706は口縁部内面にハケ目を施している。708は口縁部端部外面を強くナデており、端部下端を横へつまみ出している。頸部外面には棒状工具による刺突文がある。710は口縁部端部を上下に大きく拡張し、外側に幅広の面を作り出し鋸歯文を施している。711は二重口縁で口縁部端部は内側に面を作る。口縁部立ち上り部と頸部下半に断面三角形の刻み目突帯を貼り付けている。713は体部からそのまま口縁部に至る壺で、体部内・外面にハケ目を施す。714は細頸壺の体部で外面は全体にヘラミガキを施すが、体部中位は横方向に施している。715は小型の壺で頸部は外反する。717は水差し形土器の把手である。

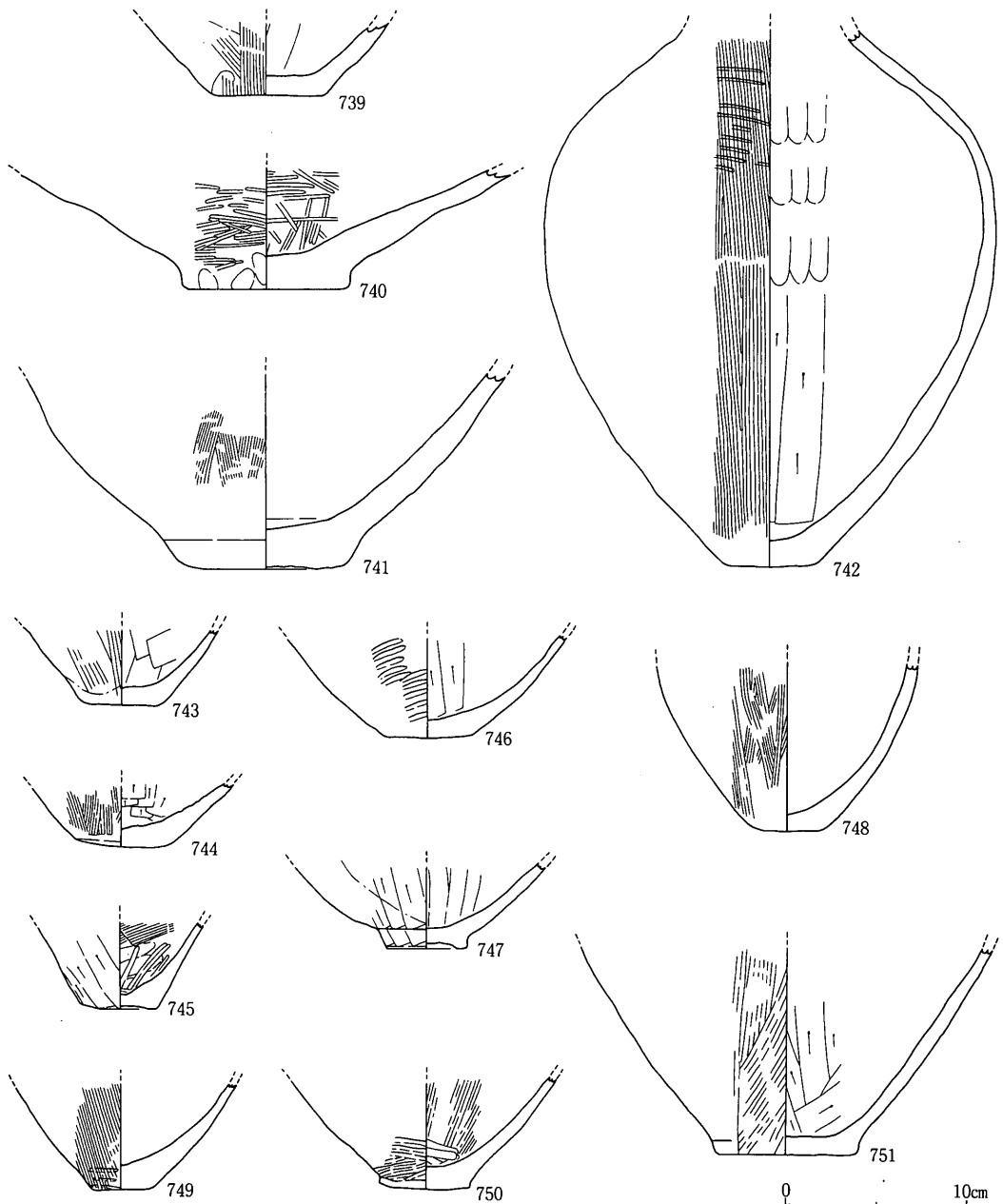
718～738は甕である。719は口縁部は緩く外反し、体部外面は叩きを施した後にナデている。722は体部が全体に歪んでおり、内面は上部以下にヘラケズリを施している。723は体部最大径は上半にあり倒卵形となっている。外面は叩きの後に下半をハケ目で消している。727は口縁部は直線的に開き、体部は短く外面には叩きの後にハケ目を施している。体部内面の上部はヘラ状工具で器壁を抉り取っている。728は口縁部端部内側を強くナデている。730は口縁部立ち上り部外面に、ナデた時に爪が当たった痕が残っている。734は口縁部は直線的に斜め上方に立ち上るが、体部外面の叩きが口縁部にまで及んでいる。内面は口縁部直下からヘラケズリを施している。735は口縁部は肥厚しており、体部内面はハケ目であるが、一部ハケ目を施す時に力が入りすぎたのかヘラケズリになっている部分がある。736～738は口縁部端部を拡張し外側に擬凹線を施しているものである。

739~751は壺あるいは甕の底部である。740は壺の底部で突出した平底となっている。体部内・外面にはヘラミガキを施している。742は壺と思われ、体部は倒卵形で上部は頸部に向ってすぼまる。体部外面は叩きの後にハケ目を施している。745は甕の底部でやや上げ底になる。体部外面はヘラケズリで内面はハケ目となっているが、内面下部には棒状工具痕がある。747は壺の底部で高台状に突出して上げ底になる。749・750は外面の底部付近まで叩きが及ぶ。

752~763は高杯である。752は杯部内・外面全体に格子状のヘラミガキを丁寧に施している。口縁部は内面を強くナデており外反する。脚部との接続は円盤充填になっており、脚部内面はヘラケズリとなっている。753は杯部内・外面にはハケ目の後にヘラミガキを施し、口縁部は大きく外反する。杯部と脚部の接続は差し込み法になっており、脚部は中程で屈曲し直線的に開き端部は丸く収める。脚柱部外面はヘラミガキで、裾部は外面はヘラミガキ、内面はハケ目になっている。透し穴は現存で2個であるが、本来は4個であろう。755は口縁部端部を横へ摘み出し上方に面を作る。杯部外面はヘラケズリの後にヘラミガキ、内面はヘラミガキとなっている。757は脚部端部は外側に面をもち、端部やや上に小さな円形の透し穴を8個施す。758は脚部は低く直線的に開く。脚部には2個1単位の透し穴が4単位あるが、そのうちの1つは貫通していない。杯部内面にはハケ目を施している。762は脚部は下半で大きく外開きになり、端部は外側に面をもつ。外面にはハケ目を施し、屈曲部にはヘラ描き沈線を3条巡らす。透し穴は8個あるが1個は未貫通である。763は脚部は下半で大きく外開きになり、現存で2個1単位の透し穴が4個ある。杯部とは円盤充填により接合している。

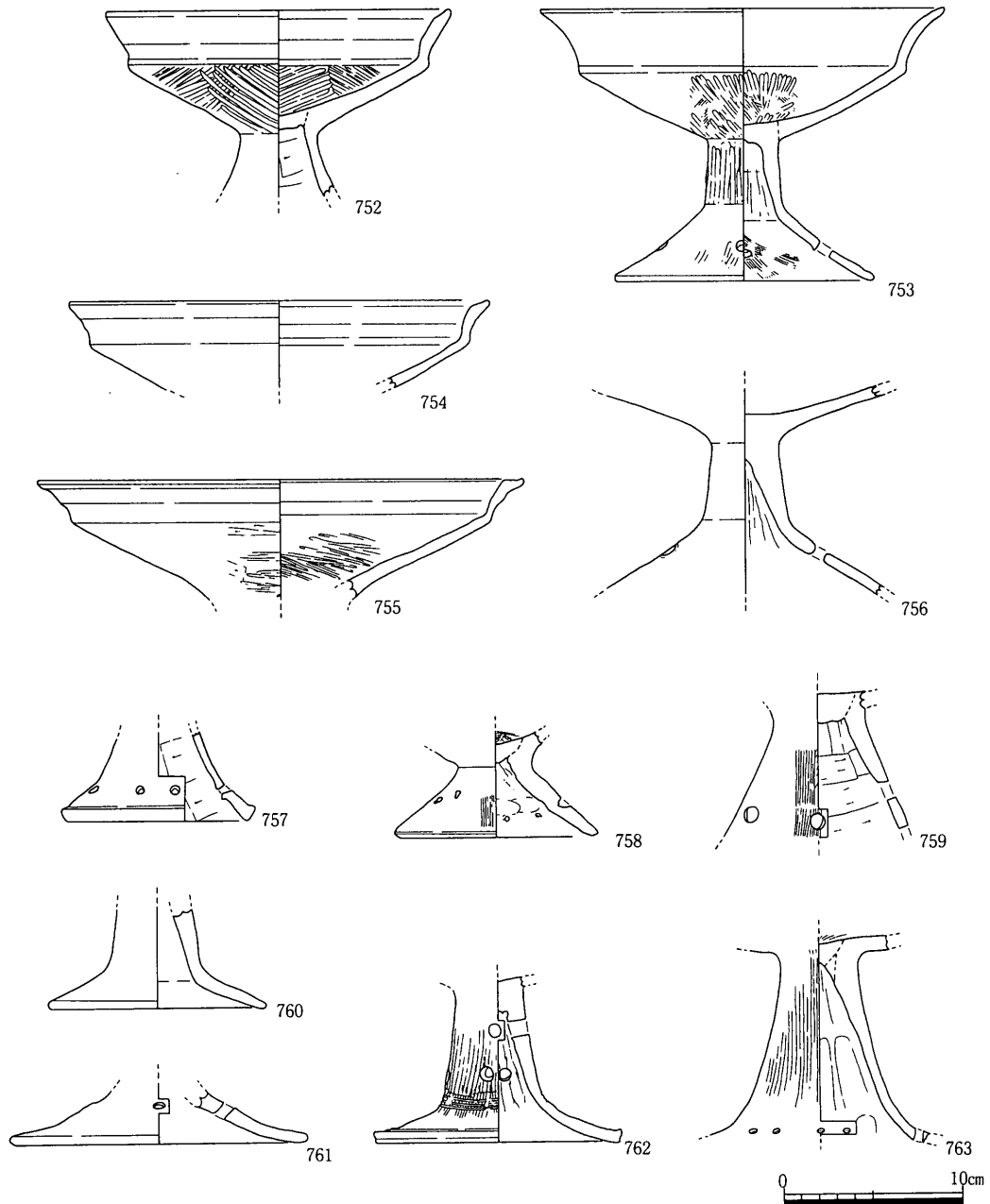
764は器台で筒部のみが残存している。4個1単位の円形透し穴と長方形の透し穴を交互に配する。

765~781は鉢である。765は口縁部内面に叩きが施され、内面下半はハケ目となっている。767は口縁部は外側に屈曲し、体部は扁平で外面にヘラケズリを施す。769・772は口径の割に器高が低く、浅い皿状のものである。771は口縁部は手捏ねで不整形である。外面には上下にそれぞれ原体の異なるハケ目を施している。773~776は脚台付き鉢の脚部である。777は口縁部が屈曲し、端部は上方に拡張し端面に凹線を施す。大型の鉢で体部は大きく開く。778は高杯の杯部の形をした鉢である。体部は丸底で外面は摩滅しているが内面にはヘラミガキを施している。体部中位で外面に鋭い稜線を形成して大きく外反する口縁部をもつ。口縁部内面は強くナデており凹線が形成されている。高杯の杯部の転用品



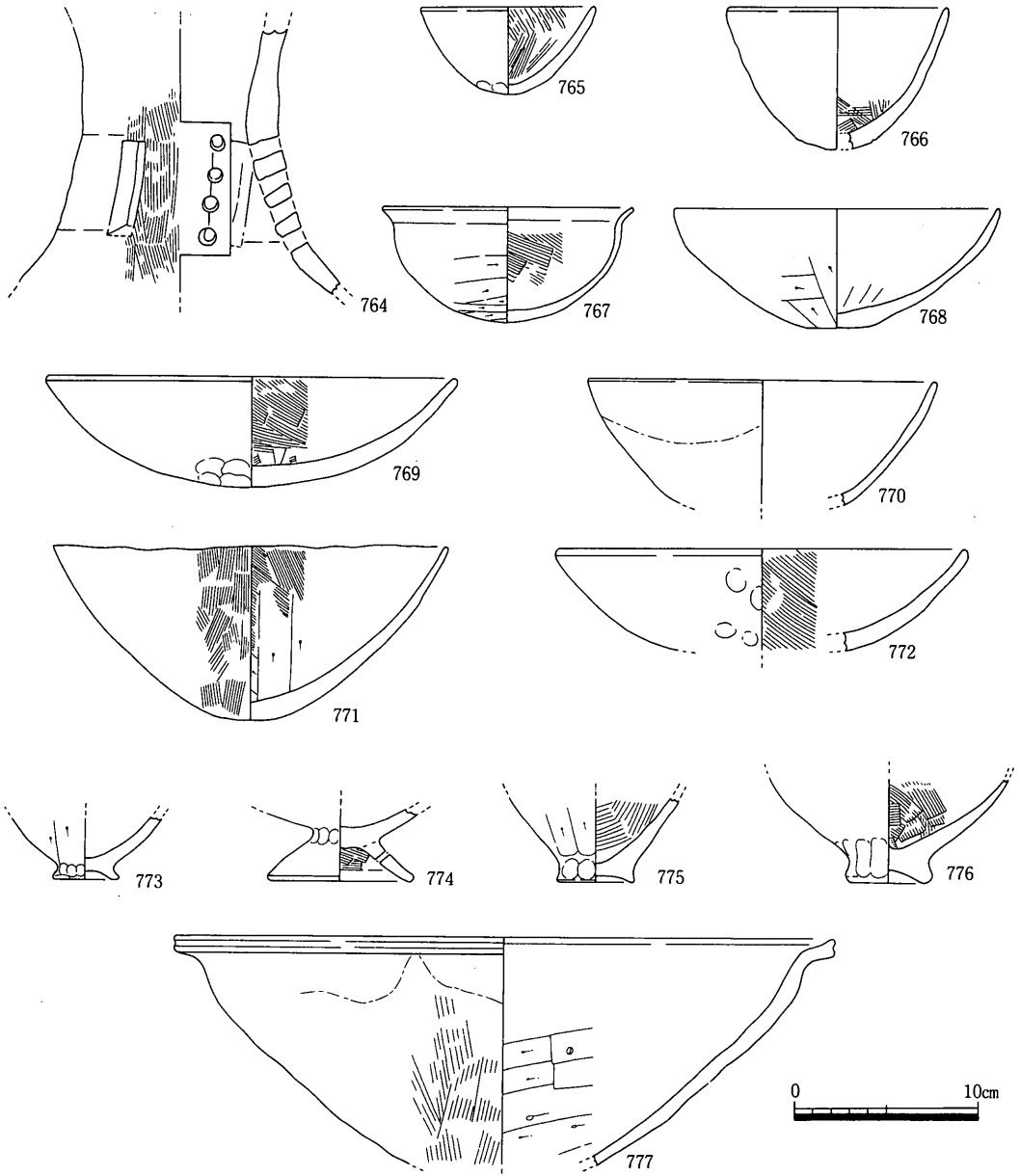
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
739	弥・甕			6.2	細・普	良好	黒・灰黄	ハケ目	板ナデ		
740	弥・甕			9.3	粗・普	良好	浅黄	ミガキ	ミガキ		
741	弥・甕			8.8	粗・普	良好	橙	ハケ目	ナデ		
742	弥・甕			5.3	中・普	良好	褐灰・ニイイ褐	叩き→ハケ目	ケズリ・ナデ		雲母・角閃石
743	弥・甕			3.8	粗・普	良好	黒・ニイイ黄	ハケ目	板ナデ		金雲母
744	弥・甕			4.9	中・普	良好	灰褐	ハケ目	ケズリ		
745	弥・甕			4.2	中・普	良好	にぶい橙	ケズリ	ハケ目	内面に工具痕	
746	弥・甕			4.5	粗・普	良好	灰黄褐・橙	叩き	ケズリ	底外面ケズリ	金雲母
747	弥・甕			4.6	中・多	良好	にぶい橙	ケズリ	板ナデ	底輪台	
748	弥・甕			4.0	粗・普	良好	灰黄・灰黄褐	ハケ目	ナデ		
749	弥・甕			3.0	粗・普	良好	黒・にぶい黄	叩き→ハケ目	ナデ	底外面叩き	
750	弥・甕			5.0	細・普	良好	褐	叩き→ナデ	ハケ目・ミガキ		金雲母
751	弥・甕			7.6	粗・普	良好	灰・ニイイ黄橙	ハケ目	ケズリ		

第732図 G区SR04出土遺物(7)(1/4)



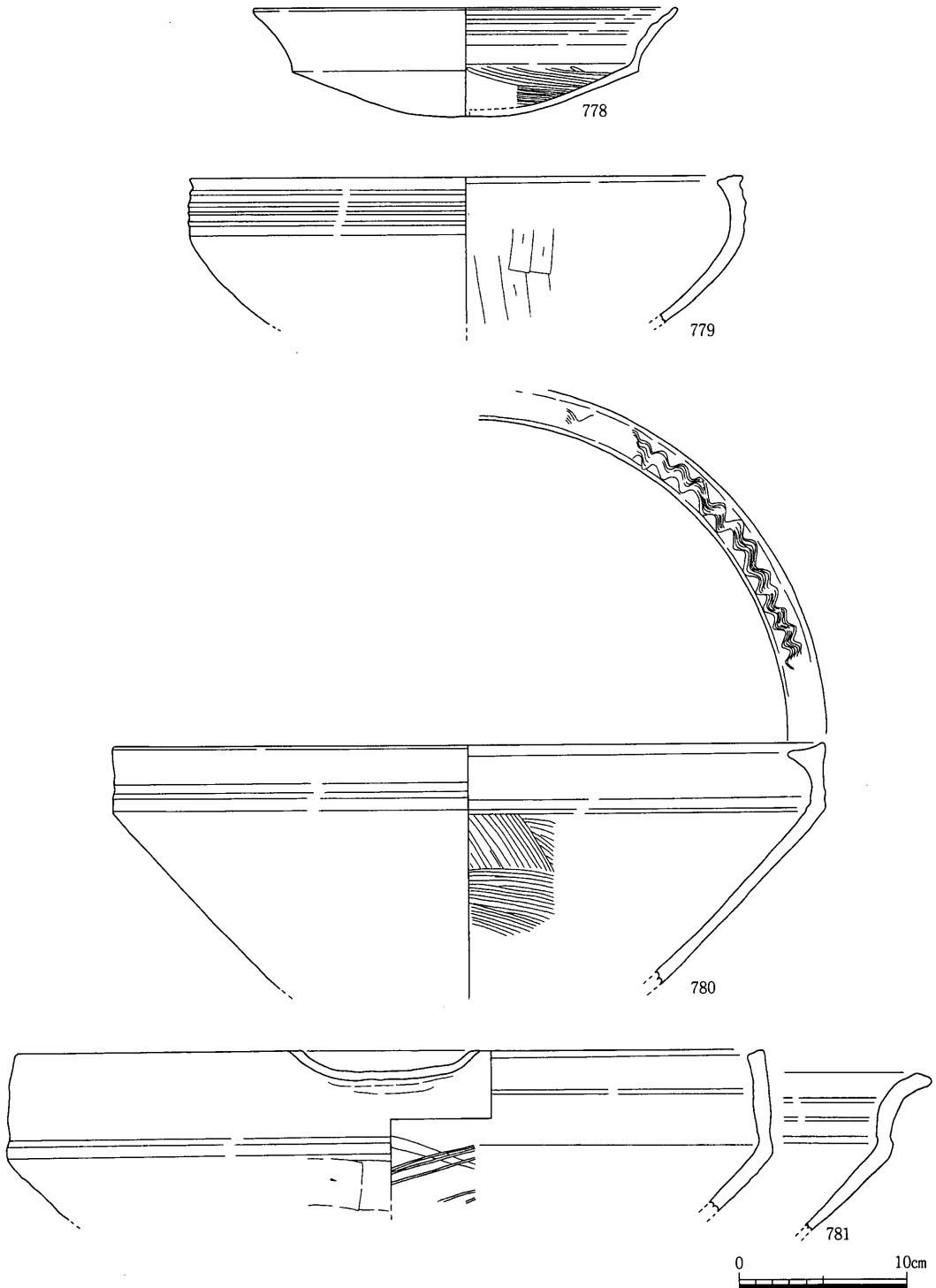
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
752	弥・高杯	19.2			粗・普	良好	橙	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ・ナデ	円盤充填	雲母
753	弥・高杯	22.6	14.7	14.6	粗・普	良好	にぶい橙	ハケ目→ミガキ	ハケ目・ミガキ	透し穴8個	角閃石
754	弥・高杯	23.3			中・普	良好	にぶい褐・褐	不明	不明		雲母・角閃石
755	弥・高杯	27.2			中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ナデ	ナデ・ミガキ		
756	弥・高杯				粗・普	良好	にぶい黄橙	不明	不明	現存で透し穴2個	雲母
757	弥・高杯			10.1	細・普	良好	にぶい橙	ナデ	ケズリ	透し穴8個	雲母・角閃石
758	弥・高杯			10.6	細・普	良好	にぶい褐	ハケ目→ナデ	ハケ目・ナデ	透し穴8個、1個未貫通	金雲母・角閃石
759	弥・高杯				粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ケズリ	円盤充填、透し穴4個	
760	弥・高杯			12.2	粗・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
761	弥・高杯			16.6	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	現存で透し穴1個	雲母
762	弥・高杯			13.6	中・普	良好	灰黄	ハケ目→ナデ	ナデ	透し穴8個、1個未貫通	金雲母
763	弥・高杯				細・普	良好	にぶい橙	ミガキ	ナデ	円盤充填、透し穴4個	

第733図 G区SR04出土遺物(8)(1/4)



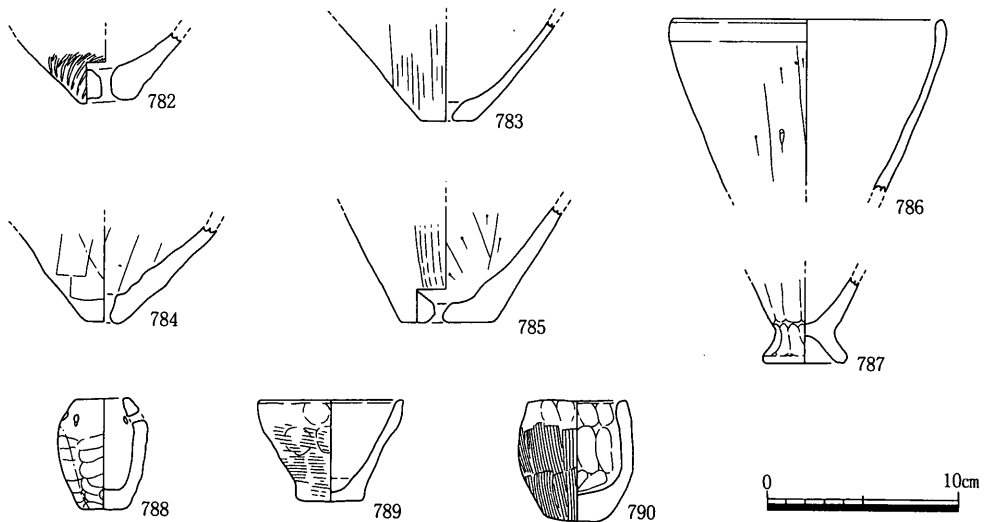
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
764	弥・器台				粗・普	良好	浅黄	ハケ目	ナデ		
765	弥・鉢	9.5	4.6		中・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	叩き・ハケ目	口縁内面に叩き	
766	弥・鉢	11.4	7.5		微・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ・ハケ目		金雲母
767	弥・鉢	13.8	6.0		微・普	良好	にぶい橙	ナデ・ケズリ	ハケ目・ナデ		金雲母
768	弥・鉢	17.6	6.2	3.5	中・普	良好	明黄褐	ナデ・ケズリ	板ナデ		
769	弥・鉢	22.2	5.8		細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目		金雲母・角閃石
770	弥・鉢	19.0			中・普	良好	にぶい褐	ナデ	ナデ		金雲母
771	弥・鉢	21.6	9.3		中・普	良好	赤褐	ハケ目	ハケ目・ケズリ	外面に単位異なるハケ目	金雲母
772	弥・鉢	22.0			細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目		金雲母・角閃石
773	弥・鉢			3.4	粗・普	良好	浅黄	ケズリ	ナデ		
774	弥・鉢			8.0	細・普	良好	灰黄褐	ナデ	ナデ・ハケ目		角閃石
775	弥・鉢			4.2	粗・普	良好	にぶい黄橙	ケズリ	ハケ目		雲母・角閃石
776	弥・鉢			4.6	粗・普	良好	浅黄	不明	ハケ目		
777	弥・鉢	36.0			粗・普	良好	浅黄	ハケ目	ケズリ		

第734図 G区SR04出土遺物(9)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
778	弥・鉢	25.2	6.3		中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ・ミガキ	高杯杯部を鉢に転用か	
779	弥・鉢	32.8			中・普	良好	浅黄橙・橙	不明	ケズリ		
780	弥・鉢	41.8			中・普	良好	橙・赤灰	不明	ハケ目	口縁端面に櫛描波状文	金雲母・角閃石
781	弥・鉢	44.0			粗・普	良好	褐灰	ナデ・ケズリ	ナデ・ミガキ	注ぎローソ所	雲母

第735図 G区SR04出土遺物(10)(1/4)



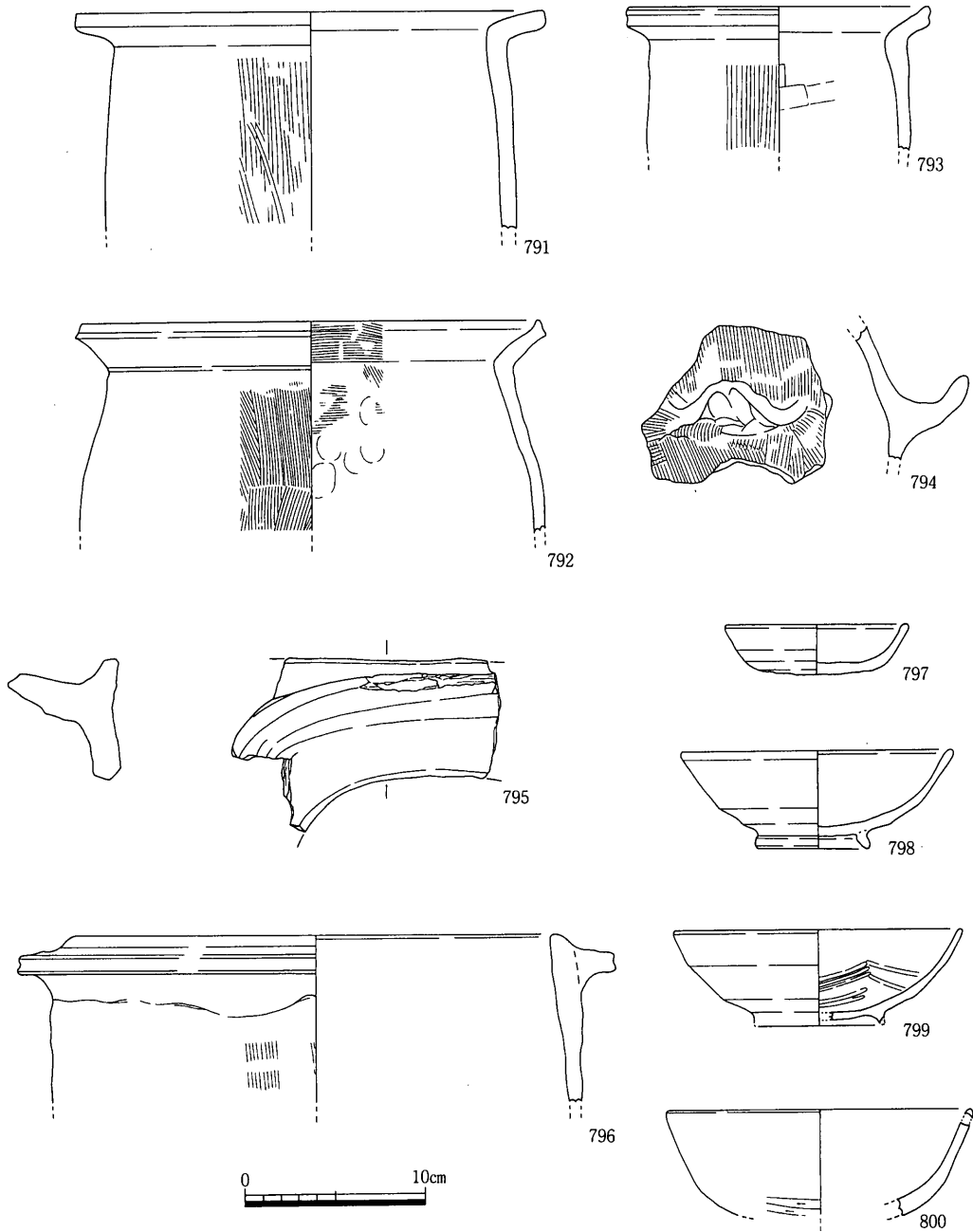
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
782	弥・甌			2.9	中・普	良好	にぶい黄橙	叩き	ナデ		雲母
783	弥・甌			3.8	中・普	良好	ゴイ黄褐・黒	ハケ目→ナデ	ナデ		
784	弥・甌			1.7	中・普	良好	橙	ナデ	ナデ		金雲母
785	弥・甌			5.0	中・普	良好	明黄褐	ハケ目→ナデ	ケズリ		
786	弥・製塩	14.0			粗・普	良好	浅黄	ケズリ	ナデ		
787	弥・製塩			4.4	細・普	良好	黒・ゴイ褐	ナデ	ナデ		雲母
788	弥・ミニ	2.8	5.7	2.3	中・普	良好	浅黄	ナデ	ナデ	手捏ね整形	
789	弥・ミニ	7.6	5.2	3.3	中・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目・ナデ	ナデ		
790	弥・ミニ	5.2	6.1	2.7	細・少	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ		

第736図 G区SR04出土遺物(11)(1/4)

の可能性がある。779は体部は内湾し、口縁部は上面に面をもち外面には凹線が巡っている。780は体部は直線的で口縁部はやや内傾して立ち上り、上部に幅広の面をもつ。口縁部端部の内側を拡張し、上面に櫛描き波状文を配している。781は口縁部はやや内傾しており注ぎ口が1箇所作り出されている。

782～785は甌である。いずれも底部のみの破片で底部中央部に穿孔されている。786は製塩土器で、体部は直線的で口縁部は緩く内湾して上方を向く。外面全体にヘラケズリを施している。788～790はミニチュア土器である。788は手捏ね整形で、口縁部は内傾し屈曲部やや上に2個1組の穿孔が2組あり、この孔に紐を通して使用したのかも知れない。789はコップ形で底部は安定した平底である。口縁部は肥厚し体部外面にはハケ目を施している。790は体部外面にはハケ目を施し、口縁部と内面には指押さえ痕が顕著である。

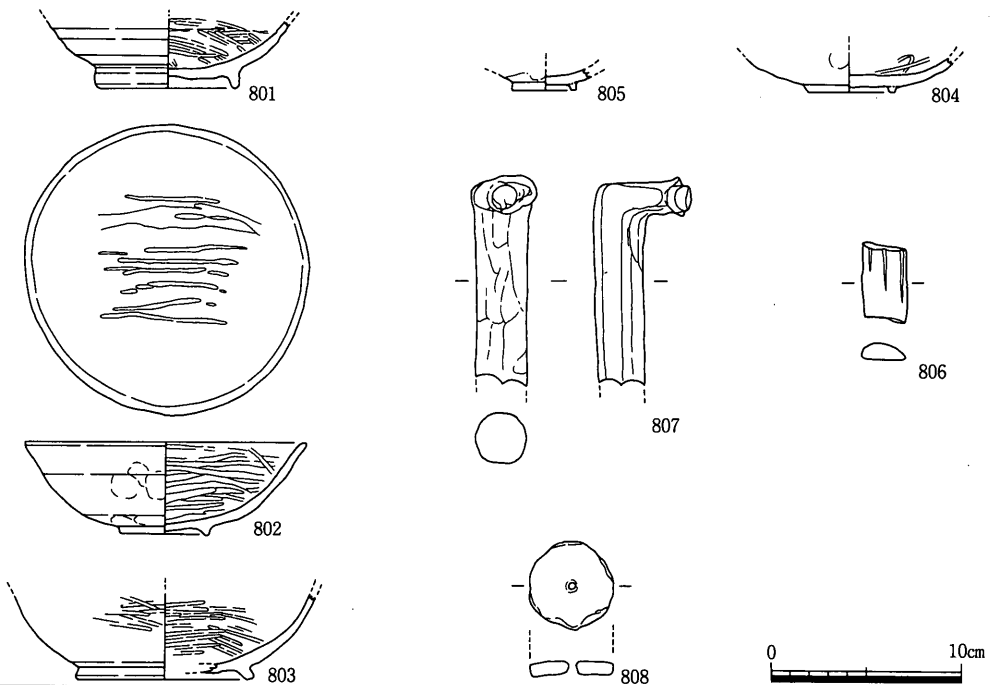
791～860は上層出土の土器である。791～793は土師器甕で、791・793の体部は直線的である。792は口縁部内面にもハケ目を施している。796は土師質土釜で口縁部直下に断面方形の鐙状突帯を貼り巡らせている。798は土師器碗で、体部は内・外面ともナデている。底部には外側に踏張る丸味を帯びた高台が付く。799は土師器碗で体部内面にはヘラミガ



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
791	土・甕	26.0			粗・普	良好	にぶい黄橙	ハケ目	ナデ	外面に粗いハケ目	
792	土・甕	25.4			粗・普	良好	灰黄	ハケ目	ハケ目→ナデ		器母
793	土・甕	16.4			粗・普	良好	黒褐・黒	ハケ目	ナデ	内・外面に煤付着	器母
794	土・甕				中・普	良好	淡橙・灰黄	ハケ目	ナデ		
795	土・甕				粗・普	良好	黄橙～黒	ナデ	ナデ		
796	土・土釜	26.6			中・普	良好	灰・橙	打・ハケ目→打	ナデ		器母
797	土・杯	10.0	2.8	6.8	精緻	良好	コブイ橙～橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
798	土・碗	14.8	5.4	6.0	中・多	良好	にぶい橙	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
799	土・碗	16.0	5.2	7.3	細・少	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	暗文	
800	縄・浅鉢?	17.0			中・普	良好	灰黄	ナデ・ケズリ	ナデ	口縁に穿孔1ヶ所	

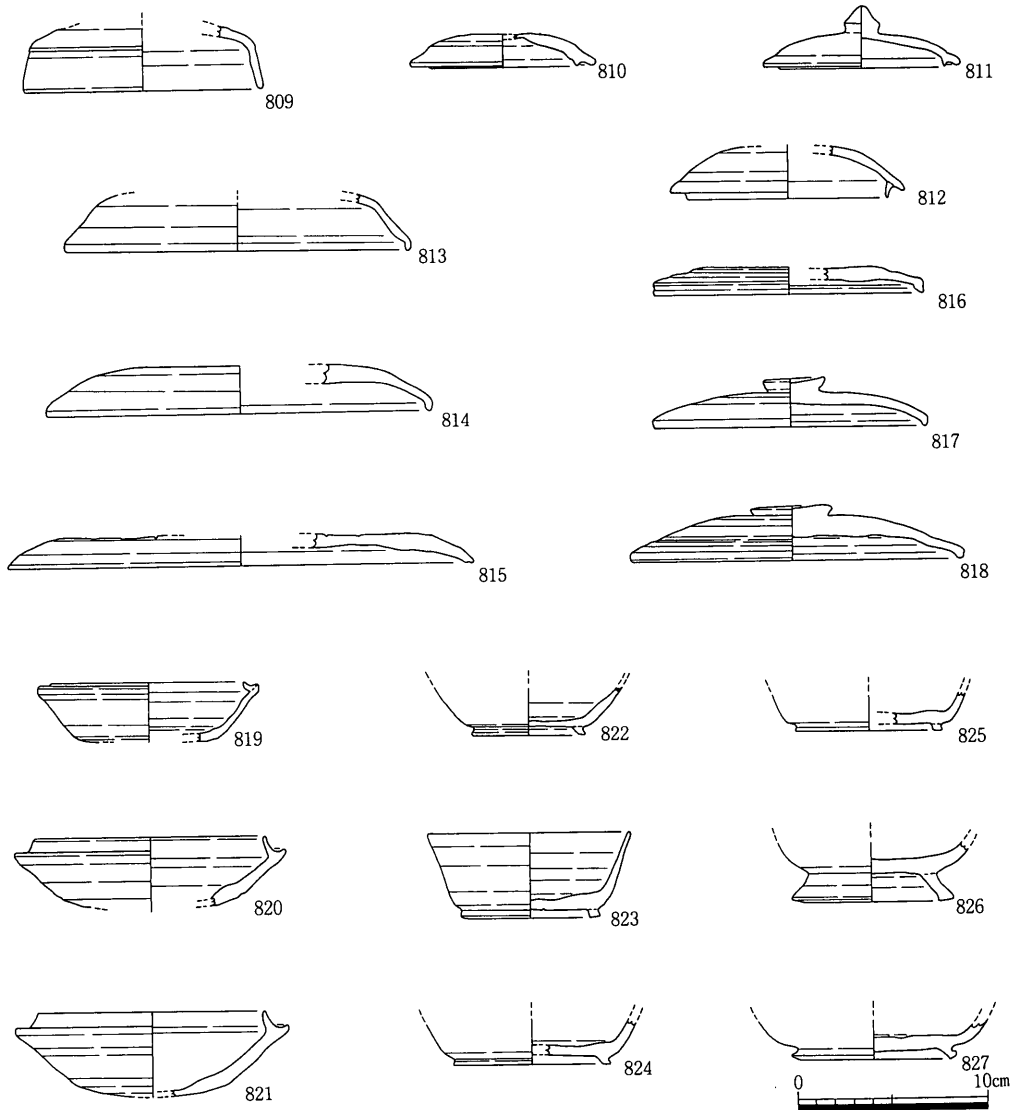
第737図 G区SR04出土遺物(12)(1/4)

キが見られる。800は鉢であるが胎土は粗く底部付近にはヘラケズリを施す。口縁部に1箇所穿孔されている。縄文時代晩期のものの可能性が高い。801は黒色土器A類の椀で、内面にヘラミガキを施している。底部には直立する断面方形の高台を貼り付ける。802は黒色土器B類の椀で、体部内面に幅広のヘラミガキを見込み部には直線を、体部には円状にそれぞれ施している。803は黒色土器B類の椀で、体部は摩滅しているが本来は細かいヘラミガキを丁寧に内・外面に施している。高台は外開きになっている。804は瓦器椀で、内面には暗文が施され外面には指押さえ痕が見られる。高台は断面方形の小さなものを貼り付けている。和泉型のものと考えられる。805は青磁碗で龍泉窯系のものと思われる。806は青磁で四耳壺あるいは水注の把手と思われ、両面に施釉されている。807は付属する器種は不明であるが把手と考えられる。先端部は中央に丸い突出部を設けており、ここで接合するものと思われる。断面は円形で全体に面取り調整を行なっている。808は土製紡錘車で中央部に両面から穿孔している。



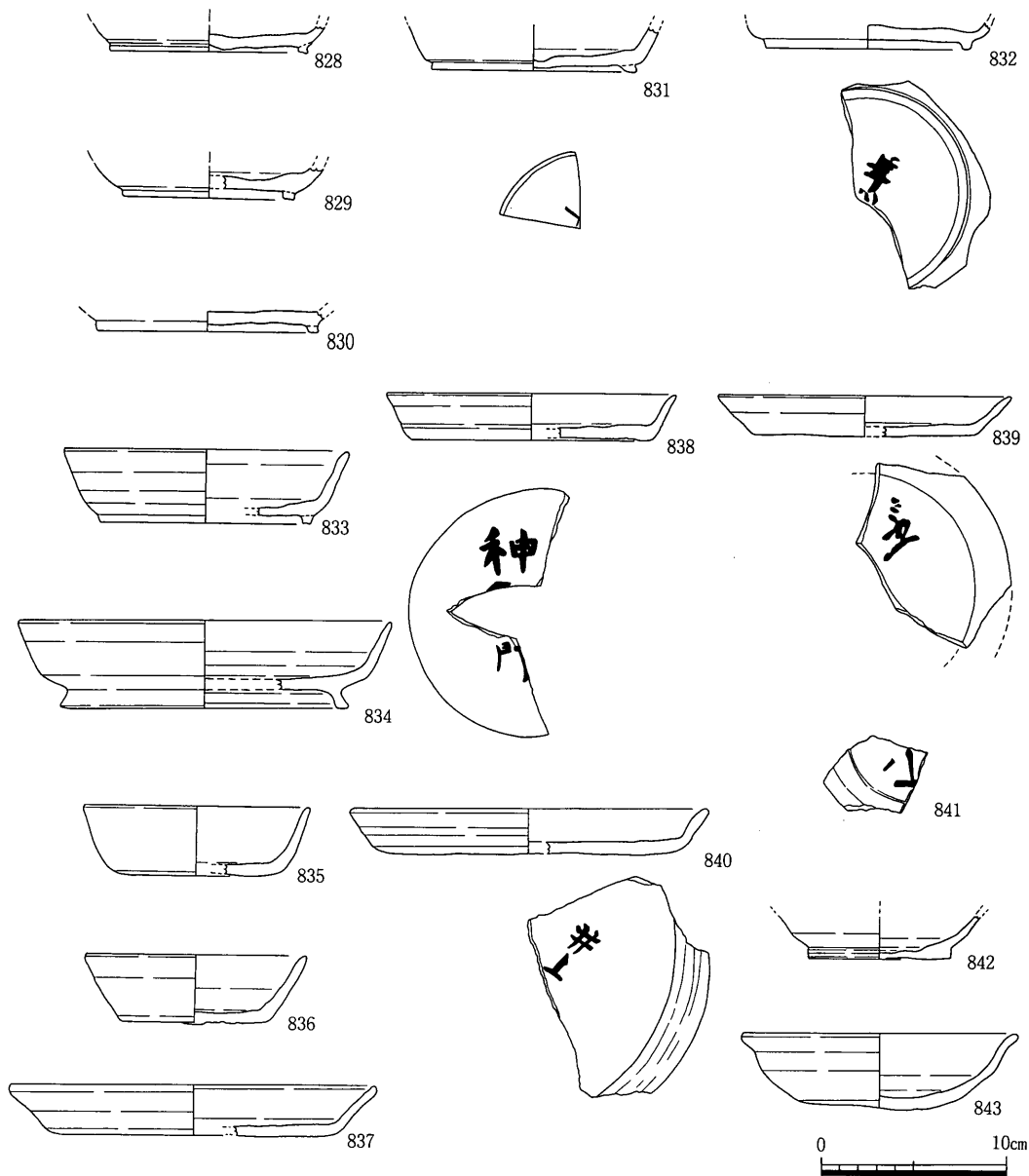
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法的特徴	備考
801	黒A・椀			7.1	精緻	良好	黒・褐灰	ナデ	ミガキ	底へラ切り・ナデ	
802	黒B・椀	14.8	4.8	4.7	細・普通	良好	黒	ナデ	ミガキ	暗文	
803	黒B・椀			8.7	細・多	良好	黒	ミガキ	ミガキ		
804	瓦・椀			4.5	微・普通	良好	灰白・灰	ナデ	ナデ・ミガキ	暗文	和泉型
805	青・碗			3.3	微・普通	良好	灰白	ナデ	ナデ		龍泉窯
806	青・四耳壺				精緻	良好	オリブ灰	不明	不明		龍泉窯
807	土・不明				中・普通	良好	にぶい黄橙	不明	不明	面取り調整	
808	土製紡錘車	4.6	0.6		細・普通	良好	にぶい黄橙	不明	不明	土器片転用	

第738図 G区SR04出土遺物(13)(1/4)



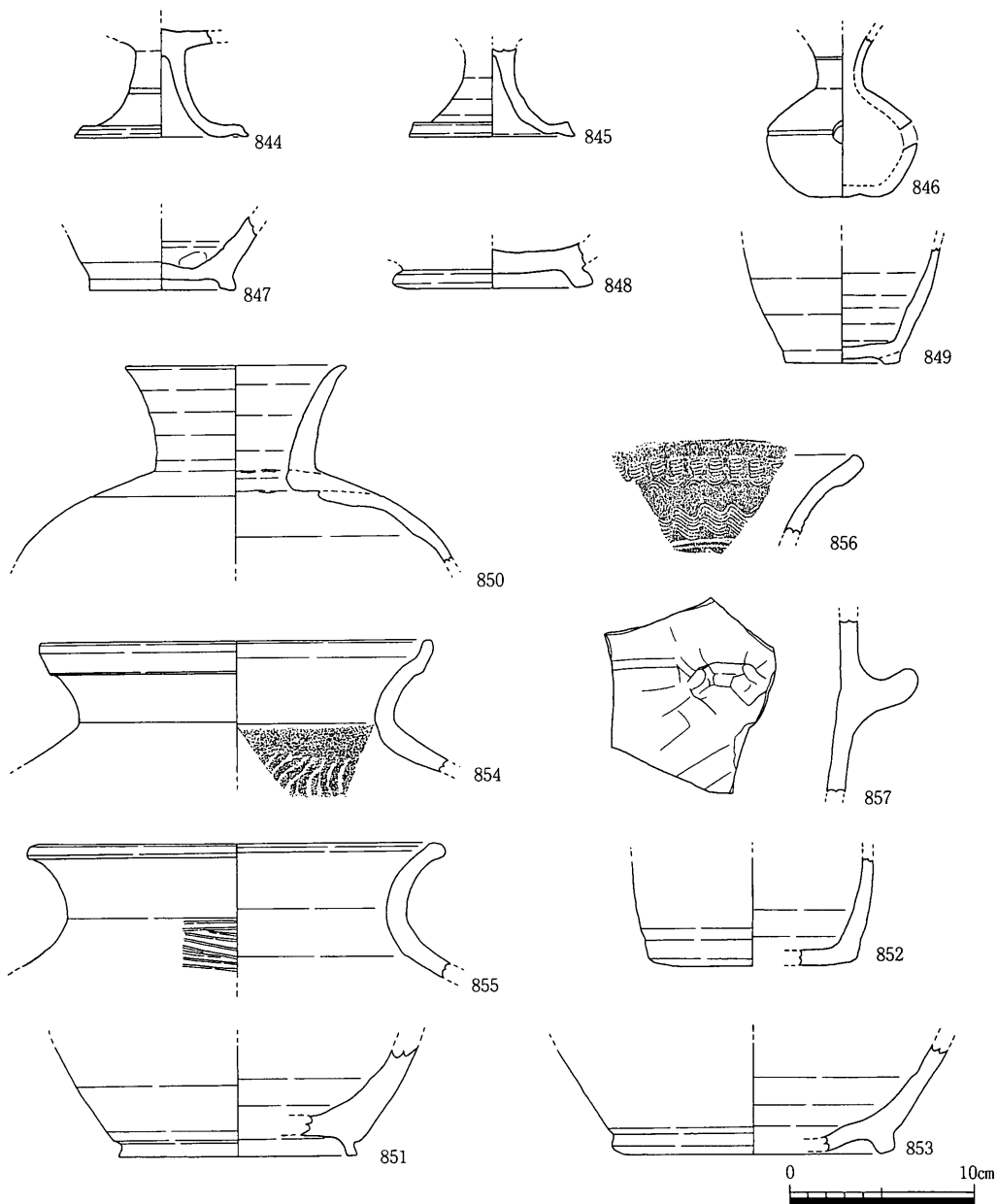
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
809	須・杯蓋	12.4		11.9	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
810	須・杯蓋	7.6	1.8		中・普	良好	青灰	ナデ	ナデ		
811	須・杯蓋	10.4	3.1		細・普	良好	灰黄・灰	ナデ	ナデ		
812	須・杯蓋	10.5			細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
813	須・杯蓋	18.0			微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
814	須・杯蓋	20.0	2.5		中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
815	須・杯蓋	24.4			中・普	良好	灰	打・ヌリ→ナデ	ナデ		
816	須・杯蓋	14.2	1.4		細・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
817	須・杯蓋	14.2	2.6		中・普	良好	灰白	ナデ・ケズリ	ナデ		
818	須・杯蓋	17.6	2.9		中・普	良好	灰白	ナデ・ケズリ	ナデ		
819	須・杯身	10.1			細・少	良好	灰白	ナデ・ケズリ	ナデ	立上り部後で付着	
820	須・杯身	14.2			精緻	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
821	須・杯身	11.0			微・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
822	須・杯			5.9	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
823	須・杯	10.6	4.4	6.2	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
824	須・杯			8.2	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ		
825	須・杯			7.7	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
826	須・杯			7.3	中・少	良好	灰	ナデ	ナデ	足高の高台	
827	須・杯			8.7	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へラ切り	

第739図 G区SR04出土遺物(14)(1/4)



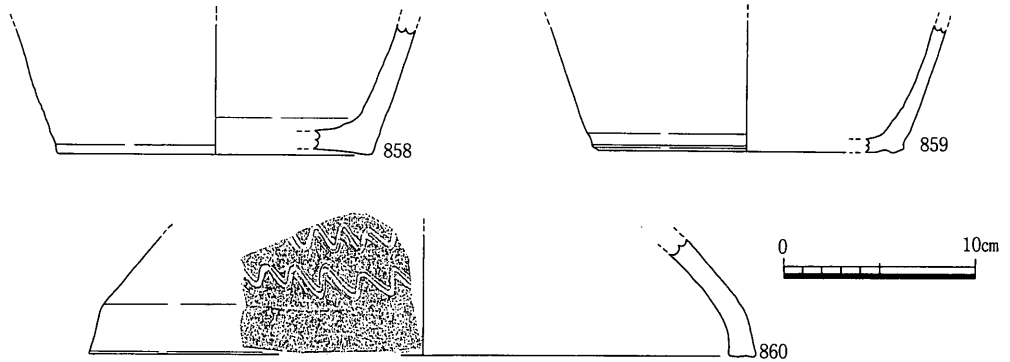
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
828	須・杯			10.6	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
829	須・杯			9.1	微・普	良好	灰白・灰	ナデ	ナデ		
830	須・杯			11.9	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
831	須・杯			11.0	微・普	良好	黄灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	墨書
832	須・杯			11.0	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		墨書
833	須・杯	15.3	3.8	11.4	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
834	須・杯	20.0	4.7	15.6	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ		
835	須・杯	12.2	3.7	9.0	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
836	須・杯	11.8	3.7	7.8	細・普	良好	暗灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
837	須・皿	19.6	2.7	15.0	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
838	須・皿	15.6	2.4	13.0	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		墨書「神口門」
839	須・皿	15.8	2.1	11.9	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ		墨書「口立」?
840	須・皿	19.4	2.5	15.4	細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		墨書「井上」
841	須・皿				精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ		墨書
842	須・碗			7.7	細・少	良好	灰褐・灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り、くり出し高台	
843	須・杯	14.9	4.1	8.7	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	

第740図 G区SR04出土遺物(15)(1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
844	須・高杯			9.4	微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
845	須・高杯			9.0	細・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
846	須・ハ			3.5	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	体部中央に透し穴1個	
847	須・壺			9.8	中・普	良好	灰	ナデ・ケズリ	ナデ		
848	須・壺			10.7	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
849	須・壺			6.2	中・少	良好	灰	ナデ	ナデ		
850	須・壺	12.0			精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ		
851	須・壺			12.9	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	内面釉の落ちた跡有り	
852	須・壺			10.6	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
853	須・壺			15.4	精緻	良好	灰	ナデ	ナデ		
854	須・甕	20.7			精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	外面に釉附着	
855	須・甕	22.7			中・普	良好	灰白	叩き→ナデ	ナデ		
856	須・甕				精緻	良好	灰	ナデ	ナデ	外面に櫛描文	
857	須・甕				中・普	良好	灰・灰白	ナデ	ナデ		

第741図 G区SR04出土遺物(16)(1/4)

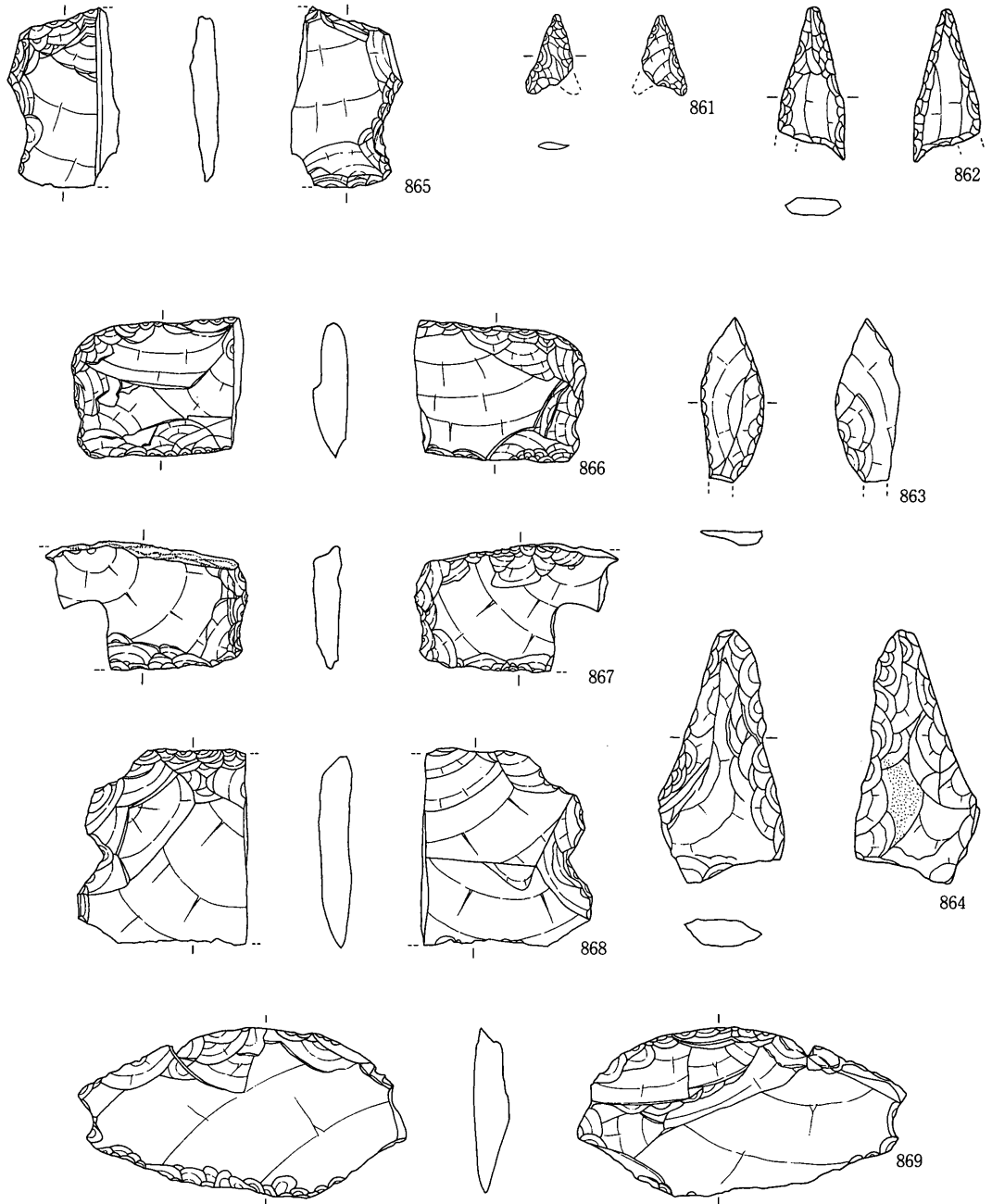


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
858	須・壺			16.4	粗・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底へラ切り→ナデ	
859	須・壺			16.4	中・普	良好	灰	ナデ	ナデ		
860	須・器台			35.0	細・普	良好	灰白・灰	ナデ	ナデ	外面に櫛描き波状文	

第742図 G区SR04出土遺物(17)(1/4)

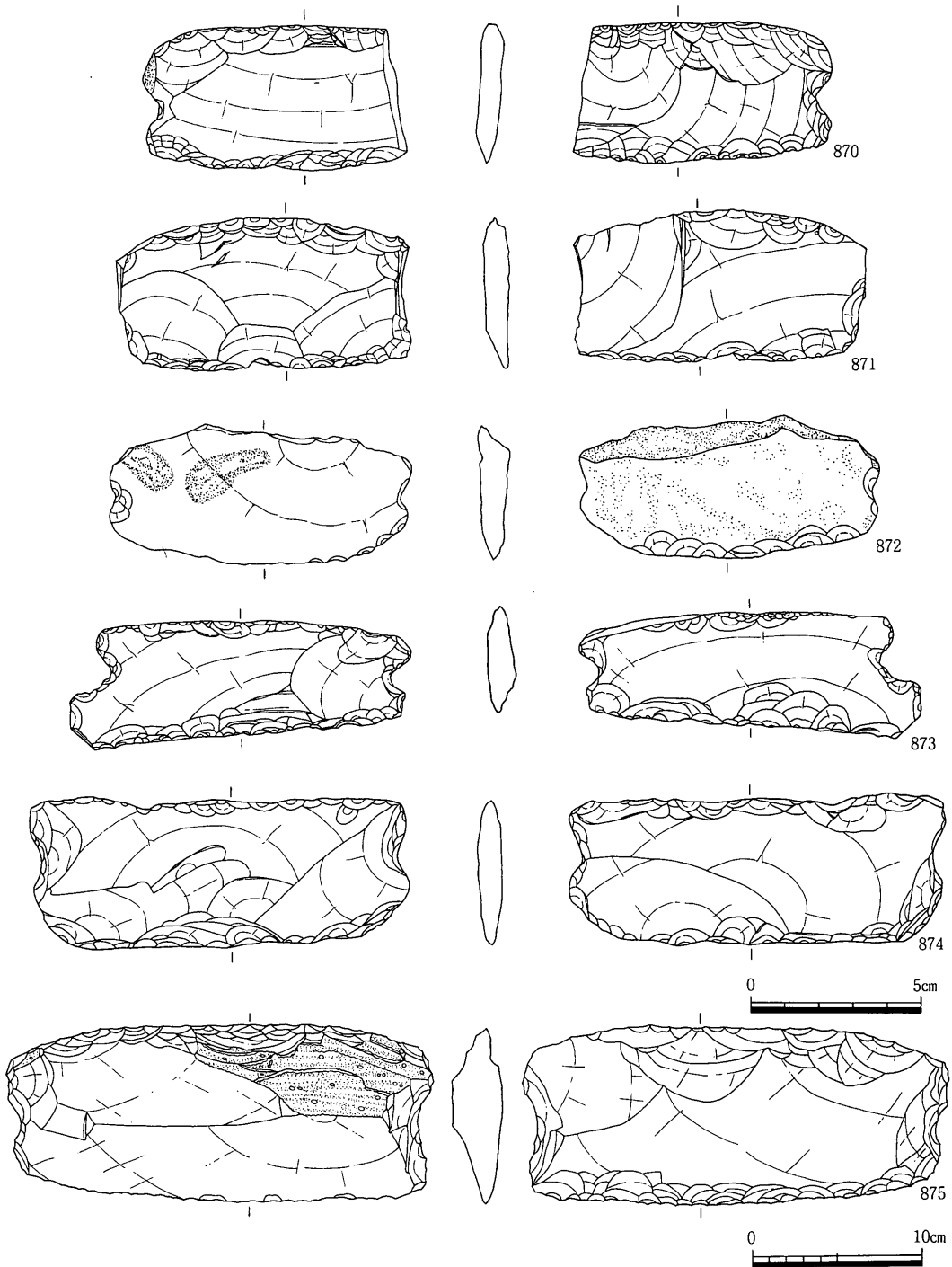
809～860は須恵器である。809～818は杯蓋である。809は口縁部は直線的で天井部との境には沈線が巡る。810～812は口縁部内側にかえりの付くもので、特に812の内面のかえりは口縁部端部より大きく突出している。813・814・816～818は口縁部端部を下方へ拡張し外側に面を作る。819～821は杯身で、819は立ち上りは短く口縁部端部から若干突出する程度である。底部は大部分は欠損しているが平底と思われる。822～836は杯で、823は体部は直線的で口径の割に器高が高くなっている。826は底部に外開きの足高の高台が付く。828～833は体部立ち上り部付近に高台が付く。832の底部外面には墨書が2文字分確認出来たが字句は不明である。834は体部立ち上り部の内側に高台が付くものである。835・836は平底のもので、底部はへら切りとなっている。837～841は皿でこのうち838～841の底部外面に墨書が確認された。838の墨書は「種□門」と読み、いわゆる門という施設を表している可能性が高い。839は2文字と思われるが字句は不明である。「□立」であろうか。840は「井上」と読める。841は1文字の断片で字句は不明である。842は椀で底部は高台状に突出する。843は胎土は灰白色で十瓶山産の瓦質土器に似た胎土をしている。口縁部は緩く外反している。846は甗で、やや扁平な体部中央に沈線を1条巡らせた後に円形の透し穴を施している。847～853・858・859は壺である。850は体部上半は丸味を帯びており、頸部は緩く外反している。体部と頸部の接合痕が内面に顕著に残る。851は体部立ち上り部が肥厚する。859は体部立ち上り部に断面方形の小さな高台が外向きに付く。854は甕で口縁部端部は上方に屈曲し外側に幅広の面を作る。855は体部外面に平行叩きを施しているが後にナデしているため潰れている。860は器台の脚部で裾部は緩く屈曲し底部はしっかりと接地している。外面に櫛描き波状文を施している。

861～895は石器で下層から出土している。861～863は石鏃である。861・862は凹基の打製石鏃で、862は中央部に剥離面を残し縁辺部に調整加工を加えている。全長4.1cm、重さ3.5gと大型品である。863も横長剥片を利用した石鏃と考えられる。縁辺部を加工し先端を鋭利にし、基部は欠損しているが凸基と思われる。これも全長4.5cm、重さ3.1gの大型品である。864は石槍の未製品で、先端部はある程度形が整っているが、基部のほうは加工途中である。865～875は打製石庖丁である。865は大部分は欠損しているが側辺に抉りを入れている刃部は片面から加工している。866・867は側辺の抉りは僅かに意識する程度である。刃部は両者とも直線となっている。868は現存部で刃部には剥離調整は認められず、背部の片面に認められる。869は背部、刃部ともに外湾し、両側に緩く抉りを入れている。刃部は片面加工となっている。870は刃部、背部ともに両面加工となっている。871は両側に抉りは認められず、背部は外湾している。872は母岩からの最初の剥片を利用しており、片面全体に自然面が残る。両側に抉りを入れ、刃部は緩く外湾し片面調整で背部は未調整となっている。安山岩を利用している。873は両側に抉りを入れるが片側の抉りは側辺の上側全体を打ち欠いている。刃部と背部は平行になっていない。874は長方形で両側に抉りを入れており、刃部、背部ともに両面加工である。875は刃部は片面加工で、刃部の片面には大きな斜めの剥離面がある。876は磨製石庖丁の未製品である。平面形は楕円形で全体の形は整えているが研磨は途中となっている。刃部は外湾しており、背部側中央やや側辺寄りに紐部の穿孔を1つ施しかけているが、最初の段階で放棄しており貫通していない。安山岩製である。877～881はスクレーパーである。878は打製石斧の欠損品とも考えられるが、上部両端部が欠損しているが、上部中央部に打点を伴う剥離面があるため上部両端部が欠損したスクレーパーと判断した。上部以外の周辺に加工を施している。880は石庖丁とも考えられるが、両側が対称ではなく特に片側は不整形であるためスクレーパーと判断した。下部に刃部を作り出している。882～887は磨製石斧である。882は柱状片刃石斧と思われ、結晶片岩製である。884は上端部の破片で柱状片刃石斧の可能性が高い。885は柱状片刃石斧の先端部で縦方向に割れている。887は柱状片刃石斧で、刃部に使用痕と考えられる擦痕が認められる。結晶片岩製である。888は打製石斧の刃部と考えられ、特に下端部の刃部に丁寧に調整を加えている。889は石鎌で刃部はほぼ直線で両側から加工している。柄との接合部には両側から抉りをいれて紐を巻き付け易いようにしている。890は石匙で体部は正三角形となっている。891は横長剥片で翼状剥片に近いが、翼状剥片にしては側縁に表れている打面作成痕が丁寧すぎるように思われる。892は縦長剥片



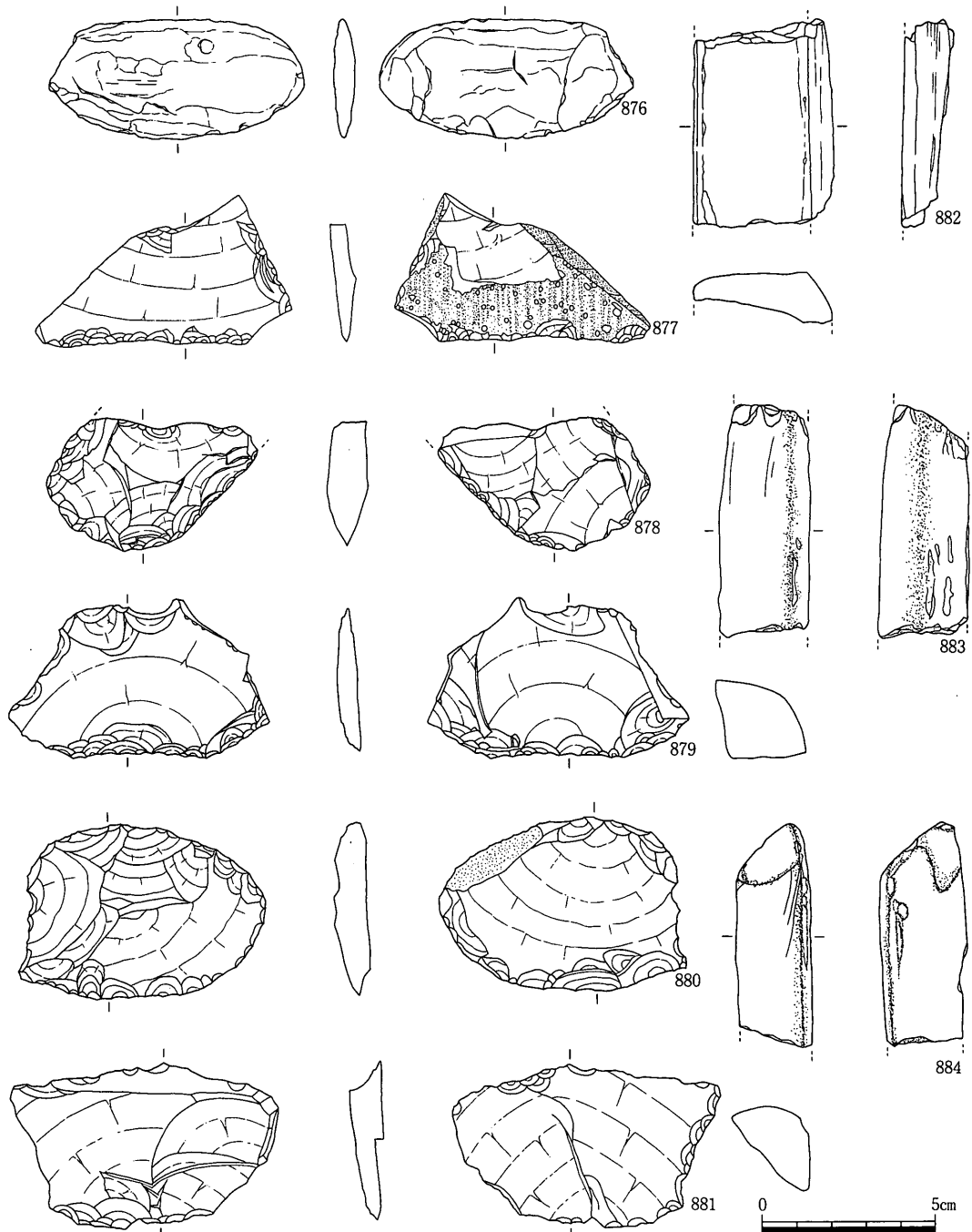
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
861	石鏃	2.2	1.2	0.2	0.5	サヌカイト		
862	石鏃	4.1	1.9	0.4	3.5	サヌカイト		
863	石鏃	4.5	1.8	0.3	3.1	サヌカイト		
864	石箱	6.8	3.5	0.8	20.3	サヌカイト	未製品	
865	打製石胞丁	3.0	4.9	0.6	13.6	サヌカイト		
866	打製石胞丁	4.8	3.6	0.1	26.2	サヌカイト		
867	打製石胞丁	5.8	3.6	0.9	22.8	サヌカイト		
868	打製石胞丁	4.8	5.5	0.9	31.4	サヌカイト		
869	打製石胞丁	9.1	4.8	1.0	42.2	サヌカイト		

第743図 G区SR04出土遺物(18)(1/2)



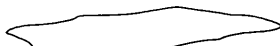
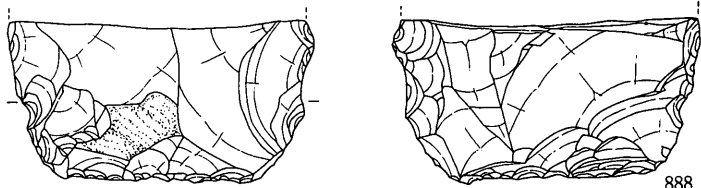
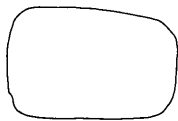
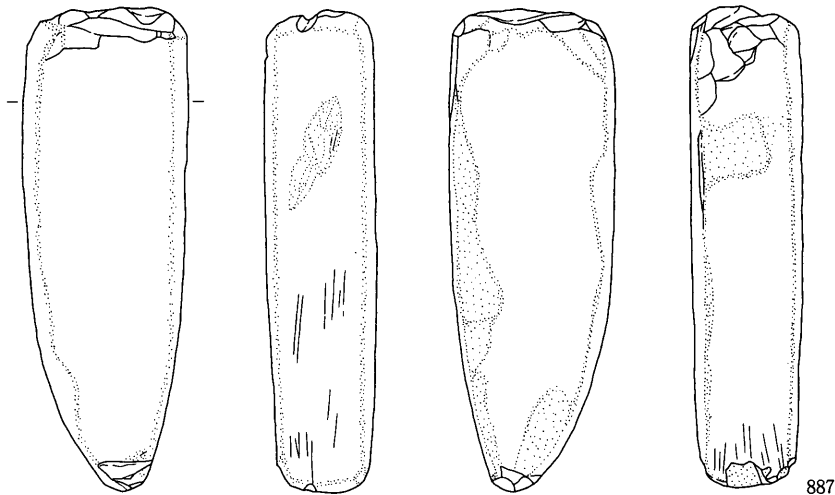
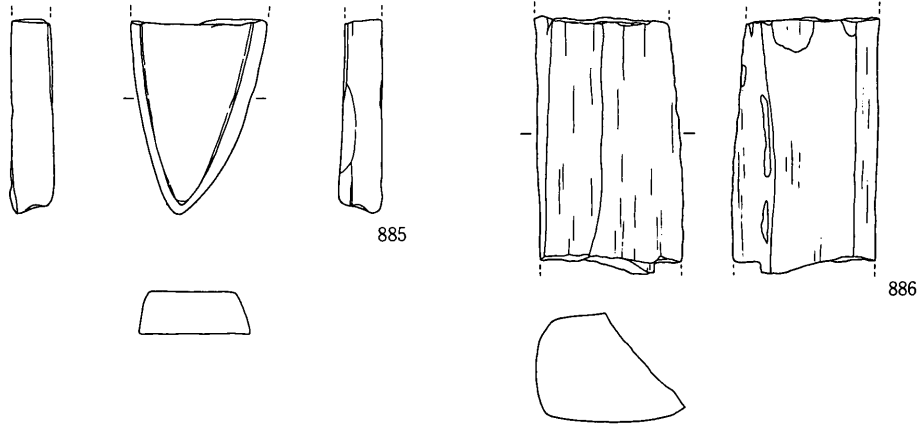
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
870	打製石胞丁	7.4	4.1	0.8	38.9	サヌカイト		
871	打製石胞丁	8.6	4.4	0.8	41.3	サヌカイト		
872	打製石胞丁	8.7	3.8	0.9	39.9	安山岩		
873	打製石胞丁	10.0	3.5	0.8	35.2	サヌカイト		
874	打製石胞丁	11.0	4.4	0.8	58.3	サヌカイト		
875	打製石胞丁	12.5	5.1	1.5	111.6	サヌカイト		

第744図 G区SR04出土遺物(19)(1/2, 1/4)



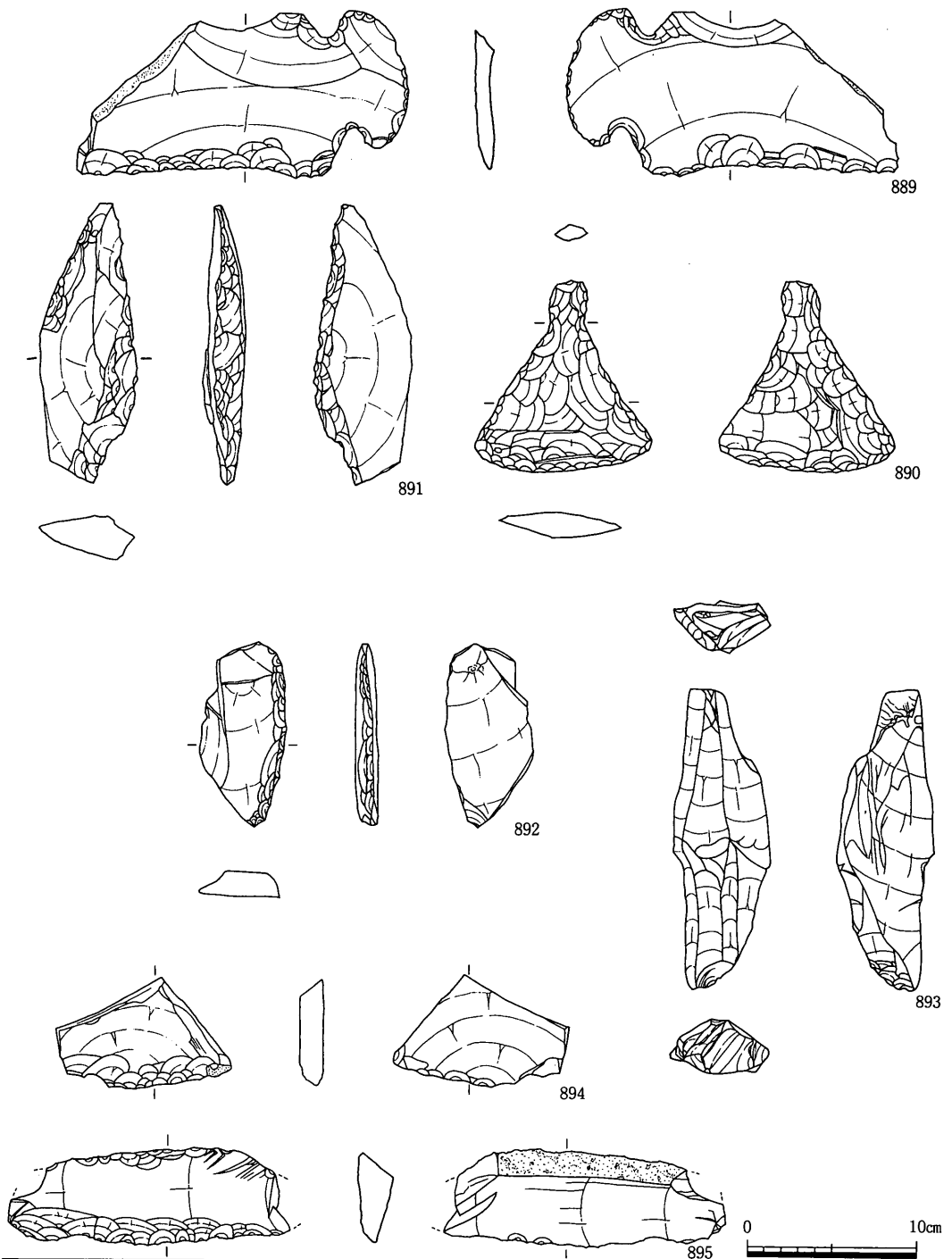
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
876	磨製石庖丁の未製品	14.7	6.7	1.3	141.2	安山岩	穿孔を1ヶ所施しかけてやめている	
877	スクレイパー	13.9	8.2	0.1	159.1	サヌカイト		
878	スクレイパー	3.6	5.6	1.2	26.9	サヌカイト		
879	スクレイパー	7.5	4.5	0.6	29.5	サヌカイト		
880	スクレイパー	7.2	5.0	0.9	38.3	サヌカイト		
881	スクレイパー	7.6	4.6	0.9	29.7	サヌカイト		
882	柱状片刃石斧	5.6	4.0	1.4	46.3	結晶片岩		磨製
883	磨製石斧	6.4	2.6	2.2	68.2	緑泥片岩		磨製
884	柱状片刃石斧	6.4	2.2	2.1	56.2	緑泥片岩		磨製

第745図 G区SR04出土遺物(20)(1/2)



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
885	柱状片刃石斧	5.0	3.6	1.1	36.3	緑泥片岩		磨製
886	柱状片刃石斧	6.6	3.8	2.9	146.4	緑泥片岩		磨製
887	柱状片刃石斧	12.6	4.3	2.9	345.4	結晶片岩		磨製
888	打製石斧	4.2	8.1	1.1	49.2	サヌカイト		

第746図 G区SR04出土遺物(21)(1/2)



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
889	石鏃	9.2	4.6	0.6	30.9	サヌカイト	柄を作り出す	
890	石匙	5.3	5.3	0.8	16.2	サヌカイト		
891	横長剥片	7.9	2.9	1.2	23.4	サヌカイト		
892	二次加工のある剥片	5.4	2.6	0.7	11.6	サヌカイト		
893	石核再生剥片	8.8	2.9	1.6	31.2	サヌカイト	両設打面石核の剝離面の再生剥片	縦長剥片石核
894	二次加工のある剥片	5.0	3.2	0.7	13.7	サヌカイト		
895	二次加工のある剥片	8.2	2.8	1.0	28.3	サヌカイト		

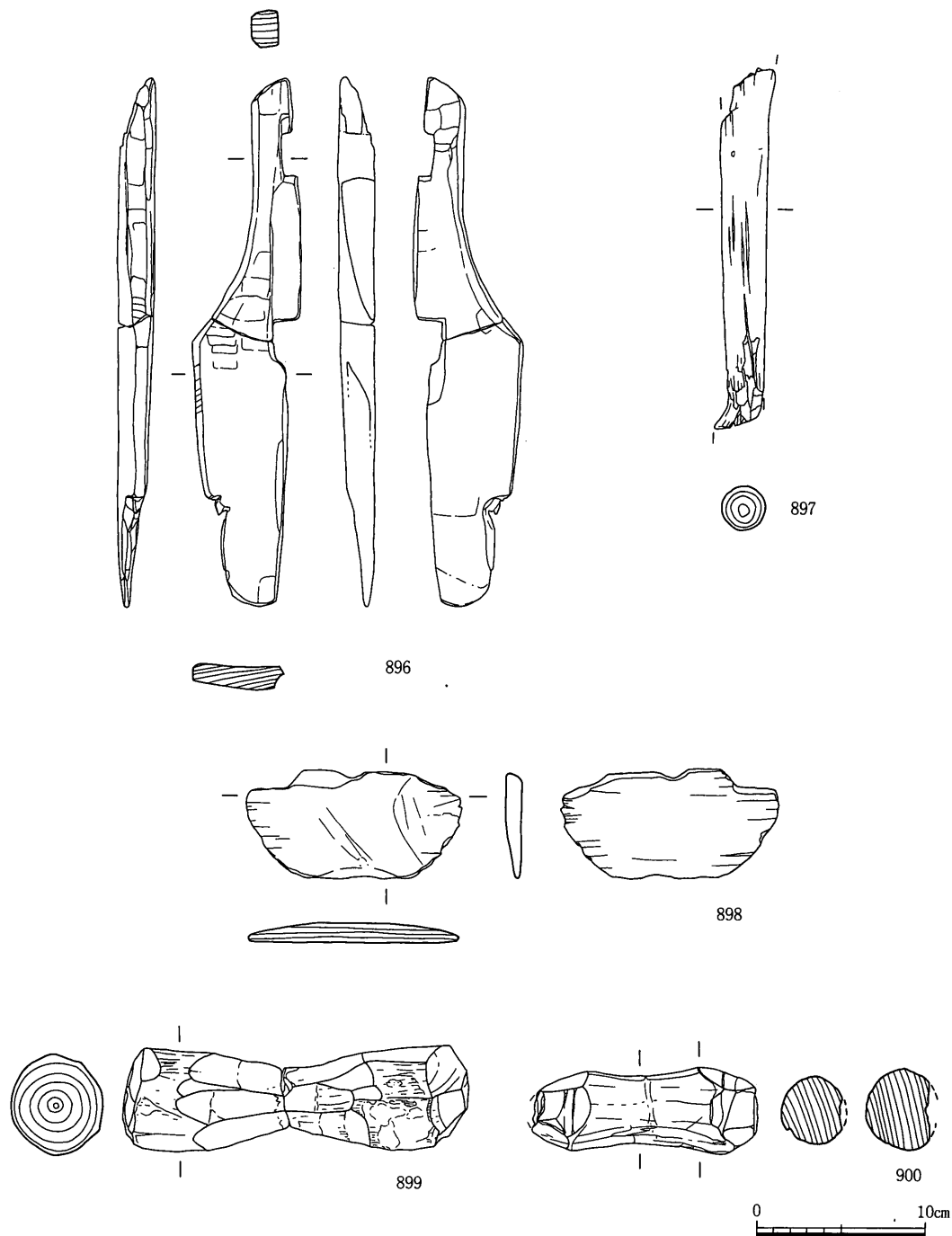
第747図 G区SR04出土遺物(22)(1/4)

の側縁に二次加工を加えているものである。893は両設打面をもつ石核の剥片剥離面の再生剥片である。剥片の背面には上下から剥片を剥離した痕跡が残っている。

896～1190は木器であるが896～900は下層から出土で、901～1190は上層から出土したものである。896は縦半分が欠損しているもので、中程を境に上半分は細くなっている。中央部と上部に方形に穿孔されているが、中央部のものは斜めに穿孔されている。この2箇所の穿孔部には柄を挿入して用いた鋏と思われる。着柄部が2箇所あることになるが、斜めの部分は支え部分か泥除けを装着した可能性がある。側縁部の下部が段状に抉れているが、これは刃部に鉄の刃を装着した痕と考えられる。897は農耕具の柄の部分と思われる。柄の先の握り部を太くしている。898は木庖丁で、刃部は外湾し背部はほぼ直線となっている。背部中央部には中指が当たる部分が抉られており、持ちやすいようになっている。899・900は木錘で中央部を削って細くしており、両端部も面取り加工している。

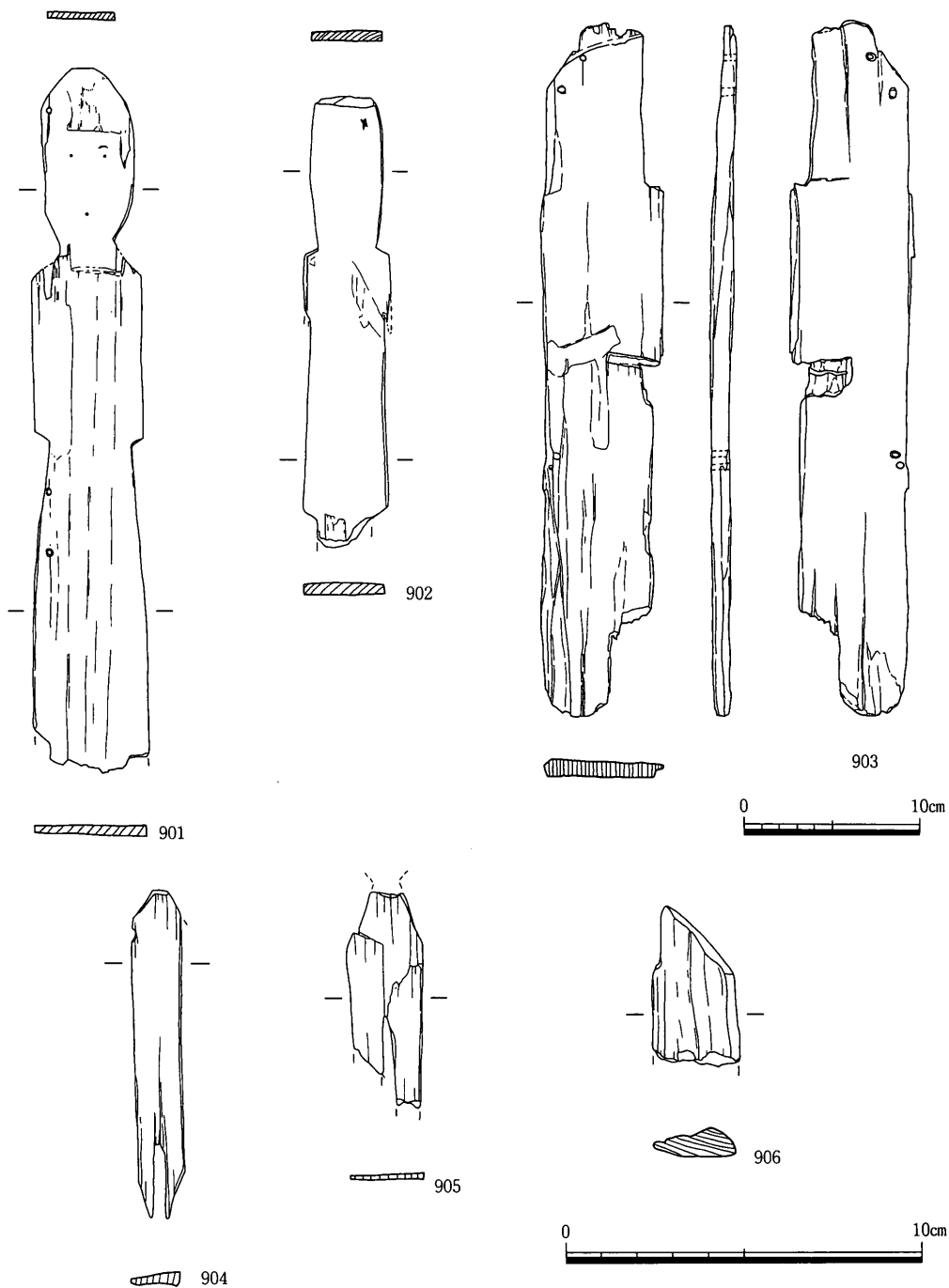
901～905は人形である。901は頭部を楕円形に作り出し、螺髪状の頭髪と顔を描いている。肩部は撫で肩に削り出し、胴部中程で削り欠いているが明確な腕は表現されていない。下部は欠損しているため二又に切って足を作り出しているかは不明である。胴部中程の削り部のやや下の側縁部に2つ穿孔が認められる。902は頭部は長楕円形であるが肩部側の削りは弱い。頭部に顔は書かれていないが一部に墨の痕跡がある。また頭部の上側は斜めに加工している。肩はやや撫で肩に削り、肩から3cmほど下に、下方から切り込みを入れて手を表現しているがその大部分は欠損している。下部は欠損して足を作り出しているかどうかは不明であるが、下半で内側に向って削りを入れている。903は上下が欠損しており全体の形状は不明である。幅も完全に残っている部分で6.8cmで短冊形の板材を利用している。上部は残っている部分は斜めに削っており、斜めの部分に2個の穿孔が認められる。また中程やや下側の側縁部にも穿孔が2箇所施されており、上部の斜めの部分を肩部とみれば、上の欠損部に頭部がつく人形の可能性が高い。904は現存長9.1cmほどの小型の人形で、下部は2又に足を作り出し端部は外から削って鋭利にしている。上部は両側を斜めに削っており、上端部は摩滅しており上に頭部が付くかは不明であるが、先端やや下方の抉りが頭部を意識しているのかも知れない。905も小型の人形で肩部はかなり撫で肩に削っており、そのすぐ下から足を削り出している。頭部は欠損している。906は刀形の切っ先部と思われる。

907～1083は斎串で、このうち907～913・916～920は上端部を圭頭状にして、側縁部に切り掛けを施さないものである。907～913は下半は欠損しており全長は不明であるが、幅



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
896	鉄	29.7	5.4	2.2	板目		
897	柄 (農耕具の柄)	20.3	2.8	2.5	芯持		
898	木庖丁	6.3	12.7	1.1	板目		
899	木錘	20.4	5.8	5.8	芯持		
900	木錘	13.2	4.8	3.6	柃目	両端部を鉛筆状に加工	

第748図 G区SR04出土遺物 (23) (1/4)

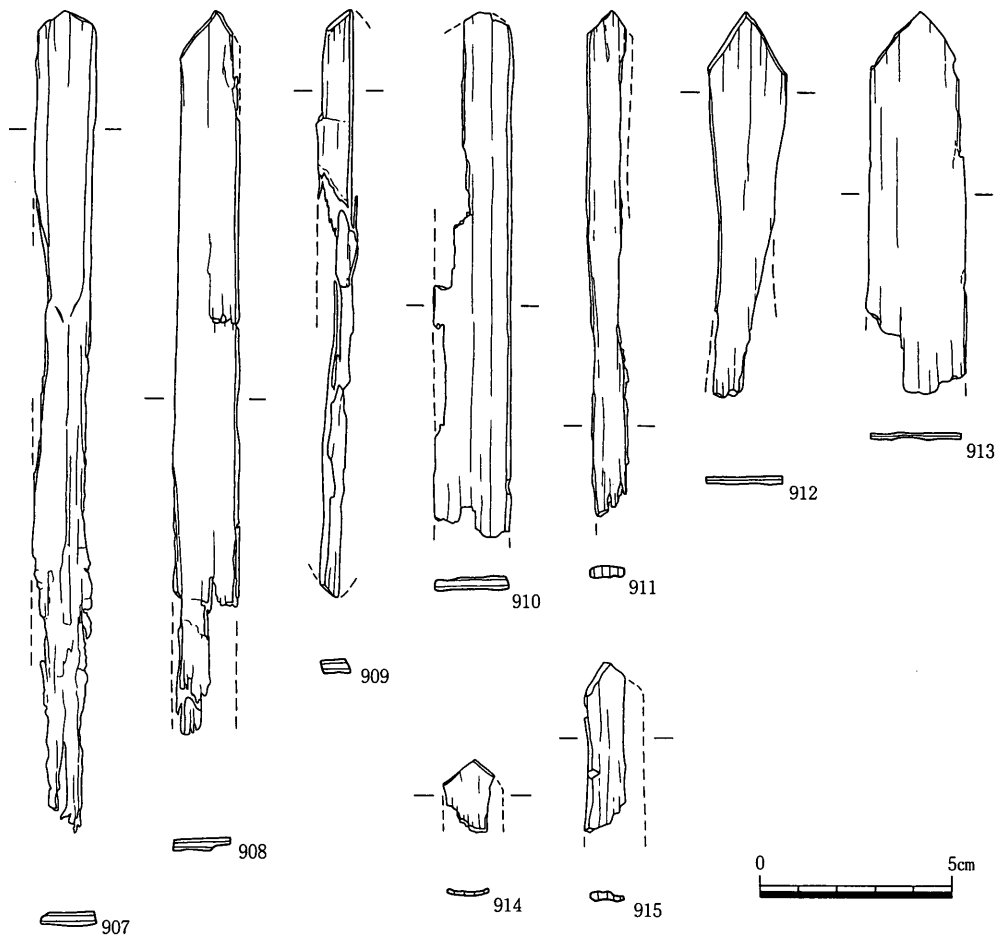


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
901	人形	39.1	6.3	0.6	柾目		
902	人形	24.9	4.8	0.8	柾目		
903	人形	38.5	6.7	1.0	柾目	穿孔の1ヶ所に紐が残る	
904	人形	9.1	1.4	0.4	柾目	下端が二股に分かれる	
905	人形	6.0	2.1	0.1	柾目		
906	刀形(?)	4.4	2.4	0.8	板目	先端部を斜めに切り落としている	

第749図 G区SR04出土遺物(24)(1/2, 1/4)

は1.5~2.0cmほどである。916~918はほぼ完存しており下端部は剣先状に尖らせている。920は上端部の切り込みは深く剣先に近くなっており、下端部は剣先状になっている。914・915は上端部のみ破片で圭頭状になっている。

921~936は上端部を圭頭状にして、側縁部に切り掛けを1対施すものである。921・922・924~926・929・930は上端部を圭頭状に削った部分に切り掛けを1対施しているものである。このうち921・929が切り掛けを2回施している他は1回の切り掛けとなっている。



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
907	斎串	21.5	1.6	0.4	板目		
908	斎串	15.9	1.7	0.3	板目		
909	斎串	9.5	1.0	0.4	板目		
910	斎串	13.4	2.0	0.3	板目		
911	斎串	12.9	1.0	0.3	柁目		
912	斎串	9.7	2.0	0.2	板目		
913	斎串	9.6	2.6	0.2	板目		
914	斎串	1.9	1.3	0.1	柁目		
915	斎串	4.4	1.0	0.3	柁目		

第750図 G区SR04出土遺物(25)(1/2)

927・931～936は切り掛けを上端の圭頭部のやや下に施している。936の切り掛けは基本的に1対であるが幅広い範囲に施している。あるいは下部の欠損部分に下方からの切り掛けがあった可能性がある。

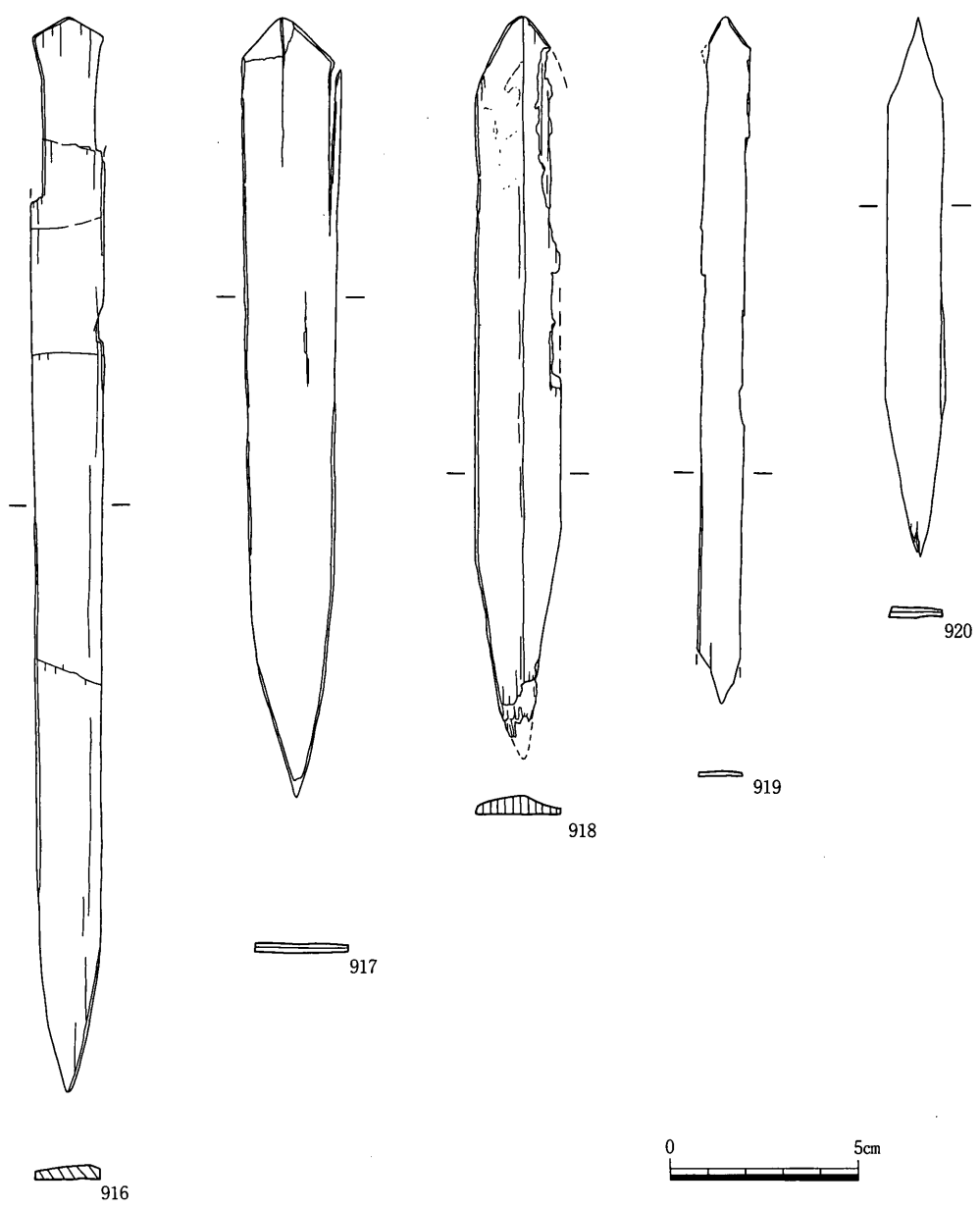
937～942は現存部で切り掛けが1対認められるが、現存部が少ないためこれ以上の切り掛けがあるかも知れない。937・938の切り掛けは2回に及ぶ。941の切り掛けは下方から施されているもので、上部に上からの切り掛けがあった可能性が高い。

943～964・966～970は上端部を圭頭状にして、側縁部に切り掛けを2対以上施すものである。943～948は全長が24cmを超える大型品で、特に943・944は30cmを超えている。943・945・947は切り掛けが4対ある。944は2対、946・948は3対の切り掛けがある。949・950は上端部の圭頭部が左右対称になっていない。950の下端部は2つに割れているが本来は剣先状になっていたものである。952は胴部のみの破片であるが下部の欠損部に切り掛けが僅かに認められ、現存で2対となっている。953の最上部の切り掛けは5回、954の最上部のものは7回とそれぞれ回数が多くなっている。955～960・963・964はいずれも下半部が欠損しているものである。957は上部の切り掛けは幅広く施されている。960は上端部の圭頭部の頂上がかろうじて残っている。964は圭頭部は左右対称になっておらず幅も2.6cmと広がっている。961・962は胴部の破片で、962は現存で切り掛けが1対であるが、切り掛けの回数や他のものと比較しても、切り掛けは2対以上あるものと思われる。965～970は上部が欠損しているもので、下端部は剣先状に尖らせている。いずれも現存部だけで30cm前後で、本来はすべて30cmを超える大型品であったと考えられる。

965は幅が狭くなっており明瞭な切り掛けは認められない。下端部は剣先状に尖らせている。

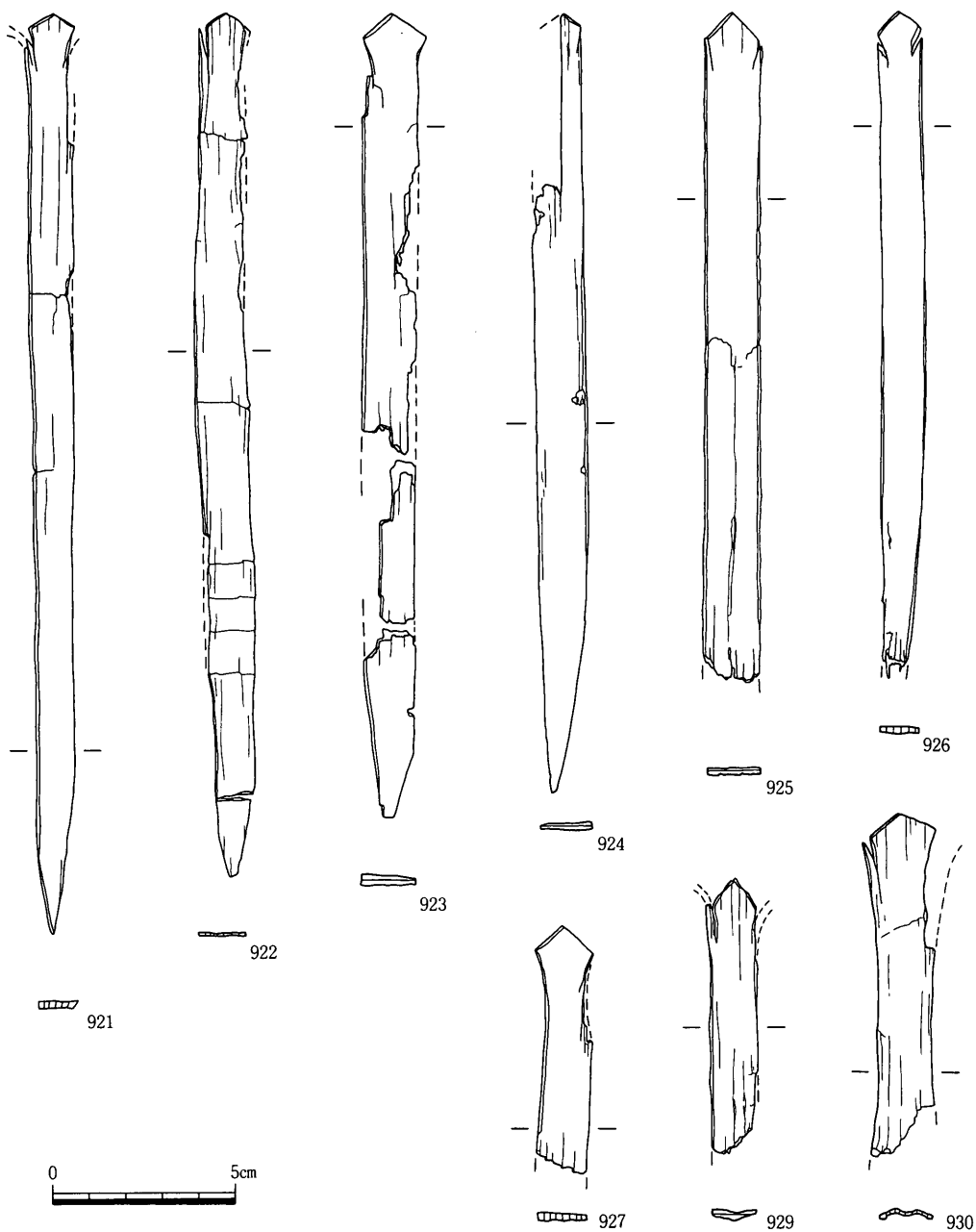
971～981は上端部が圭頭状になっていないもので、胴部には切り掛けは施されていない。971は両端部を斜めに切り落としており平面形が台形になっており、幅は3cmと広がっている。972～976は上端部を斜めに切り落としている。973の上端部は鋭く斜めに切り落とし、下端部は一部欠損しているが上端部にくらべて緩やかに削っている。977・979は上端部は僅かに圭頭気味で、978は上端部の片方の角を斜めに切り落としている。977・978は非常に薄い板状の素材を使用している。980・981は上端部を僅かに斜めに切り落としている。

982は上端部の両角を僅かに斜めに切り落とし、胴部に三角形に抉って切り欠きを施している。



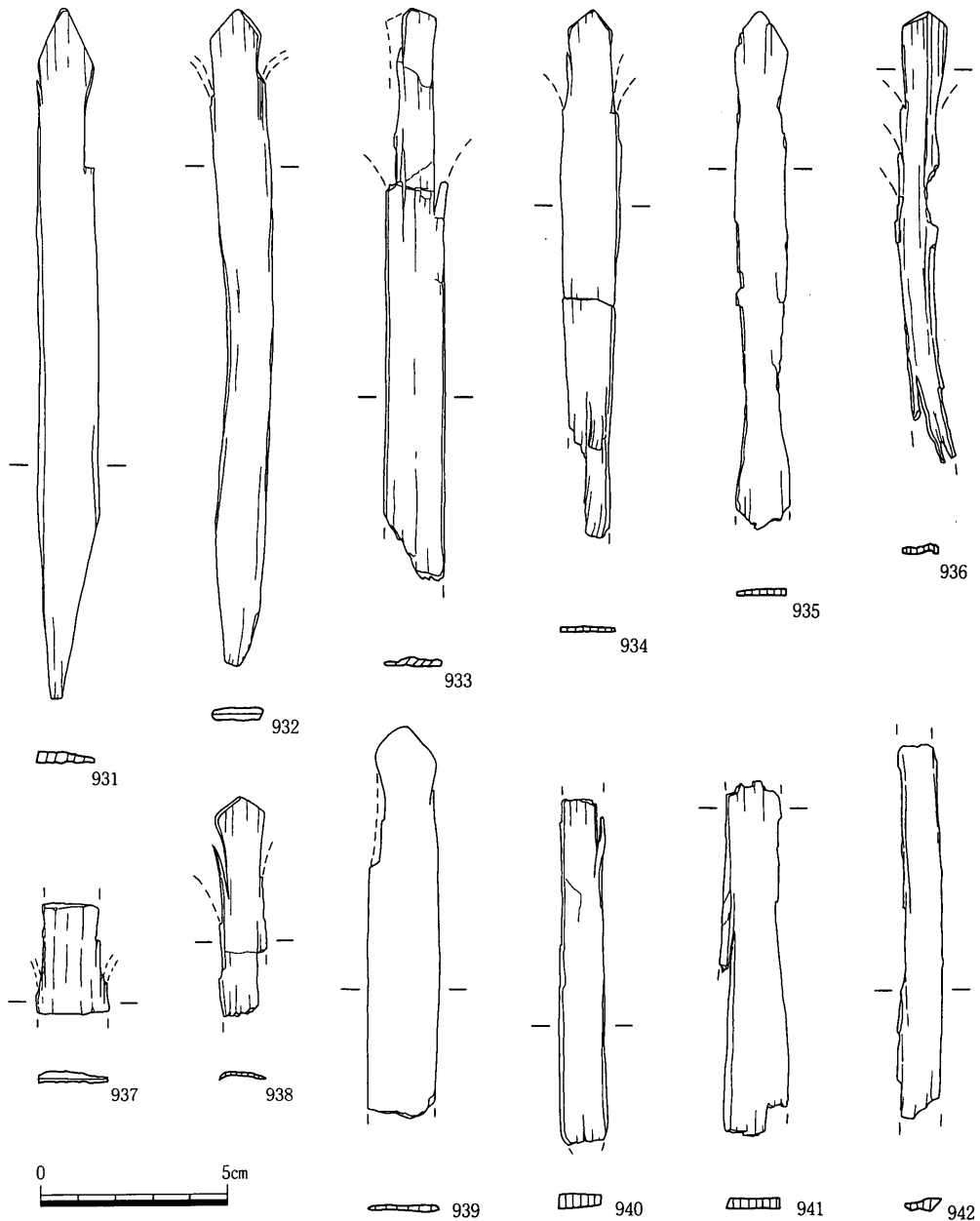
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
916	斎串	28.7	2.0	0.4	柁目		
917	斎串	20.8	2.6	0.4	板目		
918	斎串	18.9	2.3	0.5	柁目		
919	斎串	18.0	1.2	0.1	板目		
920	斎串	14.4	1.6	0.3	板目	両端を尖らしている	

第751図 G区SR04出土遺物(26)(1/2)



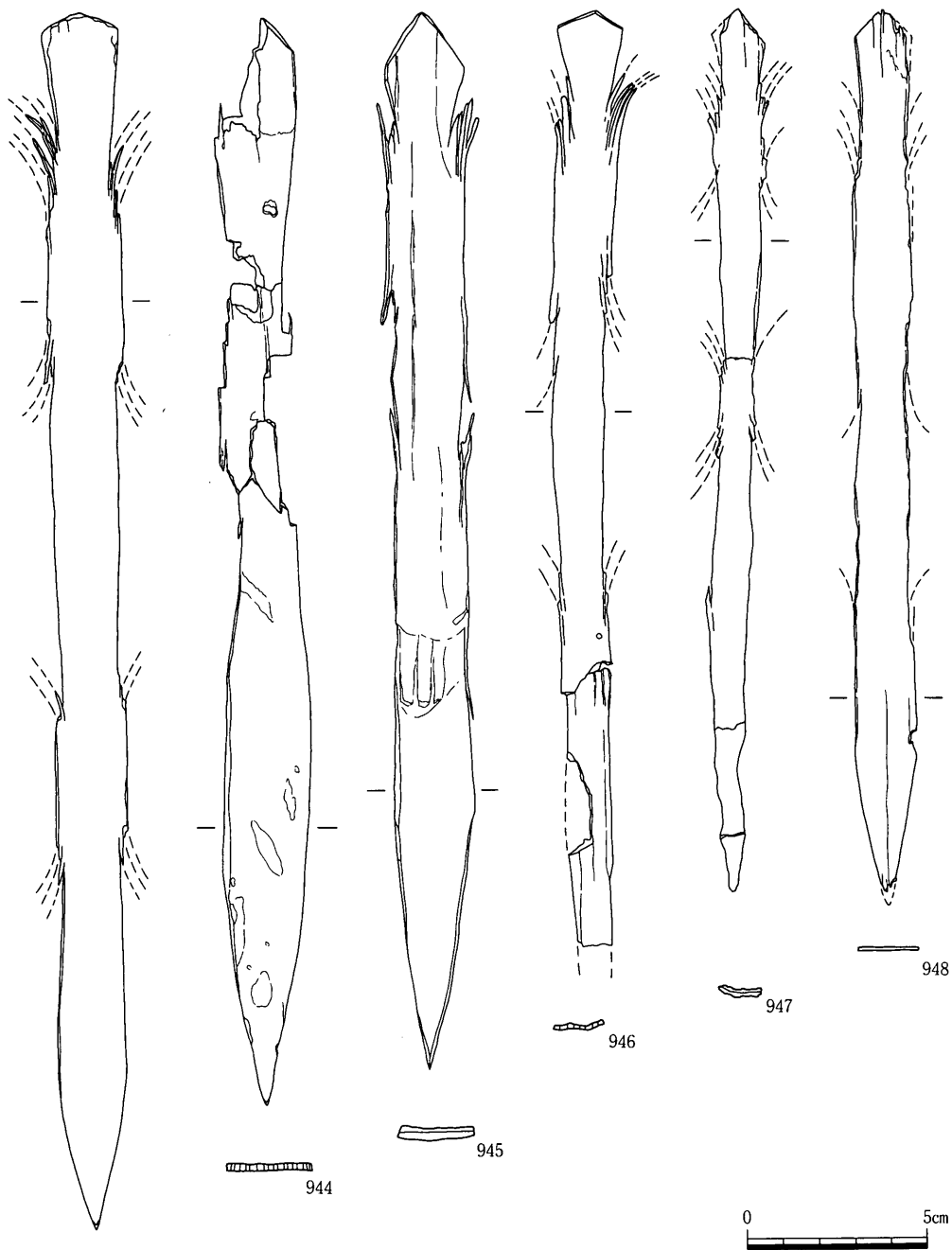
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
921	斎串	25.0	1.2	0.2	柾目		
922	斎串	23.4	1.5	0.1	柾目		
923	斎串	22.1 (推定)	1.6	0.3	板目	上端部のすぐ下に切り掛け1回	
924	斎串	21.4	1.4	0.2	板目		
925	斎串	18.4	1.6	0.2	板目	上端部の両側に切り掛け1ヶ所ずつ	
926	斎串	18.0	1.2	0.2	柾目	上端部の両側に切り掛け1ヶ所ずつ	
927	斎串	6.7	1.6	0.2	柾目	全体にやや歪んでいる	
929	斎串	7.4	1.3	0.2	板目		
930	斎串	9.3	1.8	0.1	柾目		

第752図 G区SR04出土遺物(27)(1/2)



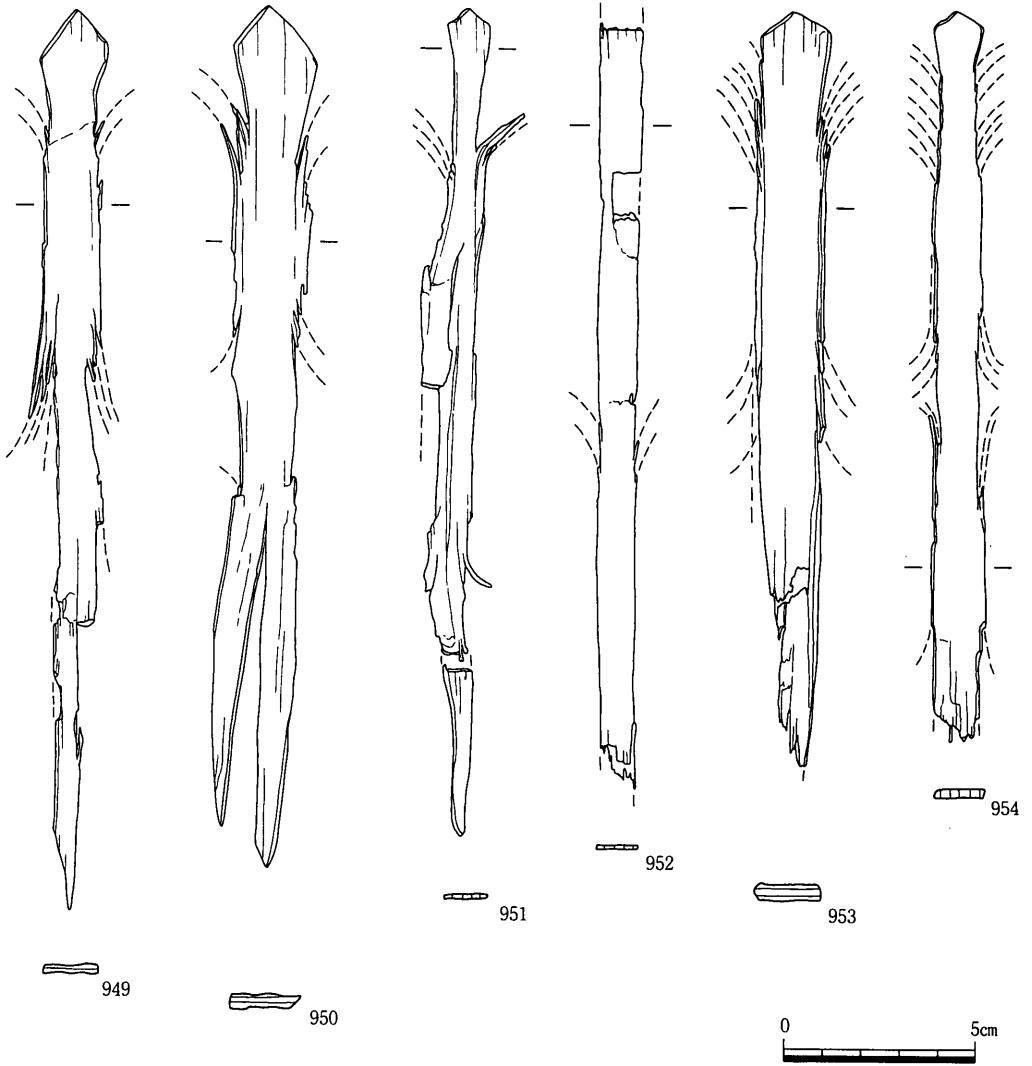
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
931	斎串	18.2	1.6	0.3	榎目	下端部は片方を深く削っている	
932	斎串	17.0	1.5	0.3	板目		
933	斎串	14.7	1.6	0.3	榎目		
934	斎串	13.5	1.6	0.1	榎目		
935	斎串	13.3	1.3	0.2	榎目	中央部で幅狭となる	
936	斎串	10.6	1.2	0.2	榎目		
937	斎串	3.0	1.9	0.3	板目		
938	斎串	5.8	1.3	0.1	榎目		
939	斎串	10.5	1.9	0.2	榎目		
940	斎串	9.3	1.3	0.4	榎目		
941	斎串	9.5	1.8	0.3	榎目		
942	斎串	10.0	1.1	0.4	榎目		

第753図 G区SR04出土遺物(28)(1/2)



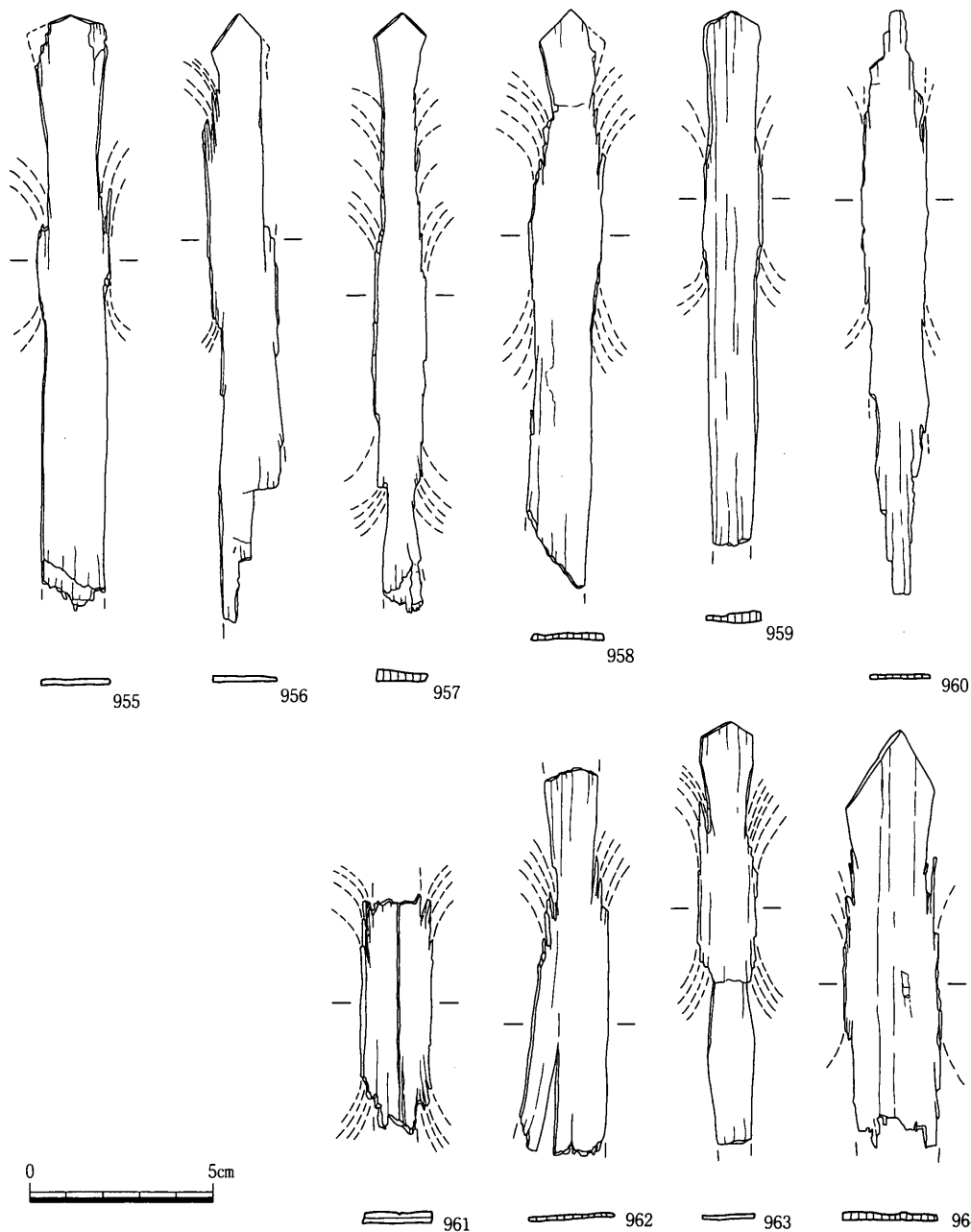
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
943	斎串	33.9	2.1	0.2	桁目	大型製品、切り掛けは計8ヶ所にある	
944	斎串	30.0	2.4	0.2	桁目		
945	斎串	29.4	2.3	0.4	板目		
946	斎串	26.2	2.0	0.2	桁目		
947	斎串	24.3	1.5	0.2	板目		
948	斎串	24.4	1.7	0.1	板目		

第754図 G区SR04出土遺物(29)(1/2)



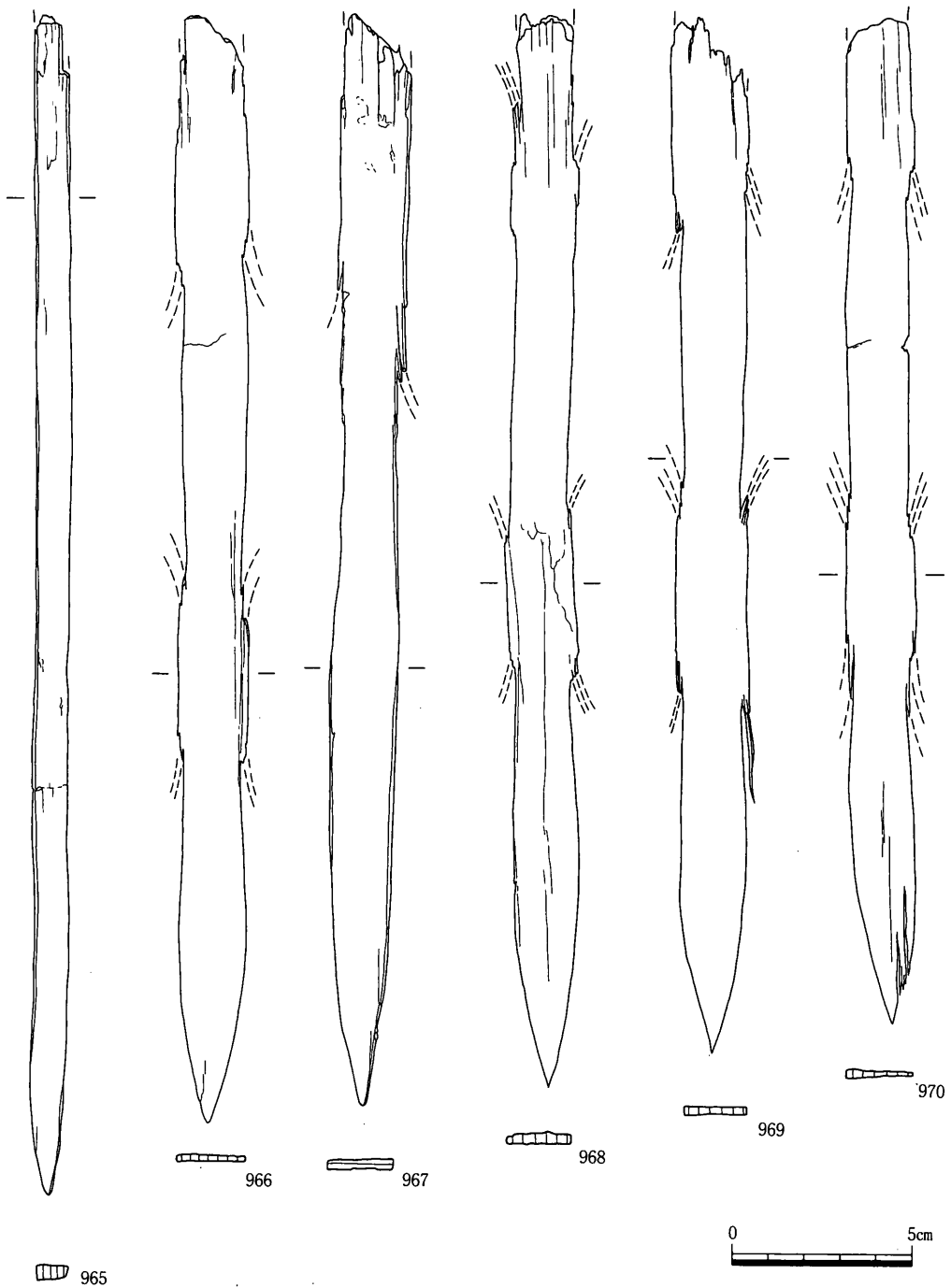
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
949	斎串	23.3	1.7	0.3	板目	上端部の圭頭部は左右非対称	
950	斎串	22.3	2.1	0.4	板目	上端部の圭頭部は左右非対称	
951	斎串	21.1	1.0	0.1	柃目		
952	斎串	19.2	1.1	0.1	柃目		
953	斎串	19.4	1.8	0.4	板目		
954	斎串	18.5	1.3	0.2	柃目		

第755図 G区SR04出土遺物(30)(1/2)



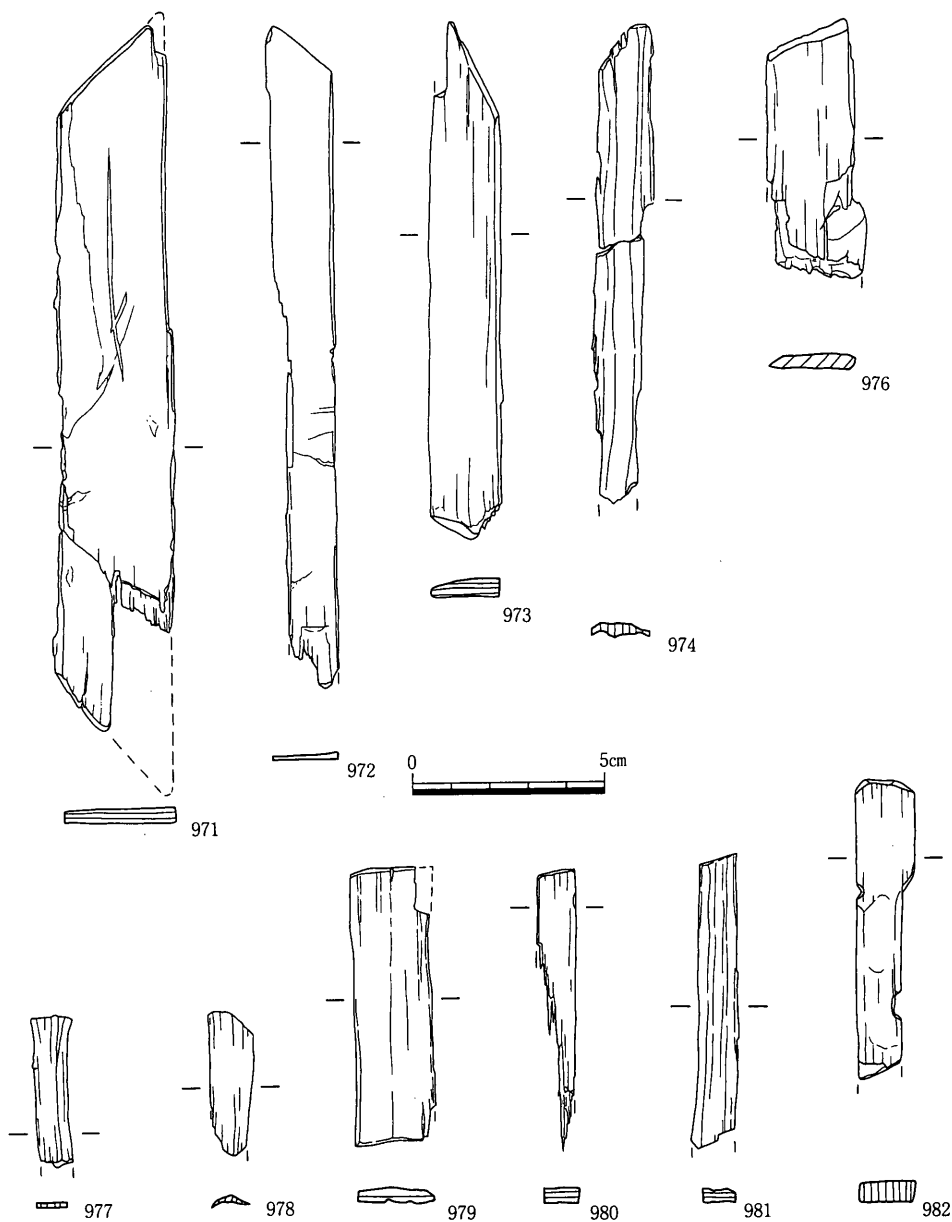
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
955	斎串	16.0	2.0	0.1	板目		
956	斎串	16.4	1.8	0.2	板目		
957	斎串	16.2	1.5	0.3	柃目		
958	斎串	15.6	2.0	0.2	柃目		
959	斎串	14.4	1.6	0.3	柃目		
960	斎串	15.7	1.8	0.1	柃目		
961	斎串	6.8	1.9	0.3	板目		
962	斎串	10.6	2.1	0.1	柃目		
963	斎串	11.5	1.1	0.1	板目		
964	斎串	11.5	2.6	0.2	柃目		

第756図 G区SR04出土遺物(31)(1/2)



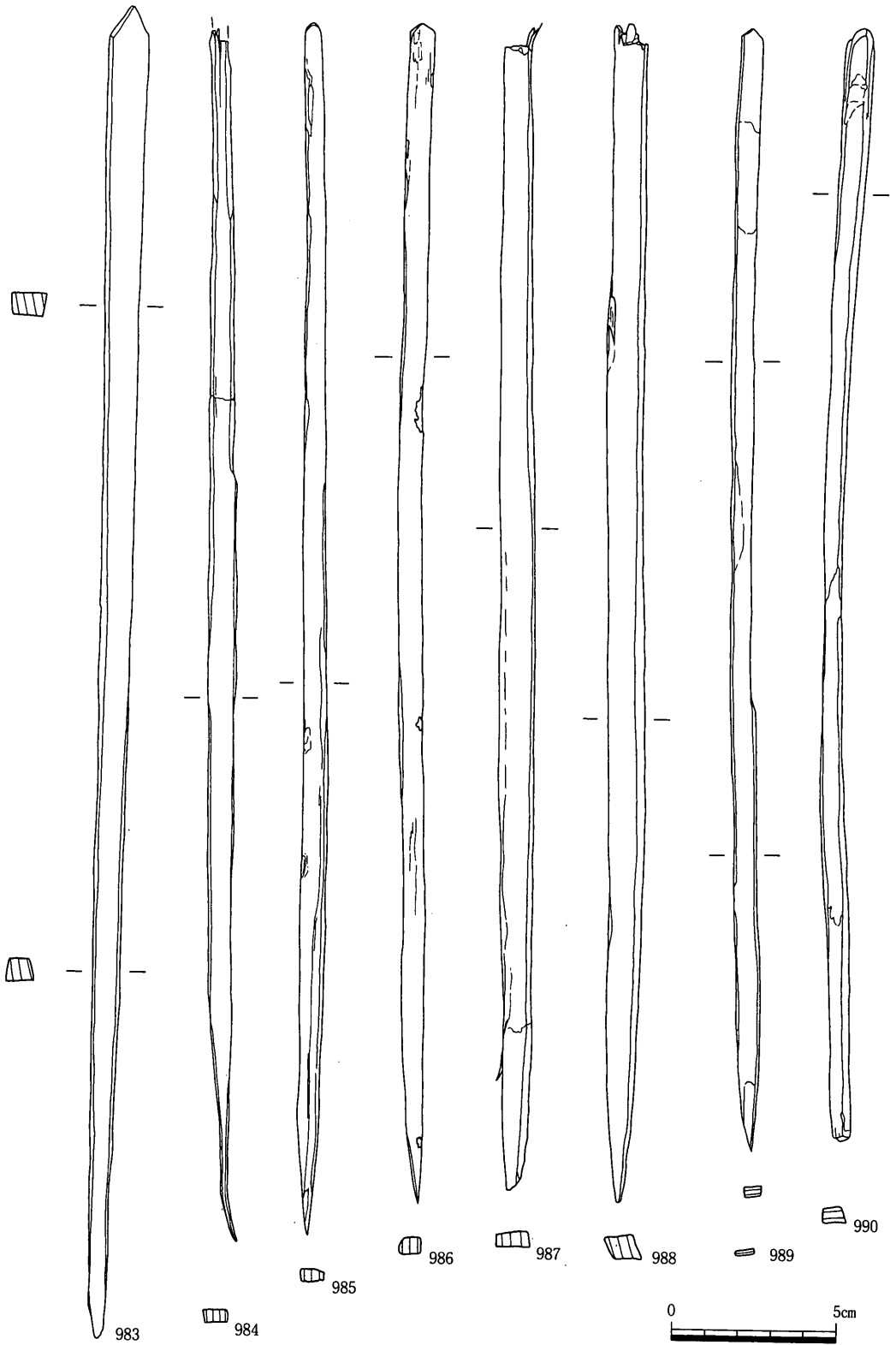
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
965	斎串	32.7	1.0	0.4	柁目	切り掛け無し、幅狭い	
966	斎串	30.6	2.1	0.2	柁目		
967	斎串	30.2	2.0	0.3	板目		
968	斎串	29.7	1.9	0.3	柁目		
969	斎串	28.7	2.1	0.3	柁目		
970	斎串	27.8	2.0	0.3	柁目		

第757図 G区SR04出土遺物(32)(1/2)



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
971	斎串	18.5	3.0	0.5	板目	両端を斜めに切り落とす	
972	斎串	17.1	1.7	0.2	板目	上端部を斜めに切り落とす	
973	斎串	13.3	1.9	0.5	板目	上端部を斜めに切り落とす	
974	斎串	12.3	1.5	0.4	板目	上端部を斜めに切り落とす	
976	斎串	6.5	2.3	0.4	板目	上端部を斜めに切り落とす	
977	斎串	3.9	1.0	0.1	板目		
978	斎串	3.7	1.1	0.1	板目		
979	斎串	7.2	2.1	0.4	板目		
980	斎串	7.3	1.0	0.4	板目	上端部を若干斜めに切り落とす	
981	斎串	7.7	1.2	0.4	板目	上端部を若干斜めに切り落とす	
982	斎串	7.8	1.5	0.6	板目	側縁に切り込みを入れる	

第758図 G区SR04出土遺物(33)(1/2)



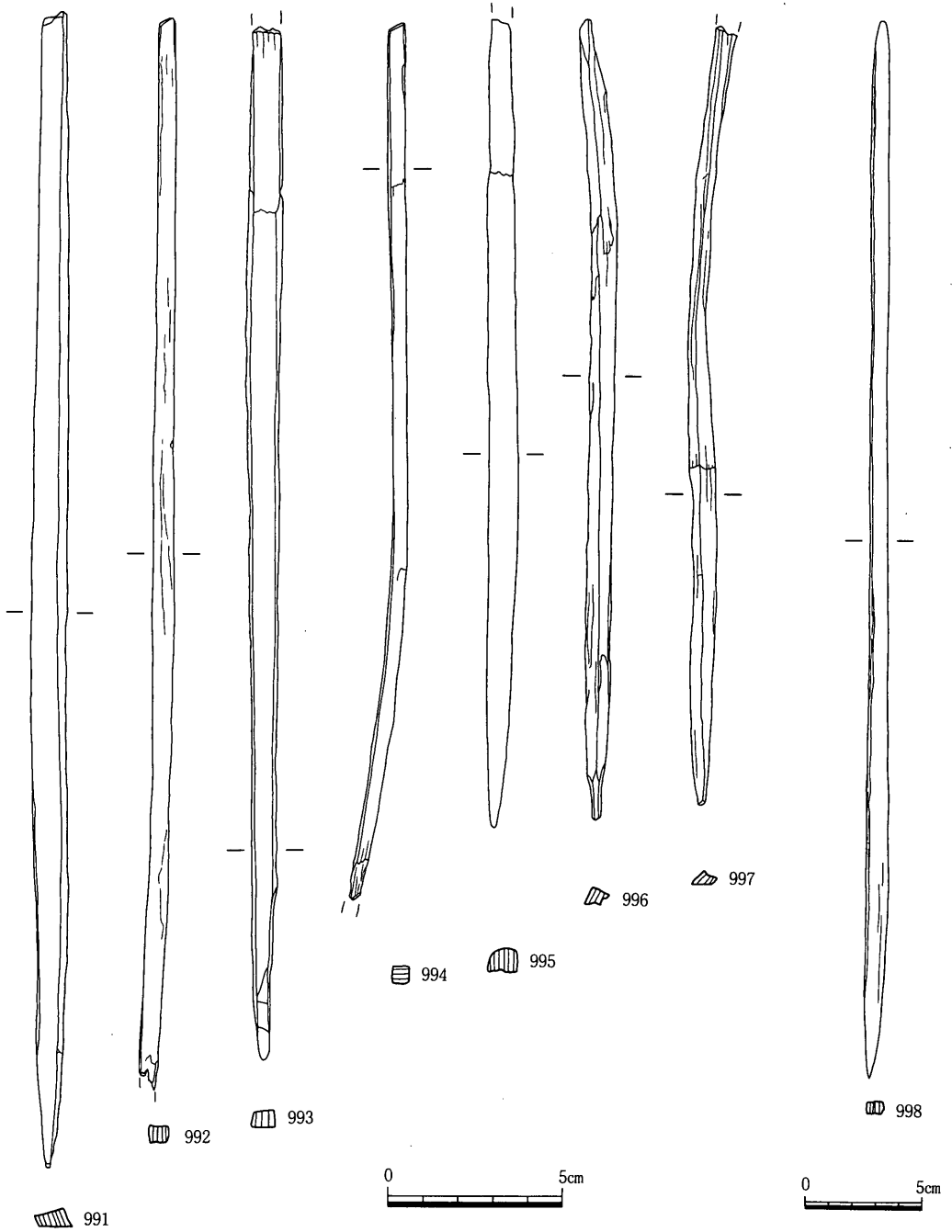
第759图 G区SR04出土遗物(34)(1/2)

遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
983	斎串	40.1	1.2	0.7	柃目		
984	斎串	36.5	0.9	0.4	柃目		
985	斎串	36.7	0.8	0.4	柃目		
986	斎串	35.7	0.7	0.5	柃目		
987	斎串	35.1	1.1	6.0	柃目		
988	斎串	35.7	1.2	0.8	柃目		
989	斎串	34.1	0.7	0.3	板目		
990	斎串	33.5	0.9	0.5	板目	両端を丸く収めている	

983～1020はこれまでの板状の斎串とは異なる棒状の斎串で、上端部は圭頭状あるいは斜めに切り落とし、下端部は鋭利に尖らす鉛筆の芯先状に削るものが多く見られ、断面は方形である。983～992は全長30cmを超える大型品である。983は全長40.1cmと長大で上端部は鋭い圭頭状になっている。胴部の断面は正方形に近く、切り掛けは認められない。984は下端部を非常に細く削っている。985は上端部は圭頭状であるが摩滅して丸味を帯びている。胴部の稜の部分に切り掛けを1回、2箇所施している。986・989は上端部を圭頭状に、下端部を鉛筆の芯先状にしている。988は胴部の稜に切り掛けを1箇所施している。992・994は上端部を斜めに切り落としている。996は下端部を鉛筆の芯先状に削っている。998は全長44.0cmと長大なもので上端部は緩やかに削っている。1000は上端部を圭頭状にしており、上部の稜線上に小さな刺突の穴が8個認められる。1002・1005・1007は上端部を斜めに切り落としており、1002は胴部の稜に切り掛けが1箇所ある。1006・1008・1009の下端部は鋭く削っており、1009は稜のとれた丸材を使用している。1010～1014・1016・1019は下端部の部分である。1013の下端部は片側を大きく抉るように削っている。1017の上端部は圭頭状になっているが左右対称ではない。

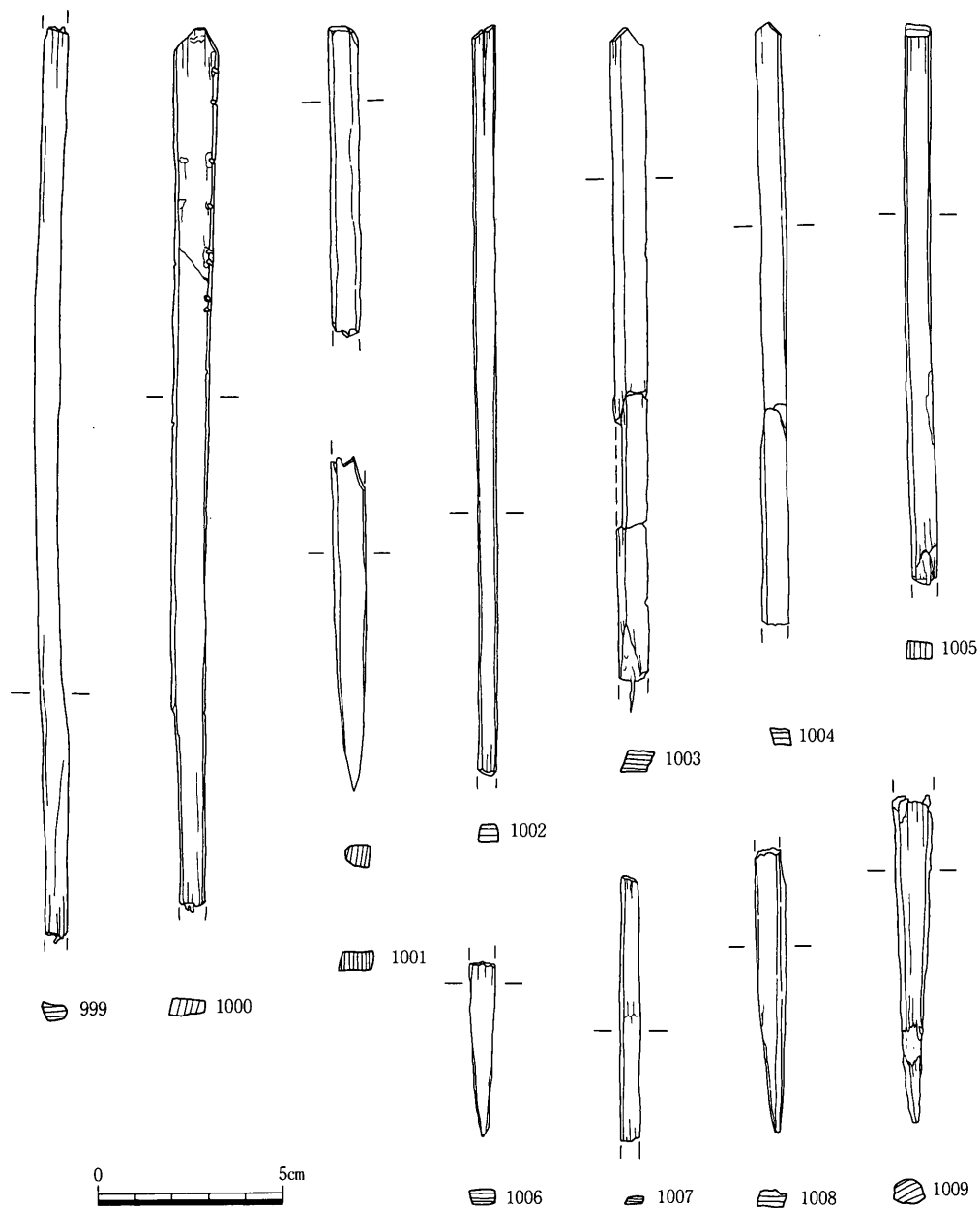
1021～1031はその他の形状の斎串である。1021・1022は非常に薄い板材を使用し、胴部に切り掛けは認められない。1025は上端部を丸く削出し人形の頭部状になっている。現存で2対の切り掛けが施されている。1026は上端部の角を削り取っている。1027は全長36.4cmと長大で上端部は斜めに切り落とし、下端部は剣先状になっている。1027～1031は胴部に切り掛けは施されていない。1028・1030の上端部は圭頭状であるが左右対称ではなく、1030は竹材を半截したものを使用しており下端部は片側を削って尖らせている。1031は両端部ともに剣先状になっている幅広のものである。

1032～1073は斎串の下端部のもので全体の形状は切り掛けの有無、数などの詳細は不明となっているものである。1033は切り掛けが2対、1034は1対が現存している。1035は最大幅が2.7cmと幅広であり、上部は欠損しているが片側を若干斜めに削っているようである。1044は下端部は片方のみを切り落としている。上端部は一部切り落としている部分が



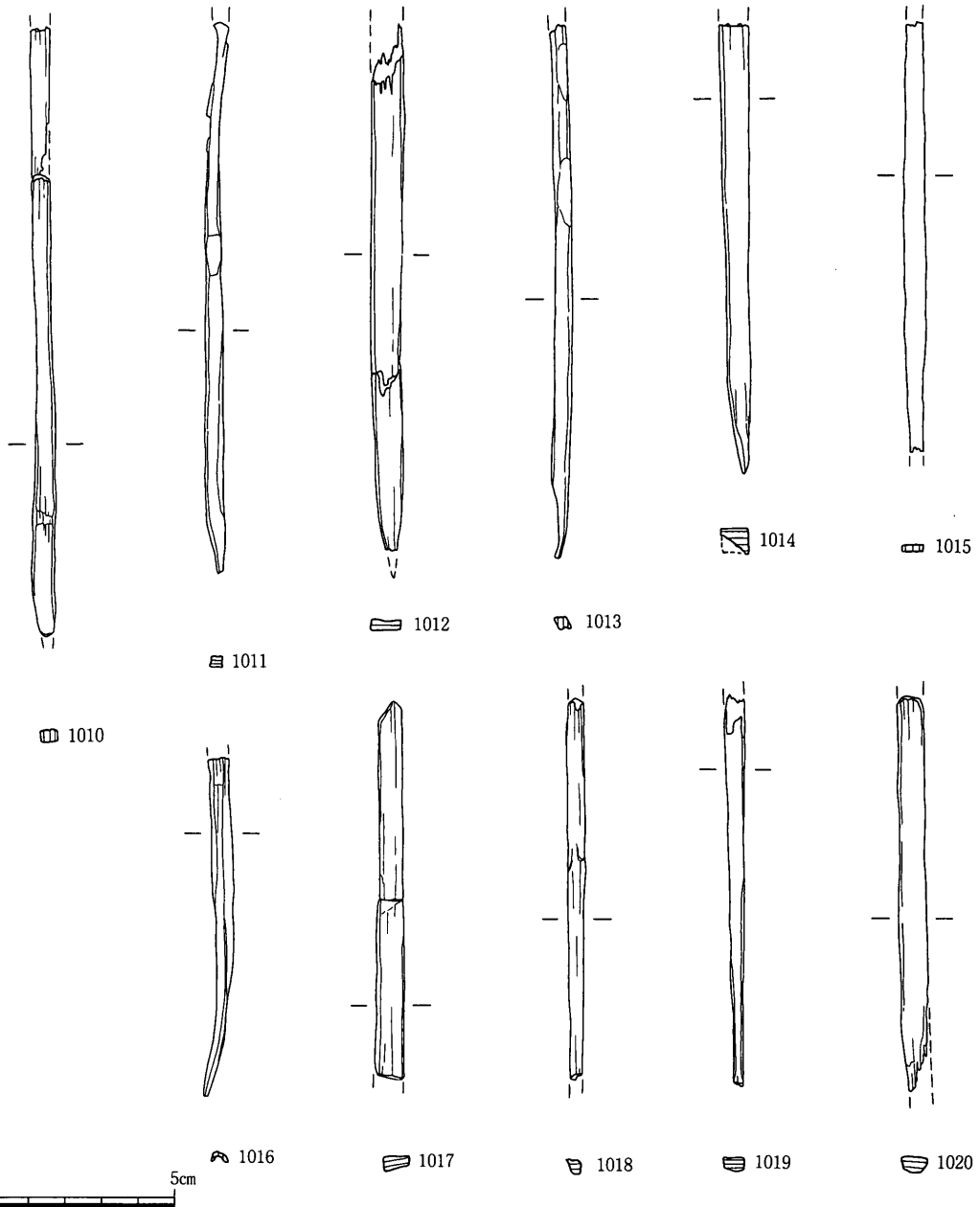
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
991	斎串	32.5	1.0	0.5	柃目		
992	斎串	30.3	0.6	0.5	柃目		
993	斎串	29.1	1.0	0.5	柃目		
994	斎串	24.2	0.5	0.5	板目	上端部を斜めに切り取っている	
995	斎串	22.5	0.8	0.7	柃目		
996	斎串	22.5	0.8	0.7	柃目		
997	斎串	21.6	0.7	0.4	柃目		
998	斎串	44.0	0.9	0.7	柃目		

第760図 G区SR04出土遺物(35)(1/2, 1/3)



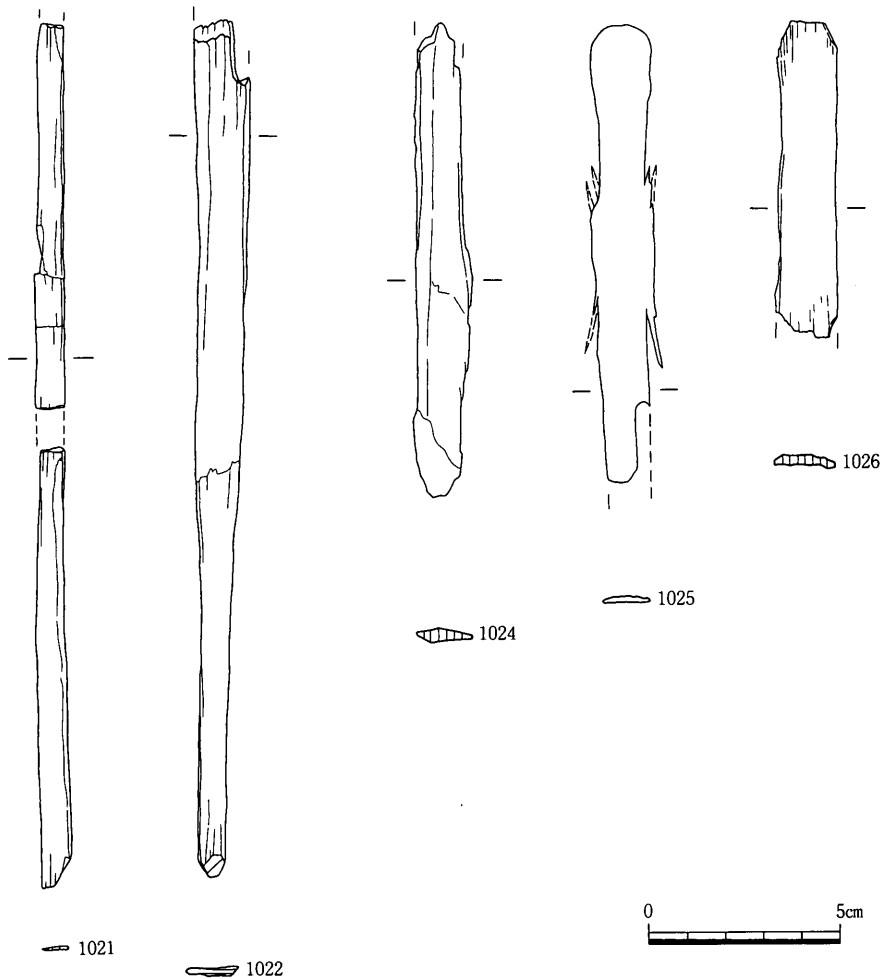
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
999	斎串	25.0	0.7	0.5	板目		
1000	斎串	24.2	1.2	0.5	柁目	上半の側縁部に小さな孔がある	
1001	斎串	24.0	0.7	0.6	柁目		
1002	斎串	20.3	0.6	0.5	板目	上端を斜めに切り落とす	
1003	斎串	17.5	0.8	0.6	板目		
1004	斎串	15.1	0.6	0.4	板目		
1005	斎串	15.0	0.8	0.5	柁目	上端部を斜めに成形する	
1006	斎串	4.7	0.7	0.4	板目		
1007	斎串	7.2	0.5	0.2	板目		
1008	斎串	7.6	0.8	0.4	板目		
1009	斎串	8.8	1.1	0.7	板目		

第761図 G区SR04出土遺物(36)(1/2)



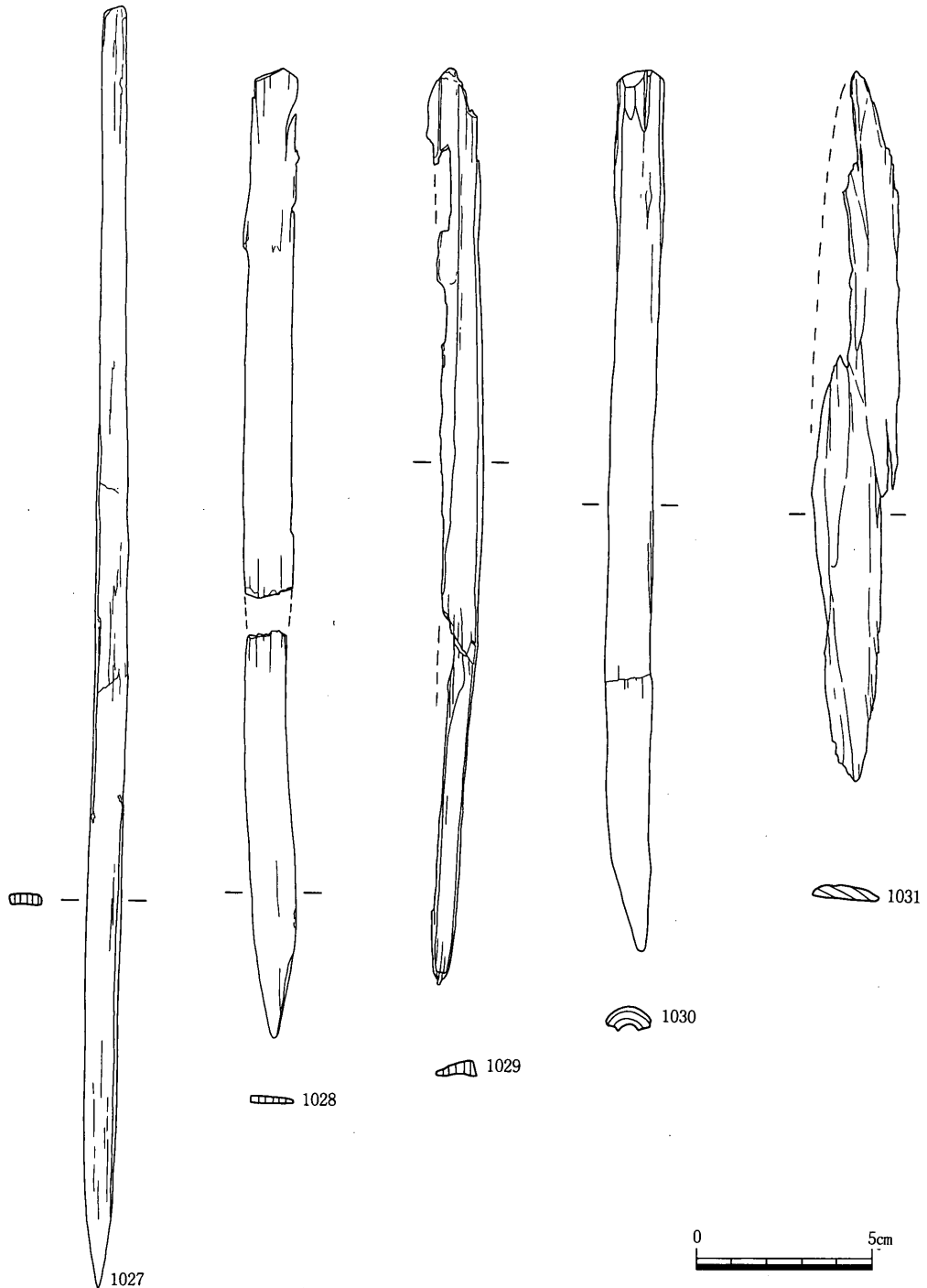
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法的特徴	備考
1010	斎串	16.0	0.6	0.4	柱目		
1011	斎串	14.5	0.6	0.3	板目		
1012	斎串	13.4	0.9	0.3	板目		
1013	斎串	14.1	0.5	0.3	柱目	下端部は片側のみ削り出す	
1014	斎串	11.8	0.8	0.7	板目		
1015	斎串	11.3	0.6	0.2	柱目		
1016	斎串	9.2	0.6	0.1	柱目		
1017	斎串	10.3	0.8	0.4	板目	上端部の圭頭部は左右非対称	
1018	斎串	10.4	0.5	0.4	板目		
1019	斎串	10.6	0.6	0.4	板目		
1020	斎串	10.7	0.8	0.4	板目		

第762図 G区SR04出土遺物(37)(1/2)



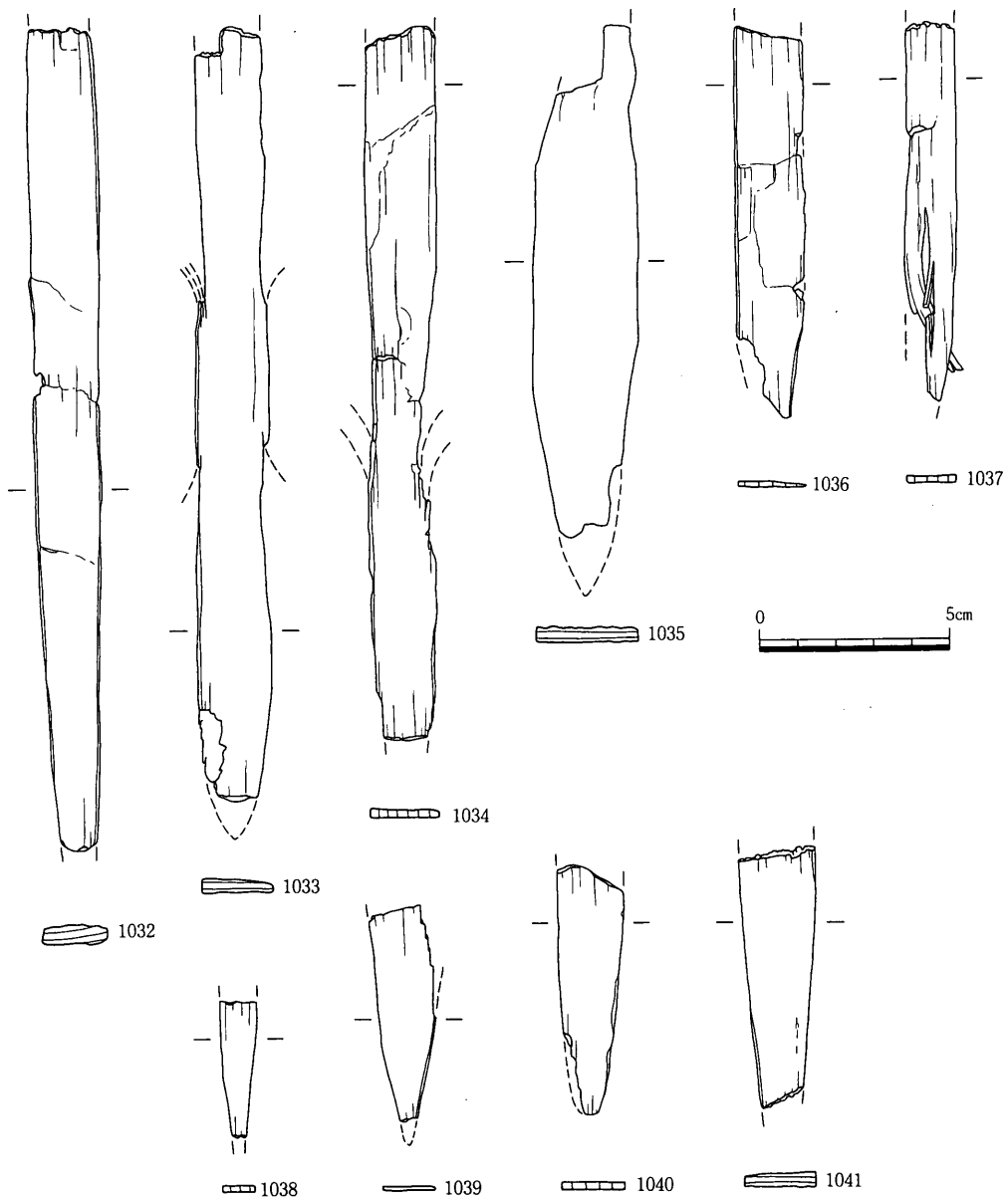
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1021	斎串	21.5	0.8	0.1	柁目		
1022	斎串	22.4	1.4	0.3	板目		
1024	斎串	12.3	1.5	0.4	柁目		
1025	斎串	11.9	1.6	1.5	板目		
1026	斎串	8.2	1.6	0.3	柁目		

第763図 G区SR04出土遺物(38)(1/2)



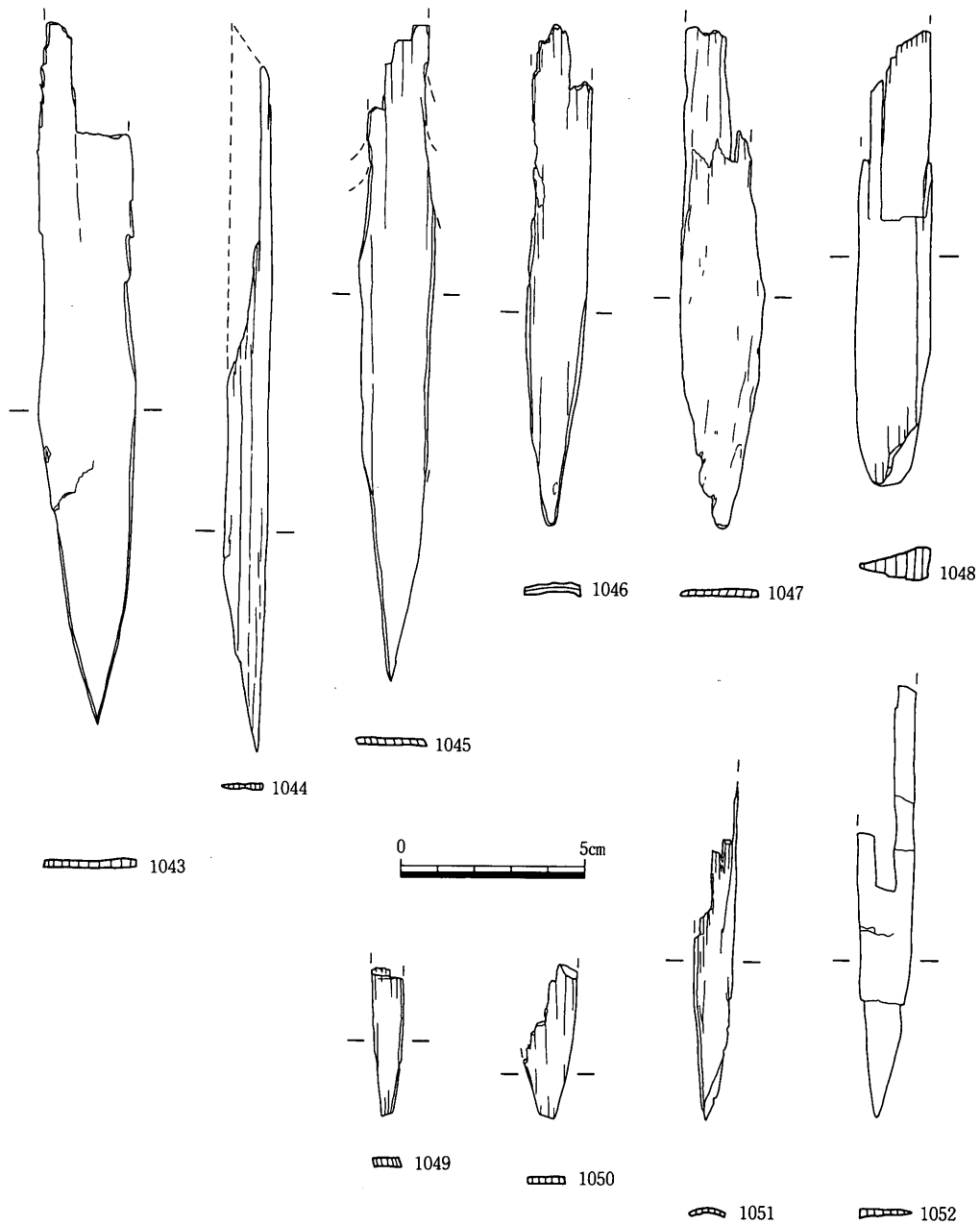
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1027	斎串	36.4	1.0	0.4	柁目		
1028	斎串	26.3	1.4	0.2	柁目	上端部の圭頭部は左右非対称	
1029	斎串	26.0	1.4	0.4	柁目		
1030	斎串	24.7	1.5	0.9	芯持	竹を半載し、下端を剣先状に仕上げる	
1031	斎串	19.8	2.3	0.4	板目	両端部が剣先状になる	

第764図 G区SR04出土遺物(36)(1/2)



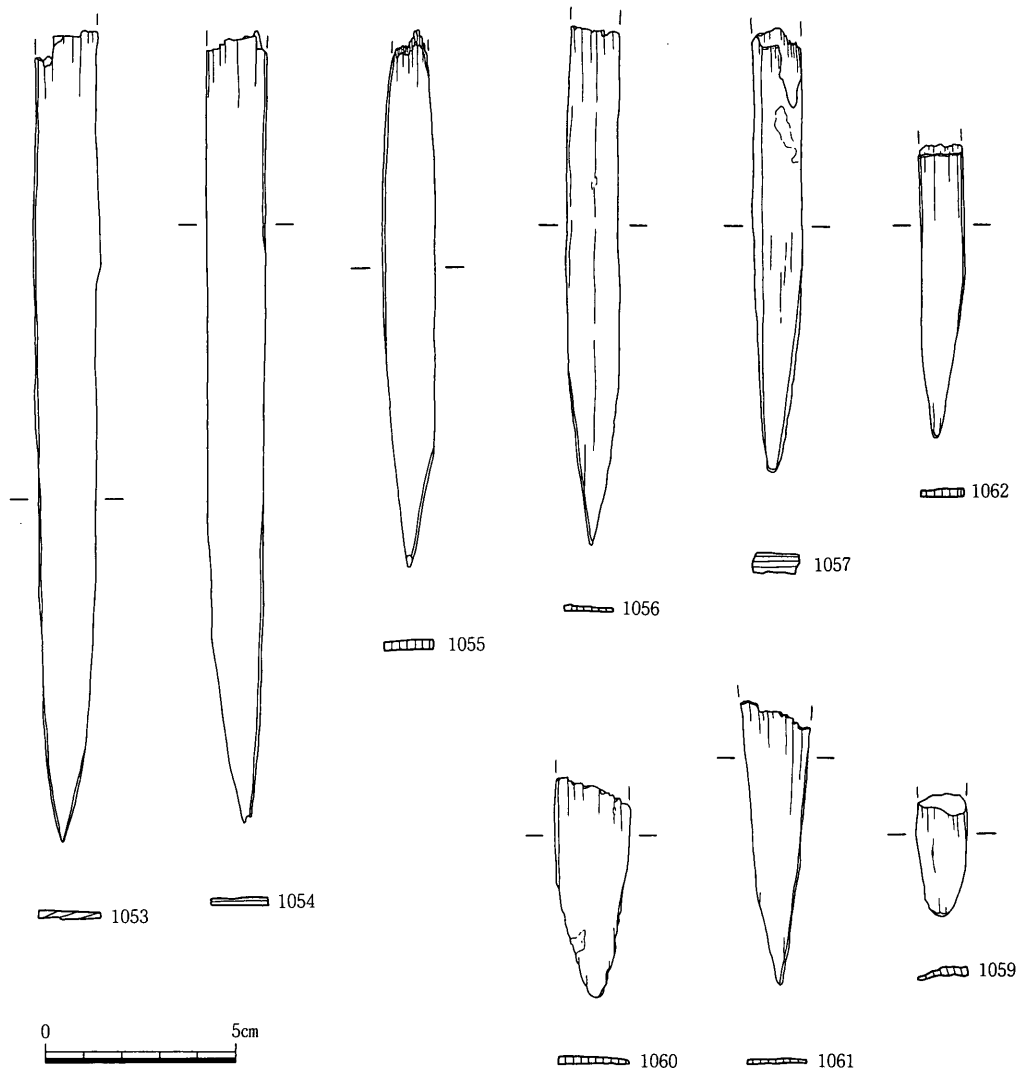
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1032	斎串	21.5	1.9	0.5	板目		
1033	斎串	20.6	2.0	0.4	板目		
1034	斎串	19.0	1.9	0.2	柃目		
1035	斎串	13.4	2.7	4.0	板目		
1036	斎串	10.2	1.8	0.1	柃目		
1037	斎串	9.9	1.3	0.2	柃目		
1038	斎串	3.6	1.0	0.2	柃目		
1039	斎串	5.7	1.5	0.1	板目		
1040	斎串	6.5	1.8	0.2	柃目		
1041	斎串	6.9	2.0	0.4	板目		

第765図 G区SR04出土遺物(40)(1/2)



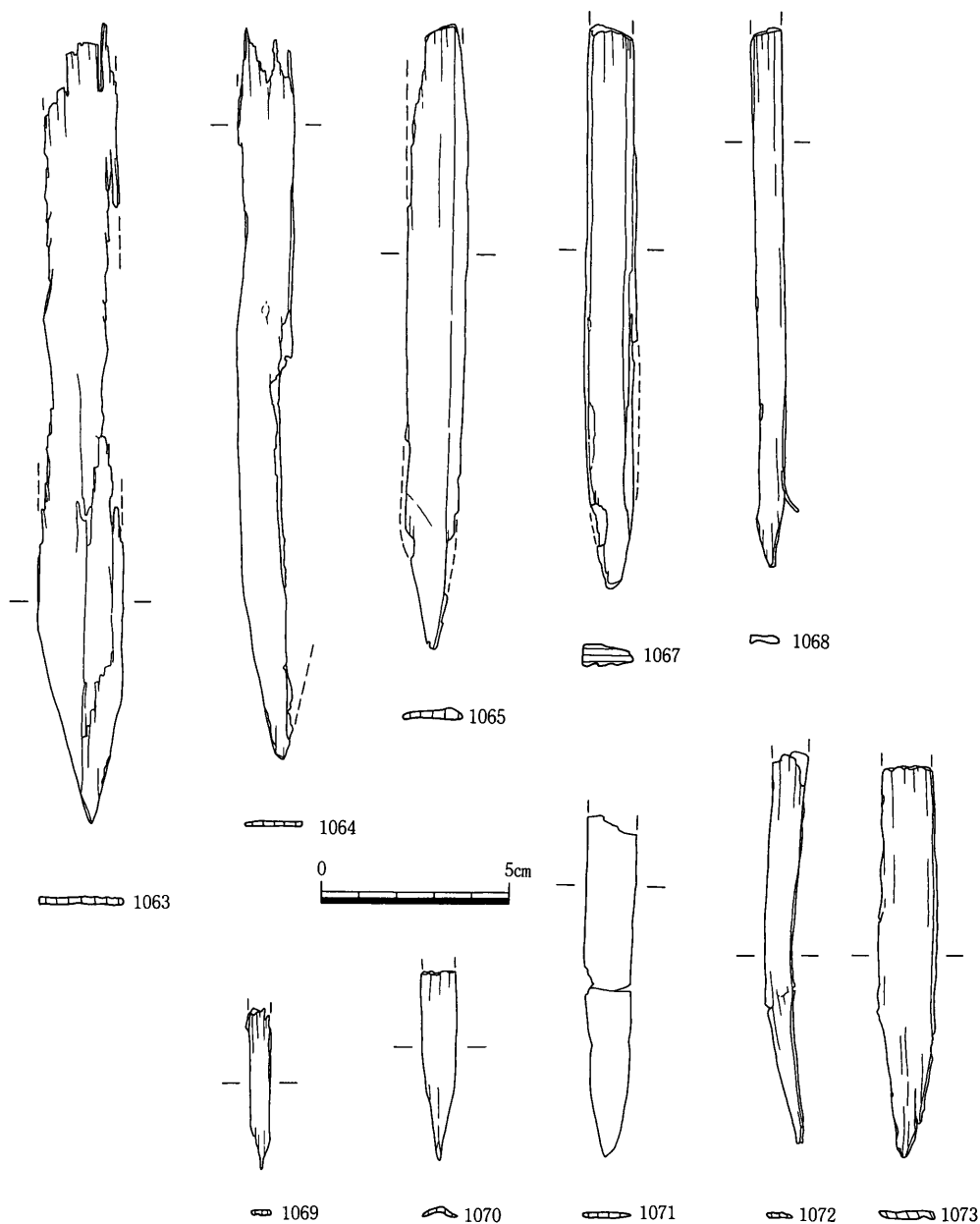
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1043	斎串	18.8	2.6	0.2	柁目		
1044	斎串	18.4	1.2	0.2	柁目	下端部は片方のみ切り落とす	
1045	斎串	17.3	2.1	0.2	柁目		
1046	斎串	13.1	1.6	0.3	板目		
1047	斎串	13.2	2.3	0.2	柁目		
1048	斎串	12.9	2.1	0.9	柁目	断面三角形、下端部篭先状	
1049	斎串	4.1	0.9	0.3	柁目		
1050	斎串	4.2	1.2	0.2	柁目		
1051	斎串	9.4	1.0	0.1	柁目		
1052	斎串	11.9	1.4	0.3	柁目		

第766図 G区SR04出土遺物(41)(1/2)



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1053	斎串	21.0	1.7	0.2	柁目		
1054	斎串	20.8	1.6	0.2	板目	下端部は片方の削りが強く非対称形	
1055	斎串	13.8	1.4	0.3	柁目	下端部は片方の削りが強く非対称形	
1056	斎串	13.3	1.4	0.1	柁目		
1057	斎串	11.3	1.2	0.6	板目		
1059	斎串	3.1	1.2	0.2	柁目	下端部籠先状	
1060	斎串	5.8	2.0	0.2	柁目	幅広のものである	
1061	斎串	7.4	1.7	0.1	柁目		
1062	斎串	7.5	0.7	0.2	柁目	下端部は片方の削りが強く非対称形	

第767図 G区SR04出土遺物(42)(1/2)



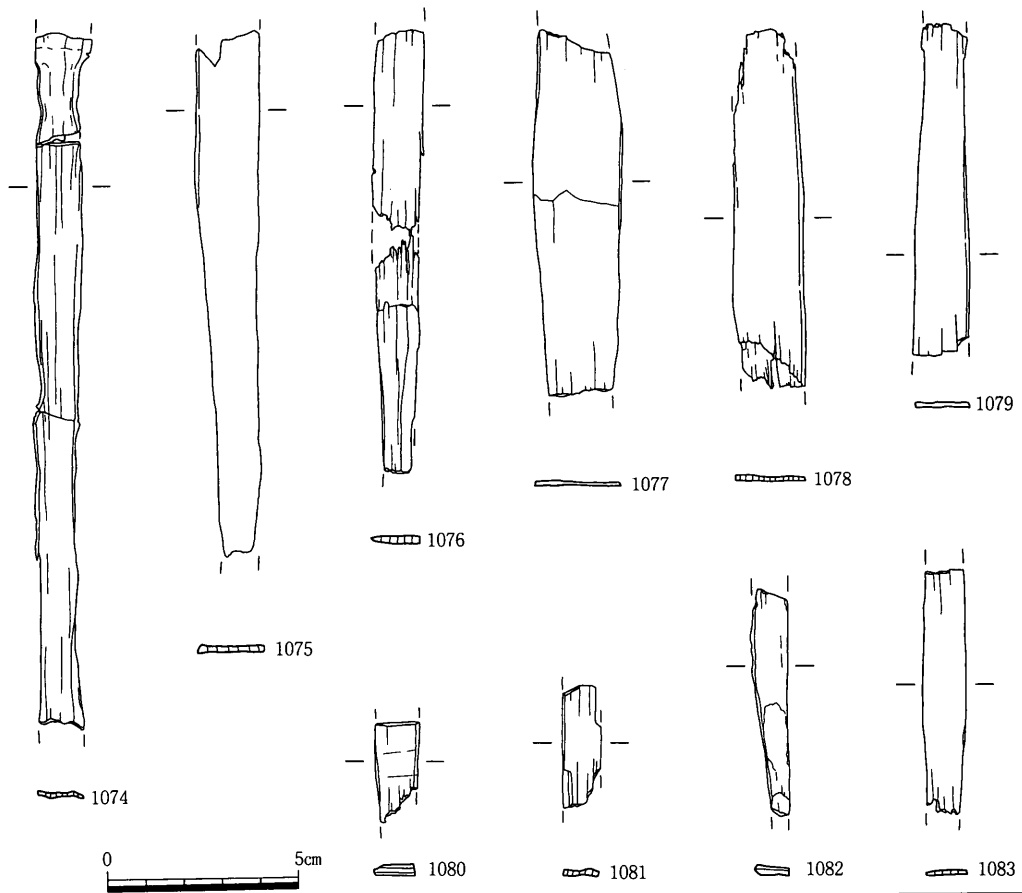
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法的特徴	備考
1063	斎串	21.2	2.3	0.2	柃目		
1064	斎串	19.2	1.5	0.1	柃目		
1065	斎串	16.2	1.7	0.2	柃目		
1067	斎串	14.9	1.4	0.6	板目	全体に厚めである 下端は鋭く尖る	
1068	斎串	14.0	0.8	0.2	板目		
1069	斎串	4.3	0.5	0.1	柃目		
1070	斎串	5.0	1.0	0.1	柃目		
1071	斎串	8.9	1.3	0.1	柃目		
1072	斎串	10.4	0.9	0.1	柃目		
1073	斎串	10.4	1.5	0.2	柃目		

第768図 G区SR04出土遺物(43)(1/2)

残存しているが、圭頭状になるのか下端部同様に片方のみを切り落としているのかは不明である。1048の下端部は丸味を帯びたへら先状になっている。1054・1055・1062は下端部は剣先状であるが左右対称ではない。1059の下端部は丸味を帯びたへら先状である。1067は厚手の板材を使用している。

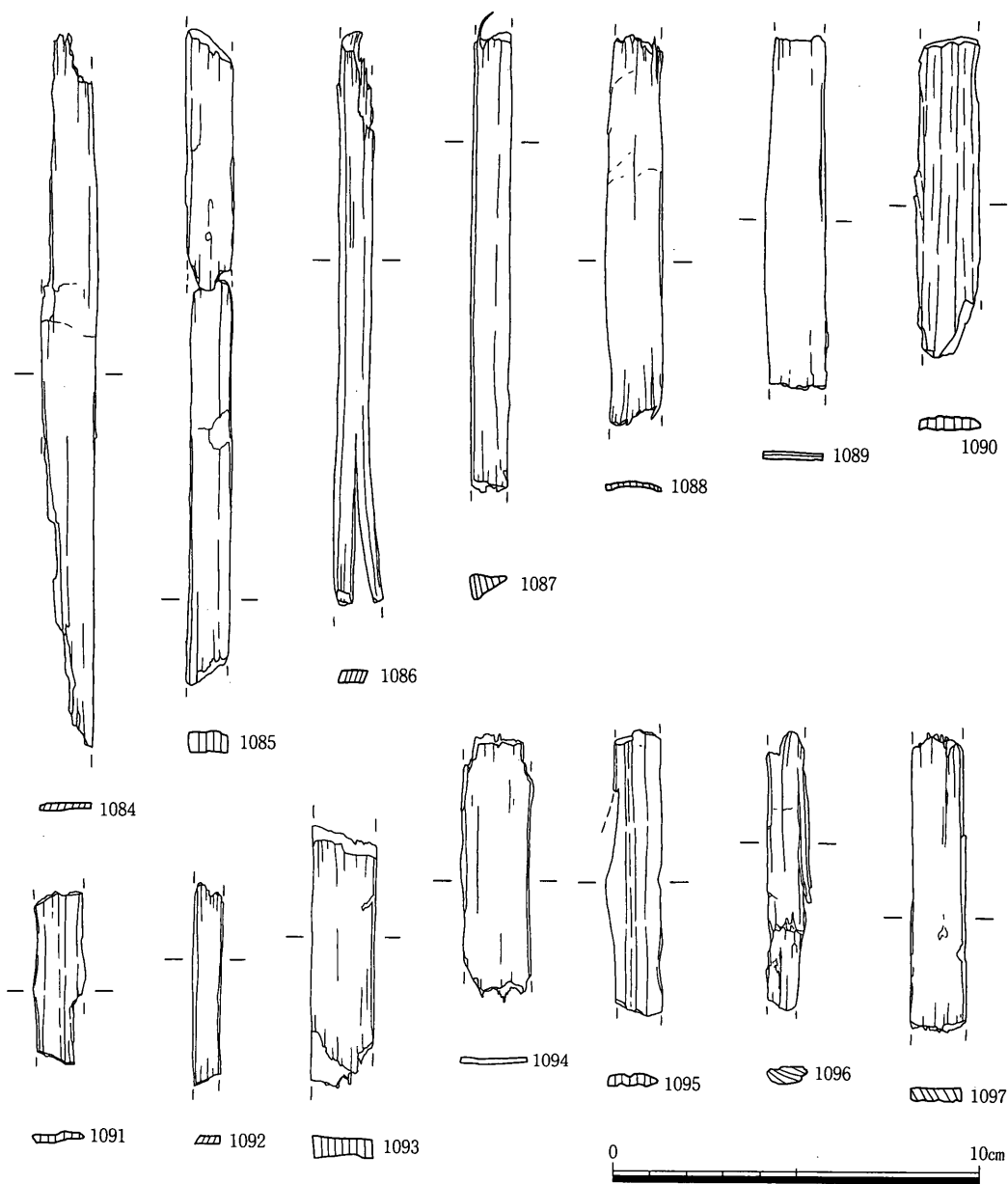
1074～1083は齋串の胴部のみのものである。1079は現存部の上部が若干段になっているが切り掛けが剥離した可能性がある。

1084～1111は齋串の胴部と思われる板材であるが、確証を得ないものである。1087は断



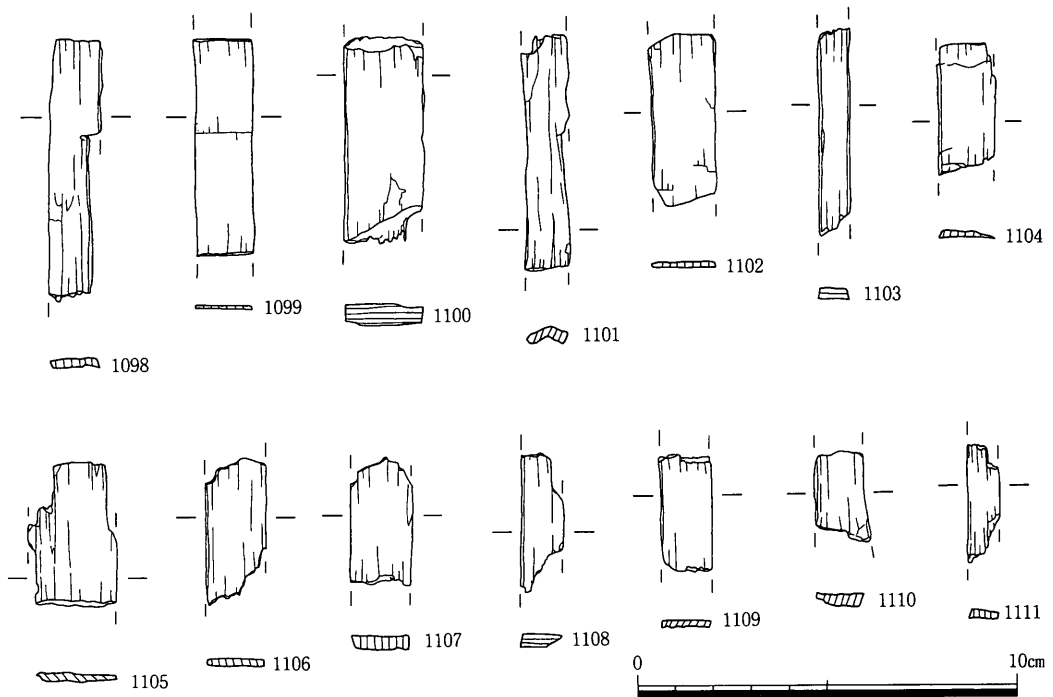
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1074	齋串	18.2	1.3	0.1	柃目		
1075	齋串	13.8	1.7	0.2	柃目		
1076	齋串	6.1	1.3	0.2	柃目		
1077	齋串	9.6	2.3	0.1	板目		
1078	齋串	9.5	1.9	0.2	柃目		
1079	齋串	8.6	1.4	0.1	板目	上部に段がつく	
1080	齋串	2.6	1.2	0.3	板目		
1081	齋串	3.2	1.0	0.2	柃目		
1082	齋串	5.9	0.9	0.3	板目		
1083	齋串	6.4	1.1	0.1	柃目		

第769図 G区SR04出土遺物(44)(1/2)



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1084	板材(斎串)	18.8	1.4	0.2	柁目		
1085	板材(斎串)	17.2	1.3	0.6	柁目	厚手のもの	
1086	板材(斎串)	15.1	1.0	0.3	柁目		
1087	板材(斎串)	12.2	1.0	0.7	柁目	断面が三角形	
1088	板材(斎串)	10.3	1.5	0.1	柁目		
1089	板材(斎串)	9.5	1.7	0.2	板目		
1090	板材(斎串)	8.5	1.7	0.4	柁目		
1091	板材(斎串)	4.7	1.6	0.2	柁目		
1092	板材(斎串?)	5.4	0.8	0.2	柁目		
1093	板材(斎串)	7.1	1.7	0.6	柁目	厚手のもの	
1094	板材(斎串)	7.3	1.9	0.2	板目		
1095	板材(斎串)	7.8	1.5	0.3	柁目		
1096	板材(斎串)	7.5	1.2	0.4	柁目		
1097	板材(斎串)	8.1	1.5	0.4	柁目	厚手のもの	

第770図 G区SR04出土遺物(45)(1/2)

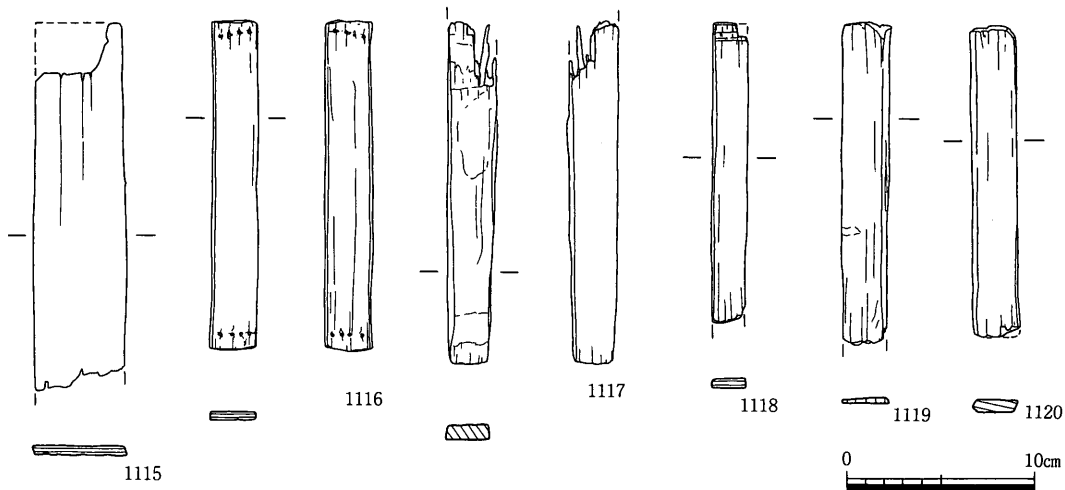
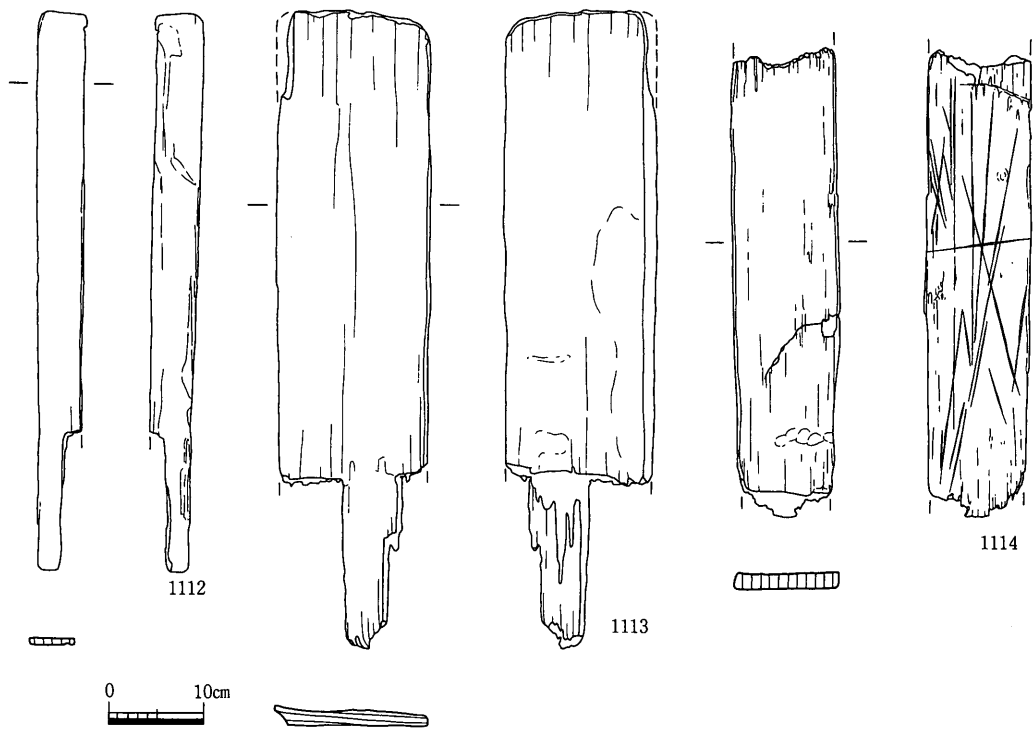


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1098	板材 (齋串)	6.8	1.4	0.2	梃目		
1099	板材 (齋串)	5.6	1.5	0.1	梃目		
1100	板材 (齋串)	5.3	2.1	0.6	板目	厚手のもの	
1101	板材 (齋串)	6.0	1.2	0.2	梃目		
1102	板材 (齋串)	4.4	1.7	0.1	梃目		
1103	板材 (齋串)	5.3	0.8	0.3	板目		
1104	板材 (齋串)	3.3	1.5	0.2	梃目		
1105	板材 (齋串)	3.7	2.3	0.3	梃目		
1106	板材 (齋串)	3.8	1.6	0.2	梃目		
1107	板材 (齋串)	3.3	1.6	0.3	梃目		
1108	板材 (齋串)	3.6	1.1	0.3	梃目		
1109	板材 (齋串)	3.0	1.4	0.2	梃目		
1110	板材 (齋串)	2.3	1.4	0.3	梃目		
1111	板材 (齋串)	3.0	0.8	0.2	梃目		

第771図 G区SR04出土遺物(46)(1/2)

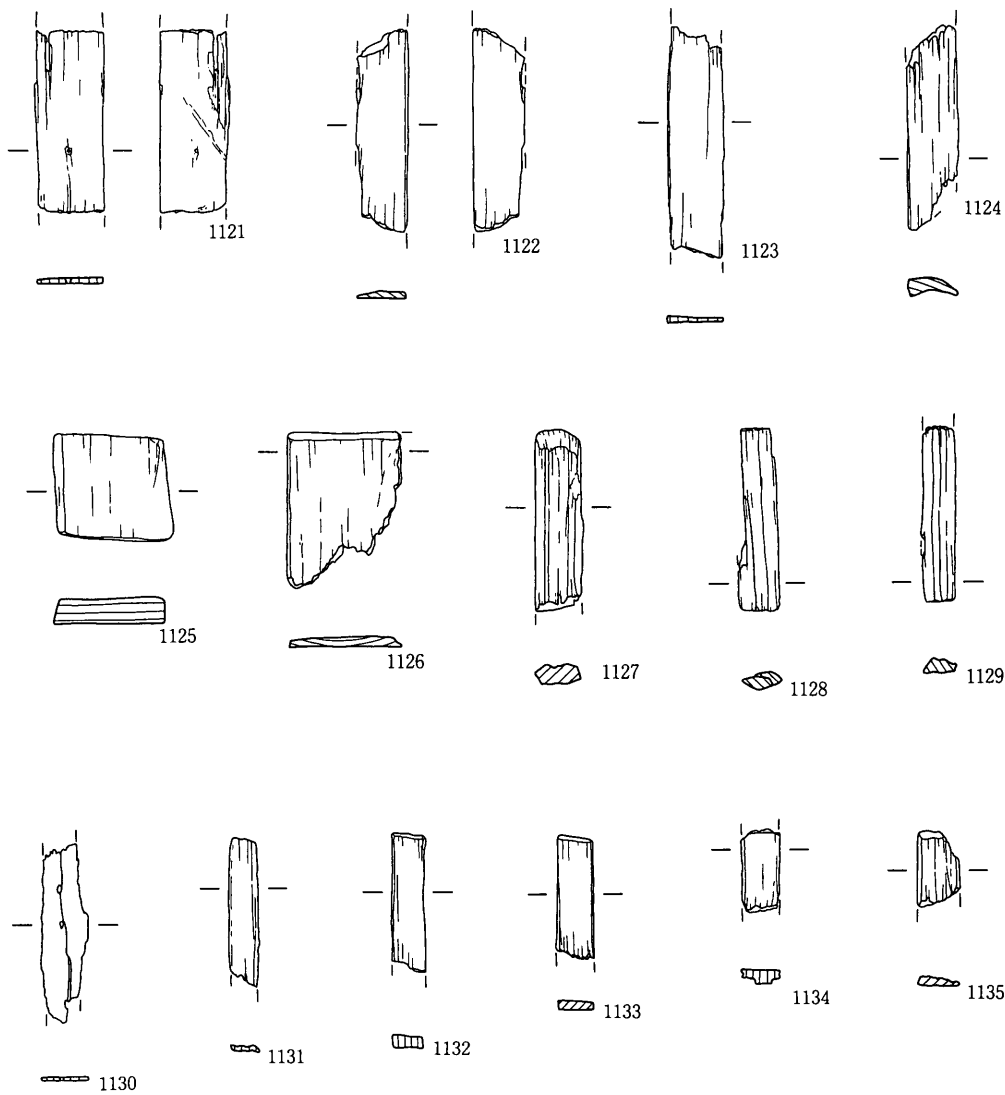
面三角形の板材である。1088・1099・1102は非常に薄い板材である。逆に1085・1093・1100は厚手の板材となっている。

1112～1135は板材である。1112は全長57.8cm、最大幅4.9cmのもので上端部やや下側に釘穴が1箇所ある。1113は下部が把手状になっているが、両側が折れた際に出来たもので本来は長方形の板材である。1114は下方を段状に削出し、裏側にはケビキ線と思われるものが施されている。1116は上下に釘穴と思われるものが4個ずつ施されている。1117は下端部を斜めに削り出し楔状になっている。1118は上端部にケビキ線が3本施されている。



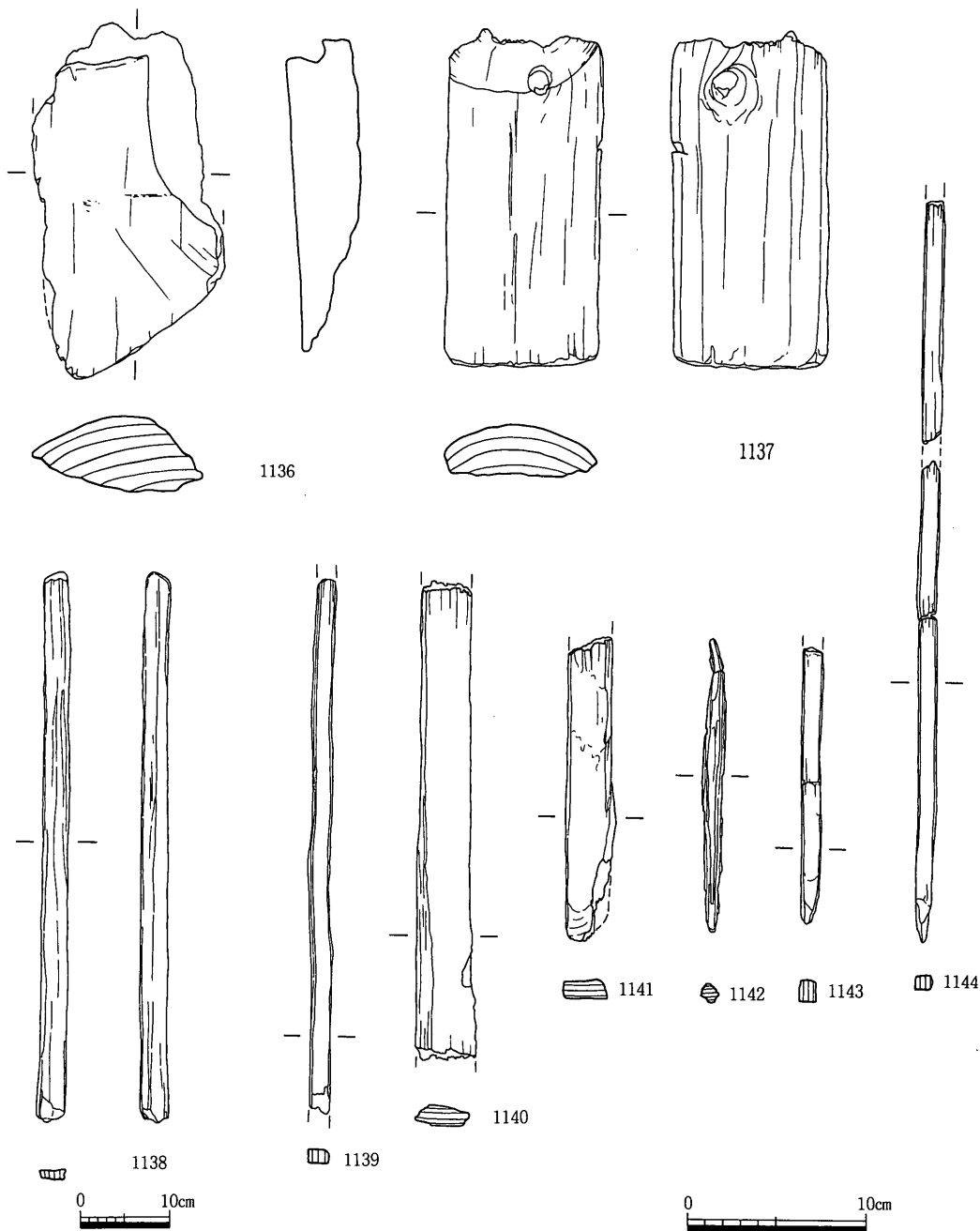
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1112	板材	57.8	4.9	0.4	柁目	上端部付近に釘穴あり	
1113	板材	33.0	8.1	0.9	板目		
1114	板材	24.2	5.5	0.9	柁目	一方の端部が段状になっている	
1115	板材	19.3	4.9	0.6	板目		
1116	板材	17.2	2.4	0.5	柁目	両端に釘穴4個ずつ	
1117	板材	17.9	2.6	0.8	柁目	角材の先端部を斜めに削り出す	
1118	板材	15.6	1.8	0.5	板目	上端部にケビキ線が3本入る	
1119	板材	16.9	2.5	0.3	柁目	薄く整えている	
1120	板材	16.3	2.5	0.7	板目		

第772図 G区SR04出土遺物(47)(1/4, 1/8)



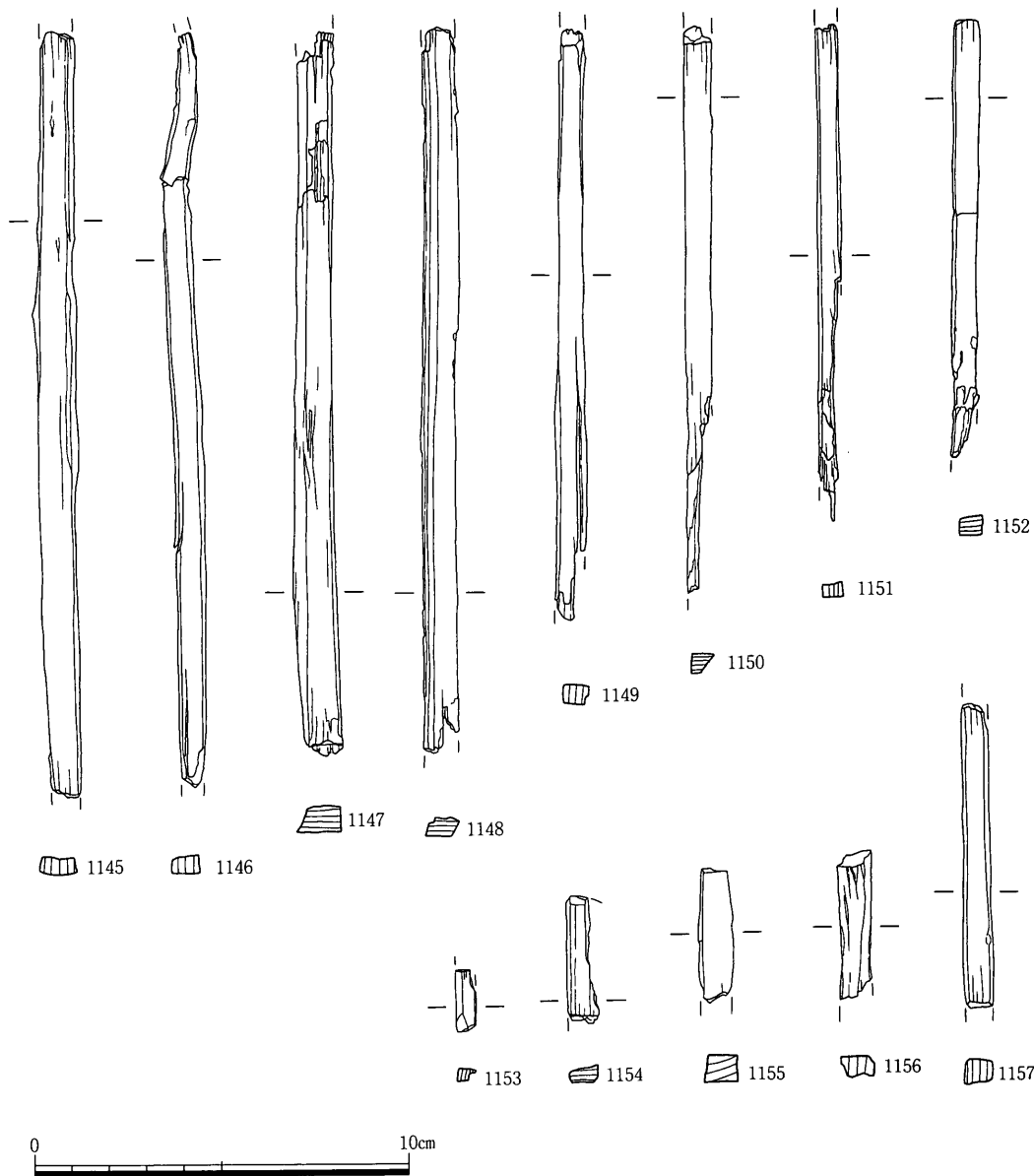
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1121	板材	9.4	3.6	0.3	柁目	中央部に針穴が1ヶ所ある	
1122	板材	10.4	2.7	0.4	柁目		
1123	板材	12.0	3.0	0.3	柁目		
1124	板材	10.6	2.7	0.7	板目		
1125	板材	5.4	5.9	1.3	板目	四辺を丁寧に加工している	
1126	板材	8.0	6.0	0.5	板目		
1127	板材	9.4	2.5	1.0	柁目		
1128	板材	9.3	2.2	0.8	柁目		
1129	板材	9.0	1.7	0.7	柁目		
1130	板材	9.3	2.4	0.2	柁目	穿孔2ヶ所	
1131	板材	7.7	1.6	0.3	柁目		
1132	板材	7.1	1.8	0.7	柁目		
1133	板材	6.3	2.0	0.5	柁目	先端を平らに仕上がる	
1134	板材	5.3	2.0	0.6	柁目	断面凸形になる	
1135	板材	3.9	2.2	0.5	柁目	角を面取りしている	

第773図 G区SR04出土遺物(48)(1/4)



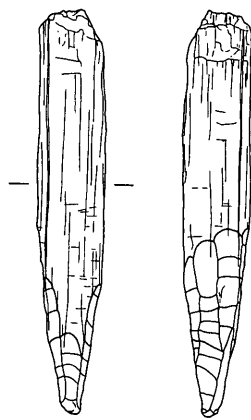
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1136	丸太加工材	19.1	10.3	4.0	板目	端部を斜めに作り出している	
1137	丸太加工材	18.2	8.7	2.7	板目	凸面を磨いている	
1138	棒状木製品 (畜串)	60.3	3.0	0.6	柁目	両端を斜めに加工している	
1139	棒状木製品 (畜串)	29.3	1.2	0.8	柁目		
1140	棒状木製品 (畜串)	26.4	3.4	1.2	板目		
1141	棒状木製品 (畜串)	16.8	2.8	1.1	板目		
1142	棒状木製品 (畜串)	16.1	1.1	1.1	板目		
1143	棒状木製品 (畜串)	15.1	1.1	1.2	柁目	下端に煤が付着している	
1144	棒状木製品 (畜串)	39.5	1.1	0.8	柁目	下端を鉛筆状に削る	

第774図 G区SR04出土遺物(49)(1/4, 1/8)

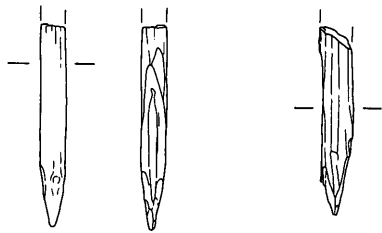
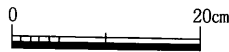


遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1145	棒状木製品 (斎串)	20.5	1.1	0.5	柃目		
1146	棒状木製品 (斎串)	20.2	0.8	0.5	柃目		
1147	棒状木製品 (斎串)	19.4	1.2	0.7	板目	角棒の稜部に切り掛けを施す	
1148	棒状木製品 (斎串)	19.3	0.9	0.5	板目		
1149	棒状木製品 (斎串)	15.5	0.7	0.6	柃目		
1150	棒状木製品 (斎串)	14.8	0.7	0.5	板目		
1151	棒状木製品 (斎串)	13.0	0.6	0.4	柃目		
1152	棒状木製品 (斎串)	11.4	0.7	0.5	板目	上端部を平坦に仕上げる	
1153	棒状木製品 (斎串)	1.7	0.5	0.4	柃目		
1154	棒状木製品 (斎串)	3.4	0.8	0.5	板目		
1155	棒状木製品 (斎串)	3.6	0.9	0.7	板目	上端部を平坦に仕上げる	
1156	棒状木製品 (斎串)	3.9	0.9	0.5	柃目	上端部を平坦に仕上げる	
1157	棒状木製品 (斎串)	8.1	0.8	0.7	柃目		

第775図 G区SR04出土遺物(50)(1/2)

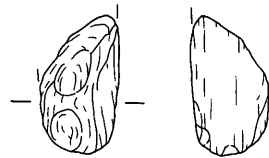


1159

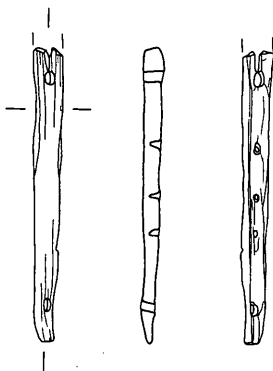
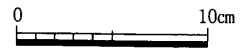


1160

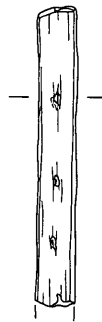
1161



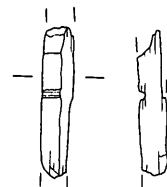
1162



1163



1164



1165



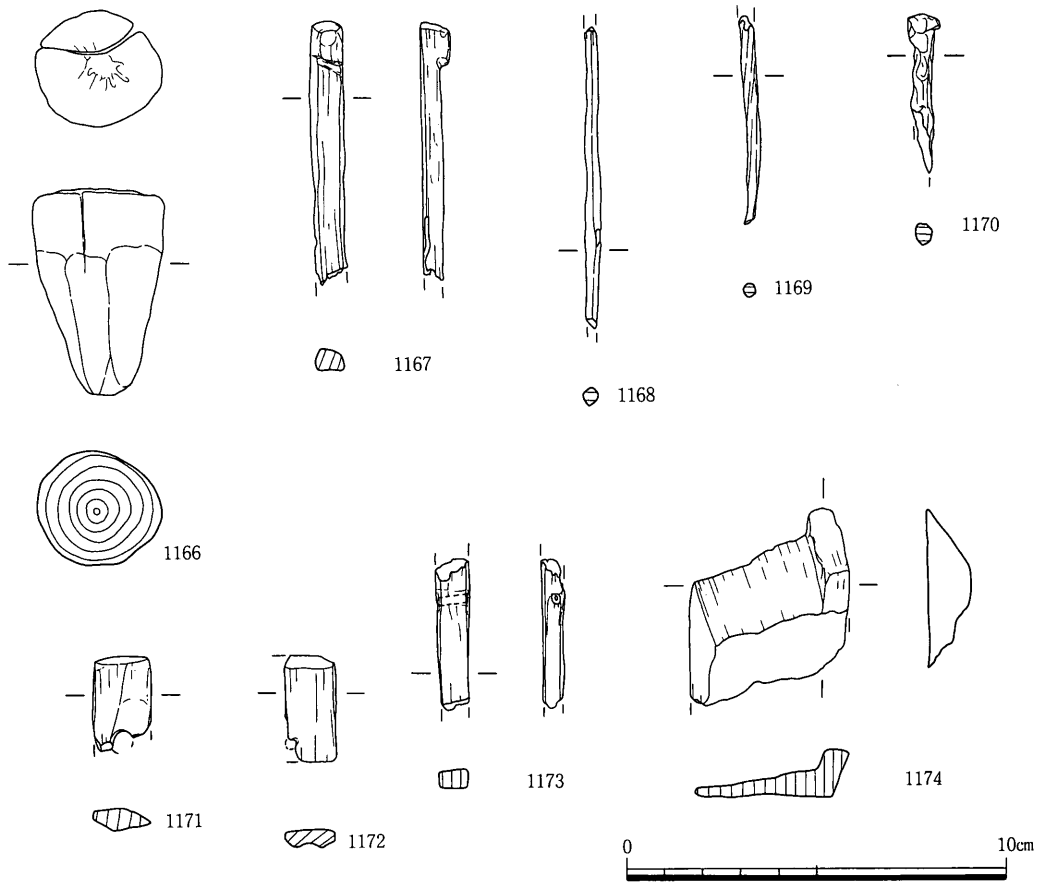
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1159	杭	40.8	0.8	7.1	芯持		
1160	杭	10.3	1.2	1.2	芯持	葦の基を利用し先端を切り尖す	
1161	杭	9.5	1.6	0.6	板目		
1162	杭	7.2	4.0	3.4	芯持	全体に摩滅している	
1163	火燄板	7.6	0.7	0.5	証目	2ヶ所貫通、3ヶ所未貫通の孔がある	
1164	火燄板	7.8	1.0	0.5	証目		
1165	火燄板	3.9	0.8	0.7	証目	穿孔1ヶ所	

第776図 G区SR04出土遺物(51)(1/2, 1/4, 1/8)

1121は中央部に釘穴が1箇所認められる。1123は両端と表裏を非常に丁寧に加工しており模造品の一部の可能性がある。1125は4辺を丁寧に加工し、積み木のようにになっている。1130は薄い板材の中央部に穿孔が2箇所認められる。1135は角を丁寧に面取りしている。

1136・1137は丸太材を割って加工したもので、1136は端部を斜めに削り出し、1137は先端を斜めに削り落とし、凸面を磨いている。

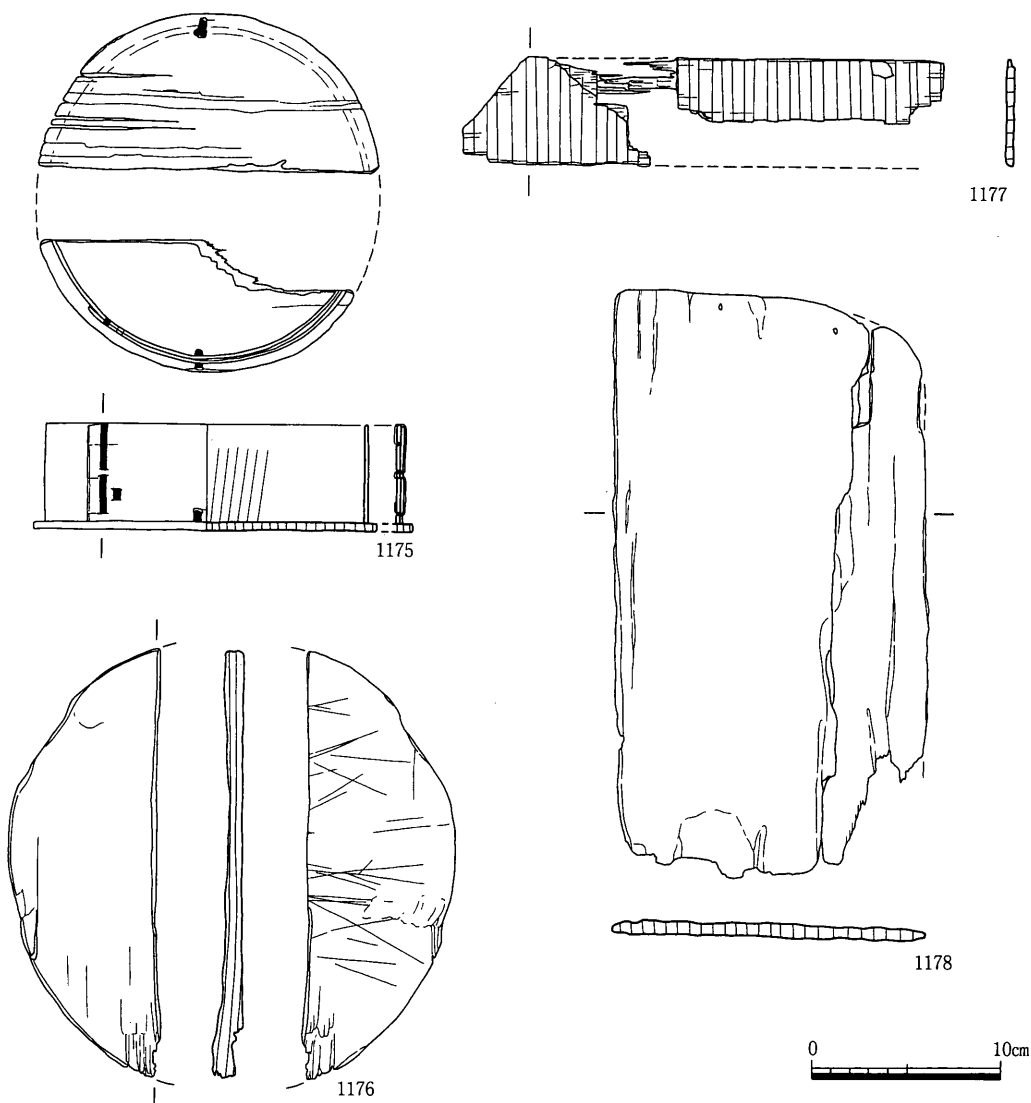
1138～1157は棒状木製品で斎串の可能性のあるものである。1143は下端部に煤が付着し、1144は下端部を鉛筆状に削る。1152・1155・1156は上端部を平坦に仕上げている。



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1166	独楽	5.3	3.5	3.1	芯持		
1167	木釘	6.8	0.9	0.8	柁目	頭部を方形に作り出す	
1168	木釘	7.8	0.4	0.5	板目		
1169	木釘	5.4	0.4	0.4	板目		
1170	木釘	4.1	0.9	0.6	板目	頭部を方形に作り出す	
1171	部材	2.5	1.5	0.6	柁目	穿孔1ヶ所	
1172	部材	2.8	1.3	0.5	柁目	穿孔1ヶ所	
1173	部材	4.0	0.9	0.5	柁目	側面に穴をあげ、木釘をさしている	
1174	建築部材	4.5	4.2	1.2	柁目	一方を錘状に加工している	

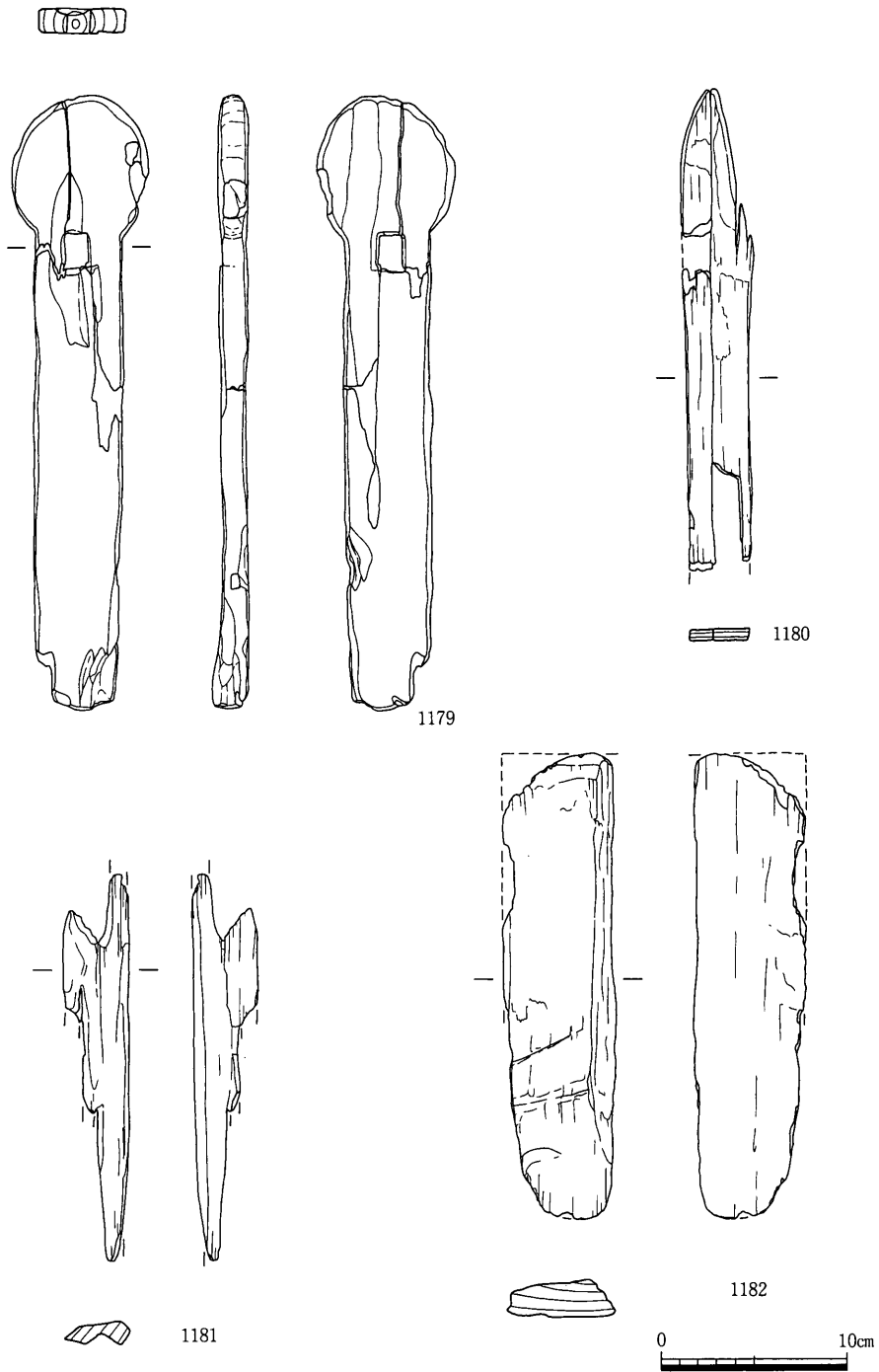
第777図 G区SR04出土遺物(52)(1/2)

1159は丸太材を使用した杭で、先端を鉛筆状に削り尖らせている。1160は葦の茎の先端を切って尖らせている。1161は下端部を両側から削って尖らせている。1163～1165は火鑽板で、1163は2箇所の貫通した孔と3箇所の貫通しない孔がある。1166は円錐形で下部を鉛筆状に削り尖らせて、上面は丁寧に磨いている。下端部の突出部は欠損しているが独楽と考えられる。1167～1170は木釘で、1167・1170は頭部を方形に作り出している。1173は棒状の板材の側面に孔を開け、木釘と思われるものを差し込んでいる。1174は片方を槿状



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1175	曲物容器	18.2	18.2	0.4	底板 柱目	底板と側板は樺皮の紐で綴じ合わす	
1176	曲物容器 (底板)	22.0	7.8	1.3	板目	留め跡はない、一部に煤が付着	
1177	曲物容器 (側板)		5.3	0.4	板目	ケビキ線を施している	
1178	方形容器 (底板)	30.3	16.4	0.7	柱目	薄い板状に仕上げ、2ヶ所に穿孔あり	

第778図 G区SR04出土遺物 (53) (1 / 4)



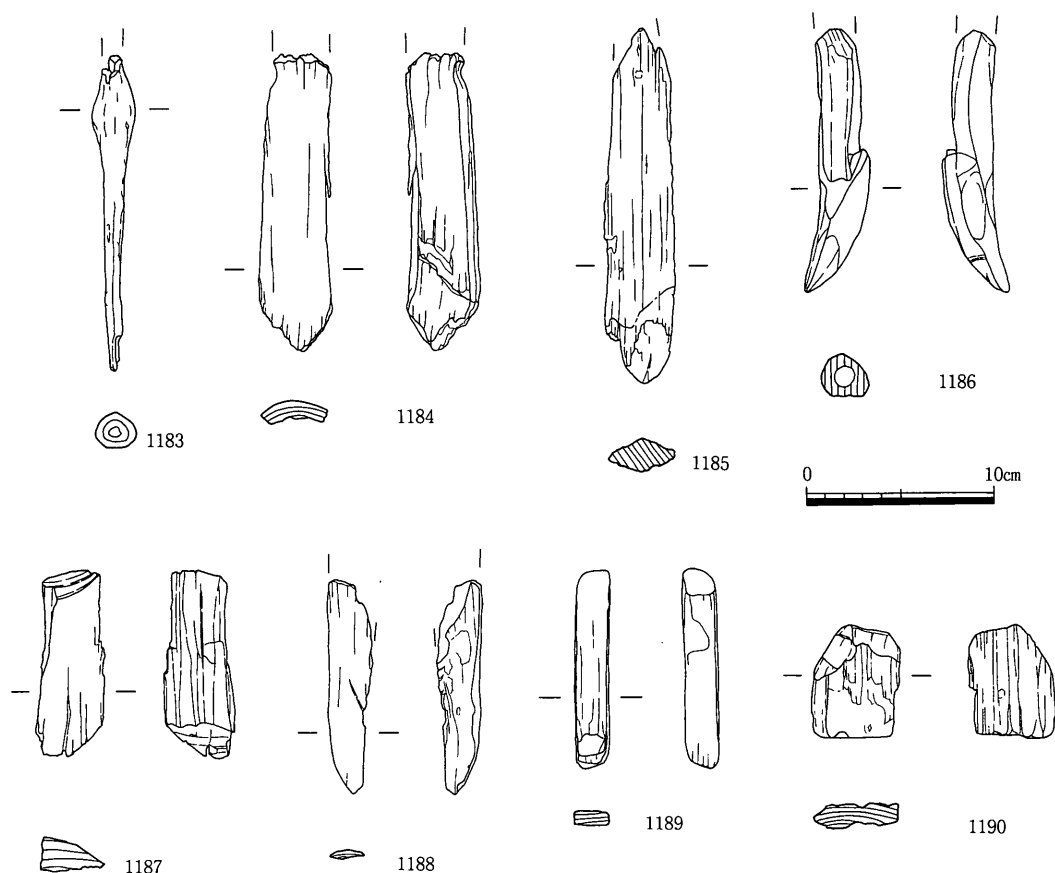
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1179	用途不明	32.4	7.2	1.3	芯持		
1180	用途不明	25.2	3.6	0.7	板目	先端を剣先状に尖らせている	
1181	用途不明	20.5	3.5	1.3	柁目	上部が二股に分かれている	
1182	用途不明	22.8	5.8	1.9	板目	先端部を斜めに加工し、刃状に作り出す	

第799図 G区SR04出土遺物(54)(1/4)

に加工している。

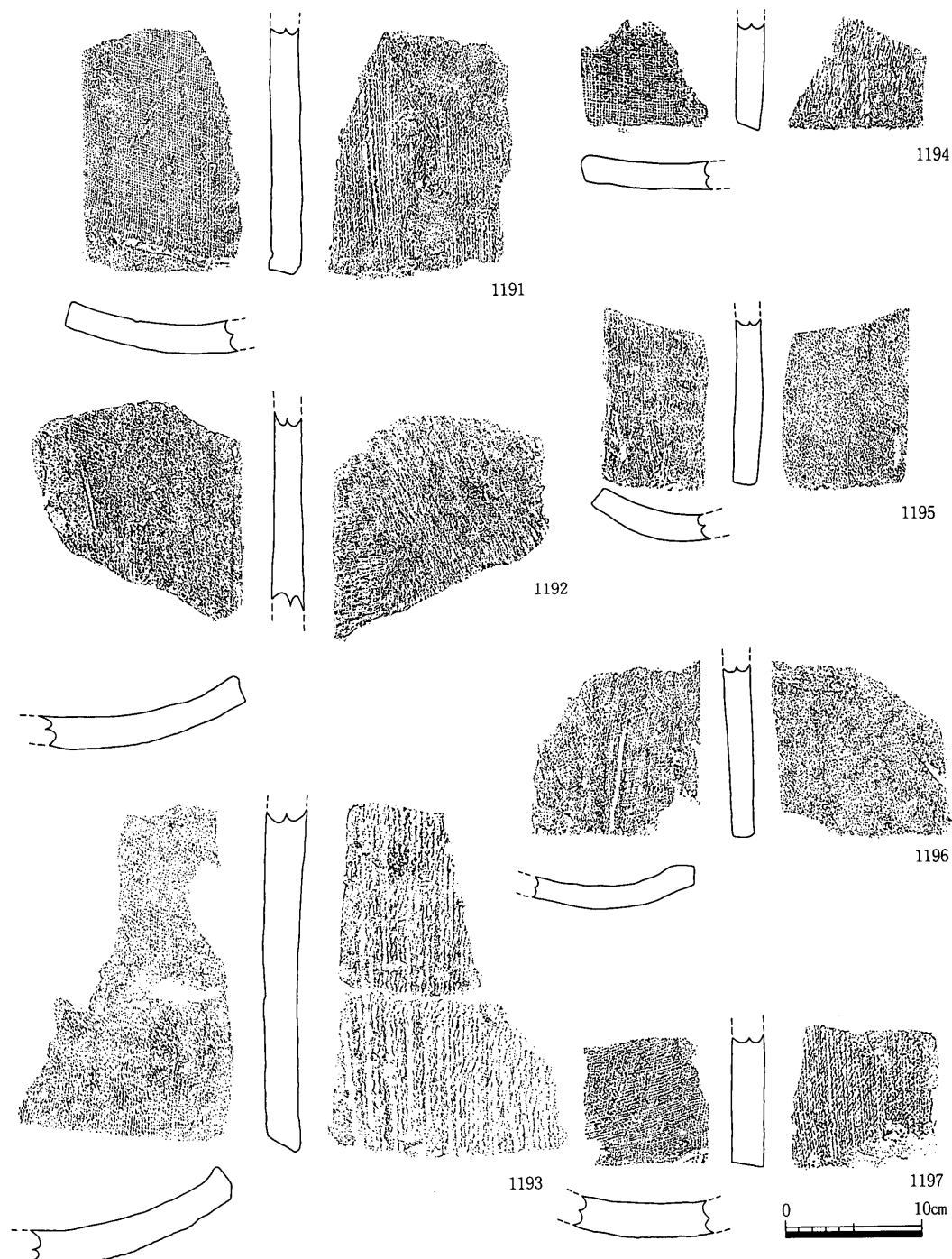
1175～1178は容器である。1175は円形曲物容器で底板の直径は18.2cmで、底板のやや内側に側板を立てて樺皮の紐を用いて接合している。側板は1列の2段綴じであるが、上部は外綴じ、下部は内綴じになっている。1176は円形曲物の底板と考えられるが側板との接合痕は認められない。周縁の一部に煤が付着している。1178は方形容器の底板と考えられ側板との接合孔が2箇所認められる。

1179～1190は用途不明の木製品である。1179は上部を円形に作り出し、そこから長く柄が伸びて下端部が肥厚しているものである。円形部から柄部に変換する部分に方形の穿孔



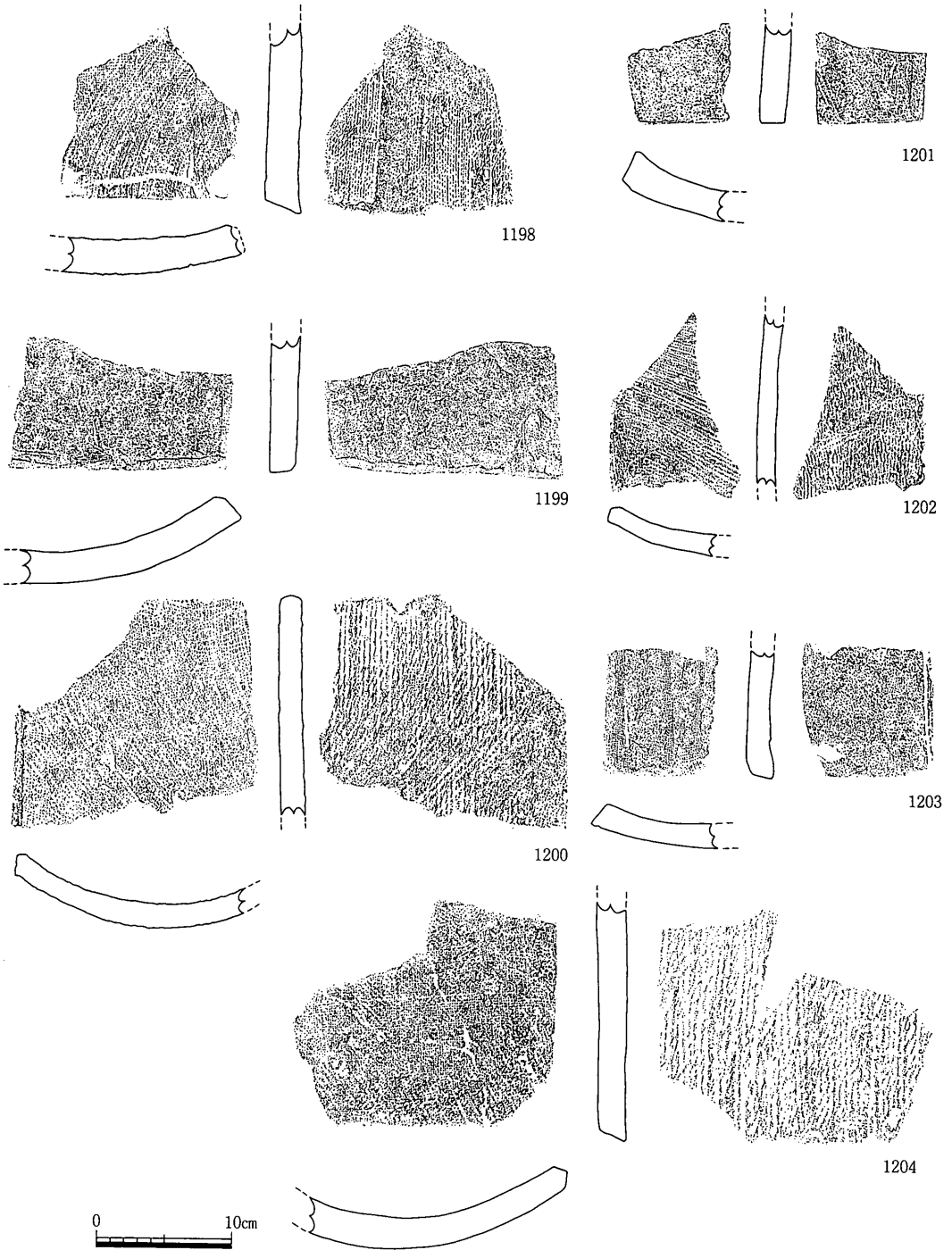
遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	木取り	形態・手法の特徴	備考
1183	用途不明(浮子)	12.0	1.7	1.4	芯持	枝のふくらんだ部分を利用	
1184	用途不明	12.2	2.8	0.7	板目	竹べらのように仕上げている	
1185	用途不明	13.6	2.7	1.3	柾目	先端部が焼け、籠状に作り出す	
1186	用途不明	10.0	2.0	1.7	柾目	端部を湾曲させ、鋭利に尖らせている	
1187	用途不明	7.3	2.5	1.4	板目	籠状になる	
1188	用途不明	8.4	1.7	0.4	板目	先端を刀状にする	
1189	用途不明	7.8	1.3	0.5	板目		
1190	用途不明(楔?)	4.4	3.4	0.9	板目	先端部を2方向からカットしている	

第780図 G区SR04出土遺物(55)(1/4)



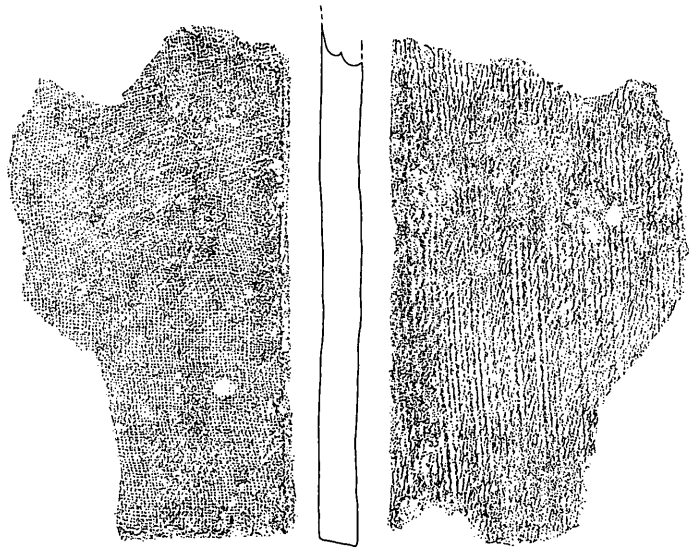
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
1191	平瓦	2.2	縄目叩き	布目圧痕	1	1 6	粗・普通	灰白	良好	凹面布端痕、凹面糸切り痕	17.2
1192	平瓦	2.2	縄目叩き	板ナデ	1		中・普通	灰白・灰	良好	凹凸面糸切り痕、斜位の叩き	13.7
1193	平瓦	2.9	縄目叩き	布目圧痕	6	1 7	中・普通	灰オリーブ	良好	凸面糸切り痕、一枚作り	24.5
1194	平瓦	1.8	縄目叩き	布目圧痕	7	1 6	粗・普通	灰黄	良好		7.6
1195	平瓦	2.0	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	1 6	中・普通	灰白	良好		11.7
1196	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕→ナデ	8	1 6	中・普通	灰白・灰	良好		12.2
1197	平瓦	2.4	縄目叩き	布目圧痕		1 6	中・多	灰白・灰	良好	凹面糸切り痕	9.7

第781図 G区SR04出土遺物(56)(1/5)

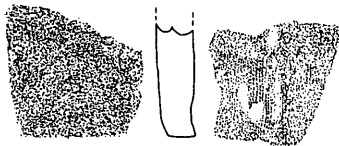


遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
1198	平瓦	2.4	縄目叩き	布目圧痕	2	17	中・普通	灰白	良好	凹面糸切り痕、布端部痕	13.6
1199	平瓦	2.4	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	18	中・普通	灰白	良好		9.2
1200	平瓦	1.8	縄目叩き	布目圧痕	2	16	中・多	暗灰黄	不良	凹凸面糸切り痕	15.5
1201	平瓦	2.0	ナデ	ナデ	4	16	中・普通	灰白	良好		7.1
1202	平瓦	1.4	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	6		粗・普通	灰	良好	凹凸面糸切り痕	12.1
1203	平瓦	1.8	ナデ	布目圧痕→ナデ	1	16	中・普通	灰	良好	凸面側縁部に分割線	9.4
1204	平瓦	2.4	縄目叩き	布目圧痕	6	16	粗・普通	にぶい黄	良好	凹面糸切り痕	16.6

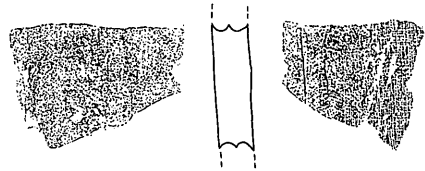
第782図 G区SR04出土遺物(57)(1/5)



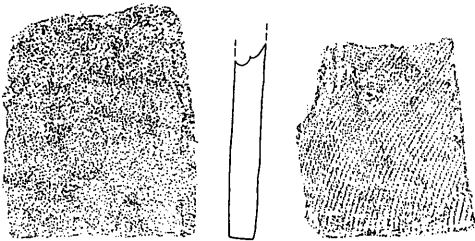
1205



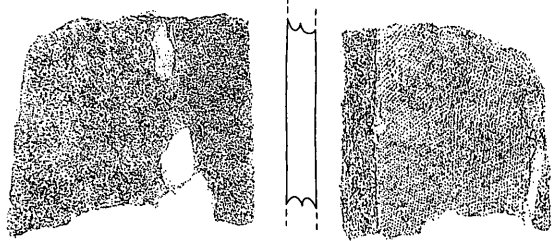
1206



1207



1208



1209



0 10cm

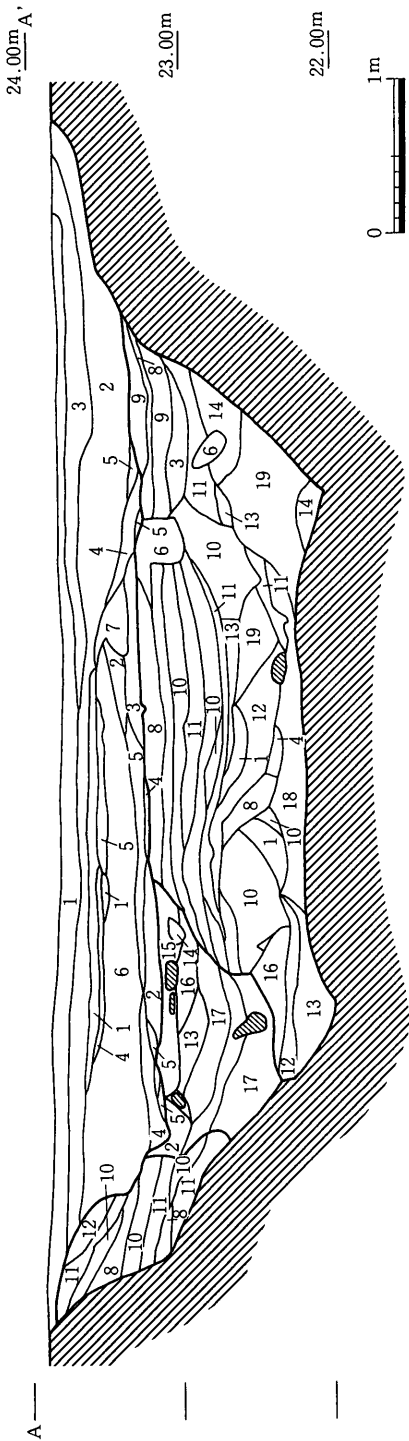
遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
1205	平瓦	2.5	縄目叩き	布目圧痕	1	1 7	粗・普	灰黄	不良	凹面糸切り痕	33.3
1206	丸瓦	2.3	ナデ	布目圧痕	1	1 6	粗・普	灰黄	良好	凹面布織じ痕有り	7.5
1207	丸瓦	2.3	ナデ	布目圧痕・ケズリ	1	1	中・少	灰	良好		8.3
1208	丸瓦	1.9	ナデ	布目圧痕	1	1 6	中・普	灰	良好	凹面糸切り痕	15.0
1209	丸瓦	2.2	ナデ	布目圧痕	1	1	粗・普	灰	良好	凹面糸切り痕	12.4

第783図 G区SR04出土遺物(58)(1/5)

が施されている。1180は先端を剣先状に尖らせている。1181は上部を2又に削っている。1182は下端部を斜めに削っているが、巧く削れなかったのか鉄器の刃の痕が段状に付いている。1183は枝の膨らんだ部分を利用し先端を細くし、浮子のような形をしている。1184・1187はヘラのような形に仕上げている。1185の先端には煤が付着している。1186は先端部を湾曲させ先端を鋭利の尖らせている。先端部は中空になっている。1188は先端を刀状に加工し、1189は両端を斜めに加工している。1190は先端部を2方向から削り落としており楔のような機能をもった部材かも知れない。

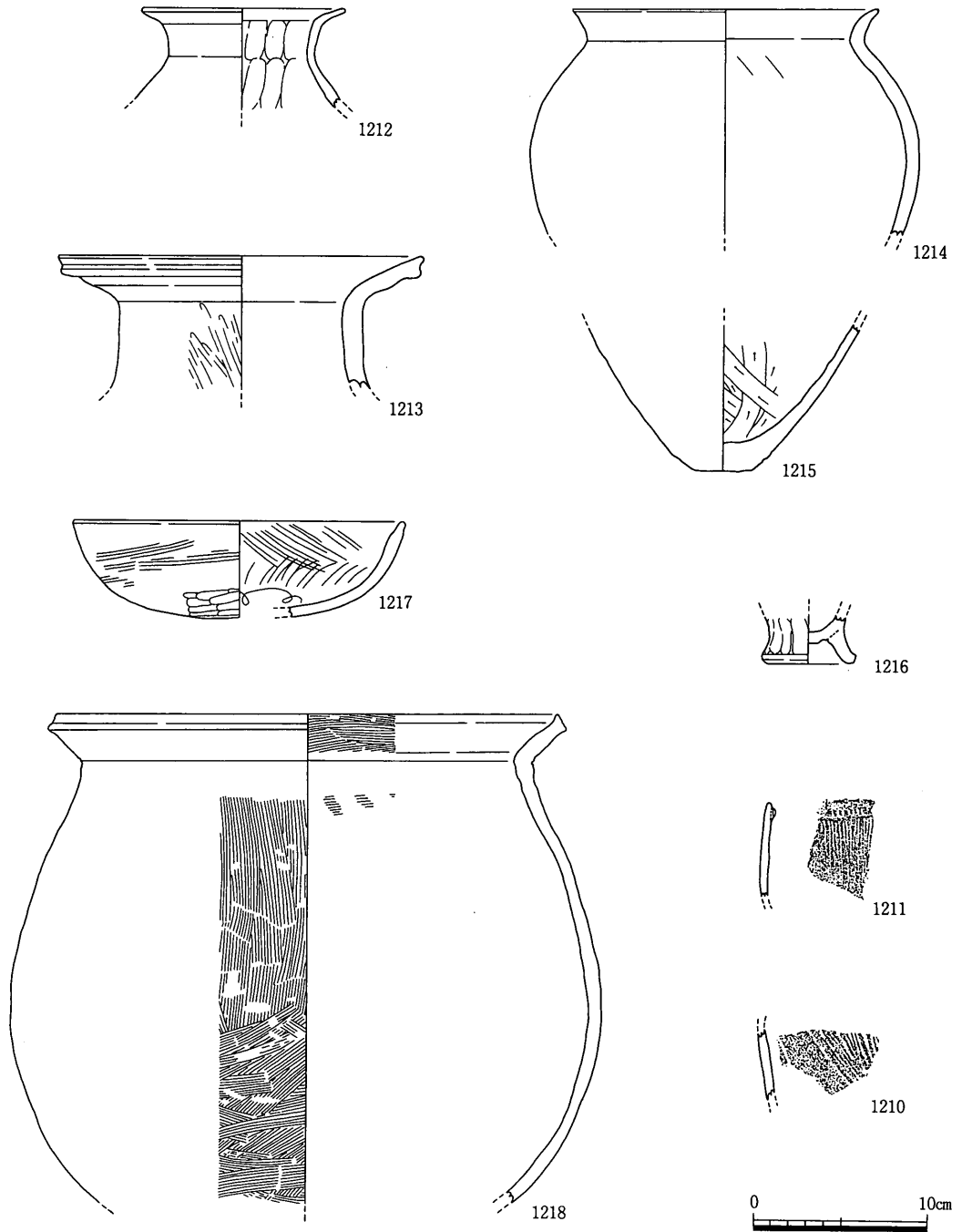
1191～1209は上層から出土した瓦で、1191～1205は平瓦である。1191・1197は凹面に糸切り痕が認められ、凸面には縄目叩きを施している。1192は凹・凸面に糸切り痕が認められ、凸面には横位と斜位の縄目叩きが施されている。1193は凸面に糸切り痕が認められ、はなれ砂が施されている、一枚作りによるものと考えられる。1194は凸面に縄目叩きを重ねている。1198は凹面に糸切り痕と布の端部痕が認められ、凸面には縄目叩きを施している。1200・1202は凹・凸面に糸切り痕が認められ、前者の端部凹面側には煤が付着している。後者は凸面に縄目叩きを施した後にナデている。1203の凸面の側縁部に分割線と思われる痕跡がある。1204・1205は凹面に糸切り痕が認められ、凸面には縄目叩きを2方向から施している。1206～1209は丸瓦で1206の凹面には布綴じ痕が認められる。1207は側縁の凹面側に幅広にヘラケズリを施している。1208・1209の凹面には糸切り痕が認められる。

以上S R04出土の遺物を紹介したが、S R04は上下2層に大別され、下層は縄文時代後期～弥生時代後期の遺物が、上層は古代以降の遺物が出土した。この中では上層から出土した多量の木器が注目される。この木器は斎串・人形などの木製模造品が主体となっている。木製模造品の圧倒的多数は斎串で、これら木製模造品に交じって少量の墨書土器が出土している。上層の出土土器から7～9世紀の時期が主体となっているが、どの時期に斎串を中心とした木製模造品が伴うかは不明であるが、いずれにしても古代律令時代における祭祀のあとと思われ、「神□門」という墨書土器が出土したことから、付近に公的施設がありそれに伴う祓所のような性格をもっていたのかも知れない。



- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1. 茶褐色砂質土 | 11. 黒褐色粘土 |
| 2. 黒褐色砂質土 | 12. 黒色粘土 (粘性強い) |
| 3. 暗茶褐色砂混り粘質土 | 13. 暗灰色砂混り粘質土 |
| 4. 褐色砂混り粘質土 | 14. 青灰色粘土 |
| 5. 淡褐色砂質土 | 15. 暗茶褐色砂質土 (マンガン含む) |
| 6. 褐色砂質土 (マンガン含む) | 16. 灰色砂混り粘質土 |
| 7. 暗褐色砂混り粘質土 | 17. 灰色細砂 |
| 8. 暗褐色砂混り粘質土 (粘性弱い) | 18. 灰色砂 |
| 9. 暗褐色粘質土 (粘性弱い) | 19. 褐色砂 |

第784図 G区S R05断面図 (1/50)



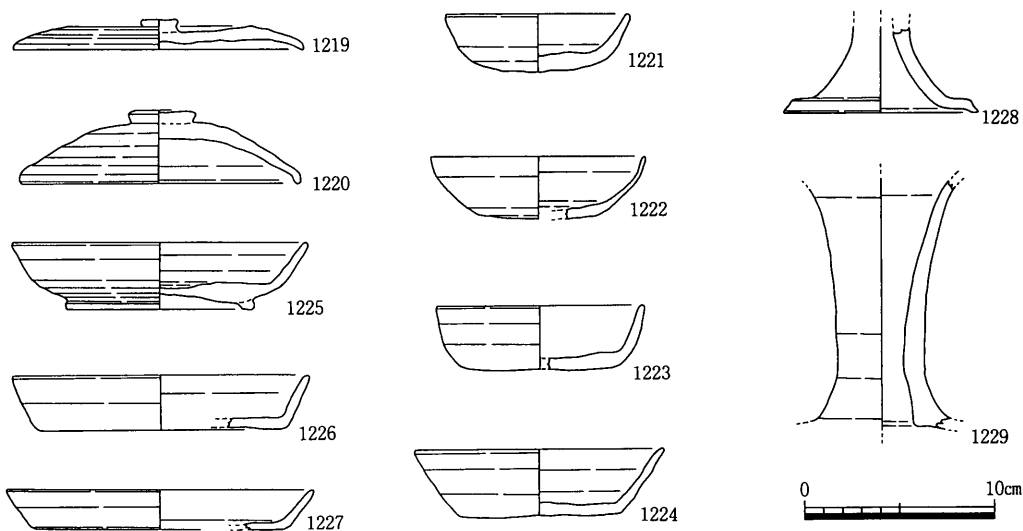
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1210	縄・深鉢				中・普	良好	黒褐	不明	ミガキ		
1211	縄・深鉢				中・普	良好	暗灰黄・黒褐	ナデ	ミガキ		角閃石
1212	弥・皿	11.8			細・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		金襴母
1213	弥・皿	21.0			中・普	良好	にぶい赤褐	ミガキ	ナデ		金襴母・角閃石
1214	弥・甕	17.6			中・普	良好	暗灰・灰白	ナデ	ナデ		
1215	弥・甕			3.4	粗・普	良好	にぶい黄褐	ナデ	ケズリ		金襴母
1216	弥・製塩			5.0	中・普	不良	灰	ナデ	ナデ		
1217	土・杯	19.0			微・普	良好	浅黄橙	ナゲ・ミガキ・ケズリ	ナデ	放射2段+蛇紋状暗文	
1218	土・甕	28.8			中・普	良好	灰オリーブ	ハケ目	ハケ目・ナデ		

第785図 G区S R04~05出土遺物(1)(1/4)

S R 05 (第784~788図)

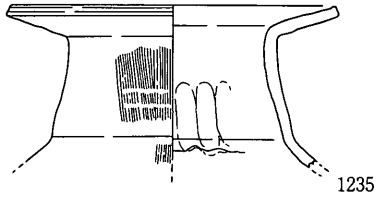
G 1 区の北部で、S R 04との交点から北西方向に向き調査区外へと至る旧河道である。S R 04の箇所です説明したが、S R 05はS R 04に切られるものと考えられる。幅は7.8m、深さは1.6mほどで、断面形は逆台形に近くなっている。埋土は上から50cmほどを境に上下2層に大別され、上層は砂礫土が堆積し、下層は粘土と砂が互層に堆積している。部分的に検出したのみでS R 04との交点部分は不明瞭で、交点部分で出土した遺物が本来どちらの旧河道に伴うのか判別不能のものがあるため、この部分出土の遺物はS R 04~05出土とした。しかしS R 05がS R 04に切られることとS R 04出土遺物の状況から古代以降の遺物はS R 04出土の可能性が高い。

1210~1230はS R 04~05出土遺物である。1211は口縁部のやや下に断面三角形の刻み目突帯を貼り付け、内面にはヘラミガキを施している。1213は口縁部端部を斜め上方につまみ出している。1216は製塩土器の脚部で、脚部端部は外側に屈曲し外側に面を作る。1217は土師器杯で口縁部端部はナデのため細くなっている。体部外面の上半はヘラミガキ、下半はヘラケズリで、内面は放射状暗文を2段施し見込み部には螺旋状暗文を施している。

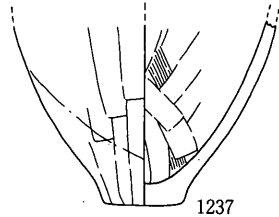


遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1219	須・杯蓋	15.2	1.6		精緻	良好	灰白	ケズリ・ナデ	ナデ		
1220	須・杯蓋	14.3	3.8		中・普	良好	灰白	ケズリ・ナデ	ナデ		
1221	須・杯	9.6	3.0	3.7	微・普	良好	灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
1222	須・杯	11.2	3.2		微・普	良好	灰白	ナデ	ナデ		
1223	須・杯	11.0	3.4		中・普	良好	灰白・灰	ナデ	ナデ		
1224	須・杯	13.1	3.5	8.5	細・普	良好	黄灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
1225	須・杯	15.5	3.5	9.8	中・普	良好	灰白	ナデ	ナデ	底ヘラ切り	
1226	須・杯	15.4	2.8	12.7	中・普	不良	灰白~灰	ナデ	ナデ	底ヘラ切り→ナデ	
1227	須・皿	16.0	2.1	13.5	精緻	良好	青灰	ナデ	ナデ		
1228	須・高杯			10.2	精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ		
1229	須・壺				細・普	良好	灰	ナデ	ナデ		

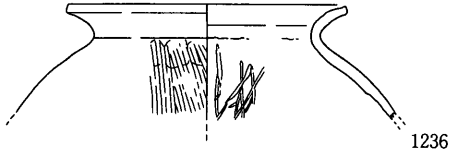
第786図 G区S R 04~05出土遺物(2)(1/4)



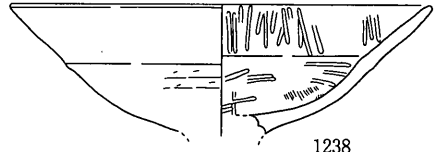
1235



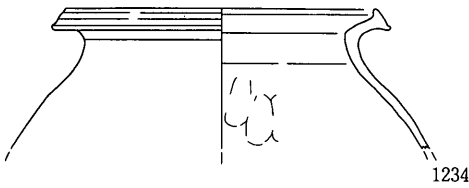
1237



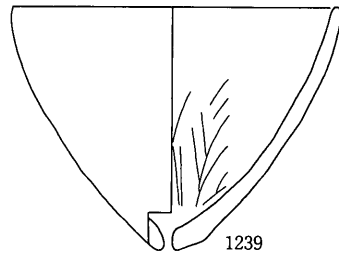
1236



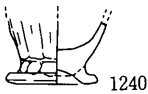
1238



1234



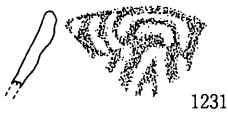
1239



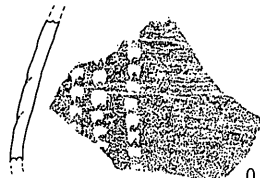
1240



1232



1231

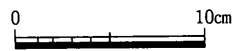
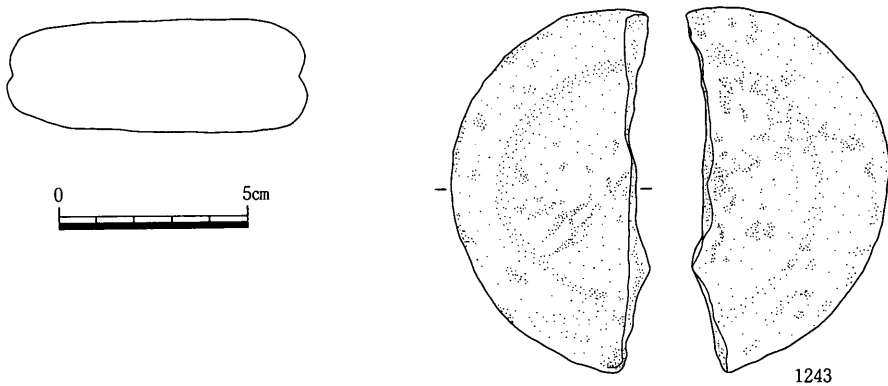
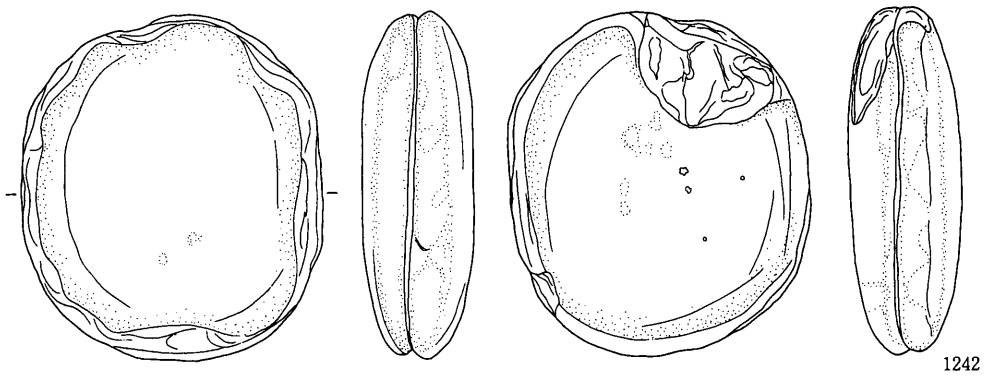
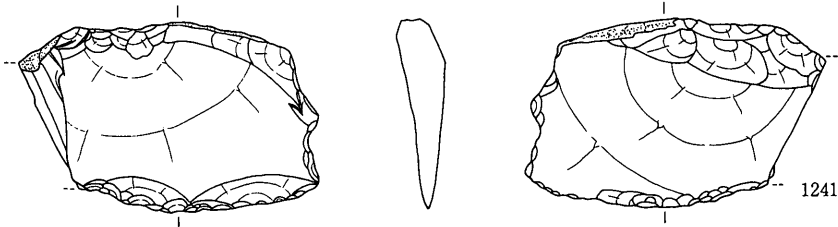
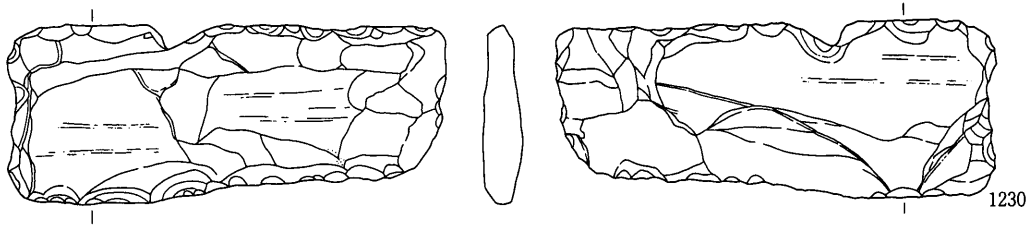


1233



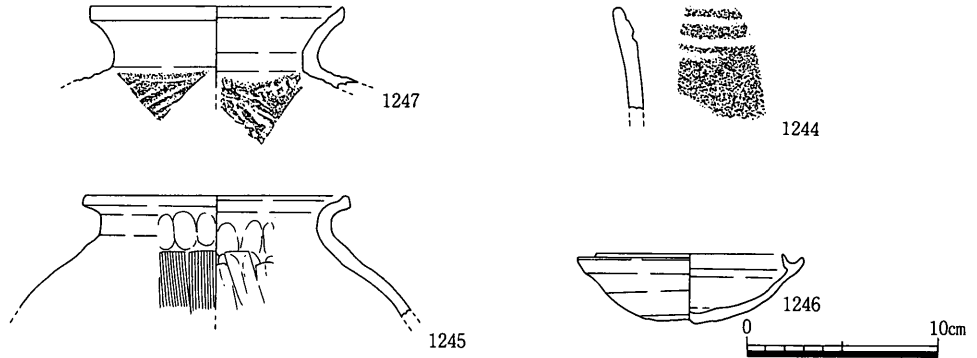
遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1231	細・深鉢				中・多	良好	黄灰	不明	不明		
1232	細・深鉢				中・普	良好	灰黄褐	ナデ	不明		
1233	細・深鉢				細・多	良好	黄灰	貝殻条痕	ナデ	半蔵竹管の刺突文	角閃石
1234	弥・壺	16.0			中・普	良好	褐	ナデ	ナデ		
1235	弥・壺	17.5			細・普	良好	にぶい橙	ハケ目・ナデ	ナデ		角閃石
1236	弥・壺	14.6			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ナデ	内面に工具痕多い	金雲母・雲母
1237	弥・壺			4.1	細・普	良好	黒・ブイ黄橙	板ナデ	ハケ目→板ナデ		角閃石
1238	弥・高杯	22.2			中・普	良好	にぶい貴	ナデ・ケズリ	ミギキ・ワ目→ミギキ	円盤充填	金雲母・角閃石
1239	弥・飯	17.2	12.7		中・普	良好	明黄褐	ナデ	板ナデ		
1240	弥・製塩				中・多	良好	にぶい黄	ケズリ	ナデ		

第787図 G区SR05出土遺物(1/4)



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法的特徴	備考
1230	打製石包丁	11.5	4.6	1.0	69.5	結晶片岩		
1241	スクレイパー	7.3	4.9	1.1	49.0	サヌカイト		
1242	石槌	9.1	7.9	3.0	296.4	砂岩	側面に切れ目（沈線）が1周する	
1243	砥石	19.2	9.8	5.6	1643.7	砂岩		

第788図 G区SR04~05・05出土遺物 (1/2, 1/4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法的特徴	備考
1244	縄・浅鉢				粗・普	良好	にぶい黄橙	不明	不明		
1245	弥・壺	14.1			中・普	良好	にぶい橙	ハケ目	ナデ		金罌母
1246	須・杯身	9.9	4.0		精緻	良好	灰白	ナデ	ナデ	底へら切り	
1247	須・甕	13.4			精緻	良好	灰白	ナデ・叩き	ナデ		

第789図 G 1 区包含層出土遺物 (1 / 4)

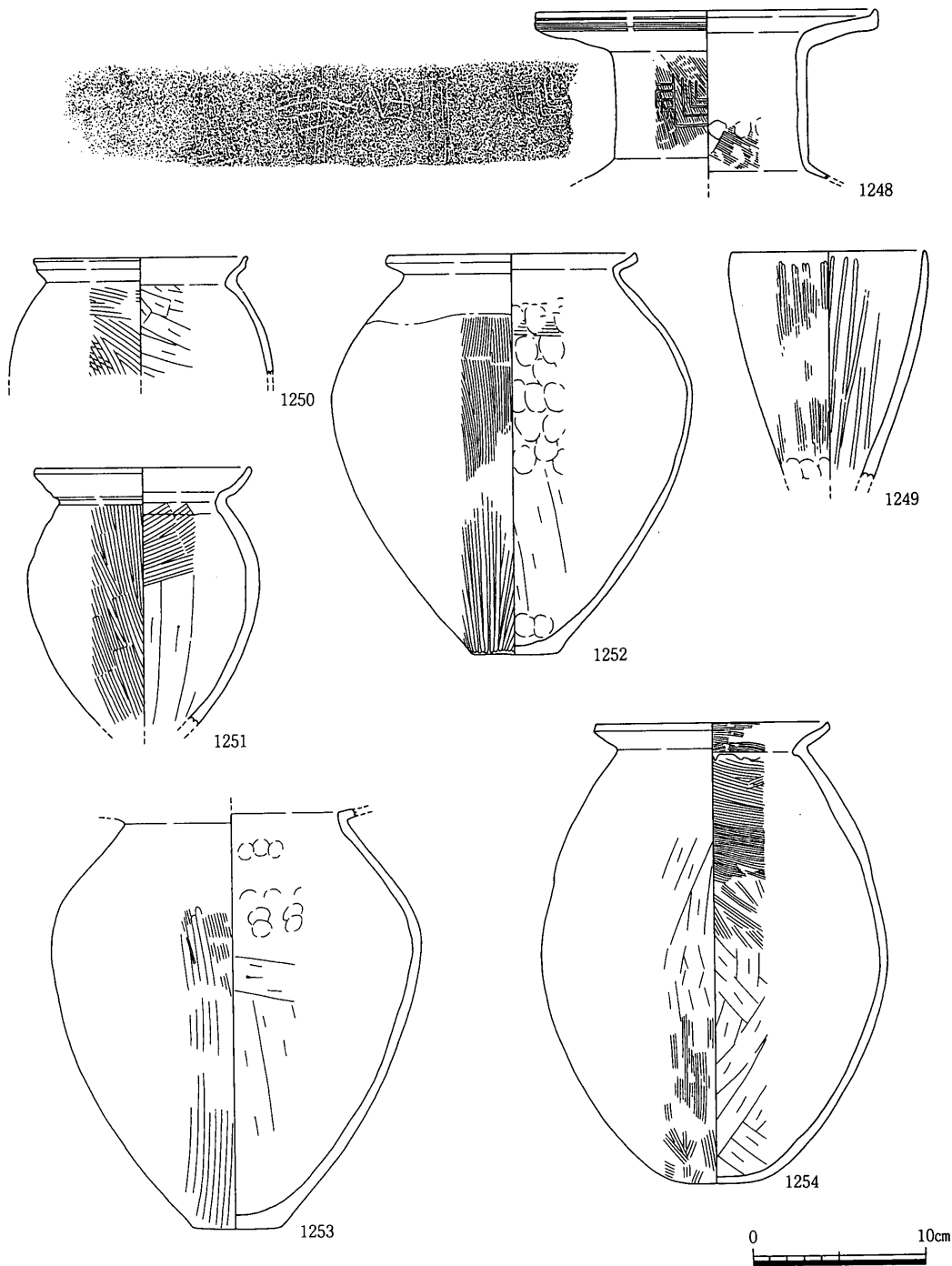
1218は甕で体部は下膨れ気味で、口縁部端部を上方に拡張し内面にハケ目を施している。1220は須恵器杯蓋で天井部は高くドーム形に近く、口縁部端部は下方を向く。1222は口縁部が屈曲している。1225は須恵器杯で立ち上り部やや内側に高台を貼り付けている。また底部は中央部が薄くなっている以外は火膨れ状に肥厚している。1229は須恵器の長頸壺の頸部で緩く外反して開く。1230は石庖丁で平面形は長方形で刃部もほぼ直線で、両側には僅かに抉りを入れている。結晶片岩製である。

1231～1243はS R05出土遺物である。1231は口縁部外面が肥厚し文様を施し、1232は口縁部内面が肥厚し文様を施す。1233は外面に二枚貝の条痕が見られ、半截竹管による刺突文が縦に施されている。縄文時代晩期の原下層式と思われる。1236は体部内面に工具痕が見られる。1238は杯部は中程で屈曲し口縁部は直線的に延びる。口縁部内面にはへらミガキを縦方向に施している。1240は製塩土器で脚部は屈曲し端部は外側を向く。1241はスクレーパーで下部に調整を加えている。1242は石錘で平面形は円形で全体的に扁平である。側縁には切れ目が巡っている。

(3) 包含層出土遺物 (第789～792図)

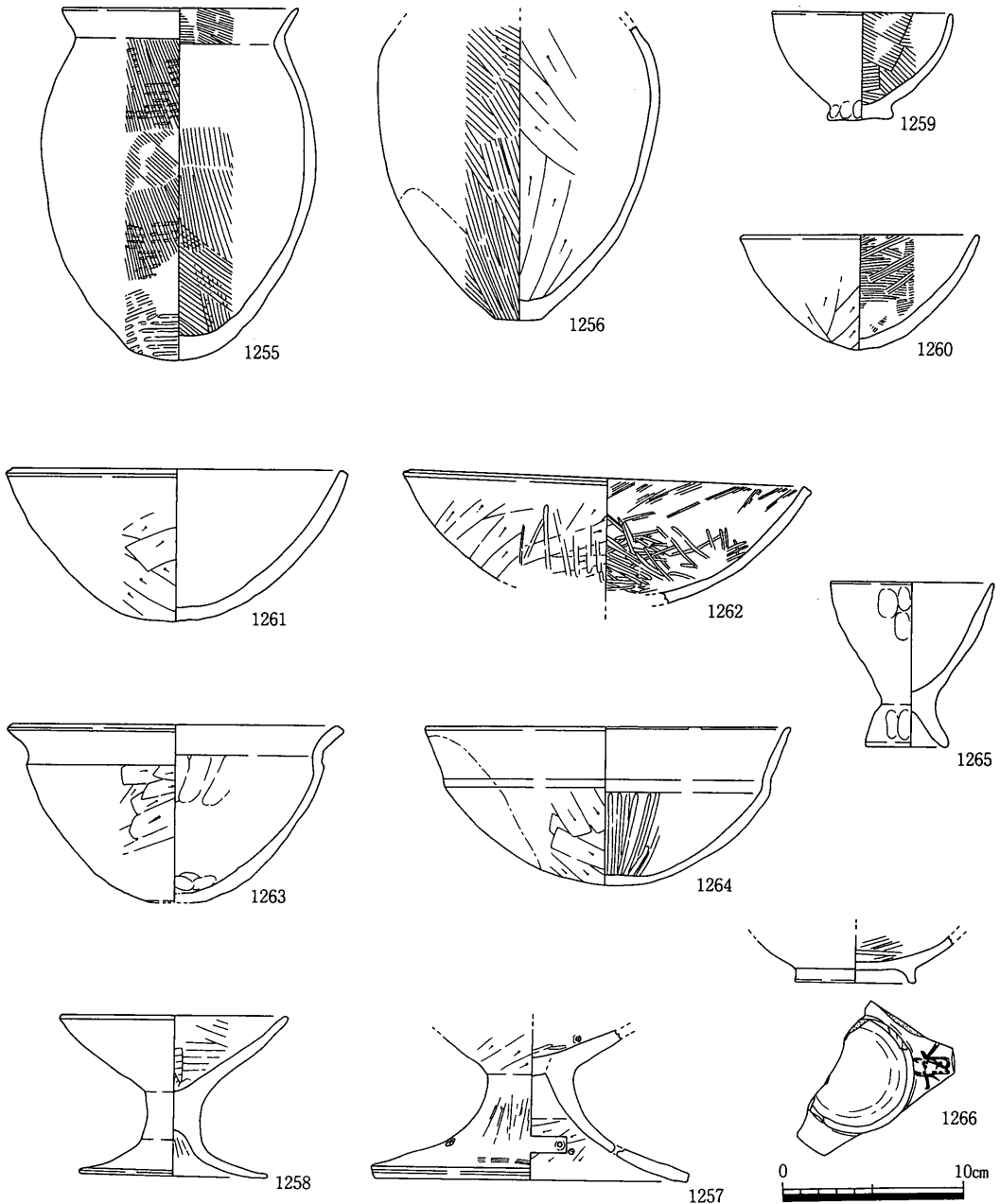
1244～1247はG 1 区包含層出土遺物である。1244は縄文時代の浅鉢の口縁部と思われ、口縁部外面に沈線が2条巡っている。1246は須恵器杯身で立ち上りは短く湾曲する。1247は須恵器甕で体部外面には粗い叩きが施されている。

1248～1269はG 2 区包含層出土遺物である。1248は口縁部端部を上方に拡張している。頸部外面には記号状の絵画を描いている。内容不明な絵の上に直線とL字形に屈曲した線



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1248	弥・盆	19.6			微・普	良好	にぶい黄褐	ナデ・ハケ目	ナデ・ハケ目	頸部外面に記号状絵画	金罍母・絵画土器
1249	弥・盆	11.2			中・普	良好	橙	ミガキ	ミガキ		角閃石
1250	弥・甕	12.4			粗・普	良好	にぶい黄褐	ハケ目	ケズリ		金罍母・角閃石
1251	弥・甕	12.6			中・普	良好	黒褐	ハケ目	ハケ目・ケズリ		金罍母
1252	弥・甕	14.2	22.9	5.0	粗・普	良好	ニブイ黄橙・黒	ハケ目・ミガキ	ナデ・ケズリ	内面に炭化物付着	
1253	弥・甕			5.2	中・普	良好	黄褐・黒	ハケ目→ミガキ	ケズリ・ナデ	内面に炭化物付着	
1254	弥・甕	13.5	26.4	5.0	中・普	良好	ニブイ黄褐・黒	ケズリ→ハケ目	ハケ目・ケズリ		金罍母

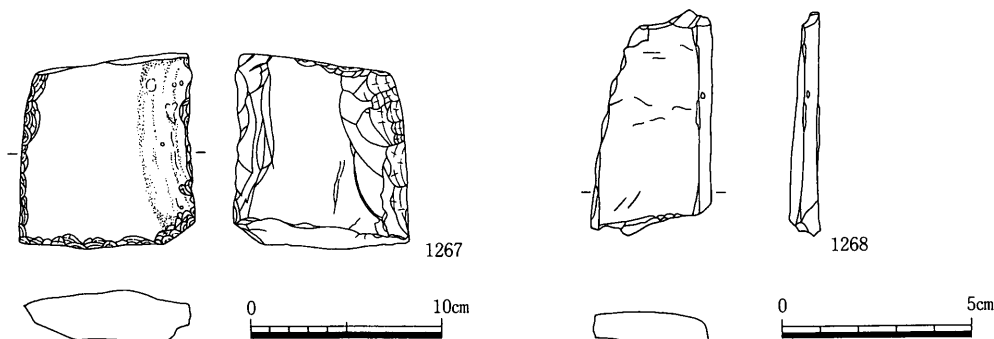
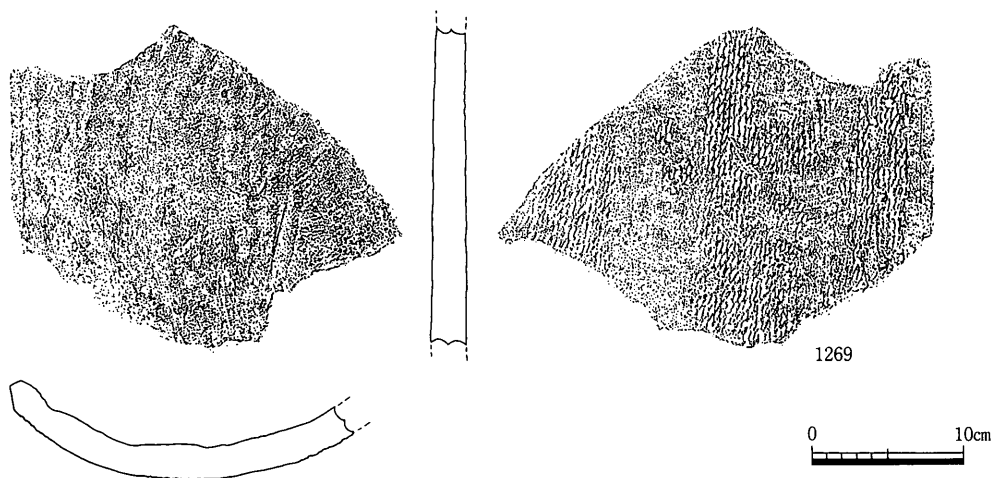
第790図 G 2 区包含層出土遺物 (1) (1 / 4)



遺物番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	外面	内面	形態・手法の特徴	備考
1255	弥・甕	13.2	18.8	5.0	中・普	良好	灰黄	叩き→ハケ目	ハケ目・ナデ		
1256	弥・甕			2.5	中・普	良好	灰黄褐	ハケ目	ケズリ		
1257	弥・高杯			17.4	中・普	良好	にぶい黄橙	ナズリ→ナデ・板ナデ	ケズリ・ナデ	円盤充填、五方透し	金雲母
1258	弥・器台	12.4	8.9	10.5	中・普	良好	橙	ナデ	ハケ目		金雲母
1259	弥・鉢	10.0	5.8	3.6	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ハケ目		金雲母
1260	弥・鉢	13.3	6.2		中・普	良好	にぶい褐	ナデ・ケズリ	ハケ目		金雲母
1261	弥・鉢	18.2	8.3		粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	ナデ		金雲母
1262	弥・鉢	21.8			中・普	良好	にぶい褐	ケズリ→ミガキ	ハケ目→ミガキ		
1263	弥・鉢	18.1	9.8	3.2	中・普	良好	にぶい黄橙	ナデ・ケズリ	ナデ		金雲母
1264	弥・鉢	20.5	8.7		中・普	良好	赤褐・橙	ナデ・ケズリ	ナデ・ミガキ		金雲母・角閃石
1265	弥・鉢	9.0	8.9	4.5	粗・普	良好	にぶい黄橙	ナデ	ナデ		
1266	黒A・碗			6.6	微・普	良好	コイ黄橙・黒	ナデ	ミガキ		黒母「林」

第791図 G2区包含層出土遺物(2)(1/4)

を描いている。1249は細頸部の頸部で緩く内湾して立ち上る。内・外面とも縦方向にヘラミガキを施している。1250は口縁部端部をつまみ出している。1251は口縁部は途中で屈曲して立ち上り、2段目の立ち上りは大きくなっている。体部内面の上半はハケ目、下半はヘラケズリになっている。1252は体部は倒卵形で外面上半はハケ目、下半はヘラミガキを施している。内面の上半には指押さえ痕が顕著である。底部は安定した平底になっている。1254の体部は長楕円形で体部最大径は中央やや下側にある。体部外面はヘラケズリの後にハケ目を施し、内面は上半にハケ目、下半にヘラケズリを施している。口縁部と体部の境の内側は突出している。1255は体部外面は叩きの後にハケ目を施し、底部は丸底に近くなっている。1257は脚部は大きく開き端部は外側に面を作り沈線が1条巡っている。杯部下部に貫通していない穿孔が1つある。円盤充填になっている。1258は脚部は短く大きく屈曲



遺物番号	器種	現存長	最大幅	最大厚	重量	石材	形態・手法の特徴	備考
1267	打製石斧	9.9	9.1	2.6	414.8	安山岩		
1268	磨製石斧	5.5	3.1	0.9	23.3	結晶片岩		

遺物番号	器種	厚さ	凸面	凹面	側面	端面	胎土	色調	焼成	形態・手法の特徴	残存長
1269	平瓦	2.2	縄目叩き→ナデ	布目圧痕→ナデ	6	中・普	灰白		良好		20.5

第792図 G 2区包含層出土遺物(3)(1/2, 1/4, 1/5)

して開く。受け部内面には粗いハケ目を施す。1259は底部は高台状に突出している。1262は浅い鉢で、外面はヘラケズリの後にヘラミガキを少々加える。内面はハケ目の後に下半にヘラミガキを施す。1263は口縁部が大きく外反し、体部との境を強くナデている。1264は高杯の杯部の形をした鉢である。口縁部は体部から段状に屈曲した後に立ち上り、端部を若干外側へつまみ出す。体部内面にはヘラミガキを施している。1265は小型の脚台付き鉢でエッグスタンドのような形である。口縁部端部は強くナデて先細りになっている。1266は黒色土器A類の椀で底部には断面方形のしっかりとした高台が付く。立ち上り部外面の高台のすぐ横に「林」の墨書が施されている。1267は打製石斧、1268は磨製石斧の一部と考えられる。

3. 小結

G区は遺構としては旧河道を5条検出したのみであるが、旧河道からは土器・木器を中心とする多量の遺物が出土した。旧河道出土ということで遺物の一括性に問題はあるが、S R02では土器は旧河道の底に貼りつくように出土しており、遺物自体もローリングを受けておらず残りは非常に良好なものであった。S R02出土の土器は弥生時代IV期のものが微量含まれていたがこれらはローリングを受けており、他の圧倒的多数の弥生時代V期後半のものとは区別される。従ってS R02出土の弥生時代V期の土器はかなり一括性が高いものと考えられ、高松平野東部の当該期の土器の研究に良好な資料を提供するものと言えよう。

次にS R04では大きく上下2層に分かれるが、上層からは確実なもので168点の斎串と5点の人形、1点の刀形が出土したことが注目される。胴部中央部のみで斎串と思われるが断定出来ないものや図化出来なかったものも含めると200点を超えるものとなる。一括性は乏しく7～9世紀の時期幅が考えられる。しかしS R04のG1区部分で集中して出土しており、祓所的なものと考えられ付近に公的施設が存在したことが予想される。県内でも斎串が出土した遺跡は坂出市下川津遺跡、善通寺市金蔵寺下所遺跡、高松市太田下・須川遺跡、大川郡志度町鴨部・川田遺跡などが知られる程度である。また斎串自体も形態にバリエーションがあり斎串の研究や、人形や他の木製模造品などの出土は少なかったが律令制祭祀を考えるうえで貴重な資料と言える。

第4章 自然科学調査の成果

第1節 縄文土器の胎土分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

縄文土器には須恵器や中世陶器のように生産地である窯跡は残されていないので、胎土分析によって産地を推定することは困難である。しかし、K, Ca, Rb, Srなどの因子を使って、縄文土器の胎土を分類することは可能である。他方、縄文土器は従来の考古学研究によって型式的に分類されている。型式分類の結果と胎土分析による分類結果がどのように対応するかは興味のあるところである。とも角、同型式の縄文土器が同じ胎土をもっているか、それとも異なる胎土をもっているのか、言い換えれば、同じ型式の縄文土器でも別々の場所で作られたものであるかどうかなどの今までには得られていない情報が胎土分析によって得られることになる。

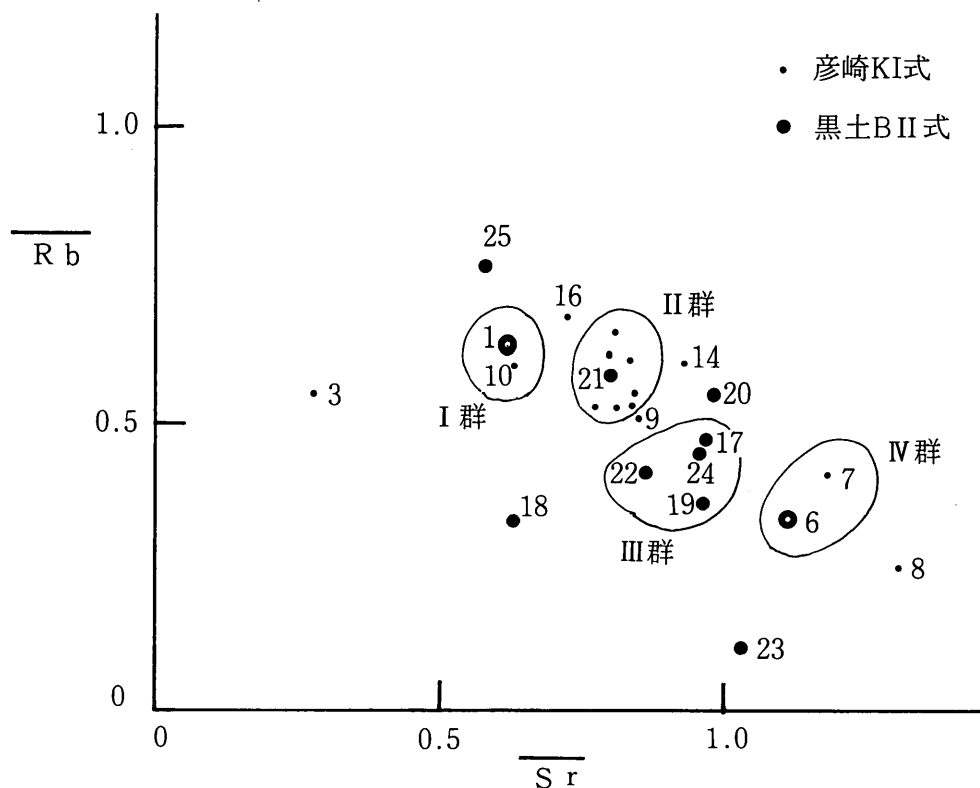
本報告では前田東・中村遺跡から出土した縄文土器を蛍光X線分析法によって胎土分析した結果について報告する。

試料の調製は須恵器の場合と同じで、縄文土器表面を研磨して表面に付着している汚物を除去したのち、100メッシュ以下に粉碎した。粉末試料はプレスして固め錠剤試料にして蛍光X線分析を行った。

分析値は第4表にまとめてあるが、岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で表示してある。

はじめに、Rb, Srの生データを使ってRb-Sr分布図を作成した。第793図に示してある。Rb-Sr分布図は窯跡出土須恵器の胎土研究の結果、地域差を有効に表示する分布図であることが明らかになった。したがって、今回分析した縄文土器の胎土を定性的に把握するには、まずRb-Sr分布図を作成する必要がある。第793図をみると、縄文土器は大きくばらついて分布しており、土器型式は彦崎KI式、黒土BII式の2型式しかないにもかかわらず、土器胎土はさらにバラエティーに富んでいることを示している。

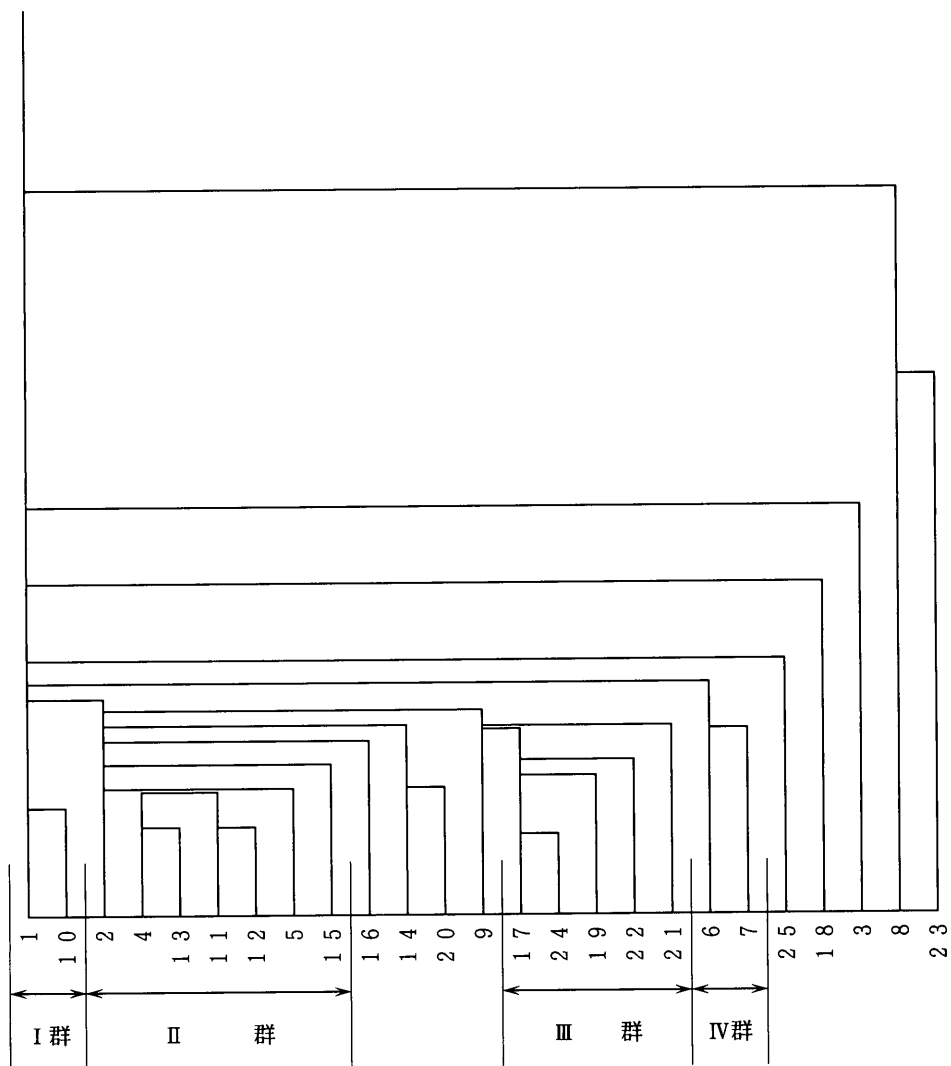
そこで、クラスター分析によって土器胎土を分類してみることにした。K, Ca, Rb, Srの4因子を使い、最短距離法でクラスター分析した結果を第794図に示す。横列に並



第793図 前田東・中村遺跡出土縄文土器のR b - S r 分布図

んだ番号は試料番号である。縦軸に類似度を示してあるが、類似度の谷間のどこで区切るかについては任意性がある。ここではNa 1, 10をI群, Na 2 ~ 15をII群, Na 17 ~ 21をIII群, Na 6, 7をIV群に分類した。Na 25, 18, 3, 8, 23の5点は分類することはできなかった。第793図のR b - S r 分布図でもこれら5点は大きくばらついて分布しており、分類できないことはよく理解できる。これらのうち、Na 3, 8は型的には彦崎K I式であり、Na 18, 23, 25は黒土B II式である。同じ土器型式でも胎土は明らかに異なることを示している。Na 3とNa 8は同じ彦崎K I式でも別場所で作られた縄文土器であり、また、Na 18, Na 23とNa 25は同じ黒土B II式でも別の場所で作られた縄文土器であることを示している訳である。

次に、II群、III群をみってみる。II群の7点 (Na 2, 4, 13, 11, 12, 5, 15) はいずれも彦崎K I式であり、III群に分類された5点 (Na 17, 24, 19, 22, 21) はいずれも黒土B



第794図前田東・中村遺跡出土縄文土器のクラスター分析（K, Ca, Rb, Sr因子使用）

Ⅱ式である。この場合は胎土による分類が土器型式と一致した例である。この場合には同じ型式の土器は同じ胎土をもっており、同じところで作られた可能性をもつと理解される。また、No 1, 10はⅠ群、No 6, 7はⅣ群に分類されているが、いずれも、土器型式は異なる組合わせである。

縄文土器は須恵器とは違い、あちこちで、しかもかなり任意性のある場所で作られた可能性がある。その結果が第793図に示すように、Rb-Sr分布図上で大きくばらつくことになったと理解される。逆に言えば、前田東・中村遺跡にはあちこちから縄文土器が持

No.	遺物番号	土器型式	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
1	C594	彦崎K I 式	0.521	0.495	2.100	0.632	0.633	0.210
2	D232	〃	0.763	0.480	0.972	0.645	0.813	0.308
3	D262	〃	0.456	0.530	1.580	0.546	0.277	0.236
4	D255	〃	0.656	0.495	0.901	0.533	0.844	0.263
5	D248	〃	0.583	0.494	0.813	0.533	0.814	0.264
6	D271	〃	0.400	0.697	1.400	0.334	1.110	0.345
7	D258	〃	0.460	0.770	1.480	0.414	1.118	0.471
8	D257	〃	0.329	1.420	2.610	0.249	1.310	0.383
9	D265	〃	0.382	0.597	1.870	0.511	0.854	0.247
10	D242	〃	0.474	0.486	1.680	0.603	0.631	0.242
11	D303	〃	0.687	0.472	0.596	0.611	0.835	0.304
12	D293	〃	0.689	0.487	0.718	0.616	0.801	0.284
13	D289	〃	0.641	0.456	0.692	0.555	0.841	0.286
14	D296	〃	0.534	0.532	1.690	0.603	0.932	0.272
15	D309	〃	0.507	0.450	1.760	0.533	0.772	0.267
16	D305	〃	0.755	0.407	1.450	0.682	0.717	0.332
17	C705	黒土B II 式	0.482	0.686	2,690	0.471	0.966	0.412
18	C709	〃	0.383	0.514	2.810	0.333	0.626	0.290
19	C711	〃	0.477	0.644	1.240	0.358	0.957	0.420
20	C704	〃	0.526	0.558	1.210	0.549	0.982	0.345
21	C714	〃	0.492	0.624	2.680	0.578	0.803	0.470
22	C715	〃	0.465	0.637	2.680	0.409	0.862	0.416
23	C718	〃	0.189	1.780	4.370	0.114	1.030	0.378
24	C723	〃	0.466	0.667	1.950	0.446	0.962	0.353
25	C722	〃	0.636	0.332	1.020	0.757	0.580	0.170

第4表 前田東・中村遺跡出土縄文土器の分析値

ち込まれたと推察される。そして、土器型式はかなり広い範囲にわたって広がっていたものと思われる。

第2節 C, D区出土の土器にかかわる赤色顔料物質の微量化学分析

武庫川女子大学薬学部

安田 博幸 金杉 直子

前田東・中村遺跡は、高松市の東端、三木町の立石山から南西に下る緩斜面に位置しており、弥生時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。平成3年度の調査で、C区で平安時代の区画溝と考えられる幅広の溝と掘立柱建物跡群が、D区では縄文時代から弥生時代までの旧河川群の跡が検出された。

このたび、上記C, D区出土の土器に付着・残存している赤色顔料物質について、化学分析による鑑定を依頼されたので、筆者らの常法¹⁾とするろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による微量化学分析を行い、所見を得たので報告する。

試料の外観および分析用試料の採取

- 試料1 C区SD09より出土の内側が黒色、外面が明赤褐～灰白色の土器の外面に付着している赤色顔料の約1mgを鋼針を用いて注意深く削り取り分析用試料とする。
- 試料2 D2区包含層より出土の土師器皿の内側に付着している赤色顔料の約1mgを鋼針を用いて注意深く削り取り分析用試料とする。
- 試料3 D2区包含層より出土の土師器皿（試料2と同一個体）の外側に付着している赤色顔料の約1mgを鋼針を用いて注意深く削り取り分析用試料とする。

試料検液の作製

上記の分析用試料をそれぞれのガラス尖形管に移し、濃硝酸1滴と濃塩酸3滴を加え、加温して酸不溶性成分を溶解させたのち、適当量の蒸留水を加えて遠心分離器にかけ、酸不溶性成分から分離した上澄液を加熱濃縮して、ろ紙クロマトグラフ用の試料検液とする。試料検液の番号は、試料の番号にそれぞれ対応させる。

ろ紙クロマトグラフ法と検出試薬による呈色反応からの赤色顔料成分の確認

東洋ろ紙Na51B（2cm×40cm）を使用し、ブタノール硝塩酸を展開溶媒として、試料検液と、対照の鉄イオン（ Fe^{3+} ）と水銀イオン（ Hg^{2+} ）の標準液を同条件下で展開した。

展開の終わったろ紙を風乾してから縦に二分し、その一方は、検出試薬として1%ジフ

フェニルカルバジドのエタノール溶液を噴霧してからアンモニア蒸気に曝し、もう一方には、検出試薬として0.05%ジチゾンクロホルム溶液を噴霧して、それらの際に、ろ紙上に発現するそれぞれの呈色スポットの位置（Rf値で表現する）と色調を検した。

上記試料検液、ならびに対照イオンの標準液について得られたろ紙上のスポットのRf値と色調は、下記の表5、表6のとおりである。

- (1) ジフェニルカルバジド・アンモニアによる検出：（Hg は紫色、Fe は紫褐色のスポットとして検出される。）

第5表 ジフェニルカルバジドによる呈色スポットのRf値と色調

試料	Rf値（色調）
試料検液 1	0.12（紫褐色）
試料検液 2	0.14（紫褐色）
試料検液 3	0.13（紫褐色）
Fe ³⁺ 標準液	0.17（紫褐色）
Hg ²⁺ 標準液	0.87（紫色）

- (2) ジチゾンによる検出：（Hg³⁺は橙色スポットとして検出され、Fe²⁺は反応陰性のため呈色せず。）

第6表 ジチゾンによる呈色スポットのRf値と色調判定

試料	Rf値（色調）
試料検液 1	呈色スポット発現せず
試料検液 2	呈色スポット発現せず
試料検液 3	呈色スポット発現せず
Fe ³⁺ 標準液	呈色スポット発現せず
Hg ²⁺ 標準液	0.91（橙色）

判 定

以上の結果のように、前田東・中村遺跡C、D区より出土した各試料土器に付着残存していた赤褐色顔料物質の分析用試料の検液中からは、 Fe^{3+} のみが検出され、 Hg^{2+} は検出されなかった。したがって、遺物に残存していたのは、ベンガラ（酸化鉄、 Fe_2O_3 ）系の赤色顔料のみであって、水銀朱（辰砂、 HgS ）の使用ないしは混用はなかったものと判定する。

（1993年10月分析）

〔註〕

- 1) 安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材料化学」『齊藤 忠編集 日本考古学論集1 考古学の基本的諸問題』吉川弘文館 pp.389-407(1986)
安田博幸：「古代赤色顔料と漆喰の材質ならびに技法の伝流に関する二、三の考察」『橿原考古学研究所論集』第7 吉川弘文館 pp.449-471(1984)

第3節 A区ST03出土人骨の鑑定

香川医科大学 霧生 孝弘

鑑 定 書

香川県高松市前田東町一帯に広がる、前田東・中村遺跡中世墓（A区ST03）から出土した入骨について、香川医科大学法医学教室において下記事項を鑑定した。

鑑 定 項 目

- 1：残存骨の部位
- 2：性別
- 3：推定年齢
- 4：推定身長

以 上

私は香川医科大学法医学教室 井尻 巖教授、飴野 清助教授、篠原 豊彦大学院生、大井 敏彦技官の助言、補助を受け諸検査を行い、法医学的に慎重に検討して本鑑定書を作成した。

鑑 定 主 文

- 1：部位を確認できた骨は頭蓋冠を構成する頭蓋骨、骨盤骨の一部、左右の大腿骨、左右の脛骨および左右の腓骨である。
- 2：性別は男性である可能性が高い。
- 3：推定年齢は20歳代～30歳代前半であると思われる。
- 4：身長は145～150cm前後と推定される。

以 上

鑑 定 理 由

第 1 項 前田東・中村遺跡について

高松東道路（上天神町～前田東町）建設に先立ち、道路予定地を試掘調査したところ遺跡が発見され、前田東・中村遺跡と名付けられた。（前田東・現地説明会資料より）同遺跡のA区S T03から中世墓に埋葬されたと思われる人骨が出土し、香川医科大学法医学教室で、前記の鑑定項目について検査することになったものである。

第 2 項 骨の検査

第 2 - 1 項 部位の判定

人骨は長期間土中に埋まっていたため極めて脆く、泥の除去は困難であり、まず泥の着いた状態で肉眼的観察、人類学的計測および写真撮影を行い、その後、可能な限り泥を除去し再び観察を行った。解剖学的な特徴に基づき各骨片の部位の判定を行った。部位を判定できた骨を以下に示す（写真1～6参照）。

- (1)頭蓋骨……頭蓋冠を構成する左右の頭頂骨および後頭骨が残存する。写真1は頭蓋冠内面を示している。内後頭隆起（→で示す）、上矢状静脈洞溝、左右の横静脈洞溝、内後頭稜等が認められる。また、矢状縫合、ラムダ縫合も認められる。
- (2)骨盤骨……左右は不明だが骨盤骨の一部が残存する（写真2）。
- (3)左大腿骨…骨幹部および内側顆を含む遠位端部が残存する（写真3）。
- (4)右大腿骨…骨幹部および大腿骨頭を含む近位端部が残存する。大腿骨頭は圧縮され、頸部がつまった状態である（写真4）。また、大腿骨遠位端の顆が残存する。右大腿骨の一部と思われる（写真5）。
- (5)左脛骨……骨幹部が残存する（写真6）。
- (6)右脛骨……骨幹部が残存する（写真6）。
- (7)左腓骨……骨幹部の一部が残存する。腓骨を→で示す（写真6）。
- (8)右腓骨……骨幹部の一部が残存する。腓骨を→で示す（写真6）。

第2-2項 性別の判定

骨から性別を判定するには骨盤や頭蓋骨等の観察が重要である。本例で観察された所見を以下に示す。

1. 骨盤

骨盤はもっとも性差の現れる部位である。これは女性の骨盤が妊娠、出産という作業に対して、合目的的に作られているためであり、特に恥骨下角の角度や大坐骨切痕の形態は性差をよく反映している。しかし、本例においては骨盤骨の一部が残存するのみで、性別の判定は困難である。

2. 頭蓋骨

頭蓋骨で性差をよく反映する部位は、頭蓋冠の前頭頭項部、眉弓、頬骨弓、乳様突起および後頭骨の項部などである。本例では左右の頭項骨、後頭骨のみ残存しており、後頭骨の項部が参考になる。この部位が性差を反映するのは、項部に付着する筋量に性差があり、骨粗面の凹凸に差異が生じるためである。本例の項部は凹凸が強く、男性的な特徴を有している。

3. その他の骨

四肢の長管骨や肩甲骨などから性別を判定する各種の方法があるが、骨盤や頭蓋骨を用いた場合に比べて誤判率が高く、あまり実際的であるとは思われない。しかし、本人骨においては、長管骨の筋付着面である骨粗面の凹凸はかなり強く男性的な印象を受ける。

頭蓋骨項部および長管骨の形態的観察から、本人骨は男性的な特徴を有しており、男性である可能性が高いと思われる。

第2-3項 年齢の推定

人骨より年齢を推定するには歯牙、頭蓋骨縫合、長管骨の骨化癒合の状態や骨髓腔の大きさ、恥骨結合面の状態などが参考になる。本例においては歯牙および参考となり得る骨盤骨が残存していないので、頭蓋骨縫合の状態および大腿骨の骨髓腔の広がりから年齢推定を行った。

1. 頭蓋骨縫合

頭蓋骨では、頭蓋冠を構成する前頭骨の一部、頭頂骨、左側頭骨および後頭骨の一部を残存し、それ以外の部位を欠損している。したがって年齢推定に利用できるものは矢状縫合およびラムダ縫合の一部である。以下の第7表に本例の各縫合内板の癒合状態を示す(写真1参照)。

第7表 各頭蓋縫合内板の癒合状態

頭蓋縫合	部位	左右	
矢状縫合	泉門部 (S ₁)	0	
	頂部 (S ₂)	1	
	矢縫部 (S ₃)	1	
	三角部 (S ₄)	0	
ラムダ縫合	三角部 (L ₁)	0	0

各項目の数値は Broca-Ribbe の癒合度を示す。

0 : 全く癒着が見られない。1 : わずかに癒着が見られる。

2 : 肉眼でわかる。3 : 波線状に見える。4 : 消失する。

頭蓋縫合の癒着は個人差による変動が大きいために、年齢との相関性はあまり高くはないが、特異的に早期癒合する例や高齢になっても癒合が起こらない Lapsedunion などの例を除外すれば、年齢は±10歳程度の精度で推定可能であると言われている。岡田による各年代における縫合の閉塞(癒合)度出現率表を用いて、本例のデータを検討してみると、矢状縫合泉門部(S₁)、矢状縫合三角部(S₄)およびラムダ縫合三角部(L₁)の内板に癒着が全く見られないものは、40歳以上ではほぼ10%以下、30歳代では約20-40%と少数であるのに対して、20歳代では約70-80%と高頻度である。したがって、内板の癒着状態から見れば、本人骨の年齢は20歳代ないしは30歳代前半である可能性が高いと思われる。(瀬田季茂、吉野峰生著：白骨死体の鑑定、令文社、P181-198)

2. 大腿骨近位端の骨髓腔

骨の退行性変化として、骨緻密質および骨梁の減少が起こるとはよく知られている。加齢に伴う骨梁の減少は、骨の再構築の過程において、骨吸収が骨形成より優勢であるため

に生じる。その結果、骨緻密質は薄くなり、骨梁が減少して骨髓腔が拡大する。そこで、大腿骨近位端の骨髓腔の広がりおよび骨梁の状態から本件の年齢を推定する。本件における骨梁は全体にかなり密であり、大腿骨近位端の骨髓腔の先端は小転子のレベルは越えていない。Nansen が報告した大腿骨近位端部の骨梁構築像と年齢との関係によれば、骨梁が密でしかも骨髓腔が小転子のレベルに達していない本人骨の年齢は21-39歳頃であると推定される。(瀬田季茂、吉野峰生著：白骨死体の鑑定、令文社、P216-218)

頭蓋骨縫合および大腿骨近位端骨髓腔の観察結果、さらに当時の人々の加齢現象が現代人よりも早く進んだであろうことを考慮すれば、本件の推定年齢は20歳代ないしは30歳代前半である可能性が高いと思われる。

第2-4項 身長 の推定

骨から身長を推定するには、上下肢の長管骨計測値を参考にする。しかし、本件においては完全な形で残存している骨はない。そこで、比較的保存状態の良い右大腿骨から身長の推定を試みた。まず、右大腿骨から解剖学的特徴を持つ2計測点を選び、これらの距離を計測し、対応する日本人の骨の2計測点とその全長の比から、本例の骨長を求めた。つぎに、計算により得られた右大腿骨長を(1)安藤の式(1923年)、(2)工藤の式(1967年)、(3)藤井の式(1960年)に代入し推定身長を求めた。(瀬田季茂、吉野峰生著：白骨死体の鑑定、令文社、P279-292)

(1)安藤の式 右大腿骨： $38.50 \times 3.840 - 2 = 145.8\text{cm}$

(2)工藤の式 右大腿骨： $36.93 \times 2.5 + 56 = 148.3\text{cm}$

(3)藤井の式 右大腿骨： $36.93 \times 2.53 + 57.905 = 151.3\text{cm}$

上記の計算式より、本人骨の身長は145-150cmと推定される。

以上をもって鑑定主文の理由とする。

この鑑定は1991年1月25日より1991年3月25日までの間に行ったものである。

1991年3月25日

香川県木田郡三木町池戸1750-1

香川医科大学法医学教室

鑑定人

医学博士 霧生 孝弘

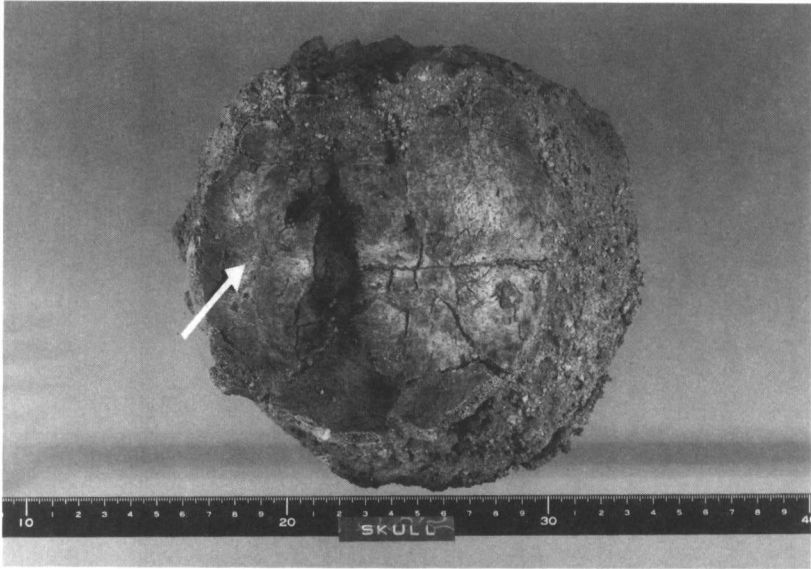


写真1 頭蓋骨（内側面、→は内後頭隆起を示す）

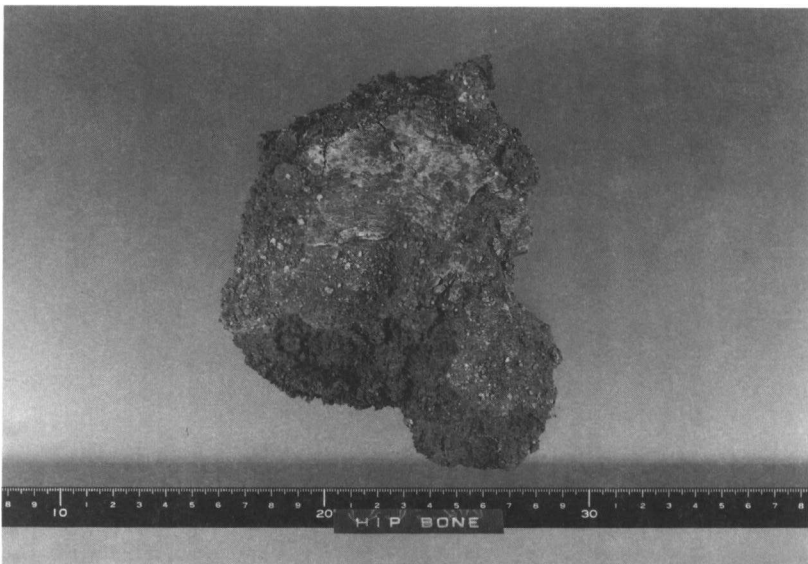


写真2 骨盤骨

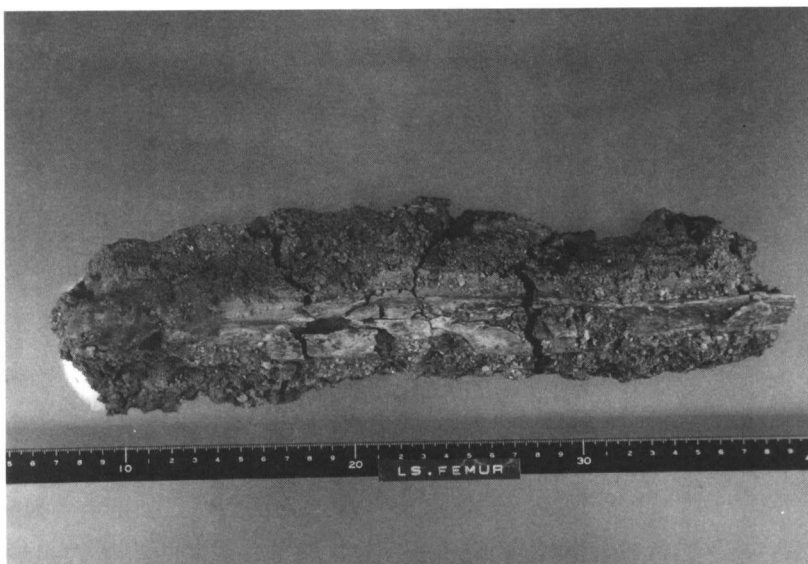


写真3 左大腿骨



写真4 右大腿骨

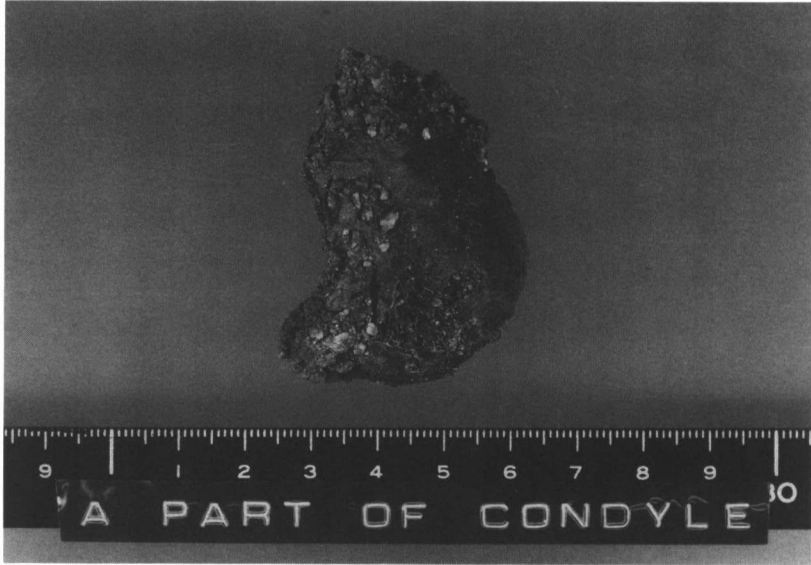


写真5 顆部（右大腿骨の一部と思われる）

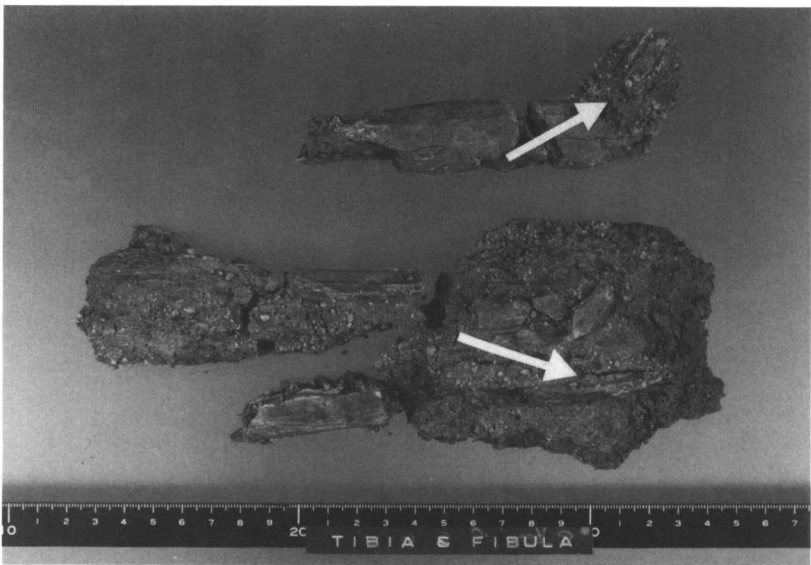


写真6 脛骨および腓骨（→は腓骨を示す）

第5章 まとめ

第1節 前田東・中村遺跡の遺構の変遷

第1期：縄文時代後期

A・C・D・G区で検出した。A区では溝を中心とした遺構が形成されている。D区では旧河道SR01があり、縄文時代後期前半の土器が多量に出土した。高松平野で縄文時代後期の土器がこれほど量的に出土したのは初めてで基準資料になるであろう。G区でも旧河道があるが、SR02・04から少量土器が出土したにとどまる。全体的に遺構は少ない。

第2期：縄文時代晩期

遺跡の東部のF・G区で検出している。特にF区では土坑・ピットがあり、旧河道以外の遺構を検出したことは、具体的な人々の生活の跡を検出したことで意義深い。全体的に遺構は少ない。

第3期：弥生時代中期（Ⅳ期）

A・D・E・F・G区で検出したが、遺跡の東部のF・G区に集中している。Ⅱ・Ⅲ期の遺構は検出されておらず、すべてⅣ期のものである。A区では方形周溝墓を1基検出した。遺跡の中央部のD区にも溝・旧河道が形成されている。東部のF区では竪穴住居と製塩土器を含んだ土坑など生活の跡が見られる。小規模な集落であるが、製塩土器が出土したことは、内陸部においても海岸部の集団と交流があったことを示している。遺跡の東西に大きく離れるが、集落域と墓域が分散して形成されていたようである。

第4期：弥生時代後期（Ⅴ期）

遺構の数はかなり増加する。C・D・E・G区に集中している。C区では井戸・溝が形成される。E区では東部で竪穴住居・掘立柱建物が検出され、調査区の南側に集落が広がるものと思われる。同じ旧河道と思われるF区SR01とG区SR02から膨大な量の土器が出土した。周囲に大規模な集落が展開するものと思われる。

第5期：古墳時代

この時期の遺構は極端に少ない。古墳時代前期の遺構はない。中期になるとC区の旧河道が形成され、土器とともに木器が多く出土した。後期ではA区で土壌墓が1基、E区で古墳の周溝状の溝が1条あるのみである。

第6期：古代前半（7～9世紀）

遺構が再び増加する。A区とD・E区の2群に掘立柱建物が集中している。A区の群ではSB01が規模が最も大きく中心的な建物と言えよう。これらの一群は8世紀中葉～9世紀初頭の時期幅があるが、柱筋を他の建物に合わずなど計画的に建てられている。D・E区の一群はD区SB01をはじめ大型の建物が多い。E5区では8世紀の竪穴住居が2棟前後して建てられている。作業小屋的なものと思われる。またこの一群は井戸E区SE01を伴っている。またE5・8区を中心に包含層からではあるが、当該期の軒丸瓦を含む瓦が多量に出土している。遺跡の東部のF・G区では掘立柱建物は検出されなかったが、F区SX02から7世紀後半の軒丸瓦と土器が出土している。このSX02のすぐ西側の丘陵の裾部では7世紀後半の可能性もある平窯F区SF01が形成されている。そして遺跡の東端部のG区では旧河道があるが、G区SR04からは斎串・人形・刀形の木製模造品が多量に出土した。A・D・Eの大型掘立柱建物、C区SD09からの帯金具・墨書土器の出土、G区SR04からの木製模造品・墨書土器の出土、さらに瓦の量的な出土などこの時期に付近に公的施設が建てられていた可能性が高く、G区SR04はこれらの祓所の可能性がある。また前田東・中村遺跡もこういった公的施設の中に含まれているのかも知れない。

第7期：古代後半（10～12世紀）

前段階に引き続き遺構は多く、C区とE区を中心に掘立柱建物が展開する。建物の主軸は条里制地割りの方向に合っている。特にE区では10世紀後半代の土器が多量に出土したSD19を中心に東西に掘立柱建物が建てられている。これらはSB09・10・11の3棟の一群からSB08・12・13の3棟の一群に変遷する。両群にSD19が伴うが土器は同時期で建物の時期差は少ないと考えられる。特にSB08は張り出し部をもつ大型の建物で中心的な建物である。建物は柱筋を合わずなど計画的に建てられ、各群の西側には柱筋に合わせて地鎮を行ったと考えられるSK04・05がそれぞれ伴っている。また後出するが井戸が2基ある。A区では土壌墓ST03が形成されているが、当時の葬制を考える上で重要なもので

ある。

第8期：中世

遺構は減少し掘立柱建物も散在しており、遺物も少ない。この時期には人々の中心的な生活の場ではないようである。

第9期：近世

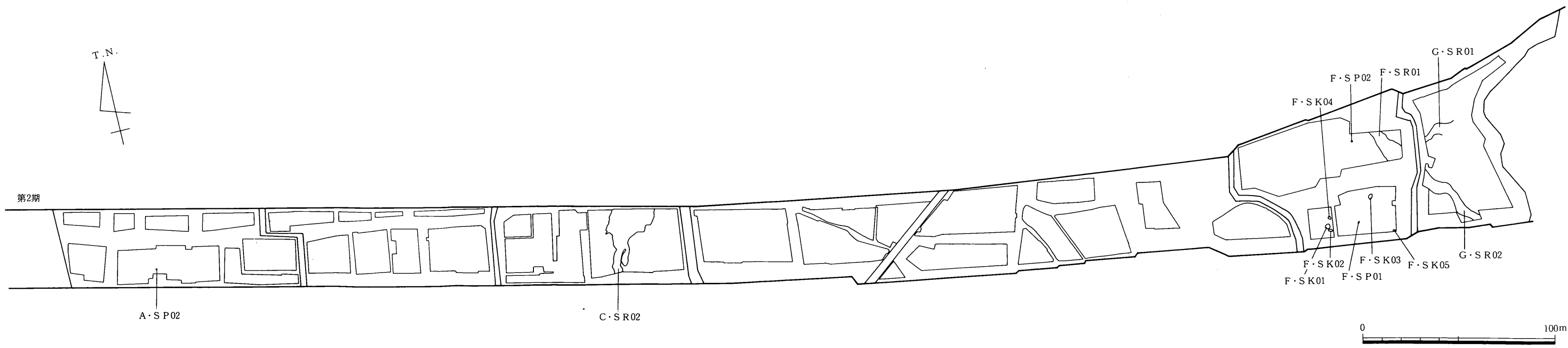
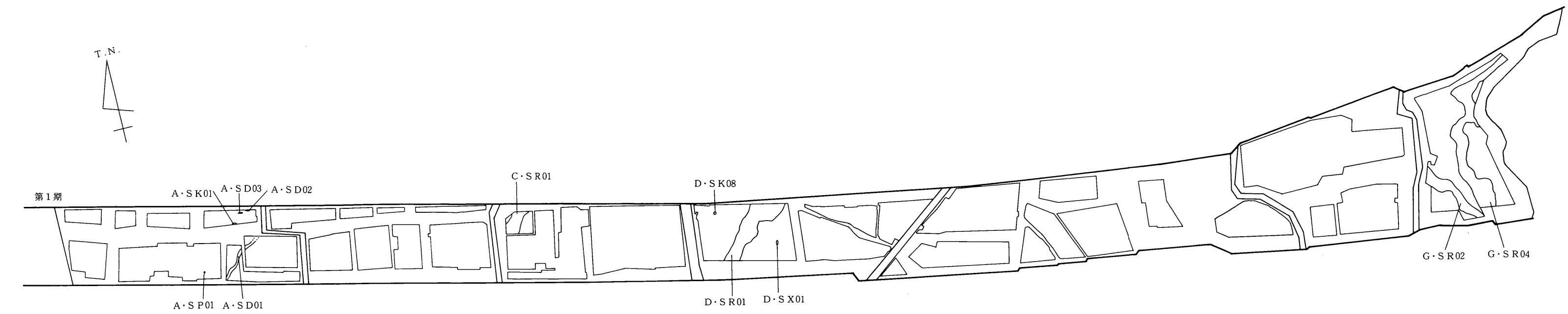
遺構は極端に減少し、人々の生活の場は他へ移動したと考えられる。

遺構名	構造(間×間)	桁行(m)	梁行(m)	面積(㎡)	主軸方位	挿図	時 期	備 考
A/SB01	6×2	14.8	5.6	82.9	N80° W	12	8c後半	
A/SB02	3×1	10.2	4.1	41.8	N78° W	14	8c後半	
A/SB03	2×1	4.3	2.5	10.8	N77° W	16	8c後半	
A/SB04	3×2	7.9	3.8	30.0	N79° W	17	8c末～9c初	
A/SB05	1+×3	1.6+	5.8	9.3+	N12° E	19	8c末～9c初	東庇付き
A/SB06	3+×1	7.1+	2.1	14.9	N79° W	20	8c末～9c初	
A/SB07	1+×3	2.4+	5.6	13.4+	N13° E	22	8c末～9c初	東庇付き
A/SB08	4×2	10.5	3.5	36.8	N41° E	31	13c中頃～後半	
A/SB09	2×1	6.7	2.7	18.1	N64° W	32	13c中頃～後半	柱列不整形
A/SB10	2+×2	3.6+	4.1	14.8+	N03° E	41	不明	
B/SB01	3×3	4.7	4.3	20.2	N13° E	58	8c後半	総柱、柱抜き取り穴
B/SB02	2+×1+	3.1+	3.6+	11.2+	N04° E	59	古代	
B/SB03	4×3	3.7	2.7	10.0	N11° E	75	13～14c	

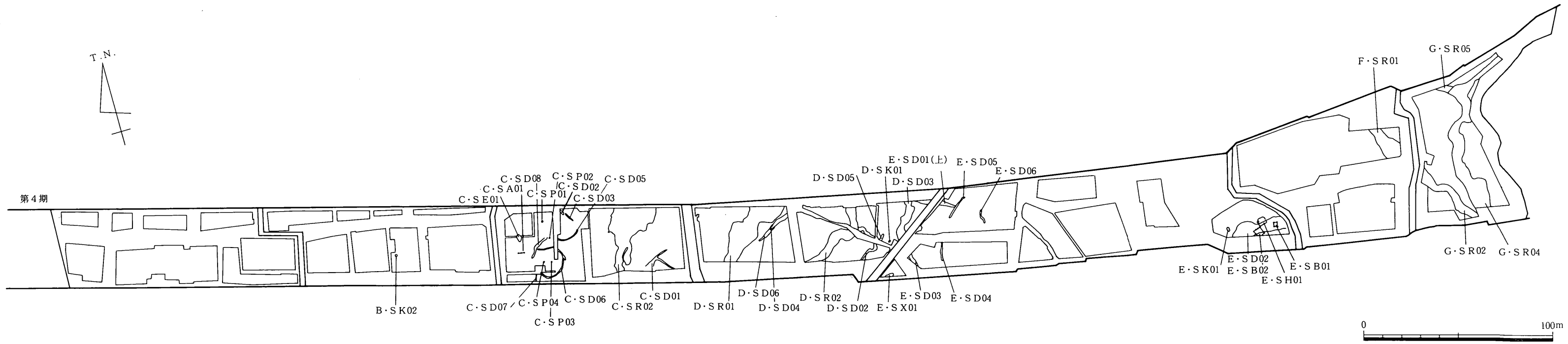
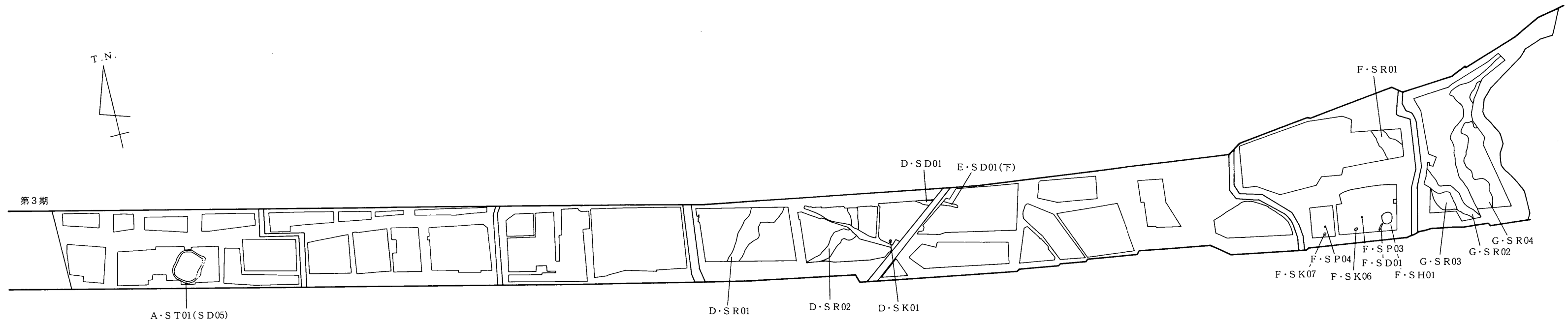
第8表 掘立柱建物一覧(1)

遺構名	構造(間×間)	桁行(m)	梁行(m)	面積(㎡)	主軸方位	挿図	時 期	備 考
C/SB01	2×1	3.9	3.4	13.3	N80° W	129	古代	
C/SB02	2×2	5.1	3.8	19.4	N79° W	130	8c～9c前半	総柱
C/SB03	2+×2	3.7+	3.6	13.3+	N79° W	131	8c～9c前半	
C/SB04	5×2	8.9	4.3	38.3	N79° W	132	10c後半～11c前半	南庇付き
C/SB05	2×1	3.6	3.2	11.5	N05° W	134	不明	
C/SB06	1+×2	2.3+	3.8	8.7+	N82° W	135	古代	
C/SB07	1×1+	4.0	2.7	10.8	N79° W	136	古代	
C/SB08	4×2+	6.0	3.7+	22.2+	N79° W	138	10～12c	
C/SB09	3×1+	6.3	1.9+	12.0+	N83° W	139	古代	
C/SB10	2×1	6.3	4.8	30.2	N11° E	140	不明	
C/SB11	3×1	6.4	3.6	23.0	N79° W	194	近世	北庇付き
C/SB12	2×1	4.2	3.5	14.7	N77° W	195	近世	
C/SB13	5×1+	8.8	3.0+	26.4+	N83° W	140	8c	
D/SB01	4×1	8.9	3.3	29.4	N06° E	271	8c中頃	
D/SB02	2×1	4.7	2.0	9.4	N81° W	272	8c中頃	
D/SB03	2×2	4.4	4.0	17.6	N80° W	274	9c前半	
D/SB04	2+×2	5.6	6.0+	33.6+	N39° W	275	11c	
D/SB05	6×1	10.7	3.9	41.7	N04° E	276	10c後半～11c	
D/SB06	3×2	5.6	4.0	22.4	N78° W	279	10c～11c	
D/SB07	2×1	3.8	3.0	11.4	N73° W	294	18c	建て替え
E/SB01	1×1	2.3	1.9	4.3	N10° E	400	弥生V期	
E/SB02	3×2	4.1	4.0	16.4	N20° W	401	弥生V期	
E/SB03	3×2	5.6	3.9	21.8	N81° W	427	7c前半	
E/SB04	4×2	6.8	3.4	23.1	N11° E	429	7c前半	
E/SB05	4×2	9.6	4.9	47.0	N79° W	430	8c	
E/SB06	1+×2	2.4+	4.2	10.1+	N11° E	431	8c	
E/SB07	3×2	5.9	3.8	22.4	N79° W	432	10c後半～11c初	
E/SB08	5×3+3×2	11.0+6.6	7.2+4.0	105.6	N81° W	433	10c後半～11c初	母屋+付属屋
E/SB09	3×1	6.2	3.2	19.8	N07° E	434	10c後半～11c初	
E/SB10	3×3	5.9	3.6	21.2	N80° W	435	10c後半～11c初	
E/SB11	3×2	6.4	4.4	28.2	N10° E	436	10c後半～11c初	
E/SB12	5×2	8.6	4.3	37.0	N81° W	437	10c後半～11c初	柱抜き取り穴
E/SB13	4×3	8.5	6.7	57.0	N81° W	438	10c後半～11c初	
E/SB14	2×1	4.4	3.4	15.0	N12° E	439	11c	
E/SB15	3×1	4.9	2.4	11.8	N30° W	518	不明	
E/SB16	2+×1	4.6+	3.1	14.2+	N41.° W	519	不明	
F/SB01	3×1	3.1	1.9	5.9	N41° E	599	古代	
F/SB02	2×1	5.3	2.5	13.3	N41° W	623	13c	

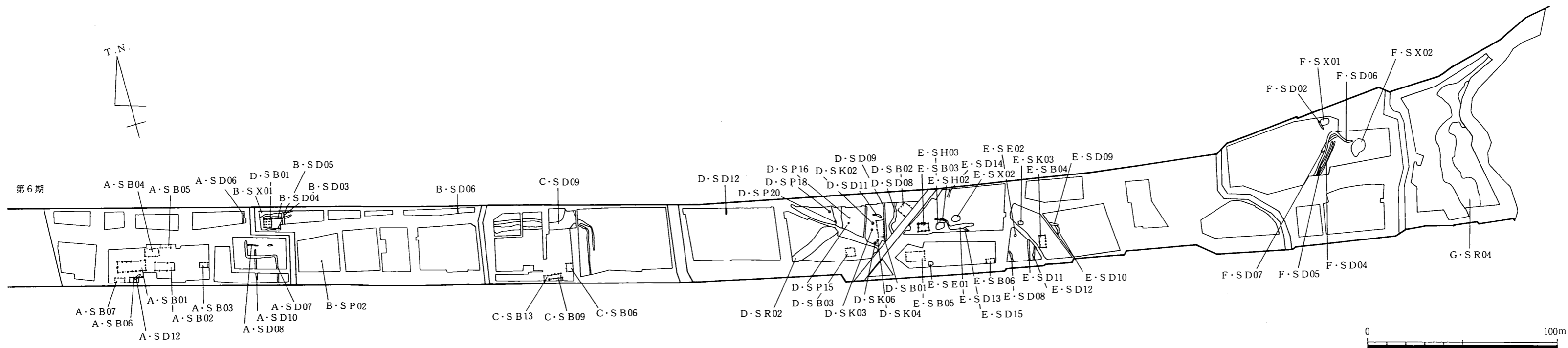
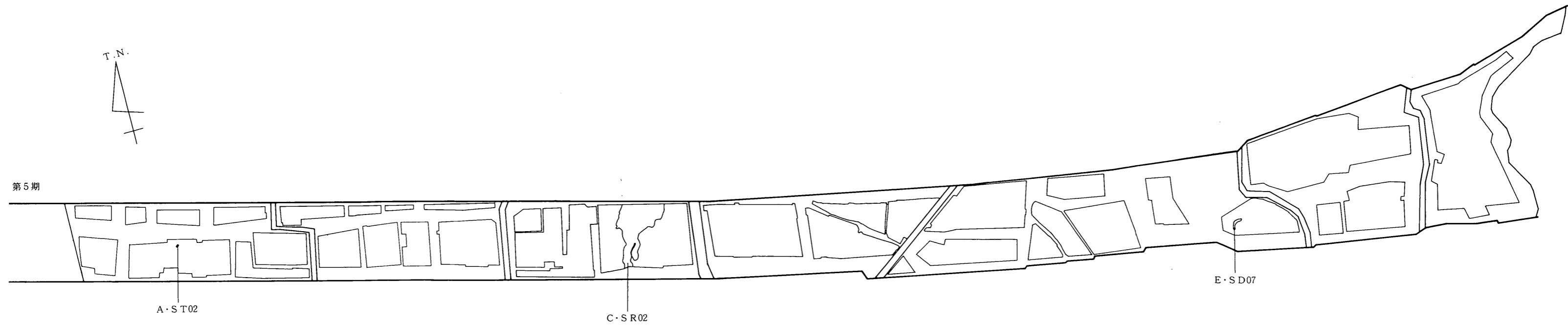
第9表 掘立柱建物一覧(2)



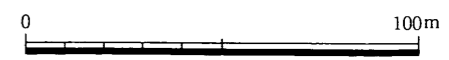
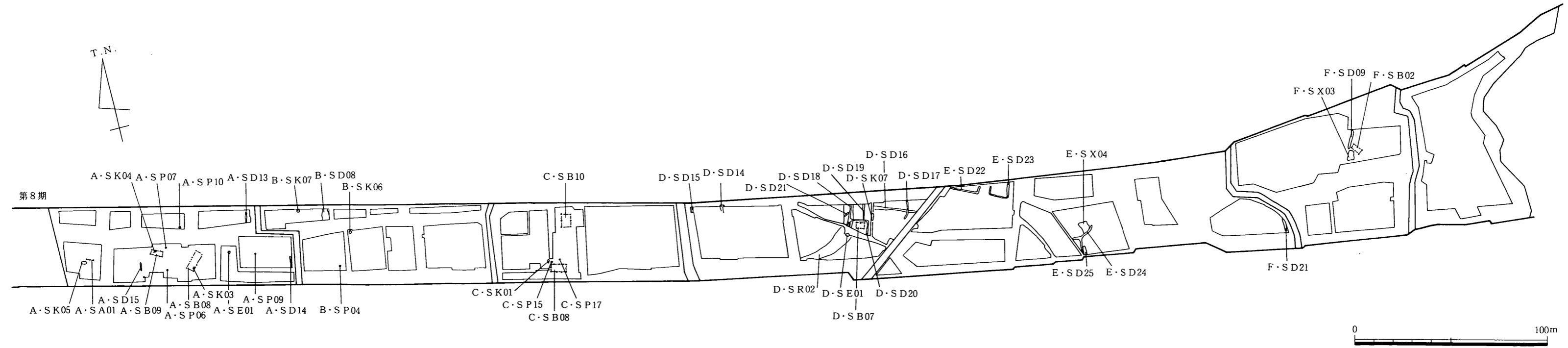
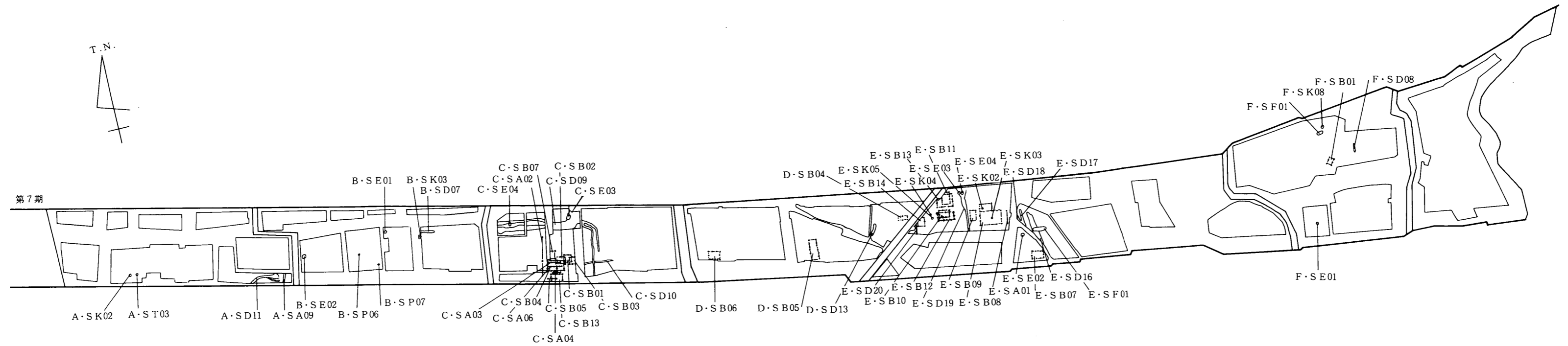
第795図 遺構変遷図(1) (1/2000)



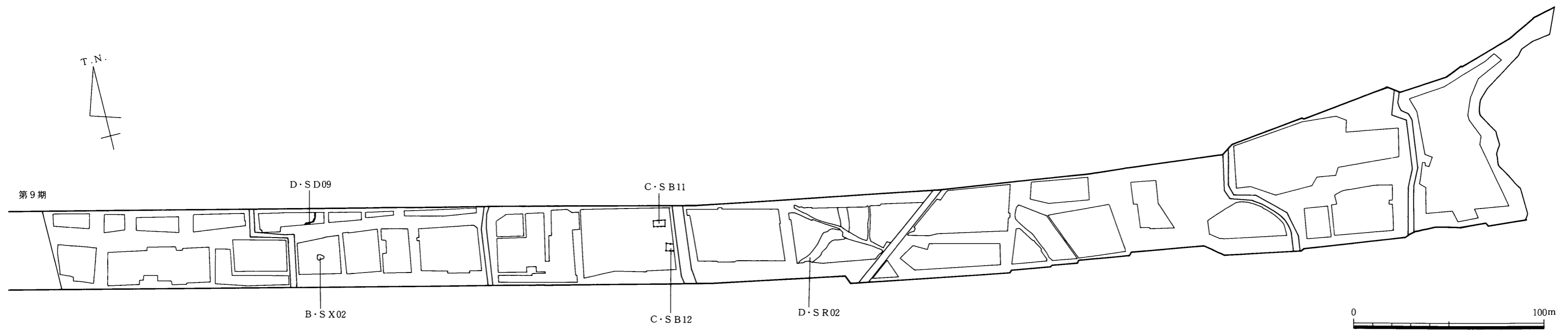
第796図 遺構変遷図(2) (1/2000)



第797図 遺構変遷図(3) (1/2000)



第798図 遺構変遷図(4) (1/2000)



第799図 遺構変遷図(5)(1/2000)

第2節 前田東・中村遺跡の弥生時代中期から後期の土器について

(1) はじめに

近年、弥生土器の研究は各地域ごとにめざましい進展を見せている。その編年研究、製作技法の研究、各地域間の交流や土器の並行関係の研究など多岐に及んでいる。香川県では長らくそうした研究の進展はなく停滞していた。しかし近年の瀬戸大橋建設事業、四国横断自動車道建設事業などの大規模事業に伴い弥生土器の資料は確実に増加している。このような中で坂出市下川津遺跡出土の弥生土器を中心として大久保徹也氏が弥生時代後期から古墳時代前半期の土器について編年的考察を加えている⁽¹⁾。この中で下川津遺跡の資料の編年研究に加えて讃岐地方西部、中部、東部の代表的な弥生時代遺跡の資料との比較を試みている。そして讃岐地方の周辺地域にまでその並行関係を追求している。また従来から「雲母土器」と呼称されてきた胎土に角閃石を含む土器を「下川津B類土器」として整理し、その分布の中心が高松平野中心部にあるとした。大久保氏の研究はそれまで停滞していた讃岐地方の弥生土器の研究を飛躍させ、活性化させたことに意義がある。

しかし讃岐地方の中でもその地域差は見られ、各平野ごとに弥生土器の様相が明らかになって行かなければならない。このような現状の中で前田東・中村遺跡からは弥生時代中期から後期の土器が多量に出土した。下川津遺跡のある丸亀平野東部の資料がそのまま当てはまるとは限らない。「下川津B類土器」は高松平野中央部で製作されたと考えられているが、その高松平野の東部に前田東・中村遺跡は位置しており、「下川津B類土器」の研究を含めた高松平野での弥生土器の研究が必要となっている。高松平野では近年、高松東道路建設や旧高松空港再開発事業などに伴い大規模な調査が行われ、資料も増加している。現在その資料の全体が整理されている段階ではないが、今後これらの資料とともに前田東・中村遺跡の資料も高松平野での弥生土器の研究に役立つものと信じて、はなはだ不十分ではあるが前田東・中村遺跡の資料の検討を行いたい。

(2) 弥生時代中期の土器

(i) 前田東・中村遺跡出土土器の検討

前田東・中村遺跡では弥生時代中期の土器は量的には多くないが、中期後半(IV期)の資料がある。その中で良好な状態で出土した資料の検討を行いたい。

E区S D01下層出土遺物

上下2層に大別出来る溝の下層の資料で、溝の底に貼り付くように出土した。壺・甕・高杯・鉢が出土している。壺は広口のもので口縁部端部を若干拡張し凹線を施す。甕は体部全体の分かるものはないが、口縁部は短く鋭く屈曲し、端部を拡張して内傾する面を作り凹線を施している。鉢と高杯の口縁部は内傾し、外面に多条の凹線を施している。凹線文の多用と口縁部が内湾する高杯の形態から弥生時代IV期のものである。

F区S K07出土遺物

製塩土器と共に土坑から出土したもので一般の土器は甕のみが出土している。甕は口縁部は短く鋭く屈曲し、口縁部端部を主に上方に拡張し外面に凹線を施す。口縁部端部は拡張の度合いが強くなり直立する傾向が強い。体部外面は下から三分の二までヘラミガキを施し、内面も下から三分の二までヘラケズリを施す。底部は安定した幅広の平底である。製塩土器の形態からIV期後半と言える資料である。

F区S H01出土遺物

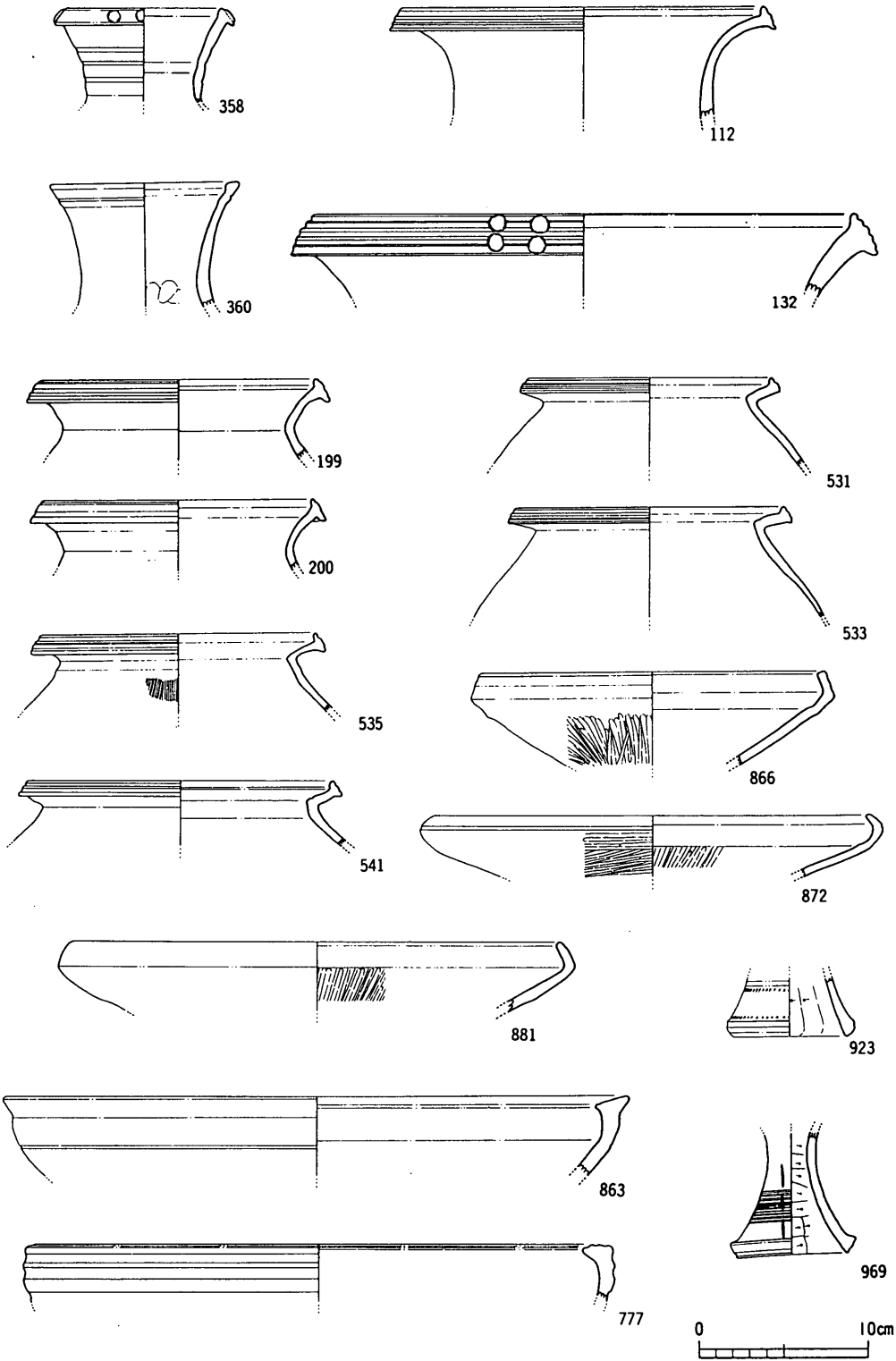
量的には少ないが住居跡の床面やや上から出土したものである。図化出来たものは壺のみである。壺は緩く逆「ハ」字形に外反する長頸壺を指向する形態のものと、口縁部端部を上下に拡張し内傾する端面を作り端面と頸部に凹線を施すものがある。また体部のみのものであるが、外面に櫛描き直線文と波状文を施しているものがある。長頸壺を指向する壺の出現と凹線が欠如するものなど新しい要素をもつ土器群である。V期に入る要素をもつものも出現しているが、土器群全体としてはIV期末を考えたい。

以上の乏しい資料の検討によると、弥生時代IV期の中でE区S D01下層→F区S K07→F区S H01の順に変遷するものと考えられる。

(ii) 他遺跡との比較検討

讃岐における弥生時代中期の土器の研究は、その量的希少さから長らく詫間町紫雲出遺跡の資料による研究⁽²⁾の域を出ることがなかった。しかしその研究は現段階でも十分通用するが、近年の資料の増加でその編年研究の間を埋める資料が出てきている。

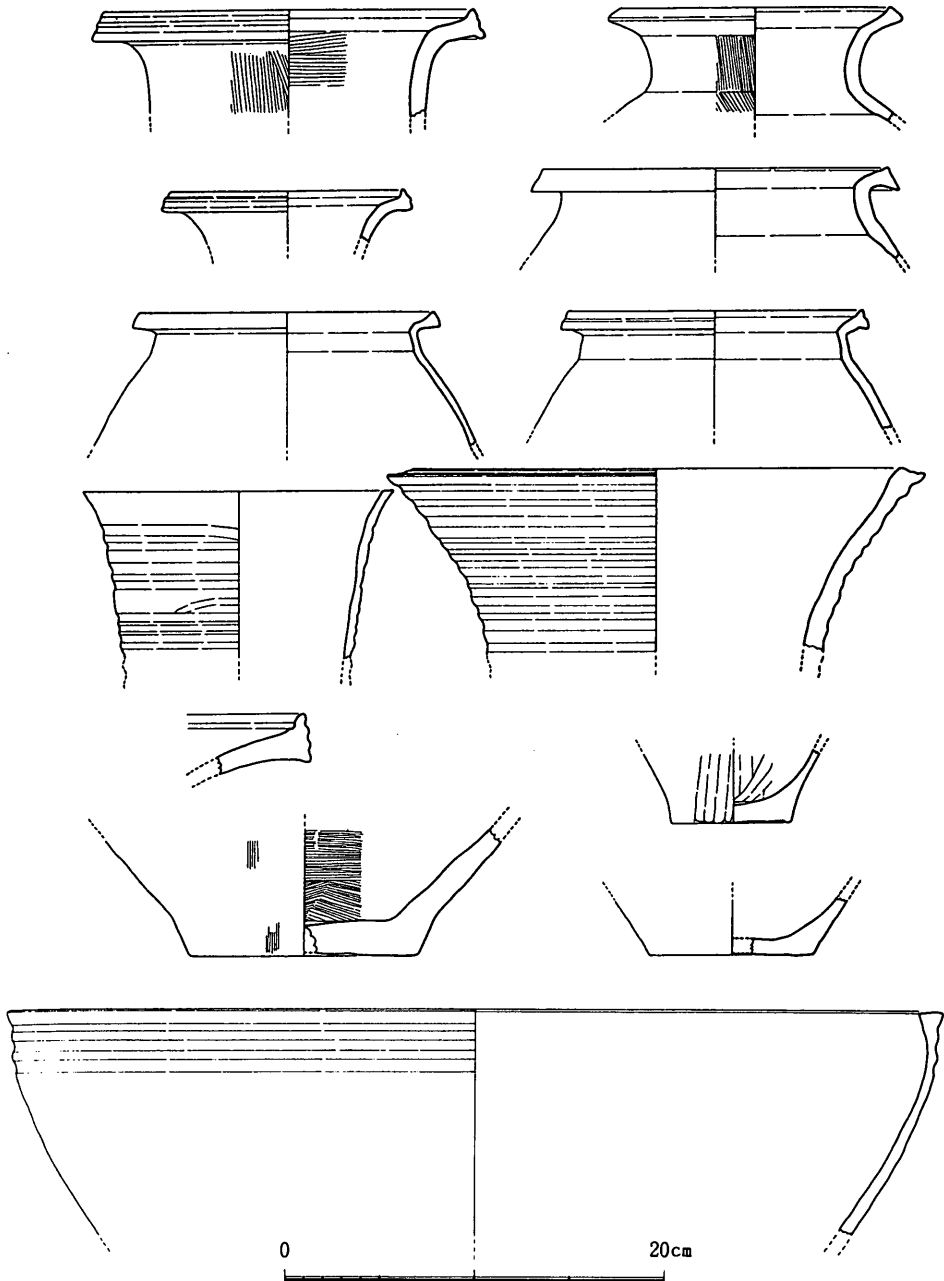
前田東・中村遺跡E区S D01下層資料では、口縁部が内湾し外側に凹線文を施す高杯が出土している。紫雲出遺跡ではこのように口縁部が内湾する高杯は紫雲出Ⅲ式の時期で、凹線文が最も発達した時期である。岡山県前山遺跡を指標とする前山Ⅱ式⁽³⁾に相当する。他に善通寺市矢ノ塚遺跡S D85031の資料⁽⁴⁾がこの段階のものであろう。これより前の段階としては凹線文を採用したが盛行するには至らない紫雲出Ⅱ式の段階が考えられ、岡山県菰



第800図 矢ノ塚遺跡 S D85031出土遺物 (1 / 4)

池遺跡の資料⁽⁵⁾の新しい様相をもつものの段階であろう。

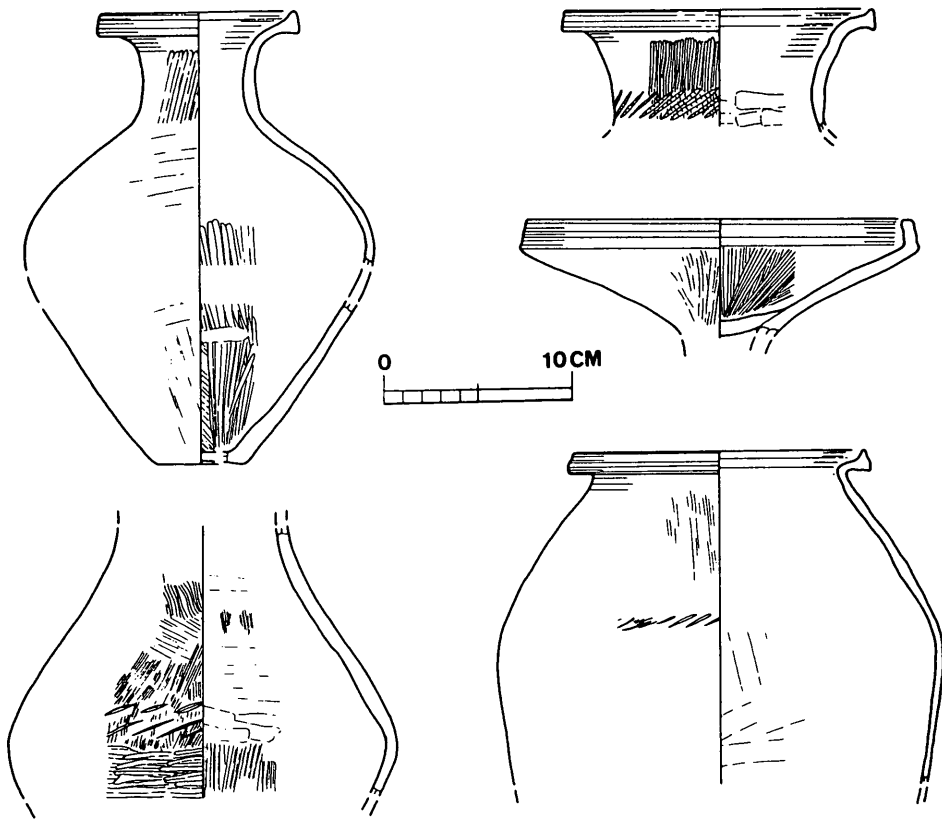
前田東・中村遺跡F区SK07資料は甕のみの資料であるので比較が難しいが、共伴した製塩土器によると岡山県仁伍遺跡を指標とする仁伍式⁽⁶⁾に並行するものと思われる。大川郡志度町天野峠出土資料⁽⁷⁾が製塩土器からもこの段階と思われる。甕の口縁部端部の拡張が強



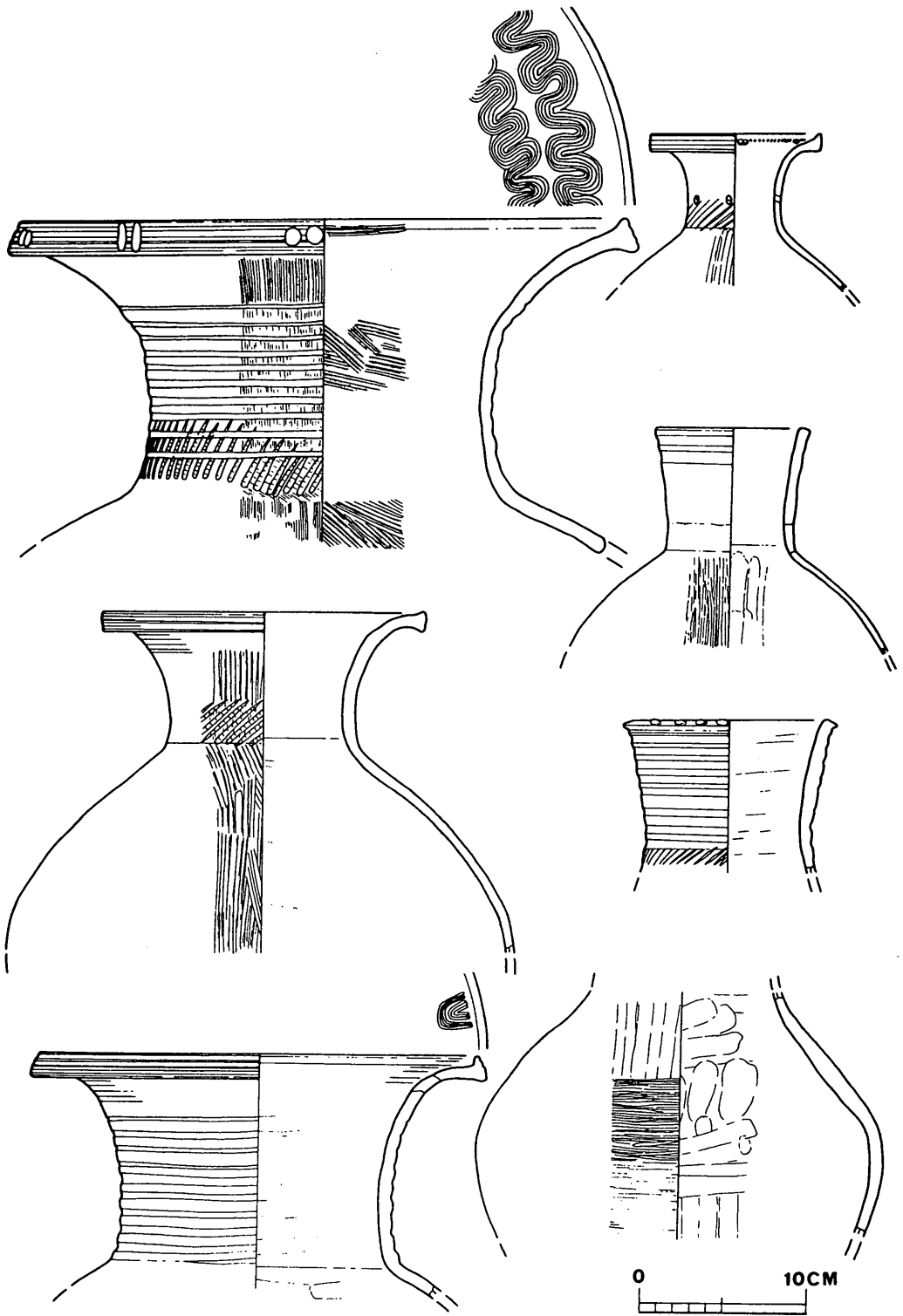
第801図 末則古墳墳裾南西部ピット出土遺物（1／4）

くなることから、高松市浴・長池遺跡S R01の11層出土土器の中期後葉後半段階が考えられる⁽⁸⁾。また浴・長池遺跡のこの段階の高杯は口縁部が直立して端部を横へ摘み出すものがあるが、これは前田東・中村遺跡A区S T01の周溝S D05からも出土している。この段階とF区S H01との間に綾歌郡綾上町末則古墳墳裾南西部ピット出土資料⁽⁹⁾が考えられる。全体的にまだ凹線を多用しているが、中に凹線を施さないものもある。甕の口縁部端部の拡張はあまり発達していない。

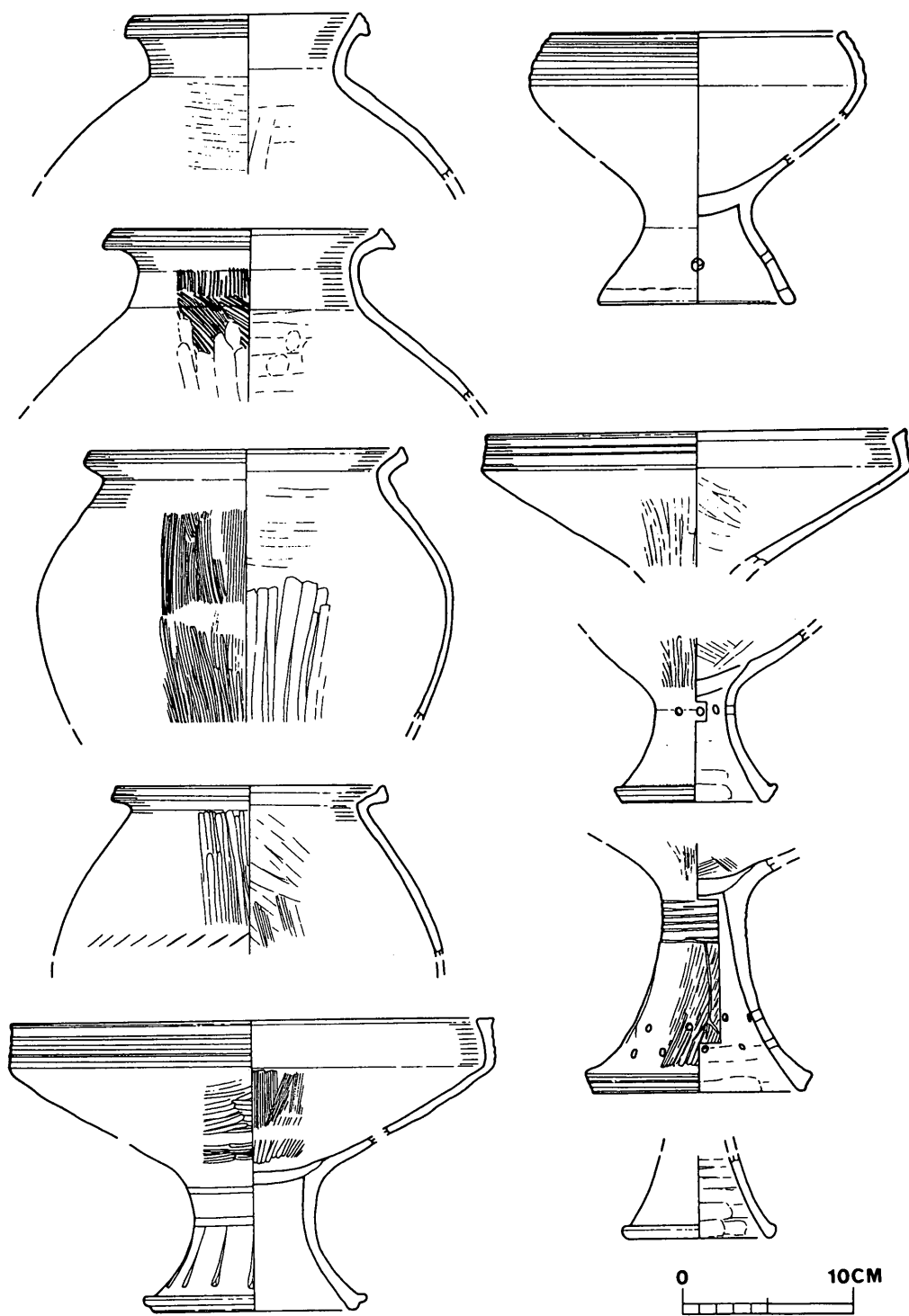
前田東・中村遺跡F区S K07→末則古墳墳裾南西部ピットという変遷を考えたが、この両者の間を埋めるものが前田東・中村遺跡の北西約2kmのところに位置する久米池南遺跡第3号竪穴住居と第2号テラス状遺構の資料⁽¹⁰⁾と考えられる。この両遺構から出土した土器が接合したことから、この遺構は同時期のものと考えられる。第2号テラス状遺構出土の壺には末則古墳墳裾南西部ピット出土と同様な頸部から緩く外反しそのまま口縁部に至り、外面に凹線を施す壺が出土している。しかし甕の口縁部端部の拡張は末則古墳墳裾南西部ピットのものより強く、前田東・中村遺跡F区S K07のものより弱くなっている。久米池



第802図 久米池南遺跡第3号竪穴住居出土遺物（1／4）



第803図 久米池南遺跡第2号テラス状遺構出土遺物 (1) (1/4)

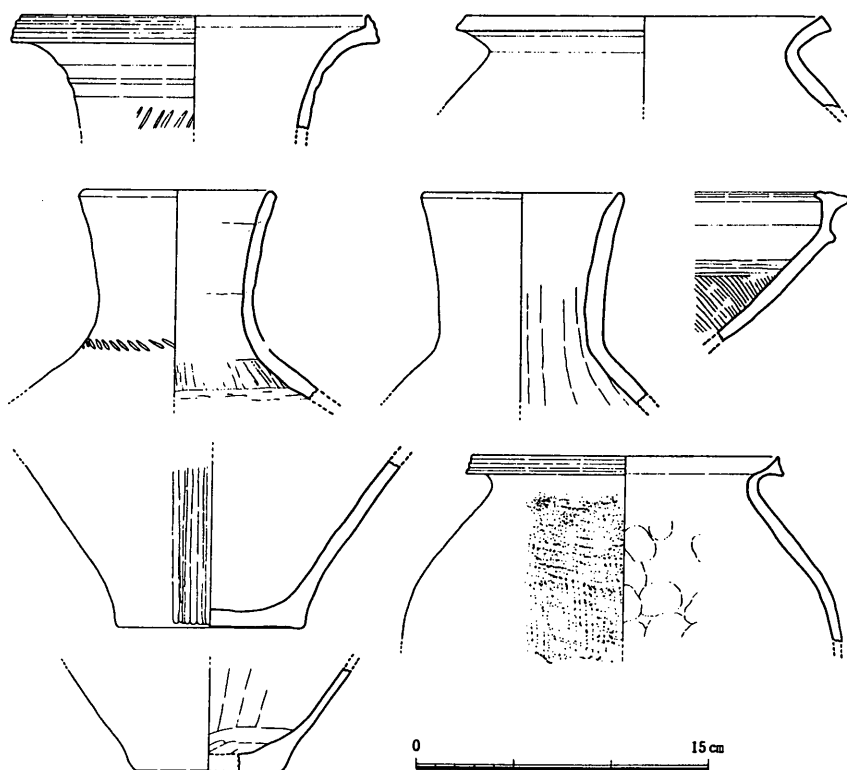


第804図 久米池南遺跡第2号テラス状遺構出土遺物(2)(1/4)

南遺跡第3号竪穴住居と第2号テラス状遺構出土の高杯は口縁部は内傾するが直線的で、外面には凹線を施す。この他に杯部が曲線的に内湾する高杯も出土している。

前田東・中村遺跡F区SH01資料は今のところ他に良好な比較資料を見ない。この段階は先述したが長頸壺指向の壺の出現や凹線文の消滅傾向などからV期への萌芽が見られる段階である。この資料に後続するものとして末則古墳の中世墳墓北端ピット出土資料⁽⁹⁾があげられる。この資料は甕の口縁部端部を拡張して外面に凹線を施すなど中期の要素を残しつつ、内面ヘラケズリの長頸壺の出現や、もはや外面に凹線を施さない端部が短く屈曲して上方に立ち上る鉢の出現などV期初頭のものと言える。高松市大空遺跡資料⁽¹¹⁾はこの末則古墳中世墳墓北端ピット資料にほぼ並行すると思われる。

先の前田東・中村遺跡での資料の変遷にこれらを補強すると、紫雲出遺跡Ⅱ式→前田東・中村遺跡E区SD01下層→前田東・中村遺跡F区SK07→久米池南遺跡第3号竪穴住居、第2号テラス状遺構→末則古墳墳裾南西部ピット→前田東・中村遺跡F区SH01→末則古



第805図 末則古墳中世墳墓北端ピット出土遺物（1／4）

墳中世墳墓北端ピットという変遷が考えられる。これらの変遷は高松平野以外の資料も用いているので、はじめに述べたように今後は高松平野出土の資料のみで補強することが望ましいことは言うまでもない。

(3) 弥生時代後期の土器

(i) 前田東・中村遺跡出土土器の検討

後期の土器はG区S R02など旧河道を中心に多量に出土した。これら多量の土器の中から良好な状態で出土したものを抽出して検討したい。

C区S D06出土遺物

円形に巡る溝から出土したもので、その出土状態から一括性の高いものである。壺・甕・高杯・鉢が出土している。壺は長頸壺、広口壺がある。長頸壺は口縁部が屈曲して横へ大きく開くものである。体部はやや扁平で底部は平底となっている。広口壺は長めの頸部全体がなだらかにラッパ状に開いて口縁部に至るもの、短い頸部が大きく外反して口縁部に至るもの、直立する頸部をもつものがある。いずれも外面にはハケ目を施し、体部内面下半にはヘラケズリを施している。甕は口縁部が短く鋭く屈曲するもので、体部は倒卵形で底部は平底である。外面は全体にハケ目を施すが、内面は上部までヘラケズリの及ぶものと及ばないものがある。高杯は破片のみであるが、脚部は長く直線的に開くものである。鉢は口縁部が屈曲するものとしないものがある。底部は突出気味の平底である。長頸壺が残り、甕には叩きが顕在化しない平底のもの、さらに鉢の平底形態などからこの土器群は下川津遺跡の編年の下川津Ⅰ式新相～Ⅱ式に並行するものと考えられる。

C区S E01出土遺物

平面形が長楕円形、深さ1mほどの井戸の資料で、埋土は8層に分層されるがいずれも自然埋没と考えられる。量的に出土した層から井戸の下部、中部、上部から抽出して検討する。

最下層の第8層では壺・甕・鉢・ミニチュア土器が出土している。壺は典型的な長頸壺で、頸部はほぼ直立し口縁部端部を若干拡張し端部に凹線を施している。体部は球形に近く平底である。甕は上半のみであるが体部上半は張りがあるものが多い。口縁部は長めの「く」字形のものと短く屈曲するものがある。体部内面はヘラケズリが上部まで及んでいる。鉢は大型で口縁部は強く屈曲する。

第5層では甕・高杯・鉢が出土している。甕の体部は倒卵形で外面はハケ目、内面は体

部最大径部分までヘラケズリを施している。高杯の脚部はなだらかに外反して開く。鉢は大型で口縁部は屈曲し、底部は平底である。

第4層では壺・甕・鉢・ミニチュア壺が出土している。壺は長頸壺と広口壺である。甕は体部内面のヘラケズリが上部まで施されている。鉢は口縁部が大きくS字状に屈曲している。

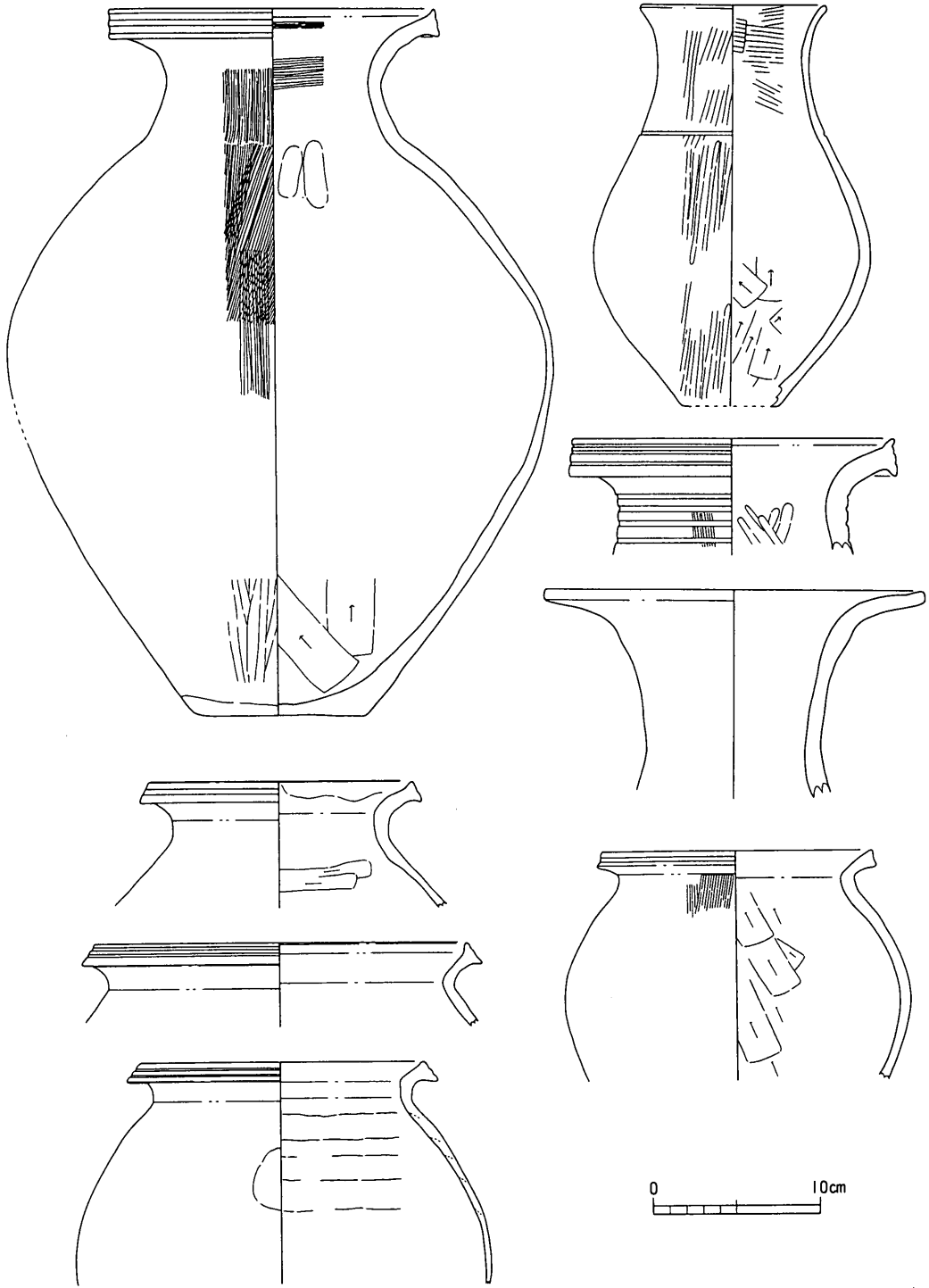
第2層では壺・甕・高杯が出土している。壺は広口壺であるが頸部から全体に外反するものと、頸部が直線的になった後に口縁部が外反するものがある。甕は体部内面の上部までヘラケズリが施されているものがある。高杯の杯部は口縁部が鋭く屈曲し外反するもので、杯部は浅いものとなっている。

第1層は壺・甕・高杯・鉢が出土している。壺は小型丸底壺が出現している。甕は口縁部の屈曲の度合いが強くなってきている。高杯の杯部は浅く、杯部の中位から口縁部が鋭く外反する。鉢は完存するものはないが、底部が丸底になると思われるボール形のものが出現する。

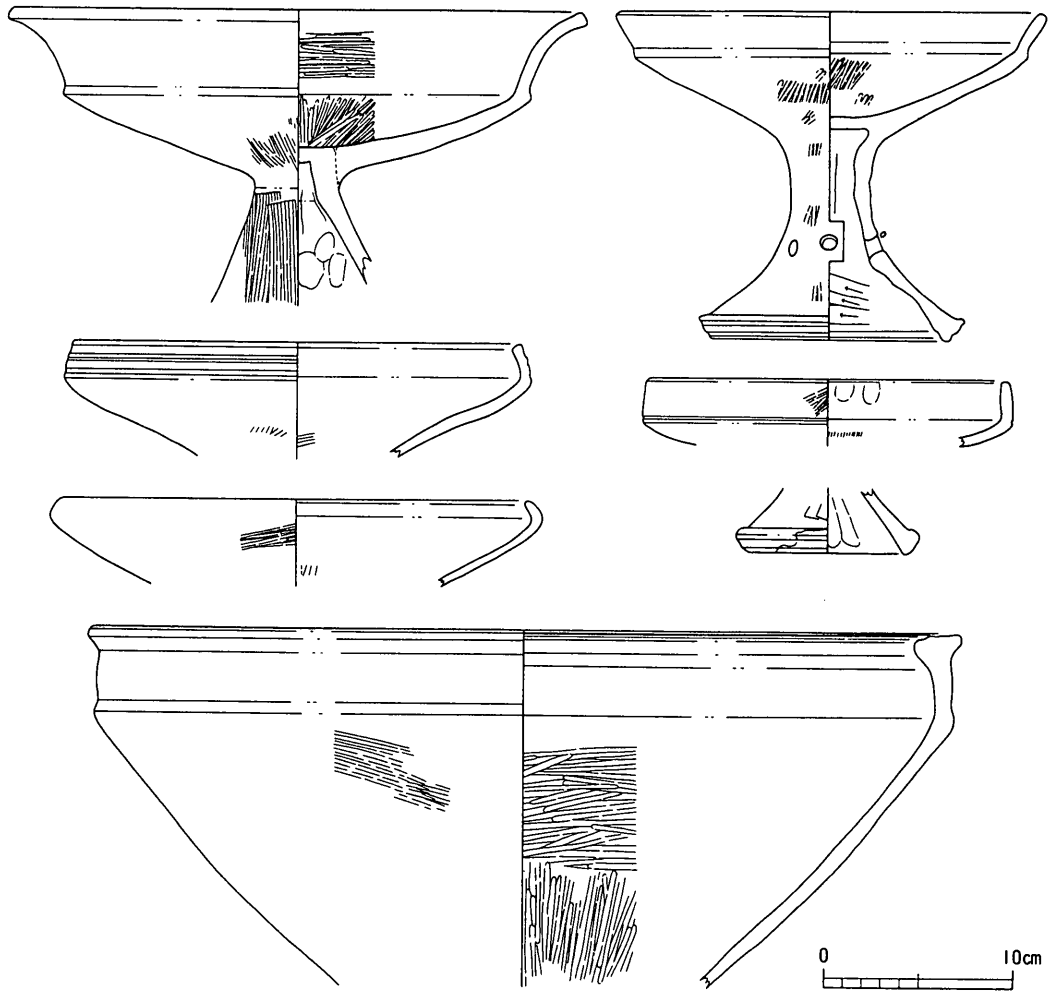
最下層の第8層では口縁部端部を拡張して凹線を施す長頸壺の存在から、後期前半のものと考えられる。甕の体部内面のヘラケズリに注目すると、第4層から上では最上部まで施されている。第1層では小型丸底壺の出現や鉢の丸底化など新しい要素が出現する。しかし最上層でも甕の外面に叩きが残るものはなく、全体にハケ目を施しているものである。下川津遺跡の編年に対比すると、下川津Ⅱ式以降に甕の外面のハケ目が簡略化されて叩きが残るようになってくる。小型丸底壺は下川津Ⅲ式で出現する。一方、高杯の脚はどの層のものも屈曲するものはない。以上のことから最下層の第8層は壺には口縁部端部に凹線が残るが、甕の口縁部には凹線が残らないことから下川津Ⅰ式古相よりやや先行するもの、観音寺市一の谷遺跡大型土坑の資料⁽¹²⁾と同時期と考えられる。最上層の第1層は小型丸底壺の出現を重視して下川津Ⅲ式古相と考えたい。

F区SR01出土遺物

旧河道の埋土から出土した資料である。この旧河道がある程度自然埋没した後に、大きく全体に切り込む粘質の砂層から出土した。一気に流れが走ったためか遺物は旧河道の上部から下部と拡散しているが、遺物の残存状況は良好である。弥生時代Ⅳ期とⅤ期の遺物が出土しているが、圧倒的多数のⅤ期の遺物はこの単一の層から出土しており、さらに遺物の残存状況などから判断すると、Ⅴ期の遺物はある程度一括して廃棄されたものと考えられる。



第806図 一の谷遺跡大型土坑出土遺物 (1) (1/4)



第807図 一の谷遺跡大型土坑出土遺物（2）（1／4）

弥生時代V期の遺物は全部で341点図化し、壺・甕・高杯・鉢・甑などが出土しているが、それぞれ器種ごとにその特徴を述べて行くことにする。

壺は長頸壺，広口壺，細頸壺がある。長頸壺は頸部が長く直立し口縁部が頸部から鋭く開くもの，頸部は長いが口縁部は頸部から丸みをもって開くものがある。長頸壺の口縁部は外側に平坦な面をつくるものが一般的である。頸部外面はハケ目，体部内面にはヘラケズリを施している。広口壺は口縁部が頸部から丸みをもって開くもの，稜をもって鋭く開くもの，頸部が短く口縁部が外へ開くものがある。頸部は直立，外傾，内傾のものがある。体部は球形に近いもの，扁平な球形，縦長の球形のものがあり，外面はハケ目が多いがヘラミガキを加えるものもある。口縁部は鋭く開くものは長めのものが多い。細頸壺は頸部

は長くラップ状に開き、体部は小さく扁平で外面は中央部は横方向、それ以外は縦方向のヘラミガキを施している。

甕は口縁部は体部から曲線的に屈曲するものと、鋭く屈曲するものがある。また口縁部は短く斜め上方に立ち上がるものと横に開くものがある。体部は倒卵形かそれに近いものが多く、体部最大径は中央からやや上にかけてのものが多い。体部外面はハケ目のもの、叩きの上にハケ目を施すが叩きが残るもの、叩きのみものものがある。これは体部には基本的には叩きを施すが、それをハケ目で消す度合いによる差で、量的には叩きをハケ目で消さないものが多くなっている。内面は上部までヘラケズリを施すものが多い。底部は基本的に平底である。

高杯は量的に少なく、V期のものは全体の約3%である。口縁部が短く屈曲し上部に端面を形成して凹線を施すV期初頭のものがある。また口縁部が杯部から鋭く屈曲して大きく外反し、口縁部内面には鋭いナデによる凹線が形成されるものがある。杯部には格子状あるいは蜘蛛の巣状のヘラミガキを丁寧に施す。脚部まで完存するものはないため杯部との対応がとれないが、短く途中で屈曲する脚部がV期でも新しいものである。杯部と脚部は円盤充填によるものが大部分である。

鉢は全体の約20%と多くなっている。口径が10cm前後のもの、16~18cmほどのもの、20cmを超えるものがある。口径が16~18cmほどのものはサラダボール形で底部は丸底に近く外面下半にヘラケズリを施している。その他の鉢は底部は基本的に平底である。外面に叩きを施すものもある。脚台の付くものも少量ある。大型の鉢は少ない。

甌は鉢の底部にそのまま穿孔したものと砲弾形のものがあるが、全体的に少量である。

各器種ごとにその特徴を見たがF区S R01の弥生時代V期の資料は、下川津遺跡の編年に対比させると、下川津Ⅱ式を中心とする時期と言える。岡山の編年では百間川後期Ⅲ段階に相当するものと思われる。またF区S R01出土土器のうち胎土に角閃石を含むものは、V期のもの341点中で35点で全体の10%ほどである。IV期のものは34点あるが、このうち胎土に角閃石を含むものは僅か1点で3%となっている。

G区S R02出土遺物

旧河道の埋土から出土した資料である。この旧河道の底付近のほぼ同一の層から多量の土器が出土した。土器の残存状況は極めて良好で、一括で廃棄したものと思われるものである。

弥生時代V期の遺物は全部で538点図化し、壺・甕・高杯・鉢・甌・器台などが出土し

ているが、それぞれ器種ごとにその特徴を述べて行くことにする。

壺は長頸壺、広口壺、二重口縁壺、細頸壺、小型丸底壺がある。長頸壺は量的には少なくなっている。広口壺は体部は球形化しているものが多いが、底部はまだ平底をとどめている。体部外面には叩きが残るものがある。口縁部は頸部から屈曲して大きく開くものが多い。頸部は内傾・直立・外傾するものがある。二重口縁壺は口縁部外面に幅広の面をもち、文様を施すものが多い。細頸壺の体部は扁平で、外面全体に丁寧へラミガキを施すが中央部は横方向のへラミガキとなっている。小型丸底壺は口径が体部最大径の2倍ほどで、体部は小さく扁平である。

甕は口縁部は丸みを帯びて屈曲するものと、鋭く屈曲するものがある。また短く横へ屈曲するものもある。体部は最大径が中央かそれよりやや上のものが多い。外面には叩きがハケ目で消されるものが少なくなっており、上半には叩きがそのまま残ることが多くなっている。しかし口縁部は横へ短く屈曲するタイプのものは依然として体部外面にハケ目を丁寧に施し叩きを消しているものが大多数である。さらに外面下半にはへラミガキを施すものもある。内面はへラケズリのもので多く、上半部まで施されるものが多く、中には上端部にまで及ぶものもある。底部は依然として平底であるが接地面は小さくなってきている。

高杯は杯部深く、口縁部は大きく外反して強くナデるものが多い。内・外面には格子状にへラミガキを丁寧に施す。脚部は短く途中で屈曲するものが多い。円盤充填のものが多いが、差し込み法のものもある。

鉢は大・中・小の3種類あり、外面はへラケズリの後に口縁部のみをナデるものが一般的となっている。底部は丸底のものが多い。口縁部が屈曲するものもあるが、これは大型のものに多い。

甌は体部が砲弾型のものが多い。量的には少ない。

各器種ごとにその特徴を見たがG区SR02の弥生時代V期の資料は、下川津遺跡の編年に対比させると、下川津IV式を中心とする時期と言える。岡山の編年では百間川後期IV段階に相当するものと思われる。またG区SR02出土土器のうち胎土に角閃石を含むものは、V期のもの538点中で183点で全体の34%ほどである。IV期のものは22点あるが、このうち胎土に角閃石を含むものは無い。

以上前田東・中村遺跡出土の弥生時代V期の土器を検討したが、C区SE01第8層→C区SD06→F区SR01→C区SE01第1層→G区SR02の順に変遷するものと思われる。

(ii) 弥生時代後期土器の問題点

前田東・中村遺跡のⅤ期の土器の検討によると、下川津遺跡では長頸壺が下川津Ⅱ式でほぼ消滅するが、前田東・中村遺跡では下川津Ⅳ式並行期まで少ないながら残っている。また甕では下川津Ⅱ式並行と考えられるF区S R01出土土器では、胎土に角閃石を含むものが10%ある。これに対して下川津Ⅳ式並行と考えられるG区S R02出土土器では34%あり増加している。前田東・中村遺跡出土の甕で口縁部が短く屈曲するタイプのものは、下川津B類土器の甕に形態的には相当するものである。しかしこの土器は前田東・中村遺跡出土の甕全体に占める割合は少なく、胎土に角閃石を含まないものもある。逆に下川津B類の甕の形態ではないものでも、胎土に角閃石を含むものが見られる。前田東・中村遺跡が位置する高松平野東部の特徴かもしれないが、今後周辺部や高松平野中央部の資料の増加により明らかにされるものと期待したい。

		+	紫雲出遺跡Ⅱ式, 菰池遺跡
Ⅳ 期	1	前田東・中村遺跡E区S D01下層	前山Ⅱ式, 矢ノ塚遺跡S D85031
	2	前田東・中村遺跡F区S K07	仁伍遺跡
	3	+	久米池南遺跡S H 3・2号テラス
	4	+	末則古墳墳裾南西部ピット
	5	前田東・中村遺跡F区S H01	
Ⅴ 期	1	+	大空遺跡, 末則古墳中世墳墓北端ピット
	2	前田東・中村遺跡C区S E01第8層	一の谷遺跡大型土坑
	3	前田東・中村遺跡C区S D06	下川津Ⅰ式新相～Ⅱ式
	4	前田東・中村遺跡F区S R01	下川津Ⅱ式
	5	前田東・中村遺跡C区S E01第1層	下川津Ⅲ式古相
	6	前田東・中村遺跡G区S R02	下川津Ⅳ式

第10表 前田東・中村遺跡弥生時代Ⅳ・Ⅴ期土器の変遷

- (1) 大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」
『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会・
（助）香川県埋蔵文化財調査センター 1990
- (2) 小林行雄・佐原真『紫雲出』詫間町文化財保護委員会 1964
- (3) 鎌木義昌「岡山県郷内村前山の弥生式遺跡」『吉備考古』80号 1950
鎌木義昌「岡山県児島福江前山遺跡の土器」『弥生式土器集成 資料編』1968
高畑知功「備中地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992のIV
- 2 様式に相当する。
- (4) 薦田耕作『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊 矢ノ塚遺跡』香川県教育委員会 1987
矢ノ塚遺跡S D85031の編年的位置については、香川県埋蔵文化財研究会の1992年
4月の真鍋昌宏氏の「弥生中期土器編年試案」の研究発表及び発表資料による。
- (5) 鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成 本編1』1964
高橋護「弥生土器 山陽1」『考古学ジャーナル』173号 1980
高畑知功「備中地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992のⅢ
- 2 様式に相当する。
- (6) 高橋護「郷内小学校裏貝塚出土弥生式土器の編年的位置について」『遺跡』23号
1955
高畑知功「備中地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992のIV
- 3 様式に相当する。
- (7) 伊沢肇一「志度町天野出土の弥生式土器について」『文化財協会報 昭和56年度特
別号』香川県文化財保護協会 1981
- (8) 山本英之・山元敏裕他『浴・長池遺跡』高松市教育委員会 1993
- (9) 渡部明夫『末則古墳調査概報』香川県教育委員会 1976
- (10) 藤井雄三他『久米池南遺跡発掘調査報告書』高松市教育委員会 1989
- (11) 鎌木義昌・六車恵一「香川県高松市高松町大空遺跡の土器」『弥生式土器集成 資
料編2』1961
- (12) 西岡達哉他『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第7冊 一の谷
遺跡群』香川県教育委員会・（助）香川県埋蔵文化財調査センター 1990

第3節 山田郡周辺の古代寺院 —前田東・中村遺跡出土瓦と関連して—

(1) はじめに

讃岐は瀬戸内海から阿讃山脈に至るまでの平野で大部分を占めており、古来から人々が生活を営んでいた地域である。律令国家の成立とともに国家レベルで取り入れられた仏教の広まりとともに、その象徴ともいべき寺院が飛鳥寺の建立以後急激に広まった。当初は畿内中心部に限られていた寺院も7世紀中頃以後全国に広がり、741年の国分寺建立の詔によって開始された各国の国分寺の建立と奈良・東大寺の建立をもって寺院の造営はピークを迎えた。このような状況下で讃岐でも白鳳時代以後多くの寺院が建立され奈良時代までに30を越える寺院が建立されている。さらに律令国家により交通路が整備され、その一つの南海道が讃岐を通過しており律令体制が浸透した地域とも言えよう。

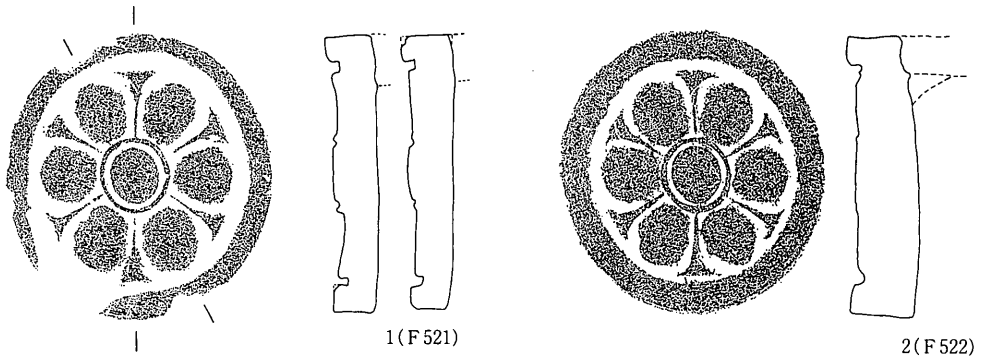
このような中で前田東・中村遺跡も7～10世紀にかけての古代に栄えた遺跡の一つである。前田東・中村遺跡は山田郡と三木郡の郡境に位置し、遺跡のすぐ南側の芳岡山が郡境の目標とされている。時期的には異なるがこの山田郡に5箇所、三木郡に3箇所の寺院が建立されており、讃岐の中で面積的に狭い両郡に讃岐全体の約四分の一にあたる寺院が集中していることから、前田東・中村遺跡の位置する周辺地域は7～8世紀には特に栄えていた場所の一つと言えよう。そして7～8世紀の軒丸瓦・軒平瓦を含む瓦が出土していることから、明確な遺構は検出出来なかったが寺院か役所のような公的施設が付近にあったことが予想されている。本論ではこの前田東・中村遺跡で出土した瓦の分析と周辺地域の古代寺院との関係を中心に考えてみたい。尚、本論で古代寺院と言う時には7～8世紀の寺院を指している。

(2) 前田東・中村遺跡出土の軒丸瓦とその系譜

前田東・中村遺跡では瓦当文様の分かる軒丸瓦が14個体出土している(第808・809図)。これらの軒丸瓦はⅠ類：素縁単弁軒丸瓦(1～6)、Ⅱ類：細弁単弁軒丸瓦(7, 8, 10, 11, 14)、Ⅲ類：子葉をもつ細弁単弁軒丸瓦(9, 12)の3種類に大別出来る。ここではそれぞれの類ごとに特徴や系譜などについて検討を加えてゆく。

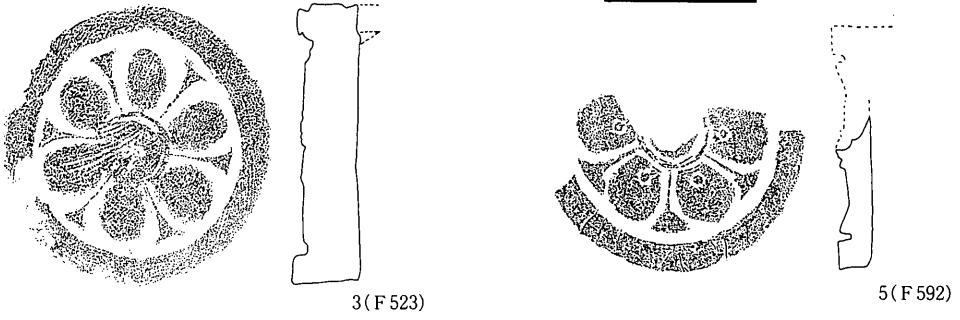
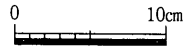
Ⅰ類：素縁単弁軒丸瓦(第808図 1～6)

この瓦の特徴は単弁の大きく肉厚の6弁の蓮弁、中房の周囲の圏線、外区は素縁である



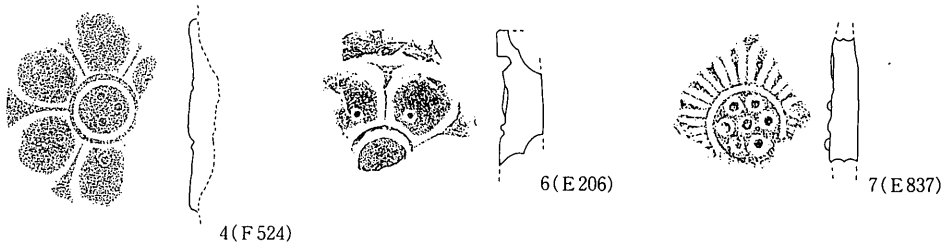
1 (F 521)

2 (F 522)



3 (F 523)

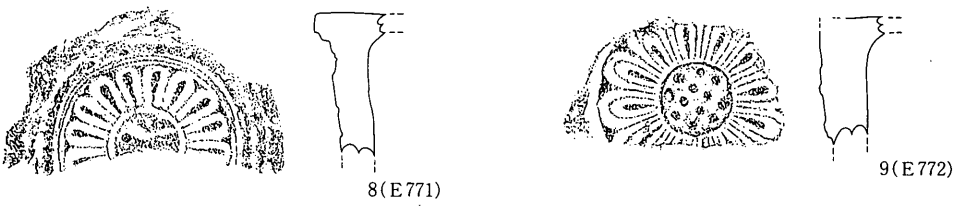
5 (F 592)



4 (F 524)

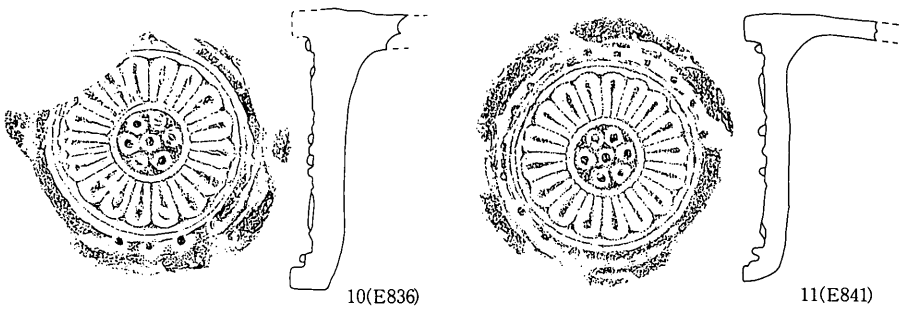
6 (E 206)

7 (E 837)



8 (E 771)

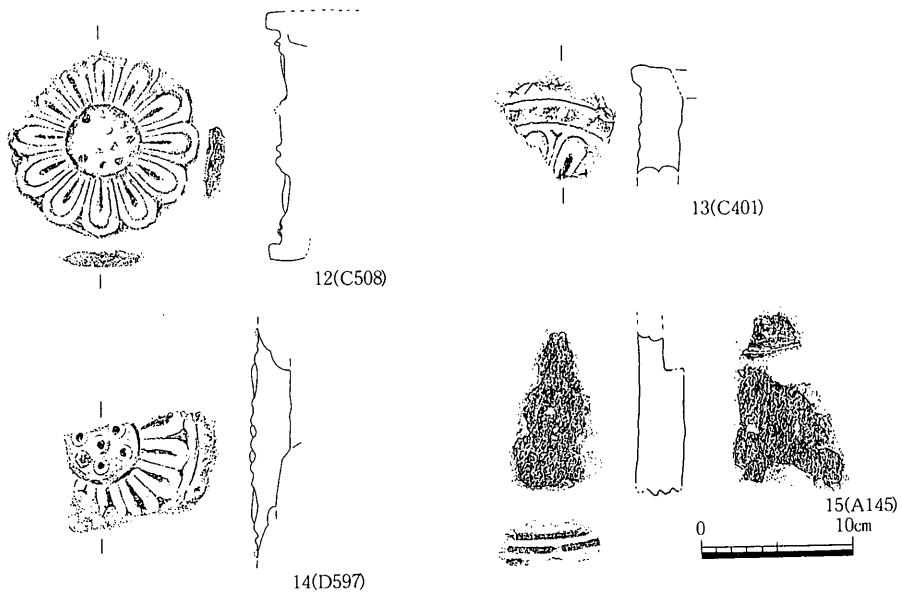
9 (E 772)



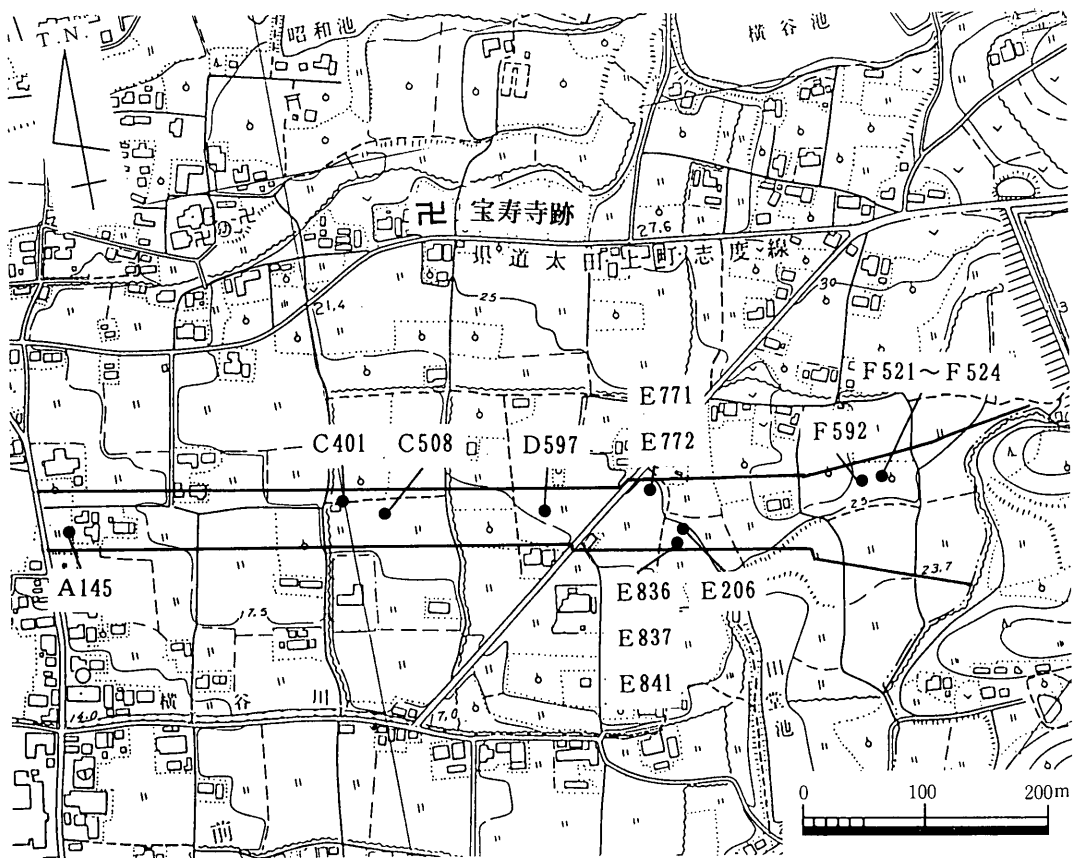
10 (E 836)

11 (E 841)

第808図 前田東・中村遺跡出土軒丸瓦 (1 / 5)



第809図 前田東・中村遺跡出土軒丸瓦・軒平瓦 (1 / 5)



第810図 前田東・中村遺跡軒丸瓦・軒平瓦出土位置図

ことである。さらに蓮弁内の下部に珠文を配するもの(4~6)がある。ここで蓮弁内に珠文を配しないもの(1~3)をI-a類、蓮弁内に珠文を配するもの(4~6)をI-b類とする。I類の瓦当の直径は16.8~17.6cmで、中房の直径は3.4cm前後である。蓮弁は6弁で子弁は持たない。蓮弁の最大幅はI-a類が3.3cm、I-b類が3.6~3.7cmでI-b類のほうが若干幅広の蓮弁となっている。蓮弁の先端は反転は緩く、I-aは丸みを帯びているが、I-b類は尖り気味となっている。両者とも先端の反りは緩くなっている。中房の蓮子はI-a類のものには認められないが、I-b類には4個配されている。しかし蓮子は潰れたり剥落しており確認しにくい状況となっている。中房の周囲の圏線は幅2~3mmで、中房に直接は接していない。丸瓦部との接続部は上部で外区の直下に位置している。接合方法は基本的に瓦当裏面に丸瓦を押し当て、接合用粘土を瓦当裏面と丸瓦の凹面の接合部分に充填して接合するものと思われる。(2)の軒丸瓦で接合部にかきべらによる刻み目が認められ、接合しやすいようにしている。

I類の瓦はその特徴から百済系の瓦と考えられる。扶余の軍守里廃寺出土の軒丸瓦に全体的に似ており、軍守里廃寺のものには中房の周囲を圏線状に粘土紐を貼り巡らすものもある⁽¹⁾。前田東・中村遺跡出土のものは蓮弁の先端に切り込みはないが、蓮弁の幅や先端の形状は軍守里廃寺のものにも酷似するものがある。国内出土のものとしては中房の蓮子の数などに差異はあるが瓦当文だけでみれば、福井県武生市大虫廃寺⁽²⁾、愛知県小牧市大山廃寺⁽³⁾(33)、愛知県稲沢市東畑廃寺⁽⁴⁾(30)、名古屋市尾張元興寺⁽⁵⁾、播磨・高丘7号窯⁽⁶⁾などに類例がある。

さらに高松市前田東町で、前田東・中村遺跡のC区とD区の境の北200mのところ塔と考えられている礎石を残す宝寿寺の瓦がある。宝寿寺出土の軒丸瓦(16~19)には単弁6弁軒丸瓦(16, 18)、単弁7弁軒丸瓦(19)があり、その他に四重弧文軒平瓦(17)がある。このうち(16)は素縁で肉厚の蓮弁の形状や中房の周囲に圏線が巡るなど前田東・中村遺跡出土のI-a類と同文となっている。また(18)は(16)の特徴に加えて蓮弁内に珠文をもつもので、これは前田東・中村遺跡出土のI-b類と同文となっている。これに対して(19)は7弁となっており外区は素縁で蓮弁の先端は尖っている。中房の蓮子は1+4で周囲に圏線は認められない。しかし蓮弁は子葉をもたない素弁で、幅広で肉厚な蓮弁の形状は百済系のものと考えられ、前田東・中村遺跡のI類の瓦に近いものである。

次に蓮弁の中に珠文をもつものを見てゆくと、飛鳥寺、法隆寺、奥山久米寺、四天王寺などの初期の瓦では蓮弁の先端部に珠文が配されるものが多い。しかし前田東・中村遺跡

I - b類のように蓮弁内の下部に珠文が配されるものとしては、奈良県大窪寺⁽⁷⁾、京都府広隆寺⁽⁸⁾ (27~29)、愛知県東畑廃寺⁽⁴⁾ (31・32)、香川県讃岐国分寺⁽⁹⁾ (40) の例があるにすぎない。広隆寺では蓮弁を凸線で表し、弁端が丸みを帯びた剣先状になっている単弁8弁軒丸瓦の蓮弁内の中央部に珠文が配されている。7世紀中頃と考えられている。東畑廃寺では素縁素弁蓮華文軒丸瓦でI - E類と分類されている瓦の蓮弁内のほぼ中央部に珠文が配されている。蓮弁は9弁で幅は2.5cm、中房の蓮子は1 + 4となっている。7世紀後半と考えられており、前田東・中村遺跡のものと同時期である。讃岐国分寺では、国分寺造営以前のものと考えられる外区が素縁の軒丸瓦がある。この中に単弁10弁軒丸瓦で蓮弁内の中央付近に珠文を配するもの(40)がある。国分寺造営時に他の寺院から転用したものと考えられる。

前田東・中村遺跡のI類は百済系の瓦で、共伴遺物から7世紀後半と考えた。弁数は6弁で瓦当も厚めとやや退化傾向にあるとも言えるが、蓮弁内に珠文を配する他の例とも年代差はほとんどなく妥当な年代と言えよう。

II類：細弁単弁軒丸瓦（第808図 7, 8, 10, 11, 第809図 14）

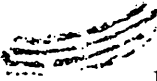
II類の瓦は、外区は外縁と内縁に分かれ外縁は素縁、内縁には珠文を配している。蓮弁は幅が1.0~1.5cmの細弁で弁数は17弁となっている。間弁の上部は横のものと接している。中房の周囲に凹線を巡らせ中房の蓮子は1 + 6である。II類の瓦当の直径は16.7~18.4cm、中房の直径は4.4cmである。丸瓦部との接合は接合用粘土を貼り付けて行っている。蓮弁数は(10・11)は確実に17弁である。蓮弁が17弁と変則的なもので分割配置ではないため、(7・8)のような瓦当面が完全に残っていないものは16弁になる可能性もあるが、一応瓦当の文様構成が同じであることから、17弁としておく。また(14)は反転復元すると14弁になる。

細弁様式の軒丸瓦は、素弁の変形・単弁の弁数の増加・複弁の二分割によるものが考えられている。複弁のものは基本的に子葉をもつため、子葉を持たない素弁のII類は素弁の変形と考えられる。中房の蓮子の数が異なるが奈良県横井廃寺⁽⁷⁾のものに似ている。

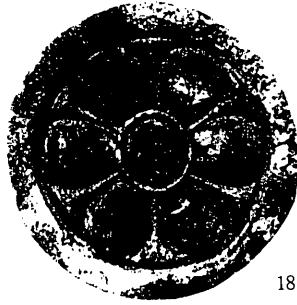
II類の軒丸瓦の年代であるが前田東・中村遺跡では包含層から出土したため共伴遺物からの年代決定は出来なかったため、型式学的方法に依らざるを得ない。II類の軒丸瓦は外区が内縁と外縁に分かれており、外区がこのように分かれるのは7世紀末の本薬師寺以降である。II類の外区外縁は素縁で、一般的に外区外縁に鋸歯文が施されるものより先行す



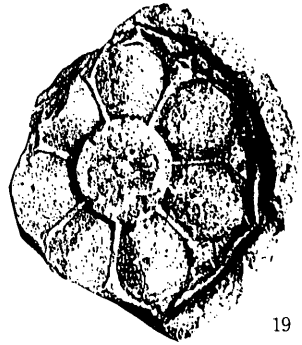
16



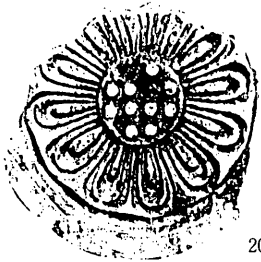
17



18



19



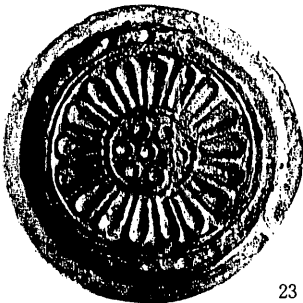
20



21



22



23



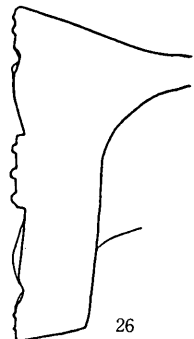
24



25



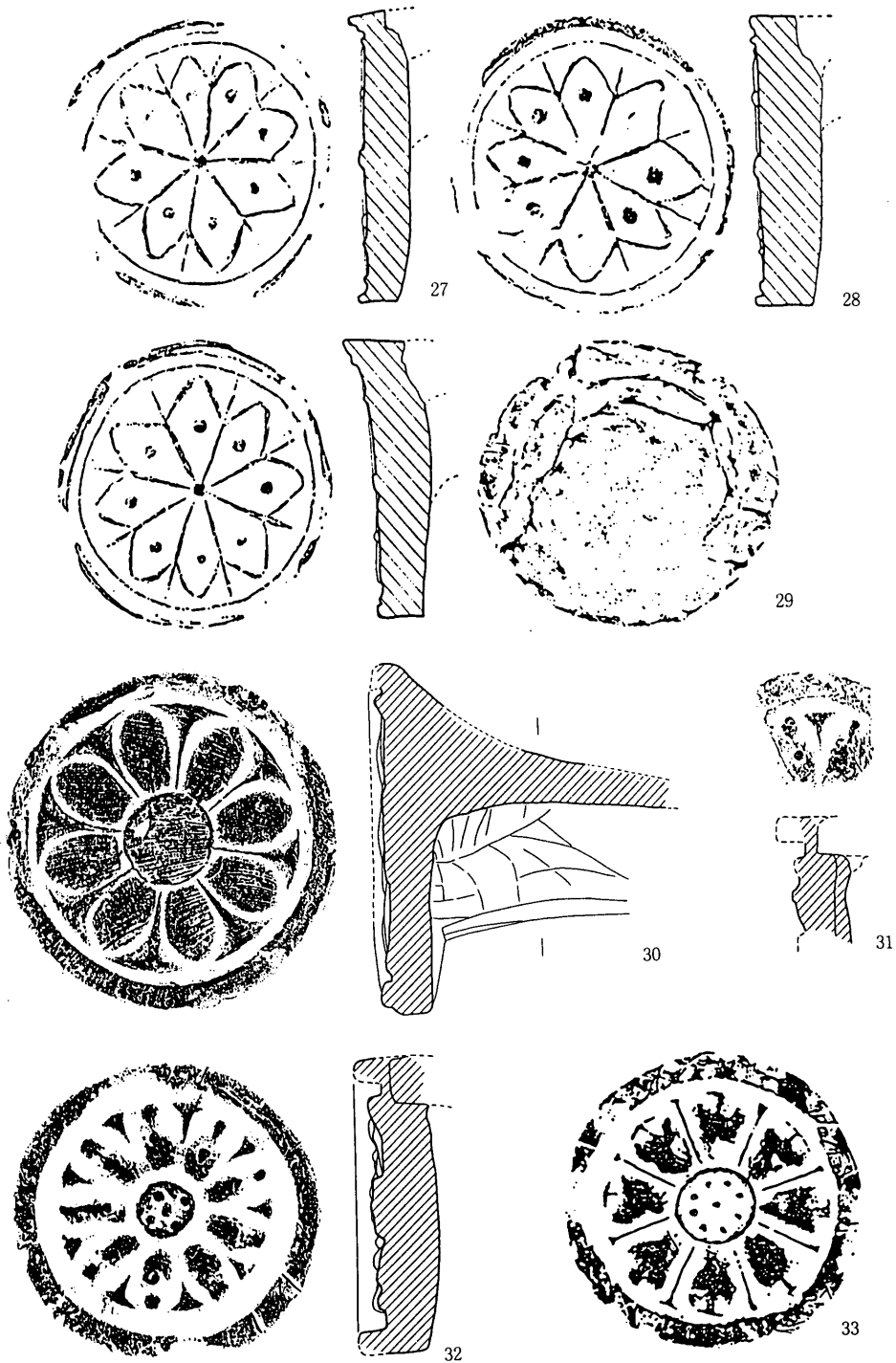
26



16~19 宝寿寺
20~26 始覚寺

16~19・20・23は縮尺任意、他は1/4

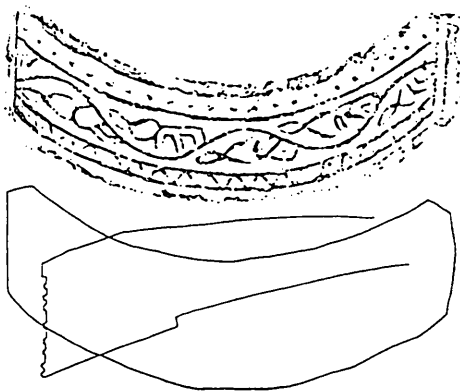
第811図 香川県内出土軒丸瓦・軒平瓦 (1) (1/4)



27~29 広隆寺
 30~32 東畑庵寺
 33 大山麿寺



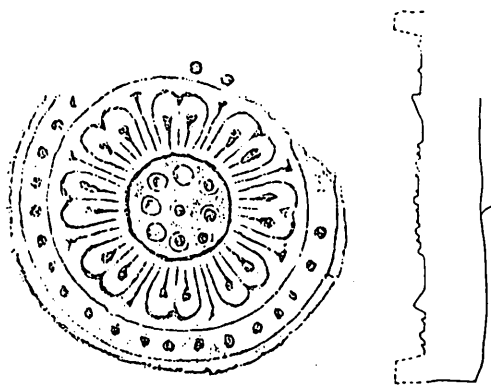
第812図 各地出土軒丸瓦 (1 / 4)



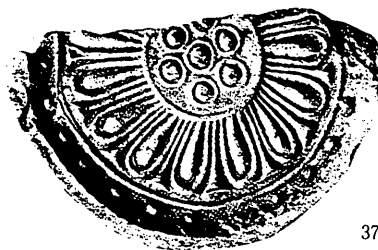
34



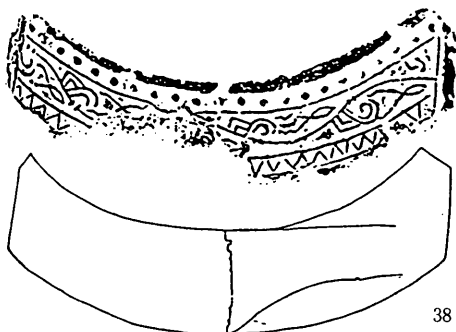
35



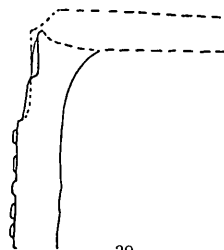
36



37



38



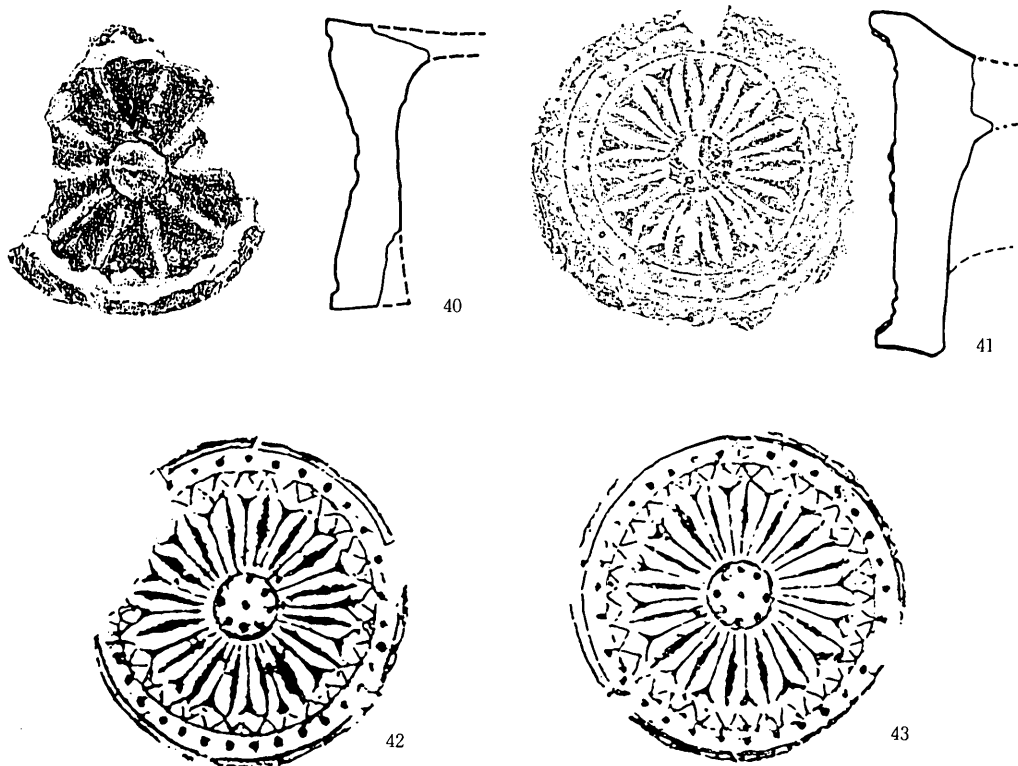
39

- 34・35 始覚寺
- 36・38 長楽寺
- 37 願興寺
- 39 上高岡魔寺



37のみ縮尺任意

第813図 香川県内出土軒丸瓦・軒平瓦(2)(1/4)



40・41 讃岐国分寺
42・43 讃岐国分尼寺



第814図 香川県内出土軒丸瓦

る要素をもっている。今ここで香川県三木町に注目される古代寺院がある。始覚寺⁽¹⁰⁾がそれで、出土軒丸瓦の中に細弁単弁17弁で前田東・中村遺跡出土のものと全く同文の完形品が1点ある。その他に文様構成が同じで18弁とされているものが2点あるが、瓦当の半分以下しか残っていないため復元方法によっては17弁になる可能性もある。始覚寺では藤原宮式の偏行唐草文軒平瓦(34)が出土している。他に讃岐国分尼寺と同文、同系統の軒丸瓦(26)が出土している。このことから始覚寺の年代は軒平瓦から藤原宮以降、軒丸瓦からは国分寺建立の詔(741年)以降とされている。さらに香川県長尾町願興寺出土の軒丸瓦⁽¹¹⁾(37)は細弁単弁16弁で、中房の形状や蓮子の数はⅡ類と同じで、蓮弁の大きさや形状は後述するⅢ類と同じとなっている。この願興寺出土の軒丸瓦は藤原宮式の亜型式とされている香川県三木町長楽寺の複弁軒丸瓦⁽¹²⁾(36)の文様を二分割したものである。以上のこと

からⅡ類の軒丸瓦は始覚寺の軒平瓦と組み合わさる可能性が高い。従って7世紀末～8世紀初頭と考えたい。

Ⅲ類：子葉をもつ細弁単弁軒丸瓦（第808図 9，第809図 12）

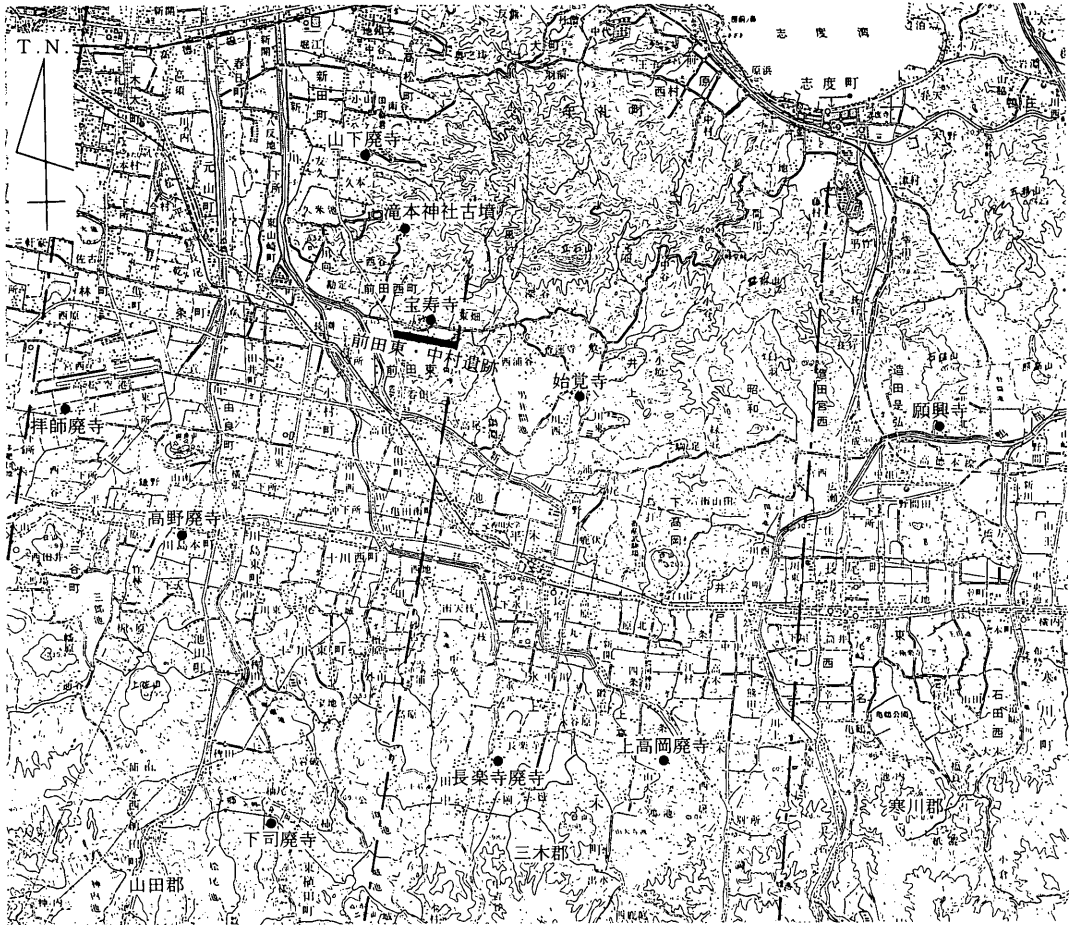
2点のみで内区全体と外区の一部が残っているものである。蓮弁は単弁の12弁で幅1.6cmの細弁であるが、蓮弁の中に子葉をもつものである。子葉の形態はⅡ類の蓮弁に似ている。中房の直径は4.8cmほどで蓮子は4+8でⅡ類より多くなっている。外区は素縁で分かれていない。丸瓦部との接合方法であるが特殊な方法を用いているものがある。（9）の軒丸瓦は外区部分が大部分剥離した内区部分の瓦当であるが、この内区部分の外側の剥離した部分に布目圧痕が残っている。このことは瓦当の内区部分のみを別に製作していることを示している。そして粘土円筒の中に内区部分をはめ込み、粘土円筒の端部をそのまま外区部分に転用しているものと考えられる。最後に円筒部を半截して丸瓦部とするのであろう。Ⅲ類は12弁であり複弁6弁の分割形態の可能性もあるが、複弁で6弁のものは少ないので単弁の一形態と考えるほうが自然であろう。

Ⅲ類の瓦当文様の類例であるが、先述した始覚寺で出土している。また願興寺では中房の形態はⅡ類で蓮弁は16弁であるがⅢ類というものが出土している。Ⅲ類は外区が分かれておらず古い要素をもっている。しかし地方の軒丸瓦は時代が下っても外区が分かれられないものもあるのでこのことだけでは即断出来ない。始覚寺では先述したように藤原宮式の偏行唐草文軒平瓦が出土している。従ってⅢ類もⅡ類とほぼ同時期と考えられるがやや先行する可能性もある。

（3）前田東・中村遺跡と周辺の古代寺院

前田東・中村遺跡の南側約800mのところにある芳岡山を境に東側が三木郡、西側が山田郡となっている。この芳岡山から北側に山田郡の条里制地割りの方向のN-10°-Eのラインを引くと、前田東・中村遺跡のA～E区までは山田郡に入る。しかし芳岡山から北東方向に派生し前田東・中村遺跡のG区のすぐ東に至る丘陵部があるが、この自然の山並みを郡境とすると前田東・中村遺跡はすべて山田郡に入る。ここでは前田東・中村遺跡は山田郡内の遺跡として扱うことにする。

最初に述べたように、山田郡に5つ、三木郡に3つの古代寺院がある。山田郡では白鳳時代のものに下司廃寺、宝寿寺が、奈良時代のものに高野廃寺、拝師廃寺、山下廃寺があ



第815図 前田東・中村遺跡周辺の古代寺院分布図

る。これに対し三木郡には白鳳時代の上高岡廃寺、長楽寺廃寺、白鳳～奈良時代の始覚寺がある。前田東・中村遺跡出土の軒丸瓦の分析でⅠ類が宝寿寺から、Ⅱ・Ⅲ類が始覚寺から出土していることが判明した。

宝寿寺は前田東・中村遺跡のC区とD区の境部分の北側約200mの所に土壇と礎石が数個残っている。小字名は堂床と呼ばれているが、塔の跡ではないかと思われ、伽藍配置等は不明である。宝寿寺と同文のものが前田東・中村遺跡ではF区から出土している。宝寿寺出土の軒丸瓦は前田東・中村遺跡Ⅰ類のものと同様に百済系のものと考えられる。また前田東・中村遺跡のA2区から四重弧文軒平瓦(15)が1点出土しているが、これがⅠ類の軒丸瓦と組み合わせるものと思われる。宝寿寺の塔と考えられている所から北西600mのところの低い丘陵部に滝本神社古墳⁽¹⁴⁾がある。この古墳は7世紀前半のものとしており、特徴的な石室をもっている。石室は横長の長方形で長辺のほぼ中央に羨道がつき、平面形

がT字形となっている。滋賀県大津市近郊には渡来系氏族の古墳と考えられている、石室の平面形態が正方形となる古墳が多くある⁽¹⁵⁾。もし滝本神社古墳の石室がこのような平面が正方形の石室の一形態とすれば、渡来系の人物の古墳と言える。そうすると前田東・中村遺跡周辺にいた渡来系の氏族が滝本神社古墳を作り、さらに百済系軒丸瓦を葺いた宝寿寺を造営した可能性がある。前田東・中村遺跡のⅠ－b類の蓮弁内に珠文を配するものが宝寿寺でも出土している。この蓮弁内に珠文を配する軒丸瓦は京都市広隆寺で出土していることはすでに述べたが、この広隆寺は京都市の太秦に所在し、代表的な渡来系氏族である秦氏の氏寺であることは非常に興味深い。讃岐國では香川郡、山田郡、三木郡を中心に秦氏が多く、全国的にみてもその数は非常に多い。このことから山田郡の東端の地に百済系の瓦をもつ宝寿寺が造営されたことも不思議ではない。

始覚寺は立石山から南へ派生する丘陵の東側の男井間池の東に位置する。前田東・中村遺跡とはこの丘陵部を挟んで東西にあたり、直線距離で1.5cmほどである。伽藍配置は不明であるが寺域は現在の始覚寺より西側に考えられている。現在の始覚寺には移動された塔の心礎石がある。心礎石は二重の舍利孔が穿たれた花崗岩製のものである。この始覚寺から前田東・中村遺跡のⅡ類とⅢ類のものと同文の軒丸瓦が出土している。始覚寺からは軒丸瓦と軒平瓦が出土している。しかし軒丸瓦のなかで讃岐國分尼寺出土のもの⁽¹⁶⁾（42・43）と同文のもの（26）があり、この軒丸瓦が注目され奈良時代後半という年代が先行していた。しかし軒平瓦は藤原宮式のものがあり（34）この年代差を疑問視することが多く、始覚寺の年代が白鳳時代か奈良時代か曖昧にされていたのである。だがこの時期差は創建時のものと葺き替えのものという時期差にあてれば問題はない。そしてこの軒平瓦に対応する軒丸瓦が前田東・中村遺跡のⅡ類とⅢ類に相当するものと言え、その年代は先に検討したように8世紀前後と考えられる。

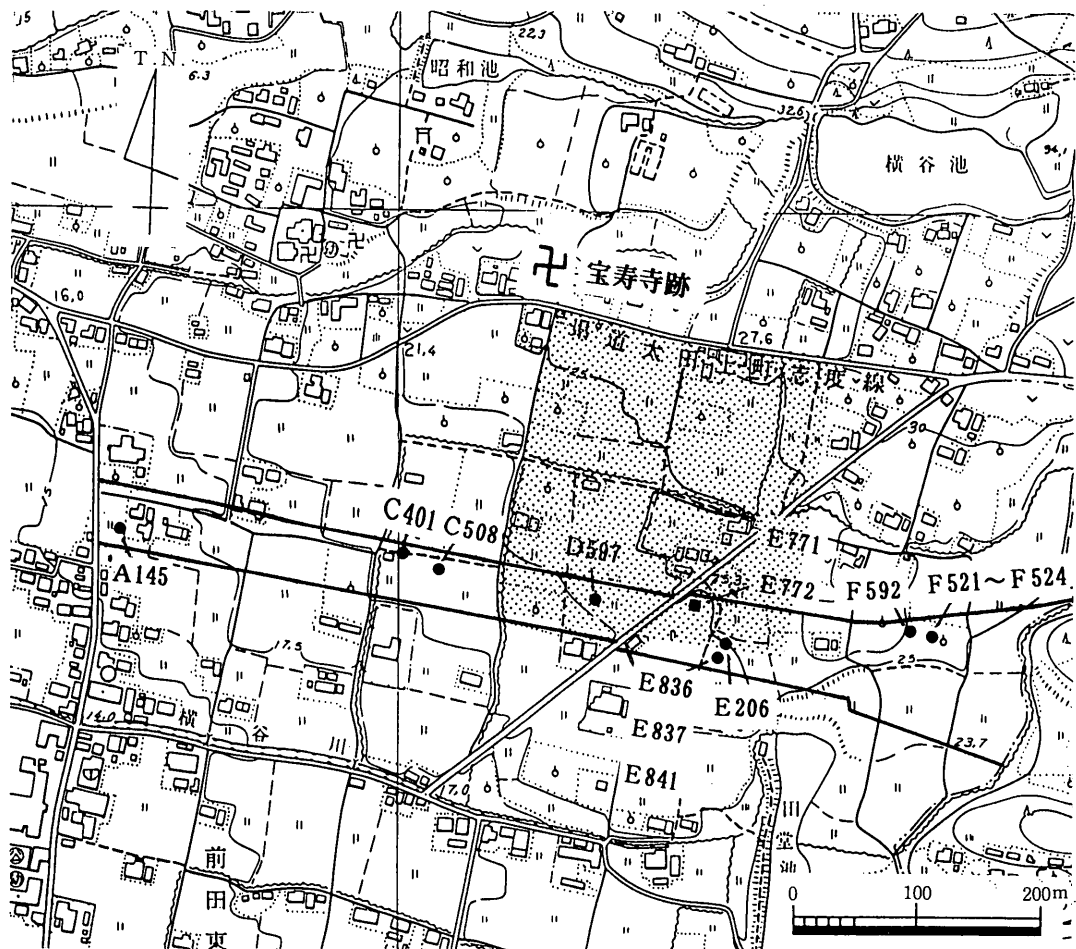
前田東・中村遺跡は山田郡の宮処郷に位置する。造東大寺司牒の天平勝宝4（752）年の項によると東大寺の封戸150戸が讃岐國に設置されたがそのうちの50戸が山田郡宮処郷に置かれている。東大寺は鎮護国家のため各地に建立された国分寺の総国分寺である。始覚寺からは讃岐國分尼寺と同文の細弁16弁軒丸瓦が出土している。また讃岐國分寺からは同系等の細弁14弁軒丸瓦（41）が出土している⁽¹⁷⁾。このことから始覚寺は国分寺と関連の深い官寺的な寺院の可能性もある。『日本靈異記』によると讃岐國三木郡の話のなかで「三木寺」が登場するが、始覚寺を当てる考えもある。奈良時代の官寺の総本山ともいえる東大寺の封戸が前田東・中村遺跡の地に置かれたことと、始覚寺と同文の軒丸瓦が前田

東・中村遺跡から出土したことから、決定的な遺構は検出されなかったが前田東・中村遺跡付近に寺が造営された可能性がある。7世紀後半にはⅠ類の瓦を伴う宝寿寺が築かれていたが、推測の域を出ないが東大寺の封戸が置かれた際に宝寿寺の瓦を葺き変えたか、宝寿寺が移動あるいは再建したのとは考えられないだろうか。そしてこの時に始覚寺からⅡ類とⅢ類の軒丸瓦が前田東・中村遺跡の地に持ち込まれ、新たに国分尼寺用の軒丸瓦が製作され、国分尼寺と始覚寺に供給されたものと考えたい。始覚寺の軒平瓦のうち藤原宮式の退化型式のものはこの時点で製作されたのではなかろうか。Ⅱ類とⅢ類ではⅢ類がやや先行する可能性があるがほぼ同時期と考えられ、始覚寺の創建瓦と考えられよう。そして前田東・中村遺跡に8世紀後半に移動したのと考えたい。東大寺＝官寺と関連が深い寺院の間で瓦が移動し、また宝寿寺もこの時点で官寺的要素を持ったか、あるいはそのような寺院が新たに造営された可能性がある。前田東・中村遺跡のG区SR04では斎串をはじめとする多量の木製模造品が出土したが、これは律令制祭祀を反映しているものと思われる、上記したような寺（＝公的施設）に伴う祓所に当たるものであろう。逆にこの祓所の存在から寺が想定出来よう。

（4）宝寿寺の寺域と前田東・中村遺跡

現在宝寿寺とされている場所は土壇と一部の礎石が残るのみで、その礎石は塔ではないかと思われる。伽藍配置は不明であり発掘調査も行われていない。ここでは限られた資料の中で宝寿寺の寺域の推定を試みたい。

この塔と思われる箇所は北側は急激に落ち込む谷状の地形になっており、北側に寺域が広がるとは考えられない。前田東・中村遺跡のC区とD区の境部分とこの塔跡の間に現地割りで方一町の平坦な部分がある。想像を逞しくするとこの部分に寺域が求められるかも知れない。そして塔が門の外側に出る伽藍配置となるのかもしれない。また二町四方とすると、前田東・中村遺跡のD区とE区の中央部分が寺域の南限となる。これは丁度F区からE区に派生する丘陵部のE区側の斜面部から平坦部に変換した部分に当たる。この推定寺域の南東部分にⅡ類とⅢ類の軒丸瓦と平瓦が集中して出土していることも示唆的である。しかしⅠ類の軒丸瓦は前田東・中村遺跡の東部のF区から集中的に出土している。F区の軒丸瓦集中地点のすぐ西側に平窯SF01が1基ある。この年代は7世紀後半と10世紀前半～11世紀末の年代推定に留まった。もし7世紀後半であればⅠ類の瓦を焼成した可能性が高く、宝寿寺に伴う瓦窯ということになる。F区のⅠ類の軒丸瓦は寺に直接伴うものでは



第816図 宝寿寺の推定寺域

なく、瓦窯に伴う可能性が高い。そしてF～G区は丘陵部と谷部にあたり寺の造営には向いていない。これまで採集されたI類の軒丸瓦は塔と思われる礎石がある堂床付近で出土していると言われている。また前田東・中村遺跡ではA区で奈良時代中頃の大型掘立柱建物群を検出している。寺の主要伽藍の建物ではないが、寺に関連する建物の可能性もある。

以上のことからI類に伴う寺、及びII・III類に伴う寺、これらは同一のものか否かは別として寺域を推定してみたい。地形はF区からE区にかけての丘陵部を除いて東から西へ向かって緩やかに下っている。寺域が求められるなら、南側は前田東・中村遺跡東部の丘陵部の西斜面の下、つまりE5区からA区にかけての部分が、北側は塔跡と思われる礎石の残る部分までと思われる。つまり前田東・中村遺跡のA区～E5区の北側部分と考えたい。

(5) おわりに

本稿では前田東・中村遺跡で軒丸瓦を含む多量の瓦が出土したことを契機に、その瓦の系譜と周辺寺院の検討を行った。今後の周辺の発掘調査による資料の蓄積により本稿の内容は当然修正されて行くであろう。高松平野東部では前田東・中村遺跡の北側の平尾古墳群を始め後期古墳も多い。古代寺院の造営につながる後期古墳の研究も今後この地域の研究にかかせない。本稿もそうした研究に一石を投ずるものとなれば幸いである。

註

- (1) 軍守里廃寺の軒丸瓦に関しては次の文献によった。
森郁夫他『畿内と東国の瓦』京都国立博物館 1990
- (2) 斎藤嘉造『越前国分寺推定遺跡 大虫廃寺・深草廃寺発掘調査報告』武生市教育委員会 1967
斎藤勝「大虫廃寺」『文化財調査報告』第21集 福井県文化財専門委員会 1971
- (3) 中嶋隆他『大山廃寺発掘調査報告書』小牧市教育委員会 1979
大山廃寺の瓦の実見に際しては、小牧市教育委員会の中嶋隆氏に御世話になり御教示頂いた。
- (4) 北條献示『東畑廃寺跡発掘調査報告書』稲沢市教育委員会 1980
北條献示『東畑廃寺跡発掘調査報告書(Ⅱ)』稲沢市教育委員会 1990
北條献示『東畑廃寺跡発掘調査報告書(Ⅲ)』稲沢市教育委員会 1991
北條献示『東畑廃寺跡発掘調査報告書(Ⅳ)』稲沢市教育委員会 1992
北條献示『東畑廃寺跡発掘調査報告書(Ⅴ)』稲沢市教育委員会 1993
東畑廃寺の瓦の実見に際しては、稲沢市教育委員会の北條献示氏に御世話になり御教示頂いた。
- (5) 服部哲也『尾張元興寺跡 第5次調査の概要』名古屋市教育委員会 1992
- (6) 大村敬通・伊藤晃・阿久津久・福井英治『明石市高丘地区埋蔵文化財調査略報』兵庫県教育委員会 1968
- (7) 稲垣晋也『飛鳥白鳳の古瓦』奈良国立博物館 1970
- (8) 石尾政信「広隆寺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第5冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1982
- (9) 松尾忠幸『特別史跡 讃岐国分寺跡 昭和61年度発掘調査概報』国分寺町教育委員会 1987

- (10) a 『香川県史1』原始・古代 香川県 1988
 b 『香川県史13』考古 香川県 1987
 c 『三木町史』三木町 1988
 d 安藤文良「讃岐古瓦図録」『文化財協会報』特別号8 香川県文化財保護協会
 1967
 e 安藤文良編『古瓦百選』美巧社 1974
 f 稲垣晋也「北海道古瓦の系譜」『新修国分寺の研究』第5巻上 北海道 吉川
 弘文館 1987
- (11) (10) a, b, d, f
 (12) (10) a, b, c, d, e, f
 (13) (10) a, b, d, e, f
 (14) 伊藤裕偉・佐藤竜馬「高松市滝本神社古墳の測量調査」『香川考古』第2号 1993
 (15) 水野正好「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財調査報告書』
 第4冊 滋賀県教育委員会 1969
 (16) 渡部明夫・羽床正明「国分尼寺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報』昭和55年度
 香川県教育委員会 1981
 (17) 松尾忠幸『特別史跡 讃岐国分寺跡 昭和60年度発掘調査概報』国分寺町教育委員
 会 1986

遺物出典

- 16・17 (10) d 文献
 18・19・20・23・37 (10) b 文献
 21・22・24・25・26・34・35・36・38・39 (10) c 文献
 27~29 (8) 文献
 30~32 (4) 文献
 33 (3) 文献
 40 (9) 文献
 41 (17) 文献
 42・43 (16) 文献

第4節 前田東・中村遺跡出土の木製模造品をめぐる二、三の問題

—— 齋串を中心に ——

(1) はじめに

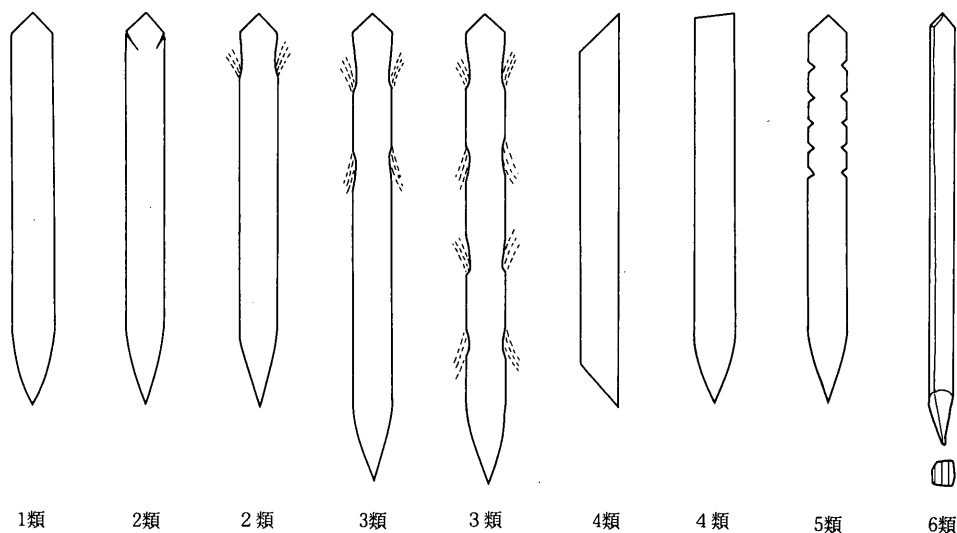
前田東・中村遺跡のG区SR04の上層から古代の木製品が多量に出土した。出土した木製品の大多数を占めるものは齋串・人形・刀形といったいわゆる木製模造品と言われるもので、祭祀具と考えられているものである。木製模造品には人形・馬形・刀形・鳥形・舟形・鏃形・齋串などが主にあげられ、平城京をはじめとする宮都や官衙などから出土することが多い。香川県でも近年の発掘調査の増加とともにこうした木製模造品も出土するようになってきている。こうした状況の中で前田東・中村遺跡出土の木製模造品はG区SR04出土のもので人形が5点、刀形が2点、齋串が確実なもので170点余り出土している。さらにE区SE02とF区SX02でも齋串が少量出土している。このように前田東・中村遺跡の木製模造品は圧倒的多数が齋串で占められている。そこで本稿では齋串を中心に、その形態的な問題、用途などを検討してみたい。また齋串はいわゆる形代として模造したものと厳密には異なるといえるが、これらと非常に関係が深い遺物として木製模造品に含めることにする。

(2) 前田東・中村遺跡出土の齋串

前田東・中村遺跡からは確実なもので170点余りが出土しているが、主に上端部の形態を主要因、側縁部の形態を副次的要因として7つに分類した。

- 1類：上端部は圭頭状で、側縁部に切り掛けを施さないもの。
- 2類：上端部は圭頭状で、側縁部に切り掛けを1対施すもの。
- 3類：上端部は圭頭状で、側縁部に切り掛けを2対以上施すもの。
- 4類：上端部を斜めに切り落とすか、僅かに切り落とし平坦に近くなっているもの。
- 5類：側縁部に抉って加工した切り欠きを施すもの。
- 6類：断面形が方形で棒状のもので、上端部は圭頭状あるいは斜めになるもの。
- 7類：その他のもの。

下端部は6類が鉛筆の芯先状に加工するものが多い他は、剣先状になるものが大多数であ

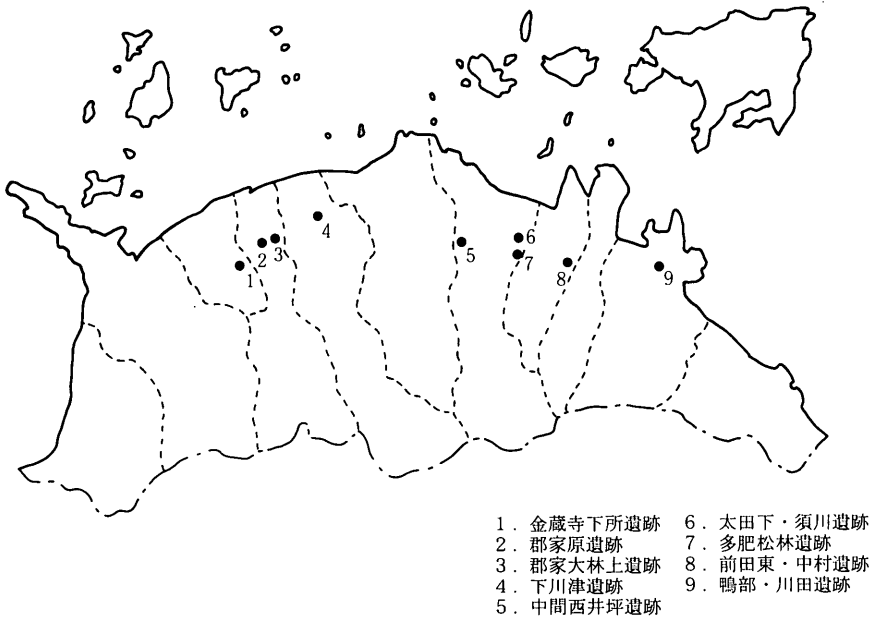


第817図 前田東・中村遺跡出土斎串形態分類図

る。

各類型ごとにその大きさを見ると、全体が判明しているものの全長の平均であるが、1類の平均は20.4cm、2類の平均は20.7cm、3類の平均は26.8cm、4類の平均は18.5cm、5類は該当資料なし、6類の平均は32.1cm、7類の平均は26.6cmである。このうち7類はその他の形態のもので様々なものを含むので、1～6類のそれぞれの形態的特徴によってまとまったグループのデータとは意味合いが異なるものとなっている。このことから分かることは、上端部が圭頭状で下端部が剣先状になることは共通し、側縁部の切り掛けによって分類した1～3類のものでは、切り掛けを施さないものから多数切り掛けを施すもの、つまり1類→2類→3類の順に長くなっていることがわかる。3類は側縁部に切り掛けを施す部分が多くなるため必然的に長くなっているものである。1類のものに切り掛けを1対施せば2類となるので、1類と2類の差があまりないことも理解出来る。また6類のものが突出して長くなっているが、1～5類のものが薄い板材を使用しているのに対し、6類のみが異なる棒状のものをしてしていることから異質な斎串と言えよう。

次に各類型ごとの出土量を見ると、1類が12点、2類が15点、3類が27点、4類が10点、5類が1点、6類が38点、7類が11点となっている。また部分的な破片のためどの類になるかは不明であるが1～5・7類のいずれかに入るものが60点となっている。ここから分かることは同系統の1～3類では3類が最も多く、さらに異質な6類が多いということ



第818図 香川県内木製模造品出土遺跡分布図

である。しかしこの6類の38点の中には下端部のみのものが含まれるが、これは6類のものが棒状のもので他の類のものと区別出来るからである。6類以外で判断が出来なかった60点がそれぞれの類に分散したとしても6類が多いことに変わりはないと言える。つまり前田東・中村遺跡出土の齋串は3類と6類という長めのものが特徴的となっている。

齋串を中心とした木製模造品の年代であるが、多量の齋串が出土したG区SR04の上層は6～14世紀の時期幅があるが出土土器はあまり多くないが、7～9世紀が主体となっている。

(3) 齋串を中心とした木製模造品の諸例

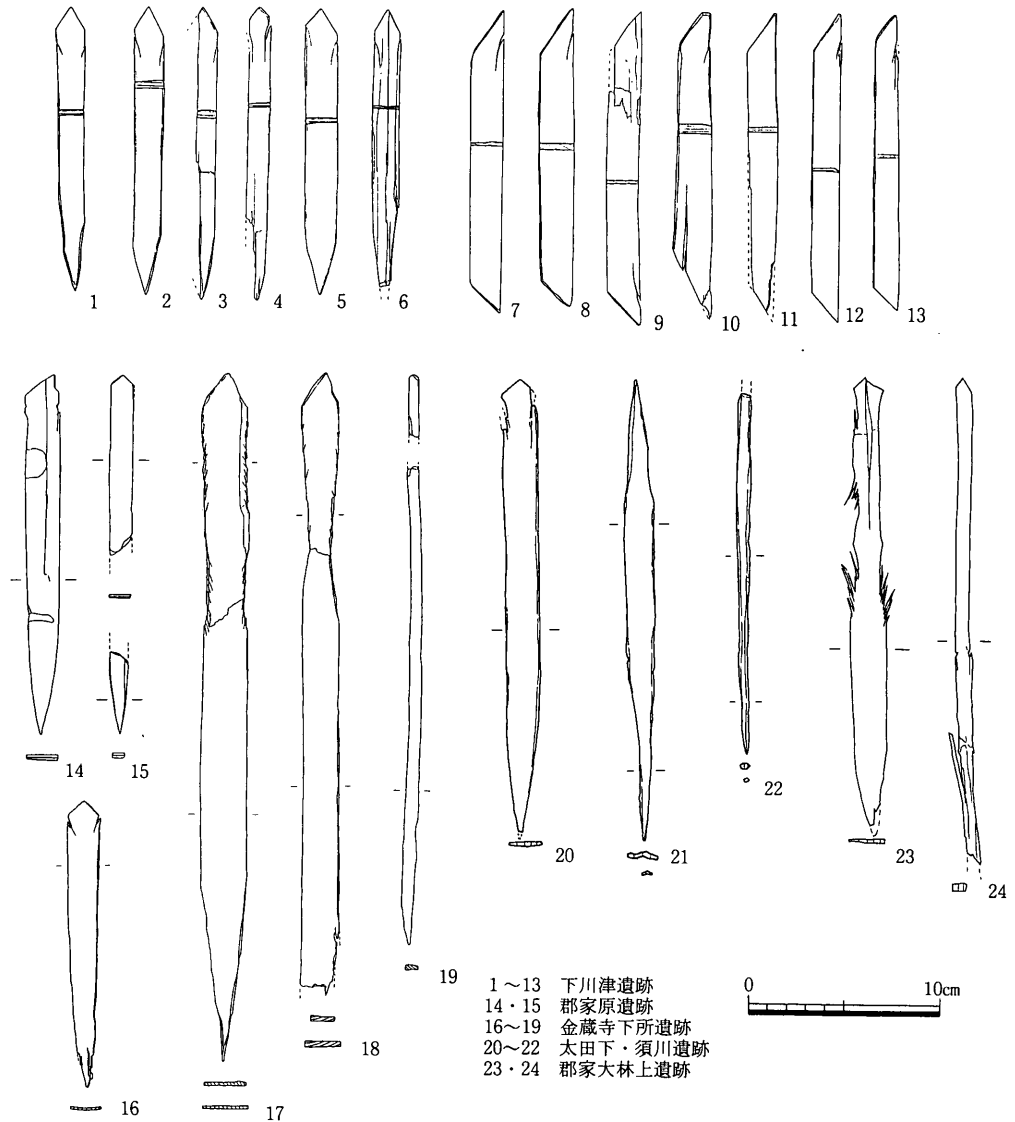
香川県で齋串をはじめ木製模造品が出土した遺跡は、前田東・中村遺跡を含めてこれまで9例が知られている。その各遺跡を概観してみることにする。

坂出市下川津遺跡⁽¹⁾

丸亀平野東部の大東川下流域の東岸部に位置する弥生時代前期～室町時代にかけての遺跡である。遺跡は4つの微高地とその周辺部の旧河道を中心とする4つの低地帯からなっている。下川津遺跡は旧鶴足郡に位置し、特に遺跡付近の川津郷は天平勝宝4（752）年

に東大寺の封戸となっている。古代では7～11世紀まで多数の建物が見られる。特に7世紀では遺跡北部の第1微高地と南部の第4微高地で大型の建物が集中している。木製模造品はこれら微高地の東側の旧河道から出土している。斎串が154点、人形51点、舟形10点、鳥形1点、刀子形3点、馬形5点、陽物形1点の合計225点が出土している。

出土した斎串の形態は先の分類に当てはめると、1・2・3・4類のものが出土している。2類のものでは上部の圭頭部分直下に短い切り込み状に切り掛けを施すものが多く50点ほど出土している。4類のものでは両端部を斜めに切り落とし台形状になるものが15



第819図 香川県内出土斎串 (1/4)

点出土しており、前田東・中村遺跡ではこのタイプのものが確実なものでは1点しか出土していない。下川津遺跡の斎串は全長15～17cmの小型のものが圧倒的に多く、20cmを超えるものは20点程度で全体の15%にも満たない。

斎串に次いで出土が多かった人形は頭部が圭頭状になるものが多い。脚部を表現しているものは少なく、多くは斎串と同様に剣先状になっている。全体に50cmを超える長大なものも多く側縁部の2箇所にかき欠きを施し肩と腰を表現している。顔には墨書で簡単に眉・目・鼻・口を表現している。肩部は怒り肩のものが多いが、若干撫で肩のものも含まれる。

木製模造品は微高地の東側の低地帯から集中的に出土している。7世紀代の第1低地帯流路2・3・5，8世紀代の第3低地帯流路2，9世紀代の第2低地帯流路2からそれぞれ出土している。特に第2低地帯流路2では斎串15点と人形34点が集中して出土し、報告では斎串と人形の使用時の様相と使用単位を留めていると考えている。これら木製模造品はいずれも大型掘立柱建物群を検出した微高地の東側の低地帯から出土している。報告で下川津遺跡の古代の遺構群は有力首長の居宅あるいは公的施設を想定しているが、木製模造品を出土した低地帯の流路はこれらの祓所の可能性もある。

普通寺市金蔵寺下所遺跡⁽²⁾

丸亀平野の南西部の金倉川西岸に位置する弥生・奈良・平安・鎌倉時代の遺跡である。微高地上に奈良時代と平安時代の掘立柱建物と溝が形成されている。建物は総柱建物を伴うが、特に大型のものはない。そしてこの微高地を取り巻くように旧河道があり、この旧河道から木製模造品が出土している。木製模造品は斎串100点以上、人形3点、馬形2点、舟形7点、刀形2点が出土している。木製模造品とともに赤色顔料を塗った土師器が数点出土している。

出土した斎串は前田東・中村遺跡の分類で2類と3類が多い。2類のものは上端部の肩部に1回の切り掛けを1対施すが、全長15cm以下のものと20～30cmの大きなものの2タイプがある。3類とした切り掛けが2対あるものは、斎串全体の上半分に施され30cmを超える長大なものである。しかし切り掛けを4対施すものはない。前田東・中村遺跡で6類とした断面方形の棒状の斎串も2点以上含まれる。斎串は全体的に長いものが多くなっている。人形は3点であるが下半部は欠損しており足の有無は不明である。胴部の上位に切込みを入れ、頭部に切込みを入れ被りものを表現するもの1点、胴部の上位に切込みのみを施すもの1点、全く胴を表現しないもの1点となっている。また顔は3点とも墨書され、

肩は怒り肩に切り込まれている。これらの木製模造品は共伴した土器により8世紀後半と考えられている。

丸亀市郡家原遺跡⁽³⁾

丸亀平野の中央部の平地に位置する弥生時代～鎌倉時代・江戸時代の遺跡である。奈良時代では掘立柱建物群が3群検出された。平安時代では遺跡の西部で出水状遺構からそのままつながる溝が掘削され、この溝の東西に掘立柱建物が散在するが、3間×1間の4面廂付きの建物が1棟ある。この溝は8、9、13世紀代の3層に大別されている。この溝の9世紀代の層から、墨書土器を含む須恵器・土師器、緑釉陶器とともに斎串が4点出土している。

斎串のうち全体の判明しているものは1点で、上端部を斜めに切り落とし下端部は剣先状で、上端部のやや下に小さい切り込みを1対施している。全長は18.8cmである。その他に上端部が圭頭状になるが切り掛けが認められないものと、下端部の剣先状になっている部分のものがある。木製模造品の出土は斎串のみであった。

高松市太田下・須川遺跡⁽⁴⁾

高松平野の中央部の平地部に位置する弥生時代～平安時代の遺跡である。調査区の西側の平安時代の旧河道から斎串が13点、人形が3点出土している。斎串は形状が分かるもので上端部が圭頭状で下端部を剣先状にするもので、切り掛けを入れないものと1対入れるものがある。また圭頭状の上端部のすぐ下に小さい三角形の切り欠きをいれるもの、断面が方形の棒状のものも含まれている。さらに両端を剣先状にするものも1点出土している。前田東・中村遺跡の1・2・5・6・7類にそれぞれ相当する。

丸亀市郡家大林上遺跡⁽⁵⁾

丸亀平野の中央部の平地に位置し、郡家原遺跡の東約600mにある弥生時代～近世の遺跡である。調査区の最も西側の旧河道の古墳時代～平安時代の層から斎串が2点出土している。上端部を圭頭状にして側縁に加工を加えないものと、上端部を圭頭状にし側縁部に切り掛けを4対施すものである。前田東・中村遺跡の1類と3類にそれぞれ相当する。

高松市中間西井坪遺跡⁽⁶⁾

高松平野の南西部の六ツ目山の東麓から派生する扇状地の扇端部に位置する旧石器～近世にかけての遺跡である。調査区の東半部で検出した旧河道から平安時代初頭と考えられる人形が1点と斎串と思われるものが1点出土している。このうち人形は頭部を圭頭状にし下部は切り込みを入れて足を作り出しているが足は短いものである。頭部・胴部・手は

全く表現されていない長大なものである。

大川郡志度町鴨部・川田遺跡⁽⁷⁾

鴨部川沿いに広がる平野部の東岸部に位置する弥生時代・平安時代の遺跡である。鴨部川の堤防のすぐ東に隣接した調査区で旧河道の一部を検出した。旧河道の岸に近い所で斎串が数点出土した。斎串は上端部を圭頭状にし、上部に三角形の切り込みを1～2対施すものである。前田東・中村遺跡の5類に相当する。

高松市多肥松林遺跡⁽⁸⁾

高松平野の中央やや南側の平地部に位置する弥生時代・平安時代・室町時代の遺跡である。平安時代前半期の旧河道から斎串が十数点出土している。斎串の形態は上端部が圭頭状で下端部が剣先状になるものが大多数で、切り掛けを1対施す前田東・中村遺跡の2類に相当するものである。

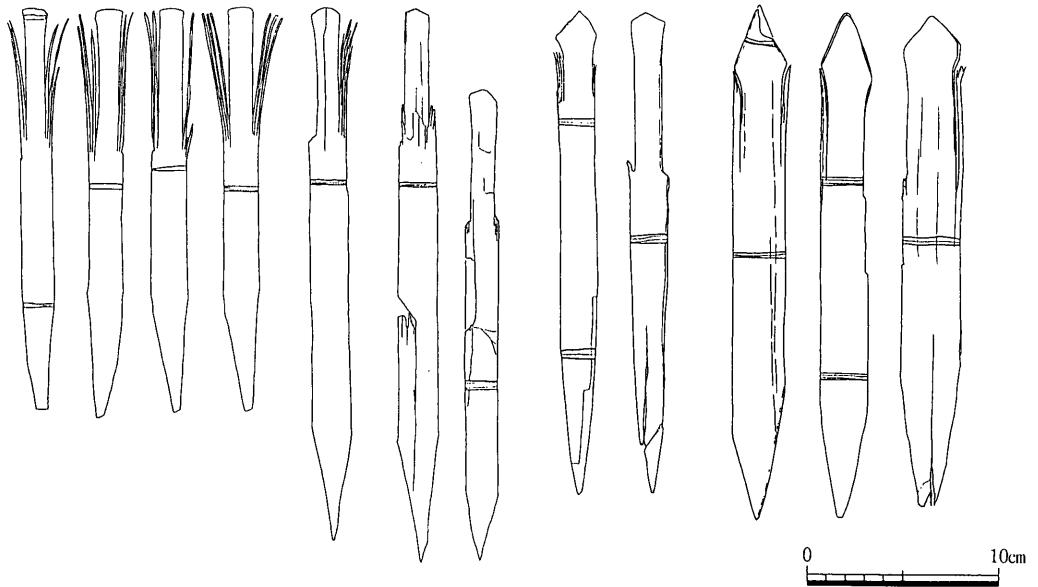
以上、香川県内で現段階で斎串を中心とした木製模造品の出土例を簡単に紹介したが、この中にはまだ未整理段階のものも含まれており、さらに今後の発掘調査により資料が増加するものと思われる。

(4) 斎串の形態

前田東・中村遺跡では斎串を7形態に分類した。この分類に先に紹介した8遺跡の斎串を当てはめると、下川津遺跡では1～4類が、金蔵寺下所遺跡では2・3・6類が、郡家原遺跡では4類が、郡家大林上遺跡では1・3類が、鴨部・川田遺跡では5類のものがそれぞれ出土している。以下、1～7類を用いるときは前田東・中村遺跡出土斎串の分類を指す。

斎串の長さに注目してみると先に検討した前田東・中村遺跡出土の斎串では、同系等の1～3類では切り掛けを施した部位が増えるほど、つまり1類→3類の順に長大化している。下川津遺跡では20cmを超えるものは20点で全体の15%にすぎないが、このうちの10点は3類に相当する。金蔵寺下所遺跡では2類のものは全長15cm以下のものと20～30cmのものがあるが、3類のものは30cmを超える長大なものがほとんどである。下川津遺跡や金蔵寺下所遺跡でも前田東・中村遺跡と同様の傾向が見られる。これに対して4類としたものでは下川津遺跡、郡家原遺跡、前田東・中村遺跡で出土しているが、いずれも20cm未満のものである。

これまで香川県内の諸例を検討してきたが、その比較のために他地域の出土例について



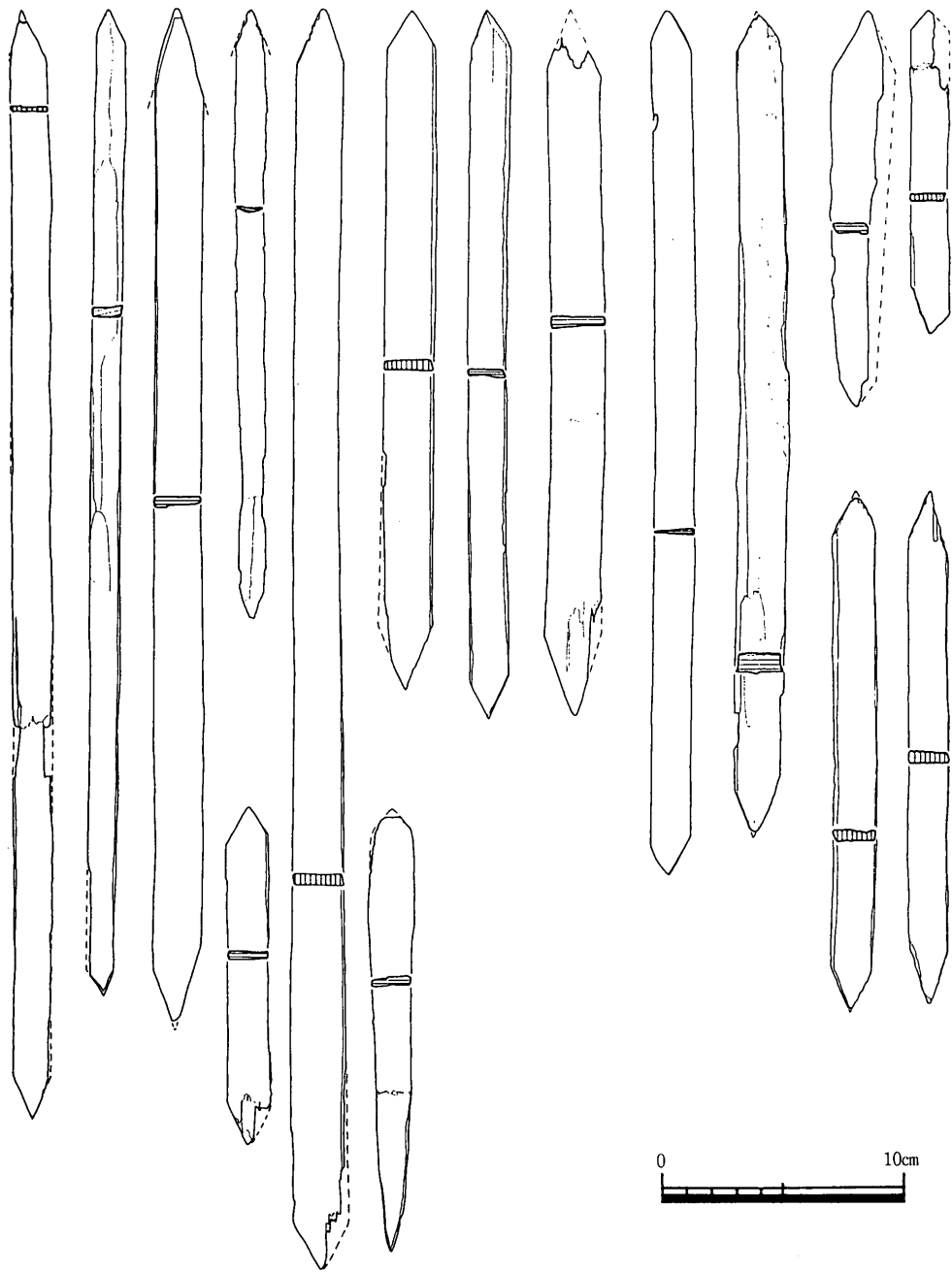
第820図 杉垣内遺跡出土斎串（1／4）

若干検討してみよう。

斎串は律令制祭祀の成立とともに出現したものと言えるが、その律令制の中心となる平城京・長岡京・平安京などの宮都から多く出土している。また地方においては国衙などの公的施設などから出土している。

奈良国立文化財研究所では近畿地方の古代の木器を集成し、『木器集成図録』として刊行している⁽⁹⁾。この中に斎串をはじめとする木製模造品も祭祀具として含まれている。この中で斎串は両端の形状によりA～Dの4型式に、側面の切り込みの方法により8式に分類している。これによるとA型式は板材の両端を斜めに切り落としたもので、4類に相当する。両端を圭頭状につくるB型式は前田東・中村遺跡にはない。上端部を圭頭状につくり、下端部を剣先状にするC型式は1～3類に相当する。これは切り込みにより細分され、CⅠ型式が1類、CⅢ・Ⅳ型式が2類、CⅤ型式が3類となる。また側縁を三角形に切り欠くCⅥ型式は5類に相当する。これら以外のものはD型式としている。C型式が展開する8世紀の平城京では14～23cmの長さの斎串が一般的であるという。

三重県松阪市杉垣内遺跡⁽¹⁰⁾では井戸から斎串と人形が、旧河道からは斎串・人形・馬形・刀形とともに農具・容器などが出土している。報告では先の『木器集成図録』の分類に準拠している。8世紀末～9世紀の井戸の資料では、SE23からは斎串は5点出土しておりB型式としているものが3点出土しているが、C型式に非常に似ており2類に相当する。



第821図 神明原・元宮川遺跡出土斎串（1／3）

長さの平均は26.0cmである。S E 24からは齋串が14点、人形が2点出土している。齋串はCⅢ型式とBⅢ型式があり2類に相当する。長さの平均は20.9cmである。また井戸出土の齋串は上端部の圭頭状のつくりが非常に弱く4類に近い。弥生時代～平安時代の旧河道からは齋串が169点出土しており、2・4・5類が出土している。2類の長さの平均は27.1cmであるが、この他に平均16.9cmの1群が2点ある。

静岡市神明原・元宮川遺跡⁽¹¹⁾では大谷川の旧河道を検出した。ここから古墳時代後期～平安時代の膨大な祭祀遺物が出土した。奈良時代・平安時代の木製模造品では齋串200点以上、人形74点、舟形3点、刀形が22点出土している。報告では齋串を独自にA～Gに分類している。1・4・5類の他に両端が剣先状になるもの、両端が圭頭状になるもの、卒塔婆状のものがある。そしてこの遺跡出土の齋串には基本的に切り掛けが施されず、切り掛けが認められるものは僅か3点である。1類に相当するものの長さの平均は24.4cmである。また上端部を斜めに切り落とす4類に相当するものの平均は19.2cmである。その他に報告で箸状木製品としているものが35点ほど出土している。長さが18～25cmで幅0.5～1.0cmの棒状のもので両先端が細く尖っている。断面は方形である。齋串の可能性を指摘しているが、これらの中には上端部が圭頭状に近いものも含まれている。齋串であれば6類に相当する。

簡単に数例の齋串を検討したにすぎないが、上端部を圭頭状にして下端部を剣先状にするものが齋串の最も一般的な形態といえる。前田東・中村遺跡でいえば1～3類、『木器集成図録』のC型式である。この中でも切り掛けを1対施す2類が多くなっている。また切り掛けを2対以上施す3類が前田東・中村遺跡では27点あり確実に型式の分かるものの中で全体の24%を占めている。前田東・中村遺跡では3類の中でも切り掛けを4対施すものも10点ほどある。この3類は香川県内では金蔵寺下所遺跡で確実なもので9点出土している。郡家大林上遺跡でも切り掛けを4対施すものが出土している。切り掛けを4対施すものは他地域では平城京東三坊大路の東側溝S D 650⁽¹²⁾、平安京左京四条一坊⁽¹³⁾などから出土しているが全体に少量である。切り掛けの多さから必然的に25cmを超える長いものが多いになっている。逆に長いから切り掛けを多く施したのかもしれない。

次に一般的な薄板を使用したものと異なり、6類とした棒状の齋串が前田東・中村遺跡では38点出土しており、全体の22%を占めている。神明原・元宮川遺跡の箸状木製品や他の遺跡で箸状木製品や棒状木製品としているものの中に、齋串として良いものも含まれている可能性が高い。前田東・中村遺跡のものは上端部が圭頭状あるいは斜めに切り落とさ

れ、下端部は鉛筆の芯先状の鋭く削っており明らかに齋串と言える。しかし切り掛けを施したものは少ない。他の遺跡では香川県内では金蔵寺下所遺跡で出土している。平城宮馬寮の井戸⁽¹⁴⁾、平城京左京五条五坊⁽¹⁵⁾でも出土しているがまだ類例は少ない。長さは前田東・中村遺跡のもので30cmを超える長いものが多い。

側縁に三角形の切り欠きをいれる5類のものは前田東・中村遺跡では1点のみで、香川県内では現段階で金蔵寺下所遺跡、郡家原遺跡、太田下・須川遺跡、鴨部・川田遺跡で僅かに出土しているにすぎない。

(5) 齋串の年代

齋串は旧河道から出土することが多く、旧河道の性格からその年代を決めにくい状況にある。しかし中には井戸から出土する例から時期幅を限定出来る例もある。現在齋串の初現と考えられているものは、奈良県和爾遺跡⁽¹⁶⁾の井戸から出土したもので6世紀後半と考えられているものである。『木器集成図録』によると近畿地方出土の齋串はA型式が6世紀後半に出現し、B型式とC型式の一部が7世紀後半に出現し、8・9世紀にはC型式のものが展開するという。また黒崎直氏による齋串の先駆的研究⁽¹⁷⁾によると、切り掛けを施さないものと簡単に一对の切り掛けを施すものが6世紀代に出現し、7世紀後半に切り掛けを二対施すものが出現するという。そして8世紀後半には代表的なものが出揃う。8世紀末以降は切り掛けを4対以上施すもの、三角形の切り欠きを入れるものが増加し、それまでのものは減少する。そして棒状の齋串が最も遅れて出現するとしている。両者とも時代が下るとともに単純なものから切り掛けを多く施した長いものが出現するとしている。しかし先に出現したものと入れ替わるものではなく、9世紀前半の平城京東三坊大路東側溝SD650でみられるように先行して出現したものも残っている。時代とともに大きさの区別がされてきたようである。

前田東・中村遺跡の齋串は7～9世紀が主体となる旧河道から出土しているが、三角形の切り欠きを施す5類以外は基本的に揃っている。下川津遺跡では7世紀代が主体となる旧河道から出土しているが、量的には1・2・4類が多く、15～17cmの小型のものが全体の75%近くにのぼっている。しかし3類のものも5点ほどであるが7世紀後半に出現している。金蔵寺下所遺跡は2・3・6類のものがあり、3類のものは30cmを超えている。8世紀後半の旧河道からの出土である。郡家原遺跡のものは4類と5類の両方の特徴を持っているものであるが、18.8cmのもので9世紀代のものである。香川県内でも7世紀代には

まだ1・2・4類が主体となっているが、8世紀後半には3・6類が加わっている。

前田東・中村遺跡では7～9世紀の時期幅がある。しかし中には14点が折り重なって出土していることから一括して廃棄されたと考えられる一群がある。G区の955・966・968・969・970の3類、985・986・989・992・994の6類、6類に近い7類の1027、下端部のみの1057・1062、胴部のみの1109の合計14点である。これによると3類と6類が共伴していることが分かる。また6類が集中している部分と1・2・3類が集中している部分がある(第724図)。以上のことから7～8世紀代の一群と8世紀後半～9世紀の一群に分かれる可能性がある。これは報告書第5章第3節で考えたように、前田東・中村遺跡付近に7世紀後半と8世紀後半に寺院が建立あるいは再建されたとした時期と一致しているのも偶然ではないと思われる。

(6) 斎串の機能

斎串は形態的に見ると、上端部や側縁部の形態は様々であるが、下端部は剣先状・圭頭状・鉛筆の芯先状などと形態は異なるものの一様に先を尖らせるということでは一致している。この下端部を尖らすということに斎串の使用方法が反映しているものと思われる。そしてその使用方法とは突き刺すということであろう。突き刺し易くするために下端部を尖らせたと考えられる。すでに説かれているように斎串を地面に突き刺し空間を作り出し、その空間は結界を表していると考えられている⁽¹⁸⁾。斎串により外部の悪気を遮断し内部に神聖な空間を作り出すのである。また斎串は人形とともに出土する例が多い。この場合、人形にはそれに息を吹きかけたり、撫でたりすることで穢や罪を祓い流す役目があるとされているので、その人形に乗り移った穢や罪が外部に広がらないようにする役目を斎串は果たしていたものと思われる。

斎串はまた井戸からも出土することが多い⁽¹⁹⁾。出土状況は1：井戸構築時、2：井戸使用时、3：井戸廃棄時がある。1の場合はその場所や水を清めたりするものと考えられる。2の場合は井戸そのものが祭祀の場所であった、あるいは井戸神を祭ったと思われる。3は井戸廃棄時に井戸神を鎮めるためと思われる。中世の井戸の底部に竹を突き刺すことはこの斎串の使用例と同じと言えよう。前田東・中村遺跡ではE区SE02の底から藁束、桃の種、稲粃とともに斎串と考えられるものが1点出土している。これは1の場合に相当する。この井戸は最下層の遺物が10世紀前後で、斎串は下端部の破片であるが側縁に三角形の切り欠きを施す大型のものである。香川県内で井戸から出土した例はまだ前田東・中村

遺跡しかないが、今後増加するものと思われる。

(7) 律令制祭祀と祓所

齋串や人形などの木製模造品は律令制祭祀の反映と考えられている。律令制祭祀とは『大宝令』の神祇式で制定された国家的祭祀で、その中で6月と12月の晦日に行われた大祓が最も規模が大きく重要なものであった。これらの律令制祭祀の具体的内容は10世紀の成立した『延喜式』から類推できる。この大祓に関する遺物は平城宮の壬生門の調査⁽²⁰⁾などで出土している。平安時代では平安宮で毎月あるいは臨時に行った七瀬の祓がある。このように国家的祭祀である律令制祭祀に伴って齋串や人形などの木製模造品が多く出土する。律令制祭祀の祭祀具といえる木製模造品類が宮都以外の地方で出土するということは、国家の地方出先機関である国衙やそれに準ずる公的機関を通して律令制祭祀が浸透した結果と言えよう。

このような祭祀が行われた場所を祓所というが、多くの場合は祭祀の後に水に流した状態での遺物の出土が大多数である。祭祀を行いそのまま木製模造品を水に流すことから実際の祭祀場は遺物出土地点のすぐ近くにあるものと考えられる。水に流すという行為も祭祀に含まれることから多数の木製模造品が出土した場所、主に旧河道も含めて祓所と言えよう。祓所そのものは齋串と人形を入れた壺と甕の周囲に、齋串・馬形・刀形が出土した山形県俵田遺跡⁽²¹⁾が有名である。人形の周囲を齋串と馬形で囲んでいる状況が分かるものがある。その他に兵庫県出石町砂入遺跡⁽²²⁾、同袴狭遺跡⁽²³⁾から数万点に及ぶ木製模造品が出土しており、祓所の状況も良好な状態で確認されており注目されている。

前田東・中村遺跡では木製模造品の他に多量の瓦、帯金具、墨書土器などが出土しており、付近に公的施設があったことが十分に予想される。前田東・中村遺跡G区SR04はこのような公的施設に伴う祓所と考えられよう。下川津遺跡、金蔵寺下所遺跡もまたこうした祓所の可能性が高く、香川県においても律令制祭祀が浸透していたことが分かるのである。香川県ではまだ国衙は推定地にとどまり関連する明確な遺構・遺物は発見されていない。郡衙はまだ発見されていない。今後、多量の木製模造品が出土する祓所の付近に公的施設が発見される可能性が高い。

以上、本稿では前田東・中村遺跡例を中心として香川県内出土の齋串について検討してきた。他地域の例はあまり触れることが出来なかったが、今後はさらに詳しく他地域の諸例を検討し、他の木製模造品も含めて考えてゆきたい。

	斎 串	人 形	舟 形	刀 形	刀子 形	馬 形	鳥 形	備 考
前田東・中村遺跡	○	○		○				
下川津遺跡	○	○	○		○	○	○	
金蔵寺下所遺跡	○	○	○	○		○		
郡家原遺跡	○							
郡家大林上遺跡	○							
太田下・須川遺跡	○	○						
中間西井坪遺跡	○	○						※
鴨部・川田遺跡	○							※
多肥松林遺跡	○							※

第11表 香川県内木製模造品出土一覧

※ 現段階で未整理なので今後変更の可能性有り

註

- (1) 藤好史郎・西村尋文・大久保徹也『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1990
- (2) 廣瀬常雄『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第10冊 金蔵寺下所遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1994
- (3) 真鍋昌宏・岡 敦憲・山下平重『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第13冊 郡家原遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1993
- (4) 北山健一郎・森下友子『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター1994
太田下・須川遺跡に関しては、北山健一郎氏に御教示を得た。
- (5) 廣瀬常雄『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第17冊 郡家大林上遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1994
郡家大林上遺跡に関しては、廣瀬常雄氏・木下晴一氏に御教示を得た。
- (6) 蔵本晋司「中間西井坪遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概

報 平成元年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1990
中間西井坪遺跡に関しては蔵本晋司氏に御教示を得た。

- (7) 平成2・3年度に(財)香川県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行なった。
斎串は平成2年度の調査で出土した。筆者が調査担当した。
- (8) 平成5年度に(財)香川県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行なった。遺物実見に際しては調査担当者の宮崎哲治氏に御世話になり御教示を得た。
- (9) 『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 1985
- (10) 河瀬信幸他「杉垣内遺跡」『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』三重県教育委員会 1989
- (11) 佐藤達雄・寺田甲子郎・中山正典・竹山喜章『大谷川Ⅳ』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989
- (12) 『平城宮発掘調査報告Ⅳ』奈良国立文化財研究所 1975
- (13) 吉川義彦他『平安京跡発掘調査報告 左京四条一坊』平安京調査会 1975
- (14) 『平城宮発掘調査報告Ⅻ』奈良国立文化財研究所 1985
- (15) 西崎卓哉・中井公他『平城京左京(外京)五条五坊七・十坪発掘調査概要報告』奈良市教育委員会 1982
- (16) 中井一夫・松田真一『和爾・森本遺跡』奈良県立橿原考古学研究所編 1983
- (17) 黒崎 直「斎串考」『古代研究』10号 1976
- (18) 金子裕之「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 1985
- (19) 井戸出土の斎串については次の論考がある。
兼康保明「井戸における斎串使用の一例 滋賀県高島郡高島町鴨遺跡の井戸」
『古代研究』19号 1980
- (20) 「南面東門(壬生門)の調査」『昭和55年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 1981
- (21) 佐藤庄一・安部 実『倭田遺跡第2次発掘調査報告書』山形県教育委員会 1984
- (22) 渡辺 昇「砂入遺跡」『兵庫県史 考古資料編』兵庫県 1992
渡辺 昇「兵庫県出石郡出石町砂入遺跡」『日本考古学年報42』日本考古学協会1991
『砂入遺跡現地説明会資料』兵庫県埋蔵文化財調査事務所 1990
- (23) 『袴狭遺跡遺物説明会資料』兵庫県教育委員会 1991
『出石町史』第4巻資料編Ⅱ 出石町 1993

第5節 前田東・中村遺跡の平安時代の土器

(1) はじめに

前田東・中村遺跡ではE5区で、掘立柱建物群に伴って溝、土坑を検出した。これらの遺構から平安時代後半期と考えられる土器が多量に出土した。出土状況も良好で一括資料と考えられるものである。そこで、本稿ではE区SD19、E区SK04、E区SK05の資料を分析し、香川県内ではまだ少ない平安時代の土器の資料としたい。

(2) E区SD19出土遺物について

E区で検出した掘立柱建物群に伴う溝である。この溝の北側の部分から集中的に出土したものである。187点の土器を図化した。その器種組成は土師器杯、土師器高台付皿、土師質土釜、土師質竈、黒色土器A類椀、黒色土器B類椀、須恵器杯、須恵器壺、緑釉陶器椀が主なものとなっている。このうち土師器杯が133点と最も多く全体の71%を占めている。黒色土器A類椀は23点で全体の12%、黒色土器B類椀は14点で全体の7%となっており、黒色土器全体では37点で全体の20%である。これに対して須恵器は合計5点のみで全体の3%にしかすぎない。

土師器杯は底部は平底で体部は直線的に立ち上がるものが大部分である。これらは口径の平均が11.0cmで器高の平均が2.5cmのもの(217~310)と、口径の平均が12.7cmで器高の平均が3.3cmのもの(311~332)に分かれる。底部はすべてヘラ切りでその後にはナデるもの、板状圧痕を施すもの、ヘラ切りのままのものがある。この他に底部が削出し高台状に突出する一群(333~338)と足高の高台が付くもの(339~343)がある。いずれも体部には回転ナデが多く施されている。

黒色土器A類椀は、口径の平均が14.8cmで器高の平均は5.5cmである。これに対し黒色土器B類椀は、口径の平均が13.8cmで器高の平均は5.2cmである。A類・B類とも体部は内湾して立ち上り、内面にはヘラミガキを格子状に丁寧に施している。外面にはヘラミガキを施すものが多いが簡略化されている。また全くヘラミガキを施さないものもある。底部の高台は外開きのものが多い。黒色土器B類のなかで383はその特徴から畿内産のもので楠葉型と考えられるものである。ヘラミガキを内・外面全体に施し、底部外面にまで及んでおり、非常に丁寧な作りである。さらに体部立ち上り部外面に鐙状の突帯を巡らせるものもある(390・393)。

須恵器は杯と壺がある。杯は底部のみで全体の形状は不明である。壺は体部上半はなだらかで肩はらずに丸みを帯びている。底部は安定した平底である。

緑釉陶器は碗が2点出土している。400は体部が緩く内湾した後に口縁部が外反している。底部内面に沈線が1条巡り、高台は内側に段のあるものを貼り付けている。底部は糸切りである。二次焼成には三叉トチンを使用しており、内面にその跡が残っている。401とともに近江産のものである。

(3) E区SK04出土遺物について

E5区の掘立柱建物群の西側で検出し、E区SB12に伴う地鎮的な埋納土坑と考えたものである。土坑内から土師器杯26点、須恵器壺2点、黒色土器B類碗1点が出土したが、明らかに人為的に配置された出土状況で確実に一括資料と言えるものである。

土師器杯は口径の平均は11.1cm、器高の平均は2.9cmである。器高は3.0cm以上のものが10点、3.0cm未満のものが16点あるが、口径は極めて画一的である。底部は平底のものと丸みを帯びているものがある。底部の調整はヘラ切りの後にナデるもの、板状圧痕を施すもの、ヘラ切りのままのものがある。体部は直線的である。

黒色土器B類碗は口径18.5cm、器高8.0cmで、体部は内湾して立ち上り口縁部を強くナデている。体部内・外面に横方向のヘラミガキを施している。また体部立ち上り部外面に鐙状突帯を貼り巡らせている。高台はやや外反するが、しっかりと立っている。

須恵器壺は大小2つある。689は体部に張りはなく、頸部は外開きで口縁部端部は若干上方に摘み上げている。口径と底径がほぼ等しくなっている。690は器高が33.5cmと大型のものである。体部は上半に最大径があり、外面には右下がりの格子目叩きを施した後にナデている。口縁部は外側に面を作る。

(4) E区SK05出土遺物について

E5区の掘立柱建物群の西側で検出し、E区SB10に伴う地鎮的な埋納土坑と考えたものである。土坑内からは土師器小皿1点、土師器杯1点、須恵器壺1点が出土した。

土師器小皿は口径10.0cm、器高2.1cmで杯に近くなっている。体部は直線的で内面立ち上り部を強くナデている。底部はヘラ切りである。

土師器杯は口径12.2cm、器高3.2cmで、体部は直線的である。底部はヘラ切りの後にナデている。

須恵器壺は体部の張りは弱く、体部最大径は口径を上回っている。

(5) 出土遺物の年代について

E区SD19, E区SK04, E区SK05出土遺物を検討してきたが、ここではその年代を考えてみたい。

E区SD19では、編年の確立している他地域からの搬入品により年代が求められる。つまり383の黒色土器B類と400の緑釉陶器がそれで、10世紀第4四半期と考えられるものである。⁽¹⁾従ってこれに共伴する土師器杯、黒色土器などはこの年代ということになる。またこの溝は掘立柱建物群に伴うもので、出土遺物は掘立柱建物群の廃絶時のものと考えられる。掘立柱建物群は前後する2グループに分かれるが、時期差はほとんど無く、先行する掘立柱建物の土器をそのまま後出する建物にも使用したと考えられる。

E区SK04では、土師器杯、黒色土器B類碗、須恵器壺が出土している。土師器杯の法量は口径の平均が11.1cmで、E区SD19出土の土師器杯のうち口径平均11.0cmの一群とはほぼ一致する。器高は3cm前後でE区SD19出土の口径平均11.0cmの一群の器高2.5cmよりやや高く、E区SK04出土のものの方が全体的に幾分大きくなっている。黒色土器B類碗は体部外面立ち上り部に鏝状突帯を貼り巡らすもので、このタイプのもは大分県弥勒寺の10世紀後半～末のG-2区SK5から出土している。⁽²⁾須恵器壺は十瓶山窯跡の製品と思われるが、10世紀後半代の資料が不足しており対比しがたい。しかし689の壺はE区SD19出土の須恵器壺398に比べて体部上半の肩の張りは強く、398より先行する要素をもっている。またE区SK04が地鎮的な埋納土坑ということは、E区SD19に伴う掘立柱建物群を建てた時点あるいは建てる直前と考えられ、E区SD19の10世紀第4四半期より遡るであろうが、遡っても10世紀第3四半期と考えたい。

E区SK05もE区SK04と同様に地鎮的な埋納土坑であり、E区SD19に伴う掘立柱建物群に伴うものである。この掘立柱建物群は2時期に細別出来るが、両者の土坑が伴う掘立柱建物はSB10→SB12と変遷することから、E区SK05はE区SK04より先行するものである。しかし時期差はほとんどなく、10世紀第3四半期と考えられる。

以上のことからE区SK05(10世紀第3四半期)→E区SK04(10世紀第3四半期)→E区SD19(10世紀第4四半期)という変遷が考えられる。前二者はE区SD19と比べて遡らせたもので確実な根拠はないが、いずれにしても10世紀後半代である。

(6) 讃岐地方の10世紀後半の土器について

これまで前田東・中村遺跡出土の平安時代の土器を検討し、その年代は10世紀後半代とした。そこで讃岐地方の同時代の土器の様相と比較してみたい。

讃岐地方では石田遺跡S K 11,⁽³⁾ 讃岐国分寺跡の僧房覆屋排水路地区S K 25・26の資料⁽⁴⁾がある。この両者の資料は片桐孝浩氏の研究⁽⁵⁾に詳細がある。

石田遺跡S K 11からは土師器杯と黒色土器A類碗が出土している。土師器杯は口径12.1cm, 器高3.0cmである。体部は直線的に延び、底部はヘラ切りとなっている。黒色土器は体部は内湾して立ち上り内面に放射状のヘラミガキを、底部内面には螺旋状のヘラミガキを施している。底部は大きな外開きの高台が付くものがある。土師器杯の口径は前田東・中村遺跡の資料よりやや大きく、黒色土器碗も前田東・中村遺跡のものより体部が若干深くなっている。石田遺跡S K 11の資料は前田東・中村遺跡のものよりやや先行するものと思われる。

讃岐国分寺跡S K 25からは土師器杯、土師器甕、土師質土釜、土師質土鍋、黒色土器A類碗、須恵器杯、須恵器鉢、須恵器甕が出土している。土師器杯は口縁部を強くナデるものが多い。口径11.2cm, 器高2.7cmのものと口径11.9cm, 器高3.6cmの2グループがある。底部はいずれもヘラ切りである。足高の高台の付く杯も出土しておりナデを多く施している。黒色土器碗は体部は内湾して立ち上り、深めの作りである。底部にはやや外開きの高台が付く。内面には粗いヘラミガキを施している。土釜は口縁部は直立し、口縁部やや下に罫を水平に貼り巡らせている。須恵器杯は体部は若干内湾する。底部は突出気味でヘラ切りとなっている。須恵器鉢は体部は内湾し口縁部は肥厚し玉縁状になっている。篠窯系のものと考えられる。これらの土器群は土師器杯が大小2グループに分かれるが、大きいほうのものは前田東・中村遺跡E区S D 19の大きいものより口径が広がり、器高が低くなっている。黒色土器のヘラミガキはE区S D 19のものよりやや粗くなっている。以上のことから讃岐国分寺跡S K 25の資料は、E区S D 19と同じかやや下の時期と思われる。

讃岐国分寺跡S K 26からは土師器杯と黒色土器A類碗が出土している。土師器杯は口径10.9cm, 器高2.4cmのものと口径11.7cm, 器高3.5cmのものがある。さらに外反する足高の高台をもつ杯がある。黒色土器は体部は直線的に上方に延び、口縁部内面に沈線が1条巡っている。口径14.4cm, 器高7.0cmとかなり深い作りになっている。内面にはヘラミガキを丁寧⁽⁶⁾に施している。畿内の楠葉型と思われる。これらの土器群で土師器杯の小さい方のものは前田東・中村遺跡E区S D 19の小さいほうのものと同じである。また大きい方はE区S

D19の大きい方より口径は小さく器高は高くなっている。畿内産の黒色土器ともあわせて讃岐国分寺跡S K26の資料は前田東・中村遺跡E区S D19と同じ時期と考えられる。

10世紀後半段階では、供膳具に占める須恵器の割合は非常に少なくなっている。その大多数は土師器杯で占められており、小皿の萌芽的なものが出現している。また椀は黒色土器で占められている。現段階での研究では土器からみた古代から中世への転換時期は11世紀中頃と考えられており、10世紀後半段階は古代的土器様式が崩壊し、中世的な土器様式に転換してゆく過渡期と考えられよう。讃岐地方ではまだこの段階の資料が少ないが、今後の資料の増加とともに平安時代の土器研究が進展することを望みたい。

- (1) 畿内産の黒色土器および近江産緑釉陶器の年代観は以下の文献を参考にした
橋本久和「畿内の黒色土器(1)」『中近世土器の基礎研究Ⅱ』日本中世土器研究会
1986
森 隆「西日本の黒色土器生産(上)」『考古学研究』第37巻第2号 1990
森 隆「近江系緑釉陶器の編年と器形的系譜に関する若干の試論」『考古学雑誌』
第76巻第4号 1991
- (2) 甲斐忠彦・真野和夫・宮内克己・後藤一重『弥勒寺』大分県立宇佐風土記の丘歴史
民俗資料館 1989
- (3) 片桐孝浩「石田遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第
五冊』香川県教育委員会 1988
- (4) 松尾忠幸『特別史跡讃岐国分寺跡 昭和61年度発掘調査概報』国分寺町教育委員会
1987
- (5) 片桐孝浩「考察 ―古代から中世にかけての土器様相―」『中小河川大東川改修工
事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津元結木遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県
埋蔵文化財調査センター 1992

高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第三冊

前田東・中村遺跡

第2分冊

平成7年3月31日 発行

編集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
〒762 香川県坂出市府中町字南谷5001-4
電話 (0877) 48-2191 (代表)

発行 香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

印刷 タナカ印刷株式会社
住所 香川県大川郡大内町三本松658-3
電話 (0879) 25-0185

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊

前田東・中村遺跡

第3分冊

1995.3

香川県教育委員会
（財）香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局

高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊

前田東・中村遺跡

第3分冊

1995.3

香 川 県 教 育 委 員 会
(助)香川県埋蔵文化財調査センター
建 設 省 四 国 地 方 建 設 局

図 版 目 次

- 図版 1 A 1 区全景
- 図版 2 A 2・3・4 区全景
- 図版 3 A 6 区全景, A 7・8 区全景
- 図版 4 A 1 区 (東から), A 1 拡張区東半部 (西から)
- 図版 5 A 6 区 (西から), A 7 区 (北東から)
- 図版 6 A 区 S B 01 (西から), A 区 S B 01 柱穴 (S P 03)
- 図版 7 A 区 S B 01 柱穴 (S P 03) 内遺物出土状況, A 区 S B 02 (東から)
- 図版 8 A 区 S B 01・02 (東から), A 区 S B 03 (西から)
- 図版 9 A 区 S B 04・09 (南東から), A 区 S B 06・07 (北西から)
- 図版 10 A 区 S B 10 (南から), A 区 S E 01 遺物出土状況
- 図版 11 A 区 S E 01 曲物検出状況, A 区 S H 01, S P 16
- 図版 12 A 区 S P 16, A 区 S T 01 (北東から)
- 図版 13 A 区 S T 02 (北東から), A 区 S T 03 (南から)
- 図版 14 B 1 区全景 (西から), B 区 S E 01 検出状況 (東から)
- 図版 15 B 3・4 区全景 (西から), B 区 S E 02 検出状況 (北から)
- 図版 16 B 5 区全景 (南東から), B 6 区全景 (南から)
- 図版 17 B 8 区全景 (東から), B 区 S B 01 検出状況 (南から)
- 図版 18 B 区 S B 03 検出状況 (南から), B 区 S D 02 検出状況 (南から)
- 図版 19 C 区 S D 01 遺物出土状況 (西から), C 区 S D 01 遺物出土状況 (北から)
- 図版 20 C 区 S R 02 完掘状況
- 図版 21 C 区 S R 02 完掘状況 (東から), C 区 S R 02 遺物出土状況 (北から)
- 図版 22 C 区 S R 02 遺物出土状況 (東から), C 区 S R 02 斧柄出土状況 (東から)
- 図版 23 C 区 S R 02 遺物出土状況 (東から), C 区 S R 02 木樋・杭等出土状況 (東から)
- 図版 24 C 区 S R 02 遺物出土状況 (西から), C 区 S R 02 建築部材出土状況 (東から)
- 図版 25 C 1 区全景 (西から)
- 図版 26 C 2 区全景 (東から)
- 図版 27 C 区 S E 01 完掘状況 (北から), C 区 S E 01 遺物出土状況 (東から)
- 図版 28 C 3 区全景 (東から), C 区 S E 04 検出状況 (北から)
- 図版 29 C 区 S E 04 断面 (北から), C 4 区全景 (東から)
- 図版 30 C 区 S X 01 完掘状況 (西から), 作業風景
- 図版 31 C 5 区全景
- 図版 32 C 5 区南部全景 (東から), C 5 区北部全景 (西から)
- 図版 33 C 区 S D 06 遺物出土状況 (南から), C 区 S D 06 遺物出土状況 (北から)
- 図版 34 C 区 S D 06 遺物出土状況 (西から), C 区 S D 05・09 検出状況 (西から)
- 図版 35 C 区 S D 09 獣歯出土状況, C 区 S D 09, S E 02 検出状況 (東から)
- 図版 36 C 区 S E 02 検出状況 (検出直後, 西から), C 区 S E 02 検出状況 (井筒検出, 西から)

- 図版37 C区SE02検出状況(石組み除去, 西から),
C区SE02検出状況(井筒断面, 東から)
- 図版38 C区SE03検出状況(北から), C区SK01遺
物出土状況(西から)
- 図版39 D1区第1面全景, D1区拡張部第2面全景
- 図版40 D区SB01検出状況(南から), D区SB02検
出状況(西から)
- 図版41 D1区拡張部第1面西部全景(北から), D区
SB04検出状況(北西から)
- 図版42 D1区拡張部第2面西部全景(北から), D区
SD01遺物出土状況(東から)
- 図版43 D区SD03遺物出土状況(南から), D2区第
3面全景
- 図版44 D区SA01検出状況(東から), D区SR01石
塔部材出土状況(南から)
- 図版45 D2区第2面南東部全景(東から), D2区第
2面北東部全景(東から)
- 図版46 D区SD18軒平瓦・石塔部材出土状況(北から),
D区SD19石組み遺構検出状況(南から)
- 図版47 D3区第1面全景, D区SA02検出状況
(南から)
- 図版48 D区SB03検出状況(北東から), D区SB05,
SR02検出状況(南西から)
- 図版49 D区SB05検出状況(南から), D区SE01検
出状況(南から)
- 図版50 D5区第3面全景
- 図版51 D区SR01完掘状況(南西から), D区SR01
注口土器出土状況(南から)
- 図版52 作業風景, D区SB06検出状況(南から)
- 図版53 E2区全景
- 図版54 E5区全景, E3区全景
- 図版55 E8区全景
- 図版56 E2区(西から), E5区(西から)
- 図版57 E5区東半部(南西から), E5区西半部(南
から)
- 図版58 E区SB01・02(東から), E区SB03(東
から)
- 図版59 E区SB03(東から), E区SB04(北から)
- 図版60 E区SB05(東から), E区SB06(北から)
- 図版61 E区SB07(西から), E区SA01, SB08
(南から)
- 図版62 E区SB10~13(西から), E区SB15(南東
から)
- 図版63 E区SD01(東から), E区SD02遺物出土
状況
- 図版64 E区SD07, SK01(南東から), E区SD19
遺物出土状況(北から)
- 図版65 E区SE01遺物出土状況, E区SE01北側板裏
側(北から)
- 図版66 E区SE01井戸枠北側板除去後(北から), E
区SE02(南から)
- 図版67 E区SE02断面(南から), E区SE03・04検
出状況(東から)
- 図版68 E区SE03(西から), E区SE03断面
(南から)
- 図版69 E区SE03・04掘削状況, E区SE03井戸枠
南西コーナー部
- 図版70 E区SE03井戸枠南東コーナー部, E区SE
03井戸枠南東コーナー部裏側鉄斧出土状況
- 図版71 E区SF01(西から), E区SF01完掘状況
(西から)
- 図版72 E区SH01(北から), E区SH02・03(西
から)
- 図版73 E区SK04遺物出土状況, E区SK04遺物出土

状況（土師器杯除去後）

図版74 E 7区包含層遺物出土状況，E 8区包含層瓦溜り（南西から）

図版75 E 8区包含層瓦溜り

図版76 F 1区第2遺構面全景，F 1区第2遺構面全景

図版77 F 1区第1遺構面全景，F 2区全景

図版78 F 3区東半部，F 4区全景

図版79 F 1区第2遺構面西半部（北から），F 2区（西から）

図版80 F 3区北半部（北から），F 3区南半部（南から）

図版81 F 4区（北から），F区S B02（南東から）

図版82 F区S E01（南から），F区S F01検出状況（東から）

図版83 F区S F01（東から），F区S F01床面立割りB-B'，C-C'

図版84 F区S F01床面立割りA-A'，C-C'，F区S F01床面立割りA-A'

図版85 F区S H01（東から），F区S K07遺物出土状況

図版86 F区S R01（南東から），F区S R01断面（北西から）

図版87 F区S R01遺物出土状況，F区S X02（南東から）

図版88 F区S X02遺物出土状況，F区S X02遺物出土状況

図版89 G 1区全景（上が北西）

図版90 G 2区全景

図版91 G区S R01・04（東から），G区S R02・03（南東から）

図版92 G区S R02断面（南から），G区S R02遺物出土状況

図版93 G区S R02遺物出土状況，G区S R02遺物出土状況

図版94 G区S R02遺物出土状況，G区S R03断面

図版95 G区S R04（南から），G区S R04（北から）

図版96 G区S R04断面C-C'，G区S R04断面E-E'

図版97 G区S R04人形出土状況，G区S R04斎串出土状況

図版98 G区S R04斎串出土状況

図版99～111 A区出土遺物

図版112～124 B区出土遺物

図版125～197 C区出土遺物

図版198～258 D区出土遺物

図版259～325 E区出土遺物

図版326～371 F区出土遺物

図版372～497 G区出土遺物



A I 区全景